『新生玲音の書』

ϟ ϱ ϱ
϶ ϓ

2005 / 12 / 19

蛍が冬に見れるとは思わなかった。
雨の季節に見つけた蛍は寒くなってもずっと飛んでいた。
どうもこいつは弟切草のような一年草ではなかったようだけど、
どこかで聞いたおとぎ話のように次の冬には裏切って消えてしまった。

東京都練馬区光が丘。その少し北を東西に走る国道 254 号をマツダの RX-8 が走る。深夜に差し掛かろうという時刻なので、街灯に照らされない限り、車は黒く見える。

この RX-8 は TypeS シリーズで、色はウイニングブルーメタリックだ。６速のマニュアルで、ステアリングは右ハンドルだ。追加のスピードエアロがフル装備で、リアウイングがクーペらしさを濃厚に表わしている。

車は川越の方から来た。一旦 16 号を乗り継いで 254 へとやってきたのだ。信号が青になると、25 歳の青年塾講師である水月静は数十ｍで６速までギアを素早く上げる。

静は少し急いでいた。仕事が若干遅くなってしまったからだ。風邪を引いて少し具合が悪いこともあって、早く自宅に戻りたかった。

月曜の夜。上りの 254 は少し空いていた。ネズミ捕りに気をつけながら速度に緩急を付けていく。車線を第１・第２とスムーズに変えながら、遵法速度のセダンや軽を何台か抜いていく。

今しがた埼玉県和光市の和光陸橋に差し掛かったときには 11 時を過ぎていた。もうそろそろ妻が仕事から帰ってくる頃だ。今朝は本社出向だったのか、朝起きたら既に家にいなかった。妻は妊娠中だ。ちょうどつわりの時期で、最近はいつも辛そうにしている。それでも休むことなく会社に行っているのは見上げたものだ。その代わり、帰れば愚痴をたんまりと聞かされる毎日だが。

急いでいたのは妻の時間に合わせるためだ。彼女は埼玉県志木市に勤めている。自宅が光が丘なので都営大江戸線の光が丘が最寄なのだが、志木市勤めなので、東武東上線を使って成増を利用するほうが早い。

彼女が出勤の夜は決まって駅まで迎えに行く。都合がつかなければ最悪歩いて帰ってもらうが、最近は妊娠中ということもあり、送迎は義務と化している。

ただ、今朝は起きたら寝床がもぬけの殻だったので、徒歩だったのかと心配に思った。もし何かの間違いで切迫流産だなんてことになったらなどと考えるだけで胃が痛くなる。

駅近くのいつもの場所に車を止める。スーツのズボンの右ポケットからケータイを取り出して開く。学生時代の大半はドコモだったが、妻と会ってから今の vodafone に変えた。パネルには妻とのプリクラが貼ってある。これがないと怒られる――というより彼女が鬱になる。

車の中が小さく、しかし煌々と光る。昼の休み時間に電話をしたが、出なかった。休憩時間が重ならなかったようだ。また電話するが、出ない。電車の中なのか。向こうも今日は遅いようだ。無理もない、互いにもうそろそろ冬期講習で大忙しなのだから。

静は慣れた手つきでカーナビを弄る。カーナビはパイオニアの carrozzeria で、HDD 型だ。カーナビは種類が多いが、パイオニアのものが一番良い。衛星からの情報が細やかで、かなり正確に自車位置を教えてくれる。以前使っていた ADDZEST は不便だった。バージョンのせいかもしれないが、自車の位置がずれやすく、何十ｍも離れたところなのに目的地に到着した音が流れる。また、走っていて自車位置を表示するポインタが急にずれてしまい、道のないところを矢印が示したりした。おかげで下取りを経てパイオニアに戻ったというわけだ。

内蔵ハードディスクに録音された曲を選んで流す。平井堅の pop star だ。PV のせいか或いは前の２曲が良すぎたからか、評判がイマイチだ。しかし俺はこれが好きだ。きっとロングランになると予測している。明るいポップな感じがいい。彼女も好きなようだ。前からカラオケに連れてって歌おうと思っているのだが、忙しいのとつわりのせいで中々実現できない。

ふぅ、と溜息を吐く。せっかく急いで来たのになんだよと舌打ちする。勿論妻にではない。妊娠中なのに酷使する会社に対してだ。でも、イライラしてくる。

なにせ自分も風邪でかなり具合が悪い。替えが効かない仕事なので早退するわけにもいかない。とにかく根性で働いてきた。去年流行ったノロウィルスにまた感染したのではとヒヤっとしたが、症状が軽いので、あれほどではないだろう。インフルエンザでもないようだから、安心している。しかし、妻はまだ風邪を引いていない。彼女に移るのが一番怖い。本当は迎えにいくのも一緒に寝るのも避けたほうがいいのだが……。

仕事のことを思い出していた。生徒とたまたま話したとき、妻の話題を振られた。学生結婚だということをどこからか嗅ぎ付けたようで、ラブラブなんですかなんて聞かれた。正直……肯定できなかった。でも否定もできなかった。だから「まぁね」とお茶を濁した。

具合が悪い。吐き気がする。ふらつく。

でも、今日は生徒の反応が良かった。溜まっていた仕事も片付いた。妻だって頑張っている。最近不仲なのは仕事や妊娠のストレスがあるからだろう。年始になれば安定期に入る。それまでの辛抱だ。人生が良い方向に動いているんだ。そう思おう。

俺は極めつけのペシミストだ。その俺が無理にでもそう考えた。そして声に出して明言化した。言葉に出すと実現する気がするからだ。

「今日は良い日だった。It was a good day today!」

しかしその瞬間、なんともいえぬ不安にかられた。この言葉を言ったら逆に不幸が寄ってくるんじゃないか。そんな気がした。自分がこの言葉で強気になって、意地を張るようになって、その結果、何か取り返しのつかないことを招くのではないかと思った。

無意識にそのことを予感していたのかもしれない。そしてその予感が不安を生んだ。それでも、この言葉を口にした。確かに口にしたら不安が実現するかもしれない。だが、もしかしたら逆に不幸を祓うことができるのではないか。

ドアの外を 40 台の女が歩く。パスネットだろうか、プリペイドカードがバッグから零れ落ちるのが見えた。とっさに車を降り、拾って渡してやった。女は感謝して去っていった。

自分が疲弊しているときでもこうして善行をできる点で、妻は俺のことを誇るべきだ。お腹の中の子供もな。

だが、妻にはこういう面を最近少しも見せていない。いつも喧嘩してばかりな気がする。俺まで不機嫌になって不安定になって、それで下衆な面ばかり見せている気がする。まるでわざとあいつに嫌われようとしているかのように。

天井を見上げていたら 12 時を回った。おかしい、こんなに遅いはずはない。電話をし続ける。出ない。

馬鹿、電車だろうがなんだろうがここまで遅かったら出ろよ。あいつは気長だが俺は短気だから、余計に苛立ちが募る。メールを送る。「俺が具合悪い中働いてきてるのに何やってるの」と愚痴った。でも何も返してこない。

はぁ……あいつめ、またケータイなくしたな。こないだも駅のトイレだかに置いてきて探し回ってたもんな。

それとも……不安が募る。どんどん募る。誰かに襲われたりしてるんじゃないだろうな。まさかな。でも、待てよ。そういえば朝から姿を見てないぞ。

急に不安になって妻の会社に電話をかけた。すると妻が出た。だが厳密にいえばそれは妻の声だった。受付嬢をしている妻の留守電が答えたのだ。おいおい、残業にもほどがあるぞ、電話の向こうにまだ何人かいて、締めの作業でもしてるんじゃないのか。

おかしい、ここまで遅いはずはない。いくらなんでも。まさか、流産して俺に申し訳なくて帰れないとかそういうんじゃないだろうな。試しにそう書いて送ってみる。だが依然として反応がない。具合が更に悪くなる。苛立ちも焦りも募る。

自宅に電話をする。家族が出た。事情を話す。妻から連絡はないという。仕方がないので終電まで待つことにした。車を置いて――いつもなら決してそんなことしないが――駅へ入る。改札口で終電を待つ。どんなに遅くともこれで来るはずだ。

終電が来る。人の波が押し寄せる。その中に妻の姿はなかった。

タクシーか？いや、それならいくらなんでも連絡があるはず。ケータイをなくしたって会社の電話か公衆電話くらい使うはずだ。いくらあの気の利かない女でも流石にこちらが心配していて連絡を待っていることくらい気付くだろう。

車に戻り、ひとまず自宅へ帰った。光が丘公園の横を通り、自宅があるマンションへ入る。屋外駐車場に車を停め、エレベータを使って上に昇り、家に入る。家族が心配して出てくるが、構わず寝るように伝えた。焦っているので言い方がきつくなってしまう。

荷物を置いてから家を出て、車で光が丘署へ行く。事情を説明すると、失踪の可能性を指摘され、調書を取られた。対応したのは初老にさしかかろうという男だ。態度は悪くないが、まず喧嘩したかと聞かれた。

思い起こせば昨日確かに喧嘩した。昨日は日曜で、２人とも休みで家にいた。確かに喧嘩はしたが、それはいつものことだ。大して珍しいことでもない。それに喧嘩は朝のことだし、その後はふつうに生活していた。まして夕方にはいつものように妻のほうから擦り寄ってきてセックスを求めてきた。妊娠中にもかかわらずだ。その後、寝る前も特に何事もなく明日の予定などを話して寝た。だからこれといって大きな心当たりはない。

気の良い警察官が去った後、担当が変わった。目の濁った態度の悪い 50 台の男だ。男は妻を家出人として扱うこととしたが、かといって探してくれるわけでもなく、何かあれば連絡するという態度を示した。

事件性があれば動くといわれ、カッとなった。ふざけるな、身重の妻がいなくなってるのに事件で何かあったら動くだと？不謹慎という概念はアンタらにはないのか。気づいたら警察相手に怒鳴っていた。

結果、警察を追い出されるように出ると、俺は家に戻った。もう頭が混乱しきっている。人生でこんなに困惑したことはないというくらいだ。それはそうだ。妻が子供を腹に抱えたまま失踪すれば誰でもこうなる。妻の身と子供の身の心配ばかりが頭をよぎる。

先ほどまでの苛立ちなど影も消え、ただただ無事でいてくれと祈るばかりだ。いつもは疎んじている妻の愚痴でさえ、いまは聞きたくてしようがない。亡くして初めて分かるありがたみ？違う、俺はたとえケンカをしても妻のことを愛していた。ありがたい存在、愛しい存在、無くてはならない幸せの種だった。ましてその種が芽まで吹いたのだ。こんなところで失ってはならない。

電話帳で妻の実家を調べる。何か連絡がいってないか。電話をかける。誰もでない。こんな時間にいないはずがないのだが……。そうだ、確か夜はうるさいので電話の音を切っておくとか妻が言っていた。じゃあこちらの線は明日にしなければ。

明日？そうだ、明日も仕事だ。電話くらいは何とかできても、探しにいくことはできない。第一探すったってどこを？まだ失踪と決まったわけでもないのに。明日になればふらっと帰ってくるかもしれない。いずれにせよ、仕事があるので動けない。向こうからの連絡を待つのみだ。

くそっ、何やってやがる、あの馬鹿は。また苛立ちが沸く。心配が優勢になったり苛立ちが優勢になったりして、感情がサイン曲線を描いている。

人にここまで心配かけさせやがって。第一いまやもう自分の身一人じゃないってことぐらい考えろ。そうだ、お前だけの体じゃないんだ。俺の子供を責任持って胎内に預かって

る身なんだ。

自室に戻る。自室といっても２ＬＤＫのうちの一間で、妻と共同の８畳間だ。手狭なのでそのうち頭金が貯まったら引っ越すつもりだ。まして子供ができるともなればここは手狭すぎる。それに、親にいつまでも迷惑をかけるわけにはいかないしな。

一人になったベッドに横たわる。具合が悪い。気付いたらもう３時だ。明日も早い。寝なければ。しかし、眠れない。子供はどうなったのか。妻はどこに行ってしまったのか。無事なのか、自分の意思でどこかに行ったのか。何一つ分からない。

心当たりがない以上、流産してしまって申し訳なくてというのが一番ありえるパターンだ。それで帰れないのか。可愛そうに。それなら今日病院に行っているはずだから、明日辺り病院に電話してみよう。

ん、明日だと？そうだ、今日だか明日だか明後日だかがちょうど定期健診だったはずだ。前に行ったのは１月前。一緒に行ったとき、超音波で子宮内を見た。棒を膣内に入れると画面に映像が映る。その更に１月ほど前までは黒い豆みたいだったものがしっかり心臓を持ってピクピク動いていたのを見て感動したものだ。

はぁ。溜息を吐く。俺が一体何をしたっていうんだ……。あいつ、大丈夫かな。

俺はあいつには呆れ果てているし、女としての魅力も殆ど感じていない。あまりに性格が合わない。気が利かなさすぎるし、まともなコミュニケーションを他人と取れないような人間だ。なぜ結婚したのか自分でも不思議に思う。でも、大切だとは思っているし、好きだというのも間違いない。不思議なものだ、これが愛という感情なんだろう。

誰かを愛したのは……いつ以来だろうな。昔一人だけ居た。でも妻のことはそれ以上に愛している。喧嘩もするし、呆れているけれど。不思議なものだ。相反する気持ちを人間は同時に持てるのだ。

妻のお気に入りの小物が見える。能天気なツラしたひよこの小物だ。天井にぶらさげた網の上で寝てやがる。名前は妻曰く「ぴよ」だそうだ。その横には池袋のサンシャインで買ってやった犬の小物が置いてある。同じような顔で、仲良く２人で眠ってる。

妻は古典を専攻してたので、「びよ」と名づけた。「ぴよ」に「びよ」だ。無声音を有声音にした最小対語っていう陳腐な命名じゃない。去年だかに売れた日本語学関連のベストセラーにあやかった名前だ。妻のそういうセンスは買っている。

周りはいつも俺のことを心配性だという。むしろペシミストなんだがね。だから妻のこともあれこれと考えてしまう。でも、何日か後の俺に聞けば、大概こんな心配なんて一笑に伏してくれるだろう。そう、大丈夫だ。なんたって今日はいい日だったんだから。俺は病気でも頑張ったし、明日も倒れずに頑張る。もう冬期講習なんだから教師が倒れてどうする。

2005 / 12 / 19

埼玉県南埼玉郡白岡町新白岡の一軒屋。長い黒髪の少女が母親と二人で夕飯を取っていた。食卓にはパンとロールキャベツ。共働きの親のために少女が作ったものだ。
「紫苑？」
母親の呼びかけに驚いた少女はふいに顔をあげる。考え事をしていて気づかなかった。
「ト？」
しかし少女があげたのは意味の分からない声。母親は眉を顰める。少女は慌てて「ごめん、何？」と聞き返す。
「紫苑、どうかしたの？考え事しながらだと消化に良くないわよ」
しかし紫苑は首を振る。
「大丈夫。でも、気をつけるね」
「何考えてたの？」

母親は美人な上、実際の年よりも随分若く見える。仕事をしていて身なりに気を付けている分、スタイルも化粧も良い。多忙だろうに、かえってアンチエージングしているのではないかと娘ながらに思う。
ちらっと母親の顔を見る。改めて思うが自分は母親にはあまり似ていない。まぁ、いくら母親に似ていなくても女は間違いなく自分の子だと分かるから、父親がよそで作った子を知らずに育てるなんて原理的にありえない。そういう意味では父親に似ていて良かったと思うが、多分周りのクラスメートはそんな穿った見方をしないだろうとも思う。
父親は母親より３つほど上で、娘の自分から見ても美形だ。若い頃はさぞやもてたのだろうと思う。そんなことを小さいころから考えていた。だから、小学校の高学年で性について習ったとき、自分はわりと高い確率で他の人のお腹の中にいたのかもなと思った。
父親は仕事もうまくいっているようで、なんだか浮気をしていないのが嘘みたいだ。誘いはいくらでもありそうなものだが。帰りが遅いので時々怪しんでみるが、杞憂に終わる。なんというか根が大人しい男なので、実際浮気をするほどの気力なんてないのではないかと思う。
そう、ウチの家はかなり良い方。そう、多分、理想的。娘の私は素直――ということにしておこう――だし、お母さんとも特に喧嘩してないし。兄弟はないけど、両親は未だに夫婦生活が続いているような気がするし。
多分、ウチが成立しているのは私のおかげというのもある。思春期真っ只中なのにテレビで見るような目立った反抗なんてしないし、優等生で通っている。娘にありがちなケース、つまり悪い虫がついて弄ばれるということもない。親はさぞや安心しているだろう。
それに私は家事全般をやってる。部活も塾もバイトもしてないし、親が共働きだから必然的にそうなるが、それでもきちんと家政婦ばりに家事をこなしているのだから、我なが

ら良くできた娘だと思う。
　ただ……私ってかなり変わり者だと思う。そのせいで偶に大きな迷惑をかけたりするのだけれど……。

「ねぇ、紫苑。聞いてる？」
「あ、ごめん。考え事してた」
　確か母親は何を考えているのかを聞いていた。これじゃ答えにならない。紫苑は苦笑いした。
「……いいけど。悩みとか？お母さんが持ってるみたいに、紫苑も紫苑の悩みがあるんでしょうね。偶に比べてみたいって思うわ」
「ふふ……」
　紫苑は母親も父親も好きだ。思春期の子を持つ親にありがちな態度を取らないからかもしれない。こちらの機嫌を取るわけでもなく、押し付けてくるわけでもない。お母さん心配なのよなんて言われると、かえってこの人には甘えていいんだって気持ちが出てきて「うるさいわね」って気持ちが起こるものだ。
　ウチのお母さんは私を対等に見てる。でも、それほど気安いわけでもなく、やっぱり母と娘っていう関係はきちんと境界線引きされてる。この微妙なバランスのおかげで仲が保たれてるんだろうと思う。
　文句があるならやはり親が多忙なことだ。もうこの年なので諦めたが、小さい頃は随分鍵っ子であることが辛かった。不安でもあったし怖かった。親は私のことなんてどうでもいいんじゃないかって考えたときもあった。でも、どうでもいいなら高い金を出してまで養わないだろうなと冷静に計算して、自分は愛されているはずだという考えにしがみついた。
「紫苑さ」
「うん？」
「あなた、なんとなく変わったよね」
「え？」
　ドキっとした。
「何が？いつごろから？」
「え？最近よ。料理の内容なんだけど……洋風が多くなったかなって。こないだパン焼き器がほしいなんて言い出して買ってきたりして。ちゃんと続いてるからいいけど。お母さん、あれの使い方分からないのよ」
「簡単だよ。混ぜるのが多いけど。水で材料を洗わない分、この時期はお米より楽かもね」
「ふうん」といいながらパンを食べる母親。突然じーっとパンを見て何か考え出した。多分、仕事とパンを結び付けてるんだろうな、何らかの形で。なんとなく、この親あってこの子ありなんだなって自分で思った。

でも、変わったと言われてほんとドキっとした。先月の異世界旅行がばれたのかと思ってしまった。

私は先月 17 歳になった。17 歳の誕生日に、異世界の悪魔メルティアが突如目の前に現われ、私をアトラスという星へ召喚した。

そこで私はレインという少女を助け、アルシェという男と協力し、フェンゼルという悪魔のような政府高官を倒し、アルバザードという異世界の一国を救った。異世界でアルカという言葉を学び、神の落とした武具を使って魔法を使った。まさに最後は神と悪魔までをも巻き込んだ壮大な戦いだった。そう、あれは人生で一度きりの壮大な経験だった。

結局、アトラスには半年以上いた。でも最後はメルティアが時空を歪めて元の召喚した日に帰してくれた。おかげで私は高校を退学にもならず、親にも怒られずにいる。だけど、半年も異世界にいたせいでやはり自分は随分変わったと思う。だから親がその変化から何かを勘ぐるのではないかとつい思ってしまうのだ。

アトラスでの出来事は甘美なことばかりではなかった。なにせ戦いだ。犠牲も出してしまった。魔法で破壊された街中は戦火を思わせる惨憺たるものだった。体が半分に千切れて苦しみもがく少女の姿。足がはまってコンクリから抜け出せず、助けてと泣き喚く少女。その少女は青年に見捨てられ、上から落ちてきた鉄骨に潰された。鉄骨の下から赤い血がじわーっと滲んでいく絵が夢になって何日かに一度紫苑を襲う。

紫苑は心身共に鍛えている強い少女だ。だがそれでもあの惨劇には耐えられない。そしてそれ以上のトラウマが紫苑を偶に狂わせる。

「アーディン……」

「え、何か言った？」

「……ううん、別に」

ねぇ、お母さん、私が――いい子の娘が実は人殺しだって知ったらどう思いますか。

食事が終わって部屋に戻る。今日は月曜だ。月曜は面倒だ。何もかも捨てて逃げたくなる気になるときがある。

あと少しで学校は冬休みに入る。いまは高校２年だが、もうすぐ受験生だ。子供のころからの大望だった異世界旅行が叶ってしまったので、なんだか最近燃え尽き症候群にかかっている。ハッキリ言って鬱気味だ。

正直、大学なんてどうでもいい。将来何をしたいのか浮かぶまでもモラトリアム。大学はどうにでも転べる程度の資格と学歴を手に入れておく程度の場所。

席に着くと、引き出しを開ける。気が向いたときに書く日記を気記と呼んでるが、アトラスに関する記述をまとめたものはとりわけ紫苑の書と呼んでいる。１冊目の紫苑の書はレインにプレゼントした。

新しい紫苑の書を取り出す。中には別れの際にアルシェが服に差し込ませた手紙が挟ん

である。アルシェとレインが書いた別れの言葉だ。これを見ると当時の出来事を思い出す。まだ白岡に戻ってから１月も経っていないが、これを見るたびに興奮冷めやらぬ状態になる。

いまごろレインとアルシェはどうしてるかな。メルティアが毎年ディアセルにアトラスに連れてってくれるって言ってたからな。あと半年と少しかぁ。楽しみだな。

アルシェの記述を見る。地球に帰るときの手向けとして２人が書いてくれたアルカの文だ。アルシェの文字は男らしい。異世界の文字なのに、そう感じられる。私は帰ってきたとき、アルシェのことを好きだったと考えた。だから次に会ったときに告白しようと考えている。でも、なんだか違和感がある。それを胸の奥で押し殺しているのだが、何が違和感なのか分からない。

映画みたいな境遇で結ばれたカップルは破局を迎えるって聞いたことがあるから？当たらずとも遠からずだろう。なんていうか、こう……運命的なものを感じないのだ。いや、それは抽象的な説明逃れだ。一生懸命理屈で考えた。自分は女で、感情の生き物だということは知識としては知っているのだが、理屈で考えないと納得できない。

なんだろう……やっぱり戦友だからなのかな。それとも年の差？うーん……アルシェができすぎてるから浮気が心配？それともレインがアルシェを好きかもしれないし、アルシェがレインを選ぶかもしれないから？つまり……振られるのが怖いから？違う、なんかしっくりこない。でも、好きだという気持ちは確かにある。それがもしかして恋愛感情なのかそうでないのか、分からない。そう、分からないのだ。最近、毎日こんなことばかり考えている。

今日は何日だろう。月曜という意識くらいしかない。特に何事もない日だ。定期テスト云々は紫苑にとっては瑣末なことだ。あんなもの、ほっといても首席になる。

アルシェが書いてくれた文の上をそっと指でなぞる。彼の端正な顔を思い出す。少し子供っぽい笑いも。色んな仕草が好意的に思える。彼はかっこいい。それに強い。ちょっとお父さんに似てる。

あ……良い遺伝子がほしいっていう女としての本能とか？ううん、それも違うなぁ。じゃあお父さんに似てるから？お父さんを好きな娘にはありがちな話かも。でもアルシェはお父さんよりずっと明るいし軽い。やっぱキャラ、違うなぁ。……って、お父さんを探してどうするのよ、私。

そういえば小さいときに「お父さんと結婚する」って言ったことないなぁ。関係は良好なのに。淡白なのかな、私。試しにいま言ったらどんな反応するんだろう。流すかな……うん、流すだろうな、つまらない人だから。私のことで困った顔というのを見てみたい。

私ってそっけないのかな。アルシェにだって、なんていうかこう、燃え上がるような気持ちが起こらない。結構良い出会いだったと思うんだけど。もしかしてこんな感じで一生終わっちゃうのかなぁ。

肘を机に立てて顎を掌に乗せる。

うーん。でも、やっぱりアルシェのことばかり考えちゃうな。これは恋愛感情だよね。私、経験ないから分からないだけなのかも。突っ走ってみれば正しい感情でしたって分かるかもしれない。けど、私は自覚があるが、かなり貞操観念が強い。だから運命の人でないと突っ走る気にはなれないの。

紫苑の書を引き出しにしまう。やめやめ、こんなことばっかしてたらダメになっちゃう。勉強しなきゃ。それにしても、最近暇だなぁ。何事もないってのはいいことかもしれないけど。

その後、勉強を続け、気付いたときには 12 時になっていた。窓を開けて夜風を入れる。しかし寒いのですぐに閉めた。右下に置いてあるストーブが気温の低下を察知して熱を上げる。

「もう寝よ」

布団に入る。いまごろレインもアルシェも寝てるのかなと思ったところで自分が重大な誤解をしていたことに気付いた。時差があるからまだ寝てないかもしれない？いや、そんなことじゃない。異世界との時差などそもそもあるのかどうか怪しい。問題はそんなことではなく、12 月の段階では私はまだレインとアルカ教室をやっていたころだ。今頃何してるどころの話じゃない。今頃のアルシェは私なんか知りもしないんだ……。

なんだ……。あれ？じゃあ待ってよ……。もしかして次のディアセルにアトラスに行った場合、こないだ別れた日にワープするってこと？んん？それって私には再会だけど、向こうにとってはさっきぶり……だよねぇ。な、なんて感慨浅い……。

そんなことをぶつくさ悩みながら１時ごろに寝入った。それにしても特に何事も無い一日だった。

>el ›ʕ› Z-Λ ᔑ-l

Λ-lᑕ ᑕ -ᔑɭeᔐ„ ɭaᔑΛe„

-ᔑɭeᔐ ɭel ɭ-cZ e ᔐ--ᔑ ᒐɔɔᑫ-ᔑ - ᑕᖻ- ɭel >cΛ- e Λɔᔐ ᑫ- ᑕa Λ-lᑕ ᑫɔΛᑕ cΛ S-Λ ᑫ- S-Λl e ɭɔl„ ᑕaᔑ eᑕ ɭaᔑΛe ᔐɔΛ laaᔐ cΛ Vcl Vcc Λe„

ᑕᖻ- ᘐᒐcc-ᘏ

-ᔑɭeᔐ:eel - la ᘐᑕɔδᘏ

ᑕᖻ- ᘐᑕᖻ Λ-ᑕ ᑕɔ ɔΛ l-δᘏ

ᘐl- eᑕ Λeδᘏ

ᘐ>-Λ- cᑕeΛ -lᑕ<c-ᘏ

ᘐᖻ-, ᒐcɔΛ, ᑫɔᑫ„ l- eᑕ -ᔑᑕ-Λ ɭ-c„ >elᑕc- ᑕ-Λ ᔐccΛ- l- cΛ„ -Λ ᔐeΛᑕ l- >-Λ l- V-ΛɔᑕV-ᔑɭe l -Λᔐ ᑕc<l-ᑕ <ccΛ- -Λᔐᘏ

ᘐᒐ-> ᑕᖻ, ᒐcc-„ ᔐee….ᘏ

c> ᑕa, ᓗe -ᒧᒪe laᐱ-ᑐ ɔᑐ ᓗcV ᑐ-c

ᕲl--lᖁ l--lᖁᕲ

la eᑕ h-ᐱᑕc ᒪel ᐱɔc ᗣ laaᑕeᔪ le V-ᐱɔ h-ᐱɔc e ᔪ--ᒧ„ la ᐱ- ᐱcᑐ ɔ -ᐱc ɔ hcᑕ cᐱ„

ᕲᑕɔ -ᑕ ᔪɔᒪẟ h-ᐱᑕcᕲ

h-ᐱᑕc ᕲ-ᒧᒪeᔪ, ᑕc cᐱ ᔪeᐱ ᓗelᑕẟᕲ

ᕲh-ɔ, ᑕeɔ >-ᐱ ᑕaᒧ eᑕ ᒪaᒧᐱe <-ᑐ ᓗelᑕ eᑕ Vccᐱeᐅ c> <cᔪ„ ᑕc ᑕ-ᐱ ᓗ-ᑐleᔪ ᑕa ᑐɔᑐᕲ

ᑕᖁa- ᕲh-ᐱᑕc, ᑕɔ -ᑕ ᔪɔᒪẟᕲ

h-ᐱᑕc ᕲᑕᖁa-....l-, l- elᐸ-ᑕ ᔪcᐱᖁᕲ

h-ᐱᑕc cᐱ S-ᐱ ᑐɔᐱᑕ ᐱ- Ve>

ᕲ-ᐱ ᓗ-ᑕ h-ᐱɔc l-ᐱ- hɔc„ ᔪɔᐱ Vccᐱeᐅ ᔪɔa laᐱ-ᑕ -ᐱ„ ᖁ-ᐱ l- V-ᐱᒪ-ᑕeᔪ ᖁa cᐱᕲ

ᑕᖁa- ᒪ-ᕽᑕcᑐ, cᐱ ->cᒧ„

-ᒧᒪeᔪ ᕲᖁal....ẟᕲ

h-ᐱᑕc ᑐa a„ cᔪᑕ ᔪɔᑐᑕ-, la cᐱ S-ᐱ Velᑕ„

ᑕᖁa- ᕲ....Vclᓗ-ᐱᕲ

-ᒧᒪeᔪ ᕲ<cᖁ laᐱ- -ᑕaᖁᕲ

ᔪɔᐱ -ᐱS laᐱ-ᑐ V-ᒪ„

ᕲᒧe ᔪɔlᔪ V-ᒪ -ᒧᑕ-ᐱ h-ᓗ ᑐe V-ᒪ ᔪelh-ᐱɔc le Vccᐱeᐅ --Vcᓗ ᓗ-„ ᖁ-ᐱ ᑕc, ᑐe- h-ᐱᑕc, ᒧeᑕᕲ

laaᐸ ᕲ-ᓗ, ᒪ-cZᕲ

h-ᐱᑕc ᕲᒪaaᒧᛒ- ᔪɔaᒪ ᑕ-ᐱ ᒪeᔪᕽ-ᑕ V-ᐱ >e l-„ ᑕ-l l- -ᑕ Vceᐱᒪ ᒧ-ᑐ ᑕeᒧ„ ᔪɔᐱ....ᕲ

-ᒧᒪeᔪ ᕲᒪaaᒧᛒ- ᑕ-ᐱ ᘐ -l-....ᕲ

ᑕᖁa- ᕲᓗcc-, ᑕaᒧ, ᐱɔᐱ ɔᑐᑕ <-ᐱ ᑕa Vec> - lᐸeᒧ la-ᕲ

-ᒧᒪeᔪ ᕲᒧeᑕ, ᑕᖁa-„ ᖁ-ᐱ h-ᐱᑕc, c> ᑕaᒧ, l- ᓗ- ->ẟᕲ

h-ᐱᑕc ᕲa ᔪeᒧ, -ᒧᒪeᔪᖁ ᑕ-l l- eᔪ cVᐱ ᑕcᐱᑐ- >-ᐱ ᒪaaᒧᛒ- ɔ Vccᐱeᐅᒪeᔪᕽ-ᑕcᑐ Ve Vccᒪ l--ᑕ„

ᔪɔᐱ -ᐱᔪ ᒪeᔪᕽ- ᔪeᐱ ᔪɔᐸ l- ɔl -ᐱᔪ ᔪ-ᑐ l-ᖁᕲ

ᕲh--ᐱ, ᔪɔᐱ l- elᐸ V-ᐱ -ᐱᔪ ᐱ-ᕲ

ᑕᖁa- ᕲh-ᐱᑕc, l-cᐱ ᒪeᔪᕽ-ᑕ ᔪ-ᑕ <-ᐱ l- ᑐɔᑐᑐɔ ᑕɔẟᕲ

ᕲᑐɔᐱ ᒪɔlᑕeᕲ

ᕲV-ᔪᑕᒧc- Ie ᑐaᐱɔᐱ ᑕeᕼ l-ᐱᑕcᔪ ✓ᘐ ᖁɔl-ᑕ c> -ᒧᒪc-ẟᕲ

ᕲ-ᓗ, Ie ᒪɔlᑕeᕲ

-ᒧᒪeᔪ ᕲᖁ-ᐱ ᒪɔlᑕe ᓗ- ->ẟᕲ

ᑕ-l h-ᐱᑕc ᑐa a ᒪa <eᐱ„

-ᒧᒪeᔪ ᕲ-l-....ᓗceIᕲ

ᕲᒪaaᒧᛒ- ɔ Vccᐱeᐅᖁɔl-ᑕ Ie„ ᖁ-ᐱ ᓗc ᑕa, l- ᒪɔᛒ-ᑕ l-ᔪ e ✓ l-ᐱ- ᑕ-< ᑕa„ ᖁ-ᐱ l--ᔪ h->-ᑕ

ᑕ-ᑐ l-ᐱ- <ɔᐱl„ ᔪɔᐱ c> ᑕa, ᒪɔlᑕe -ᑕ <eᕽ ᑐɔᒧ -lS-ᐱ

ᑕᖁa-:l-ᕽᓗ -ᕽeᐱ ᕲ>e....lee ᓗcc-, leᐱ- ᒪeᒧᑕ -ᓗ ᐱ-ᐱᐱ- - ᐱe ᓗel >cᒧɔᑐ eᖁɔẟᕲ

-ᒧᒪeᔪ ᕲ-l -ᒧᒪe ɔ ᒪee>ᔪẟ h-h, ɔhɔ, -ᐱᔪ ᓗcᒧ ᔪ--ᒧ lcᐱᐱelᕲ

ᒐc ᑕᓄ，-ΛS ϑcɔ h-Λᑕc -I eZ -Iᑕ I-Λ- ᒣe-„ Ч-Λ ᑕЧᓄ- ɔᒣᑕ ᑕᓄ Vec> - IKeᔑ ᛟeI ᛟ-cZ ᑕ eᔑᑕ„ IKeᔑ ᑕ-Λ Λ- Λcᒣ ᑕcΛ cΛ„

<Iɔ ᒐɔɔᒣ -IeΛ IKeᔑ，IcΛΛeI ᓄᒣɔᒣ Λ-Iᑕ„ ᒐc ᒐɔɔᒣ -IeΛ IKeᔑ，-ᔑᛟeᔐ -ᒣᑕ Iᓄ，ᔑeᑕ Iᓄ ᔐ-ᒣ ᛟɔIᑕe„ ᔐɔΛ IcΛΛeI Чᓄc ᑕᓄ h--ᔐ -ᔑᛟeᔐ，ᒣᓄ ᑕᓄ Ieᒐ —

ᘐᛟɔIᑕe ᛟeI V-ᔐᑕᔑc- ᒐ- -ᑕɔI-ᔐ ᒣeΛɔ -ᔑᑫ-Z-ᔑᛟᘐ

ᑕᓄ -ᑕ eΛZ„ IcΛΛeI Чᓄcᒣ eΛZ ᛟɔIᑕe„

-ᔑᛟeᔐ ᘐ-ᔑᑫ-Z-ᔑᛟ eᑕ h-Λ ᑕcΛ….-ᒣ -Λᔐ ᔐ-ᒣ ᑕᓄ ᔐecᘐ

ᑕЧᓄ- ᘐᒐɔ> IeΛ- ᔑeᑕ ᒐccᑕ ᑕᓄ -I -ᔑᑕe- ᑕ -ᔑᑫ-Z-ᔑᛟ„ ᒣ->cI，ᛟɔIᑕe -ᑕ >eᑕ - ᒣ- ᒐe Ie ᑕcI Vcᔑ ᑕcΛᘐ

-ᔑᛟeᔐ I-ϑᒐ，ᒣᓄᒣ —

ᘐЧ-，ᑕᓄ eᑕ VcIᐸɔΛI <cΛ ᑕᓄ eᑕ VcIᐸɔΛI >e….ᘐ

2006 / 03 / 05

埼玉県川越市。水月静は昼過ぎにコンビニの袋をぶら下げて歩いていた。

会社の昼休みだ。いつもならファミレスなどで食べるのだが、今日は雨も降っていないので屋外で食べることにした。人の少ない落ち着く公園が近くにある。そこがお気に入りの場所だ。

川越は学生街だ。優秀な高校が点在しているため、どこを歩いても学生の姿が見える。いまは日曜の昼だが、それでも学生の数は多い。休みだというのになぜか制服を着て歩いているのが不思議だ。

３月だがまだ少し肌寒い。スーツの上着の下にはワイシャツと肌着だから良いが、下はそれこそ冬用のズボンしか履いていないので、裾から風が入るたびに若干寒いと感じる。でも、それでも外で食べるには辛くない程度だ。

その公園は落ち着いて食べられるという点では良いのだが、ひとつ難点がある。会社に近いため、偶に生徒に会ってしまうのだ。それが悪いというわけではないが、生徒に社外で会うのは何となく互いに気まずいものがある。勿論、気まずくない愛想の良い生徒も中にはいるのだが。

話しづらいのは慣れてきた生徒やおどおどしがちな女の子だ。特に後者は話しかけるだけで妙な誤解をさせてしまう。前者は今のところ少ない。なにせ今までいた受験生は大概受験を終えて去っていったからだ。顔見知りといえば惜しくも浪人生となった連中や高１、２だった連中だ。

年度の変わり目は４月だが、塾の場合は事実上３月だ。だからこの時期に生徒をかきいれないと、向こう一年、只飯食らいになってしまう。

３月には春期講習が開講されるが、これは次年度の準備だ。レベルの高い子には予習をさせるが、中くらい以下には主にこれまでの復習をさせる。受験生だからということで３

年の内容がどうしても気になるのだが、実際２年までの内容ができていないことには進めない。

春期講習があるため、生徒の募集期は先月からとっくに盛んになっている。少子化の上に今年から大学が全入になってしまったため、塾生の数はどこも減っている。厳しい業界だ。そう長くも続くまい。そうなったらなったで稼業を変えるまでのことだ。教師職に未練はない。

スーツの胸ポケットからタバコとライターを出すと、キャスターに火をつけた。高校のころから色々試したが、これが一番美味い。高校のころからといっても、高校時代の一時期吸っていただけだ。それからは何かストレスができるたびに間欠泉の如く吸うだけだ。何度も禁煙して毎回それを成功させているのだから、ある意味精神力が強いといえる。

ちょうど最初の一口をくゆらせて大きく息を吐いたところで、前方から女子高生が一人やってくるのが見えた。長い黒髪の美少女だ。遠くからでもかなり目立っている。テレビで見るアイドルなんかよりずっと可愛い。いや、単に俺の好みなだけかもしれないが。

大人しそうで真面目そうで利発そうな顔立ち。これがあと５つ上なら良いのだがなと思う。少女の制服は学校指定の物を変えた形跡がない。今時珍しい。――などと思ったところで気付いた。あれはウチの生徒だ。

そう、つい先日入ったばかり。受付で見た。ええと……確か父親と一緒に来ていたな。父親は若くてイケメンだった。教務が何か言ってたな。確か学費を分納したいそうなんで手続きがどうのこうのと。金がないんじゃなくて日曜で銀行がどうとか言ってたっけな。父親の身なりはさりげなく良かった。スーツも俺のより上物だったし鞄の革も見たところ本革で使い慣れた感じだった。恐らく内勤の管理職だろうな。

しかし塾ってのは世知辛いものだ。裏じゃ教務ども、人の家の金勘定をしてやがる。分納だ延納だって話になると途端に支払いが履行されるかどうかの話を裏でしだす。客が何一つ知らんところでな。まぁ、どの企業でもそれは同じだろうが。

ところで、俺は何であの子のこと覚えてるんだっけ……。そうだ、帰りに出口の所でぺこりとお辞儀してたのが印象的だったんだ。周りを見回して少し慣れない空気に戸惑ってる感じだが、適度に愛想が良いというか丁寧な感じだった。それと……そうだ、偶々俺と目が合ったんだ、去り際に。まぁ向こうは覚えてないだろうが。

チラっと少女を見た。挨拶すべきか。だが向こうが覚えてなかったらどうする。怪しい男にしか映るまい。参ったな、こういう状況は苦手だ。

すると少女は俺の目線に気付いたのか、見返してきた。そして「あっ」という顔をして、にこりと微笑んで会釈をしてきた。何ていうか、感じが良い。過度に愛想の良い演技をしているというわけでもなく、義務的という感じでもない。思わず俺も自然体で会釈を返して一声かける気になった。

「どう、少しは慣れた？」

　すると少女は立ち止まって「あ、はい」といった。
「そう。じゃあ、がんばって」
　横を通り過ぎると、少女がお辞儀して去るのを感じた。
　ええと、そういえばあの子、名前なんて言ったかな。名字が確か……。と思ったところでケータイが鳴った。まさかと思ってハッとして取り出したが、メールだった。しかも只の広告メールだ。チッと舌打ちしてメールを消去する。
　公園についてベンチに座る。タバコを地面に捨て、革靴で踏み消す。ふぅと溜息を吐くとコンビニの袋を漁り出した。

2006 / 03 / 31

　講習は春季から始まり、夏季・冬季と熾烈さを増していくものだ。特に激闘の冬季を終えたばかりの春季は気楽に感じる。生徒も保護者もまだ空気は柔らかく、教師としても教務としても気楽な時期だ。
　それでも講習ともなればやはり忙しい。残務で帰りの時間が遅れることなんて当然だ。この日、俺は現役生の授業を終えた。塾の授業は浪人生で始まり現役生で閉まる。学校に通っている分、高校生は土曜以外は夕方からの授業しか出れない。だから閉めはどうしても高校生になる。年齢を考えれば逆な気がするが、客の生活リズムに対応するのは必然だ。

　授業が終わると生徒が去る。いまは新３年の英語を終えたところだ。まだ生徒同士お互い不慣れなのか、私語は少なく、椅子を引く音の方が目立つ。授業の後は決まって生徒が質問にやってくるので実質休憩なんてものは存在しない。それどころかトイレや移動時間さえままならなかったりする。
　いまも生徒が質問に来た。制服を着ているのですぐにどこか分かる。一人は川越女子の生徒で、５文型についての質問をしてきた。
　生徒というのは次のコマがなければわりと質問を聞いてもらえるまで待っているものだ。次に来たのは一見少しギャルっぽい子。嫁が買ってたノンノに載ってたような髪型をしている。だが、確かこの子は浦和一女の１年だったはずだ。そこそこ美少女な上に若干天然が入ってて、多分人気は高いだろう。天真爛漫なところがあって、以前教室を案内したら右だといってるのに左の部屋へ入っていって、連れ添った母親に注意されていた。あどけないと思ったものだ。
　少女は口を押さえながら話す。なぜか少女というのは下を向いたり小声だったり口に手を当てたりしながら話すことがある。特に成績の良い子に多い気がする。教師とはいえ、男と話すのが苦手な子に多い傾向なのだろうか。
　こっちも仕事なので打ち解けて話せるようにできるだけ明るく丁寧に振舞う。そうすると段々警戒が解けてきて、こっちを見て話してくれるようになった。そんなことをしなが

らも俺は少女の後ろを気にしていた。まだ別の少女が 1 人残っているからだ。だが、浦和一女の方はそんなこと気にも留めず、話してくる。

質問は第 4 文型を第 3 文型に変えたときの前置詞に使い分けについてだった。そう、さっき俺が授業中に教えた tips だ。to か for を使う動詞をそれぞれ覚えるように教科書は述べているが、実は覚える必要などない。

あくまで受験用の目安だが、その行為が本来誰か受け取り手を必要とするものであれば to になるというだけの話だ。たとえば give という行為はもらう人が当然必要で、こういう動詞には to が付く。逆に She made a cake for me のような make は for でいい。別に誰かのためにケーキを作らなくてもいいからね。必ずしも受け取り手はいらない。buy だってそうだ。いつも貢ぐわけじゃない。だから for。簡単なことだろう？

浦和一女は他にはどんな例があるか聞いてきたので、教科書に載っていなくて受験に頻出する動詞をいくつか挙げておいた。少女の赤ペンを借りて教科書に書き込んでやる。書き込まれるのが嫌な生徒もいるのだが、この子の場合は歓迎してくれたようだ。

質問が終わると少女は学校での生活を話し始めた。生徒は子供なので打ち解けると相手の迷惑も考えずにべらくちゃと自分のことを語りだす。こちらとしては後ろにまだ待ちがいるので相手にしたくないタイミングだが、かといって無下にもできない。

待っている少女を気にしながら話を早めに切り上げるようにしむけた。やがて浦和一女は礼を言って去っていった。教室には最後の少女と静の 2 人が残った。少女は近くに来るわけでもなく、ただ自分がいた席のところで立っていた。

質問するならふつうは向こうから寄ってくるものなんだが……。

「質問？」と声をかけようとしたとき、少女は俺の顔を見ずに鞄を掴んで教室を出て行った。

確かあれは……そうだ、いつだったか公園の近くで見かけた子だ。やけに美少女だったので覚えていた。さっきも to と for の説明のとき、じっとこっちを見てきてた。しかし去ってしまった。質問だと思ったのだが。

質問じゃなかったのか？いや、違うな。確かにさっきまでこっちを見て気にしてた。質問だったはずだ。……なんだよ。

思わず舌打ちが漏れる。先の少女と世間話してたので自分が蔑ろにされたと思って出てったのだろう。ありがちなパターンだ。ちょっとプライドの高い甘えた子供に多い。自分が蔑ろにされたことがないからいつも自分が特別扱いされていないと気が済まないタイプ。一人っ子に多い。嫌な後味を残されたものだ。

俺があと 1 秒早く声かけてたらどうなってただろう。多分「なんでもないです」と言って去っていただろう。どちらにせよ、浦和一女と話して待たせたことで気分を害した以上、向こうの反抗的な姿勢は揺るがない。

なんだ、折角感じの良い子かと思ったのに、春先から反抗されるとはな。しかも向こうも大概同じこと考えてるんだよな、こういう場合。ちょっと良さげな人かなと思ったら不

親切だったわ、みたいな。俺は待たせているのを気にしてたのに、こっちの気も知らずにな。

女は自分勝手だ。奥ゆかしいといわれた時代の昔の女でさえ年を取って熟年離婚などと言い出す始末。旦那をこき使っておいて金の切れ目が縁の切れ目ですってな。あれを見てると現代の女なんか何しでかすか分かったもんじゃない。そのくせ法律は女を守る。不条理な世の中だ。

ダンと教壇を蹴り上げる。スチールの板が凹む。俺はプライドが高く、被害妄想が強い。少しのことが数秒で大きくなっていき、気付いたら取り返しがつかないくらい大きくなってる。まるで雪山を転がる球っころのようだ。ごろごろ転がるうちにでかくなる。だが実はこの怒りはほぼあの少女が原因ではない。

きっとすぐにこの苛立ちは鬱に変わるだろう。俺はそんなに怒りが持続する方ではないし、鬱になりやすいタチだ。そして、いま述べたような自分の性格が悉く嫌いだ。

会社を出て車に乗ったころにはやはり鬱になっていた。

今日は追い越しもぶっ飛ばしもする気が起きない。遵法運転で大人しく帰った。

家に帰ると自室へ篭り、音楽を聴いた。壁には防音処理がなされているので夜中に聞いても文句は来ない。更に運のいいことに俺の家は最上階の壁際で、尚且つ自室は壁側の部屋だ。加えて下の階の部屋は無人ときた。まさに好都合、理想的だ。

スピーカーは DENON の 77XG シリーズ。フロントとリアが全てトールボーイで、４本ある。１本単価で 10 万は下らないものだ。センターは同シリーズのもの。スーパーウーファーもシリーズものだ。音響は好きだが、そこまで金をかける気はないからこれくらいでちょうどいい。しかも８畳の広さじゃこれでも余るくらいだ。

アンプもプレーヤーも同じシリーズのもので、銀にピンク色の金を混ぜたような不思議な色が気に入っている。まぁアンプにはありがちな色ではあるが。

マルチプレーヤーなので CD 専門ではない。DVD にも SACD にも対応している。要するに伝統的なチャンネル２系統の HiFi ではなく、ホームシアターなどのための装備だ。だからステレオ音源を聞くとやはり音が薄っぺらい感じがするのは否めない。

尤も、このアンプはステレオ専用のモードを備えていて、そのモードにしている間は映像もサラウンド音声も切ってステレオに専念してくれる。それで聞くと随分音がマシになるが、俺は常にサラウンドで曲を聴く。ライブのように全方向から音が来るのが好きなのだ。音の質という問題ではなく、自分を包み込んでくれる音場が好きなのだ。爆音で聞くと嫌なことを忘れる。

始めは付属品のケーブルを使っていたのだが、あまりに音が情けないので都心に出て少し高価なモンスターケーブルを買った。そうしたら音が随分良くなった。ケーブルの選択が自分に合っていたのだろう、まっすぐ音が眼前に投げかけられるような感じだ。素直な音が出た。

総額で 100 万ほどしたが、音楽は好きなのでこれくらいで自分には十分だ。同じ XG シリーズでも最上のものなので、音は低級品に比べてずっといい。弦や管を店頭で聞き比べてみたのだが、55XG だとハッキリいって無駄にうるさいのだ。まず、管が下品な音を立てる。そして弦がシンセのよう。この時点でダメだった。33XG に至っては紙みたいな音がする。表現が豊かでなく、下手をすると楽器の同定ができないほどだ。77XG でようやく本物の楽器に近い音に聞こえた。勿論本物とはまるで違う。だが、値段と質を掛け合わせるとちょうど良いレベルだった。

以前クラシック系統にはまっていたときは綺麗な水のような調べが好きで、DALI を愛用していた。ダリはデンマークのメーカーだ。家具の国なだけあってデザインも優れていて、筐体の木の質も良かった。湿気の多い日本では本国に比べて想定された理想的な音が出にくいものの、よく頑張ってくれた。

特に Royal MenuetⅡが良かった。Great & Small といわれただけのことはある。同じメーカーのトールボーイを買うくらいならメヌエットに良いスタンドを付けたほうがマシだ。未だに鬱を増強させたいときは静かにメヌエットを聴く。

デノンのほうはダリに比べて甘くないストレートな音が出る。激しい曲を聴くにはこちらの方が適している。

ベニーK を入れる。dreamland。コーラの CM でおなじみのやつだ。音を上げる。ウーファーがもはや振動機として機能しているように思える。

小一時間ほど音楽を聴き鳴らしたら、いつの間にか喉が枯れていた。静は合わせて歌うのが好きだ。いまもいつの間にか歌っていた。カラオケに行くときとは違う。声がわざと枯れるように歌うのだ。全く、明日も授業だというのに。

2006 / 04 / 10

埼玉県ふじみ野市上福岡。

私は晴れて私立北城高校の３年生になった。メルティアの粋な計らいがなければ進級どころか退学ものだったはずだ。

私の家は宇都宮線の新白岡が最寄だ。北城は古市場という田圃の中にあるため、交通の便が悪い。そこで本川越・上福岡・南古谷の３駅にスクールバスを出している。私は南古谷までのバスを２年間利用していた。

だが、今年から上福岡に切り替えた。理由は簡単だ。川越にある塾へ通い始めたからだ。川越から上福岡は新河岸を挟んで２駅なので遠い。逆に本川越までいけば歩いていけるので近い。しかし本川越は西武新宿線なのでそのバスを使うと朝が困る。川越で降りて本川越まで 15 分ほど歩かなければならない。それなら東武東上線に乗って上福岡まで行ったほうが便利だ。

通学路でも地元でもない川越を塾に選んだのには訳がある。利便性を考えるなら川越線

で南古谷から大宮まで行き、そこの塾に通うのがいい。大宮のほうが大きな街だ。だが、そうしなかったのは、中学の連中に会いたくないからだ。

白岡は小さな町だ。大手の塾などない。なので中学のときの連中は久喜や大宮のほうへ足を伸ばすだろう。あまり彼らには良い思い出がない。だから避けたいのだ。

親はその辺りの事情を知っていた。高校をこんな辺鄙なところにしたのも同じ理由だった。こういうところで自分は迷惑な娘だなと思うが、親は特に文句を言わない。私もそれで当然という顔をしない。ふつうにごめんねと思う。

今日は塾だ。だがまだ時間があるので、バスでなく歩いて駅まで行くことにした。たまには運動もいいだろう。そういえばアトラスに連れてかれた日もこうして上福岡の街を歩いていたっけ。

学校から駅まで歩くと 30 分以上かかる。今日は少し早く学校を出たから、塾の授業が始まる時間としてはちょうどいい。

ふぅと溜息を吐く。面倒だな。学校に行く上に塾だなんて。私、別に塾なんかいかなくても勉強できるんだけど……。ふつうに家で勉強してても首席なんだから、塾なんて。まぁ、偶に興味深い零れ話をする先生がいて、そういう意味じゃ面白いけどね。

かといって親が受験生なのだから失敗のないように行っておきなさいといえば逆らえない。気持ちは分からないでもないし、それで安心させてあげられるなら娘としてはそれくらいしてやってもいいだろうと思った。

私って随分「娘として」っていう立場を意識してあの人たちと関わってるんだなぁ。それって変わってるのかな。別に変わってもいいけどさ。悪いことではないと思う。でも、親を大切にしなきゃなとは思う。レインに会って改めて思った。お母さんが早くに亡くなって、お父さんはフェンゼルに……。

ふぅ、と、また溜息。駅に着くと電車に乗って川越へ行く。そこから徒歩で塾にいく。鞄は学校の教材と塾の教材で重い。私は空手をやっているが、それでも重く感じる。ああ、いい筋トレになるわね。斜腹筋までさりげなく鍛えられそうだわ。

全く、こんな教材持ち歩くなんて、アンセのあるアトラスから見れば甚だ笑いものでしょうね。なんだろな……石器時代の原人が石のお金を重そうに持っているのを尻目にして福沢諭吉を持っているような感覚っていうの？そんな感じ。ハッキリ言ってこれくらいの内容なら頭に入れて持ち運んだ方がてっとり早いんだけどなぁ。

そんなことを考えながら歩いていたら塾についてしまった。入り口から入ると塾独特の匂いがした。今日は……英語か。もう飽きたよ。何度も同じこと教えるんだもん。アルカの授業とかあったら面白いんだけどな。でもそしたら私は先生役だろうな。

教室に行って席に着く。学校と違って特に席の指定はない。できるだけ端っこのほうに座る。あまり積極的に参加したくない意思の表われだ。

机で単語帳を開く。いま読んでいるのはＺ会の速読英単語。３冊あって、一番上のレベ

ルだ。それでも自分には簡単すぎる。暇なので最近は大宮で買った黒緑色の水性ボールペンで対応するアルカの単語を書き入れている。少しでもアルカを忘れないようにするためにだ。半年後、アトラスにいったときにアルカが下手になっていたらレインもアルシェに合わせる顔がない。

しばらくすると生徒がどっと駆け込んできた。授業開始の呼び水みたいなものだ。そしてチャイムが鳴る。ややあって教師が教材片手に入ってくる。

英語の水月とかいう教師だ。20 台半ばといった感じで、ちょっとホストみたいな感じ。あまり好みじゃない。でも表情はホストっぽくない。格好だけそんな感じ。むしろ神経質そうな気がする。痩せているから余計そう見えるのだろうか。

顔とスタイルは良い。綺麗でもあるし男らしくもある。私くらいの年のころは相当もてただろう。女子高生に囲まれてたのかな、やっぱり。でもそういう人間に特有な馴れ馴れしさや人当たりの良さはあまり感じられない。だから何ていうか、ちょっと変わった感じの人だ。

水月が教科書のページを指定する。私はページを開く。

そうだ、そういえば一度塾に入りたてのころに一言だけ話したことがあったっけ。話すというかすれ違いざまに挨拶しただけだけど。

春期講習のとき、構文論で to と for の使い分けを説明してたのが印象的だった。いかにも生徒が知らないだろうという思い込みで喋っていたようだが、私は知っていた。自分は知ってますということをアピールしたくて一生懸命相手の目を見たが、気付いてくれなかった。

授業が終わってから自分が特別な生徒であることを印象付けるためにさりげなくその使い分けについて論じた言語学の文献の話をしにいこうと待っていた。でも、質問をする生徒が多かった。私は３番目で最後だったのだが、２番目の女の子が長々話すので時間が経ってしまった。先生も休憩がほしいだろうに、こんな自己満足に付き合わせるのは悪いと思い、帰ろうとした。

そのときちょうどその子が質問を終えて出て行った。もう時間もないだろうからと思って私はその場を去った。もし目が合ったら多分質問だと思って聞いてくれそうな雰囲気だった。私の自己満足に付き合わせたら悪いから、私は目を合わさずに去った。こういう気遣いができるところが自分の長所だと思ってる。

先生もそれくらい理解してくれているだろう。大人だし。

しかしこの水月という教師、見ていると面白い。基本的に明るく振舞っているのだが、日によって機嫌が違う。隠しているようだが、分かる。顔に出るタイプなのだ。なんとなく今日は凹んでるなとか、そういうのが見て分かる。他の教師はそういう面を見せないのだが。もしかしてわざと見せているのだろうか。

授業が終わるとがたがたと音がして、生徒たちが出て行く。水月は質問する生徒の対応をしている。私は途中からトイレに行きたかったので席を立った。慌てて行くような恥ずかしいことはしない。さも何事もないように華麗な足取りで行く。トイレだけど。

さっきからお腹が痛い。熱っぽいし、生理かも。個室に入って鞄を置く。スカートを上げて顎で押さえ、右手で下着をぐいっと引き下げて見てみる。まだ大丈夫か……。用を足し、鞄から生理用品を出して下着に乗せておく。

手を洗ってトイレを出たら、水月先生が廊下を歩いていた。先生も私に気付いたけど、私のほうから会釈した。先生はちょっと目をそらしてから小さく斜めに会釈した。あれ？と思った。何だろう……。あんな感じだったっけ？ちょっとそっけないような……。

すぐに横を歩いていた女の子が「先生」と声をかけたら愛想良く「お、どうした？」と言う。なんか……態度が違うような気がする。この子と特別仲が良いのかな？……まぁいいや。何か考え事でもしてたんでしょう。

2006 / 04 / 23

東京都豊島区池袋。俺は池袋駅近辺にあるジュンク堂書店にいた。この界隈では最も大きい書店で、元々は関西の資本だ。今も本店は大阪にある。本棚としては９Ｆが最上階で、地下を合わせると 10Ｆ分の棚があることになる。

俺が大学１，２年のころまではもう少し手狭で風通しが悪く、各階にレジがあったのだが、リニューアルしてからレジを１Ｆに集中させたため、各階が広くなった。改装時は最大規模の本屋を謳っていたが、確かにそうだったろう。靖国通り沿いの三省堂よりこちらのほうが豊富だ。

比肩するなら新宿高島屋横の紀伊国屋だろう。規模は小さいが、洋書コーナーでジュンク堂を圧倒している。ジュンク堂の９Ｆの洋書コーナーではとてもではないが紀伊国屋に対抗できない。

言語学や語学など、静の専門分野については両者とも大した差がないので、洋書の強さという点で静は紀伊国屋を買っている。だが、地理的な近さと大学時代の馴染みを考慮すると、実際にはジュンク堂に足を運ぶことが多い。

大阪本店は大きなビルの中に入っているのだが、ハッキリ言って池袋店のほうが大きい。向こうは横に広いが、階数が少ない。レジは昔の池袋店と同じく各階にある。言語学の棚が２列なのは同じなのだが、気持ち池袋店のほうが充実している気がする。ただ、本店だけあってビルは極めて綺麗で豪華だ。エスカレータでさえデパートのもののようだ。

今日は国道 254 号を東に上って池袋へやってきた。国道を降りて要町の辺りから西口方面に出て、高架下をくぐって東口方面まできた。日曜なので車は混んでいたが、それでも車好きにとっては地下鉄成増から有楽町線で行くよりはマシだ。

いまは４Ｆにいる。ここには人文関連の書物が陳列されている。車は店の駐車場に停めてある。

本屋というのは棚によって時間の流れが異なる。１Ｆの女性誌コーナーとここを比べてみるとすぐに分かる。あちらが激動の近代なら、こちらは中世のような静かな流れだ。瑣末な問題を異なる論調で繰り返す、ゆるりゆるりとした時間の流れ。人文系の特色だ。未だに天動説か地動説かと平行な議論を戦わせているかのような遅さを感じる。

この言語学の棚にはいつ来たって何年も前からある本がいくつも置いてある。そのくせ特定の数人の指紋しか本には付いていないのだ。ここにいると図書館であるような錯覚を覚える。１Ｆの女性誌コーナーとはまるで対極的だ。

猫が部屋を巡回するように変わり映えのないことを確認し、去ろうとした。そのときふと立ち止まった。すぐ左横に女子高生がいたのだ。このコーナーに制服を着た女子高生がいるのは珍しい。８Ｆには参考書があるので高校生が語学コーナーに迷って入ってくるのはあることだ。だが、４Ｆのこのコーナーは珍しい。

しかし俺が立ち止まったのは女子高生がいたからではない。彼女が自分のクラスの生徒だったからだ。しかも――

一瞬、我が目を疑った。あの気に食わない小生意気な黒髪の少女だ。確か北城高校の生徒だったはずだ。そう、いまもその制服を着ている。間違いない。向こうはこちらに気付いていないのか、１ｍ横で何かの本に没頭している。

急にイラっとした。と同時に見つかったらヤバイとなぜか思った。会いたくないのだ、嫌いな奴には。何事もなかったかのようにその場を立ち去る。少女から離れ出したところで、ふと思った。そういえばこいつのほうが後から来たんだから、俺に気付いてないはずはないよな。なんだよ、挨拶もなしか。そりゃ挨拶されても困るけど、かといってシカトされるのも癪だ。俺のことが嫌いならせめて気付かぬように避けろよ。それともここに居座ってるのは自己主張のつもりか？

顔が良い分、気に食わん。まるで俺が女という存在に否定されているようだ。ブスなら否定されても傷つかんが、美人だとダメージがでかい。あぁ、うざいうざい。美人なんて脳なんかなくてもいいだろ。

だからこないだトイレから出てきたこいつと出くわしたときも俺は冷たくあしらったんだ。俺の方から興味がないことをアピールした。その先制攻撃が俺の自己防衛だ。どうせ女だから群れるしかないだろ。すぐに友達でも作って俺の悪口でも言うがいいさ。自嘲しながら俺は少女に背を向けた。

「……先生？」

ビクっとした。突然の呼びかけ。先生と呼ばれることにあまりに慣れているから、とっさに振り向いてしまう。

「え……」教師の性だ。すぐ取り繕ってしまう「あぁ、こんにちは」

　少女は黒い眼をくりくり半回転させながら首を傾ける。一瞬の仕草だったが、何となく印象に残った。
「……どうかした？」
「いえー、その……。あ、先生だなって思って」
「……うん」
　だからどうした？
「さっきから気付いてたんですけど、集中してるみたいだから邪魔しちゃ悪いかなって思って。でも、私の顔見ても何もいわなかったからー、えと、先生も同じこと考えたのかなって」
　ぼーっとした言い方のわりに随分と棘があるじゃないか。
「いや、気付いてはいたけど人違いだったらまずいかなって思って。ほら、教師だってこと抜いたらただのおじさんだし」
「おじさん？」
　きょとんとする少女。なんだろう。普通と反応が違う。
「先生……いくつですか？」
「いや、そういうことは言わないことになってるから」
　身を引く。すると少女は本を戻して一歩近付いてくる。寄るなよ、俺は人に近付かれるのが苦手なんだ。緊張して冷や汗が出るんだ。
「あの……塾外じゃ質問ってやっぱり受け付けてくれませんか？」
「え？」
　何だそれ……。そんなこと言われたことない。
「別に、いいけど。僕に分かることだったら」
「２つあるんですけど」
「うん」
「先生、もしかして私のこと苦手ですか？」
「え……何で？」何をいきなり「そんなことないよ。てゆうか話したの殆ど初めてじゃない？」
　すると少女は口元に指を当て、考え込む。
「なるほど……じゃあ、あの、もうひとつ……。前に春期講習の英語の授業で to と for の使い分けを教えてくれたじゃないですか」
「うん。他のそういう動詞を知りたいの？」
　少女は首を振る。
「……」
「……？」
　無言が続く。何だろう。嫌な間だ。
「いいや、やっぱり嘘は苦手です。巧く婉曲に伝えようかと思ったけど」

「うん？」
「私、あの理論、知ってました。多分、クラスで知ってるのは私だけだったと思います。だって言語学や英語学の文献に書いてあるようなことなんですもん」
「そうなんだ。すごいね、受験生なのに言語学とか興味あるんだ。そっか、ここに来るくらいだもんね」
　要するに、自慢したいが大人しくて言えないってパターンの優等生か。随分変わったキャラだな。正直、こういうのは嫌いじゃないな。
　なんだ、思ってたより面白そうな奴だな。思わずふっと笑った。俺の笑いはしばしば相手に馬鹿にしていると取られる。だが少女はにこりと返してきた。
「先生」
　胸の前で両手を合わせる。
「ん？」
「いま、私のことが嫌いじゃなくなったでしょ」
「え……何言ってるの？」
　確かに。尤も、これで新たに「不気味」のレッテルが貼られたがな。
　少女は急に口を押さえる。
「やだ、ごめんなさい。私、なんでこんなこと言ってるんだろ……。ずけずけと……ごめんなさい」
「俺ってそんなに言いやすいのかねぇ？」と笑う。
「いえ……」目をきょろっと回す「むしろ言いにくいと思います。だからほんと不思議……」
「不思議かぁ……君も僕にとっては不思議だけどね」
　あーあ、ついに声に出してしまった。
「そうですよね」と笑う。怒らない。不思議だ……。
「ええと……」といって手を前に出して目を見る。名前が咄嗟に出てこない。
「あ、紫苑です」
　少女は下の名前を言ってきた。ふつう名字を言うだろう。察しが良いのか悪いのか。
「何、紫苑さんだっけ？」
「紫苑でいいですよ、先生。私、下の名前で呼ばれるほうが好きなんです」
　っていっても言いづらいだろ、ファーストネームは。それとも英語かぶれなのか？英語だってみんながみんなファーストネームは使わないぞ。とりあえず「君」で通しておこう。
「そうなんだ。ところで、何の本読んでたの？受験のほうは大丈夫？」
「はい、大丈夫です」
　大した自信だ。が、あながち嘘でもなかろう。小テストで満点以外を取ったのを見たことがない。内部のテストでも満点を取って驚かれていたな。
「いまはこれです。『言語の発展』。フランソワ＝ロ＝ジャコモ」

誰だ？知らん。本を受け取る。白い本だ。分厚い。ガキの読むもんじゃあない。内容は……エスペラントの観点から言語の発展を論じる？エスペラントって確か人が作った言葉だったよな。
「ふぅん、こういうのに興味があるんだ。なんかすごいねぇ」
「先生は何を探してたんですか？」
「いや、特には。大学時代は言語学専攻だったから、こうして眺めにきてるだけ」
「言語学専攻だったんですか？」
目をくりっとさせる。不思議なものだ。これくらい可愛ければ勉強なんてしないでも楽しく生きていけるだろうに。
「まぁね。君も興味あるの？」
「はい」
「でも、人工言語は言語学じゃ扱ってないはずだよ、確か。大学いってそっちをやりたいの？」
「大学は……別にどうでもいいんです」
ありがちだな。
「そうなんだ」
「親を安心させたくて言われるままに通ってますから」とおどけて言うが、本気で言っているようだ。
「確かにずば抜けて成績がいいよね。一体どんな勉強方法してるの？」
紫苑はうーんと首をひねると「努力と根性です」と答えた。女の答えじゃないな、それ。
「へぇ……メソッドというよりは強靭な精神力ってことか」
「はい！人間、学ぼうとする意思が何より大事です。どんなに環境が良くても意思がないと猫に小判だと思います」
確かに。教師を潰す良い発言だ。こういうコメントは好きだ。俺はにやっとした。
「面白いこというね。実際俺も教師でありながら同じこと考えるよ。できる子は手引きするだけで後は勝手にやってしまう。やる気のない子はいくらやっても暖簾に腕押しだ」
「でも先生はそんな生徒の相手をしてるんでしょう？」
「まぁね。やる気のないのをやる気にさせるのがやりがいな教師もいるが、俺はそういうタイプじゃない。現状、必要とされてる教師像じゃあないね」
紫苑は「ふふ」と笑う。
っと、いけない。長く話しすぎた。これで互いに心象が良くなるとまずい。生徒に慣れすぎるのも困るのだ。
「じゃあ、また塾で」
「え、もう帰っちゃうんですか？」
それはどういう意味があっての台詞だ？もう少し話していたいという意味か？それとも俺の買い物の心配か？よく分からない。

「まぁ、ちょっとこれからあるんで……」
　すると紫苑は一歩近付き、間近に寄ってきた。俺は首を後ろに軽くのけぞらせる。
「……私、先生が私ともう少し喋ってたいって思います」
　なんだ、そのヘンな日本語は。
「え？」
「水月先生って人付き合い苦手じゃないですか？」
「そう見える？」
「見えません。むしろ明るく見えます。でも、何か本当はそうじゃない気がします。授業中もそうです。急にふっと暗くなるっていうか……何か悩み事を思い出したみたいな顔。私もそうだから分かるんです」
　紫苑とかいったな。この子、侮れないな。
「あぁ、俺、突然考え事する癖があるから。それだけだよ」
「……」
　紫苑は黙る。こちらの嘘を見抜いているが、そこまでハッキリ嘘とは言えないとでもいったところだろうか。俺は思わず目をそらした。
「先生って年下に treat されるのって嫌いですか？」
　おごるという言葉を避けた言い方だ。ガキのくせに巧い。いや、やめよう、こいつはガキじゃない。そう認識してると足元をすくわれる。
「まぁ、特に生徒にはね。逆ならまだいいが」
「んと……そこの端っこに喫茶店があるんですけど、ご存知ですか？」
「うん、あるね」
　そう、お前がまだ中学生くらいだったころからな。実際行ったこともあるさ。ラウンジも含めてね。
「授業のことで質問があるんですけど、先生っていつも授業の後忙しそうだから。こないだも最後まで残ってたんですけど、これ以上引き止めちゃ悪いって思って帰ったんです。目を合わせたら先生引き受けてくれそうだったからそのまま帰ったんですけど」
　ほう、そうだったのか。あれにはそんな意図があったのか……。胸がズキっとした。紫苑にではない。蛍に、だ。結局俺の疑い深い性格というのは変わらないんだな。
「でも、お休みの日まで生徒の相手させちゃ悪いかなって思ってお茶でもって思ったんですけど」
「別に質問くらい良いよ。用事は後回しにするから。どうせどうでもいいことだし、時間の問題ではないから。ただ、俺にご馳走させてよ」
　すると紫苑はにこりと微笑んだ。

　俺は紫苑を連れ、４Ｆの喫茶店に入った。ここは入り口にドアもないので入りやすい。入るというよりは上がるという感じだ。俺はレモンティー、紫苑はミルクティーを頼んだ。

「デザートとかあるみたいだけど、食べる？」
「大丈夫です。私、甘いもの食べないんです」
「へぇ、珍しいね。で、質問っていうのは」
　紫苑は鞄からメモを取り出すと、授業で述べた英文法について事細かに聞いてきた。その質問のレベルは大学院生を思わせるものだった。とても高３には思えない。しかも驚いたことに質問の体裁を整えてこそいるものの、殆ど答えを知っていそうな口ぶりで、むしろこちらの意見を伺っているかのようだった。
　俺は頭の良い人間が好きだ。ふつうなら嫌味だと思うようなところを素直に凄いと思う。我を忘れて紫苑を賛辞した。紫苑は嬉しそうにしていた。
　だが、まだまだ高校生。紫苑の知らないことは多い。紫苑の考察の抜けをチェックし、指摘した。紫苑は完全に集中しきった顔で興味深げに聞いていた。そしてすぐにそれを踏まえた考察を立てる。
　蛍に似てると始めは思った。でも、何か対極にある人間だということが分かった。紫苑、この子はただ聞いているだけじゃない。俺の言うことにただ感心して賞賛するだけじゃない。自立して考え、それを俺に投げかけてくる。とても生徒とは思えない。一人の人間として見ることができる。会見した結果、敬意に値すると評価するようになった。
　いつの間にかメモは２人で書いた小書きでいっぱいになっていた。気付けば時間もとうに夕方になっていた。
「そういえば、そろそろ帰らなくていいの？ウチの塾に来てるんだからこの辺が自宅じゃないんでしょ？」
「ウチ、親が共働きなんです。でも、そうですね。そろそろ帰らないと。夕飯作っとかないといけないから」
「えらいね、自分で作るんだ。というか、親御さんの分まで？」
「はい、学校行って塾も行って習い事もして家事全般もしますよ！」
　紫苑はわざと偉そうに笑って言う。
「versatile だねぇ」と試すように言うと即座に「それも努力と根性です」と返してきた。うん……受験、こいつならどこでも行けるだろうな。
　席を立つ。紫苑も促される。会計を済ませ、エスカレータを降りる。わざわざ待って紫苑を先に行かせようとしたが、首をひねって不思議そうにこちらを見てくるので先に乗った。そうか、蛍じゃないんだ……。
　ジュンク堂を出る。
「俺は車なんだけど、君は電車だろ」
「はい」
「一応ブクロまで送った方がいいのかな。まぁ、目と鼻の先だけど」
「あ、そんな。大丈夫です」とキッパリ断る紫苑。
　俺は、多分自分は気付かなかったけど、ちょっと嫌そうな顔をしたんだと思う。思い切

り拒絶されたような言い方だったからだ。だが紫苑はそれを察知したのだろうか、俺をじっと見て、「ほんとは送ってほしいですよ？」と言ってにこりと微笑んだ。

俺が何か言おうと考えてる間に紫苑は制服のスカートをなびかせながら去っていった。制服ということを再認識して、気分が悪くなった。そうだ、紫苑は女子高生だ。その上、自分の生徒だ。まして俺は結婚してるんだ。何考えてるんだ、俺。いや、だって、ありえないだろ。それに……向こうにしてみれば俺はおじさん――せいぜい話の合う人――なんかのつもりだ。あのときの蛍と同じか。

俺は街の空気が吸いたくなって、サンシャイン通りまで歩き、ＨＭＶで洋楽を買った。それから車を取りにいって帰った。

風呂に入った。湯に漬かりながら考えるのは紫苑のことだ。いかん、何考えてるんだ。これ以上の付き合いになる目などないぞ、ないんだ。第一、俺には嫁がいるだろ……。まして子供までこれからできるというのに。というか一番の問題はあれが女子高生だということだ。ガキはタイプじゃないんだよ。……でも、あれがガキか？そう言えるのか？

風呂を出て音楽を聴いたが落ち着かない。外に出て、少し肌寒いのも気にせず車を走らせた。窓を開けて空いた国道を走る RX-8 は最高だ。注目を浴びる。気持ちがいい。

2006 / 04 / 28

授業が終わると私は最後の一人になるまで教室で待った。いつものように授業が終わると生徒が教師のもとへ質問しにいく。今日は運が良く、一人しかいなかった。私はわざと手荷物をゆっくり片付けた。

こないだの日曜、水月先生と池袋で話した。お茶をご馳走になった。自分でも信じられない。私があんな大胆な行動に出るなんて。何、私のあの言葉遣い？あんなこと咄嗟に言えるのね。私、一生懸命大人ぶってみた。

先生はそれを受け入れてくれた。引いてたっぽいけど。それに、私の話を聞いてくれた。真剣に言語学の話に付き合ってくれた。始めは訝ってたみたいだったけど、学問になった途端に真剣になってた。多分、あの口調は私を対等に見てくれてた。それだけ私の能力が認められたってことじゃない？努力と根性バンザイ！

でも、やっぱり先生と生徒っていう壁はあるんだなぁ。その後の授業で話しかけようとチラチラ見てたけど、目をそらされてしまった。やっぱり特定の生徒をえこひいきしないように気を付けてるんだろうな。プロ意識、高いなぁ。

水月先生は一生懸命な人。そういう一面も持ってる。でも、それを知ったのは本屋の喫茶店。じゃあどうして私は声をかけたの？４Ｆに上って言語学のコーナーにいったとき、たまたま知った顔が同じ興味を持ってるのが嬉しかった？それはある。

こっちに気付いたのを無視された。なのに何で声なんかかけたの、私。こないだの廊下でのことが気になってたから？それもある。でも嫌ならほっとけばいいだけの話。

なんだろう。分からない。どうしてあんな大胆なこと言ったのか、分からない。相手が大人の男の人で、甘えさせてくれると思ったから？受け入れてくれるだろうって甘えてた？ううん、違う。なんだろ、わかんない……。たった数回の授業で私は彼に何を感じたんだろう。そこにカギがあるはず。でも分からない。

最近、そのことばかりが気になる。なんで私は彼に話しかけたのか。その上食い下がったのか。さして好意も抱いてなかったのに。今まで自分から人と関わろうなんて思ったこと無かったのに。

悩んだときは行動だ。何かしらアプローチをかけよう。道が切り開かれるはず。

質問をしていた城西川越の男子生徒が去る。教室には私と先生の２人が残った。私はさりげなく整理を終え、顔をあげた。偶然を装って先生と目が合うように。これでは逃げられまい。

「あぁ、お疲れさま」

「先生も。今日はこれで終わりですか？」

「いや、まだ色々とね。……あぁ、こないだはありがとね」

「こちらこそ。お茶までご馳走になっちゃって」

「いやいや」と静は去ろうとする。紫苑はさりげなく出口に先回りした。

「あの、先生。私、思うんですけど、やっぱり教師と生徒の壁みたいのってありますよね。こないだみたいな生意気な口聞いちゃいけないですよね」

「え？いや、口調は全然問題ないよ。俺、とにかくやる気のある学生さんは気に入るから」

あくまで壁を作ろうとするのね。私は教師のあなたには興味がないの。そうじゃなくてあなた個人の――ん、ちょっと待って。いま、私なんて思った？それは語弊があるぞ――つまり、英語の教師として見てないで、言語学の話せる人、みたいな？うん、そうね。しっくりきた。

「お茶ご馳走になっちゃいました。あれも良くないと思います」

「塾としては確かにそうかもなぁ」

「だから清算させて下さい」

「え、いいよ。気持ちは分かるけど、ほら、小銭もらっても困るし。そんな気にしないで」

「じゃあ、tea for tea で」

すると先生はピタッと止まった。

「あのさ……」

「先生、明後日授業ないですよね。私も暇なんで、また同じ時間にあそこで偶々本を見てます。なんだか偶然先生が通りかかるような気がします」

「いや……」

困った感じの顔。私はぺこりと頭を下げて小走りで去っていった。

なんだ、私の態度。最悪じゃない？なんて偉そうな。そして自分勝手な。これじゃまる

で小学生が読むような少女漫画のヒロインじゃない。本当に来てくれるわけもない。だって、こんな言い方じゃ相手に変な勘違いさせてるに決まってるもの。

塾を小走りで出た。受付や教務の人たちがちょっと驚いた風に見てた。あ、まず。その後に先生が来たら変な風に勘ぐられたりして……。

塾を出たらそれはもうダッシュよ！なんだか背中に羽が生えたみたいに走ってた。自分の体じゃないみたい。なんかね、嬉しいのよ。楽しいの。話せる相手。そう、私とまともに話せる相手なんていなかったから。

水月先生は分からないことは素直に分からないという。そこが偉い。だから信用できる。そして何でだろうねと考察する。真剣な顔で仮説をいくつか挙げる。私はそれを聞いて仮説の穴を付いたり、敷衍させる考察を述べたりする。それを先生は嫌がらず、むしろ感心して聞いてくれる。

でも、それがやり過ぎで邪魔がられちゃったら？そしたらしょうがない。その程度の大人だったんだなって諦めればいいだけのこと。別に恨んだりしないわ。私の勝手だもん。避けられてもこの１年フツーに接するだけよ。

だけど……。もしかして先生だったら私の誰にも言ったことない悩みとか弱さとか、分かってくれるのかな……。ううん、ないない。だって彼は勉強を教える人なんだから。そんな期待をしちゃだめ。それにそんな期待は好きな人に持つべきだわ。いつか出会う旦那様に。

川越から電車を乗り継ぎ、新白岡で降りる。外はとっくに真っ暗闇だ。駅を降りて歩くと左手のミニストップの灯りばかりが目立つ。ミニストップの交差点を横切って歩くと、左手に小さな遊歩道がある。ベンチも街灯もある。でもあまりに小さい。この遊歩道を歩いて斜めに進むのが好きだ。

家に帰ると珍しくお父さんが帰っていた。

「あ、ごめんね、お父さん。いまお夕飯作るから」

居間でスーツを脱ぐ父親。紫苑は後ろに擦り寄って脱いだジャケットを肩から外してやる。そしてジャケットをハンガーにかける。そういえば母親にはこんなサービス、しない。でも、なんとなく父親にはしてあげる。幼稚園からの習慣だからだろうな。違和感がない。それにお父さんはタバコも吸わないし、微かにつける香水の匂いしかしない。この匂いが昔から好きだ。

そういえばアルシェもタバコを吸わないなぁ。先生は……吸ってた……。いつだったか見たことがある。

「お夕飯、何がいい？」

「いいよ、大丈夫。いつもありがとう。紫苑、たまには外に食べに行こうか」

「え、いいの？」私、嬉しそうな声。

「うん」と父は背を向ける。流石に娘の前でズボンは脱がない。ネクタイまでだ。よそのお父さんは平気でお風呂上りに裸でいるなんて聞いたけど、本当にそんな人いるんだろうか。そういえばお父さんと最後にお風呂に入ったのはいつだろう。あ、小６だ。風邪の病み上がりで辛かったときに入れてもらったんだ。
「母さんが帰ってきたら行くけど、それまでお腹空かないか？」
「うん、待つよ。今日は空手もないし」
「そうか」
　父は居間のテーブルに腰掛ける。
「先にビールとか飲む？」
「いや、運転するから」
「あ、そうだよね」
　新白岡にはハッキリいって何もない。食べに行くとなるとガード下よりもっと向こうの大きい道に出ないとお店がない。
　お母さんも免許を持ってるけど、お父さんのほうが運転が巧い。免許を持ってないのは私くらいだ。だってまだ 17 だしね。お母さんが教習所には通えるみたいなこと言ってたけど。
　免許にはあまり興味がない。でも、この町で暮らすには免許は必須アイテムだ。この町の子供は車がないので、どこか行くとなれば自転車か電車でということになるが、これが中々辛い。遊びに行かない紫苑にはそうでもないが、ふつうの子供たちには辛いのだ。
　紫苑は牛乳を入れ、父にはコーヒーを入れてやった。ちょこんと席に着くと、沈黙が訪れた。父は物静かだ。あまり喋るほうではない。その辺りが紫苑には物足りない。偶に何を考えているのか分からないことがある。好き嫌いもあまり明確じゃないみたいだし、怒った姿もまず見たことがない。慌てた姿も。
「ねぇ、お父さん」
「ん？」
　コーヒーを飲みながらゆっくり顔をあげる。
「最後にお風呂一緒に入ったのっていつ？」
「さぁ、いつだったかねぇ」
「小６で風邪ひいたときあったじゃない？あのときだと思うけど」
「あぁ、あのときは風邪が治って安心したな」
　そうかな、私には心配してる風に見えなかったけど。
「ねぇ、私って可愛いと思う？」
「え？……うん」
「そうじゃなくて。だから、父親としてじゃなくてさ。「あ、こいつは男にもてそうだな」みたいな」
「何？誰かに好きだとか言われたの？」

あまり感情も出さずに勝手に話を飛躍させる。
「ううん、そうじゃないけど。どう思う？」
「さぁ、お父さんには分からないな、いまどきの子の好みっていうのは」
何その答え。何か物足りない。もっとちゃんとコメントしてよ。
「たとえばテレビのアイドルみたいのが男の子の好みなのよ」
「じゃあ違うんじゃないの？」とあっさり否定。ちょっとムカついた。
ぷーっと頬を膨らませて牛乳を飲む。父親はまずいなと思ったようで、「紫苑は厚化粧とかしないから比べられないんだよ」というが、そんなのフォローになってない。
「でも、母さんに似て美人に生まれて良かったと思ってるよ」
やっとまともな回答が出た。
「そう？私、お父さん似だってよく言われるけど？」
「……そうか」
で、また無言。あぁもう、会話にならないなぁ。
気まずい無言。結構長い。でも、テレビをつけてごまかすのは嫌。かといってお父さんはほっといたら何時間でも黙ってそう。そういう人だもん。
「ねぇ、学校なんだけどね、３年になってからもちゃんと首席取れそうだよ」
「そうか、すごいな、紫苑は。さすが母さんの子だ」
「だから、お父さん似なんだってば」
「はは」と珍しく笑う。あれ？いまのが笑いのツボなんだ……？
ふつう、父親が娘に学校は最近どうだとか聞いてウザがられるものだと思うんだけど。
「塾も順調よ。一番上のクラスに入れたし。剣道も空手も疎かにしてないわ」
「塾、役に立ってるのか？母さんは心配みたいだけど、父さんは紫苑には塾なんて時間の無駄じゃないかって思うよ」
「そう？」
急に私、晴れやかな顔になる。お父さんのこういうとこ、好き。
「ねぇ、お母さん帰ってきそうにないよ」と言うとお父さんは一瞬不安げな顔になる。いや、家出したって意味じゃないのよ、お父さん……。
「メール返ってこないし、遅いんじゃないかな。２人で食べにいこっか？」
「母さんに悪いからいいよ。紫苑が待てないなら代わりに何か取ろうか？」
結局この人はお母さんに依存してるんだな。良く言えば好きなんだ。娘の私よりきっとお母さんのほうが好きなんだろうな。それはまぁ良いことだと思うけど。
「いいよ。取るくらいならおそば煮るよ。おそば食べる？」
お父さんは少し考えてから言った。
「おそば、伸びちゃったら母さん食べられないぞ」
私は引きつりながら笑った。
「大丈夫、食べる分だけ煮るから」

結局そばを 10 分ほどで作り、それを夕飯にした。父親はものの５分で食べ、紫苑の入れたお茶を飲んでいた。特に会話もなく。

そのときふと思った。ああ、これだ。この疑問だ。こういうタイミングで沸き起こる疑問を私は先生にぶつけたんだ、大胆にも。そしていまもそういう疑問を投げかけてみた。

「ねぇ、お父さん、私と話すの嫌？」

「えっ」と驚く。いや、分かってる。嫌なはずない。そうじゃなくて元々こういう人なんだ。でも、こうやって責めてみたくなる。

「そんなことないよ」

ほらね、真剣に否定した。

「でも、私ばっか喋ってるよね。うるさい娘かな」

「そんなことないって。気にしすぎだよ。お父さん、元々こんなだから。紫苑の小さいときからこうだったでしょう？」

「そうだね、ごめんなさい。あ、そうだ。お父さんって若いときすっごく強かったんでしょ。今も強そうだけど」

「強いって？」

「格闘技とか」

「母さんが言ったのか……」

「私とどっちが強いかなぁ？」

するとお父さんは「えぇ？」といって笑う。私も笑ってその場は終わった。結局お父さんが居間を去ってしまったので私も部屋に戻った。

はぁ、今日も収穫なしか。色んな話題をぶつけてみるんだけど、どうしても喋らない人なのよね。かといって非行に走って注目を集めるなんて浅はかなだけだし。お父さんに信用されて敬意を払われてるのは分かる。だからその信頼を崩すようなことはしたくない。

それにしても、将来付き合って結婚する人はお父さんをもっとお喋りにした感じがいい。あの空気は耐えられない。ある意味お母さんは凄いと思う。

お父さん、あの勢いだと私にカレシができても「そうか……」で済ませそうだな。お母さんにカレシができたとでも言わない限り驚かないんじゃないだろうか。と思ったところで笑いが漏れた。

2006 / 04 / 30

昼下がりのジュンク堂。俺は前回とは違う服でやってきた。休日なのだからスーツはおかしいし、デートではないのだからあまりお洒落をしても勘違いされかねない。だから着ていくものは悩んだ。

まぁふつうにカジュアルな格好にしようと思った。ジーンズはリーバイスの 501。オーソ

ドックスなRedTabだ。1万強の普及版だが、わりと気に入っている。ベルトは純正品だ。ジャケットまでリーバイスにすると芸がないのでIn The Atticにした。別に若く見せようという気ではないのだが、普段選ぶ服がこんなのばかりだ。それに妻が好むのもこういう感じだ。

靴はナイキだ。白だから汚れが目立つので、拭いてきた。まぁ、別段着飾ってもいない。わりと普段から外に行くときはこんな格好だ。

ジュンク堂についたときには既にかなり緊張していた。いや、いつも会ってる生徒に会うのに何を緊張する必要がある。それに向こうはまだ来てないかもしれないぞ。

しかしエスカレータを上って４Ｆについたら、既に紫苑は本棚の前にいた。

「あ、先生。こんにちは。偶然ですね」

しゃあしゃあという紫苑。俺は空咳をすると「勉強熱心なのはいいけど、受験勉強はいいのか？」と言った。

紫苑は本を棚にしまうと近付いてきた。この子はパーソナルスペースが狭いのか、かなり近くに寄ってくる。

「あ、先生、香水なんてつけてるんですね」

ふいに俺は赤くなった。

「別に、仕事中でも少しはつけてるよ。今日だって同じくらいだしね」

「そうなんですか？いつもと違う感じ……」

「多分トップノートが残ってるからじゃないかな」

「あ、そうですね。でも、来てくれて良かったです。来ないかと思ってました。そしたら脚が棒になっちゃうところでした」

「うん……まぁ、熱心な教師だからね」と笑う。すると紫苑も笑う。

しかしこの子は何の意図があって俺に近付いてるんだろうか。何か良からぬ企みでもあるんじゃないか……と思って止めた。もう俺は今までの生き方を止めたいんだ。こんな俺の弱さが皆を苦しめたんだ。

少なくとも紫苑に他意はないだろう。ほら、見てみろ、こうして制服で来てるじゃないか。向こうは屋外塾くらいにしか考えてないんだ。

「あのさ……お茶っていってたけど、やっぱ止めにしないか？」

「んー、どうしてです？やっぱり先生って立場だし、年上だから？」

「それもあるけど……。ほら、ここに生徒が来てないとも限らないし」

「あぁ、確かにそれはまずいかも……迷惑かけちゃいますよね。じゃあ、他の場所にしましょっか。喫茶店ならたくさん知ってるんじゃないですか？」

「え……なんでそう思うの？」

「池袋、よく来てるみたいなんで。ここの本屋も」

よく見てる子だ……。

「うーん、じゃあ降りたとこにヴェローチェっていう喫茶店があるんだけど」

紫苑は明るく承諾した。俺は彼女を連れて下へ降りた。しかし普段着でよかった。この格好なら大学生に見えないこともない。大学生と女子高生ならありえる組み合わせだ。紫苑はとことこ後ろを着いてきた。
「あのさ……勉強熱心なのはいいけど、いつも制服なんだね」
「え」紫苑が息を呑む「どういう意味ですか？制服……まずかったですか？」
「いや……ほら、年の差があってさ、周りに誤解されないかなって」
「あぁ、そんなこと気にならないですよ。先生、大学生みたいですよ」
先生って言うな、先生って。
「そっか……でもね、先生って言うのは勘弁してくれないかな」
「じゃあ何ていえばー？」と首を傾げる。
「ええと」
「下の名前教えてくれますか？」
「……先生と小声で呼んでもらうほうがベターだということに気付いた」
「ふふ……私は下の名前で呼ぶのがベストだと思いますけど。じゃあ今度は普段着で来ますね」
今度？俺の意思は聞かないのか。
「制服で来たのは今日お父さんが休みだったからです。普段着だとどこ行くのかって思われそうだから」
「お父さんか……前に入学のときに来てたね。随分かっこいいと思った記憶がある」
チラと紫苑を見つつ言う。ヴェローチェに着く。入り口を開けて通してやる。背が低い。俺の高く挙げた腕の下を余裕でくぐる。
「はい。かっこいいですよね。自慢なんです」
それを聞いて初めて気付いた。俺はこの子に好意を持っている。怪しいけど興味があるとか、生徒なのに女として見てるとか、そういうやましい気持ちが一気に消えた。この言葉で。
しかし、この店の内装は変わってないな。俺はフレーバーティーを頼んだ。あのときは何を頼んだっけ……思い出せない。紫苑はミルクティーを頼んだ。こないだと同じだな。
上は狭いので下にいった。吸うつもりはないが奥の方の喫煙席に座った。２人が相対する机と椅子だ。俺は壁に背を向ける位置取りで……そうだ、ここ、前に座ったところだ。何の因果だろうか。この机は３年の時を刻んで尚、俺を見続けているのか。
紫苑は座ると質問をしてきた。授業の内容と言いながらも明らかに大学レベルの内容だった。確かに授業で述べたものだが、どこの大学がそのレベルの問題を問うもんか。でも俺はこういう話が生来好きだから真剣に話す。
紫苑は良い生徒だ。反応が分かりやすい。説明が分からなければ即座に切り込んでくるし、かといってその言い方がイラつかせるものでもない。説明を聞くときも全身で聞いてますというオーラを出す。なんていうか、別に大したことではない。小さな頷きや、こち

らを見る目線。偶に紡ぎ出される相槌。それらが心地良いのだ。だが、その反応を聞いていて段々鬱になってきた。しかしそれを見せないように明るく振舞った。

俺は紙ナプキンを取り出して説明していた。その上に説明を書いていた。紫苑はそのナプキンを手に取ると、「これ、記念にもらっていいですか」という。そんなものでよければ、と言ってあげた。

気付くと２時間も話していた。追加で注文を取る。軽食も入れたほうがいいだろう。紫苑に打診するとサンドイッチを食べるというので１Ｆに上って適当なものを見繕ってきた。紫苑は「おいしそう」といって食べていた。文句を言わない辺りがよく似ている。こんな下らんナプキンを記念に思うところも。なんか歴史を焼き増ししてるみたいで気持ちが悪くなった。

それから１時間ほどして、話は受験にありがちな be laughed at by の話題になった。だが、そんな文法を紫苑が知らないはずもなかった。

「laugh に使う前置詞がここで at になってるのが気になるんです」

「on じゃダメなのかとかってこと？」

「いえ、at が多分適切なんですよ、それは分かります。point one's finger at みたいな感覚なんじゃないかなって思うんです。「指差して笑う」っていう日本語の表現にも通じるところがありませんか？」

「確かにそうだね。I pointed my finger at her の場合、指差しの終点がまさに her だもんね。一方、I pointed her to the seat という用法もあるんだが、この意味は分かる？」

「椅子へ……ええと、座るように指差した？」

「そう。で、ここで気付くことは？」

「前置詞が to になってますけど……先生、それ、抽象的すぎます。何を求められてるのか分かりませんよぉ」

そうか、こういう一言だ。これさえあればこちらもいくらでも譲歩できたんだ。俺はしかめっ面をしたが、紫苑に向けたものだと勘違いさせたくないのですぐに取り成した。

「そうだね、point の対格がどう変わっているか」

「あ、指から人になってます。無生から有生へチェンジしてますね。で……ちょっと待ってください、自分で挑戦してみます」

思考モードに入る紫苑。あいつと違っていかにも考えてますという一生懸命なオーラが見えて心地良い。俺はにこやかに２杯目の紅茶を啜る。

「そうか……後者の文では、実際に指を差されてるのは彼女じゃなくて席の方。でも対格には彼女が来ている」

「そういうこと。実際指をさされているのは不思議と席なんだよね」

「でも待って……彼女って解釈もあるかも」

「そうそう。恐らくこの文を発話するとき、実際は一旦彼女を指さして、それからその指

を椅子へ持っていく流動的なジェスチャーになりがちだろう。彼女は指差しの終点じゃあない。終点は別の方向にある。そしてその「別の方向」を表わすのがこの to なんだ。あくまで一点としての終点を指すのではなく、彼女が向かう方向としての終点なんだよ。だからこそ to なんだ。at とは感覚が違う。君の言った at についての考察は英語の感覚を鋭く突いていると思うよ」
「はぁ、なるほどぉ！面白いです」
　素直な感動に俺は気を良くした。
「実はそもそも point my finger to her という言い方も可能なんだ。因みに toward もね。でも、at がふつうなんだ」
「そうなんですか？」
「ただ、どれでも同じというわけではないよ。それぞれ感覚が違うんだ」
「日本語で「彼女に指を向けた」でも「彼女へ指を向けた」でもまぁ非文ではないっていうような感じですか？」
「そうそう。近いものがあるね。どっちもニュアンスが違うだろ？」
「はい――ところで先生」
「ん？」
「どうしてさっきから辛そうなんですか？」

「え……？」
　固まってしまった。俺、また何か顔に出てたのか。隠したつもりだったんだが。
「私と話した内容で何か不快に思ったとか……」
「いや、それはない。誓って違う」
「いえ、そういう意味で言ったんじゃないです。私との会話の内容が何か嫌なことを偶々思い出させたとか。ひょっとしてこの空間とか食べ物とか……ナプキンとか」
　最後の一言が効いた。俺は苦笑いしか返せなかった。
「余計なこと言いました……」と俯く。
「大丈夫、俺が勝手に凹んでるだけだから。君のせいじゃない」
「君じゃないです。紫苑です」
「うん……紫苑……ちゃん……のせいじゃないから」
　すると紫苑は微笑んで「はい、じゃあもう気にしません」といった。そうか、この子は鬱じゃないんだ。光を持っている子なんだ。うるさくない程度のルクスで。いや、もっと古風な感じがするな。大和撫子的なところがあるから。そう、むしろカンデラって感じだ。
「君は……じゃなくて紫苑ちゃんは人を元気にする力があるね」
「先生、「ちゃん」は止めてください。くすぐったいです。呼び捨てでいいですよ。あ、別に英語かぶれじゃあないですからね」
　どきっとした。俺はサトラレか。

「じゃあ紫苑……もさ、先生は止めてよ。流石にまずいって」
　紫苑は「ふふ」と笑うと、「じゃあ何がいいですか？水月さん、とか？」
「同僚に呼ばれてるみたいだ……。でもそれが一番抵抗ないかな」
「じゃあ塾外では水月さんかなぁ。やっぱ呼びにくいです。そうだ、下の名前、教えて下さいね」
「……静」
「しずか、さん？」
「そう、水月静」
「へぇ、名字も名前も綺麗ですね」
「そうか？俺は紫苑って名前羨ましいけどな」
「はい、この名前、私も気に入ってます。特別な名前でもあるから」
「ん？」
「なんでもないです」

　時計を見る。もう５時を過ぎた。そろそろ帰さないとな。
　紫苑は察して「まだ大丈夫ですよ」というが、俺は笑って「今日はお父さんが休みなんだろ。「共働き」は通用しないよ」といった。
「あは」といって紫苑は立ち上がった。いまどき「あは」とか言うんだ……。そういや前にそんなこと言ってたやつがいたな。
　ヴェローチェを出る。ここは前払いなんだが、紫苑の顔を立てておいた。
「まさか生徒におごってもらうなんてね」
「授業料、です」
「じゃあ、今度は改札まで送ろうか？」
「んー、まだ遠慮しておきます。次回お願いしますね」
「ん？」
「私、この時間外授業、好きみたいです。水月先生さえ迷惑じゃなければ……また、会ってくれますか？」
「ええと、俺は……いいけど。でも、流石に会社にばれたらまずいよな……」
「川越は止めときましょうね。命がいくつあっても足りないですから」といってくすくす笑う。胸のリボンが揺れる。
「あ、先生。ケータイの番号聞いても良いですか？」
　紫苑が鞄からケータイを取り出す。俺は右ポケットから取り出す。こないだ変えたばかりの木目調の機種だ。俺は番号を告げると紫苑はよいしょという感じで押す。あれ？意外だな。わりとのろいというか……むしろ慣れてない感じだ。
　ややあって俺のケータイが鳴る、ワンギリで。
「登録しといてくださいね」

「分かった」
「あと、メアドもいいですか？」
「うん、多分電話よりはしやすいと思う。そっちのほうがありがたい」
　紫苑はヴェローチェのレシートの裏にメアドを書くと、手渡してきた。
「メール、待ってます。じゃあ今日はこれで。おやすみなさい、先生」
「先生はよせって……」
　紫苑はふふっと笑うと雑踏の中へ消えていった。消えていったのを見て胸がざわっとした。人が消えると今生の別れを想像してしまう。気に入ったころにはその人は消えてしまう。そんな気がしてならない。いつも無くしてから大切なものに気付く……そんな陳腐な不幸が自分を襲う。常にそんな気が……。
　俺は車に乗る。散漫運転もいいところだ。紫苑はどういうつもりで俺と話しているんだろう。まだたった２回話しただけだ。密度は非常に濃いが。
　でも、あのときとは違う。今度は年の差がありすぎる。価値観だって違うはずだ。それに俺みたいなクソ野郎と関わったらまた不幸にしてしまう。
　紫苑を大切な存在と思っていいのか？いや、だめだ。そしたら失うことに怯えて大事にしなくなる。俺はそういう弱い人間だ。大事にしないことで傷つかないための保険をかける。そんな下らない保守のために平気で人を傷つける。俺といちゃ駄目なんだ……。
　だが……だが、反論する俺がいる。もしかしたら彼女が救いになるのではないか。
　バカが、何を言ってるんだ。俺は何か？女子高生に救いを求めてるのか？子供相手に！？馬鹿もいい加減にしろ。急にイラっとした。ドアガラス付近を叩きつける。
「クソッ！俺はなんでこんなにもクズなんだ！」

2006 / 05 / 06

「じゃあ、明日楽しみにしてますね。おやすみなさい」
　そうメールを打ってノートを見て勉強に戻る。少しすると「制服はやめてね(-_-;」と返ってきた。
　絵文字かぁ、私は使わないなぁ。こういうの使ったほうがいいのかな。
　先週からずっと先生とメールをしてる。塾で会ってもお互い知らんぷり。２人になったときだけちょこっと話す。でも、メールはこうして毎日してる。
　池袋で別れて家に帰ってから早速メールを送ってみた。「今日は楽しかったです。ありがとうございました」って。そしたら５分くらいしてから返ってきた。「ちゃんと帰れたんだ、よかった。俺も勉強になったよ」だって。なんだか立場逆じゃない？やっぱり教師って立場を崩さないみたい。
　私はそんなのどうでもいいんだけどな。教師っていう立場であろうとなかろうと。つまり、先生という禁断の相手だから気に入ってるっていうことじゃなくて、単に水月静とい

う人に興味を持っている。

興味……か。多分、嘘だな。これは多分好意。好きってこと。だってずっと先生のことばかり考えてる。前まではアルシェのことばかり考えてたのに。

きっとアルシェへの気持ちは恋愛なんじゃなかったんだと思う。だって私、好きだって言葉から始めて、それから好きだという感情を探し始めたじゃない？事実を作るために心を捏造しようとしてた。しっくりくるわけない。

先生はなんかこう……違う。アルシェはかっこいいし強いし……そういう色々プラスな面ばっかり映った。それが多分いけない。ここがいい、あそこがいい……そうやって良いところを足してくと打算的になってしまう。そんなの商品じゃん。この商品は他の商品と比べてこういうところで性能が良くって……っていうのを足してって、たくさんある商品の中から一番良いのを選ぶ。買うときに背中を押すのは「この商品は良いものだからお買い得」っていう気持ち。

そんな買い物恋愛が正しいの？私はそう思わない。うん、違う。男を比較して一番性能の良いのを選ぶ。それって違う。そんなことしてたらその後の付き合いも、そして別れも同じになる。もっと性能の良いのが見つかったら買い換えたくなるし、古くなれば捨てたくなる。最悪リサイクル法でお金がかかるからって不法投棄したりね。そんな恋愛になってしまいかねない。運命的に出会って求め合ったんじゃなくて、打算の上に成り立ってるんだから。

アルシェには好きだという気持ちを一生懸命理由付けようとした。作ろうとした。私、恋に恋してたからね。理想の彼氏がほしかったから。でも、先生は違った。凄く短い期間だけど、何となくこの人って思った。いいのかな、こんな安易で。そう思うくらい電撃的だった。

ほんと言うと、始めはあまり好きなタイプじゃないって思ってた。男の人っていう意識はなくて、ただの先生。それもあんまり好きじゃない感じ。でも、廊下で無視されて、本屋でまた無視されて、何となく……そう……弱い人だなって思った。人と巧くやっていけない。だからかな、私が大胆に突っ込んでいけたのは。そしてあとは多分、共感。私も先生と同じところがあるから。

それで話しかけてみた。ハッキリ言って半分以上からかうつもりで話しかけた。なのに反応がふつうの大人と違って面白くって、興味を持った。私から逃げようとしてるのが分かった。先生ならもっと明るく対応するはずなのに。でも別に私を嫌ってはいないという。それは半分本当っぽかった。なんていうか……私に嫌われるのを避けていたような感じ。偶にそういう人、いる。自分から予め避けることで人に嫌われるのを避ける人。先生はそういう人に見えた。

そういうの、分かる。でも、間違ってると思う。そんなネガティブな気持ちに付き合わされて逃げられる他人の気持ちを考えるべきだわ。だから、私はきっと教えてあげたかったんだろうな。それで食い下がった。ここで逃がしたら負けだって思った。「私、貴方のこ

と見抜いてるのよ」って感じで話した。
　ほんとはもっと私と話したいんじゃないかって聞いた。だって先生、いっつも凄く孤独そうだから。誰かに構ってほしくて仕方ないような顔をしてるから。でも、それをできるだけ表に出さないようにしてる。要するにウザイ人。最近の女はそう見る。
　多分、先生は人気ない。弱いから。支えが必要な人だから。そしていまの女に人を支えるだけの強さはない。自分に都合の良い、甘えさせてくれる調子の良い男がほしい。征服できる弱気な男がほしい。
　ああいう感じの人は何十年か前にモテたタイプだ。現代人ではない。そんな気がする。とてもじゃないけどいまのどうしょもない女たちには扱えない。でも、私は例外のようだ。多分、私はどうしょもなくないから。強いから、でしょうね。私は弱い男は嫌い。じゃあ先生は？脆いよね、凄く。でも、強い……とても。私はなぜかそう感じてる。
「汚れた原石……」
　ぼそっと呟く。
　どうして汚れちゃったのかな、あんなに。どうして傷付いちゃったのかな、あんなに。先生は急に上の空になることがある。何か嫌なことを思い出しているかのような。
　メールをしていても端々から伝わる。気になったことがあれば紫苑は電話をかける。元々電話のほうが好きだ。メールじゃ意図が良く分からない。先生は電話に出てくれる。偶に車に乗ってるときだったりして、危ないなぁと思う。
　私は何がしたいの？原石をダイヤに変えたい？それって結局打算？そうかもしれない。でも、順序が逆。好きって気持ちが先に出た。そして言葉でその気持ちを「好き」と定義した。逆なの、アルシェとは。多分、これが恋愛感情なんだと思う。
　そして私は先生を変えたい。先生のために。それなら打算じゃない。そう、支えてあげたい。なんでそう思うんだろう。そんなに義理はないよね。じゃあ結局そうするのが心地良いっていう私の都合かな。
　いま、燃え上がるような好意を抱いている。でも、まだ浅い。深くない。まだ先生が私の運命の人って決まったわけじゃない。でも、いまは確かに好き。限りなく先生が希望。
　やっぱり喫茶店で真剣に話してくれて、あ、私と対等に話せる相手がいたって思ったことが始まりなんだろうな。この時点だとまだ他人への好意でしかない。いまはそれが徐々に男性への好意に変わりつつある。そういう段階なんだろうな。っていっても前例がないから本当にそういう方向で流れてるのか分からない。
　こういうときは行動あるのみ。先生が運命の人なのか、それ次第だ。そんなもの試してみないと分からないもの。
　しかし不思議なことがある。どうして先生は偶に自分を卑下したり悪ぶったりするのだろう。表に出さないが、私にはそう感じる。それが不思議。そんなことしても何の得にもならないと思うのだけど。

さて、明日は何を着てこうかな。制服以外を見せるのは初めて。服はいつもお母さんと買いに行くけど、お母さんは私にこれがいいだのなんだのと言わない。私はトレンドはあまり気にしないで自分の好きなものを値段と相談して買う。というか、買ってもらう。お金、ないからね。

お金といえば私はお小遣いをもらってない。必要があればその都度出してもらうというシステムだ。でも、何かあったときのためということで定期入れにはいつも２万円入れている。お母さんとお父さんから１万円ずつもらった。こないだ先生にご馳走したときはお遣いで余った小銭をコツコツ貯めておいたものを使った。

バイトはしたいんだけど、お母さんとしては勉強して大学にいってほしいみたい。それが望みなら付き合ってあげるのが親孝行だと思ってそうしてる。

机から立ち、クローゼットを開ける。空手着や剣道具と隔離されたところに余所行き用の服がある。ずぼらなのか色気がないからか、ここのところ制服ばかり着ているので、久しぶりに着る気がする。

先生はどんなのが好きなんだろ……。好み、聞いとけば良かったなぁ。でもドラえもんじゃないしさ、どんな注文にも対応できるわけじゃない。特に私のラインナップじゃ。うーん、とりあえずパンツとスカートだったらどっちが好みなんだろう。総合的にギャルっぽいのがいいのか清楚な感じがいいのか……。色は暖色か寒色か……。って、私、ギャル系持ってないじゃん……。

あぁ、もう、迷ったら行動よ。

紫苑はメールを送る。「いま電話してもいいですか？」

すると向こうから電話がかかってきた。電話代を気にしてくれているようだ。そんなのいいのに……ってよくないか、お父さんのお金だもんね。

「紫苑？どうかしたの？」

最近、紫苑って呼ばれるのに慣れてきた。向こうが呼び慣れてきたのもある。

「うんとね、明日着ていく服を選んでたんだけど、先生、どんなのが好きですか？」

「あぁ、服か。悪いね、選ばせちゃって。えっと……紫苑は普段、どんなの着てるの？」

制服か空手着……とは言えない。

「えと……色々、かな。あ、でも数はそんなにないです。えっと、スカートとパン……ズボンだったらどっちがいいですか？」

「そうだなぁ、正直言って紫苑を困らせない答えが最優先なんだけどな。でも、そんなこといってたら話進まなそうだから。俺としてはスカートのほうが好きだな。どっちでもいいけど。脚冷えるんだったら全然ズボンでもいいし」

「ふふ……先生の気遣い、ちゃんと素直に受け取りました。じゃあスカートにしますね。えっと、ちょっと待って」

顎にケータイを挟んでがさごそと探す。

「タイトとヒラヒラ系だったらどっちがいいですか？」

「んー、紫苑にはヒラヒラの方が似合うと思う」
「分かりました。ところで、どうしてそっちのほうが似合うんですか？」
　すると明らかに困ったような感じ。私は「どうして」が多すぎる。でも先生は流石教師だけあっていつも真摯に答えてくれる。
「うーん、いまどき貴重な清楚タイプだからかな。ひらひらしたスカート履いて似合うのなんて姫様みたいな感じの子だけだと思う」
　紫苑は電話口ではにかむ。顔が赤くなるのが分かる。
「え？……ふふ」
　どうしても笑いが漏れる。なんだか恥ずかしい。私がお姫さまだって。お姫様なのね？先生から見ればそうなんだ。
「でも、脚冷えないか？」
「じゃあストッキング履いてきますね。上はスカートに合わせた感じがいいですよね。白いブラウスがあるんですけど」
「スカートって何色？」
「白っぽい……青、みたいな？ちょっとヒダになってて」
「へえ、可愛いだろうね。見てみたい。しかしそれだとストッキング黒いのは合わないかもね」
「そうですね。もうそんなに寒くないし、素足で平気だと思います。先生、ありがと。服選んでくれて」
「いいってそんなの。じゃ、明日気を付けてね」
「はい、おやすみなさい」
　私は先生が電話を切るのを確認してから切った。ケータイは家電に比べてプツっと切れる点で情緒がない。
「ふふ……私がお姫さま」

2006 / 05 / 07

　ジュンク堂も課外授業の待ち合わせ場所に使われるばかりではいたたまれないだろうから、俺は少し貢献することにした。８Ｆで英語学関連の本を取ると、１Ｆでレジを済ませた。
　濃い緑色の袋に入れてくれる。ジュンク堂の袋は変わっている。そもそも色の付いた袋というのが変わっている。ふつうは白だ。他には……。
　チラっと後ろを見る。マツキヨが信号の向かいにある。
　そうだ、あそこは黄色い袋だった。薬局か……。女と薬局を掛けるとゴムしか連想しないのはなぜだろう……。いや、考えるな。紫苑は違う。あれは生徒だ。
　ふぅと溜息をつくと、真下に紫苑のきょとんとした顔があったので驚いた。

「お、びっくりした……」
「おはようございます、先生。あの……ぼっとしてましたね。やっぱり知らんぷりするときとは顔が違うんだなぁ」
　などと言っている紫苑はいつもと様子が違った。黒系の制服しか見たことがない俺からすれば白系の服を着てきたのは見目新しい。なるほど、これが昨日言ってた服か。可愛らしいもんだ。見事に俺の好みである。こういう服を選ぶってことは自分が可愛いっていう自覚があるんだろうな。でも、大人しめな服だ。男に選んでもらった感じではないな。俺の好みとしてはもう少しハデに可愛い系なほうがいい。多分、紫苑の手持ちの中じゃこれが最大級に男に媚びた服なんだろうな……。いや、俺に媚びる必要なんかないか。
　ん？でも、だったらなんで着ていく服なんか聞いてきたんだ？やっぱり気に入られようとしてるのか？でも、課外授業だよな、飽くまで。生徒と付き合えないことくらい分かってるはずだが……。
「それ、昨日言ってた服？」
「はい」といってスカートの端を軽くあげ、ふわふわさせる。仕草が可愛い。
「あ、先生、何買ったんですか？」
「英語学関連。あとで見せるよ」
　紫苑は嬉しそうに微笑んだ。多分、自分が本を紹介されるのに値する人物だと認められていることが嬉しいんだろうな。やはりそのあたりがまだ子供だ。いやまて、そもそも本当に子供なんだよな。高３だから……ええと。
「そういえば紫苑っていまいくつなの？」
「んー、先生も教えてくれますか？」
　俺は苦笑いして「教師特権で入学願書みちゃおっかな」と言うと紫苑は「アンフェアー！」といって少し怒った。蛍もそういえば始めは俺のこと小突いたりしてきたっけな。変な言い方だが、ああされるのが心地よかった。
「それはそうと、どこに行く？」
「お昼前なんで、まだ食べてないんです」
「じゃあどっか食べに行こうか」といって俺は出口へ促す。
「あの……割り勘って言ったら生意気ですか？」
　困る質問だな……。
「うーん、紫苑ってバイトしてる？」
　首を振る。さぁ、どうしたもんか。相手を立てようとするとこれは言いにくいんだが。
「そしたら俺が出すよ。そのほうが俺も気が楽だし」
「でもあの……お小遣いみたいなものの中からやりくりするんで」
　紫苑は食い下がってくる。親の金だろと思うが、そういうとプライドを傷つけるだろう。
「そっか。じゃあ紫苑の気が休まるほうがいいね」
　すると紫苑はにこりとした。ジュンク堂を出てサンシャインへ向かう。

「そういえば、先生の年は？」
「ん？いくつに見える？」
……俺は親父か？
「20 台の真ん中くらい……ですか？」
「そう、ぴったし 25。紫苑は？」
「私、11 月 30 日生まれです」
「じゃあまだ 17 か」
おいおい……。８つも違うよ。35 と 27 ならいいんだが……。これは流石にまずいな。でも、話が合うんだよな、この子とは。年齢なんか気にしちゃいけないのかな。
「先生、いま「まずいな」みたいに思いませんでした？」
どきっとする。やはり俺はサトラレか。
「いや、凄い差だなって思って」
「でも先生と生徒にしては近いほうですよ？」
そういう見方もあるか。塾の講師は若いからな。
東急ハンズ横のエスカレータを降りて地下からサンシャインへ入る。直進するとミオミオというパスタ屋がある。
「ここの振るパスタってのが結構うまいんだよ」
「へぇ、振るんですか？」
「そう、シェイクみたいに。透明な容器の中にパスタと具とソースが入ってて、それを客側がふるわけ。色んなのがあるけど俺はこのサラダのがお勧め」
「じゃあそれにします」
「とりあえず俺がまとめて出すけど、いい？」
「はい」というので買い、少し待って隣接している休憩コーナーへ移動した。
紫苑は物珍しそうに容器を観察して、中身をよく見てから振った。
「これ、どれくらい振るんですか？」
「もう十分だよ。溶ける溶ける」
俺が笑うと紫苑はビクっとした「え、溶けちゃうんですか？」
いや、ほんとに溶けるわけないだろ。面白い子だ。
「あ、おいしいです。うん、おいしい！」
「だろ？気に入ってもらって何より」
俺は脚を組んで座る。紫苑は暫く無言で食べてた。本当に腹が減ってたんだな。というか、美味そうに食うなぁ。そういえばあいつらも食べてるときは幸せそうだったな。女ってそんなもんなんかな。
「先生、それだけで足りるんですか？」
「え、ああ、まぁね」
「……もしかして先生って痩せてるほうですか？」

突然すまなそうに聞いてきた。俺は少し頬を膨らませて頷く。
「うん。でも体質だから。食わないからって言われるけど、違う。食っても駄目。むしろ腹痛くなって終わるから。多分、これが俺の適正なんだよ」
「60 くらいですよね」
「そうだね」
「これ……凄い嫌な話題ですか？」
「うーん、もう諦めてるけどね。昔は随分気にしてたけど。あの……嫌だって思ってるわりにはわりと突っ込むね」
「ごめんなさい。あのね、先生、頬を押さえるでしょ。ガラスとかに顔が映ったときも頬を気にしてるから」
へぇ、そんなの見てるんだ……。凄いな。よく見てるな。
なんとなく気分が良くなっていくのを感じた。
「紫苑もスマートだよね」
「え、smart ですか？」
「はは、それもある。いま俺が言ったのは slender のほう」
「ふふ。はい、40 キロ台です」
「女子高生って結構太ってるっていうか……そういう時期だよね」
「みたいですね。特に脚が。酷いと油みたいの浮いちゃったりするみたいですよ」
「そうなんだ、友達とか？」
「いえ……友達っていうか。聞いた話ですけど」
なんだろ……紫苑はあまり友達がいないのか？そういえば塾でもいつも一人だな。そろそろ話し相手が見つかってもおかしくないころなんだが。そもそも現役生の場合、友達と一緒に入学することも多いんだがな。
「あの……私、友達いないんです」
「そう……なんだ？意外だね」
「意外ですか？本当に？私みたいなのって女友達できそうですか？先生……」
「あ、いや……。まぁ、ふつうの子とは合わないかもね。正直にいって傷つけたくないんだけど、紫苑は良い意味で抜きん出ていすぎるんだよ。見た目も頭も。鼻持ちならないんじゃないかな。精神年齢も上だから、多分年上の女のほうが付き合えるんじゃないかな。大学生とか」
「他に原因、ありますか？」
「原因……ねぇ。あとは、話題とか？生徒がするような話題、あまりしないもんね。俺には好ましいんだが。なんにでも真剣に取り組んで考えるとことかも。ふつうなら面倒ってことで考えもしない。でも、それは紫苑の長所だよ」
「長所……。じゃあ、私が悪いんじゃないのかな」
「悪い、か」俺は真剣な顔つきになった。自分でも分かる「全く悪くないね。全く、だ。

教師の台詞としては最悪だが、低いレベルに合わせる必要はない。俺はさ、高尚なものが本当は好きなんだよ。下らないものは願い下げだ。テレビだ芸能人だ、そういう低俗なのはね。疑問に思ったことを調べないとか、そもそも疑問に思いもしないとか、そういうのも良くないと思ってる。だから紫苑みたいな人は尊敬できるし、そのスタンスを保つべきだと思う。返答に戻るけど、紫苑は悪くなんかないよ。このままでいい。上辺だけの友人は減る。だけど本物が出てくる。俺自身、そうやって友人を選んでる。押し付けがましいかもしれないけど」

　紫苑はじっと眼を見てきて、にこりとして頷いた。

「ありがとう。勇気づけられました。先生、真剣だったね。その顔、好きですよ」

「うん……そう、か。いや、おためごかしじゃないって伝わって良かったよ」

俺はパスタを食べる。紫苑は休憩コーナーをぐるっと見回す。そして少し沈黙してから、おずおずと言い出した。

「ふだんは誰と来るんですか？ここ」

「え……いや、特に」

「でも、ここ、女の人ばかりですよね。男の人が自分で来るところじゃないと思う」

　いいとこを突くな、本当に。

「まぁ、確かに女性の紹介ではあったが。いや、紹介というか偶々見つけて入ったというか……。元々ここはたこ焼き屋でさ、そこで良く食べてたんだよ。それがここに変わって。で、入ってみたんだ」

「その女の人と？」

「まぁ、うん」

「そっか……。じゃあここは私で塗り替えですね」

　食べ終わって紫苑は容器をテーブルに置く。

「え？」

「これだけじゃお腹空きますね。何か買い足しましょうか？」

「そうだね。でも紫苑って甘いものダメなんだっけ？この辺りアイスやクレープばっかなんだけど」

「甘いのがダメっていうか、虫歯になりたくないんです。あぁ、でも先月からいいやって思ったんですけど」

「そうなんだ、じゃあそこにアイスあるから行く？」

「はい」といって立つ。俺はアイス屋に案内し、ブドウ味のとメロン味のを買った。店のベンチに横並びに座って舐める。

「そういや、先月から甘いもの食べてもいいって言ってたけど、何か心境の変化でもあったの？」

「はい。万一虫歯になっても大丈夫だって思ったんです」

　紫苑はふと考え込み、真面目な顔をした。その後、俺をチラチラと見てきた。様子を伺

うような感じだ。
「どうかした？」
「あの……変な話してもいいですか？」
　いつもじゃん。
「うん、何？」
「たとえばある日突然、自分がファンタジー小説みたいな世界に連れてかれて、その世界を救えってことになったら……って考えたことってありませんか？」
「あぁ、中学くらいのときそういうのが流行ってたからよく読んだな。うん、俺が主人公だったらって考えたことはあるね」
「もし、その世界が中世ヨーロッパみたいなとこだったらどうします？虫歯になってたら医者がないかも……」
「あぁ、そうだなぁ。それに、常備薬を飲むような体も困るなぁ」
「……」
「……で？」
「……いえ、それだけです」
「いまの、別に変な話じゃないけど……」
「じゃあ変な話になるように結論付けてください、先生」
「え？面白いこというね。えと……考えられるとしたら、紫苑がたとえばほんとにその物語の主人公で、だから虫歯にならないように気をつけてた、とか？」
　紫苑は斜めになってこちらに顔を近付けてくる。
「かなり、そんなところです」
「つまり、主人公になりたかったけど、流石にそれはないだろってことで諦めて、甘いものを食べるようになったと」
　しかし紫苑は首を振る。
「もし、ここからはもしもの話ですけど、そういうのをちっちゃい頃から夢見てて、それが実現したらいいなって思いません？」
「うん、思う。もしそうなら羨ましいね。俺もそういう夢を持ってみたいよ」
「持ってみたらどうですか、先生？思いって通じるものですよ。努力と根性が必要ですけど」
「そうなんだ？」
「はい！待ってるだけじゃダメなんです。頑張らないと、願いは来てくれないんです」
「……強いな、紫苑は」
　俺はくしゃっとアイスの包み紙を丸め、ベンチを立つ。ゴミ箱に紙を捨てると、紫苑を見つめた。
「ところで、今日の課外授業でまだ一回も授業の質問を受けてないね」
　紫苑は立ち上がって紙を捨てると、俯き加減で眼をそらした。

「だって質問しなきゃ今日はデートになるでしょ？」
「……え、何？」
「いや。２回も言いませんもん」

　紫苑はたたっと奥のほうへ小走りで遠ざかっていった。俺は追いつかない足取りで後ろを歩いていった。
　今の言葉はそのまま受け取るべきなんだろうか。考えるまでもないか。そのままの意味だよな。そりゃまぁこうして２人で何度か会ったりメールしてるってことはそういう気があるのは分かるけど、まずいだろ。第一、俺が一体何をした？何か気に入られるようなことをしたのか？
　ゾクっとした。突然、不快感に襲われた。
「紫苑」
　気付いたら呼び止めてた。真剣な顔に、紫苑は顔をこわばらせる。あのふざけた調子の言い方は照れ隠しだったのだろう。
「あのさ、特別な理由もなく相手を好……気に入るってことは、特別な理由もなく嫌いになれるってことなんだ。この意味、分かる？」
　すると紫苑は一瞬眼を閉じて首を傾げた。
「あのね、先生。いま私、「俺は教師だから」って言われるのかと思ってました。それ言われたらヤだなって……。でもね、それ聞いて、なんかこう、ほっとしました」
　紫苑はとことこ歩いて近寄ってくる。30cm もない。息がかかる距離で首をくいっとあげて、じっと見つめてくる。
「その意味、よく分かります。ううん、その言葉の実感はできません。私が分かるのは、それが先生を縛ってるんだなってことです」
　紫苑の息、甘いメロンの香りが鼻をくすぐる。
「俺を縛る？」
「先生、誰に裏切られたんですか？」

　サンシャインの地下で俺は黙って小さな女子高生と相対してた。この不思議な女子高生は人の心にずけずけと入ってきては、俺にサトラレの自覚を与える。
「それって俺がいま言うべきことかな」
　紫苑は首を横に振って一歩下がる。
「それを聞くには早すぎたみたいです。ごめんなさい、私、何も経験がないからタイミングとか分からなくて」
「いや……」俺は出口のほうへと歩いていく。紫苑は黙って付いてくる。「聞くのは野暮だからわざわざ聞かないけどさ、紫苑の俺に対する気持ちは何となく分かったよ。俺は鈍感なほうだけど、かなりハッキリ伝えられてるから」

「はい」
「でもさ、なんで俺なの？俺、何かしたっけ？そんなに付き合いがまだ深くもないし」
「じゃあ、これから深くしていきましょう。時間かけてでも」
　俺は黙って歩く。サンシャインを出る。長いエスカレータを上ってサンシャイン通りへ出る。
「先生？」
「でもさ、俺の気持ちもあるし」
　紫苑はすると急に立ち止まる。俺は振り返る。
「でも……気があるから来てくれてるんですよね？本当に時間外授業なんですか？」
「そういうことじゃないよ。うん、気はあるよ。ある。紫苑は可愛いし頭もいいし、素直で……俺のタイプだと思う。でもほら、まだあまり時間経ってないよね」
「はい……先生の言うこと、分かります。だから私も付き合いの分だけ先生に気があります。無鉄砲な女子高生じゃないんです。私、ほら、ふつうと違うじゃないですか」
　歩き出す。雑踏がうるさいので紫苑は声を届けるために近付いてくる。
「勝手に熱上げて振り回すようなこと、しないです。私、わりと冷静です」
「そっか……」
「あのね、先生。私、運命の人って信じてるんです」
「運命ね。もしかしてその候補になってるの？俺」
「はい、そうなんです。でもまだ運命の人じゃないんです。仰ったとおり、候補なんです。先週も候補。昨日も。でも、候補なんて思ったの、２人目なんです。短い人生ですけど」
「１人目は違ったんだ？」
「はい。もしかして好きかもって思った……先生と同い年の人です。完全に偶然ですけどね。さっき年聞いたばかりだし。でも、好きって気持ちが出なかったんです。だから彼に対しては違うんだって思ったんです。私、恋愛には慎重なんです、とても。決めてるんです。私は生涯一人の男の人としか付き合わないって」
「それで運命の人探しか。その候補にあがってるってのは光栄だな」
　俺は心中で苦々しい顔をした。女のそんな台詞は欠片も信じていないからだ。一時の気持ちを永遠であるかのように考える女という生き物は馬鹿だ。紫苑も所詮は普通の女か。
「運命の人っていう発想は女の子には多かれ少なかれあると思うんですけど、私も同じですね。ほんとは軽蔑してません？」
「え……いや」
「してますよ。顔に書いてあります。だから言い訳させてくださいね」
　俺はうるさい通りを避け、ホテル街を抜けて横道に入っていく。勘違いさせたくないのでホテルの看板には一切目をやらない。
「私が他の子と違うのは、しつこさです。私、運命の人に出会ったら、絶対その人を自分の物にします。相手にとっても私は運命の人なんで、その点は難しくないと思います。気

が合うはずですから、出会いさえあれば。そしたらね、絶対捕まえて離さないの」
「絶対？」俺は振り向いた。「軽々しい言葉に聞こえるな、悪いけど」
　ちょっと棘のある言い方だった。紫苑はその場に立ち止まって俺を見返した。
「はい、絶対です。先生、私の背中の後ろの人に話しかけないでくださいね」
「え？」
「私を通して誰にその言葉をぶつけてるんですか？ここにいるのは私よ」

　俺は黙った。紫苑は歩き出す。近くに公園がある。周りはホテル街だ。噴水の近くのベンチに座る。
「紫苑の強さは分かったよ。顔を見れば真剣さが分かる。嘘は言ってないって分かる。ただ、ほら、俺は候補でしかないし」
「ごめんなさい」
「え？」
「候補なんて言い方、偉そうですよね。まるでこっちが選んでやる、みたいな。そんなつもりはないんです。あのね、先生。先週よりも昨日よりも今日のほうがずっと貴方に運命を感じるの。こんな気持ち、いままでなかったんです。初めてだから自分でもよく分からない……」
「そうか。どういうところに運命を感じるの？俺としては心当たりがこれといってないんだけど」
「いまはまだ言葉にならないんです。私も先生が言うように早いと思うから。自分でも会って３ヶ月は早いって思ってるんです。でも未来の言葉がどんどん先に出てきちゃうんです」
「そうか……。そういう気持ち、分からなくもないよ。俺も心当たりあるしね。ただ、ゆっくり冷静に考えてよ。俺はね、紫苑は俺とあまり付き合ったりしないほうがいいと思う。俺は紫苑が思ってるような人間じゃないよ。もっと良い奴がいる。同級生でも少し年上の奴でもさ」
「良い悪いじゃないんです。男の人は電気屋さんの売り物じゃないんですから」
「なるほどね。でもまずは焦らないでゆっくり知り合っていけばいいと思うよ。紫苑は勢いに任せていい加減な行動を取るような軽率な人ではないと思うし。それにほら、運命かどうか見極めないと、でしょ？」
「そうですね。私、のぼせてるのかな。こんな早く話を進めようだなんて。経験がないと焦るものなのかなぁ……。じゃあ、巻き戻しますね」
「巻き戻す？」
「はい、いくつか聞くべきことを先に聞いてなかったので。」
「なるほど」俺は腕をつい組むが、悪いと思ってすぐに解く。この対抗的なポーズは特に女に不安を与える。紫苑は少し言いづらそうに、しかし目はまっすぐ俺を見て言った。

「先生、いま誰か付き合っている人いますか？」
　来た……。ここには巻き戻さなくていい。これは聞かれたくなかった。
「……いや、彼女、いないけど」
　紫苑はにこりとした。でもこれで終わりじゃない。俺は初めて紫苑に触れた。肩に手を当てて、座るように促した。
「確かに３度目の課外授業には適切な質問だな。でさ、ドラマなら４話目でバレるべきことを先に告げようと思うんだ。紫苑をこれ以上傷つけたくないから。いままでは生徒としてみていたが、こうなったら言っておかなくちゃな」
「いまでも生徒としてですよ。まだ、いまのところは」
「うん、そうだったね。じゃあ、運命だった場合を想定して、これを先に言っておくよ。あのさ、確かに彼女はいない。恋人もいない。でもな……」
　紫苑は肩を落とす。
「好きな人がいるんですか？」
　俺は首を横に振った。
「真面目な話だ。悪いが大人はもっと事情が複雑なんだよ、紫苑。……俺は結婚してるんだ。子供もできる」
　紫苑はきょとんとした顔で俺を見てくる。流石に驚いたようだ。これで運命は剥奪だな。傷付かなきゃいいが……無理だろうな。
「好きな人は……いないんですか？」
　素っ頓狂なことを聞いてくる。
「結婚してるということのほうが問題だと思うけど」
　静かに首を振る紫苑。
「心が繋がっていない奥さんより、好きな人のほうがよっぽど手ごわいです」
「心が？」
「怒らせてもしょうがない言い方しました……。でもね、私、結婚なんて聞いても驚かないですよ。だって、先生の顔見てたらそんな生活観や愛情、ないもの」
　俺は何も言い返せなかった。
「結婚生活、もう成立してないんでしょう？」
　何と答えればいいのか分からない。
「紫苑、今日はこれで帰ろう」
「え……いやです。もっと話していたい。あ……ううん、やっぱり帰りましょう。私、先生の心に足を踏み入れすぎました。時間を置かないと、泥沼ですね」
　紫苑は立ち上がる。そういわれると急に別れたくなくなる。だが、言い出したのは俺だ。
「送ってくよ」
「お願いします。でも、改札じゃなくて駅までにしてくださいね」
「どうして？」

「改札は次回にしたいから」
　紫苑はすがるような眼で見てきた。俺は女のこういう眼に弱い。いや、強い男なんて居やしないだろう。
「分かった。とにかく、その運命とやらを見極めることから始めよう。紫苑にはたくさん時間がある」
　紫苑は先を歩く。
「多分、もうとっくに見極めてるんだと思います……」
　俺は聞こえない振りをした。そのまま無言で東口まで歩く。
「じゃあ、また授業で」
「はい、先生」
　紫苑は何か言いかけてやめた。俺はそのまま背を向けて去った。

　車で自宅に帰る。授業計画を立て、風呂に入る。今日のことばかりが思い出される。呪いのようにつきまとっていた蛍の幻影が薄れていく。そう、蛍どころじゃない。いまはもう紫苑で頭がいっぱいだ。
　正直、紫苑はいい子だ。年の差もあまり感じさせない。付き合えるなら付き合いたい。でも、またあんなことになったらと思うと……。
　あぁ、俺は紫苑に好意を持っている。俺の全てを見通したかのような――いや、かのようなじゃないな、全て当たってるから――あの娘のそんなところが好きだ。
　紫苑はなぜ俺を好きになったのだろう。何かの拍子に自分が俺に理解されたと思って好きになったのかな。蛍のように。
　風呂を上がったら「read only」と書いたメールが入ってた。紫苑だ。中には一言。
「私でその人の思い出を上書きしてあげる」
　俺は苦笑した。小娘が何を分かった気でいるんだ。
　いや、きっと全部分かってるんだろうな。

2006 / 05 / 12

　私立北城高校。
　６時間目の授業が終わるとまもなく担任が現われ、HR が行われる。それが終われば解散だ。今日は掃除当番ではないので、その時点で学校は終わる。まして部活もやっていないので完全に帰宅だ。
　クラスは 41 人。しかも特進クラスだ。HR が終わり、みな退席する。忘れ物を確認し、教室を出る。
　相変わらず一人だ。高３になってクラス替えになり、より孤独になった。２年までは会えば話す程度の同級生がいたのだが、クラスが変わってしまい、それさえなくなった。尤

も、このクラスの連中は受験に主眼があるので、あまり人付き合いが盛んでない。そういう意味では紫苑にとっていやすい空間だ。
　教室は２Ｆにある。廊下を歩いて階段を下り、ロッカーへ行く。上履きに手をかけたところで、ふいに一人の男の子に「あの……」呼び止められた。
「はい？」といって振り向いた。立っていたのは同じクラスの男の子だった。確か塾でも同じクラスだ。名前は覚えてないけど、クラスの女子に人気のある……。あぁ、ほら、俳優の速水もこみち？あんな感じの人。爽やかスポーツマンみたいなイケメン。話したことは殆ど無い。クラスの用事で何度か話しかけられたくらい。私は「うん」とか「そうだね」とか「はい」とかばっかりだったから、悪い印象を与えてると思う。
「あの……ちょっと時間あるかな？」
「え？」クラスの連絡事項か。面倒。でも顔には出さない「うん、時間ならあるよ。私、暇だし」
「よかった。ちょっとここじゃ話しづらいっていうか……」
　もごもご喋る。思わず「え？」と聞き返してしまう。子供ってこんなものだろうか。もっとハキハキしたらどうかなぁ。それに顔があどけない。若いというより、頼りない。どうして他の女子はこの子がいいんだろ。多分自分と同じレベルだからかな。そっか、私はアルシェや先生と同じくらいの精神年齢なんだ……。
　彼は私を空いてる教室まで連れて行った。ふいにアルシェを思い出した。アルナで２度目に会ったとき、私はアルシェを警戒してた。だから微妙な雰囲気の会食になってしまった。でもアルシェは気を使ってくれて、何かあったらいつでも逃げられるようなオープンなカフェテラスに連れてってくれた。人目のあるところを堂々と通ってくれた。おかげで私は不安を感じなかった。
　でも、いまは違う。彼はできるだけ人目を避けている。そして誰もいない教室へ私を連れて行った。ふいに、ここで誰かが待ち伏せしてて、男の子みんなに襲われたらどうしようという不安が起こる。まともな女だったら私と同じような不安を感じるのではないか。不安が気持ち悪さに変わった私は教室の前で立ち止まった。
「話ならここでもできると思うけど……」
「そ、そうだね」
　もじもじする少年。なんだろう。変な企みはない……みたいだけど。
「あのさ、その……」
「……」無言で促すように頷く私。
「今さ……今、誰か付き合ってるやつとかっている？」
「え？」
「ごめん！急に」急に声が大きくなる。
「別に……いないけど」
「そ、そうなんだ……。あのさ、じゃあ好きなやつとかって」

あぁ、そうか。やっと分かった。この子は私が好きなのか。でもなんで？話したこともろくにないのに。好かれる覚えなんてないんだけど。

あ、そうか。先生が私に感じてるのはこれに近いものがあるんだ。この子の私への気持ちと私のこの子への気持ちはあまりにアンバランスすぎる。先生と私の間にある天秤もこんな風にアンバランスなんだ。それが熱の違いなんだ。

「好きな人は……いる、かな」

すると少年は暗い顔になって「そう……そっか」と言った。

「ごめんね……」

私はぺこっと頭を下げた。

「いや、別に。ちょっと聞いてみたかっただけだからさ」

「うん……ごめんなさい。じゃあ」

そういって去ろうとしたところ、男の子が背中に声をかけた。

「あのさ、もしかしてそれって塾のやつ？」

「え？」と振り返る。

「英語の教師いるじゃん。もしかして、あいつ？」

「……誰？」

「塾のだよ。水月。休み時間とかわざと２人きりになろうとしてない？」

私は否定するように笑ったけど、心中穏やかでない。てゆうか覗かれてたのね……。

「質問をね、他の人に聞かれるのが恥ずかしいの。それだけ。私、あの人の名前さえおぼろげなんだけど。てゆうか、あの人結婚してるらしいよ」

「え、そうなの？」歩く私の後を付いてくる。

「女子の噂は早いからね。まぁ、本当かどうかは知らないけど、別に興味もないわ。受験に役立つことだけ教えてくれればそれで良いもの。だから愛想良くはしてるけどね」

私はロッカーで上履きを脱いで、ハルタのローファーに履き替える。

「……ほんと、ごめんね」

「もういいよ……俺こそ、ごめん、変なこと聞いて」

そう言うと彼は去っていった。

私は上福岡行きのバスに乗ると、ケータイを取り出してメールを打つ。まだ心臓がドキドキしている。男の子に告白されたから？違う。

「先生！いまクラスの男の子に告られちゃった。それが塾の同じクラスの子なの！好きな人がいるって言ったら諦めてくれたけど、それって先生のことか？って……。ばれてるのかなぁ？？噂が立たないようにごまかしておいたけど、塾ではあまり話さないほうがいいですか？」

すると暫くしてから返事が来た。

「いま会社なんだけど、事情は分かった。どの生徒？まぁどうでもいいか。誰だろうと気

をつけないとな。別にやましいことはないけど。それでも李下に冠を正さずっていうし」
　バスを降り、駅まで５分ほど歩き、ホームでメールを返す。
「名前、忘れちゃった……。速水もこみちみたいなモテそうな子。私、ちょっと苦手……。塾ではなるべく先生と話さないようにしますね。私、課外授業でいくらでも聞けるし（えへ）」
　うわ、私、「えへ」とか書いてるよ……！すごーい、すごーい。昔の自分が見たら「何やってるのよ貴方、自分のにやけた顔見てみなさい」って突っ込みそうだわ。私って馬鹿かも。
　その後、メールは返ってこなかった。なんだ……。仕事で忙しいのかな。
　紫苑は電車に乗る。ぼーっと中刷りを見ながら考えに耽る。
　私、結局先生に気持ちをハッキリ言ってないな。運命かどうか見極める……。もう、運命だって体が言ってる。でも、確かに早い。早計すぎる。それも分かってる。それにバーゲン品じゃあるまいし、慌てて取る必要もない。本当に運命だったら逃げてはいかない。逃げれば運命ではなかったというだけの話だ。でも、日々メールをしたり電話をしたりで気持ちはどんどん深まっていってる。
　いま、私が自分に課した宿題は、なぜ先生のことが好きなのかハッキリ伝えるということだ。理由もなく好きになられることを気味悪がっているらしい。多分、嫌な思い出を与えた例の人のことがトラウマになっているんだろう。

2006 / 05 / 14

　最近、日曜になるとジュンクにいるな。もはや逢引の場所と化している。今日の待ち合わせは少し早い。11 時だ。少しぶらついてから昼飯を一緒に食いたいそうだ。まぁ 10 時じゃ早いから、ちょうどいい時間だろう。
　俺は少しデート寄りの服を着てきた。相変わらず紫苑はメールと電話をくれる。俺から出すことは殆どない。しかし、何が良くて俺なんかといるんだろう。こないだだってイケメンに告られたそうだし。ふつうに考えて同世代のほうがいいんじゃないのか。そりゃ金は俺のほうがあるに決まってるが、紫苑は無理にでも割り勘にしようとするし、家だって金持ちのようだ。
　教師と付き合いたいってことか？シチュエーション好き。でも、そういう感じでもないんだよな。俺が教師であることなんかどうでもいいって感じだ。むしろ邪魔な壁くらいに考えてる感じ。禁断の恋にあこがれてるっていう迷惑な話でもなさそうだ。
　多分、蛍とは違うんだろうな。ガキのくせに冷静というか、好き嫌いが２元のスイッチじゃなく、アナログレバーなんだろうな。音量調節ダイヤルみたいなさ。好きの方向にもダイヤルがあって、それが徐々に回されてるんだろう。駆け出しが早かったが、最近はゆっくりだ。

あの調子だと数回の逢引だけで付き合えと言われかねなかったが、紫苑はそれ以上早まらなかった。きちんとメールや電話やこうした逢引を重ねて俺や自分の緊張というか抵抗を弱めてる。そんな感じだ。付き合ったことがないというのは本当だろう、あの様子じゃな。でも、押して引いての調節は未経験とは思えないくらい上手い。多分、人のことをよく見てるからだろうな。

そういえば俺、いくら持ち合わせがあったっけ。財布を確認すると５万ほど入っていた。多くもなく少なくもない。別に５万使うわけじゃないが、何かあったときにこれくらい持ち合わせがあると便利だ。

しかし蛍もそうだったが、紫苑も金がかからない。何も要求してこないし、無駄に高そうなところはさりげなく避ける。まぁ割り勘だから小遣いを圧迫するということもあってのことだろう。ホテルに入るわけでもないし、１回会ってもせいぜい軽食代だから、そうだな……千円くらいか。ちょっと考えられないな。少しは遊びに連れてってやるか。いつもサテンで話してばかりじゃつまらないだろうし。

「先生！」

そんなことを考えていたら紫苑が呼びかけてきた。メールで電車を１本逃したので少し遅れるとあったが、思ったより早いな。どうも走ってきたようだ。うっすら汗をかいてる。

「紫苑。あれ、意外と早かったね。走ってきたの？」

暇つぶしに読んでいた『言語学フォーエバー』を書棚にしまう。

「はい。待たせちゃいけないって思って」

「別に大丈夫だよ」

すると紫苑は近寄ってきて、首を振って笑った。

「ううん。ほんとは早く会いたかったから」

俺は目をそらすと、小声で「逆にほんとに会いたくなくなったら、こちらがいくら追っても逃げ続けるんだろうけどな」といった。

「え？」

「いや……」

「先生、何読んでたんですか？」

「これ……千野栄一」

「あぁ……亡くなっちゃいましたね」

「よく知ってるね」

「金田一春彦さんも……巨匠が減っていきます」

「うん」と俺は溜息を吐く。

金田一春彦の『日本語』には随分感銘を受けたものだ。新書だったから読みやすく、ちょうどいまの紫苑くらいの頃に読んだが、面白かった。いまの言語学で見ればちょっとおかしいところもなくはない。でも、登竜門としては格別だった。

「ところで、そのスカート可愛いね」

「あまりひらひらしてないですけどね」と裾を持ち上げる。
　今日は透けた水色のカーディガンに白いスカートだ。似合ってる。
「私、こういう服あまり持ってないんです。だから買いに行こうと思ったんですけど、どんなのが好みなのか分からなくて。あの……よかったら選んでもらえませんか？」
「いいけど、服って普段どうやって買ってるの？」
「お母さんと一緒に。私、お小遣いとか特別にもらってるわけじゃないですから、一緒にいったときに買ってもらうんです」
「そうなんだ。じゃあ今日は俺がだしとこうか」
　すると紫苑は驚いて手をぱたぱた振る。
「大丈夫です。ちゃんと持ってきましたから。お年玉とか、貯まってるのがあるんです」
　お年玉……ね。そんなこというのは蛍くらいのものかと思ってた。
「そっか。じゃあ、まずは服見に行こうか」
　課外授業の名目は最近消えてしまっている。まぁ、紫苑と話していれば自然と学問の話題になるから間違ってはいないんだが。
　しかし服といえばどこか……。ブクロは意外と服屋がないんだよな。ジュンクの前はリーバイスショップだし、サンシャイン通りには服屋はない。男物と妙なブランド屋はあるが。あ、横道に女物の格安店があって蛍が見てたな。確かチェーン店だ。でもあそこはギャルが多いからな、それっぽい服ばっかだったし。西口は繁華街だが、一歩間違えるといかがわしいほうに入ってくし……。
「じゃあ、またサンシャインかな。もしくは東口のパルコとか。多分、このどっちかだと思う」
「詳しいんですね」
　え？むしろ詳しくないことをいま自覚していたんだが……。
「まぁ、他にもあるにはあるよ。東口出て左側は西武で、服が軒並みショーウィンドウに並んでるからね。ただ、あそこはデパートだから高いよ。サンシャインやパルコのほうがカジュアルだな」
「その３つを順番に並べるとどうなりますか？値段っていうか、クラシカルなオーダーで」
「ええっと……」面白い聞き方だな、相変わらず「西武、サンシャイン、パルコ、かな。ああ、パルコ前の丸井を入れればこれが次点だけど」
「じゃあ、サンシャインにします」
　目的地が決まって歩き出す。
「うーん、ほんとは原宿がいいんだけどね、服なら」
「渋谷とかじゃなくてですか？」
「マルキュー？あぁ、ビル丸ごと女物だったな。ブランドの看板の波だったよ。ブランド、好き？」
「ううん、全く。興味ないです」

「なら原宿のほうがお勧めかな。竹下だけど。あっちのほうが大衆受けっていうか……安くて良いものがある。渋谷のほうが早い話、偉そう」
　すると紫苑は笑う。
「でもさ、女子高生だったら俺より詳しいんじゃないの？」
「私、服とかあまり興味ないですから。そういう子、いますよ。塾にもそれなりに」
「あぁ、そういう生徒、いるなぁ」
　大抵は服を必要としないガリ勉タイプだが。

　暫くするとサンシャインに着いた。地下のアルパに入るとそれなりに女物が並んでいる。店舗がいくつも入っているが、店ごとにカラーがまるで異なる。East Boy という店があるが、こんな名前でも女物だ。ここは少し変わっている。なぜか女子高生みたいな格好の服が置いてある。
「これ……なんの意味があるんだろうな。しかも客、女子高生だし」
「うーん、でも、ここで売ってる小物、結構学校で見覚えありますよ。靴下とかも」
「あぁ、そういえば生徒でいるな。俺からすれば日本人がわざわざ外国行って和食食うような奇妙さを覚えるよ」
　そんなことをいいつつ通り過ぎる。
「先生、もしかしてああいうの好きですか？」
　じっと見てくる。あぁ、少し分かった。こういうときは俺が本当のことを言ってるかどうか観察してるんだ。俺は紫苑を見返した。
「この仕事してると、嫌でも飽きる」
「ふふ、そうですよね。ねぇ、私の学校の制服、好きですか？」
「うーん、そうだな、好きだよ。偏差値高いからね。そして高い子のほうが俺の授業を良く聞く傾向にある。喋り手としては聞いてくれる生徒のほうが可愛い。だから好き。というのは穿ってるかな？」
「もー、素直に好きっていってくれればいいんですよ、そういうときは」
　俺は苦笑する。
　結局午前は紫苑の服選びで終わった。当たり前だが、女によってサイズも似合う服も違う。つい、「あ、このサイズじゃダメだから……」なんて当たり前のように思ってしまった。だが、それがむしろ紫苑にはピッタリなんだってことに気付いた。
　紫苑はカーディガン２枚とスカート１枚を買った。薄緑色の淡いカーディガンと、淡いピンクのだ。片方はケープ風で、片方はここ何年か流行ってる鍵針のものだ。フリルが着いている。スカートにもフリルがついている。俺の趣味まんまだ。ひらっとした感じが好きなので、フレアな感じだ。
「あのさ、紫苑。俺の趣味、押し付けちゃって良かったの？」
「はい。気に入られたいから」

率直だ、あまりに。
「……そっか」
「私、試着室で着替えてきますね」
そういって紫苑は去っていった。親が見れば一瞬で男ができたって思われるんじゃないか……。
少しして戻ってくる。袋には脱いだ方が入ってる。綺麗に畳んで入れたようで、袋がパンパンということはない。なのに時間が早かった。やることなすこと手早い。家で家事全般やっているといっていたのはどうやら本当のようだ。俺は「持つよ」といって袋を取った。
「鏡の前で合わせるのと実際に着てみるのじゃやっぱ違うね。よく似合ってるよ」
「ふふ」と紫苑は嬉しそうに笑う。
服は良いんだが、鞄が未だに学校指定のものだ。なんだかなぁ……。
「ところで、今日はなんていって出てきたの？」
「池袋に買い物に行くって」
「何も突っ込まれなかったんだ？誰と行くのとか」
「あぁ、意外そうにはしてましたね。友達いないの知ってるし、買い物は親と行くから。でも心配しなくて大丈夫ですよ」
いや、するよ……。
「先生、お腹すきましたね」
その言葉で今度は昼飯になった。どこにしようかと話していて、ファーストフードに殆どいったことがないということが判明した。驚きだ……。ちょうどサンシャインを出て少ししたところにウェンディーズがある。マックなんかよりはずっと質が上だ。女も多いし、いってみようということになった。
紫苑はメニューを見て暫く考えていた。バリューセットの選択が難しくてよく分からないといわれた。ふつうは単品買いのほうが難しいと思うが。
「まずはオーソドックスで」といって紫苑はウェンディーズバーガーを頼んだ。
「でも本当は牛肉より鶏肉のほうが脂肪がなくて、あっさりした動物性蛋白質を取れるんですよ」とかいっていた。
一口食べて、紫苑は「味が濃い……」といっていた。あまり好きではないようだ。ビックマックとか食べたらなんていうんだろうかと思った。
しかしファーストフード経験まで殆どないとは、蛍以上の逸材だな。蛍もこのくらいのときは……いや、よく行ってたな。
「あのさ、紫苑。これ食べたらどこか連れて行こうか？」
「喫茶店とかですか？」
「じゃなくて、ブクロの外。いつもサテンとかで話してばかりじゃつまんないだろ」
「私、話してるだけで幸せですよ」

ああ、そうだな。前にもそんなこといったやつがいたな。どうせ長くは続くまいが。
「それならいいんだが、ほら、どこか行ったほうが、その……デートっぽいだろ？」
すると紫苑は急に顔を明るくして「うん、行く」といった。
「ええと、車と電車のどっちがいい？」
「私はどっちでも」
車は日曜の昼だから混んでるだろうな……。ブクロから行くならいずれにせよ都心だ。いま新宿なんて行ったら高島屋の前の道を通過するだけで下手すりゃ30分はかかりかねん。一旦電車で行って戻ってきたほうがいいか。
「あの……もしかして時間かかっちゃいます？」
「まぁ、それなりには」
「じゃあ、今日は池袋にいましょうよ。ここにも何か面白いところあるでしょう？先生、また5時くらいには私を帰す気でしょ？そしたら時間もったいないもん」
そうか。この付近で何かといえば……水族館、プラネタリウム、ゲーセン。基本的にサンシャインか。
「水族館とかあるけど、興味ある？」
「あ、サンシャインシティ水族館にきてねーきてねーっていうCMのですか？」
「そうそう。まだCMやってたっけ？」
「さぁ、私が見たのは小学校くらいのときだから」
そうか、そうだよな。小学生、ね。はは……。

食事を終えて、俺たちは水族館へ行った。ぼーっと上の空で水槽の中のよく分からん魚を見て昔のことを思い出していたら、ふいに紫苑が「誰が水槽にいるんですか？」といってきた。
「え？」と振り向くと、知った風な顔でじっと見てきた。
俺は「いや……」といって歩いた。光る海月がいる。そういや「綺麗ね」とか言ってたな。
「先生？」
「うん？」
「こないだ聞きそこねましたけど、先生を縛ってるのって……奥さんですか？それとも、昔の彼女さんですか？」
海月が光っては消える。俺も紫苑も水槽の中を見てる。
「……どっちでもあるな」
「休日なのに、よく奥さん何も言わないですね。一度もメール来てないし」
「え、見たの？」
「ううん、バイブも鳴らないから。私が来る直前に電源切ってるわけでもないみたいだし」
「んん」唸る俺に紫苑は眼を閉じて顔を向ける。

「今日はここまでにします。これ以上行くなって私の中の理性が言ってるんです。それでも十分線を越えちゃったと思うんですけどね」
　外へ出ると、ペンギンがいた。
「皇帝ペンギン……」
　ぼそっと紫苑が呟く。
「これがそうなの？」
「ううん、そういうビデオがあって」
「あぁ、知ってる。見たことないけど」
「私も。でも、主題歌っていうか、歌っている人が好きなんです」
「え、俺もだよ。何、紫苑、知ってるの？」
　すると紫苑は眼を丸くして「エミリー＝シモン？知ってるんですか？」
「知ってるも何も、皇帝ペンギンの前のファーストアルバムから持ってたから」
「私もなんです。嬉しい、凄い偶然」
　音楽の趣味が合うと俺はかなり親近感を持つ。なんだか急に紫苑に近付いた気がする。
「紫苑が中３くらいのときに出たのかな」
「多分、そのくらいでした」
「そのころから既にシャンソンか。周りはモー娘とか聞いてるだろうに」
「そうですね」といって笑う「フランス語の勉強にもなりますから」
「え、やってたの？」
「はい、英独仏中、全部。第２外国語以降は検定も持ってます。３級ですけど」
「凄いな……え？ほんとに？そりゃ凄いな。いや、ほんと、それ以外コメントのしようがないよ。ほんとに塾なんか来る必要ないね」
「そうかもしれませんね。でも、先生に会えたから来て良かったです。あの……私の自慢話、気に食わないですか？」
「いや、全く。俺は凄い人は凄いと素直に認めるから。いま、かなり紫苑を尊敬してる」
　紫苑は首をかしげて、「ねぇ、先生ってどんな女の子が好きなんですか？」という。
　俺は少し考えた。昔から決まっているタイプに若干の変更があったからだ。
「頭良い子。いつもこう言っては引かれてた。で、昔は更に大人しい大和撫子タイプだったんだけど、大人しいだけじゃダメなんだって思った」
「で、いまはどんなのが良いんですか？」
「俺を甘えさせない子かな。俺自身、そんな強くないんだよ、自制心が。かといって甘えられまくっても鼻につくのも確か。かといって互いに自立ってことでそっけない関係も嫌だろ。だから、バランスが重要だと思うよ」
「なるほど……。じゃあ、私の男の人の好みにも合うってことですね」
「そうなの？」
「はい。私は男の人を立ててあげたいんです、適度に。甘えさせるのはダメです。付け上

がらせたらそれは自分も悪いんです。でも、その代わり、影でしっかり操っていたいんです。っていっても騙すって意味じゃないですよ。私、結構相手を征服したい女なんです。でも、表立って戦うような感じじゃなくって……その……まぁ、私がいっても絵空事ですけど」
「いや、紫苑ならできるんじゃないかな、精神力並みじゃないし」
「あの……つまり、先生を生徒の私がさりげなく征服したいっていう意味なんですけど……伝わってます？」
　そういって紫苑は水族館を出た。俺が出るまで出ようとはしない蛍とは違う。自分が出たいときに出る。なるほど、そういうところが征服に基づく主導か。いや、待てよ。紫苑のことだから俺がいま出ようとしてた足の動きとかを読んでたんじゃないか……？
「……うん、伝わってるよ」エレベータで下に下りる「昔だったらそういうタイプは苦手だったんだが、いまは俺に合うのはそういう子なんじゃないかって思ってる。でも、言葉にするのと実行するのはやはり違うよ。断然難しい」
　地下に着く。人が降りる。息苦しい状態からの解放だ。紫苑は大きく息を吐いた。
「私が躓きそうになったら、先生、直してくださいね。私も、先生を直すから」
「俺を？」
「はい。ねぇ、来て」といって俺の手を引く。サンシャインを出て人気のないベンチへ座らせてくる。急に静かだ。
「あのね、先生は汚れて傷付いた原石なの」と突然変なことを言い出す。
「思うの、元々はただの原石だったんじゃないかなって」
「……」
「その人……が、汚して傷つけたんでしょ？磨くべきところだったのに」
「いや……」
　そこまで言われると不快だ。いや、俺のことじゃなくて。
「そんなに悪い奴じゃないよ」
「まだかばうのね。でも、私に言われたから嫌なんでしょう？自分でもそう思ってるはず」
「仮にそうだとしても、俺も相手の原石を汚して傷つけた。お互い様だ」
「相性が悪かったのね。お互い、磨くべきだったのに」
「そうかもしれない」
　やめろ、これ以上言うな。女の前で泣きそうになるから。
「分かった、紫苑。紫苑は俺を救ってる。それは伝わってる。俺の心を抉って……痛いけど、なんだろ、癌を治療しようとしてる。手術と同じだ。でも、これ以上は、よそう」
　紫苑はすっと横に近付いてきた。完全に半身をくっつけてくる。
「頭、重いなぁ……。先生の肩に預けたら楽かなぁ……」
「……いいよ」
　ちょこんと乗せてくる。軽い。あいつの重みとは違う。明らかに遠慮しているな。

「首、凝るぞ」
　見透かしたように言うと紫苑はふふっと笑った。
「凝ったら肩ほぐしてくださいね」
「それは……わりと気まずいな」
「大丈夫ですよ。お父さんにもやってもらってますから」
「え、父親をこき使うの？」
「うーん、その辺はお互い様ですよ。お父さんが帰ってきたら上着を肩から取って、ハンガーにかけてあげるんです。ネクタイも」
「仲良いんだ？」
「お父さんはそれでもお母さんばっか気にしますけどね。私よりお母さんのほうがずっと好きみたい」
「そうか……。あのさ、紫苑。俺が一番初めに紫苑に好意を持ったのはさ、お父さんのことを自慢だっていったときなんだよ」
「そんなこといいましたっけ？」
「うん、ヴェローチェの入り口で。親と仲が良い……大抵そういうところは家族全体が仲良い。逆に、そういう家庭に育たなかった奴はロクな家庭を築かない」
　少し言い過ぎたかと思ったが、俺とオヤジやあいつと父親の関係を考えると俺の中では少なくとも真理だ。
「要するに奥さんがそうだったんですか？」
「まぁ、ね。特に、父親を嫌う思春期の娘っていうのは……ダメだと思う」
「好きだっていうのも問題だと思いますけどね。うーん、私は結局お父さん好きだから問題アリかもしれない」
「あの親父さんならおかしくはないよ。どう見ても自慢の父親だろうからね」
「でも喋らないんです、あんまり。私があの手この手で機嫌取っても」
「元々そういう人なんじゃないかな。俺は喋らないやつは苦手だが。ところで紫苑は貞操観念が強いんじゃないか？本で読んだことあるんだけど、父親のいない娘は男に自分を許しやすいんだそうだよ。でも父親の愛情をちゃんと受けていると自暴自棄にならないんだと」
「そうなんですか。はい、強いと思います。だって死ぬまでに男の人は一人って昔から決めてますもん」
　その辺はきっと蛍も同じだったと思う。急にぐっと胸が痛くなるのを感じた。表情が引きつる。
「先生？女なんて舌の根も乾かぬうちに手の平返す……なんて思ってません？」
「思ってるよ」
　もう正直にいおう。紫苑にごまかしは効かない。
「いつか、何があったのか聞かせてくださいね。私を信じた後でいいですから」

肩の重みがぐっと増した。シャンプーの甘い香りがする。すっかり生徒だってことを忘れていたが、鞄を見て思い出した。そうだ、この関係はまずかったんだ……。

５時になって俺は紫苑を改札まで送っていった。埼京線で赤羽を経由するらしい。
「そういえば、紫苑ってどこに住んでるの？」
近くの大きな柱に寄りかかって話す。
「白岡って知ってます？」
「あぁ、久喜の方か」
すると紫苑はちょっと喜んだような顔をした。そうか、マイナーな場所だと思ってるんだろうな。だから知られてると嬉しいのか。
「その中の新白岡っていうところです。すっごいマイナーなところなんですけど」
すっごいのところを偉く強調しているな。
「ええと……」なんだか言い当てれば紫苑は喜ぶんじゃないのかという気がする「大宮から土呂、東大宮、蓮田、白岡、新白岡だっけ」
「わぁ、凄い！先生、何でも知ってるのね！初めてそんな詳しい人見ました。そうなんですよ、いつも白岡っていうと新白岡じゃなくてそっちのほうばっか勘違いされるんで」
よかった、喜んでくれたようだ。
「まぁ、車好きだからね。鉄道はあまり知らないけど、それでも大宮や久喜のほうは主要部のひとつだし」
「先生も埼玉なんですか？」
「いや、俺は東京」
「東京のどこですか。あ、やっぱり生徒には教えてくれないんですか」
「いや、別に紫苑なら……ええと、東京の練馬区だよ。光が丘ってとこ」
紫苑は「うーん」と唸る。
「何となく聞いたことあるような……」
まぁ、女ならそんなもんだろう。まして子供だ。
「どんなところか知りたいので、今度案内してくれませんか？」
「いいけど……」
「大丈夫です、家にあがろうとかしませんから。あ、でも地元にいったら奥さんに知られちゃいますか？」
「それは大丈夫だけど。俺としては新白岡にも興味があるな。どんなとこに住んでんのかなって思う」
「じゃあ、今度案内しますね。ただ、なーんにもないですよ。ほんと田舎なんで。何せ南埼玉郡ですからね」
「そうなんだ？久喜が近いから謙遜してるんじゃない？」
「そんなことないです」と真剣な顔「多分、驚きますよ……」

「へぇ」と首を傾ける俺。
「先生、今度はいつ会えますか」
「そうだな、やっぱ来週かな」
　そう約束して紫苑を帰した。俺は駐車場へ戻ると帰路へ着いた。風呂に入って考えるのも寝るときに考えるのもやはり紫苑のことだ。なんだろう、別に付き合うことにしたわけでもないのに、もう事実上、付き合っているようなものなのかもな。
　蛍と同じ奇妙さを感じる。俺の何が良くて付き合ってるんだか……。いかんな、悲観的に考えては。そうだな、ほんとに俺が運命の人だからとか？はは、馬鹿馬鹿しい。太陽が回ってる風に見えるから天が動いてるんだっていうのを俺まで信じるのか？

2006 / 05 / 19

　金曜日の授業が終わると気分が良い。だって明日は土曜日だし、その次は日曜だから。っていうか、要するに日曜は先生とデートなのですよ。だから私はこんなに気分がうきうきしているのさ。
　いつもの暗いどこか醒めた感じの傷つくのが怖い自分から変わっていられる時間。先生はそういう時間をくれる。私は先生といるとどんどん磨かれていく気がする。別に先生が何かしてくれるというわけじゃないのに、不思議だよね。きっと私が先生のために自分を磨こうとするからだと思う。
　それに昨日生理も終わって気分も良い。うーん、快適。毎日こうだったらいいのに。こないだ水族館行ったときはちょっと辛かったからなぁ。先生がいるのにあまりトイレとか行きたくないから我慢してたけど、先生ってトイレいかないのよね。男の人ってそうなのかな。こまめに休憩入れてくれればいいのに。そういうの、ちゃんと言ったほうがいいのかな。それとも黙ってたほうがいいのかな。分からない……。
　気分も良いし、少し歩こうかな。
　バスには乗らずに上福岡の市街へ向かった。橋を越えてコンビニとかサイゼリヤとかがある大きな道に来る。そこをまっすぐ 20 分くらい歩くと駅近くの西友に着いた。左に曲がって西友前を横切ってまっすぐ行くと薬局がある。緑の看板にセガミ薬局と書いてあるけど、入ったことはない。ウチの制服がいないことをきょろきょろしてから中に入る。
　明後日のデートには――まだデートって呼んでいいのか分からないけど――何を着てこうかな。可愛いスカートが好きって言ってたけど、そんなに無いのよね。でもスカートだったら脚とか見えるから、ちゃんとしなくちゃ。
　制服のときもそうなんだけど、ほら、デートだし。無駄毛？この言い方嫌いだけど、処理とかしたほうが良いと思うのよね。私は人間には匂いも毛も汚れもあるのが自然だと思うけど、男の人はそういうのでだらしない女って思うから……多分。

中は結構広い。お店の人にまさか剃刀くださいなんていえないし。少しうろうろしてみた。あった。３本入ってて、カラフル。ボディ用と書いてある。これでいいや。多分、脇のと同じでいいよね。

いくら自然志向の私でも脇の毛くらい剃る。アルバザードではレインに借りるわけにもいかないしノンスリーブを着ることもないから放っておいたけど。でも、別に剃りたくて剃ってるわけじゃない。中１のときのトラウマのせいだ。

あのころ少し生えてきたみたいで、私は自分の体なのに気づいてなかった。ちょうど夏で半袖のとき、男子が私を見て笑ってるのが聞こえた。何だろうと思ったら、私が手を上げたときに毛が見えたのをからかっていたらしいことが会話で分かった。他の女子は男子に気付かれもせずいつの間にか処理していたというのに、私は友達がいなかったからこういうところで損をする。それにしても聞こえよがしに言うなんてひどい。それが悔しくて、それからは剃るようにしてる。

私はそんなに毛深い方じゃないから……というか恐らくとても薄い方だと思うから、あまり普段は気にしないけど、明後日の用意はしておこう。

他にほしいものはないかな。「んー」と心の中で呟きながら探す。うん、自分で分かってる、何を偶々見つけたいのか。でも、認めたくない……っぽいよ？だって私はそんな気ないもの。先生はどう思ってるのか知らないけど。一応、持っていたほうが良いのかなと考えてみるけど、その思考が不安の元だ。

きっと誰も分かってくれないと思う。女の子はきっと誰も私みたいに考えないんじゃないかって思うときもある。自分が正常かどうかが気になる。もう何回かデートっぽいことをしている。じゃあ、そういうことも考えたほうがいいの？それとも、そういうことを考えて用意しようと考える私は女らしくないの？私が正しいかどうか、そしてそんなことを考えている自分を許していいのか、それが気になる。……損な性格よね。

でもね、先生。本当にまだ私にはその気はないのよ。先生は大人で思慮分別があるって分かってるから、私、安心してる。でも、もし先生が何かアプローチをかけてきたら私、断れるかな。それが不安。だけど受け入れたら間違いだと思う。一生に一人を安易に決めてはいけないし、仮に先生がその一人だったとしても、そんなに早く決めたとあっては後々の関係に支障をきたすに違いないわ。この子は軽い子ってどこかで思われるかもしれない。それは大きなマイナスだわ。あ、大丈夫。私、いつもの計算高さが残ってるみたい。一応冷静さは失ってないみたいね。

なんて考えてたら出会いました、コンドーム。箱しか見たことない。しかも親の部屋で偶々。ベッドの中に入ってた。あれは……中３のときだったっけ。私ってショックなことが起こるたび皮肉で返しちゃうのよね。自己防衛なのかな。そのときも「あぁ、これで私の兄弟姉妹が酸素及び水分欠乏で何億も殺されているんだなぁ」って思った。もしかしたらこういう後ろ向きなネガティブさが先生と似てるのかもしれない。

さてそれはともかく、こんなものじっーっと女子高生が見てると明らかに怪しいんじゃ

ないか。ねぇ？おまわりさんとかに捕まりそうだよね。キミ援助交際？とかいわれたりして。ふん、失礼ね。人見て言いなさい。

しかしここは居づらいぞ。なんたって周りは血圧計だの離乳食だの、明らかに私の隠れ蓑になってくれる商品がない。ちょっと隔てた場所に立って見ているのだが、実は何を見ているかなどバレバレな気がする。

頬が暑くなって背中を汗が伝った。やめやめ、余計なこと考えるのは止めよう。私は目をつぶってその場を去った。

そうだ、汗よ。汗を止めるスプレーとか買わなきゃ。はぁ、私もレインみたいな良い匂いがすればいいんだけどな。あの子は自然と甘い匂いがしたなぁ。私はどうなんだろ。自分じゃどんなか分からないし。でも空手やってるからな、イメージ悪いよね。うん、買っとこ。

エイトフォーとバンというのがある。あぁ、どっちもテレビでやってるなぁ。まぁどっちでもいいや。結局バンのせっけんの匂いというのがあったのでそれにした。清潔そうだし、さも自然だから。

あと……お昼ご飯食べた後、歯磨きできないからな……。なんだか棚を見てみるとにんにくを食べた後だの何だのと色々ある。でもこういうの、人前で食べるのってかえって恥ずかしくないのかしら。私としては買うこと自体がとても恥ずかしい。ほら、匂いを気にしてるんですって自分で言ってるみたいで嫌じゃない？店員に「この女子高生は気にしてるのか」なんて勝手なこと想像されたくない。かといって息がわざとかかるくらい近付いて話して私は健全よとアピールするのはありえない。うーん、ガムにしよう。

っていうか、私って色々な可能性を細かに考えるよなぁ。考えすぎで嫌になる。いつも余計な妄想ばっかに気を取られちゃってさ。辛いわ。レインみたいにおっとりして何も考えてなさそうな子が羨ましい。

レジに持ってった。他にも色々合わせたので２千円もかかってしまった。びっくりだ、私も成長したよな。薬局で２千円なんて家のお遣いじゃないと出さないよ。だってほら、２千円よ。あと千円あれば CD がマキシじゃなくアルバムで買えるのよ？洋楽なら１枚買えるかもね。それをデートで気になる男の人に少しでも良いと思ってもらうために使うなんて！これってみんな消耗品。CD は買ったら無くならない。なのに私、いま先生のためにこれを買ってる。あぁ、なんかすごく気持ちが良い。なんなの、この陶酔感は。私、こんな頭の悪い子だったっけ？それともこれが本当の私で、ずっと隠してきただけなの？

ぽーっとしながらレジを去ろうとしたらおつりをもらい忘れてお店の人が追いかけて渡してくれた。慌てながらお礼を言って受け取ったが、相手の人は少し笑っていた。でも、いいのさ。その笑いは歓迎よ。

けど運命は非情。これってわざとなの？ってアルテに問いたくなっちゃった。ま、異世界の神様はきっとここにはいないんでしょうけど。

薬局を出て少し歩いて八雲神社を通り抜けていたら、先生からメールがきた。先生のは専用の着信音にしてる。なんと黒電話。レトロな感じがいいでしょ。今度先生に伝えよう。

で、その黒電話のメールで私は沈んだ。土日なんてどうでもよくなるくらい。先生、お仕事入っちゃったんだって。しょうがないよね、私の課外授業になんて付き合ってられないもんね。

だからそう返したらちょっと拗ねてるって思われたのか、「ごめんね。また今度埋め合わせさせてよ」と返ってきた。「無理しなくていいです」と返すと悪く取られそうだし、「いつですか」と聞き返すのも押し付けがましいし、どうすればいいんだろ。

駅についてホームで電車を待ちながら考えた文を書いた。「都合の良い日、分かったら教えてくれると、うれしいです」にした。「うれしい」は平仮名のほうが感じがいい。女の子っぽいって言語学の新書が言ってた。平仮名が続くと頭悪そうなので、うれしいの前に点を入れてみた。こういう機微って伝わってるのかなぁ。

先生は短く「そうする。ほんとごめんね m(_ _)m」と返してきた。忙しいのかな。それとも……近くに奥さんがいるのかな。醒めた奥さんと。そういえば子供ができるって言ってたけど、それって妊娠中ってことだよね。妊娠してるってことは最低でも１年以内は仲良くしてたってことでしょう？なのにいまの先生からそんな気配はまるで感じられない。奥さんとの間に何があったんだろう。その辺り、知りたいけど聞きづらい。

あぁ、それにしてもダメだ。ショック。今日の私の薬局での奮闘は何だったの？タイトルを付けるなら「浮かれて薬局で空回りするおばかな女子高生」とか？いいかも。あー、でもこんな羽が生えたような気持ちでいられるなら、ずっとおばかでいたいなぁ。私のアイデンティティやこだわりなんてなんかもうどうでも良くなってきたって気がする。

2006 / 05 / 21

今日は日曜だ。普段は休日だが、今日は仕事の関係で川越に出てきている。紫苑は通学で川越駅を通過するそうだが、日曜なのでめぐり合うことはないだろう。それに俺は駅を使わないしな。

授業の無い日なのでまぁクレリカルな仕事だ。正直、同僚に頼まれて代行しているといっても過言ではない。いや、もっといえば半分俺から進んで代わってやったくらいだ。今日は本当は紫苑と会う予定だったのだから、代わるというのはおかしな話なのだが、これには理由がある。

実は半分は紫苑と会うのを避けるために休みを代わったようなものなのだ。勿論紫苑が嫌いなわけではない。彼女が聡明で賢明なのも分かっている。だが所詮は子供だ。どうやら俺のことが好きらしい。でも浮かれないように自制心をかけているようだ。

だが俺の見立てだと浮揚感を抑圧するのはそろそろ限界じゃないか。あの手の女は一度好きだと自覚したらとことん行くタイプだ。自分の持ってる価値観を覆すことになろうと

も恋愛に活力を費やすタイプだ。
　結局、紫苑は蛍に似ている。根本的な性格が前向きという点では異なるが、似ている点が多い。大和撫子風なところ、大人しいところ、男っぽい思考方法、好きな相手に合わせるところ、男を全く知らないところ、そして周りから阻害されているところ。そんな子が男という光を見つけて自分の殻から出てきたら、そのパワーは果てしない。でも、それでは蛍の二の舞だ。だから距離を置くことにした。
　いまごろ恐らくヒートアップしているのではないか。勿論、紫苑が俺に本気だったらの仮定の上で話しているが。ただ蛍と同じ匂いがするので、多分この仮定は間違っていないだろう。
　いまヒートアップしているのはしょうがない。初めてだし子供だからな。だが俺は大人として子供の遊びには付き合えない。彼女が実際以上に精神年齢が高いのであれば年齢差というハードルを物ともしないだろうが、年相応であれば付き合いを切らざるをえない。冷たいようだが、これは双方の利益のためだ。
　紫苑は一生に男は一人などといっていたが、その誓いの堅さはどんなものだろうか。17だかの小娘に一生の責任が負えるものか。たとえば今でも俺が巧くエスコートすれば、あと数回会っただけで身体を預けるだろう。俺に嫌われたくないという心理のせいで、半分嫌でも応じるだろうな。
　でも、応じたら負けなんだよ、ほんとは。あの誓いを偉そうに俺に立てておきながら、そして俺を征服したいなんていっておきながら、そこで俺を受け入れてしまってはいけないんだ。自分を安売りしちゃダメなんだ。その辺、多分分かってないと思う。だから、せめて冷静な判断ができるまでは付き合うことすら控えようと思う。
　あの子は良い子だ。何だか分からんが、何か凄い力というか……経験を持っている気がする。とにかく普通のガキじゃあない。それに性格も見ての通り。だから俺は傷つけたくないんだ。俺自身も傷つきたくないしな。
　さて、仕事の続きでもするか。しかし授業のない日は時計がサボりやがる。まったく、ノロノロ走りやがって。
「クラクションならしたろか」と呟いたら隣の教務が「えっ？」と言ったので、振り返って「あ、いえ」と軽く微笑んでやり過ごした。

2006 / 06 / 11

　水月先生は私のことが嫌いなんだろうかってここんとこ考えていた。先月の 21 日のデートをキャンセルされ、その次の 28 日は約束してもらえずそのまま。
　もうそのときに少し避けられてるのかもしれないと感じてはいたんだけれど、更に 1 週間待ってみた。この間、毎日が辛かった。精神的ストレスのせいで、胃が痛くなったりお腹が痛くなったりした。

アルバザードのアルシアでレインを守りながらアルシェからの連絡を待った緊張の日々とはまた違った緊張感。自分やレインの身がどうなるかという心配とは違う。自分が攻撃されるかもしれないという心配ではない。自分が他人に受け入れてもらえるかという不安なのだ。

もうデートの準備をしてから１月くらい経っている。何だかあのころ馬鹿みたいに浮かれていたのがとても恥ずかしい。いまは少し冷静に戻ってきたみたい。でも気持ちが醒めたわけじゃないのよ。むしろ先生への気持ちは増している。地に足が着いたというか、固まった気がするの。安定した感じがする。けっして悪くない兆候よ。そう自分に言う。

ここ最近、ずっと自分が前のデートで何か怒らせたのではなんて考えてる。あのときのデートのことばかり思い出して、やっぱり奥さんのこととか、失礼なこといったからかなとか……。

でも、先生は優しくて、メールはよくくれる。それに電話で声も聞かせてくれる。でも、仕事が忙しいことを強調する先生を見てこう言いたかった。私は貴方が思ってるほど子供じゃないんですよって。貴方が私を避けるための口実だってことぐらい気付いてるんです。でも、それを言って先生に肯定されたら私の心は壊れてしまいそうで、聞けない。

代わりに「いつ会えますか」っていう内容を、言葉を曖昧にしながら何度か伝えてる。先生も私の気持ちを感じているようだ。４日のデートをそれとなく断られたんだけど、３週も日曜がないなんておかしいもん。だから帳尻を合わせるように 11 日ならと言ってきた。

だけど今日は私がダメだったの。お母さんに買い物に誘われてたから。お母さんを断って外出したら、いくらあのお母さんでも怪しむでしょ。

でも、お母さんは午前中仕事だったから３時から買い物に行くっていう話だった。だから私、少しでも先生に会いたくて、事情を説明した。ひとつもウソは書かなかった。先生は無理しないでいいよといってきた。私、我慢できなくなって電話して、自分の声で気持ちを伝えた。でないと伝わらない。「会いたいんです、少しでも」って。その声、少し上ずってたと思う。先生は優しく「俺も会いたいよ。随分会ってないしね」っていってくれた。でも、声が気遣ってるっぽかった。私のこと、好きというわけではないのね。相手は大人だから仕方ない。私だって先生をどこまで好きか分からない。焦りは禁物よ。ゆっくりお互いの気持ちを確かめ合っていくの。

とりあえず私の会いたい気持ちだけは伝わったみたい。時間が短いから慣れた池袋で会うことになった。けど先生が 12 時っていうから、会ってお昼を食べて少し話しただけで帰らなくちゃいけなくなった。殆ど話してる暇なんかなかった。

でも心配していた気まずさはなかった。きっと先生とは相性がいいんだわ。すんなり話が運ぶ。勉強の話だけじゃなくて色々話せる。楽しいなって思ってたら２時間なんてあっという間。

先生が時計を気にして、２時前になったら「そろそろ」といって切り上げてしまった。私は「帰るなよ」と言ってくれるのをどこか期待していた。でもそんな調子の良い話はや

っぱりなくって、私はふつうに帰された。

けど、会って話してて、先生はとても楽しそうだった。私といると落ち着くといってくれた。その言葉が嬉しかった。でも次のデートの約束はできなかった。急いで帰らされたから忘れてた。

お母さんと会っても気がそぞろ。服を選んでも先生のことばかり考えてた。でも、会えたことが嬉しくて気分が良かったから明るく振舞ってた。私が良い娘を演じていればお母さんは満足だから、それでいい。ほら、服も買ってもらうし、ギブアンドテイクよね。

で、私、さりげなく下着を買った。いつもよりすこし、すこーしだけ、お母さんが別に何も追求しない程度にいつもと違う感じの下着。色は寒色が好きみたいだけど、多分下着は暖色のほうが可愛いって思ってもらえるんじゃないかなぁ、とか。少しレースっぽい感じのとか。

別にこれが先生の目に触れることはないって分かってるんだけど、あくまで気持ちの問題なのよ。何か予期せぬことがあっても大丈夫だっていう気持ち。あとね、大事なのは、目に見えないところまで気配りをしているっていう自分への自信。この自信がちょっとしたときに勇気をくれる。動く力をくれる。だから買ったの。……買ってもらったんだけどね。

やっぱりお母さんは何も追及しなかった。わりと大雑把な人だから。妙に細かいくせにね。ウチは買い物から帰るとお父さんに買ったものをお披露目することが慣例になっている。お父さんが望んでるわけじゃないけど。見せるのは服も例外ではない。お母さんが屈託なく見せるので私も見せている。流石に上に着るものだけだけど。

先生好みの服を何も知らないお父さんに見せるってちょっと残酷かなって思ったけど、お父さんは「かわいいね」といってくれた。けどお父さんっていつも「かわいいね」って言う。それだけ。以上でも以下でもない。小学校のころから！

お母さんには「着てみせて」とか「ここが良い」とか言う癖に、娘には最低限のリップサービスしかしてくれない。私はいつもは我慢するけど、今日は気合を入れた服選びだったから、「いつもそれしか言わないよね」と拗ねてみた。そしたらちょっと困った感じで「紫苑は何を着ても似合うよ」と言った。何それ？なんか、寂しいコメント。じゃあさ、篠中ジャージでも似合うと思う？そう言おうとして止めた。

親に注目してほしいんだろうな、私。だから咄嗟に「こんなの買ったのよ」といって下着を袋から出した。私からしてみればこれが精一杯の叫びなの。気付いて。私は家族の団欒を崩したくないの。だからここでヒステリーに怒ったりしたくない。けど、お父さんにちゃんと見てほしい。私はそんなに関心のない娘なの？お母さんと仲が良いのは良いことだけど……ひどくない？

私の下着を見たお父さんは表情を変えずに「へぇ……」と呟いた。何もコメントできないんだろうな。そうだよね、そんなもの見せられてもね、コメントできないよね。お母さんのならきっとコメントするくせにね。

なんだか自分のやってることが情けなくて、泣きそうになった。でも流石は一人娘の親だ。私のそういう表情は読めるらしい。お母さんが軽くお父さんに目配せした。お父さんは少しスカートに近寄って、「うーん。ひらひらしてるね」といった。
「それだけ？」といったら「紫苑は可愛いから、似合うだろうね。空手の服なんか着せておくのがもったいないから、普段からこういうのを着ればいいのにね」といった。ここで「何よ今更」と拗ねるのはただの我侭だから、「そう？ありがとう」といった。

家族団欒が終わって２階に行って、勉強を終えて寝ようとしたところで先生からメールがあった。
「今日は慌しくなっちゃったね。もっと話せたら良かったんだけど。俺は日曜空けておくから、今度会うなら紫苑が日取り決めていいよ」
「今度会うなら」という条件法に距離を感じる。でも、良く言えば恋愛の駆け引きだ。プラスに考えよう。
「じゃあ次の日曜でいいですか？」と素直に返したら「うん、分かった。楽しみにしとく」と返ってきた。なんだか本当っぽい。最近メールでも少し本音と建前が分かってきた。えへえへしながらケータイを胸に抱いてベッドの上でころころしてたら急にノックが聞こえて跳ね上がった。
ケータイを思わず布団の中に放り込んで「なぁに？」と答えると、「お父さんだけど」という。うん、このノックの音は聞くまでもなくお父さん。でも、意外だった。ここに来るなんて。
どうしたのと聞いたら用件だけ言って去りそうだなと思った。話に来ることなんて滅多にないからちょっと嬉しかったんだけど、わざと何でもないように「うんー、入ってぇ」と間延びした言い方で答えた。
そしたらお父さんが入ってきて、部屋のドアを閉めた。２秒くらい私を見たまま何も言わない。私が抱き枕を抱えながら「ん？」と首を傾げたら、「さっきはお父さん、ひどいこと言っちゃったな」といってきた。
「え、どうして？」
「ほら、せっかく紫苑が服を見せてくれたのに何も言わなかったから」
「そんな、気にしてないよ」と、嘘を付いてみる。でも、お父さんは嘘を見抜く人だ。優しい目なのにそういうときはとても見るのが怖い。今もじっと見てきている。その目からは逃げられない。
「やっぱ、ちょっと気にしてたかも……。ううん、けっこう。……かなり？」
なんだろ、このバカ娘っぽい口の利き方。やだなぁ、私、わざと喋ってる。私は半クエスチョンなんてこんなコンテクストで使う娘じゃないんですよ、お父さん。
「お父さんね、紫苑がどんどん大きくなっていって、どう言葉をかけていいか分からないときがあるんだよ。こう言ったら傷ついてしまうかなと思って言えないときがある。紫苑

は思春期で感じやすい年頃だから」
「そうね……それに私、皮肉っぽいし僻みっぽいもんね。可愛くない娘だよね」
　お父さんは「いや」と言ってベッドに座る。私の左肩にぽんと右手を置いて、「紫苑のこと可愛くないなんて思ったことはないよ」と言う。私はお父さんの目をじっと見る。感動的なこと言ってると思う一方で、「やっぱ、私に顔似てるなぁ」とか雑念が沸く。
「まぁ……お母さんにちょっと対抗心持っているところがあるとは見ている」
「そうみえる？うーん、そうかもね」
「お父さんは紫苑が良い娘だとも思ってる。こう育ってくれて誇りに思ってる」
　お父さんは短文で物事を言う。こういうとき、心に染みやすい。素直に聞ける。私はにこりとした。
「ねぇ、肩凝ってる？」と聞いてみる――凝らないの、知ってるくせに。
　お父さんは首を振る。
「いいなぁ、私、勉強で凝っちゃった」
「あぁ、ほぐそうか」といって後ろに回り込んでくる。「紫苑――」
「ん？」
「……始めからやらせる気だったろ」
「えへへー」と笑って脚をぷらぷらさせた「お父さん、うまいねー。他の人にやってもらったことないけど」
「そうか？紫苑は肩が凝るんだな。お母さんも凝らないのに」
「隔世遺伝じゃない？」
「……勉強のしすぎじゃないの？」
「そうかもねー。お母さんはどこ揉んであげるの？」
「肩は偶にしてあげるけど、脚かな。あっためたり、足裏マッサージとか」
「あぁ、リフレクソロジーっていうのよ、最近は」
「へぇ、良く知ってるね」
「うん、先生が教えてくれたから」
「先生？」
「あ……」しまった、余計なことを……。でもここで沈黙を作るのはまずい。「うん、学校の」
「へぇ」とお父さんは流した。何か勘付いたかな……。
　その後無言でマッサージ。手持ち無沙汰になった私は何気なく聞いてみた。
「ねぇ、これだけ養っててもらって愚問だと思うんだけど、言葉にしないと伝わらないというか……確認できないこともあると思うの」
「うん」
「あのね……私のこと、愛してくれてるのよね？」
　そしたらこれには「もちろんだ」と即答。声が男らしいなぁ。存在が大っきくて落ち着

く。
「そっかぁ……良かった。でもさ、お母さんのほうが愛されてるよね」
　私、ついに核心を付いてみた。気軽なノリのほうが絶対良い。今が絶好のチャンスだ。
「そんなことはないよ」と全否定。
「そう？」
「妻への愛と娘への愛は質も表れ方も違うから」
「あ、そっか」
　そう、「あ、そっか」と本気で思った。今まで何となく答えが見えていたことだったけど、言葉で聴けて改めて気持ちがおなかにストンと降りた。私は何だか気持ち良いマッサージと言葉で半分眠りそうになった。
「紫苑、どうしてそんなこと聞いたの？差を付けているように見えてしまっていたのかな」
「うーん、そうね。ちょっとひがんでたよ。私のことなんてどうでもいいんじゃないかなって。でも、いまの聞けて結構解決しちゃった。あと多分、私自身お母さんよりお父さんのほうが好きだから、親も同じように差を付けてるのかなって思い込んでた」
　お父さんはお母さんより好きといわれたのが意外だったみたいで驚いた感じだった。
「あのね、私、お父さんのこと自慢だよ。カッコいいし優しいし」
「お母さんも綺麗で自慢じゃないか」
　……はぁ、とため息を吐く私。いい、いいの。勿論お母さんは美人。それに若い。何も異論はないです。でも、この期に及んでそれを言いますか。だからもういいの。この人のお母さん依存は病気なの。ここまで今日心を通わせられたのは最大の進歩なの。うん、お父さんに悪意なんてないんだ。それを信じるしか私にはないの。この家庭を崩壊させるような非行少女に転換しないためには。
　お父さんは私の肩を揉むと「じゃあ、お父さん寝るから」といって帰ってしまった。私は色々感じたけどやっぱり嬉しいの気持ちのほうが大きくて「ありがとね、話できて良かった」と言った。お父さんは珍しく笑顔を浮かべて去っていった。

2006 / 06 / 16

「お先に失礼します」と言い残してデスクを離れる。後ろから「お疲れ様でした」と声が聞こえる。階段を下りてドアを開けると９時を回っていたが、今日は早い。
　ドアを出たところでキャスターに火をつける。ふぅ……とため息混じりに煙を出す。空を見上げる。真っ暗だ。
「あと 10 日ほどかなぁ」
　ぼそっと呟く。急に胸が苦しくなって、タバコをもう一服吸う。思い切り吸って思い切り吐く。長く吐くと気分がリラックスする。タバコだけのおかげじゃなくて、深呼吸の効果でもあるんだろうな。

ふぅと煙を出すと、道の向こうに女子高生が立っているのが見えた。さっきから視界には入っていたが、何ら珍しい光景ではないので特に見なかった。だが、その人影に見覚えがあったので見てみた。

紫苑だった。こちらに身体が向いているが、見てはいない。俯き加減で、もじもじしている。視界には明らかに俺が入っているはずだ。

「……」俺はもう一服吸った。後ろのドアをチラッと見る。誰も出てくる気配は無い。俺が出てきたドアは職員用だ。生徒とは鉢合わせないためのものでもあるが、かえってこうして待ち伏せに使われることもある。紫苑を見る限り、どう考えても意図的に待っていたのだろう。

俺が紫苑のほうを見ていると、紫苑は顔を上げて俺を見てきた。俺はもう一度後ろを確認してからコクリと頷いた。紫苑は少し不安気な顔をして、目配せして俺を歩かせた。俺が近寄ろうとするとスルスルと早足で逃げてしまう。

あぁそうか、他の教員がいるかどうか気にしてるんだな。それであの顔と態度か。気が利くじゃないか。

紫苑は駅から外れた道へ歩いていく。生徒と鉢合わせないよう配慮しているのだろう。やがて、広い道の電柱の明かりの下で紫苑は止まった。

「紫苑？」と呼びかけると「ごめんなさい」と急に謝ってきた。鞄を両手に持って頭を下げて。

「え、どうかしたの？」

紫苑は不安そうな顔で「こんなことしたら迷惑かなって思って」という。

「別に大丈夫だよ。見つからなかったし、見つからないように気を使ってくれたの分かるし。それより、いつからあそこにいたの？」

「授業が終わってからです。その間、誰も先生たち、出てきてないです。生徒にも会ってないです」

「うん、別にそういうこと聞いてないけど、ちゃんと見ててくれてありがとね」

すると紫苑は少しはにかんだ。蛍もまぁこの辺りは気が利いたな。

「俺、今日は偶々早めに上がったんだけど、いつも通りだったらどうする気だったの？」

「そしたら待ってるつもりでした。私のほうが用あって来ただけですから」

「用って？電話とかじゃ都合つかないようなことかな」俺はタバコを地面に捨て、踏み消して排水溝に蹴り落とす。紫苑はタバコをチラっと見たが何も言わなかった。多分、こういうマナー違反が嫌いなのだろう。俺は別に飾り立てる必要もないと思って敢えて素を出した。これで俺のことが嫌になるなら嫌で結構だ。

「ううん、お話なんですけど。そうですね、電話でも本当だったら済むようなことなんです。でも、直接話したくて」

「なるほどね。ところで、親御さんに連絡はしてるの？本当だったらもう家に着くころじゃないの？」

「はい、お腹がすいたからこっちで食べてくるって言いました。あと、本屋も寄りたいから少し遅くなるかもって。別に嘘じゃないですよ」
「お母さん宛？」
「はい。あと、だからお夕飯は食べてきてねっていうのも書きました。いつもだったら塾の後に私が作るんですけど」
「塾の日までご飯作るんだ。凄いな……」
　蛍は俺が作ってくれと言わないと全部ウチの母さんにやらせてたからなぁ。そういや大学のときの同級生なんて女のくせに弁当まで当然のように母親に作ってもらってるって言ってたな。
「いえ、そんな……。お母さん、メールで「分かった」って言ってました。だから時間とか大丈夫です。あの、問題は先生のほうなんですけど」
「俺の方って？」
「その……私、ほんとにご飯食べてないから、よかったらどこかでご一緒しませんかって……。でも先生もう食べたかもしれないし、家で奥さんが用意してるかもしれないし」
「あぁ、それは大丈夫だよ。別に川越で食べる予定ではなかったけど、かといって支障は一切ないし。話は食べながら聞こうか？」
　どちらともなく歩き出す。
「はい。ありがとうございます。あの……川越は……」
「うん」俺は振り向く「まずいね」
「ですよね。じゃあどこにしたら……」
「そうだな、車で移動してもいいけど、紫苑は最終的に電車を使うわけだから……。またこっちに戻ってくるのも面倒だしな。白岡だったよね。宇都宮線だよね？じゃあ川越線で大宮辺りまで行こうか？いや、あの辺も生徒いるか」
「あの……だったらいっそ川越でもいいんじゃないですか。見つからないように気をつければ。夜だし、明るいところ行かなければ分からないですよ」
「まぁ、気にしてたらキリないもんな。別にいいか、見つかったら見つかったで」
　紫苑は驚いて「え、見つかっちゃったら大変ですよね」という。
「そりゃまぁね。でも、びくびくしてるのも嫌だし。暗い道なんて女の子に歩かせられないよ。正々堂々駅の方行こう」
　紫苑は不安そうな嬉しそうな顔をして「はい」といってぴょこっと軽くステップするように近付いてきた。そのときふわっと石鹸のような匂いが鼻をくすぐった。一瞬、邪な想像が沸いてすぐに消えたが、後ろめたい気持ちになった。
　タバコに火をつけようとして、ふと紫苑を見た。受動喫煙は良くないか。
「紫苑、タバコ嫌い？」
「……うーん」少しためらって「はい、嫌いです」
「正直だね。お父さん、吸わないの？」

「吸わないです。先生が吸うのは別に良いんですけど、でも私自身は嫌いです」
「じゃあ紫苑の肺を侵すわけにもいかないし、止めとくかな」といって仕舞う。侵すという言葉の響きが良くないなと思いながら紫苑を見たら、俺のポケットを見て気まずそうにしていた。
「別に嫌なら嫌でいいよ。ハッキリ言ってくれた方がありがたい。あ、言い方じゃなくて内容ね。間違っても言い方キツイのが好きってわけじゃないから」というと紫苑はふふと笑う。今のがおかしいのか？
　大きな道に出る。ここは生徒が通ってもおかしくない。紫苑には強がってみせたが、あえて見つかりたくはない。紫苑はこの状況をどう思っているのだろうか。見たところ緊張して不安がっている。面白がっている様子はない。
「ところで、話ってのは何？食べながらって言ったけど、早く言いたいかもしれないし」
「あ、いえ……」ためらう紫苑「特に用事があったんじゃないんです。ほんとにお話がしたかったから」
「ええと、その話ってのは」
「つまり……雑談です。おしゃべり、みたいな……。すみません、下らないことに付きあわせちゃって」
　あぁ、そういうことか。出会ったときの蛍とかとおんなじか。俺は「いやいや」と適当に流しておいた。
「俺も今日この後暇だったし、ちょうど良かったよ。一人で食べるのも侘しいしね」
「え？」と立ち止まる。が、すぐ道が悪いと思ってささっと歩き出す「先生、一人でごはんなんですか？」
「ん？あぁ、まあね」
「奥さんはお仕事なんですか？でも、妊娠中でしたよね」
「うーん」俺は首を捻った。別に隠しても仕方ないか。どう受け取るかは紫苑の好きにすれば良い。別に塾で言いふらすようなことはしないだろうし。それに女友達はいなそうだしな。
「まぁなんというか、いま家に居ないからね」
「それって……お仕事とかでじゃなくて、でしょうか」
「うん、まぁね。別居ってやつだ。というか、違うな」
「え？」
　駅に着く。騒音がうるさい。大きめの声を出さないといけない。俺は紫苑を向いて続けた。
「離婚したんだよ、こないだ」
　紫苑は目を丸くして、やがて元に戻して小さく頷いた。それ以外何もいえないという感じだ。
「別居ってのは去年からしてたから」

「あの……」と言ったきり紫苑は考え込んでしまった。蛍のイライラさせる間とは違う。あれこれ考えてますというオーラがひしひし伝わってくる。そういった小さなことが俺には好意的に映る。

　駅をぐるぐるしてみるが、特に食べれそうなところはない。というか紫苑の好みが分からない。紫苑は未だに何と言っていいのか分からず言葉を選んでいる。
「紫苑、何食べたい？」
「えと、高校生に優しい値段なら何でも」
　いつまで「お年玉」だの何だのが続くことやら。でも、食事代を出すっていうのは彼氏ヅラっぽくて嫌がられるかもな。別に付き合っているわけでもないのに。
「ファーストフードとかが良いってこと？」
「ううん、そういうわけじゃないですけど、ファーストフードでも大丈夫です。あ、ごめんなさい。やっぱりできるだけ静かに話せるところの方が良いです」
「そっか、そうだね。じゃあクレアモールのラパウザにする？」
「くれあ？」
「ほら、そこの」と方角を指すと、目をくるっとさせてから「あぁ、あのモール、そういうんですか。はい、じゃあそこで」
　紫苑はそれだけで決めてしまった。何の店かは知っているようだ。
「ラパウザは行ったことあるんだ？」
「え、ないですけど、イタリア料理とかじゃないですか？」
「うん、そうだよ」
　何だ、街で見かけただけか。そう思ってたら紫苑がじっと俺を見ているのに気付いた。何か不満そう。急にだ。何だろう、今の台詞で怒らせるようなことがあっただろうか。この顔はどこかで見たことがある。少し苛立たせる表情。
　そうだ、思い出した。いつだったか、紫苑が俺の質問待ちをしてたときの顔だ。あのときは確か英語の第３文型について自分が良く知っているということを俺に伝えたくてうずうずしていた。そうか、この顔はうずうずな表情なんだ。言いたいけど自分からは言えないからネタを振れという顔か。蛍には一切見られなかった。むしろガキのころの俺に似てる。プライドと知性が高い子なんだな。
「そういや、何でイタ飯屋だって知ってたの？」
「え、知ってたんじゃなくて、名前を聞いて。La Pausa ってイタリア語で休憩って意味じゃないですか？」
　ご名答。そして俺もご名答。紫苑の顔が和らぐ。でも、少し疲れる子だ。この空気に慣れないとな。
「へぇ、良く知ってるね。流石検定総なめにしてるだけあるね」
「そんなことないです」といってはにかむが、嬉しそうだ。あぁ、褒めれば素直に喜んで

くれるタイプか、扱いやすいな。
　そのまま語学の取り留めのない話をしながらクレアモールのラパウザに入った。スクエアというビルの２階にある。エスカレーターを昇った正面が飲み屋で、その斜め向かいだ。閉店時間を確認すると 11 時までとなっている。まだ余裕だ。
　中に入ってメニューを紫苑に見せる。
「せ……静さんは見なくていいんですか」
　急に静さんと呼んできた。制服を着ているのに先生というわけにはいかないし、「水月さん」も良くない。もしかしたら周りに生徒の父兄がいるかもしれないからだ。心憎い配慮をする子供だ。
「注文は入ったときに決めたから」
「はやっ、即決ですね。よく来るんですか？」
「何度かね、嫁と」
「あぁ……」といってメニューに見入る。
　紫苑が選んだのはツナのトマトソースパスタ。俺はペペロンチーノにカルパッチョを頼んだ。他に欲しいものはないかと聞いたら「そんなに食べれません」と笑う。まぁこのくらいの小柄ならそんなものだろうな。
「さっきの話なんですけど、奥さんとは離婚されてるけど妊娠中なんですよね」
「そう。妊娠したのは別居の前。あのころは不安定ながらも関係が持っていたからね。子供ができてこれが鎹になればなって思ってた矢先だったよ」
「何ヶ月くらいだったんですか？赤ちゃん」
「ええと、ちょうど去年の暮れに出てったときに安定期に差し掛かるころだったな」
　といわれても紫苑はピンとこないようだ。いくら女でも高校生じゃそんなもんだろう。
「結論からいうと産まれるのは今月か来月の頭だよ。そしたら俺も一児の親父ってわけだ。まぁ、あいつがおろしてなければだけど」
「えっ？おろしてなければって……連絡取ってないんですか？」と意外そうな顔。
「あぁ。いきなり出てかれて、それきり何も連絡がない。実家とも連絡付かずでね」
「え……」と混乱気味。そりゃそうだ「向こうの実家には行ってみたんですか？」
「そりゃね。でも居なかった。元からちょうど引っ越すみたいなこといってたからなぁ。或いはその日は偶々どこかに泊まってただけかもしれないけど」
「あの、この話って私にとってはとても大切で聞きたいことなんですけど、せ……静さんには聞かれたくないことですか」
「いや、別に構わないよ。隠してもしょうがないし。勿論、口外しないという前提で話してるけどね」
　紫苑は目を瞑ってゆっくり頷いた。
「じゃあひとつ……なんで離婚されたんですか？」
「うーん、それは説明しにくいな。なぜなら俺自身よく理由が分からないから。なんせ朝

起きたら急にいなくなっててそれきりだからね。俺には身に覚えがなかったからあいつが事件に巻き込まれたって信じ込んでたし、すぐに警察行って捜索願出したりしてた」
「それは大変でしたね。でも、奥さんと連絡がつかないのにどうやって離婚したんですか」
「まぁ、そのあと色々あって弁護士を通したんだよ。離婚は双方の同意だったから離婚自体はすんなり行ったよ」
「弁護士ですか。実家ごといなくなっちゃったのによく住所が分かりましたね」
「弁護士は向こうが立ててくれたんだよ。ほら、向こうはこっちの住所を当然知ってるわけだし」
「そういうものなんですね」と関心気味にいう「あの、失礼ですけど、やっぱりお金とかのことは問題になったんですよね」
「うーん」小気味良く要点を突いてくる子だな「なったよ。でも勝手に出てったのを悪いと思ってたのかな。よく分からないけど」
「向こうの本音が聞けないっていうのは判断のしようがないですね」
「そうなんだよ」力強く言った「何も言わなきゃ何が何だか分からないよな」
「元々そういう性格の方なんですか？それとも激変したのか」
「前者だね。コミュニケーションを人と取るのが極めて苦手な子だったから。周りの人間は第三者も合わせて向こうの態度には首を傾げてたよ」
　紫苑はうーんと唸った「何か言えない事でもあったのかなぁ」
「――と、思うよな。そういう態度だと。だから皆そう思った。けど浮気の跡もないわ、俺の子であることも間違いないわ、その上最終的には財産分与も養育費も慰謝料も何もなしということになった。籍だけ抜いて完全に無かったことにしようということになったわけだ」
「え、養育費もですか？」と驚く。
「あぁ、法的には子供との問題だからそんな取り決め無効だけど、一応両者の意思表示だね。しかもその取り決めが変でさ、もしあいつが子供を産めばっていう制約付きなんだよ」
「なんですか、それ」
「情報管制。つまり俺にはおろしたかどうかも伝えたくない。何一つ自分の情報を伝えたくない。だから取り決めは「このケースの場合はこう」みたいな場合分け」
　紫苑は額に手を当てる「その人、失礼ですけどかなりおかしいですね。何があったのかは知らないけど、そんな話テレビでさえ聞いたことないです。話を聞く感じ、静さんが一方的に悪いようではないですし」
「へぇ、なんでそういえるの？俺が自分に都合の悪いことは言わないかもしれないのに」
「十分今までの内容で都合悪いですよ。それに、一番の理由は向こうの対応です。結局ブレイクイーブンで収支ゼロの別れ方をしたってことは、向こうも自分の非を認めてるわけでしょう？それは急に出てったことだけじゃなくて、結婚生活における自分の非。自分も悪いと自覚してるから何も要求してこなかったんでしょ。というか自分の方が悪いと思っ

てるから養育費も自分で負担するって言ってるんじゃないですか」
「へぇ……紫苑って頭良いな。いや、本当に。感心した。そういう見方もあるんだな」
「そうじゃなきゃ要求するものは要求してるはずですからね。でも、静さんは本当にそれでいいんですか？子供のこと。産まれても会ってあげないんですか？」
「まぁ、養育費を払わん以上、父親の義務を放棄してるからな」
　紫苑は眉を顰めた「それ、何か変です。養育費を払わないなら子供には面会させないっていうのは奥さんの視点じゃないですか？静さんと奥さんの間はそれでイーブンでしょうけど、私が聞いてるのは静さんと子供さんの間です」
「あぁ、なるほどね。でも恐らく子供は会いたがらないよ。そういう風にこれから教育されるだろうから。或いは俺のこと始めからいないことにするんじゃないかな。もしくは誰かと再婚してそれが親父と信じさせるとか。まぁ知ったことじゃないけどね」
　ふっと自嘲気味に笑ったら紫苑はじっと俺を見てきた。俺は居心地が悪くなって店を見回した。薄暗く静かな店内は話しやすい。９時を回っているので客も減ってきている。
「知ったことじゃないって嘘です」
「え？」
「嘘です。静さん、気にしてます。子供がそろそろ産まれることだってすぐに答えたじゃないですか。毎日気になっているんでしょう？」
　紫苑は不思議だ。言葉は挑戦的なのに言い方と素振りが神経を逆撫でない。むしろその突拍子もない問いかけに好奇心を持ってしまうような言い方だ。俺は自然と口角を上げて問い返した。
「予定日くらい誰でも覚えてるよ。それだけじゃ俺が気にしてることにはならないんじゃないかな？」
「そうですね。じゃあ、小さな子供にやたら目が行くのは根拠になりませんか」
　思わずどきっとした。
「サンシャイン行ったときもそうですけど、子供や乳母車に一瞬目をやりますよね。大きな子供には目をやらないのに、小さい子にばかり。あれ、何でだろうって思ってたんです。男の人だから若い女の人に目が行くなら分かるんですけど。あのときは単に子供好きなのかなって思ってました」
「はは、そっか。俺、そんなことしてるんだ。うーん、俺の負けだな。うん、気にしてるよ。ならないわけがないよな。自分の子だ。でも、自分の子を産むかどうかも聞かされず、産んでもその事実を知らされない。名前も性別も知らされず、一切会わせてもらえない。それでも愛を持てと？」
「愛を持つのは無理だと思います。それより驚いたのが奥さんの行為です。自分自身のことを情報管制するのはまだ許せても、子供を産むか下ろすかさえ教えなかったんですか」
「そう、俺は冬に何度も聞いたんだけどね。てっきり下ろしたと思っていたら弁護士が下ろしてないって言い出しやがった」

「ふぅん……ひどいですね。子供は先生……ごめんなさい……」辺りをチラッと見る紫苑
「子供は静さんのものでもあるのに。子供の情報管制まで敷くなんて許されないと思います」
「まぁそう悪くいうなよ。その代わり養育費もいらないってことだろ。俺があいつを悪く言う分には良いんだが、人に言われると正直　良い気持ちしないからさ」
「ごめんなさい……でも、その人のやってることがおかしいから」
「俺の味方してくれるのは嬉しいけどさ、なんていうか……向こうの言い分もあるだろ」
「でも、それを一切言わないんですよね。静さんが混乱するのは当然です」
　ふぅとため息をつく。パスタはまだ来ない。遅いな。
「結局奥さんの気持ちが聞けないことには分からないことだらけですね。ところで、奥さんのお名前って聞いてもいいですか？」
「気になる？」
「はい」ときっぱり言った「だって私の好きな人の奥さんだった人ですから」
「……」俺は何も返さなかった。紫苑はさらっと俺のことを好きだと言った。それは告白のつもりなのだろうか、それともとっくに本人は告白してあるものだと考えているのだろうか。それに対して俺はどう返してやればいいものか。それより意外だったのが、この話を聞いても紫苑がまだ俺に好意を持っているということだ。
「静さん？」
「あ、悪い。ちょっとぼーっとしてた。名前、ね。うん……ちょっと珍しい名前だよ」
　俺ははぁと大きくため息をついた。そういえばあいつと初めて行った店もパスタ屋で、しかもまだ付き合う前だった。確かちょうどあの頃は見ごろなシーズンだったんだよな。
「本人のイメージとぴったりなんだろうなぁ。儚くて、ふわふわと不安定で。仄かに光を出しては消えてを繰り返して、気付いた頃にはいなくなってしまった。そんな名前だよ」
「……ほたる？」
　俺は黙って頷いた。ちょうどパスタが運ばれてきた。

　俺たちは黙って食べていた。蛍のことを話してから少し気まずい。怒涛のごとく喋ったので疲れているというのもある。少し黙って食べるくらいがちょうどいい。紫苑はおいしいなどとコメントしていて、話題をそらしている。俺は適当に相槌を打ちながら食べた。カルパッチョが美味いので薦めたら、気に入っていた。
　30 分ほどで食べ終わると、とっくに 10 時を回っていた。
「紫苑、もう帰らないと電車なくなるんじゃないか？」
「そうですね。でもまだ帰りたくないです」
「別に車で送ってってもいいけど、それだってどうせ何十分かの差だからちゃんと電車で帰ったほうがいいよ」
　紫苑は渋々承知した。俺が席を立つと紫苑はスーツの裾を指で摘んで引っ張ってきた。

「あの……後で渡しますから、払っておいてもらえませんか」
　この小声を聞いて俺は胸が痛くなるのを感じた。誰にも分からない痛みだ。引き起こしている当人さえも知らない痛み。
　俺は黙って頷くと会計を済ませて外へ出た。紫苑は店を出たところでパスタ代を手渡してきた。俺は戸惑いながらも受け取った。
　駅まで紫苑を連れて行き、改札で別れた。紫苑は名残惜しそうな顔をしていた。「明後日ですよね」というので「うん、会おう」といった。そしたら紫苑は少しにこりとして人だかりの中へ消えていった。
　歩いて駐車場へ向かっている途中ですぐにメールが来た。「今夜の話、聞けてよかったです。私、先生は悪いと思います。」そして改行が２つあって、「そして蛍さんも、悪いと思います。」とあった。
　そうだよな、と思いながらメールを返した。

2006 / 06 / 18

　今日は先生とデート……のはずだった。だけどまた突然のキャンセル。大人と付き合うってことはこういう障害に耐えなきゃいけないってことは分かってるけど、かなり落ち込むんだよね。
　でも、今日のメールは変だった。朝いきなり先生からメールが来た。キャンセルなら前日には教えてくれるのに。でも、それより変なのが文面。
「今日デートの約束が入ってたと思うけど、仕事が急に入ってしまって会えなくなった。すまん。で、ちょっと忙しいので今日明日はメールや電話を避けてくれないか。あと、塾であっても話しかけないでほしい。20 日になったらまた連絡をしてほしい」
　なんだか口調がいつもと違う。なんだろ……少し遠慮が無い言い方に感じる。いつもはもっと遠慮がちというか、距離がある。そもそもデートなんて言葉、先生は使わない。こないだ私が好きって言ったことで恋人関係が成立したのだろうか。……解せない。でもちゃんと先生の文だし、送信先も同じ。誰かに書かされた感じでもない。一瞬蛍さんの存在を疑ったけど、あの話を聞く限りじゃ一緒に住んでいないから遠慮することはないし。なんだろう……。仕事場で誰かが横にいるの？
　私は出番を逃したスカートを折りたたんでタンスに戻しながら首をかしげた。まぁいいか。とりあえず言われた通りにしよう。
　部屋を出るとお父さんの部屋に行った。今日は休みだと言っていたのでいるはずだ。デートが台無しになってしまったのでお父さんにどこか連れてってもらおう。この街は車がないと不便だし、私はお金ないから、どこか連れてってもらって何か買ってもらおう。
　部屋をノックするとお父さんが出てきた。休みなのに清潔な格好をしていて髭も剃っている。スーツを着ればいつでも仕事に行けそうだ。こういうところが凄く好き。

さて、機嫌を伺ってから頼むべきなのだろうが、いきなり用件を言うことにした。この父親の安定度はレイン以上のもので、不機嫌だった日というのを見たことがない。ついでにいえば、機嫌が良いと思った日もないが。
「紫苑、どうしたの」
「あのね、今日お父さん休みでしょ。私もだから、どっか連れてってほしいなぁって」
すると即答で「いいよ」と快諾「どこに行きたいの？」
「久喜」
「買い物か？」
「うん、本がほしくて。あと洗顔クリームとか無くなっちゃったから薬局も行きたい」
「分かった」といってお父さんはそのまま出てきた。用意なんて何も無い。そのままの格好で外に出れるくらい小奇麗にしているから。私は何か誇らしくなって右腕に抱きついたら、邪魔そうに「階段、危ないよ」と言われた。

2006 / 06 / 20

朝、メールに書いてあった通り、紫苑から連絡が来た。こないだの日曜のデートはキャンセルされてしまった。父親との用事で行けなくなったそうだが、20 日に連絡をするからそれまで待っていてほしいとのことだった。塾で紫苑を見かけたが、そこでは話しかけづらいので特に何も言わないでおいた。で、朝になってメールが入ってきた。
「連絡って朝からじゃ早かったですか？」
「いや、別に。それより一昨日は残念だったね」と返して顔を洗いに行く。起きたてでまだ頭がぼーっとしている。
「はい。今度の日曜は会えますか？」
歯磨きをしながら返す。
「今度の日曜は仕事なんだ。ごめんね。次の休みはその後の火曜になる」
「そうですか、残念です。火曜に会えませんか？私、学校休みますから」
朝食を取る。焼いてあるパンにジャムを付けてヨーグルトとジュースを飲むだけだ。蛍がいようがいまいが何ら変わりはない生活だ。むしろ朝のケンカやイライラがなく、ストレスのない食事を送れる。
「教師が YES と言うと思ってるのかな？学校はちゃんと行った方がいいよ」
「そうですね(>_<)←絵文字使ってみました。使い方あってます？」
女子高生がおっさんに聞くなよ。因みに厳密にはそれは顔文字というんだが。まぁどうでもいいか。
「あってるんじゃない？かわいいよ」
そういえば蛍との会話が嫌で、朝はいつもテレビをつけてやり過ごしていたな。こうしてみると静かなもんだ。

「かわいいだって☆わーい♪
　でも、せっかくだから会いたいです。学校は行くから終わったら会ってもらえませんか？」
　絵文字、増えたな。
「いいよ。俺も会いたいし。どこでいつが良い？俺は休みだから紫苑に合わせるよ」
　すると少し間が空いてから。
「学校帰りは南古谷っていう駅を使ってるんです。最近塾に行くんで上福岡って駅にしてるんですけど。スクールバスは南古谷だけじゃなくて上福岡と本川越っていうとこにも出てます。待ち合わせはこのどれかがいいと思いますけど、練馬からだとどこがいいですか？」
「うーん、その後どこに行くかによるね。あと、交通手段も。車ならどの駅でも大差ないけど、上福岡が練馬には一番近いね」
「じゃあ上福岡の駅のところでいいですか？４時にはそこにいます。着いたら電話しますから」
「うん、分かった。それでいいよ。その後どこに行きたい？」
「んと……白岡に来てみませんか？随分前に見てみたいって言ってたし」
「ああ、いいね。一度行ってみたかったし。じゃあ火曜の４時で」
「はい、楽しみにしてます」
　食器を洗って片付けるとケータイを閉じた。

2006 /06 / 27

　午前中に授業の予習や計画を立てておいた。休日にしておく仕事は片付けたし、後顧の憂いは無い。服を着替えて３時に家を出た。
　上福岡に着いたのは４時前だった。駅前のロータリーにはタクシーが溜まっている。車を留めておく場所がない。路上のパーキングも埋まっている。別に降りるわけでもないのでいいだろうということで駅の近くに留めておいた。
　すると４時にもならないうちに紫苑が前を通るのが見えた。俺は思わず手を振って合図したが、気付くはずがないかと思ってケータイに手を伸ばそうとした。すると紫苑がきょろきょろして俺を見つけ、手を振って合図した。
　え……気付いたの？ありえない。最後に付き合った女が蛍だからそう思うのか？店の中で迷子になり、手を上げている俺の真横を通っているのに全く気付かず通過し、呆れられていた蛍。その女と同じ生き物だとはとても思えない。
　紫苑が走り寄ってくる。ウィンドウを開ける。
「よく見つかったね」
「え……？だって、待ち合わせしてたから。もしかして早く来てるかもしれないし。周り

を見たら先生がいたから」と不思議そうに答える。そうか、そうだよな。そんなこと、当たり前のことなんだよな。要求しなくても始めから持っている常識なんだよな。俺はため息をついた。
「入って」というと紫苑はすぐに入ってきた。乗り慣れているようだ。家に車があるのだろう。
　ハザードを点けたまま少し話す。
「早かったね」
「はい、急いできたので。先生も早かったですね」
「うん、仕事も済ませてきたしね。今日はもう完全にフリーだよ」
「よかった。あの、この車、変わってますね。２人乗りなんですか？」
「いや、後ろに座れるよ。４人乗り。セダンより１人少ないかな。クーペで４人乗りは破格だと思うけどね」
「へぇ……？」あまり車に関心は無いような紫苑「先生って車好きなんですか？」
「うん、好きだよ」
「あの……この車って高いんですか？」
「高級セダンよりはずっと安いよ。でも 300 くらいはしたかな」
「さっ……！」紫苑は驚いて目を丸くしている「あの……」
「何？また面白クエスチョンでも思いついたの？」
「ふふ、そうかも。でもちょっと不謹慎」
「どうぞ、fire away」
「え？」あ、そうか知らないのか。紫苑ならそのくらい知っているかと思った「いや、何？」
「えーと、こういうのって財産分与の対象になるのかなって……」
「うん、良いとこ突くね。飽くなき好奇心のおかげで紫苑は凄い人になれたんだな。車は財産分与の対象だよ。でもこれを買ったのは俺だったし、蛍は関与してない。それでも持ってかれるものは持ってかれるんだけど、蛍はそれも放棄したから」
「そうなんですか。良かった。蛍さんが関わってたら乗りたくないなぁって思ったの」
「そっか……」何となく気まずい「あのさ、紫苑の家の車は何？」
「え？なんだろう……銀というか白というか……お父さんのだから分かりません」
　いや、所有者の問題じゃないだろ。そりゃ単に車に興味がないということだ。
「メーカーは？」
「えっと……聞いたことないです」
「車の前にロゴが付いてるでしょ。どんな形？」
「んと……こういう」と紫苑が空に絵を書き出した「かぼちゃっぽい……んんと、帽子みたいな感じの」
「うわ、クラウンじゃん！」思わず声が昂ぶる。紫苑は少し驚く。
「え、凄いんですか？あれ」

「モノによるけどね。新車だと 150 から 500 くらいの値幅があるよ。マニュアル？」
「え、説明書ですか？新品だから付いてたと思いますよ」
「いや、そうじゃなくて、トランスミッションのことなんだけど。ええと……ほら、こういうレバーって付いてる？」
　レバーを握る。紫苑は唸って「あまり見ないから分からないです。何かこの辺に付いてるのは分かりますけど」
　おいおい、興味がないからっていくらなんでもそれはないだろう。
「お父さん、運転するときよくここ弄る？頻繁に、特に信号変わったときとか。それとも車を乗り降りするとき弄るくらい？」
「殆ど弄らないです」
「じゃあオートマか。まぁそうだろうな。さて、そろそろ行こうか。白岡だったよね」
「細かく言うと新白岡ですけど。あ、カーナビ、綺麗ですね。ウチのより新しい感じ。これで道が分かるんですね。私の家の住所を登録すれば機械が連れてってくれるんでしょ？」
　カーナビを面白がって触る紫苑。勝手に押すのでタッチパネルが反応して画面が動く。
「わ、どうしよう。何か私へンなことしました？壊れちゃったらどうしよう……」
「はは、かわいいな。大丈夫。それにナビ使わなくても道くらい分かるよ。さっき地図見たから」

　ハザードを消し、右ウィンカーを出す。１速に入れてサイドブレーキを下ろす。人がいないのを見計らって無理にUターンする。
「え、地図見ただけで覚えられるんですか？」
「うん、まあ大体はね」
「男っぽいですね。ウチのお父さんはそういうところは先生に勝てないです」
「紫苑の親父さんに勝てるところがあるっていうのは光栄だね」といったら横で紫苑が凄く嬉しそうな顔をしたのが分かった。逆に俺のほうが紫苑に好意を感じた。
「ねぇ、どうやって行くのか聞いてもいいですか？」
「うん、初めてのところだから最短ルートよりも大通り優先で行くよ。一旦南下して 254 まで戻る。紫苑の行ってる北城高の北も 254 で、物理的にはそっちのほうが近いんだが、有料道路でね。200 円くらいだからどうでもいいけど。俺は通勤にはいつも南の 254 を使ってるんだよ。慣れてるから今日もそっちを使う」
「あぁ、高校の横のあのおっきい道って有料だったんですか……」
　踏み切りのところで電車待ちをする。
「この先の亀久保の交差点で右折すると 254 だよ。左折すれば俺の家の方まで一直線だ」
「え！そうなんですか！？」
「うん、254 はわりと東上線沿いだからね。で、川越で 254 から 16 号に乗り換える。荒川だの指扇だのを越えて県道３号を登っていくと、それに沿って白岡ってわけだ」

「ふぅん、なんだか凄いなぁ、男の人って」
「そうかな」と言いつつも俺は正直良い気分だった。
　踏み切りを越えて直進する。亀久保までは少し混んでいた。254 に乗ると快調になった。16 号に乗り継いだが、川越の方は流石に混んでいた。そこを抜けると途端に快調だ。紫苑はなぜか窓の外を見ていてあまり話をしない。肘をついて顎に手を当てている。車にタバコの匂いが残っていて臭いのだろうか。
「どうしたの？さっきから口数が少ないけど。タバコのせい？もしくは酔った？」
「え」といってこちらを振り向く「いえ、運転中だから話しかけちゃ悪いって思って」
「別に……大丈夫だけど？」
「そういうものなんですか？お父さん、運転中はいつもよりもっと喋らないから、迷惑なのかなって思って」
「あぁ、そういう人もいるね。俺は喋りながら運転できる人だから」
「そうなんですか。へぇ、何だか面白いなぁ。同じ男の人でも随分違う」
「お父さんとじゃ世代差もあるから余計にそう感じるかもね」
「うん、そうですね。特にスピードとか」
「スピード？」歩行者信号が点滅を開始したのでアクセルを踏む。
「先生、黄色でも止まらないときがあるじゃないですか」
「あぁ、そうだね。こういう道路で赤にはまると連続して赤にはまるリズムが出来やすいんだよ」
「今も黄色で通過しましたよね」
「道交法的には安全な停止ができない場合は黄色でも行っていいんだよ」と何も知らない人を巧く操ってみる。確かにその定義に嘘はない。歩行者信号が点滅すれば概ね信号が黄色になる合図だ。だからその前に通過するためにスピードを上げる。問題はその時点でスピード違反をしているという点。だが、こんなことで一々捕まえてたら若いドライバーなんて激減間違いなしだ。
「あと、お父さんより速いです。さっき 90 キロ越えてましたよね。スポーツカーだからですか？」
「それはあるかもね。でも一番は乗り手の問題だな。俺ぐらいの年齢はスピード出すし、俺自身スピードが好きだから。まぁこんな車買うくらいだからね。因みに、90 キロなんて速いに入らないよ。怖い？優しい運転の方が好き？」
「怖い……です。でも嫌いじゃないかも。遅いと早くしてって思うときがあるから」と言ってにこりとする。
「いま夜だったら良かったのにね」
「え？どうしてですか？」
　荒川を越えて少し。左右には高いフェンスがある。ここは道が空いていて人も来ないので高速の如く飛ばす。

「きっと夜なら 140 は出せるだろうから」
「え……」と紫苑は顔を引きつらせた「先生、法律で決まってる速度っていくつですか」
「何も無ければ一般道路の法定速度は 60 だよ。高速はマックスで 100」
　紫苑は俺の手元を覗き込む「法律で 100 なのに……」
「車じゃなきゃもっと速いよ」
「先生、バイクも乗るんですか？」
「うん、全天候型だからすっかり車派になっちゃったけどね。何かと車の方が便利だからいったん車に慣れちゃうとバイクは中々乗らないねぇ。よっぽどバイク好きな人なら乗るんだろうけど。俺は車のほうが好きだしな」
「バイクなんて車以上に知りません。ウチにもないし。速い自転車みたいなイメージ」
「はは、そりゃいいな」

　道なりに快適に進む。
「自転車は俺も乗るよ」
「あ、私と同じですね」
　俺は紫苑を見て首を振る「違う。ロードレーサーだよ。ママチャリじゃない」
「なんです、それ？」
「ほら、競輪とかで見ない？こう、ハンドルがぶら下がってる自転車。ドロップハンドルっていうんだけど」
「あぁ、知ってます。偶に走ってますよね、ヘルメットかぶって半ズボン履いてメガネかけてる人。ロードレーサーっていうんですか」
「紫苑のはふつうの自転車？」
「はい、籠があって、こう……前のほうにＶ字型になってるハンドルの。ベルがついてて」
「うんうん、ママチャリだね。あれ、どれくらいの速さだと思う？」
　俺はきっとさぞ楽しそうに見えているだろう。実際楽しいからだ。紫苑は退屈かもしれないが、合わせてくれている。
「速さ……ですか？えっと……凄い速いですよね。人が歩くのと比べたら羽が生えたみたいに。だけど……そもそも人ってどれくらいの速度で歩いてるんですか？」
「歩行速度は概ね時速５キロくらいだよ。じゃあ自転車はどれくらいだと思う？」
「うーん、その倍以上速い気がします。15 キロくらい？」
「いい勘だね。そのくらいのときも多いね。自転車は差が大きいけど、ママチャリで急ぐと 20 キロかそのくらいだよ」
「速いですね。20 キロも１時間で走るなんて」
「急げば大体俺の家から川越まで１時間強で着く計算だな。いや、せいぜい俺の家からじゃさっきの上福岡がいいところかな。で、ロードレーサーはどれくらいだと思う？」
「速そうですよね。40 キロとか？」

「大きく出たね。ママチャリで急ぐ倍か。でも、実際はもっと速いんだ。40 キロじゃコンスタントに漕げる速度だよ。流れに乗ると 60 キロくらい行く」
「え！？60 って……車と変わらないじゃないですか」
「うん、だから俺らは車道出ちゃうよ。まぁ実際 60 キロを一人でコンスタントに走るのはキツ過ぎだけどね」
「人数って関係あるんですか？」
「うん。ロードレーサーのレースってさ、チームプレーなんだよ」
「へぇ、意外」
「じゃあなんでチームプレーか、物理的に考えてみようか」
「チームプレーをするってことは……役割を分担しているってことですよね。レースは競争だから、最終的にメンバーの誰かが勝てばいい。ってことは、他の人はその援助をする。……んー、他のチームの妨害？」
「はは。怖いな、紫苑は」
「だってぇ。他には……うーん、そもそも元の話題が速度についてだから」
　お、流石に頭が良いな。こういういところ、根本的に頭良い。話の流れというものを理解している。こういう人間は凄く好きだ。
「メンバーが速度を上げるのに役立つ。或いは主力メンバーの体力を温存させる、とかですか？」
「いいね。そう、そういうこと。走るときに邪魔なのは他のプレイヤーもさることながら、物理的には何でしょう？」
「うーん……風？」
「正解。流石紫苑。天才、可愛い、生徒の鏡」ちゃっかり可愛いを混ぜてみる。
「褒めすぎです」紫苑ははにかんだ。可愛いには確実に反応したはずだ。
「いや、ほんと。うん、風なんだよね。で、メンバーは風除けの役目を果たすわけ。風の障壁をメンバーが破る。集団走行をしていると風の抵抗が減るから、一人で 40 キロ漕ぐときの力でたとえば 50,60 キロを出すことができる。そのおかげで仲間は体力を温存できる」
「なるほど」
「集団走行時は平均時速が 60 キロなんて珍しくない。80 キロや 90 キロに最高時速が達することもある世界だよ」
「え、自転車で車より速いってことですか！？」
「あぁ、なにせ軽いからね。原理的には車なんか遅い代物だよ。ああいう自転車は路面との接触面を最小限にするためにタイヤを細くしている。タイヤの空気圧もママチャリと比べると半端無いし。その上、車体を限界まで軽くしてる」
「どのくらい軽いんですか？」
「そうだな……極端なのだと４キロ台というのが存在するらしい。見たことないけど。でもまぁ７キロとか８キロとかそういうのが多いかな」

「へぇ、ふつうの自転車ってどのくらいですか？」
「重いと 20 キロくらいするよ」
「わ、じゃあそれって凄い軽いんですね」
「自転車なのに女の子でも片手で余裕で持ち上げられるからね。何せ 10 キロのダンベルひとつより軽い」
「凄い世界……。何でできてるんですか？」
「アルミ合金が多いよ。ちょっと高いものになると炭素が多い。もはや金属じゃないね」
「先生は何に乗ってるんですか？」
「んー、俺はそこまではまってるわけじゃないんだよ。ジャイアントってメーカーのコンポジットっていうやつだよ。青っぽいの。ジャイアントは自社工場の関係でコストパフォーマンスがいい。シェアが多くて初心者向けでもある」
「先生のって高いんですか？」
「モノによっちゃ原チャより高いけど、俺のは 20 万くらいだよ」
「えっ！？」紫苑の顔が引きつる「自転車が 20 万……？」想像を絶したようだ。可愛いな。
「あの、ところで「ゲンチャ」って何ですか？」
　うわ、本当に何も知らない子供なんだな。
「原動機付き自転車のことで、最近は性能もデザインもいいから乗らない人には普通二輪と区別がつかなくなってきてるよ。要するにバイクの仲間」
「へぇ……。それにしても自転車って凄いんですね」
「そう、一番凄いのは人力ってことだよ。人力で車を越えるからね。原チャなんて確実に追い抜かす。人の脚でね。それがロマンだよ。凄くないか？だってほら、歩けば 5 キロしか出さないこの脚でだぜ？」
「はい、凄いです。先生って乗り物好きなんですね」
「うん、そうだね。電車は嫌いだけど。混むから」
「ふふ……。あ、そういえば元はバイクの話でしたっけ」
「そうそう、バイクは最速だよ。チャリと同じように空気抵抗が少ないし、二輪だから地面に速度も奪われにくい。車体も遥かに軽いしね」
「なるほど」
「同じ排気量なら二輪の方が遥かに速い。ネイキッドとか色んなメーカーがあるが、俺のだと恐らくマックス 300 キロくらいいくんじゃないか」
「え、300……ですか？ありえるんですか？それって 1 時間に 300 キロってことですよね。道さえあれば関西の方まで行くってことですよね」
　紫苑は反応が良く、一々関心して興味を持ってくれる。話すのも巧いが聞くのも巧い。俺は紫苑といると気分が良くなる。どうして彼女に友達がいないのだろうかと不思議だ。とっつきにくいところを除けばこんなに良い子なのに。
「あぁ、300 なんていったら空気の壁が凄いぞ。ロードレーサー以上の前傾姿勢で臨むから

ね。吹っ飛ばされたら一巻の終わり」
「300……新幹線みたいですね。300……殆ど音速じゃないですか」
「なんかその数が凄い気になるみたいだね」
「はい。だって 300 キロですよ。私でも凄さが分かります。だって音速って……331.5 にセ氏温度の 0.6 倍を足したものでしょう？あとちょっとで音の壁にぶつかっちゃいますよ」
「ははは、面白い式を覚えてるね。まぁ 300 というのは誇張かもしれないが、200 を余裕で超えるのは約束するよ。それぐらいバイクは速いってわけ。路上を走るものの中では最速じゃないかな。な、そう考えると 90 キロなんて大したことないだろ」
「いーえ、ダメです。60 キロ道路をそんなんで走ったら捕まっちゃうんじゃないですか？法律はあくまで 60 って言ってるんだから。私、ごまかされませんからね」
「んー、頭が良いと扱いづらくて困るな」

そうこうしているうちに県道 3 号を登っていた。案内標識が見える。交差点名も書いてある。白岡西――確かここだったな。交差点で右折する。
「あ、ここで曲がるんですね」
「うん、ここからは小道になるからあてずっぽだけど。紫苑、案内できる？」
「この辺なら分かりますよ」
「とりあえずまっすぐ行って寺塚ってとこだったと思うけど」
「え……住所を言われても分からないです」
「ん？いや、住所じゃなくて交差点名」
「はぁ……交差点」
紫苑にはピンと来ないようだ。寺塚の交差点に差し掛かった。
「確かここで左折だったかな」
「凄い、何で分かるんですか？ほんとに地図覚えてるんですね。初めてとは思えないです」
左折してまっすぐ行くとガードをくぐる。この上は東北自動車道のはずだ。
「先生、ここくぐったらずっとまっすぐです」
紫苑の言葉に誘われて直進する。赤信号に止められ、辺りを見回すと武蔵野銀行が見える。へぇ、ここが新白岡か。閑静な住宅街ってところだな。
「ところで車はどこに停めようか」
「ウチの駐車場で良いと思いますよ」
「え……それはまずいだろ」
「いまお母さんもお父さんもいませんから大丈夫です。車もないから駐車場も使えますし」
信号が青になる。後続車がルームミラーに映る。ちんたらしてるわけにはいかない。
「ええと、直進？」
「はい」紫苑はすぐに答えた。レスポンスが早い。
そのまま促され、紫苑の家へ行くことになった。住宅街のようで、小奇麗な家がたくさ

ん並んでいる。似たような形の家ばかりだ。道路も若干碁盤の目のようだ。こりゃニュータウンかなんかでわんさか分譲されたんだな。
「そこです」と紫苑が指差す「分かります？」
「うん、大丈夫。表札、見えたから」
「私、降ります。ガラガラを開けないと車が入れないから」
　ガラガラ、ね。俺は車を停める。本当に誰もいないと良いのだが。紫苑がとてとて走って「ガラガラ」を開ける。バックで駐車すると、車を降りる。
　降りて伸びをする。もう５時過ぎか。まだまだ明るいな。
「先生？こっち」紫苑が玄関で手招きする。
「いや、お邪魔はしないよ、本当に。仮にも俺は紫苑の塾の先生だぞ。っていうか同じ塾ってだけじゃなく、紫苑の英語を実際に担当してるんだぞ。俺の倫理的にダメだよ」
「そうですか……。じゃあ、外でも歩きましょうか。白岡を案内します」
「いいね、そうしよう。車疲れしちゃったし、歩くのが良いかもね」
　というかこの近くから早く去りたいのだ。近所の目もあるだろうし。紫苑は敷地の外へ出ると、歩き出した。この辺りの家は一々家に番地が書いてある。どうやらここは１丁目らしい。どの家も赤レンガっぽい外見をしていて、生垣のある家が殆どだ。窓なんかのデザインからして築 10～20 年の間ってとこだろうな。俺がガキのころ流行ってた造りだ。
「あのさ、親御さん、いつ帰ってくるの？早く帰ってきて車があったら驚くよね」
「大丈夫です。たとえ病気でも早く帰って来るなんてことないし、もしそうなら 100%私にご飯作ってとか何かしてとか連絡してきますから。２人とも今日は早くとも９時を過ぎないと帰ってきません」
「そっか……あと、近所の人はどう思うかな。珍しい車があるな、とか」
「それも大丈夫です。近所付き合いないですから」
「そうなんだ……」
「先生の気持ち、ちゃんと分かってるし、考えてますよ。軽率なことはしません。ただのガキじゃあないですよ？」と見透かしたような声。
　先ほどの道へ出た。向かいが銀行だ。酒屋などを通り過ぎると右手に遊歩道があった。信号を渡ると右手にミニストップがある。そこを過ぎると交番があった。そしてその左前に新白岡の駅があった。ここから毎日紫苑は通っているのか。
　駅の周りはロータリーになっていて、店が何件かある。だが見た感じ美容院や英会話や菓子屋や飲み屋がある程度だ。ここは……これしかないのだろうか。
「先生、凄い田舎って思ってるでしょ」
「あ、いや……田舎とは思ってないよ」
「何もないなとは思ってるよね」
「う……ん、まぁ」否定はできない。
「駅の向こう口ってあるよね」

「はい。ただ、こっち以上に何もないですけど。駐車場ばっかですから」
「そうか……」隣が久喜だというのに、正直驚きだ「因みに白岡と新白岡とじゃあ」
「んー、あんまり変わらないですね。向こうの方がごちゃごちゃしてるかな。お店はあるけど」
「そうか」としか言いようがない。
「ほら、先生、驚くって言ったでしょ」と勝ち誇ったように言う。まぁ、負けておこう。
「毎日ここを使ってるんだ？」
「そうです。この駅から。夜は暗いですよ」
「店ってさ、ミニストップしかないの？」
「はい。この辺りだとそこだけです。でも、今度スーパーがそこにできるんですよ」と交番の横の空き地を指す。ぜひとも早急に作るべきだろう。
　歩いて遊歩道へ戻った。途中、ミニストップのところで学生が屯していた。
「あれはどこの学生？」
「あー、あれは白岡高ですね」
　塾業界の俺が知らないな。多分偏差値が高くないのだろう。

　遊歩道には芝生が敷かれていて、ベンチが置いてある。静かで誰も居ない。夕方だというのに。
「ちょっと座りましょうか」といって紫苑は座る。俺も倣う。ふぅとため息をつく。
「でもさ、俺、こういう街好きだよ。落ち着く。人がたくさんいるはずなのに閑静な住宅街ってちょっとした憧れなんだ。不便とか抜きでさ」
「私も嫌いじゃないです。空気も悪くないし」
　はぁ、と紫苑が大きくため息をついた。落ち着いて一息ってとこだろう。
「ねぇ先生。変なこと聞いてもいいですか？」
　いつものことだろという言葉を押し殺しつつ頷く。
「ファンタジーって好きですか？」
「ん？ハリポタとか？」
「別に何でもいいですけど」
「うーん、まぁ人並みだと思うよ。子供のころは好きだったけど」
「その物語の主人公になりたいって思ったことは？」
「子供のころなら少し。なんかこの話、前にしたね」
「子供ってどのくらい？」紫苑は俺の言葉を流して聞いてきた。
「そうだな……とりあえず高校に入ったら忘れてたな」
「そうですよね、みんな、そうなんですよね。ねぇ先生、もしそういう夢をずっと小さい頃から持ち続けてたとしたら、それって凄い変なことですか？たとえば高校生になってもそういうことを本気で願い続けるとか」

「うーん。ヘンかどうか……まぁ、マイノリティではあるけど、俺はわりとそういうの慣れてるつもりだよ」
「そうなんですか？」
「いやまぁ、蛍がそういうやつだったから。自分の頭の中で架空の彼氏を作っててな、子供のころから。ご丁寧に名前を付けて絵まで書いて。小学のときに思いついたらしいが、それを俺に出会うまでやってた」
「そうなんですか？出会うまでって……」
「付き合ったのは大学４年だな。しかも結婚してからもその彼氏の話を俺にするわけだ」
「どう思ってました？先生は」
「いや……ふつうに俺じゃ物足りないから夢彼氏の話をしてるのかなってへこんでたよ。でも楽しそうにしてるから話を合わせてた。それで向こうの精神が安定するなら別に良いかって。蛍はね、結構苛められっ子でさ、友達がいなかったんだよ。だからそういう妄想に走ったんだろうな。可哀想だと思ってたから話には付き合ってたよ。別に嫌じゃなかったけど、何度か夜中までその話をされたことがあってね。あれはちょっと辛かったな」
「なるほど……蛍さんは頭の中に誰かを作ってたんですね」
「紫苑もそうなの？」
　首を振る「私は違います。私の場合、異世界があるってずっと信じてたんです。だから架空の誰かを作るんじゃなくて、いつか自分がその世界に召喚されるんじゃないかって思ってたんです」
「異世界に召喚か。ハリポタ以上だね。ナルニアに近いのかな。ほら、洋服ダンスの向こうには……ってやつだよ」
「そうですね、ナルニアに近いかも。でも、私は本当の異世界があったらそこはとてもリアルなはずだって思ったんです」
「リアル？」
　紫苑は脚をぷらぷらさせる。
「ファンタジーの異世界ってなぜか日本語が通じたり、相手の言葉が分かる魔法とかがあるじゃないですか。それっていかにもご都合主義だなって」
「そりゃそうだな、売り物だから」
「そう。そうなんです。じゃあ今度は私が問題出します。車のときみたいに。今度は先生が考えてくださいね」
「ほぉ」と身を乗り出す。
「リアルな異世界ってどんなところでしょう？」
「うーん、まず環境的に地球に近いはずだ。火星とかに召喚されたらその瞬間死ぬからね。召喚する奴も非対応の人間を呼ぶとは思えない。無意味だからな。となると生きていける異世界があるとするならそこは地球にそっくりだろうな」
「うんうん、流石は先生」とにこにこする。楽しそうだ。蛍の夢彼氏の話と違って何とな

く後ろ向きでない動機を感じる。
「地球に似てるってことは恐らくそこにいるやつらも限りなく人間に近いだろうな。でも、異世界らしくないな。下半身が馬とかさ、そういうほうがファンタジーっぽいよ。でもリアルな異世界なんて所詮そんなもんだろうな」
「で、同じように人間が支配する異世界だとして、そこに行ったら何に困るでしょう」
「ほぼ全てじゃないか？中世ヨーロッパみたいなとこじゃいきなり魔女扱いで焼き殺されかねんし。病気になったら医者だっているのかどうか怪しい。逆に地球より科学力があったら、知らない道具の扱いとかで困るだろうな。そして何より言葉だろうな。意思疎通ができやしない。ボディランゲージも異なるだろうし」
「そうなんです。だから私は虫歯も作らないようにしたし、持病も持たないように生きてきたんです。異世界の言葉を早く学ぶために語学も言語学もやりました。物理化学なんかはサバイバルに役立つ知識が多いから、科学もあらかた学びました。剣と魔法の世界かもしれないから空手や剣道もやりました」
「え、そうなの？空手？……紫苑、強いんだ」
「はい……引きました？」
「いや、俺、強い方が好みだから。しかし頼もしいね。その上家事まで全部できるなんて。あ、そうか、料理やらができるのも異世界で自炊できるようにか」
「そうなんです！」紫苑はずいっと近寄ってきた。興奮しているな。
「召喚する側も有能な人材がほしいでしょ？だから私、一生懸命がんばったんです。神だか悪魔だか人間だか知らないけど、誰かが私を選ぶのを待って」
「なるほど、それで紫苑は万能な上、成績も抜群なわけか。しかし凄い話だな。首席の動機を聞いたら「異世界に行っても困らないため」か。誰も信じないだろうな」
「先生も？」
「いや」思わず笑う「ここまで聞いて誰が疑うかよ。でもまぁ、俺じゃなきゃ引いてるかもな、確かに」
「良かった……この話したら引かれるんじゃないかって不安だったんです」
「だったら別に黙ってても良かったんじゃない？言わなきゃいけないことでもないし」
　紫苑はぷるぷると子犬のように首を振る。
「いいえ、私のことを分かってもらうためには避けられない道なんです」
「そうか、そうだな、紫苑がここまで才女になった理由だもんな」
　才女と呼ばれたのが嬉しかったのか、「えへへ」と笑うが、すぐに顔を戻す。
「それもありますけど、違うんです。核心はここからなんです」
　紫苑は立ち上がった。
「次はどこを案内してくれるの？」
　振り向きざまに紫苑は言った。
「異世界です」

俺は黙って紫苑を見上げていた。数秒間の硬直があったと思う。
「えと、それはどういう比喩？」
「比喩というか、半分リテラリーな意味です」
「異世界が？」
「はい。勿論直に連れてくわけじゃないですけど」
「それを聞いて安心したよ。で、どういう意味？」
紫苑は歩き出す。
「ねぇ先生、さっきの話は私の願望についてでした。私がどうしてこう生きてきたのかというお話。じゃあ、その話の結末はどうなったと思います？」
「異世界に行きたいと願い続けた結果か？常識的に考えれば諦めたってとこだが……」
「ですよね。ねぇ、もしその願いが本当に叶ったって言ったら、先生、信じてくれますか？」
「うーん」俺は唸った「俺はさ、紫苑の機嫌を取りたいわけじゃないんだよ。だから安易に信じるなんて言えない。かといって紫苑が嘘を付く理由も見当たらない。ただ、不思議なことはある」
「なんでしょう？」
「もし異世界に行ったのなら、なんで紫苑が今ここにいるのか、とかね」
紫苑はにこりとした。俺の反応が馬鹿にしたものではないと知ってのことだろう。
「帰ってきたんです」
「うん……そうか。その前に少し確認していいか。紫苑は俺に作り話を信じて共感を得てほしいのか？蛍のように。それなら作り事は作り事というべきだよ。蛍は架空と断った上で話してくれたから、俺もまともに取り合ったんだ。ここはきちんと線引きしておきたい。ファンタジーはファンタジーであるからこそエンターテイメントでありえるんだ。ファンタジーでないと主張した瞬間、サイコパス行きだよ。それは分かるね。いいかい？これは信じてないとか信じてるという話以前だ。紫苑が本当といえば俺は本当という前提で真剣に受け答えをする」
紫苑は真剣な顔で頷くと「本当です」と言った"fire away, then"
思わず俺はにやりとした。本当に優秀な生徒だな。すぐに学習しやがる。語学のセンスがあるんだな。たとえ知らない言葉でも同じような文脈の中で巧く使いどころを見つける。
「ではひとつ。紫苑が異世界に滞在したなら、地球にいなかった期間、親は心配しなかったのか。学校では失踪ということで問題になり、最悪少女誘拐とか少女拉致とかいったニュースになったはずじゃないか」
「その答えは、召喚士が私を元の時空へ戻した――です」
「なるほどね。じゃあ紫苑の実年齢はいくつだ？それなら紫苑がやけに大人びてるのも分かる。実は女子高生の振りして俺と同じ年じゃないだろうね」
「そこまで大人じゃないです。１年もいませんでしたから。まだ辛うじて女子高生のはず

ですよ。それに私は誕生日が遅いですし、暫くは純正の女子高生のはずです。それにどうやったって戸籍上も学籍上も女子高生ですし」
「純正ね……。じゃあ時間の問題はクリアか。ただ、他にも疑問がある」
「はい、どんどんどうぞ」
「いや、これは紫苑が言い出したことだがな――言葉はどうした？日本語は通じないはずだろ。そのリアル異世界では」
「んー、-し，(Ча e((c-„ しɔ> ʌɔʌ ﾉeʌɔ ɔeʌ >cЧa (a elℓ (ea -ﾉ')- le Чɔl Чa ')- -(ɔl-ɔ (ea <c- -l(」
「えっ……！？」
　俺は傍から見てバカかというくらいあっけに取られてきょとんとした。いきなり紫苑は聞き慣れない言葉らしきものをすらすらと言い放った。これは俺の知ってる自然言語ではない。また、今の発話は適当に音素を並べ立てたものでもない。外国語を真似るのが巧いタレントがいるが、ああいう音の特徴や抑揚を真似ただけの猿芝居とは違った。言語学を専攻してた俺の耳はごまかせない。だからこそ過剰に驚いてしまった。今のは……言語だ。
　紫苑は勝ち誇った顔をするかと思いきや、項垂れた顔をしている。
「今のが私の隠している秘密です。この世界の人に教えちゃいけない気がして、いままで誰にも言わなかったんです」
「いまの、言葉だよね。適当にでっちあげたんなら俺の耳には判断できる。いまのは間違いなく言語だ。でも、俺の知らない自然言語かもしれない。紫苑なら不可能ではない話だ」
「そうですね。そう言われるとも思ってました。ただ、先生の関心を買うためにアルカをばらしたんじゃないです。これは儀式的なことなんです。こういうときはね、頭じゃなくて心で信じさせないとダメなんです。……いま、先生の心は、私の話を信じました」
「……ふむ。と、ところで、アルカって？」
「日本語に当てはめればそう発音するのが妥当でしょうね」
　いつの間にか紫苑の家の前まで来ていた。紫苑は門柱に寄りかかる。俯きながら呟く。
「アルカ……私が話した異世界の言葉の名前です。私は去年の 11 月 30 日、17 歳の誕生日に異世界アトラスへ召喚されました」
　門を開ける紫苑。
「あのさ……紫苑、俺は入らないって言ったと思うけど」
「そこの公園でもいいんですけど、この話は外でしたくないんです。お父さんたちは帰ってこないし、もちろん近所の人も生徒も誰もいません。完全に家には誰もいませんし、夜までは誰も帰ってきません。何も企んでませんよ」
「企むって？」
「だって先生、私のこと信じてないから」
「いや、さっきも言ったけど……確かに信じてはないけど、その代わり、疑ってもないよ」
「異世界のことじゃなくて」鍵を探す紫苑「私の気持ちをです」

「え？」
「ねぇ、先生。私って可愛いですか？」
「え……そうだな、うん、振り返るくらいの美少女だと思うけど」
「その上成績も良いですよね。それに先生より若いし。どうしてそんな女子高生が自分なんか相手にしてるんだろうって思ってません？」
　図星だった。俺は紫苑の気持ちを疑っているところがある。なぜ俺に懐いているのか、とな。
「何か企みがあって近寄ってるんじゃないかって思ってたでしょ、何割かは。いいんです、私だって先生が男の人だから二人きりで何かされないかって何割かは考えてました。そういう意味じゃまだお互い信頼できてないんです。日が浅いし、無理もないです」
「そう……かもな」
「でも、私のこと信じてくださいね。何か企んだりとか、ないですから」紫苑はドアを開ける。相手が女子高生と分かっていても不安が残る。何だか紫苑は変だ。嘘を言ってるようではないが、こんな話をされた後で家に入るのはかなりの勇気がいる。仮に誰もいなかったとしてもだ。でも、信じてやりたい。嘘だと断定する証拠もない。それにここに長く立っていたくない。俺は紫苑に続いて中へ入った。
「ほんとですよ」靴を脱ぎながら言う紫苑「何か罠にはめて先生の職を追いやろうとしてるとか、そんな疑いを私にかけてたら流石に怒りますからね。あ、靴、そこにお願いします」
「あぁ……うん。おじゃまします」

　中はふつうの一軒屋だった。廊下と階段が見える。ドアがいくつかある。トイレや居間だろうな。玄関も極めてふつうだ。下駄箱に傘入れ。一人娘を持つ家らしく、可愛らしい猫の置物。ふつうの家だ。
　紫苑は二階へあがる。俺は黙って付いていく。確かに人の気配はない。３人住まいのようだが、もう少し人がいても暮らせそうだ。そのまま紫苑の部屋へ通される。ドアを閉めると紫苑は座布団を２つ押入れから出して床に置く。
「どうぞ、先生」
「あぁ、ありがとう」
「くつろいでてください。私、お茶持ってきますから」
「いや、別にいいよ、そんな」
「大丈夫、もてなした痕跡は残しませんから。あと、別に何か変なものを混ぜたりもしませんから」
「いや、流石にそこまでは疑ってはないぞ、紫苑」
「ふふ……だって先生、怯えた猫みたいなんだもん」
「あのな……」

「じゃあ待っててね。あ、勝手に部屋を弄っちゃ嫌ですよ」
「はいはい」
　パタンとドアが閉まる。階段を下りる音が聞こえる。はぁと溜息をつく。
「何が教師としての倫理観だよ、俺……」
　しかし簡素な部屋だな。蛍の部屋と似てる。床は畳じゃないがな。しかし、もっと女の子らしい部屋かと思ってた。弄るなと言われてもさ、そもそも特に見るものもない。
　少しすると紫苑が戻ってきた。茶と菓子をお盆に乗せてきた。
「ありがとう。じゃあ、さっきの話の続きを聞こうか」
「どこまで話しましたっけ。あぁ、アトラスに召喚されたってところでしたね。召喚したのは悪魔メルティア」
「悪魔？」
「悪魔っていっても歴史的に人間に害をなしたことがあるだけで、必ずしも悪者じゃないんです、この世界では。逆に酷い神もいますし」
「なるほど。それでメルティアとやらは何で紫苑を？」
「結論から言うと世界を救うためです。よくある理由でしょ。アトラスには国があるんです。私が呼ばれたのはアトラス最大の国家、アルバザード」
「アルカにアトラスにアルバザードか。アで始まるものが多いけど、アラビア語の冠詞みたいなものか？」
「ううん、そうじゃないです。でも、a とか ar で始まるのは arte――神々の祖先――が語源のものが多いから、神話に出てくるものはアで始まるのが多いかもしれませんね」
「へぇ、面白いな。で、アルバザードのどこに召喚されたの？」
「一軒屋の地下室です。ひどいでしょ。しかもメルティアどっか行っちゃうし。私、わけ分からなかったんですよ」
「そうだろうねぇ。で、誰の家だったの？」
「ユティア家です。ていっても住んでるのはレインっていう女の子一人ですけど。でね、召喚されたら目の前でその子がいきなり男に襲われてたんです」
「危ないな」
「何が何だか分からなかったけど、とにかく男がナイフを持って襲ってたから、私、助けたんです」
「空手で？」
「いいえ。横に棒があったので剣道で」
「凄いな……」
「男は逃げて、私はレインと会いました。そしてそこで初めて言葉が通じないことを知りました。私も始めは異世界だなんて思わなかったから、外国か何かに飛ばされたのかと思いました。でも、そこは異世界だったんです」
「どうやって異世界だって知ったの？」

「言葉、町並み、人種……色々な要素です。そして天体と時差。私の時計はアトラスでも狂ってなかったんです。夜に召喚されて、向こうでも夜だったんです」
「つまり時差がなかったのか」
「時差がないってことは日本か、そこと同じ経度の南半球でしょ？でも、空には北半球の星座があったんです」
「科学の勉強が本当に役立ったわけだ」
「はい」と胸を張る「異世界と知ってからは言葉の学習の日々でした。レインは親を亡くして一人で住んでいて、とてもよくしてくれました。年も同じだったし、仲良くなりました」
「魔女裁判にならなくて良かったなぁ。ところで、向こうの科学力はどんなもんだったの？」
「遥かに未来的でした。っていっても表面上はフランスみたいな町並みなんですけどね」
「フランスねぇ」女が憧れそうだなという言葉を飲み込んだ。
「レインは近くにお父さんを亡くしてたんですけど、実はお父さんは殺されてたんです」
「誰に？」
「上司のフェンゼルという男です」紫苑が苦々しく言う。演技だとしたら心が篭っていすぎる。
「何の仕事をしていたの？」
「表面上は魔法学者です。因みにアトラスではもう魔法は廃れてました。お父さんは召喚省という国の機関の高官でした。フェンゼルはその高官を束ねる長でした」
「どうして殺したの？」
「ちょっと回り道しますけど。ちょうどそのころ、神様が杖をなくしたんです。悪魔の杖ヴァルデを。その杖はアルバザードに行きました。神様はそれを探すように召喚省のフェンゼルに命じたんです」
「魔法はないのに神とは交信できたんだ？」
「廃れてはいましたが、一部の人間はまだ魔法が使えましたから。その杖は凄い魔力を持っているんです。フェンゼルは神に返す前にその杖でアルバザードの執政官であるアルテナさんを暗殺しようともくろんだんです。それで部下たちに杖を探させました」
「下克上か」
「レインのお父さんが杖を見つけました。でもフェンゼルの計画を知って、杖を持って逃げたんです」
「だけど結局殺されてしまったと。そうしたら娘のレインってのはどうなるんだ？それに杖は？」
「杖は隠しました。召喚省の役人は身元を隠しているのでレインが見つかるまでは時間がかかりました」
「なるほど、それで見つかって刺客が送られたところ、紫苑が助けたわけだ」

「そうなんです。まぁ細かくいうとその刺客のネブラは単独行動だったんで後に粛清されたんですが」
「ふぅむ。でも裏切り者の刺客一人失ったくらいじゃフェンゼルは諦めないよな」
「はい。それに、レインのお父さんと同じようにフェンゼルの計画を知った人間が他にもいました」
「ということは、アルテナ派とフェンゼル派に分かれるわけか」
「そうです。両者とも杖がほしいので、レインのお父さんがどこに隠したかを躍起になって探していました。そんなこととは知らずに私はアルカの勉強をしていました。で、そんなある日、私はアルシェという男の人に会いました。ほら……前に言いましたよね。好きかもって初めて思った人」
「あぁ、あれは異世界の人だったのか。じゃあ地球じゃ俺が最初の候補だったってことになるのかな」
「はい」と少し顔を赤らめる「アルテナ派にはハインという人がいました。この人がアルシェのお父さんです。自分が動けない代わりにアルシェをよこしてレインとコンタクトを取らせたんです」
「ハインとその息子のアルシェか」
「アルシェはレインにお父さんの死の真相を告げました。レインはお父さんの無念を晴らすために神がなくしたもうひとつのアイテムを探す旅に協力しました。勿論私もです」
「もうひとつのって……杖はどうなったの？」
「レインの家の地下室にあった棒。私が剣道に使ったもの、あれが実はそうだったんです」
「杖は既に確保してたわけか。で、もうひとつのアイテムを探す旅に出たわけか」
「っていってもアトラスは技術が進んでるので電車や車を使いましたけど」
「うん」
「フェンゼルは表向き政府高官です。私たちは見つからないように鈍行で隠れながら行きました」
「どこに？」
「レインのお父さんの隠れ家というか別荘です。カテージュというところにありました」
「アイテムがあるとすればそこか」
「はい。でも、ありませんでした。その上、フェンゼルの刺客につけられてたんです」
「捕まったの？」
「いえ、私とアルシェで戦って……私たちは無事でした」紫苑の顔がこわばる。
「そっか、無事でなにより。でも結局そこにアイテムはなかったのか」
「はい。その代わり、レインのお父さんの遺書がありました。それに従って私たちはもうひとつの隠れ家へ向かいました。でも、そのときには私たちはフェンゼルによって指名手配されていました。アルシェと一旦別れて、隠れながらどうにかアルシアというところの隠れ家までいきました」

「アイテムは？」
「やっぱりありませんでした」
「なぁ、杖だけでフェンゼルとやらに対抗はできないのか？」
「はい、その時点で私たちも諦めてそうすることにしました。そこでレインの家があるアルナへ戻り、アルシェと合流しました」
「で、杖をハインに渡すわけか」
「そうなんですけど、ハインさんも濡れ衣を着せられて捕まっちゃってたんです」
「じゃあどうやって杖を渡すんだ？というかハインじゃないとダメなのか？」
「ハインさんは魔法使いなので杖が使えますけど、他じゃダメなんです」
「なるほど」
「で、ハインさんが裁判所に護送される日を狙って私たちは護送車を襲撃しました」
「凄いな」
「でもそれがフェンゼルの罠だったんです」
「逆におびき出されたわけか」
「ハインさんとも引き離され、フェンゼルが魔法を打ちました」
「杖は紫苑が持ったままか」
「はい、でもそこで意外なことが起こりました。私が杖を使ったんです、無意識に。実は私、魔法使いだったみたいなんです。それも強力な」
「だから召喚されたわけか」
「そうなんです。で、結局フェンゼルを打ち負かしたのは私なんです。でもアトラスの歴史はアトラスの人が作らなきゃいけないと思って最後はハインさんに任せたんです」
「で、フェンゼルを倒したハインは後釜につくわけか」
「そうです。召喚省の長になりました。こうして私たちはアルテナさんを助け、ひいては国と世界を救い、神々に杖も返しました。そこで私たちは神様に会いました」
「会ったんだ、実際」
「はい、神々しかったです、文字通り。人間の見た目でしたけどね。そしてその後メルティアが出てきて、私を元の世界に返してくれたんです。時空を捻じ曲げたおかげで元の時間に戻ることができました。だから落第もせず、先生とも出会えたんですよ」
「メルティアの粋な計らいに感謝ってところだな」
「ふふ……」
「でも謎が残るな。もうひとつのアイテムはどこにいったんだ。それになんで紫苑が魔法を使えたんだ？」
「いい質問ですね。実は私、一番始めのネブラとの格闘のとき、髪が邪魔で結わったんです、レインの家の地下室にあった髪ゴムで。でもそれが実はゴムじゃなくてエルフィというアイテムだったんです。魔力を高める効果のおかげで私はフェンゼルに勝てたんです」
「なるほどね。そんなことがあったのか……」

　不思議と頭が混乱しない。よく分かるファンタジーだ。でも紫苑は架空ではないと言っている。その点については頭が混乱してしまう。

　俺は茶を飲んだ。長い溜息をつく。
「私ばかり話しちゃいましたね」
「まぁ、説明だからね。でも、面白かったよ。っていったら悪いかな。大変な経験だもんな」
「先生……この話、信じてますか？」
「正直よく分からないよ、自分の気持ちが。そんな話、架空ですって言った方がウケがいいことくらい紫苑だって分かってるはずでさ。わざわざ本当だなんて言って相手を戸惑わせる必要はないもんな。だから本当なのかなとも思うし、やっぱり常識的にありえないとも思う。だから判断できない。むしろ気になるのがね、なんで俺にその話をしたかってことだよ」
「先生には先に知っておいてほしかったからです」
「先って？」
　紫苑はもじもじして口に手を当てる。
「あの……私の気持ちをはっきり伝える前に、私がどういう人間なのかを知ってほしかったんです。異世界に憧れて、ほんとに召喚されて世界を救ってきたんだっていう特殊な人間であることを知ってもらった上で聞いてほしかったんです。だからこの話、しました。私の一番大切な秘密なんです」
「うん……そっか。ありがとね、聞かせてくれて」
　とりあえず紫苑が真剣なのは伝わったが、急に別の意味で気まずさがこみ上げてきた。今までの話はお話として受け止められるが、ここからの話は流せそうにない。
「私、もう何度も仄めかしてるし、直接何度も言ったも同然なんですけど、やっぱりはっきり自分の気持ちを伝えておきたくて」
「うん……」
　紫苑は顔を上げた。
「あの……私、やっぱり先生のことが好きみたいです。その……初めてジュンク堂で話したときに思った「話せる人」っていう好意じゃなくて。課外授業で抱いた好意でもなくて。男の人として、好きなんです。やっと心が具体的な形になりました。こんな気持ち、初めてです」
　俺はゆっくり頷いて言葉を促した。
「ありがとうね。それって前に言ってた人生に一人だけの候補に選ばれたってことなのかな」
「ん……」紫苑は少し眉を顰めた「そこなんです、自分でも迷っているのが。やっぱり先生の言うように早計じゃないかなとも思うんです。でも、運命を感じて仕方がないんです。

けど、当てにならない運命なんかに先生を巻き込んじゃいけないとも思ってます。いえ、思ってました。でも最近は本当に運命の人なんだなって思うようになってます」
「でも、それは99%の確信なんだね？」
「はい……」
「じゃあ良かった、俺もおんなじだよ。紫苑のことは好きだよ。うん、あ、言っちゃったね。……好きだよ」
「ほんとうですか？」
　ぱっと顔が明るくなる。
「うん。でも、俺には蛍のことも子供のこともあるし。むしろそっちの方に意識が行ってることの方が問題でさ。それに、俺も紫苑と同じで早計かなって思ってる。だからさ、残りの１％はゆっくり埋めていこうよ。焦ることないからさ。ね？」
　すると紫苑は微笑んで頷いた。
「好きになった人が先生でよかった」
「そっか。嬉しいよ」
「残りの１％って、あとどれくらいかかるのかなぁ」
「うーん、テストで10点だった生徒が20点を取るのは簡単だけど、99点が100点を取るのは難しいからね」
「なるほどぉ、よく分かります。じゃあ、それまで私たちの関係はどう呼べばいいのかな」
「うん、その辺しっかりしておきたいよね。紫苑はどうしたい？」
「両思いだって分かってる以上、付き合うかどうか決めないとですよね」
「うん、まぁ形式的にはそうなるのかな」
「じゃあ私、付き合ってほしいです」
　じゃあっていうのも変な話だよな……。
「うん、そうしようか」
「え、いいんですか！？」と驚く紫苑「それって……先生は今から私の彼氏で、私は先生の彼女になるってことですよ？私が彼女でいいんですか？」
「そりゃ勿論だよ。じゃあそうしようか」
「はい……！」くすくす笑う紫苑「うわー、私、なんか空飛べそうなくらい嬉しい！」
「そう？」
「うん！だって初めての彼氏だもん。そして、最後の彼氏」
「いきなり最後なの？」
「だってあとの１％は確認作業でしょ？先生が運命の人である以上、最初で最後の人ですもん。え、先生、分かってますよね、前に言いましたよね、私、絶対運命の人を手放しませんからね」
「うん……」急に胸が痛くなる。
「先生？やっぱり引きます？」

「いや、そうじゃなくて」
「……蛍さんのこと何か思い出したんですか？」
「あぁ、ごめんね、こんなときに」
「ううん、いいんです。蛍さんも一生とか言ったんですか？」
「あぁ、まあね」
「じゃあ先生、見ててくださいね。いかに私の方が精神力が強いかってところ。世界の救世主の強さは伊達じゃないですよ」
「はは」
　紫苑は笑顔を止めて、じっと見てきた。
「あの……カップルになったって証みたいのってほしくないですか？」
「え？どういうこと？」と言いながら相手の言いたいことは大体想像が付く。でもまだそれは早いだろう。相手は何せ生徒だし。
「先生……」紫苑が近付いてくる。俺は身を少し後ろに引いた。
「あのさ、紫苑」
「ぎゅってしてくれますか？」
「……え？あ、あぁ、いいよ」
　それだけか……あ、いや、むしろそれだけで満足なんだ。なんてお手軽な。
　紫苑は俺の前で止まった。俺は優しく抱きしめた。暖かい。柔らかい。小さい。良い匂いがする。あぁ、結構抱きしめるだけでも気持ちの変化はあるものだな。何だか急に紫苑が今まで以上に近く、大切に思えてきた。
　人ってこんなに暖かかったんだな。そう思った瞬間胸の痛みがこみ上げてきた。しかし、痛みは感覚に登ってこなかった。紫苑の温もりがいつもの右胸の痛みをかき消したのだ。そうと分かった瞬間、俺の心は限界を迎えた。

　紫苑を抱く腕に力が入る。小刻みに震えるのが分かる。ダメだと思うほどに自制が効かなくなる。そして気付いたら俺は泣いていた。嗚咽をもらす俺に紫苑は驚く。
「先生……」抱きしめたまま問いかけてくる「どうしたんですか？」
　無言でしゃくりあげる俺。もう耐えられなかった。ここ半年のストレスの全てが放出された瞬間だった。紫苑の気持ちを考えてやる余裕もなく、俺は掠れた声で呟いた。
「ほたる……っ」
「……」
　紫苑は黙っていた。俺は突き飛ばされるかもしれないと思った。それならそれでいい。だが紫苑は包み込むように俺の頭を撫でた。
「せんせ……つらかったね。泣いていいですよ。これからは私が一緒だからね。やっと運命の人に巡り合えたのよ、私たち」
　俺は泣きながら頷いた。

顔を上げると紫苑も目を真っ赤にしていた。
「紫苑……」
「なんだか先生見てたら私まで涙がでちゃった。悲しみや苦しみが伝わってきたの。抱きしめるって不思議ね。心が繋がったでしょう？」
「あぁ、そうだな……ほんと」
「アルカ……ってね」
「うん？」
「「繋ぐ」って意味なの。人を繋ぐのが言葉。でも、非言語で繋がることもあるよね」
「そうだな。ごめんな、紫苑。蛍の名前なんか出して」
「いいよ、先生の中できっと消えない人だろうから。ほんとはね、始めは確かにびっくりしたのよ。奥さんと間違えられてるのかと思って。その次に、奥さんと重ねてるのかなって思ってそれも悲しかった。でもそうじゃないって思ったの。なんていうか……そうじゃない。私を抱くことで、今まで先生を支えてた何かが外れたんじゃないかなって思ったの。それで……」
「そうか……」
「ねぇ、もう一回抱いて」
ぎゅっと抱きしめる。
「ねぇ、このまま倒れこんで。膝が痛いんだもん。抱き合ったままごろごろしよ」
俺は紫苑の言うとおりにした。横になって抱き合う。自分が何をやってるのか――考えないようにしていた。公私でいうと100%プライベートだ。でないとこの状況を塵一つほども甘受できない。ただ、この甘美な瞬間を誰にも邪魔してほしくなかった。
「ねぇ先生、私、１％って聞いたけど、ほんとはもう少し溝が大きいかもしれない」
「そうなの？」
「だってまだ、大きな秘密を言ってないから。きっとこれを言わない限り１％にもならないと思う。でも、これ、私にとって一番嫌なことなの。凄く重くて……怖いの」
「何があったの？」
「怖くてね、夢に見るの。夢に彼女が出てきて私を呪うの。他にも私が助けられなかった人たちが私の足を引っ張って地面の中に吸い込もうとするの」
何のことだ？しかし紫苑は凄く震えている。酷い恐怖を感じているようだ。
「先生、せっかく彼女にしてもらったけど、これを聞いた後でなら私、一度だけ逃げるチャンスをあげるね」
「どういうことだ？何があったの？」
「私ね……」紫苑は俺の肩から頭を離した。鼻と鼻が擦れるくらいの距離で、俺の目を見据えた。今にも泣き出しそうな顔だ。
「私ね……人を殺したことがあるの」

紫苑の甘い息が鼻をくすぐる。そして苦い言葉が耳を刺す。
「なんだって？」
「本当よ」
「それは……」地球での話だろうか「アトラスで？」
頷く紫苑。
「良かった……」といったら紫苑は心外という顔で「どうして！？」と言った。
「いや、信じてないわけじゃないよ。単純な問題だ。地球かアトラスかのどちらかだとしたらアトラスの方がいい。紫苑はいま地球にいる。殺した相手にも家族がいるだろう。その復讐から守るのはもはや俺の役目だ。ちがうか？」
紫苑は頷く。
「そしたら紫苑が地球にいる方がいい。それに地球で人を殺したとなればまず逮捕されるだろうしな。それも困るだろ。アトラスでの出来事なら逮捕は免れる。俺も付き合った途端別離は嫌だからね」
とにかくアトラスの話は真実ということでまともに取り合うのがいいようだ。紫苑はそれだけで機嫌が良くなる。
「その相手はね……アーディンっていうの。女の子だったの。日本の大学生くらいの子。覚えてる？フェンゼルの刺客」
俺は頭に血を巡らせた。
「カテージュ……だっけ？そこの別荘で襲ってきた刺客？」
「うん、そう。アルシェと戦って倒したの。３人いたのよ、刺客は。銃を持ってたの。殺さなきゃ私が殺されてた。私は隠れて家の屋根に登ったの。入り口では彼らがドアをこじ開けようとしてた。私は大きな石を持って、狙いを定めて一人の頭にめがけて落としたの」
「石？どれくらいの？」
「丸くなった野良猫くらい……。占いの水晶玉より大きくて……」
「まぁいいけど。高さは？」
「この部屋くらいかな」
「それを落としたのか……。ぶつけてどうするつもりだったの？」
「戦えないようにするつもりだった。でも、もしそれで死んでもしょうがないって思ってた。こっちも銃を撃たれてたし。未必の故意ね」
「結局死んでしまったのか……」
「ううん、すぐには死ななかった。結局３人は捕縛したんだけどね、生きてたの。でも頭が割れて血を流してた。応急処置はしたんだけど、病院へ運ばなければならないほど重症だったの」
そりゃそうだろうな、そんな石を落とされちゃ。俺は寒気を覚えた。本当だろうが嘘だろうが、それを真剣に話すのが怖い。
「病院へ連れてかなったのか？」

「エルフィがそこにあるかもしれないから、家捜しが先だったの。それより先に解放したら私たちがフェンゼルに捕まってしまう。そうしたらアルバザードは終わりよ」
「やむをえず、彼女を放置することになったわけか」
「そう……。でもアーディンは生きたかったの。頭が割れて歯が折れて、顔も歪んでしまっても、帰りを待つ恋人を思ってたの。そして一人の人間として純粋に死の恐怖に耐えられなかったの。彼女……何度も私たちに泣き叫んで頼んだ。死にたくないって……死にたくないって声がアルカなのに何度も日本語になって私の頭にこだまするの」
　紫苑は強く震えだした。もはや妄想でなくてほしい。アトラスが実在であってほしい。これが紫苑の作り話だとしたら紫苑は異常だ。蛍どころの話ではない。
「アーディンは泣き叫んだわ。でも私たちはその声を無視した。恋人の名前を叫んでた。多分、親の名前も。でも、無視した。死ぬ行く人間の命乞いを無視しつづけた。私たちさえ考えを変えれば助けられる人間を見殺しにしたの」
「よく耐えられたね。その……最期まで」
「レインは耐えられなかったわ、始めから。あの子は優しいから……」
「紫苑だって優しいよ」
「そうかな……。レインはアーディンを助けようと何度も言ったわ。でも、アルシェと私は拒んだ。そしたらレインまで泣き出しちゃって。でも時間がないから私はレインを引っ叩いて怒鳴りつけたの。友達叩いてまでアーディンを見殺しにしたのよ」
「会ったことないから分からないけど、レインって子は自分が人殺しになりたくないから、そして紫苑を人殺しにさせたくないから命乞いをしたんじゃないかな」
　紫苑はぴくっとした。目を丸くする。
「そうかも……。レインのことだから、私のために私に引っ叩かれたのかもしれない……」
「あとさ、レインって子は優しいところもあるけど、手を汚したくない子でもある。そういう意味では本当に優しいとはいえないところがある。だから一丸に彼女が優しくて紫苑が優しくないなんて言えないよ」
「そうですね……ありがとう」
　紫苑は強く抱きついてきた。でも力が弱い。空手をやっていても所詮は女の子だ。
「アーディンはね、そのまま病院へ搬送されることなく亡くなったの。夜が明けたら叫ぶこともできなくなってね。アルシェが食事や水分を与えたんだけど食べられなくて。最期は突然起きたかと思うと苦しみだして、縛ってる縄が解けるんじゃないかっていうくらい激しく痙攣しだしたの。口から血の泡を吹いて。最期は誰かの名前を呼んで、亡くなった」
「そうか……間に合わなかったか」
「目を見開いて……白目を剥いて悶え苦しんで痙攣する姿が焼き付いて離れないの。夢でアーディンがのた打ち回るのよ、血だらけになって。そして恋人の名前を呼ぶの。私に死にたくないって叫ぶの。私……あ……」紫苑はぼろぼろと泣き出した「あ……私、怖くて、怖くて……」

制服が涙で濡れる。俺のさっきの涙と混ざって湿る。俺は強く紫苑を抱きしめた。そして紫苑がしてくれたように髪を撫でる。
「辛かったな」
紫苑はうんうんと何度も頷きながら泣きはらした。
「私は恋人を持つ人間を殺してしまって……絶対恋人なんて作れないって呪いをかけられたようだった。恋人ができたら私も頭を割られて誰かに殺されるんじゃないかなんて本気で思った」
「そのときに誰が救いになってくれたの？アルシェ？」
「ううん、彼は運命の人じゃなかったわ。戦友だったの。だから救いにはならなかった。励ましてはくれたけど。救ってくれたのはレインよ。怖くて一緒に寝たときにね、私の苦しみを共有してあげるって言ってくれたの」
「そうか、良い親友を持ったな」
「うん、最高よ」
「しかし、壮絶な話だな」
「うん」と紫苑は顔色を落とす「人殺しだって知って……どう思いました？やっぱりこんな私は恋なんてしちゃいけないですか」
俺はすぐには答えなかった。何て答えるのが一番都合が良いかではなく、何が紫苑を救えるかを考えた。レインという子は少なくともここには存在しない。そう、そこがポイントだ。
「なぁ、紫苑。紫苑を救ってくれたレインは地球にはいない。離れ離れだ。じゃあ、ひとりぼっちの紫苑を誰かが守ってやらなくちゃいけないよな。俺、この話を聞いて、それが自分なんだろうなって思ったよ。なにせほら、運命の人だからな」
「ほんと……？」
「あぁ、ここまで言われて全部がドッキリでしたなんてことになったら二度と人間を信用しなくなるくらい、紫苑のことを信じてる。だってこの苦しみ方は演技ではできないし、パラノイアとかの妄想にも見えない。恐怖に真実味がありすぎる。だから、地球で紫苑を救ってやる俺は、紫苑の傍にいてやらないとなと思う。逃げるチャンスなんて言うなよ。俺を一生縛るつもりならそんな弱音吐くな。俺が守ってやるから、紫苑も俺を守れ。分かるか？」
そう、それが俺と蛍ができなかったことだ。俺の反省点でもある。
「はい」紫苑は赤い目で俺を見つめた「分かりました」
「よし」と言って額にキスをした。
「あ……」といって急に目を丸くする「いまの……初めて」
「え？」
「ファーストおでこキス」

緊張の糸が切れて、ぷっと俺は吹き出した「なんだそりゃ」
紫苑も釣られて少し笑った「だって……そう思ったんだもん」
良かった、精神が安定してきたようだ。多分、俺と同じで溜め込んでたんだろうな。しかし、俺より遥かに重い咎を背負ってたんだな、こんな小さな身体で。どうりで心技体ともに強いはずだ。
「あのさ……」寝転んでるのも疲れ、立ち上がった。紫苑は抱きついたまま離れない。猫のように――俺に一番分かりやすくいえば蛍のように――へばりついてくる。
「紫苑て、キスもしたことないの？」
「え……」顔を赤らめる。色白だなと改めて思う「うん。ないよ。男の子とは……手を遠足で繋いだくらい」
そりゃ蛍並みだな。
「先生……その……するつもりですか？」
「いや、しないよ」
蛍にはした。でも、紫苑にはしないでおく。俺自身年を取って焦らなくなったこともあるが、今日はこれで十分だ。それにこれ以上だと子供には刺激が強すぎる。
「しないんですか？」名残惜しそうな感じ。
「うん、今度ね。というか……したいなって思ったときに自然とね。勿論お互いがしてもいいって思ったとき。そのとき、紫苑の唇をもらうよ」
「えへへ」とにやける紫苑「唇をもらうだって……せんせ、カッコつけてる」
「うーん」頭を掻く「あのさ、そろそろ先生って止めないか？彼女なんだし。名前呼び捨てでいいよ。丁寧語も段々減らしていきなよ」
「え……自分の先生を名前で？しかも呼び捨てですか？難しいなぁ」
「ほら」紫苑の鼻をちょんと押す「１％を少しでも埋めないとさ」
「そうですね」
「俺もどうしようかな、２人称は「お前」じゃ嫌か？俺、彼女はずっとそう呼んできたけど、お前呼ばわりが嫌って人もいるから」
「別に嫌じゃないですよ。お父さんもお前って言いますし――じゃなくて、言うし。うん、静がそう呼びたいならお前でいいよ」
赤い目で笑う紫苑も可愛かった。
時計を見る。いつの間にかもう７時だ。
「紫苑、俺、もう帰らないと」
「え、夕飯食べてってほしいのに。静……えへ……夕飯一人でしょ？彼女の料理、食べてって」
「でもさ」
「大丈夫、お客さんが来た痕跡は残さないから」
「うーん」と悩んだが紫苑はやる気だ。多分、これは諦めない顔だ。まぁいいか、毒を食

らわば皿までだ。生徒を彼女にしてる時点で料理くらい些細なことだ。
「じゃあ、ご馳走になろうかな。いつも作ってるっていう腕前を見てみたいし」
　紫苑はにこりとする「何がいい？」
「いや、ほんと何でも。得意なもの……いや、お父さんたちが不信に思わない日常的なものがいいな。それにそういうのこそ腕前が見えるものだし」
「うん、わかった」といって紫苑は立ち上がる「蛍さん、料理はどうだった？」
「そうだな……言わない限りやらなかったが、結構美味かったよ」
「得意料理は？」
「豚汁」と即答したら紫苑は意外そうな顔をした。
「静が食べるイメージないなぁ」
「好きだったよ。美味かった。生姜が利いててね」
「じゃあそれ作るね。材料あるし」
「ほぅ、そりゃ楽しみだ」心底思った。
　紫苑に付いて居間へ行く。本当に誰もいない。台所に行き、紫苑は冷蔵庫から材料を出す。
「豚汁は結構時間かかるからね。くつろいでて。テレビ見ててもいいよ。あ、でも消すときは元のチャンネルにしておいてね」
「あぁ。てゆうか紫苑の料理手伝うよ。２人の方が早いだろ」
「え、静料理得意なんだ」
「得意じゃないけど、まぁ既婚者だからね」
　材料を洗って、紫苑が切る。小さい……蛍は大雑把に切っていた。そうか、こういうところから違うのか。
「紫苑、ごま油ある？あれが美味いんだよ」
　豚肉、じゃがいも、にんじん、ごぼう、こんにゃくなどを入れていく。蛍が作っていたやり方を紫苑がするのか見ていたら、概ね同じやり方をしていた。余計な口は出さない。紫苑の味を楽しみたいから。

「なぁ、俺達、出会ってから付き合うまで早いよな」
「そうねぇ、せ……静と会ったのって入塾のときだから、２月でしょ？授業は３月だったと思うけど。そうしたら３，４，５，６……４ヶ月ね。あ、縁起いいわ」
「？？」なんで縁起が良いんだ？
「出会って４ヶ月。話すようになったのが概ね３ヶ月かな。そうだね、早いかも。４ヶ月前は他人なのにもう彼氏なんてね。ちょっと早いかもね。でも、好きよ」
　率直な紫苑に俺は照れるばかりだ。何だか立場が逆な気がする。
「好きっていうけどさ、何が良かったの？男として見るようになったっていってたけどさ」
　換気扇を付け、鍋に火をかける。

「うーん、色々よ。正直言うと始め先生として出てきたときは何とも思ってなかったのよね。むしろちょっと倦厭してた。静ってホストみたいな感じするでしょ？」
「よく言われる。勧誘もされる……」事実だ。新宿は特に酷い。歌舞伎近くのドンキやアルタ前を一人で歩くとよく勧誘に合う。
「私、いい加減な男は嫌いだから。でも、実際ホストじゃなければ単に綺麗な顔ってことでしょ。だから当然好きよね」
「なるほど……でも見た目じゃないだろ？」
「うん。次は、声……」
「声？俺、結構コンプレックスあるんだけど。高くてうるさいかなって」
「よく通る声よ。ガラガラしてなくて綺麗。透き通ってる。でも、私が好きなのはそこじゃなくて。んー、わざと低くして男っぽくしようとする授業中の無理のある声かな」
「え？そんなのがいいの？」
「良いんじゃなくて、コンプレックスと戦う繊細でいて強い精神が好きなの」
　そんなとこをそんな風に見てたのか……。驚きだ。
「体型もスマートだし。太ってるのは嫌。それに静は鍛えてるでしょ。それも良い」
「え？」なんで分かるんだ……。
「体見てれば分かるよ。ガタイはいいもん。ほら、私、空手」
「あぁ、なるほど」
　紫苑は灰汁を確認する。まだ、ない。
「あとね、ここからが重要。性格はね……」といってスタスタ居間へ行って紙とペンを取ってくる。そして同心円を３つ描く。
「これ、一番外側が善ね。これは外用。仕事とか人間関係とか。で、真ん中の層が悪。これが内側。先生の本性……と一見思われるもの」
「ほぅ」興味深い。俺の本性は悪か。
「蛍さんが見て、そして静を嫌いになったのがこの部分。そして私が好きなのは」同心円の中心を指す「ここ。これが貴方の核。善」
「なるほど、面白い分析だ。でもな、ひとつ間違えてる。蛍はその核に気付いてた。それでも俺を愛してくれた。だが２層目のタチが悪くてね。だからお互い耐えられなくなったんだ」
「そうなんだぁ……。うーん、蛍さんは２層を広げちゃったのね」
「どういうこと？」
「２層目の悪を広げちゃったの。核や表層を覆うくらいに。こう言っては何だけど、男をダメにする人ね。多分、静のことを随分甘やかしたんじゃないかしら」
「……」絶句した「なんで分かるの？」
「蛍さんの良く言えば控えめな人間性と静に対する恐らく嘘でない愛について聞いていれば想像できるわ」

紫苑は鍋を取って灰汁を捨てる。
「私は貴方のこと、甘やかしませんからね。私達は助け合っていくの。悪いところは２人の問題。たとえ貴方に身の危険があっても借金してもリストラされても病気してもね。問題は共有しましょ。２人なら解決できるわ」
俺は流しに腰をもたれかける。
「なぁ、それは嬉しいんだけど、どうして付き合ったばかりの俺にそこまで貢献しようと思えるの？」
「運命の人だから。あと、一方的に貢献はしてないよ。静にも同じだけ貢献してもらうもの。でも貢献しあうことによって２人とも昇華できるわ。いいことじゃない？」
なるほど、このポジティブさが蛍と違うのか。そしてこの会話のスピーディさ、質問に対する明確かつ迅速な回答。こういうことが俺の心を一々くすぐる。

「ねぇ、提案」
「ん？」
「ひとつずつ、お互いの良くないところを直さない？」
「いいね、たとえば？」
「んー、静はまずタバコ」といって俺のポケットからキャスターを取る「思うに、ストレスで吸ってるでしょ。昔から吸ってる常習者じゃないわ」
「なんでそう思うの？」
「臭くないから。長く吸ってる人と匂いが違うの。それに、このキャスターっていうタバコの箱、結構古いよね。１箱を長く吸うなんてヘビースモーカーじゃない証拠だわ」
「いいとこ見てるね、クリスティ」
「へへ」といって笑う「じゃあ、静はタバコを止めてね」
「え、止めるの？」
紫苑は箱を開ける。中には２本しか残っていない「そうよー、蛍さんのことで再発したんでしょ？これからは私がいるんだから寂しくタバコなんて吸わないでいい生活よ」
「そりゃタバコより魅力的だな」
「でしょぉ？……はい」といって１本手渡してくる「最後の１本よ。換気扇のところで吸っていいわ」
「残りの１本は？」
「捨てるわよ」
「ふぅん」俺はにやっとした「紫苑、お前吸ってみろよ」
「ひゃぃ！？」と驚く。あまりに予想外だったようだ。
「タバコ吸ったことないだろ。１本なら害はない。たった１本でタバコがどんなもんか人生経験できる」
「で、でもね、アトラスじゃタバコは麻薬扱いなのよ？」

「ここは地球。残念。はい、咥えて」
　まさか最初に咥えさせるのが俺の唇でなくキャスターになるとはね。紫苑は桃色の唇をすっと開ける。そこに挟み込むと軽く震えているのが分かる。怖いんだ。可愛いな。
「持って、右手で。こういう風に……そうそう。じゃあ付けるよ」
「こ、このライター、変わってますね」
　口に咥えたのを指で一旦離す。
「ジッポーだよ」
「ライターじゃないの？」
「まぁライターには違いないんだけど。使い捨てじゃないんだよ。オイルも火打石も芯も全て自分で交換しないといけない」
「それって面倒じゃないですか？」
「面倒だ。だから皆 100 円ライターを使う。けど、俺は便利さだけが全てじゃないと思うんだ。古風なところ、質の良さ、そして使い捨てにはない音」
「音？」
「まずこの蓋を開けたときの音だろ。チンっていう金属音が綺麗だ。右手にすっぽり収まる形で、親指だけで操作できる。左手で風除けをしながら付ける冬の夜は着火だけで男のロマンを禁じえない」
「季節まで考えてるんだ……。じゃあ夏はどうするの？」
「こんな風に片手でさ、ベンチでなくあえて石段とかにスーツで腰掛けて。こう……左手はポケットにぶっきらぼうに突っ込んでおいて、やや俯き加減で点ける」
「なんかドラマに出てくる人みたい」
「100 円ライターと違って一般に火力が大きくて点けやすいという利点もある。火なんだが、ボタンを離せば自動で消えるわけじゃない。息を吹いたり手首をさっと振ることで消すこともできるが、蓋をカチンと閉じて火ごと消してしまうのが好きなんだ。ほら、こんな風に」
「あ、分かります。理科でアルコールランプに蓋を被せて火を消すのと同じでしょう？中学のときやりました」
「はは……」俺は苦笑した。
「そういえばこれ……絵が描いてある」
「ビーナスだな。レーザー彫刻で、ブルーチタンだ」
「それって凄いんですか？」
「いや、１万くらいの玩具だよ。いつものは家に置いてきた。最近ビーナスと浮気中でね」
「ふふ……。こういうのが好みなのね」
「裸婦像だからというのは冗談で、綺麗だからだよ。守られてる気がする。はい、吸ってみようか」
　咥えさせて火を付ける。でも全然付かない。

「紫苑、吸って。酸素がないと」
　紫苑はすぐ理解して、タバコを吸う。火が付く。処女の一服だ。
　予想通り紫苑は「げほっ」と咳払いをして口から離した。煙が俺の顔にかかる。
「こっ……こんなもの良く吸ってますね、先生」
　口調が戻ってる。
「慣れれば美味いもんだよ」
「おいしいんですか？」
「ほら、ここ読んでみ？」
「subtle vanilla taste……こんなマズいバニラは初めてです！」
「好みは人それぞれだけど。まぁ、タバコは心が落ち着くね」
「有害、絶対有害！やめさせなきゃ」タバコを右手にじーっと見る。
「ほらほら、灰が落ちるよ」手元のアルミホイルを少し切り取って簡易灰皿を作る「ここにこう落として。こうやって……そうそう。様になってるじゃん。はい、すってー」
「すってーって……ラマーズ法じゃあるまいし」ぶつぶついいながら吸う紫苑。そのたび咳き込む。俺はくすくす笑う「辛い？止めとくか？」
「うー、折角だから最後まで吸う」
「え、大丈夫？まぁ１ミリだから軽いけど」
　紫苑は結局涙を流しながら１本丸ごと吸った。こうしてタバコが害悪であるとの確信へ至った。俺は恐らく最後の一服となろうキャスターを吸うと、アルミに包んでポケットへ入れた。
「紫苑、息吐いてみ」
「え？」といってからはーっと吐く「タバコくさいですか？」
「うん、自分で嗅いでみな」
　紫苑は言われた通りにすると「うっ……」と顔を顰める。
「自分が吸うと１本でも結構臭うもんだろ」
「はい……」といいつつ鍋を開けた。俺はキャスターの箱をくしゃっと潰すとポケットにしまった。そうだな、紫苑の言うとおり、ストレスはもうない。吸う理由はない。これからは寂しくなったら紫苑を抱けばいいのだから。煙い香よりも紫苑の少女の香のほうがよっぽど俺の心を癒してくれる。はぁ……もう完全に教師失格だな。

　豚汁が出来上がり、米を主食に２人で食べた。親父さんの席に座れというのでためらったが、言われるままにした。
　料理の出来栄えは好調で、俺は紫苑をべた褒めした。子供のころから毎日作っているだけあって、蛍と比べると紫苑に軍配があがる。だが、懐かしさという点では蛍の料理のほうに軍配があがる。勿論後者は言わないでおいた。
　そうこうしているうちに８時をとうに回ってしまった。俺は「もう流石に」といって席

を立った。
「今日はありがとうね、来てくれて。話も聞いてくれたし。それに……２人の記念日になったし」
「そうだな、紫苑のファーストおでこキスにもなったし」と笑う。
「むー。じゃあ今度は私の色んなとこにファースト作ってくださいね」
　俺は頬を膨らます「結構過激なこと言うね」
　すると紫苑は「あっ」と言って赤くなった。可愛いものだ。
「片付けは私がしておきますから」というので任せて、俺は早々帰ることにした。
　玄関口で「今度いつ会う？」と聞くと「静がお休みの日。私はほら、生徒だし」という。
「じゃあ休みを連絡するよ。できるだけ早く」
「うん、待ってる。ジリリリって鳴るのを」
「ジリリリって？」
「静の着信、黒電話にしてるのよ。レトロでしょ」
　おい……それって最悪の偶然だな。
「ん……できれば違う着メロがいいんだけど」
「え、どうして？」
「うん……蛍がね、将に同じ事をしてたから」
「……変えます」
「お願い……。好きな曲か何かにしてよ」
「あぁ、でも私、着メロの取り方よく知らないんです」
「じゃあ俺が落として紫苑に送るよ。添付するから」
「できるんですか？」
「うん、まぁ」
「へぇ。そういえば私の着メロって何ですか？」
　紫苑に黒電話の文句を言っといてなんだが、蛍に使ってたのを流用してる。でもそれは黙っておこう。
「バンプオブチキンっていう邦楽のバトルクライってやつ」
「へぇ……知らないです」
「じゃあ今度カラオケ連れてくよ。そのとき聞かせるから。じゃあ今日はこれで」
　俺は玄関を開ける。紫苑が「先生」と靴下のまま降りてくる「バイバイのちゅー」
　ふふと笑うと俺はおでこに軽くキスをした。紫苑が「えへ」とか言っている間に髪を撫でて「またね」と言って玄関を出た。紫苑は駐車場まで見送りをしてくれた。
　白岡を出るともう時間も時間でとっくに真っ暗だから道は随分空いていた。車に乗った途端、女子高生の彼女ができたという言葉が文章になって頭を巡った。何だか大変なことになった。複雑だ。嬉しいような不安なような。せめてあとひとつ違いで大学生ならなぁ。
　でもほんと、紫苑と話した通りだと思う。俺はまだまだ蛍のことを引きずるだろうし、

残りの１％を埋めないと本当のカップルにはなれない気がする。１％を埋める最後は何だろう。やはりセックスなのだろうか。正直、相手が女子高生だと気が引ける。そして俺は蛍以外を抱く気に果たしてなれるかどうか分からない。かといってセックス無しで最後の１％が埋められる確信もない。だがそれは先の話だ。

今は紫苑が幸せそうな顔をしてくれている。そして俺は彼女が好きだ。今日のところはそれでいいじゃないか。

2006 / 07 / 09

静と付き合うことになってから１週間以上経った。私は初めてできた男の人だからどう接すれば良いのか分からなくてちょっと戸惑った。今までしていたメールや電話の頻度とか、口調とか、会って話すときの距離とか、そういうのが色々気になった。今までは自然とできていたんだけれど、彼女の立場になったことがないから彼女としてどうすべきなのか分からない。

でも静は流石大人。私のそういう迷いを察してくれて、私が抱いていた不安を言い当てて、こうすればいいという示唆をしてくれた。命令ではなく、あくまで示唆。ハッキリと言うわけでもない。私が気後れしたり恥ずかしがったりしないように配慮してくれるその優しさでもっと好きになった。

そう思うたび、ときどきね、思うのよ。なんで蛍さんは静を嫌いになったのかなぁって。私はまだ日が浅いから彼の見えない部分が多いと思う。でも、恐らく２人の相性が合わなかったというのが原因な気がする。そうじゃないと……最悪、私も別れる羽目になってしまう。それは嫌だ。

そりゃこんな甘美な気持ちはいつまでも続かないわ。私の体を駆け巡る気持ちの良い感覚は頭が一生懸命化学物質を作ってる結果だってことぐらい知ってる。それがずっと続かないことも分かってる。

でも気持ちの良い間はそれを味わなくちゃ損よ。それに、その間に私は静に別の形で魅力を見出すの。恐らく、私が彼の悪い部分を叩きなおして自分の理想に鍛え上げることになるわ。

そう、私は支配したい女。相手を変えたい。静は変えがいがある。蛍さんはきっと弱かったんだと思う。大人しい人だったんだろうな、多分。私は表面上は静かにしてるけど、心の中はかなり熱血だ。静のことは傷つけてでも変えてみせる。

蛍さんにも静にも悪いところがあったはず。蛍さんの悪さは私には関係ないけど、静の悪さは関係大有りだ。だからこっちは私が直さないと。それと同時に私の弱さも彼に癒してほしい。偏屈なところとか人と上手くやっていけないところとか可愛げのないところとか。

多分、可愛げは静のおかげでクリアできてきたと思う。恋心のおかげで私も少し女らし

くなれた。正直「えへ」とか言っている自分を冷静に見てる自分もいる。何言ってるのよカマトトぶって、とか思う。あんたは「えへ」とか言うキャラじゃないでしょ、とかも。そういう突っ込みの自分が強くなったときはとてもバツの悪い思いをする。自分のやったことがあまりにバカっぽくて、かわい子ぶったことを激しく後悔する。

でも、最近は後悔しないでバカ全開でいることのほうが増えてきた。突っ込み紫苑も諦めたようで、何も言わないようになってきた。それで良い。黙ってて。私は静との恋愛を楽しむんだから。どんなバカに見えてもいいの。だってほら、私って子供のころからずっと頑張ってきたじゃない？楽しみもせずにずっとアトラスに行くために鍛えてきたの。だからいいじゃない、いまは精一杯楽しませてくれても。

鏡の前で服を着替える。今日は静とデートだ。付き合って以来のデートだ。言い換えれば公式の初めてのデートだ。やだな、緊張するよ。いつもより服が気になる。組み合わせはこれで良いかなとか、かわいく映るかなとかばっか考えてる。

髪なんて気にしたことなかったのに、凄い気になる。美容院にいけば良かったって今更後悔する。ウチの近所は美容院だけは豊富だからなぁ……。静はどんな髪型が好きなんだろう。そうだ、それを聞いてから美容院行ったほうが良い。

前髪の位置が気になる。ちょっと分けたほうがいいかな。全面的に垂らしてるとちびまる子ちゃんみたいで子供っぽい。あ、もしくは日本人形とか？ぽいぽい……。

……蛍さんってどんな髪してたんだろ……ダメだ、私まで気になる。でも安易に彼女の話は出せないし。一度見てみたいなぁ。どんな人だったんだろ。

付き合った次の日、学校の帰りに薬局で化粧品を探した。高校生が化粧なんて早いかなって思う。でも、少しでも綺麗に見えるならそっちのほうが良い。ほら、やっぱり年の差があるし、私がせめて女子大生に見えれば静も気にしないで済むんじゃないかなって思うのよ。

かといって化粧なんて分からない。お母さんに聞くと静のことがばれちゃうし、雑誌を買ってもばれちゃう。隠し場所もないしな。しょうがないので薬局では匂い付きのリップを買った。これで精一杯。口紅なんか買えない。だって口紅だけ塗ったら気持ち悪いよ？顔も化粧しないと。

あとは日焼け止めを買った。今更かもしれないけど、まだ7月だしね。今まで屋外に出ることが少なかったからいいけど、デートをすれば外を歩くことが増えるから。私は色白で、日焼けしても赤くなっておしまい。だけどタコみたいになるのは嫌だから日焼け止めは塗っておく。

同級生はにきびとか気にしてるけど、私は健康に生活しているので無い。アレルギーは花粉くらいだし。朝晩顔を洗っているだけだけど、にきびなんかは無い。良かった……。

体は小さくて痩せ気味で、周りに比べると細い。空手のせいかな。結構筋肉になってると思う。

時計を見る。11 時だ。そろそろ出ないと。お父さんたちのお昼はもう作ってある。素麺

を茹でておいた。汁はお鍋の中。休みの日まで作ることないと思うんだけど、内緒でデートに行くことに罪悪感があるから。

　でもさぁ、そろそろバレるんじゃないかって思うのよね。日曜に出かけること増えたし、服装も変わったし。お母さんは大雑把だから今までは気付かなかったかもしれない。お父さんは私の変化に気付いても黙ってそう。

　部屋を出て下へ行く。居間を除くとお父さんとお母さんが座って話をしていた。いつものようにお父さんは黙って聞いている。お母さんが一人で喋ってる。それで関係が上手くいってる不思議な夫婦だ。

「あら、紫苑、どこか行くの？」

「うん、塾」

「随分着飾ってくのね」

「日曜は結構こうしてるわよ、他の子たち」

「ふぅん」と笑う母「紫苑も周りの女の子の目を気にするようになったのね」

「別に対抗心じゃないけど、一人だけ浮きたくないもん。まぁ、友達ができたわけじゃないけどね」

「そう……」と少し項垂れる。

「お母さん、お鍋に素麺のおつゆあるからね。今日はお父さんも一緒だから茗荷いれといたから」

　お父さんが無言で少しにこりとする。別にこちらを見るわけでもなく。あ、機嫌良くなったな。あの顔はそういう顔だ。

「ありがとね。休みの日まで作ってもらって助かるわ。塾に行くだけなの？」

「え、なんで？本屋は寄ると思うけど」

「お金持ってる？」

「んー、立ち読みのつもりだから」と濁すが、５千円お財布に入れてある。

「紫苑、これでお昼食べてきなさい」とお父さんが立ち上がり、お財布から１万円を渡してくれた。私は「何人にどこで食べさせる気よ」と苦笑いして受け取った。私、甘やかされてるなぁ。

　玄関に出た。唯一持ってるミュールだ。他はハルタのローファーやスポーツシューズばかりで、デートには使えない。靴屋にいって可愛い靴がほしいなぁ。いつも同じ靴ばっかで恥ずかしいよ。

「あのさぁ」と居間に声をかける「このお金で靴買ってもいいかなぁ？私、ミュール１足しかないの」

　するとお母さんが何かを食べながら「いいわよー」と返した。っていうか、これ、お父さんのお金なんですけど……。

　お礼を言って家を出た。ミュールってちょっと歩きにくいのよね。ローファーもそうだけど、明らかに蹴るのが難しそう。脱げないようにするには爪先を立てた前蹴りしかない

だろうな。
　日曜のお昼もこの辺りは静かだ。これだけ家が多いのに、本当に閑静な住宅街だ。電車で川越まで行く。塾といったが、正確には塾のある川越だ。そこで静と待ち合わせることになっている。今日が学校なら上福岡で待ち合わせるのだが、休みなので川越辺りがちょうど真ん中じゃないかと思う。
　ただ、ここで静といるのが見られたらかなわない。そういう意味では池袋のほうがいいのだが、ウチからだと川越の方が近いし、今日は午前中静は用があって塾に行っているらしい。
　待ち合わせの１時に静はきちんと来た。私は駅の改札のところでちょこんと立っていた。辺りを見回して生徒がいないことを確認すると近寄った。
「紫苑、待った？」
「ううん、大丈夫。こないだ以来だね」
「授業ではあってるけどね」
「うん」くすくすする私「静、一生懸命私を無視しようとしてるけどね」
　静は頭を掻いて歩き出した。私、小鳥みたいに後を付いていく。ぴょこぴょこ。
　生徒の通らない道を通って静の車がある駐車場へ行った。こないだ乗せてもらった青い背の低い車に乗ったらやっと一息つけた。これで生徒に見られる心配は無くなった。
「やっぱり川越だと緊張するね。ところで静の家ってどのくらいかかるの？」
　今日はこないだと逆で静の住んでいる所で遊ぼうという話になっている。練馬と聞いたが、それは遠いのだろうか。
「さぁ、車だから何とも言えないな。混み具合による。日曜の昼だから悪いけど混んでると思うよ。でもそこの 16 号出て 254 に乗れば一直線だから。なにか曲、付けようか？」
「ううん、話がしたい。時間がもったいないよ。折角会えたのに」
「分かった」と静は機嫌の良さそうな顔。
「あ、思い出した。私、靴を買おうと思ってたの。でも、川越じゃ買いづらいよね」
「んー、じゃあウチの周りで買おうか。案内するよ。何がほしいの？」
「こういう……デート用の靴なんだけど。私、これしか持ってないから」
「あぁ、そういうことか。別に気にしなくてもいいって」
「いやよぉ、同じ靴履いてばっかじゃ飽きられちゃうでしょ」
「え？」と意外そうな顔。でもね、先生、運転中はこっち向かないで……。
「飽きたりなんかしないよ。可愛いって思ってるし。俺、飽きないタチだし。まぁでも気持ちは分かるし嬉しい。よし、じゃあ買いに行こうか」
「うん」と言いつつ、自分の家の近所で靴が買えるって普通の感覚なんだろうかと考えてみた。白岡には一切期待できないことだ。はぁ……。
　長い信号を待たされた後、ちょっと大きい道に出た。
「それにしても今日は蒸し暑いな」静は服をパタパタさせて、クーラーを強める。

「ね。天気は悪くないのにね」
「クーラー、寒かったら言ってね。スカートじゃ脚冷えるだろ」
「うん」と言って赤くなる私。何て気が利くのかしら、彼って。これって普通なの？それとも静が気を利かせてくれる人なの？気になった――ら、聞いてみるのが私の癖だ。
「ねぇ、静って気が利くよね。大人の男だから？」
「クーラーのこと？それだったら多分当然のことだと思うよ。どの男でもそうするはず。お父さんは？」
「うーん、お父さんの前じゃそんなにスカート履かないから、どうだろう」
「話を聞く感じじゃ黙っていながらも気遣ってくれそうな感じだけどな」
　そう聞いて何か気分が更に良くなった。お父さんを褒めてくれる人は好き。

　やっぱり道路は混んでいて、練馬に着いたのは２時を過ぎてしまった。
「紫苑、腹減ってないか。大丈夫？」
「うん、でももう食べよ。あとどれくらい？」
「もう光が丘だよ。ほら、そこの右に公園があるだろ。あれが光が丘公園だから」
「へぇ」と言いつつ見るが、あまり見えない。どこからが公園でどこまでが公園なんだろう。
　そのまま道路を通って街中に入るとビルばかりのところに出た。大きい……これ、みんなマンション？ウチの駅の向こう側に出来るマンションがいっぱい並んでるみたい。ここも白岡みたいに新興住宅地なのかな。東京だから地所が高くて白岡みたいな一戸建ての乱立はできなかったんだろうな。その代わりマンションにして何階建てにもしたのだろう。面積辺りの人口密度が白岡よりかなり多いんだろうな。
　静はマンションのひとつに入ると、車を停めた。降りると軽く伸びをする。私も真似してみる。
「ね、肩凝るの？」
「ん？まぁね。オッサンくさい？」
「ふふ、そんなことないわよ。女子高生だって凝るんだから。ほら、ここ触って」
　手を取って肩を押させる。
「いや、柔らかいけどな。あ、でもここは少しコリコリしてるかな」
「でしょ？」
「うん。さて、昼にしよっか。駅前を案内するよ」
「あの……」ちょっと戸惑う「光が丘を案内してくれるのは嬉しいんだけど、先生のお家もガイドに含まれてるんですか？」
「いや……ん？どっちだと思ってるの？」
「私は……入ってみたいけど」
「あ、そうなんだ。逆かと思った。ほら、男の家だし」

「そんな。だって信頼してるもん」
「ん、まぁ別に入る分には良いんだが、俺は長男で親元だからさ」
「じゃあ尚更挨拶しないと」
　だって、貴方とは将来結婚するんだからというのを言わないでおいた。静が引くだろうから。
「いや……」と口ごもる静。私は癖で頭を傾けて目をくるりと動かして考える。
「もしかして、家族に言ってないんですか？私のこと」
「うん……。男にとって恋愛は親とする話じゃないだろ。それに、俺が生徒と付き合ってるなんて知ったら心配するしさ。生徒じゃなくても女子高生って聞いたら驚くだろうし。それにほら、俺、離婚したばっかなのに、やっぱり怒られると思うんだよね。紫苑も親御さんには言ってないんだろ？」
「うん……私は言っても良いけど、先生が困るから」
　まずい、これ以上言ったらウジウジとウザイ女に思われてしまう。２人の仲を公言できないのはストレスだけど、静で発散してはいけない。
「じゃ、暫くは日陰の女に徹してますね」と悪戯っぽく笑うと静も苦笑いして「悪いね」といった。多分、こういう対応で良いのよね？

　静に連れられて駅前に行って驚いた。立派な街。私のところと大違い。何だか気恥ずかしい。
「ここ、凄いですね。おっきくて」
「んー、そうだね、俺は気に入ってるよ。ブクロみたいにゴミゴミしてないし。新しいから綺麗に都市開発されてきたしな」
　駅周りは歩道橋が至るところに架かっている。まるで空に道があるみたいだ。
「下に降りなくても上を歩いたまま行けるんですね」
「毎回上下の行き来をしてたら大変だからね。言われてみれば便利だな。ファーストフードとかそういうのは２階に多いから、確かにこの道は便利だな。因みにここをまっすぐいくとさっきの光が丘公園に直通してる」
「へぇ。やっぱりここも新興住宅地なんですか？そういう意味じゃ新白と同じかも」
「シンシラ？」
「あ、新白岡……白岡のことです」
「あぁあぁ……。うん、そうだね、ここも新興住宅地だよ。元々米軍のグランドハイツがあった跡地だったんだ、光が丘は。だから土地はたくさんあった。そこを開発したわけだ。昔は酷かったぜ。将に陸の孤島だった。交通の便も何もかも悪くてね。今でこそ便利になったが」
「へぇ、詳しいんですね」
「自分の街のことだからね。で、飯どこにしようか。ここのショッピングセンターが ima

っていうんだが、ここでも良いし、たとえばそこのファーストフードでも良いし。ほら、そこにケンタが見えるだろ、あそこにひとつ。ミスドじゃ腹減るしな。あと、リヴィンの中にマックがある。マックは大丈夫？」
「はい。なんでですか？」
「いや、蛍がマックの油がダメでさ。食べると腹壊してたから。あれで初めてマック食えない人間がいるっていうことを知ったよ」
「体弱かったんですか？」
「そうだな、よく貧血とかで倒れてたな。マック食べれないって聞いてお嬢様だなって言ったら怒られたよ、「なんだその言い方は」って」と笑う。蛍さんの話をするときはいつも複雑そう。
「「なんだその言い方は」って……結構怖いですね」
「いや、大人しい子だよ。怒るのはまず無い。それより、どこにする？」
　なんかマックは行きたくなくなった。
「そこのケンタッキーがいいです」といって連れてってもらった。
　日曜だからか人口が多いからか、良く分からないけど混んでた。でも運良く席が取れた。座って真向かいで話す。真向かいって敵対的なポジションだからちょっと話しづらいのよね。
　カップル用に横に座る席があればいいのに。そしたら静の肩に寄りかかって食べれるのに。そっか、公園のベンチとかで食べれば良かった。周りも静かで声も良く聞こえるだろうし。ファーストフードは失敗だったかも、大きな声出さないと通じないし。静の前で大きな声で話すの、恥ずかしいなぁ。こないだのパスタ屋さんの方が良かった。
　フライドチキンを齧る。あ、おいしい。実はケンタッキーも初めてな私。こういうのって言った方が良いの？好印象？それともドンくさい子？聞いてみよう。
「おいしいね、これ。初めて食べた」
「え、ケンタ来たのが初めてってこと？それともこの肉がってこと？」
「来たのが初めて。こういうとこ、来ないから」
「へぇ、そういえばファーストフード行かないって言ったたもんな。嫌いだったの？」
「ううん、何か入りづらくて。私、友達もいないし誘われなかったし。一人で入ることもないし……お腹が空いたら家に帰って自分でご飯作るから」
「そっか、今まで機会が無かったのか。でも美味いって思ったんなら良い経験になったじゃん」
「うん」
　良かった。とりあえず引かれなかったぞ。

　食事が終わる。揚げてるから鶏肉でも油が濃いのね。おいしいけど、雑な味がする。あまり食べると体に悪そう。さすがはファーストフードね。聞いていたとおりだわ。

で、私はさっきからタイミングを狙ってる。何の？――おトイレ、です。実は車に乗ってるときから行きたくなりだしてた。でも、いつ言えばいいものか迷ってた。食事中はないよなぁとか思っていたらもじもじしてきた。膀胱炎になったらやだなぁ。何となく彼氏にトイレ行ってくるって恥ずかしい。それにそろそろナプキンも取り替えないと。

「あの……」

「うん？」

「ちょっと……手を洗ってくるね」

がたっと立つ。そうだ、そういう言い方があったわ。曖昧な日本語万歳。だがその前にトイレ！

何だかこんなこと、アルバザードでも思ったような気がする。あれはレインにカルテに連れてかれた日のことだったっけ。

できるだけ急いで用を足して戻った。長いと色々余計な想像をさせそうだからだ。静はテーブルを片付けてくれていた。トレイを片付けると、私達は外に出た。

「公園で少し休もうか」

「うん」

「っていうか今日は色々歩いて案内するつもりだったんだけど、止めとくよ」

「え、どうして？私、楽しいよ？」

「うん……」頭を掻く「紫苑が嫌なら答えなくていいけど、俺は彼女の生理を把握しておきたいんだよね。重い日に出かけるのはキツいって分かってるし。女の子の体調って生理で随分変わるみたいだから。勿論、そういうことを一切言いたくない子がいるのは知ってるけど、俺はそうしてきたし、ダチなんかもそうしてるから違和感なくて。もし紫苑に違和感あれば言わないでもいいけどさ、こっちも出来るだけ便宜を図ってあげたいんだ」

へぇ、意外。そんな男の人っているんだ。しかも聞いた感じ他の男の人もそういうことをするんだ。てっきり男の人って女の生理を嫌なものとか汚いものとかくらいにしか考えてなかった。というか、そう本で読んできただけなのよね、私。そっか、現実感ないからな、私の考えって。それに比べて静は既婚者だもんね。

「ありがと。私のを教えておいた方がいい？私は平気よ」

「うん、聞いておきたい。それに、今日がそもそもそうなんじゃないかって思ってさ」

「ふふ、だから歩かないって言ってくれたのね。なんて優しいの。うん、恥ずかしいけど、今日がそうよ。でも山は過ぎちゃったから大丈夫。どうして分かったの？」

「どうしてって……勘かな」

普通の女ならここで「へぇ」で済ますんだろうけど、私って何事も追及してしまう。友達ができない原因だ。

「勘って言ってもそれなりの根拠はあるんじゃない？見事当たってるんだし」

すると静はむしろ好意的な感じで興味を持った顔で「勘の根拠ね。なるほど。そうだな、トイレが長かったり、立ったり座ったりをできるだけ避けたり、後は座るときの仕草の微

妙な違いとかかな」
「凄い、そんなとこ見てるのね」
「見てるというか……ほら、慣れてるだけ」
「あ、そっか……」と、ここで気まずくしちゃいけない「流石先生。保健体育もできるのね」
「ははは、男みたいなこと言うな」
　私も釣られて笑った。気を使うのがこんなに楽しいなんて思わなかった。
　光が丘公園というのはウチの駅の前後のロータリーを足しても全然足りないくらい大きいところだった。地図を見てその大きさに驚愕する。
「大きいですね。緑もいっぱい。いいなぁ、こんな公園があって。私の家の欅公園なんて急いで通り抜ければ５秒ですよ、５秒」
「いやまぁ、そこはそこで郷愁感とか誘うだろ。規模だけの問題じゃないよ。ただ、紫苑の言いたいことは分かる。俺もここは好きだ」
「わ、公園に図書館まであるの？」
「うん、誰でも歓迎ってわけじゃないと思ったけど」
「池もあるのね」
「あぁ、そこに」といって直進し、左手の池を指す「汚いけどね……」
「うん……同意。そこの小さな水を流してる人工の水場の方が綺麗ね」
　中を歩く。広い。大きい。緑が多い。蚊も多い……。私はスカートで半袖だから刺されたら嫌だ。
「この辺は木が多いからなぁ、別のところに行こうか。紫苑、そのカッコじゃ蚊に刺されるだろ」
　あぁもう、静、大好き。おバカになった私は腕を絡ませた。
「ん？」
「ほら、こうしてれば先生が守ってくれるでしょ？露出率が減るから」
「体温が高くなると刺されやすいって聞いたけど、まぁいいか。代わりに俺が刺されそうだから」
「え、なんで静が？」
「ん？」ちょっと恥ずかしそうな顔をする。静、かわいい「いや、俺のほうがいま緊張して体温上がってるから」
　あぁ、一度結婚した人でも私みたいな初心者と同じように恋はするのね。良かった。

　ちょっと開けたところでベンチに腰掛けた。ここなら虫も少ない。それにしても蒸し暑いなぁ。汗が気になる。下着の上はシャツとブラウスの２枚だから結構汗をかく。汗臭くなってないか心配。バンをスプレーしてきたんだけど、ちっとも汗なんか抑えてくれないのね、これ。どこが制汗剤なのかしら……。

　で、気にすると何だか汗のことが気になって会話に集中できない。今日はじめじめしてるから洗濯物と同じで匂うかなとか考えてばかり。しょうがないので聞いてみることにした。この行動力は自分でも信じがたいが、私の根幹をなす性格でもある。
「ねぇ、私、汗臭くない？」
「は？」と目を丸くする「いや、全く。何、暑いから？」
「うん……２枚着てるし」
「そうか、日陰に行こうか」
「ううん、匂わないならいいの」
「むしろ良い匂いがするけどな」
　え、どういう意味だろう。
「そんな……だって、汗よ？」
「さぁ。紫苑の体から出たものなら、良い匂いがしそうだけどな」
　なんだかそんなこと言われると恥ずかしくて死にそうになる。まるで私の身体がポプリみたいな言い方。私は何も言えなくて、くすくす笑ってた。
「いやほんとに。特に男には魅力的なんじゃないか？ほら、フェロモンみたいな？よく分からんが」
「え、そんなの出てるの？」驚いた。と同時に嬉しい。レインに感じたことを私もやってたら嬉しい。
「多分。いつも横を歩いてると良い匂いがするなって思ってたよ。女子高生って結構匂いの強いのが多いんだけど、紫苑はささやかな良い匂いだな」
「そうなんだ？他の女子ってそうなの？」
「まぁ、生徒の話だけどね。うん、新陳代謝が活発だから子供っぽいムッとする匂いがする子がいるね。紫苑は清潔な匂いがするよ。汗かいてても変わらない」
「わぁ、なんか嬉しい。結構自分で気にしてたのよ」
　静はちょっと意外そうな顔で「え、気にしてたの？そりゃ杞憂だな。そういうのが高じると自臭症っていうらしいよ」
「そこまで気にはしてないわ。好きな人相手に気にしただけ。あと、レインが良い匂いだったから自分はどうなのかなって疑問だったの」
　静は一瞬反応が遅れて「あぁ、レインね。アトラスの」と言った。まさか忘れてたのだろうか。ちょっと意地悪な気分になった。
「ねぇ、蛍さんはどうだったの？」
「んー？」と少し嫌そうな顔。あ、私、調子に乗っちゃったかな。でも静は少し考えてから答えた。
「いい匂いだったよ、いつも。病弱だけど生活習慣は健康な子だったからね。紫苑と同じかなぁ。汗をかいても良い匂いだったし、むしろ俺はその汗の匂いが好きでね。別に変な意味じゃなくてさ、フェロモンってやつなんだと思うよ。蛍は和風好みでね、お香を炊い

てたんだ」
　へぇ、なんだかアルマスト信者みたいな人ね。日本じゃ仏教っぽいっていうのかな。
「お香？」
「仏に炊く奴じゃなくてアロマテラピーの。「雨」っていう名前の変わったお香だった。でも俺はそういう隠した匂いよりも本人の匂いの方が好きでね。特に……腹、かな。膝枕してもらったときにお腹のところが汗ばんでて、嗅いだら何だかやけに落ち着く良い匂いだった」
「ふぅん……。ねぇ、私はどう？膝枕してみてよ」
　何だか対抗心が沸いてきた。静は少し戸惑っているが、逃がさない。私は膝をぽんぽんと叩くと「ここに頭乗っけて。膝枕してあげる」と言った。静は素直に従って私の膝の上に乗った。
「向こう向きじゃお腹が嗅げないよ、先生」
「うん」観念した静は私のお腹の方を向いた。私は髪を優しく撫でながら頭をお腹に引き寄せる。私の方が若いんだからフェロモンとか出てるに決まってる。負けっこない。蛍さんの記憶に勝ってやる。
「どう？」というと静は立ち上がった。
「うん……甘い良い匂いがする。でもやっぱ恥ずかしいわ、俺」
　私は満足げに「ふふ」と笑った「膝枕の寝心地はどっちが良かった？」
「え……そうだな。面積は蛍のほうが広いかな。他は……どっちも痩せてるから同じ感じかな。太ってれば寝心地は良いんだろうけど」
「そっかぁ」
　蛍さんのこと随分良く言うわね。それがちょっと気に食わなかったけど、黙っておいた。不思議と彼女の話を聞くこと自体は少しも不快でなく、むしろできるだけ聞きだしたい。
「さて、靴でも買いに行こっか」といって立ち上がる「ダイエーとかにもあると思うんだけど、どうせならブクロか渋谷で買おうよ。原宿でもいいけど」
「え、そんな大したものじゃないからいいよぉ」と首をぷるぷるさせる。
「いいって、俺が買うから」
「だったら尚更！買ってもらうなんてダメよ。そんなことのために彼女にしてもらったんじゃないもん」
「でもさ、付き合った記念に何かあげたいし」といって手を差し出してくる。私は手につかまって立ち上がる。こういうシーン、実は夢見てた。心の中で「えへ」って思う。
「ありがとう。でもね、ほんとに心苦しいのよ。私はじゃあ記念に何をあげればいい？私も何かあげないとアンフェアだわ」
「もう貰ってるよ」
　あ……もしかして「紫苑から愛を」とか言うのかな。いいなぁ、そんな台詞、言われてみたい。

「ほら、こないだの豚汁」
「え？……あ、と、豚汁ね。……あんなのいくらでも作るわよ」
「手作り料理っていつの時代も男に有効なんだよ。さ、行こう」
「そうなの？」と言いながら付いていく。なんだかやっぱ大人には勝てない。私のペースにするつもりだったのに、中々先生を支配できないわ。経験ある人って違うなぁ……。
　光が丘公園から 15 分くらい歩くと静のマンションに戻ってきた。っていっても私はこの駐車場しか見てないけどね。せめてどこの窓が静の部屋なのかとか聞きたいなぁ。
「紫苑？」
　呼ばれて私は慌てて車に乗る。まぁいいや。そのうち入れてくれるよね。ご家族にも挨拶しなくちゃ、お土産持って。
　車が出る。
「池袋って近いの？」
「ん？ブクロにしたの？まぁこっからだとブクロが圧倒的に近いけど。竹下とかじゃなくていいの？」
「竹下……」
「原宿の竹下通り。服とか色々あるから。ん、じゃあサンシャインにしようか。地下に靴屋が何軒かあるから」
　私は静に連れられてサンシャインへ行った。池袋に近付くと道路が混んできた。しかも他人の車が近くに来る。横からぐいーっと割り込んでくる人もいる。危ないなぁ。ウチのおっきい道路……なんだったっけ、先生が言ってた……県道 3 号だっけ……あそこじゃ考えられないわ。怖いなぁ。
　でも静はなんでもない顔で運転してる。運転してる男の人の横顔ってカッコいいな。静は元々カッコいいけど、余計カッコよく見える。でもこの人、前から見た方が更にカッコいいのよね。お父さんとタイプは違うけどほんと綺麗な顔してるなぁ。この人が自分の彼氏だなんてなぁ。ラッキーだな、私。
　ん……でも先生もそう思ってるのかな。私ってかなり美少女だって言われてきたし、流石に鏡を見ればそのくらい自覚できる。多分、テレビに出てる子たちよりかわいい。そういう意味じゃ静も同じこと考えてるのかも。蛍さんと私、どっちが綺麗なんだろう。どっちが可愛いんだろう。とても気になる。
　そうこうしているうちに池袋に着いた。静はサンシャインの近くの有料駐車場に停めた。降りて少しもしないうちにサンシャインだ。電車で東口から歩いてくるしかない私にとってこの体験は新鮮だった。同じ建物が違って見える。
「あー、そういえば」サンシャインの屋上を見る静「一番上の階に展望台レストランがあるんだった。夜は見晴らしが良いらしい。値段もそれなりらしいけどね」
「へぇ。なんで伝聞形なんですか？」
「大学のときのダチがデートで使ったって言ってたから。そのとき高いって聞かされてそ

うインプットされてるけど、いま考えたら大したことないんだろうな」といって少しため息。なんだろう、昔のこと思い出してため息なんて……。学生時代、お金で苦しかったのかな……？

　階段を降りて地下へ行った。静の言うとおり、靴屋がいくつかあった。静は始めから何か探している雰囲気で、スタスタと歩いていった。

「ねぇ、もしかして何買うかもう決めてるんですか？」

「うん、川越で聞いたとき決めた」

　はやっ……いつも即決なのね。え、じゃああのときからもうプレゼントしてくれるつもりでいたの？それなのに暫く黙ってタイミングを見計らってたんだ……。そうか、私みたいに思いついたらすぐ言うってダメなのかもね。

　でも、私の好みって考慮しないんだろうか。一々何が良いって聞かれるのも確認されてばかりで嫌だけど、何も意見を聞かないのもなぁ。まぁ、買ってもらうんだから仕方ないか。……ううん、ダメよ。こういう自己中なところがきっと静の悪いところなのよ。注意しなくちゃ。

「ねぇ、静。プレゼントは嬉しいんだけれど、私の希望も聞いてほしいな……」

「え、靴だろ」

「うん、でも色々あるよね」

「そうだな、ごめん。ミュールって聞いたからミュールかと思ってたが」

「あ、そうか。そういえば私、言ったね。……ごめんなさい」

「何が？」首を傾げる静。そうよね、説明なしに謝られても何が何だか分からないよね。

「紫苑さ、サンダルって興味ない？ミュールもいいんだけどさ、サンダルも１足あると良いと思うんだよね」

　サンダルって庭に出るときに履くあのサンダル……なわけないか。女の子たちが履いてるあれね。あれ、全く動きにくそうで嫌なのよね。蹴りとか出せないじゃない。それに、どうやって走れっていうの？さて、こういうのは言うべきかどうか。むー、言わないままそれでいいんだって誤解させてはいけないよな。

「静、好きなの？」

「うん、紫苑なら似合うと思うんだよ。俺との身長差も少し埋められて並びやすくなると思うよ」

　なるほど、そういう利点もあるのね。

「でも、その代わり歩きにくくなるよね。走れないし、蹴りも出せなくなるし」

「蹴り？」固まる静「な、何か蹴るつもり？」

「あ、違うの。もし何かあったとき、怖いなって」

「まぁ……そしたら俺が守るから良いんじゃないか？あ、でも紫苑の方がふつうに強いか。空手だもんな」

「ふふ……」ちょっと嬉しい。守ってくれるだって。じゃあいっか。履きましょう、あな

たのためならその実用性ゼロの靴を。
「サンダル嫌か？」
「ううん、やっぱり履いてみたくなった。先生、流石、説得が上手いのね」
「良かった。なぁ、これなんかどうだ。レースの編み上げなんだけど。紫苑、女子高生とは思えないくらい脚が綺麗だから」
　といって見せてくれたのは長い紐がついたサンダル。何これ？あ、この紐を脚に巻くのね。うわ、派手ー。え、これを私が……ですか？
「こんなの履いていいのかな。目立たない？」
「何言ってんの今更。それだけ綺麗な顔しといてさ。紫苑が履けばむしろ歩く広告になるよ」
「え……」顔が赤くなる「そ、そうかな」静って本気でこういうこと言ってるんだろうか。それともお世辞？ううん、お世辞じゃない。本気っぽいもん。でもね、私ってばあのお父さんしか男の人知らないでしょ？こういう風に直情的に褒められると弱いのよ。心が気持ち良くくすぐったい。
「サイズは？」
「23」
「小さいな」目を丸くする「靴脱いでくれる？」
「はい」といってミュールから足を抜く「え、小さいかな？ふつうだと思うけど」
　すると静は一瞬深刻な顔をして、鼻で大きく息を吐いた。なんだろ……。
「小さいの嫌？」
「いや、まさか。そんなことないよ。そういえば紫苑って身長いくつ？」
「163cm よ」
「体重は？」
　驚いた。男の人って女の子に体重聞くんだ。ああそうか、私が痩せてるから気兼ねしないのか。
「45kg くらい」
「小さくて軽いな。うん……」
「大きい方が好き？」
「いや、好き嫌いじゃないよ。単に小さいなって思っただけ」
「身長……小さい方じゃないと思うけど。体重は軽いけどね。しかも最近ちょっと減ったかも」
「そうなの？」
「先生のせいよ」指を唇に当ててくすくす笑う「恋してるから食べれないの」
　先生は照れ笑いした。私もくすくす笑った。靴はピッタリだった。編み上げは店員のお姉さんにしてもらった。先生は綺麗と言ってくれた。でも値段にビックリ。２万円近くするんだもの。でも先生は値札もロクに見ずに買った。大人の力って凄い……。

「紫苑、そのまま今日履いてなよ。家に帰るとき履き替えればいいから」
「うん、そうする。うわーい、うれしいよー。先生からプレゼントもらちゃった」
　高かった。私の方がビックリした。でもここで余計なこと言ってお金のことで口を挟んだら多分先生のもてなしの心にケチをつけることになる。私は子供なんだ、結局。だってどんなに頑張ったってお父さんや先生に買ってもらうしかないし、車で運んでもらうしかないんだ。だったら子供らしく素直に喜んでいよう。私は私がしてあげられることで頑張ればいいんだ。
　先生は私の素直な喜びようを見て、凄い満足そうだ。凄く機嫌が良いみたい。私まで気分が良い。そうか、素直な女って好かれるのね。はっと気付いた。そうか、これは共依存なんだ。先生は私が喜んでいるのを見て、自分が若いメスを満足させられるオスであると知って満足する。そしてメスの私は優れたオスに選ばれて庇護を受けることで、自分がメスとして優れていることを知って満足する。なるほどぉ、そういうことか。どこまで発達しても人間は動物ね。
　なーんて心の中で考えてるのが知られたら私は捨てられちゃうんだろうか。かもね。こんな可愛げのない女。でも、捨てられても絶対挫けないけど。
「紫苑、気をつけろよ」
　先生の声が聞こえた。と思ったらもう遅かった。私の視界がガクっと崩れる。えっと思った拍子に目の前が暗転する。
　あ、私……皮肉な思考をしている間に慣れないサンダルのせいで地面に躓いたんだ……。
　そう理解したときには私は既に空中にいた。不思議なことに私は転ばないようだ。地面がちっとも近付いてこない。お腹が苦しいので見てみて初めて状況を理解した。
　先生が私を抱えていた。どうやらぼーっとしてた私は動く歩道の入口で躓いて転んだらしい。そのまま倒れるところをとっさに先生が私を抱えたのだ。右腕一本で軽々と。私の体は完全に空中に浮いていて、先生が持っていてくれた。
「大丈夫か？気をつけないと」といって下ろす。
「ありがとう。凄い力なんですね」
「まぁ、一応男だからね。でも俺は力ない方だよ。「色男、金と力はなかりけり」ってね」といって笑う。
「え、何ですかその引用句」
「俺の教授の常套句だったんだよ」と回顧的に微笑む。あぁ、この人、カッコいいなぁ。
　周りを見回す。後ろのカップルと目が合う。女の子に笑われた。私と同じくらいの年だ。男の子の方も同じくらいの年。学校に行ってなさそうな不良っぽい子たち。私の嫌いなタイプ。空中に情けなく舞い上がった私のことを笑っているんだ。ふん、勝手に笑ってればいいわ。あなたは靴も買ってもらえないし、倒れたときだってその中途半端な不良君じゃ私の王子様みたいには助けられないでしょうから。
　ぷぅっと頬を膨らませる。やだな、私、こんな嫌な女だったっけ。何だか僻みっぽいっ

ていうか恨みがましいっていうか……。こんなだから今まで友達も彼氏もできなかったんだろうな。
「せんせー」甘えて静の腰に手を回す。
「先生いうなって」と少し慌てた感じが可愛い。
「やっぱり少し背が高くなったよ。並びやすいね」と言ったところで静はいきなり私を後ろに退けた。抗議しようかと思ったところでサラリーマンくらいの男の人が急ぎ足で横を通っていった。
「並ぶのはエスカレータ以外にしような」と優しく言う静。
　私は自分が恥ずかしかった。こんなに周りの見えない子だったっけ？いまアルシェやレインに会ったら呆れられてしまうのではないか。
　歩道を降りて長いエスカレーターを昇るとハンズの横に出た。もうこれで買い物は済んだ。
「さて、これからどうするかね。ってもう６時前かよ」
　そして小さな声で呟いた。多分私に聞こえないように言ったんだろうが私は耳が良い。確かに「あぶね。蛍じゃないんだよな」と言った。
　急に寂しくなった。多分、もう家に帰らされる。理由は簡単。私が子供だから。せめて女子大生ならもっと遅くまでいられたのに。
「紫苑、今日はもう帰らないとな」
「はい……もっと一緒にいたいです。時間、少なすぎです」
「ごめんな、今日は午前中仕事だったから昼からになっちゃって」
「ううん、先生に言ってるんじゃないです。私、子供だからしょうがないですよね。蛍さんとは４年のときに出会ったんですよね。どのくらいまでデートしてたんですか」
「そうだな……お互い大学生だったから終電まで街中にいたり……」とそこで言葉を切る。
「……いたり？他には？」
「いや、終電すぎて一日明かしたり、な」
「明かすって、どこでですか？」
「いや、だから……」と口篭る。あぁ、そういうことかと分かった瞬間、私の顔が赤くなった。そうか、大学生だもんね、そうよね。
「あの、先生。私、もう少し池袋にいたい。そうだ。本を買うことになってたの。親にそう言ったから。何か買わないと」
　立ち読みするつもりだと言ったことを思い出した。
「ジュンクまで行きましょうよ」
「そうだなぁ」
「ね？だって私、この靴履いて歩いてみたい」
「あ、それもそうだね。でも、親御さんには連絡取ってもらえるかな」
「分かりました」といってケータイを出す。そして家に電話をかける。

「え、メールじゃなくて電話なの？」と少し意外そうな静の声。私はしーっと指を立てる。数コールして誰かが出る。
「もしもし……私だけど。お父さん？お母さん？」
「しかも家電か……」ぼそっという声。え、何かおかしいの？
　電話に出たのはお母さんだった。私が本を買いたいのでジュンクに行ってるから遅くなるといったら気をつけてねの一言で切られた。あっさりしてるなぁ……。
「親御さん、何て？」
「あっさり OK でした。疑うこともなく。どうせ２人でいちゃいちゃしてたんだわ」
「え、そうなの？仲良いんだね」
「うーん……娘の前であれはセクハラだと思う」ちょっと調子に乗ってみた。
「そ、そうか……」と言ったきり静は黙って歩き出した。あれ？引いたかな。
　とことこ歩く私。何だか足音がいつもと違う。歩き方も違う。歩きにくい。でも、嬉しい。だって何かあったら静が守ってくれるんだもん。安心していられるわ。
「ねぇ、静。お夕飯、私にご馳走させて」
「え？ジュンク行って帰るんじゃなかったのか」
「そのつもりだったんだけど、お母さんのあの様子じゃ私置いてお父さんとご飯食べに行く雰囲気だったから」
「高校生の娘にご飯作ってあげないの？」と怪訝そうな顔。
「多分私が外で食べてくるって思ってるからね。私が居なければ２人でデートできるでしょ。２人にとって久々の休みにおっきな娘が家でごろごろしてると邪魔なのよ」
「そんなもんかねぇ」
　そう、あの親はそんなもんだ。私を阻害することは微塵も無いが、偶に休みが重なった日は２人でいたいというオーラを出している。私は大抵そういうとき、適当な用を見つけて図書館に行ったり学校に行ったりして１人で過ごしてきた。いまは静が居るからずっと良い。
「今日だって行くときに親がご飯代って言って１万円もくれたんですよ。あれって多分、夜も食べてきなさいってことだと思います。そういう親だから」
「それは……ちょっと酷いな」
「え、酷くはないですよ。凄く優しくて理解のある親です。間違っても虐待なんかされてないですからね！」
　慌てて弁護すると静は「そっか」と納得してくれた。
　ジュンクまで歩いて４階で言語学の本を見た。静は「自分はもう引退したんだ」といって真剣に読もうとはしない。だけど、初めて会ったのはここだ。まだ言語学に未練を持っているのは確かだ。
　静に連れられて８階に行った。語学関連の本を見たいのかと思ったら参考書コーナーにつれてかれた。

「え、語学見るんじゃないんですか？」
「一応受験生だろ。恋愛してて落ちましたじゃ親御さんに申し訳が立たない」
「私は大丈夫ですよ」
　本気だ。別にいまこの場で東大を受験しても受かると思う。でも学校が北城じゃそこまでの信用はないだろうな。ほんとだったら私は浦女に行ってたんだけど、テストのときに緊張でおなか壊して不合格だったから……。あぁ、悲惨な過去を思い出した。
「『言語』の 12 月号で東大の大学院の問題だって解いてますから」
「え、雑誌の？あれ、読んでるんだ。高校生の読者がいるなんてな、しかも女の子……。大修館も知ったら驚くだろうな。しかも東大の問題まで解いて。っていってもあれ、解答とかないだろ。解いた気になってるだけじゃないだろうね」
「むー、そう来ますか。じゃあ先生、何か問題をどうぞ」
　英語コーナーに行く。先生は桐原の通称「英頻」を手に取る。
「あ、ダメですそれ」
「何？レベルが高いとか？これは入試の基本だぞ」
「じゃなくて。全問記憶してます」
　静は眉を上げた「そりゃ凄いな。試していい？」
「うんっ」
「ええと、じゃあ慶応の問題な。「彼の来るのが遅れようと遅れまいと、まぁたいしたことじゃない」って文になるように、今からいう単語を――」
「あ、それ覚えてます」
「え？」
「確か……"It matters little whether he comes late nos not"でしょ？」
　先生は無言で頷いた。
「俺、要らないな、教師として」
「ふふ……そんなことないですよ。質問したいことありますし。結局私ら生徒は覚えろって言われたことを覚えるだけで、それ以上のことは質問しないと自分の考えに確信が持てませんもん」
「質問なんてあるの？」
「はい。まず、この whether って if でもいいですよね」
「うん、いいよ」
「あと、does'nt matter にして little の代わりにできますか？」
「それは無理だな。文法的には良いけど、ニュアンスが変わる」
「そこなんです。私たちが聞きたいのは」
「いや、そういうのを聞きたいのは「私たち」じゃなくて紫苑くらいだと思うけどな。まぁ、doesn't にして否定文にしたら彼が遅く来ても関係ないって意味になるので、彼の重要性が変わってしまう。代わりの表現をしたいなら hardly を使う」

「そっか。It matters hardly にするんですね」
「いや、hardly は特殊な副詞だよ。little と用法が違う」
「え……あ、やだ。そうだ、It hardly matters ですね。やだ、頭で考えれば分かるのに。ふだん英語使ってないのばればれ」
「はは、それくらいの方が可愛いよ。どうにか俺の慎ましやかなプライドも保てたしね」
　先生は謙遜してるに違いない。
「英語ができるのは分かった」少し声をひそめて「アルカを向こうで学ぶくらいだもんな」
「うん」
「じゃあ他の教科はどうだ？」
　別の棚へ移動する。取り出したのは化学。
「言っとくが、俺はさっぱりだ。でも東大と大きくでたからには化学もできるんだろう」
「いいよ、出して」面白くなって腕を組んでみた。なんか楽しい。こういうのがデートなんだろうな、私にとって。ふつうのデートじゃない。でも、こういうのが好き。楽しいと思えればいいの。ふつうかどうかなんて下らないわ。
「んー、こんなのでいいかな。フェノールとは？」
「ベンゼン環の炭素原子の部分にヒドロキシル基がついたもの。C6H5OH よ。皮膚には付けられないわ、毒があるから。色が無くて結晶のはずよ。あと、匂いがある」
「んー、そこまでここに書いてないから分からないけど、多分あってると思う。おいおい、まるで歩く辞書だな。それもアトラスで生きるために学んだのか？」
「そうよ、何かの役に立つかもしれないから」
「凄いな。英語はまぁどうにか面子を保てたが、他の教科じゃからっきしだ。俺が紫苑に教えてもらうようだな」と少し寂しそう。いけない……これって相手のプライドを凄く傷つけてない？女は少しバカな方が可愛いって言うじゃない。もしこれで嫌われたらどうしよう……。
「あの……先生、私って生意気？嫌いになった？」
「いや、ならないよ。前にも言ったけど、凄い人は凄いって。俺は賢い人の方が好きだし。でも、ちょっと萎縮はするかもな、正直」
「でも先生は車運転できるし、英語もできる。私を空で掴まえて転ばないようにしてくれる」
「それ……殆どの男でもできることだけどな」
「そうかも……でもね、一番はね、私を幸せな気持ちにしてくれる。これは先生じゃなきゃできないことだよ」
　私、ちょっと感情的な声。横にいる制服の男の子がぎょっとした顔でこちらを見てくる。しまった、さっきから私、先生って呼んでた。
「それって凄いこと？」
「凄いよ。他の人が言い寄ってきても私は先生にしか心を開かないのよ。これって東大よ

りもずっと狭き門よね？」
「ふーむ」
　少し興味深げな顔になった。
「私のこと凄いとか可愛いって思ってるんだよね？そんな女の子に認められてる先生はもっと凄いのよ？自覚してる？」
「あぁ、なるほど。そういう見方もあるのか」
　あ、機嫌良くなったなと思った。最後の「自覚してる？」というのが利いたみたい。さも当然のように言ったから。それにこの言葉は本心だしね。
「ま、紫苑の受験が大丈夫なのは分かったよ。この様子じゃどの問題出しても答えるだろうからな。もう院の研究に向けて勉強してもいいかもな。いっそのこと学部生分の勉強を飛ばして」
　静は語学コーナーへ行った。
「紫苑、ドイツ語とかの資格取ってるって言ってたよね。確かサンシャインでそんなこと聞いた気がする」
「うん」
「英語の資格は取ってるの？」
「うん、英検を。学校の薦めで受けたから」
「何級？」
「２級」
「そうか、学校の薦めじゃ２級を受けさせるだろうな」
「ねぇ、社会人になって有効なのって何級なの？」
　静は顎に手を当てる。「履歴書には２級から書けるが、効力があるのはせいぜい準１からだろうな」
「へぇ。先生も英検持ってるの？」
「あぁ」と言ったきり黙ってしまう。何でだろう。あまり言いたくないのかな。でも聞きたい。
「何級？」
「ん……１級」
「凄いじゃない。何でもっと威張らないの？」
「そんなことしたらカッコ悪いだろ。英語の教師なんだから世間的にはできて当然だし」
「じゃあ英語の先生ってみんな１級持ってるんだ」
「まさか！」熱の入った声「英語を教えてたって殆どが１級なんて持ってないよ。準１さえ怪しい。トーイックだって１回も受けたことないような奴が平気で教授や教師をしてる世の中だ。でも世間はそいつらよりもっと実情を知らないから、安易に教師なら１級持ってるんじゃないかなんて思ってるだろ。特に父兄は」
「そうかも。っていうか先生方って１級持ってないのね」

「全然、全く！」力強い。何か嫌な過去でもあるのだろうか。話を変えよう。
「そっかぁ。裏事情ってあるのねぇ。あ、そういえばトーイックなら受けたことあるよ。個人で」
「へぇ、新方式で？」
「え、何それ。変わったの？」
「うん、今年から変わったよ。122 回からだったっけな。発音が 4 方言で構成されるようになった。英音なんかが入るから負担に思う人もいるね。part6 の誤文訂正はなくなったし」
「え、あれ無くなっちゃったの？受験英語の応用が利くからラッキーとか思ってたのに」
「ところで何点だったの？」
「えーと、910 点だった」
　すると静はピタリと止まった。目を丸くさせて私を見た。……そんなに衝撃的だったのだろうか。
「何回受験した？」
「え……1 回よ。去年」
「初めてで 910？海外経験無かったよね？」
「うん……何、そんなに驚かないでよ……」
「いや、驚かない奴がいたらそいつは受験したことがない奴かよっぽどロースコアな人間だね。大卒でも最初は 4〜500 がいいとこだって聞くよ」
「え、そうなの？でも私、一応模試を買って自分の部屋でやってみたから。あの模試、運営委員会が出してる公式のものだけあって良くできてるよね。試験前日にやったのと殆ど同じなんだもん。時間配分とか迷わずに済んで助かったわ」
　静は深刻な顔をした。完全に教師の顔だ。
「あのさ、リスニングセッションはいくつだった？」
「リスニングもリーディングも 450 前後よ。合わせて 910」
「リーディングは高校生でも頑張ればできる。でもさ、リスニングは日々英語を耳に入れてないとそうそうできるもんじゃないぞ。CD とかを聞いてな。海外経験がなければあんなもんいかに集中してたくさん聞いたかという慣れに過ぎない」
「単語帳に CD が付いてたからそれを口真似したり、覚えて書き写したりしてたよ。あと、対策本を何冊か買ったから、それに付いてたのを何度も聞いたかな。口真似と書き写しばっかしてたと思う」
　すると静は凄く納得したという顔になった。多分、私の点数を疑ってかかってたんだろうな。でも、今ので納得したらしい。
「うん、なるほどな。それならまあ分かるよ。紫苑がやったのはシャドーイングとディクテーションっていうメソッドで、リスニングに非常に有効だ。特にシャドーイングは同時通訳者を育てるものとして頭角を上げてきた方法でもある。流石は紫苑だな。感服したよ」
「そんな……先生はいくつだったんですか、初めてのとき」

聞いて少し後悔した。これで自分より下だったら非常にまずい。可愛げのない女に決定だ。うぅ、聞かなければ良かった。

「何だか言うのが恥ずかしくなってしまったが初回は 925 だ。そのとき俺は既に英語でバイトをしてた。高 3 の生徒と 15 点しか変わらないなんてな……」

何だか私は何も言えなくなった。気まずい。自分に苛立っていた。頑張って勝ち取った点なんだから私が悪いわけじゃない。でも、先生の気持ちも考えたらどう？私、良く見られようとして一生懸命自慢して、結局先生を萎縮させただけじゃない？こんなんだから友達の一人もできないんだわ。可愛そうな先生。こんな小娘にプライドずたずたにされて。私、自分が嫌い。人の気持ちが分からない自分が嫌い。

自分への嫌悪感で私は何も言えなくなった。でもその沈黙を先生は誤解したみたい。それは当然の誤解。少し考えれば分かること。いま黙ったら相手はこう思うに決まってる。「男の癖にだらしないって思われた」って。だっていま相手は打ちひしがれてるんだもん。楽しい気分でいたのは私だけ。自慢していい気になってた。なんて嫌な女。レインみたいに首席でも一言も自慢しない女の子の方が良いに決まってる。

違う、いまはそんなこと考えてる場合じゃない。いま沈黙しちゃダメ。先生は誤解する。でも言葉がでない。案の定、先生は疲れた顔でエレベータへ向かう。何だか先生が私に壁を作ったのが分かった。ダメ！それは嫌！

「違うの……！」

泣きそうな低い声で呟いた。静かな本屋だから聞き逃しようがない。先生は私の声に驚いて振り向く。

「いま黙ったのは自分に嫌気がさしたからなの」

「なんで紫苑が嫌気さすのさ」

「だって……」

先生の気持ち考えてないからなんて言ったら「同情してるのか」って思われそう。どこが「私は男の人を立てる女」よ。全然できてないじゃない。紫苑のバカ。

「だって……私、自分が嫌いなんだもん！」

「え……いきなりどうしたの？」

「それで、先生が好きなんだもん！」

「ごめん、言ってる意味が分からないよ」

「意味は文字通りよ。伝わったでしょう？」

「うん、まぁ理解はできた。でも何でそう思ったのか分からない」

「……外、出よ。おなか減った。だって私ガキだもん。ガキは歩くとすぐおなか減るのよ」

先生は首をかしげて「うん、分かった」といった。私、なんて不安定な女だろう。何となく自分が捨てられてしまう絵が浮かんできた。それとともに手首を切ってる自分の姿も見えてきた。捨てられたらきっと私は死んでしまう。もうそれくらい先生が好きなのだ。どうすればこの気持ちを伝えられるんだろう。

外に出た。私は泣きそうな顔で歩いている。
「紫苑」先生が肩に手を置く。暖かい「今日は疲れちゃったな。街まで引っ張りまわしちゃったから。ほら、おなかだって今は痛い時期だろ。サンダルなんか履かせなければ歩かせないですんだのにな」
「ううん」首を振る私。先生、なんて優しいの。どこからそんな言葉が出てくるの？「違うの。なんか先生といたら自分がどんなに未熟かって分かったの」
「ふむ……」
「あのね。分かった、認める。私は勉強できる。だってそればっかしてきたんだもん。多分検定も頑張れば先生に勝てる。でも、今は勝てないのは事実だし、私があなたを尊敬してて好き。本当よ。伝わっていますか？」
「うん、うん」といって私の頭を撫でてくれる。
「先生、言語学の才能ある……。私が院生の勉強をすべきレベルに達してるんだとしたら、その予想は外れではないはずよ。私ができるのは努力して覚えるだけ。それをちょっと応用をするだけ。貴方と話して貴方に惹かれたのはその柔軟な思考よ。突飛で破格な発想。そして聞き手を魅了する話し方よ。先生は恐らく私が紙に書いてあることを覚えてる間にそういう努力をしてきた。だから、私は先生のそういうところを尊敬してる。分かりますか？」
「うん、よく分かったよ。紫苑、俺のことを随分気遣ってくれるんだね、嬉しいよ。大丈夫、俺達は上手くやっていける。さっき確信したよ、８階でさ」
「え？」あの８階で？先生は壁を作ったんじゃなかったの？
「あのときさ、紫苑、黙ったろ。俺、黙られるのって嫌いなんだ。でも一生懸命何か考えて何か言おうとして、そして喋った。一生懸命さが伝わってきた。正直言っちゃうとね、それが蛍との差なんだ。蛍は人とコミュニケーションを取ることができなかった。俺も含めてね」
「先生は黙っていられるのが嫌いなのね？」
「あぁ、聞いた限りでは、君のお父さんとは合わない人種かもしれん」と笑う。
「ふふ……」
「黙ってられると分からない。だから俺は蛍にも言ったんだよ。付き合ったときすぐにね。いま思えば付き合うときの２人の約束のようなもんだったな」
「何て言ったんですか？」
「言わなければ気持ちは伝わらない。どんなに繋がっても言わないことは伝わらない」
「それって何か寂しいですね」
「アルカの原義とは正反対だよな。でも、俺は当時そう確信してた。ウチの両親は親父が無口で秘密主義でな。借金を抱えてたんだが、黙って一人でしょいこんで、ある日蒸発した。母親はその辛さとかを予め分かってやれなかった。でも当然なんだ、夫婦といえど所詮は他人なんだからね。寂しいかもしれないが事実だ。現に俺は紫苑の生理痛を少しも感

じない。空腹感も共有できない。泣きそうな顔だってことは理解してるけど、でもその悲しみは分からない。きっと言わなければ詳細は伝わらない」
「うん」先生はとても理論的だ。頭の中がスッキリ理論で作られてる。そんな印象を受ける「日本人の文化である腹芸は通用しないっていうことですね」
「うん、上手い要約だね。要するにそういうこと。脱西洋化といっても日本は様々な分野で「アメリ化」の一途を辿っている。法律や社会モラルを筆頭にね。社会環境の都市化、価値観の多様化などに伴って腹芸は滅びの道にある。そして親父によるトラウマが俺をその先駆者にした」
「ふふ……その最後の言葉も無生物主語の構文ですしね」
「はは。紫苑、やっぱお前は俺好みの女だよ」
「ほんとう？」
「うん、そんな台詞が言える機転ってカッコいいって思うよ。女だろうとカッコいいもんはカッコいい。尊敬するよ。蛍は尊敬できなかった。紫苑、自慢とやらもほどほどにしてれば一向に構わないよ。俺にお前を尊敬させてくれ。俺もお前に好かれるために頑張る」
「うん、分かった」
「……実はな、これが蛍の出した「約束」なんだ」
「さっき言ってた、付き合ったときの約束みたいなもののこと？」
「そう。俺が要求したのは「言わなければ分からない」ってこと」
「出てった蛍さんは結局最後までそれを守れなかったわけね」
「残念だがそのようだ。そして蛍が俺に要求したものがある。彼女の親は不仲で、蛍はずっとそれを見ていた。自分の親が不仲なのは彼らが互いを好きになる努力を怠ったからだと蛍は考えた。それがあいつの解釈だった」
「そして蛍さんは静に「お互い好きでいられる努力を怠らないようにしよう」と言ったのね？」
「そう。だけど結局蛍は人から呆れられることばかりして、徐々に俺の敬意を失っていった。そして敬意がなくなり、俺から大切に扱われることもなくなった」
「厳しい人間関係ね」
「そんなもんだ。それに互いを好きでいる努力についてはあいつが言い出したことだ。結局自分も自分の親と同じことをしたってことだ」
「厳しいわ……」
「厳しいよ」静は歩き出した「でも……後悔もしてる」と背中越しに言った。
　そのとき静のケータイが鳴った。私は嫌な予感がした。静が出る。やっぱり塾だった。夏期講習のことで何か話してる。静は確認したいからそちらに行くという。電話が切れる。私を見てくる。私はやるせない感じで目を合わせないで笑う。
「お仕事だからしょうがないよね。今日は楽しかったです。ありがとう。今日会えて良かった。先生のこと、もっと好きになれた。やっぱりあなたは運命の人よ」

「ごめんな、夕飯」
「ううん。残念だけど。ジュンクで別れるのは久しぶりですね」
「いや、そうはさせない」と言うと同時に静は私の腕を取った「どうせ川越だ。一緒に行こう。川越からなら定期もあるだろ？」
「え、いいの？」
「車の中で会話できるからね。俺はな、一秒でもお前と同じ空気吸ってたいんだよ」
「わ」と言って思わず口を押さえた。なんてカッコいいの、この人。
　何がって……言い方、声、そして顔、身体。全部が似合ってる。蛍さんもこういうところに惚れたのかな。言っちゃ悪いけどこの台詞、言って良い人って限定されてる気がする。私の中で、テレビの俳優を除いたら、許されるのはお父さんと静だけ。
「うー」声にならない感情。
「どうしたの？」と静が聞いてくる。いえいえ、声が出ないくらいあなたに惚れ込んでるんです。もしこの人が私を騙してるんだとしても、これだけ甘美なら許してしまいそう。
「なんかね、言葉にならないんだけど……私の酸素ぜんぶ静にあげちゃってもいいって思った」
　静は「なんだそりゃ」と子供っぽく笑った。かわいい。

　帰りの車は行きより空いていた。静がよく言う 254 という道路に入ったらほんとに一本道で練馬も上福岡も川越の近くも通るので驚いた。今まで繋がってなかった場所が道によって繋がっていくのが分かった。それとともに、自分がどんな小さい狭い世界の中で生きてきたかということを思い知った。まるで御釈迦さんの手の平の上をくるくるしてた孫悟空ね、私。
　車中、考えていたのは離婚の原因。２人の間に何があったのか、それが気になる。何が嫌で蛍さんは去ったのか。連絡が無いので本心は分からないと静は言う。だが、離婚するほどだから原因くらい察しは付いているはずだ。でも静の口調は嘘を言っているようには思えない。本当に出て行かれたことが信じられないという感じだった。家出でなく失踪だと思って警察にも行ったって言ってたしな。蛍さんの弁護士に何を言われたか知らないけど、原因については静も確信が持てないのだろう。
　見たところ、静に欠点はない。むしろカッコいいし、女の子の扱いも上手い。心も穏やかだし。ちょっと傷つきやすいところがあるけど、神経質でもないし、怒りっぽくもない。仕事もあるし、休日もある。何でだろう……。
「静……聞きにくいこと聞きたいの」
「紫苑のその言い方にはいつもドキっとさせられるよ。なあに？」
「蛍さんが出てった理由って何……？」
「……」
「……」

「前にも言ったけど、分からないよ。あいつが間接的に述べた原因は俺とのケンカだそうだ。俺があいつに怒るのが嫌だったそうだ」
「ケンカしてたの？」
「大人しいからあいつがぎゃーぎゃーヒス起こすことはなかったけどね。ケンカはしてたよ、正直ね。でも、それが原因とは思えない。俺は家族以外の周りの人間も認めるような明らかに修正の効く人間的欠陥について蛍を叱った。決して俺個人の勝手な理由で叱ったことはない」
「ケンカっていうより、お説教だったの？」
「蛍は言い返さない奴だから、俺ばっか喋ってりゃ説教になるだろうな」
「ていうか言い返せない人なんじゃないの？コミュニケーション力の問題で」
「まぁ、な。そのコミュニケーション障害なんだよ、俺が主に説教してたのは。俺の家族やダチにもそんなだったからね。紹介するのが苦痛だったよ。蛍で真剣に嫌だったのはそこだけだったな」
「でもそのひとつは大きいわね。だって意思疎通がまともにできないんじゃね。言葉の通じない外人よりタチ悪いわ」
「紫苑も同じ意見か。結局俺の周りも第三者も同じ意見だよ。概ね異口同音にな」
「うーん。私が思うに、蛍さんは自分じゃ貴方の要求に答えられないって悟って出て行ったんじゃないかしら」
「それも皆の見解。俺も賛同してる。俺とケンカするのがイヤだったってのはいかにも後から付けた口実っぽいんだよな。出てってから暫くしてからいきなり間接的に言い出した言い分だから」
「実家の親に色々吹き込まれたのかしらね。結局静も原因が良く分からない。皆が察する原因は口々に一致。当の私まで奇しくも同じ見解を出した、と。まぁ、皆がそう見るなら実際そうである公算は高そうね」
「さっきも言ったけど、一番の問題は蛍が愚行を繰り返して周囲を呆れさせ、ついには俺の敬意まで損なったことだ。敬意を持てない人間を配偶者として愛することはできない。そうするうちに俺の態度が冷たくなり、向こうも冷たい仕打ちを受けた結果、俺を嫌うようになった。悪いのは俺の要求か、或いは蛍の能力の欠陥か」
「うーん、その要求って周囲を呆れさせるような常識的なことだったんでしょ？小さい人相手に「チビは嫌いだから伸びろ」とか、そういう不可能事とは対極よね。じゃあ、蛍さんのせいじゃない？ところでコミュニケーション障害ってたとえばどんなこと？」
「多分、聞いたらありえないと思うよ。たとえば、話してるのに相手を見やしない。返事も応答もロクにしない。話しかけてるのに上の空。「聞いてるの？」と聞くと「聞いてるよ」と答えるが、その様子はない」
「実際に聞いてはいたの？」
「あんまり態度が悪いんで「じゃあ何て言ったか言ってみろ」って聞いてみたんだよ。だ

けどあいつの説明があまりに下手でなぁ……聞いてる人間が文を理解できなかった。聞き手ってつまり、俺や周囲の人間のことね」
「説明が下手？」
「喋るのが遅くて、レスポンスまでの間が異様に長くてな。ほっとくと何秒でも黙ってる。周りは何か言うと思って聞く姿勢を見せてるもんだからその沈黙でイライラしてくるわけだ。で、座が白けるのを感じて、俺はマズイと思って蛍に言葉を促すんだけど、これが中々出てこない。ようやく出てきたかと思えば言ってる意味がまるで分からない。で、皆困惑する」
「迷惑な人ね……」
「俺の胃が痛いんだよ。だってフォローするのは俺の役目だからな。大学時代とか更に酷かったぞ。周りは家族や友人だけじゃないからな」
「あの……聞いていい？」
「大体質問は分かる。何で結婚したの？とか、始めからそうだったの？とかだろ」
「そう、それ。ちょうどその２つ」
　多分……何人もが同じ質問をしたんだろうな……。
「付き合ってるときからこの性格だったよ。でもそれは社会的にも問題のある性格だから、直した方が良いと言った。蛍も悪いという自覚はあったから賛同した。だが、治らなかったんだなぁ、これが。元々こういう性格とは知って結婚したけど、直す約束で結婚したのにそれが履行されなかった」
「なるほど」
「たとえばいま紫苑が言った「なるほど」って言葉。「うん」でも「そうね」でも何でもいいけどさ、そのタイミングでふつう相槌を打つよな。難しいことじゃない。５歳の子供でもできることだ。それが蛍には無いんだよ。相槌があるべきところ出ないもんだから相手としては「こいつ、話聞いてるのかな」って思うわけ。文化の異なる外人ならまだ許容できるんだけどな」
「まぁ、そりゃそうよね。よく分かったわ。かなりコミュニケーションに問題があった人なのね」
「あいつの親がそういう同じような性格でさ。遺伝と教育だな。その性格だから当たり前だけど苛められて育ってきたわけで……。可愛そうといえば可愛そうなんだけど」
「そうねぇ……」
　と言ったきり暫く無言になった。この無言は別に気まずくない。喋り疲れて互いに一呼吸という感じだ。また暫くすればどちらともなく喋りだす。蛍さんという人はきっとこういう当たり前のことができないくらい人間と関わってこなかった人なんだろう。静はそんな彼女を可愛そうだと思って許している面がある。
　でも、私からすれば蛍さんは甘えてる。私を見なさいよ。私なんて友達の一人もいない。兄弟もなく親と３人暮らし。私は確認するように呟いた。

「蛍さんって一人っ子？」
「そう」
「友達はいたの？」
「片手で数えるほどの付き合いだけどね」
「そっか……」
　何よ、私よりマシじゃない。私なんかレイン以外に友達なんていないわよ。それだって相槌とかコミュニケーションに問題は無い。私が抱えてるのは自慢とか人の気持ちを考えないところとか好戦的なところとか……。結構あるな。でも、静はそういうところは気にしない。欠点は欠点でも、静は私の欠点には無反応。そして蛍さんの欠点には反応した。
　思うに、私の考えていた「この２人は相性が悪い」というのはどうやら正しかったのではないか。結局彼女の欠点と静が耐えられない部分が重なった。それが敬意を損ない、愛情を損なった。静は冷たくなり、それに応じて蛍さんも醒めていった。そして静から逃げた。
　でも、彼女の代償は大きい。お金は取れなかったし、子供も抱えてしまったらしい。自分の欠点が引き起こした結果と、逃げていった後の対応の悪さが招いた報いはこれから受けるだろう。
　今の話を聞くと、結局蛍さんの欠点が発端なのよね。そしてその欠点は確かに人として備わってなければならない基本的なもの。人の話を聞く素振りを見せるとか相槌を打つとか、努力次第で治せることだわ。そんなこともできずに座を白けさせて静を悩ませていた上、それによって怒られるとプイっと逃げ出してしまうなんて……。どうしてそんな女に引っかかったのかしら。
「あのさ……紫苑」
「なぁに？」
「蛍のこと、そりゃ俺は悪く言うよ。でも俺は向こうの視点が分からないから、話半分で聞いてくれよ。じゃないとアンフェアだ。あと、蛍のこと悪くいうのは俺は良いんだけど、人に言われると良い気分しないんだ。ほんとにさ……好きだったから、あんな女でも」
「そうなんだ……好きだったのね？どこが良かったの？」
「可愛かったよ」
「どういうところ？」
「仕草とか声とか……色々。かわいかった。それと、俺を真剣に好きになってくれた」
「それは私も同じよ。まだ短いけど」
「そうだね」と静は言ったが、私は直感した。静の心の中に私はまだ住んでいない。出てった蛍さんがまだずっと住んでいるんだ。家に私を入れないのもきっとそれが原因のひとつだと思う。そうか……まだ忘れられないのね。
　私は黙った。静も黙る。気まずい沈黙ではない。でも向こうもそう思ってるかどうかなんて分からない。そう、言わなきゃ伝わらないのよ。

「あぁ、よく歩いたからなんだか眠いねぇ。頭、ぽーっとしちゃったぁ」
「はは、寝てていいよ。着いたら起こすから」
「ありがと。でも少しでも静と一緒にいたいから。寝たらもったいないもん」
　そう言って私は黙った。静は満足そうな横顔を見せた。そうか、こういう風に操ればいいのか、この人は。蛍さんは大学のときから一緒にいてこんなことも分からなかったのかなぁ……。
　さて、私は考えていた。気になることは残っている。一番大きなことだ。これを考えから外せるはずもない。でも、今日は聞かない。これは聞ける雰囲気じゃない。
　言うまでもない、子供のことだ。静と蛍さんの子供はどうなったのか。先月産まれると言っていたが、あの後どうなったのか。静は何も言わない。
　蛍さんは子供が産まれても、もしかしてその事実を告げさえしないのか。悪魔か？自分が元夫を悪く思って避けるのは勝手だが、自分のエゴで子供から父親を取り上げて何も感じないのか。自分を叱るような男は父親として失格とでも思っているのだろうか。まともにコミュニケーションを取れない人間が育てたら子供はどうなってしまうのだろう。私からすればその子が一番可愛そうだ。
　でも、静は何も言わない。私もこればかりは聞けない。静が言うのを待つか、或いはタイミングを見計らって聞くかのどちらかだ。
　そうこうしているうちに車は川越に着いた。私はお礼を言って車を降りた。生徒が周りにいるかもしれないので駐車場で別れようということになった。私は何度も靴のお礼を言った。ちょっと言い過ぎで迷惑だったかもしれないけど、本当に嬉しかったから。静ははにかんでいた。
　去り際に「あ、そうだ」といって静は私の腕をくいっと引っ張った。
　えっ、と思う間もなく、静は私の頬にキスをした。
「色んなところにファースト……だったよな」
「う、うん」私は真っ赤になって頬を押さえてた。恥ずかしいやら嬉しいやらでロクに声がでない。多分いま喋っても日本語にならないだろう。
　静は「じゃあまた」といって去っていった。私は暫くそのスーツの背中を見ていた。そうだ、今日は午前仕事をしてたからスーツだったんだ。遠くに行ってしまって改めて先生なんだなってことが思い出された。
　帰りの電車で私はぽーっとしてた。はぁとため息を吐く。こんな気持ちになったのは初めてだ。こんな待遇を受けたのも初めて。なんだか私、本当にお姫様みたいよ？こんな可愛げのない空手娘が素直に男の人に従ってるの。自分でも信じられないわ。勉強も何も手につかない。アルカさえ手につかない。何をしていても静のことを考えてしまう。これが恋愛なんだろうな。こんなに甘いものだったなんて……想像してたよりずっと素敵。お父さんとお母さんにもこんな時代があって……それが未だに続いてるのか。だからあんなに仲が良いのか。羨ましいなぁ。私が産まれる前からだから……何年仲良くしてるんだろう。

私、最近綺麗になった気がする。静のために身体が自浄作用を働かせているのが分かる。肌の艶とかいつもより良いし、顔も女っぽくなったよね。弱々しいというか儚げというか……体重減ったからかな。それに顔も可愛くなった気がする。女の子っぽい感じ。空手やって気合入れてるときとかとまるで別人。ほんとに恋する女の子。まさか私がこうなるなんて！

そっか、お母さんが綺麗なのはお父さんに好かれてるからか。で、お母さんもお父さんのことが好きだからか。こんな強い気持ちではないんでしょうけど、それでも幸せ一杯なんだな。そうか、だから娘の私も非行に走らず、家庭的に育ったのか。親の良い雰囲気が私にストレスを与えなかったのね。愛情一杯に育ったし、お母さんはお父さんの悪口を言わないし、むしろ２人でいちゃいちゃしてる。

んー、聞いた感じ、先生や蛍さんは家庭環境が悪いね。特に同じ女として蛍さんは。両親の不仲を見てきてシニカルに育ったって……だから自分もそういう恋愛を送ってしまったのよ。反面教師にするだけの根性がなかったから。

駅に着いて外に出る。サンダルはやっぱり歩きにくい。でも、綺麗って言ってもらえて嬉しい。いつもの光景が何センチか高く見えるのも背が高くなったみたいで新鮮だ。そういえば何で静は私をあんなに小さいと繰り返したのだろう。私は 163 で、むしろ少し大きいくらいかと思う。つまり、体重との総合で小さいと言ったのだろうな。小さいとか軽いなんて繰り返してたから。確かに私は小さいかもね、細いから。

遊歩道のベンチに座って靴を履き替える。このまま帰るわけにはいかない。だってこの靴、２万円よ。対して私の所持金は 15000 円。いくら持ってたかお母さんたちは知らないだろうけど、私が２万円の靴を買うなんてありえないことだから、絶対彼氏ができたってバレる。特にお母さんがこの靴を見たら価値が分かるはずだ。

ミュールに履き替える。さて、靴を買わなかったことにしなければならないが、この大きな箱はどうしたものか。バッグに……入るわけがない。むー。しかし買ったといって箱を運んでいれば見せてと言われるだろう。私は親に何でも見せる娘だから、今日だけ見せないと怪しまれる。オープンな家庭はこういうとき困る。

仕方ないから玄関のところに置いて一旦中に入り、様子を見て外に取りに行くという手段を取ることにした。ところがそれは杞憂だった。

「……いないじゃん」

車ごと親はいなかった。ほらね先生、言ったとおりでしょ。２人でご飯食べに行くって。どこか遠くの雰囲気のいいレストランとか行ってるんだろうな、ウチの親のことだから。私が居るとファミレスみたいなところしか連れてってくれないくせに……。

お父さんなんか私が小学校の中学年になってもお子様ランチを提供しようとしてた。未だにお店に行くと「紫苑はハンバーグ？」とか「スパゲッティ？」とか聞いてくる。いくつだと思ってるのよ。

はぁ……。鍵っ子らしく一人で誰もいない家に帰り、返事のない「ただいま」を響かせた。

2006 / 07 / 20

夏期講習も始まるというのにここのところ雨がちな天気だ。７月の下旬に雨が集中するというのは珍しい。この時期にこんなに天気がぐずついてるとは。天気予報によると今年の梅雨は例年より長いそうだ。

長梅雨は2003年以来だそうだ。そういわれて見れば確かにそうだった。大学４年のとき、俺は用意の良い蛍の水色の傘に何度も助けられた。俺が傘を持っていたときもあったが、蛍は相合傘がしたいからこっちに来てと言ってきた。

自分の傘をぶら下げるながら蛍と一緒に歩いた。道行く人間の嫉妬や嘲笑の混じった視線さえ快感に感じられた。あの ELLE の折り畳み傘は、好きだった。

今年も雨が良く降ったが、生憎仕事で忙しい俺は紫苑と相合傘の生活をする余裕がない。まして夏期講習だ。忙殺されることは目に見えている。――にもかかわらず、今日は紫苑から呼び出しを受けた。

先日、紫苑が慌てた口調で電話をしてきた。そしてこの日に会いたいと言い出した。夏期講習で無理なのは重々承知ですなどと言っておきながら、中々引き下がらない。俺は当然休むわけにはいかない。そう説得すると紫苑は取りあえず慌てた様子を抑えた。電話口で呼吸が聞こえる。どうしたのだろうと不思議に思った。

何かあったのかと聞いても明日話すといって聞かない。紫苑は我侭を言わない控えめな子だ。だからこんな態度は珍しい。それともこっちが本性で、ようやく見せてきたということだろうか。いや、違う。今まで見てきた紫苑は特に飾っていない。自然主義というだけあって、特に飾り立てていないのが伝わってくる。

可愛いことに、こないだは匂いつきのリップを付けてきた。蛍もラズベリーだかなんだかフルーティなリップを付けていた。車の中なので特に紫苑が喋るたびに甘い果物の匂いがした。

香水の代わりに制汗剤を使ったようで、本物の石鹸ではない作り物の石鹸の匂いがした。今までは付けなかったのに。薬局かどこかで買ったんだろうな。服は付き合う前から俺好みにしてたが、最近はディティールにも気付くようになったようだ。

春に道ですれ違ったときに美少女だと驚いたが、それが細かい気配りをしたもんだから、殆どアイドルと歩いているようなものだ。

こないだの靴は喜んでくれたみたいだ。俺好みに着せ替えてるわけだが、他にはバッグと時計がいるな。どちらも中学で親にもらったようなものを付けている。みすぼらしくはないし、かいがいしいのだが、なにせ中学生用に買った装飾だ。もう大学生になる紫苑ならそろそろ買い換えた方が良いだろう。

紫苑はリップなどの気遣いに俺が何一つ気付いてないと思っているのだろう。だが、きちんと気付いている。無粋なのであのタイミングでは言わなかっただけだ。

サンダルを買ったのは蛍に買ってやりたかったのを実現できなかったからだ。だが理由は他にもある。慣れないミュールと短い靴下のせいで左足の踝を擦っていたのに気付いたからだ。だから靴下も何もいらないサンダルを買った。

そんな自然主義から脱しつつある紫苑だが、俺の前で素直な女を演じている様子はない。だから昨日の電話は本当に急用があってのことだろう。かといって俺は仕事を外せない。どうしても 10 時は過ぎてしまう。すると紫苑はそれでも良いと言った。

だが問題はここからだった。外で会うのかと思ったら、家に来てほしいという。親はと聞いたら居るという。それはまずいだろ。紫苑は俺の気など知っているようで、一生懸命いかに親にばれないようにするかとの計画を語ってきた。

しかし計画の問題ではない。親が家に居るときに夜遅く家に行くなんてできるはずがない。ましてこっそり行くなんて社会人としてもってのほかだ。行くなら挨拶を兼ねて正面から行かざるをえない。紫苑はそう聞くと反論しなかった。

仮に正面からだとしても平日の夜遅くになんて良識を疑われる。きちんと予め日程を立て、先方の都合の良い日を伺うべきだ。恐らく日曜になるだろうから、その日の昼過ぎに赴き、夕刻には帰る。この時刻が一番向こうの母親に迷惑をかけない時間帯で、これが最低限の礼儀だ。

大学のころ、蛍の家に行ったくらいのころだったら紫苑のいうようなこともできただろう。だが、この年でそれはできないと突っぱねた。厳しいようだが、大人と付き合うとはどういうことかを分からせなければいけない。紫苑は理性的な女性だ。これで納得しないはずがない。

そう思ったが、紫苑は納得の代わりに譲歩をしてきた。呼ぶ理由を言うというのだ。しかしそれに面食らった。曰く、紫苑を異世界へ召喚した悪魔のメルティアが来るというのだ。メルティアは毎年この日に来ては紫苑を異世界旅行に連れてってくれる約束をしたそうなのだ。

そしてなんと俺にもアトラスへ来てほしいというのだ。レインとやらを紹介したいなどと言っていた。滞在期間は 1 日。時間はメルティアが歪ませるから元の時間に戻れるという。しかし、そんな話……。

正直、アトラスの話は紫苑の妄想なのか事実なのか、もはや俺にはどうでも良かった。考えないようにしていた。信じるかどうかと言われれば信じていた。紫苑が嘘を付いているようには見えなかった。だけど単に異世界なんてあるものかという常識が邪魔した。紫苑のことは信じてる。信じられないのは俺自身だ。

だから紫苑がアトラスに行ったといえば信じるし、きっと本当なのだろう。でも俺はそれを「世の中には不思議なこともあるもんだ」で済ませておきたいのだ。俺だってガキの

ころはそんな話があったら好奇心で一杯だったろう。だが、社会人になると明日の仕事の方が重要になるのだ。メルティアとやらがしくじって３日後の時間に帰しただけで俺はクビになってしまうだろう。そんな考えの方が先に出る俺は異世界に行く資格なんてもはや無かった。あれは紫苑のように一生懸命夢見た人間に与えられる特権なのだ。

いつだったか蛍が言ってたな。古事記のイザナミは火の子を産んで、膣から燃え広がって焼け死んだ。夫のイザナギは黄泉へ行って妻を取り戻すが、道中決して振り返ってはならないという制約付だった。しかしイザナギは振り返ってしまう。イザナミは変わり果てた姿をしていて、イザナギは仰天した。その後の話が皮肉なのだが……。

同じような話はギリシャ神話のオルフェウスにもある。嫁が毒蛇で死に、冥界に行って嫁を返してもらう。ところがやはり振り返るなと言われた道中で振り返ってしまう。そこには悲しげな妻の顔。そして永遠の別れ。失敗が招いた別れ。

蛍……俺たちはオルフェウスに近いみたいだよ。俺は少なくともそう思いたい。

振り返ってしまった人は信じられなかった人だ。夢物語を信じられずに大人になった俺と、信じることで救われた紫苑とでは違う。紫苑の世界に俺が足を踏み入れることはきっとできない。

だが電話口の紫苑はアトラスは自分の一番の秘密で、運命の人とだけ共有したいと言った。今日断れば来年まで機会がなくなる。それは嫌だと何度も言ってきた。その気迫に負けて俺は了承した。本当に異世界があるのかなんてどうでも良かった。紫苑の気が済むのならそれで良い。

早めに上がろうとしたがやはり 10 時を回ってしまった。急いで退社すると、車に乗ってエンジンを吹かす。時間が時間なので道路は空いている。川越からなので比較的近く、16 号を主に乗って１時間もしないで着いてしまった。

駅周辺に有料パークを見つけて停める。随分安いな……。紫苑の家がある方とは逆なので、駅を歩いて通過した。道は一度通れば覚える。紫苑の家に近付くと予定通り電話をした。

１コールで紫苑が出た。近くの公園で待っててというのでそこに行った。紫苑が欅公園といっていたところだ。滑り台の縁に座っていたら紫苑が来た。なぜか制服を着ている。

「先生！良かった。来てくれて」

「紫苑、どうして制服なの？」

「え？あぁ、前にメルティアに連れられたときも制服だったから。向こうに行って気付いたんだけど、制服って丈夫だから異世界旅行にはピッタリなのよ」

「なるほどね。今日が休みだったら俺はジーンズが良かっただろうな。で、お父さんたちは？」それが一番気になる。

「帰ってる。ご飯食べ終わって居間でくつろいでる」

「なぁ、やっぱりせめて挨拶したほうがさ……」

「何て言うの？娘さんの塾の教師です、家庭訪問に来ましたって？」
「いや……正直にだな」
「正直に、生徒である娘さんと付き合ってますって？」
「それは……まずいな」
「でしょ。見つかったら最悪だけど、正面から行ってもダメだと思うよ」
「せめて前々から今日この時間に挨拶しにいくとでも言っておけば良かったと思う」
「それもダメよ。結局どう言おうと周りは教師と生徒の淫行だとしか思わないから」
「淫行なんてしてないけどね」
　気が重くなる言葉だ。
「ん？私、おでこにちゅーされたよ。ほっぺにも。静、先生なのにね」
「ぐ……」言い返せない。
「はいはい、時間がないから忍び込もうね」
「もし見つかったらさ」自分でもかなり情けない口ぶりだ。
「もう」と紫苑は目の前に立つ。軽く背伸びするように俺の目を見据えた「お父さんたちは塾に言いつけたりするような人じゃないし、私が先生を無理に連れ込んだって言うから平気よ。もし万一仕事を追われたら私をお嫁さんにして。そしたら私が代わりに働いて食べさせてあげるから」
「いや、最後のはありがたくないぞ。俺は仕事が好きなんだ」
「うんうん、そうね」と言って紫苑は俺を引っ張っていく。こんな強引な面もあるのか。というか俺は何ガキ相手に翻弄されてるんだ。だが紫苑には不思議と逆らえない。
「それより、向こうとの時差はないから多分最初は挨拶してすぐ寝ると思うから」
「え？あぁ、分かったよ」
　家の玄関に着く。紫苑がこそっと開ける。
「トイレは大丈夫？」
「あぁ。強いていえば緊張で腹が痛いが」
「大丈夫、見つかったりしないわ」
「もし見つかったら紫苑は毅然としてられる？」
「それは……多分無理ね」
「おいおい」
「お父さんは優しいけど嘘は嫌う人よ。お母さんも同じ。嘘は許さない。私自身も嘘は嫌い。正直な一家なの。だから裏をかくときは慎重に嘘を付かないように回りくどくしなきゃいけないのよ、変な話だけど」
「大変、変な話だな」
　紫苑がドアを開け、居間を確認する。いるようだ。俺は１度入っているので造りは分かっている。居間のテーブルに座っているのなら階段をこっそり上がれば気付かれないはずだ。

心臓が激しく鼓動する。こんなに緊張したのはいつ以来だ。英検の試験以来か？入社のときも受験のときもこんなに緊張しなかった。蛍の親に会ったときも、蛍の親の目を偲んで、襖一枚隔てた和室で抱き合ったときもこんなに緊張しなかった。殆ど泥棒を働いているような気分だ。

紫苑が合図をしたので、俺はこそこそ上っていった。紫苑も何でもないように上ってきた。自分の家だからか、或いは女というのは図太い生き物だからか、わりと平然とした顔をしている。虫も殺さぬような顔して平然と親に嘘を付くわけか。少し紫苑の評価が下がった。もう少し罪悪感ある顔をしても良いだろう。

部屋に入る。小声で話す。

「なぁ、部屋に来たりしないよね」

「うん、大丈夫。それにいきなり開けるなんてことないから。ほら、一応娘とはいえ女の子の部屋でしょ？勝手に漁ったりもしないよ。お母さんはどうだか分からないけど。でもまぁお母さんも入ってきたりはしないから安心して」

「うん、しかし罪悪感はないのか？親を騙して」

「別に嘘付いてないわ。見つかったら説明ができないからこそこそしてるだけよ。だって異世界の話を他の人にする気はないもの。それで私が黙ってまごついてたら親はいかがわしい想像をするでしょ？」

「なるほど……」

「あのね、私は嘘がとても苦手だから、殆ど嘘なんか付かないよ。それに、嘘が下手だから静ならすぐ分かるよ。試しに何かとんでもないこと質問してみて。答えるから。でも答えは嘘かも本当かも分からない。どう？」

「いいけど、時間がないんじゃなかったのか」

「こんなにすんなり侵入できると思わなかったからね。12 時までまだ少し時間あるから、仲良くしてようよ。はい、トンデモ質問どうぞ」

「え……」そうだな「実は紫苑は男ですか？」

「せんせぇ、つまらないよぉ。あからさまな嘘の質問はダメです」

「そうか……。実は前に彼氏がいました」

「いません」キッパリと。当たり前のように。そしてちょっとムっとした顔。あぁ、これが本当のときの顔か。なるほど。結構顔に出るね。

「学校で首席なのは静にとって魅力的に映っているはずだと思っています」

「はい」

少し照れている。本当のようだ。

「なるほど」

「え、ちょっと待って。実際魅力的？」

「うん、魅力的だよ。じゃあ次。空手と剣道では空手の方が得意です」

「なんか真面目な質問ばっかり……」と少し不満そう。

「そう？じゃあ……実は処女ではありません」
「処女よ！」思わず大きな声が出てハッと口を押さえる。分かりやすい子だなぁ。
「ま、ゲームはこのくらいにしとこうか」
「ちょ、ちょっと先生、答えが嘘になる質問がでてないよぉ」
　俺は頭を掻く。まぁ暇だし、あと 15 分くらい付き合うか。流石にずっとこのゲームを続ける気にはならないが。
「plajarize という単語の意味を知っている」
「はい。剽窃」
「む、難しいこというね。パクリとかでも良いのに。では、最後に。去年アトラスでアルシェに迫られても決して身体を許すなんてことはありませんでした」
「う……」といって詰まる。口に手を当てて目をきょろきょろさせる。「……うー。どうだろ。肯定する自信がないわ」
「でも結果的に彼は運命の人ではなかったんだろ？なら答えは YES のはずだ」
「あ、そうね……やだ、私ったら」
「いや、面白かったよ。嘘を付く顔より迷う顔が見れて」
「なんだかからかわれてるみたい……」
「紫苑の嘘は多分見抜ける。嘘は付かない子みたいだけど、誤魔化しは偶にやるよね。見ててわかるよ」
「え、ほんとに？」少し嬉しそうな顔。なぜだろう。蛍と同じで自分を理解してもらうことに快楽を見出す人間なのか。
「ラパウザでさ、俺が鞄を漁ってる間にミートソースを食べてたろ。あのとき麺をおなかの辺りに落としたね。俺に気を使ってたからカッコ悪いって思われないためにスカートの裾を捲し上げて服の汚れた部分をスカートの中に隠したろ。俺、面白くてさ、「どうかした？」って顔上げて聞いたら「え、何でもありませんよ」って言ってたな」
「やだ」と言って俺の腕を抓んでくる。「あれ、見てたんですか」
「まぁ、確かに嘘なんかじゃないね。あれは可愛い誤魔化しだよ。それくらい誰でもやるって」
「静って怖いのね。見てないようで見てるんだから……気をつけなくちゃ。ねぇ、はしたないって思わなかった？」
「全く。可愛いとは思ったけどね」
「良かった」といって脚を伸ばす。スカートから細くて白い素足が覗く。下着が見えないように無意識で姿勢を変えるときに手で押さえる仕草が可愛らしい。誰でもすることだが、紫苑だと特に可愛い。
　実際、紫苑がやってることで止めといた方が良いよと言いたいことがいくつもある。毛が薄いくせしてデートのたびに一々脚を剃ってるようだが、必要ない。会ったときから素足だったから毛の薄さは知ってる。そもそも剃る必要なんかない。でも無理して剃るもん

だから剃刀負けしちゃってせっかくの綺麗な脚が痛々しい。だが、それを言うと紫苑のプライドを傷つけることになるだろうから黙っておく。いつかタイミングが見えたら言おう。「せんせ、時間あるからまた抱き合ってごろごろしようよー」と猫のように擦り寄ってくる。下に親がいるというのに気にならないのだろうか。俺にはそんな神経は無い。

間を取って座ったまま抱き合うことにした。向かい合って抱くのではなく、脚を伸ばして座る紫苑を後ろから抱きかかえた形で座る。

「あ、こういう格好もいいね。先生が椅子になったみたい」

「リクライニングしてやろうか？」と笑うと「何それ？」と笑うので、腰を抱えたまま後ろ向きに 45 度倒れこんだ。紫苑は小さな悲鳴をあげたが、そのまま空中で静止する。

「びっくりした。え、せんせ、辛くない？」

「大丈夫。一応腹筋も鍛えてる」と言って元の姿勢に戻る。

「わぁ、ほんとにリクライニングだったね」といってこっちを見てくる。顔が間近だ。笑っていた紫苑もそれに気付いて笑いを止める。見る見る紫苑の顔が赤くなっていく。

「ねぇ、先生。私の色んなところにファーストの話……いつになったらここに来るの？」といって人差し指で唇を指した。

「前に言った通り、お互いそういう雰囲気になったら、かな」

「私……なったよ？」

「……うん」俺は目をそむける。

「ダメ、こっち見て。先生はどう思ってるの？嫌？」

「嫌じゃないよ。でもほら、俺は教師だし」

「今更何言ってるの」と少し笑う「もう立派に教師失格だって」

「……かな」

「でも、今私の前にいるのは先生ってより静なのよね。静はどうしたいの？」

「そりゃ……紫苑と同じだよ」

「あと 5 cm くらいかな」

「え？」

紫苑は手を床につけて首をくいっと上げる。かなり小刻みに震えている。緊張……してるんだ。紫苑の唇は蛍より少し小さい。桃色で、フルーティなリップの匂いがする。

「4 gilmelfi。私のファーストキスまでの道のり。不思議。もう息がかかる距離なのにね。ねぇ、私を奪いたくないの？恥ずかしいよ……先生」

「紫苑……」

言葉に重ねるようにキスをした。唇が触れた瞬間、紫苑はピクッとした。俺は不謹慎にも蛍のことを思い出しながらしていた。紫苑の腕がぷるぷると震える。数秒間静止した後、ゆっくり唇を離した。

はぁと紫苑が長くため息を吐く。リップの匂いの生暖かい風が顔をくすぐり、前髪を揺らす。

「紫苑？」と問いかけるが蛍のようにふらふらと陶酔してる。完全に別世界に行ってるな。もうそこがアトラスで良いじゃないか。
　１分もの間、紫苑はぼーっとしていた。俺は黙って見ていた。
「紫苑？」
「え。なぁに」
「ぼーっとしてるね。大丈夫？」
「大丈夫じゃない……かも。いま、私、月に行って帰ってきたから」
　蛍と同じ表現しやがる。なぜ紫苑まで月なんだ。
「せんせ……」といってしなだれかかってきた「私、もう先生がいないと生きていけないよぉ」
　蛍も将に同じことを何度も言っていた。だが結果は見ての通りだ。俺は右胸が痛くなるのを感じ、それを抑えるために紫苑をぎゅっと抱きしめた。紫苑はその意図を勘違いして、喜んで抱かれていた。俺は静かにため息を吐いた。
「初めてのキスはどうだった？」
「最高よ。比べようがないけど。唇って柔らかいのね」
　蛍も同じことを言ってた。本気の女ってのは他に台詞がないのか。
「そっか。紫苑のも柔らかかったよ。あと、リップかなぁ、良い匂いがした」
「えへ……」
　紫苑の唇は蛍の唇に慣れた俺には少し小さめで、勝手が違った。慣れないキスだ。でもきっとこれからはこの子の唇が俺の中でプロトタイプになるのだろうな、なんて考えてみる。
「こんなにうっとりするものだなんて思わなかったわ。唇が敏感なのかしら、私。芸能人ってよく好きでもない人とキスできるね」
「そうか。まぁ、初めてだから衝撃が大きいかもね。いい思い出になったみたいだね」
「うん、最高よ。とても幸せ」
「そうか、良かった」と言って髪を撫でたとき、電気の光が目に入って目を細めた。明るいなと思ったのも束の間、何か変だと思った。……電気は天井のはずだろ？
「何か光ってる……？」
「え？」と紫苑は後ろを向いた。
　それは確かに光だった。しかも段々明るくなっていく。
「紫苑」俺は咄嗟に紫苑を抱きしめて守った。何だか知らないが尋常じゃない。
「メルティア！」しかし紫苑は俺の腕の中で小さく叫んだ。
　まさか……。
　メルティア……ほんとにいたのか？いや、何も不思議ではない。俺の心に変わりはない。紫苑をこれで信じたという気持ちは少しも起きない。心情に変化はない。つまり俺は元々紫苑を信じていたのだ。そう、崩れたとすればただひとつ。俺の夢を失った大人の常識だ。

やがて光が大きくなって俺は思わず目を閉じた。光が収束するのを待って目を開くと、俺は目を疑った。

「人……」

床には人が倒れていた。俺は紫苑とその人を交互に見る。

「これが……メルティア？」

紫苑は一瞬訳が分からないといった顔をして倒れている人に近寄っていった。

「おい、危なくないのか？」といって腕を引っ張って戻そうとするが、紫苑は半ば振り払うようにして近付いていく。何故だか顔が青ざめている。

その人はどうやら女性のようだ。外国人だろうか、髪が亜麻色で肌が白い。面白い服を着ていた。白いケープで、綺麗な装飾で縁取りがされている。その下は白いワイシャツのような服。スカートが変わっている。前後２枚の布を上等そうな紐で結んで１枚のスカートに仕立ててある。腹側の布が背側の布にかぶさっているので、紐で結んでいるだけだがスリットは見られない。そしてスカートにもやはり綺麗な縁取りがされている。明らかに日本の服装ではない。横向きに倒れている上に髪が長く肩までかかっているので顔が少ししか見えないが、恐らく紫苑と同じくらいの年だろう。

これが……メルティア。

「レイン！」

突然紫苑が大声を上げた。

レイン？

どういうことだ。彼女がレイン？メルティアとやらはどうした？

紫苑の叫びに少女は目を醒ました。

紫苑を見上げるや否や、震えながら紫苑の肩に手を置く。右手には手の平大の石が握られていた。

「レイン！？大丈夫！？」

するとレインは口を開き、突然恐怖の混じった声で叫んだ。

ᑫᒐelᑕ ᐯ-ᐱᒐ ᐱᓄᐱᖇᑫ

その悲痛な声と謎の言葉に俺は呆然としていた。

しかしそれを聞いた紫苑もやはり呆然としていた。

我に返った俺は紫苑を見た。

紫苑はゆっくりこちらを振り返る。お互い困惑しきった表情だ。

「紫苑……彼女、何て」

紫苑は小さく呟いた。

「月が襲ってくる……って」

騒ぎを聞きつけた両親が部屋の前へやってきた。
「紫苑、どうしたの？」
男の声だ。親父さんだろう。非常にまずい。が、今は自分のことを考えている場合ではない。というか、正直言って誰も自分の身に何が起こっているか把握できていない。
「う、ううん！なんでもない！」咄嗟に叫ぶ紫苑。
レインを抱きしめて口を手で塞ぐ。レインは目を見開いて辺りを見回す。俺が視界に入ると、じっと俺を凝視してくる。俺も何も言えないまま凝視し返した。驚いた猫みたいな顔をしているなというのが第一印象だった。
「女の子の悲鳴が聞こえて、紫苑の「大丈夫？」という声が聞こえたから来た。それでも何でもないのか」という低く落ち着いた声。
「あ……う……」と紫苑は言葉を濁す。なるほど、嘘が下手だ。大丈夫よという明らかな嘘を言うことにためらいがあるのだろう。
「入るよ」
「あ……ま、待って」と言うが、それはあまりに小さい声だった。
親父さんが入ってきた。春に紫苑がウチに入学したとき遠巻きに見て以来だ。若い。そしてイケメンだ。スマートだが、ガタイも良い。帰宅後だというのにだらしない格好をしていない。
親父さんは部屋の様子を見ると黙ったまま紫苑を見た。そしてレインを見て、俺を見た。誰も何もいえなかった。紫苑はレインを離すと、「あのね」という言葉を２、３回繰り返した。
紫苑が「えーと」と言い出したとき、親父さんはゆっくりと「言い訳より、簡潔な状況説明がほしい」と言った。娘が誤魔化そうとしている顔などお見通しなのだろう。見抜かれた紫苑は慌てて「はい！」と大きく答えた。
「ええとね、お父さん、まずね、私も分からないのよ、何が何だか。信じてくれる？」
「うん」とあっさり頷く親父さん。え、そんなに簡単に信じるものなのか。
「ええと、でも、分かってることも勿論あるの。ただ、何でこの状況になったか分からないんだけど」
要領を得ない紫苑の状況説明。親父さんは自分から情報を聞きだすことにしたようだ。
「この女の子は誰？」
「この子は……レイン。私の友達よ」
「レインさんはどうしてここに居るの？」
「それが分か……」紫苑はピタッと止まった。額から汗が流れる「いや……交換留学？」
またすぐバレるようなことを……。いつお前が外国に行ってきたよ。それともこれから行きますって嘘付くのか？
しかし親父さんは「そうか」と言う。

「そちらの男性は？」
「あ、私は」と立ち上がろうとする俺を紫苑が制止する。
「彼は……塾の先生。英語の。レインのことでずっと相談に乗ってもらってたの。今日は無理やり私がウチに呼んだの。先生は常識外れだし挨拶も無しなんて行けないって１週間も前から難色を示してたの。だけど私がこの子のことでどうしてもって無理やり忍び込ませたのよ」
「そうか」と言って俺を向く「娘がお世話になっています」といって頭を下げる。
「い……いえ、そんな」声が掠れる。何て落ち着いた、それでいて気迫のある雰囲気だ「こんな時間に本当に申し訳ありません。申し遅れました。私、英語を担当しております、水月と申します」
「よろしくお願いします」と親父さんは静かに言った。俺はただ「はい」と言うだけだった。
　親父さんはレインを見て紫苑を見る。レインはまだ震えが収まらない。
「随分苦労してここに来たみたいだね。紫苑、レインさんの言葉で伝えてくれるかな。「その節は娘がお世話になりました。今度はここを自分の家だと思ってくつろいでください」」
「え……」固まる紫苑「は、はい。レイン、 ᘐ--，lꭺ eᑐ ᑫ--ᐱ ᐱɔ-ᐱ„ Ч-ᐱ lꭺ ᔑeᐱᔐ - ᑐЧꭺ Чꭺl ᑐꭺ， ᘐᔐeᐱᑐ-ᐱᑐ ᐳ-ᐱ ᑐc ᒐ-ᔐ-ᑐ ᐳcV- -ᐱᑐ ᔐccᐱ-„ ᔐclᐸ cᑀᐱ ᑫ- ᑐꭺ ᔑ- ɔᑀ ɭccᐱ-ᔕ ᔕ 」
　眉を軽く上げる親父さん。レインは紫苑の言葉を聞くと急に安心した顔になり、震えが止まった。そして立ち上がると、少し埃で汚れたスカートの裾を抓んで中世ヨーロッパの婦人のように恭しくカーツィをした。
ᘐᔐeᐱᑐ-ᐱᑐ，ɭЧꭺᔐᔐɔꭺ„ ᐱɔᐱ ᐱ- ->ϟ ᐳcl ᐱɔᐱ -ᑀᑐ ᑐЧꭺᔕ
　親父さんは紫苑を向く。
「あの……「ありがとうございます、デュッソウ……は何て訳せばいいのかな。えと、貴方に会えたことを誇りに感じます」だそうです……」
「そう」と小さく言って親父さんはドアを開けた「お母さんには巧く言っておく。レインさんに必要なものがあれば用意するから言いなさい。どれだけ長く居ても構わないから」
「あ、ありがとう……お父さん。あの……何も聞かないの？」
　むしろ不信がるのは紫苑の方だ。この状況で突然居候を向かえたというのに親父さんは平然としている。
　親父さんは背を向けた。
「半年以上前に随分長い間世話になってきたんだろ。どういう仕組みかお父さん分からないけど、娘の髪が急に伸びて顔が大人っぽく成長して帰ってくれば不思議に思うよ」
　紫苑は目を丸くした。あの大きい目が零れ落ちるんじゃないかというほどに。多分、俺も同じ顔をしていると思う。
「水月さんはちょっと私と話をしてもらえませんか」と言って親父さんは部屋を出て行った。

「はい！」と立ち上がり、付いていく。殺されるんじゃないかといういうくらい緊張しているのが分かる。いや、いっそ楽に殺してくれた方が良い。彼の落ち着いた雰囲気が崩れたらどんなに恐ろしいかと考えるとそれだけで気が遠くなる。
「先生……」
「大丈夫。レインちゃんを看てあげてて。お話があるみたいだから」
そう言って紫苑の部屋を後にした。

先生がお父さんに呼ばれて出て行って、私はレインと２人きりになった。
ᔓlecᐱ....<cc>-ᔐ
私はレインを抱きしめた。そうね、８ヶ月ぶりくらいかしら。この可愛い顔、忘れないわ。私が地球に帰ったのはレインの誕生日パーティをした直後だった。アルシェにプレゼントとしてもらった礼服を着ている。ケープのラーサとシャツのサユとスカートのルフィはどれも綺麗だ。
ᔓh-ᔑᔕ l-l-，ᑕᖻ ᔑeᐱᔐ ᑕɔᔕ leᐱ- leᖻᐡ <eᐱ>ɔ- -ᔓel ᔐeᑕeᔐ
ᔓᑕee，ᑕee，>cl >elᑕc-ᖇᔐ
ᔓ-ᖇ -lᐱ-，-lᐱ-ᖇ ᔓɔ>，<cc>-ᖇᔐ
うん、天然ボケも健在だ。良かった。そりゃ健在だよね。だって私は８ヶ月離れてたけど、レインはさっき私と別れたばかりだもん。服も私とカルテで別れたときの宗教服のままだしね。懐かしいなぁ。
ᔓh-c，eᔐ ᑕᖻ ᔑeᐱᔐ-ᑕ ᔓelᑕ V-ᐱᛚ ᑕᖻᔕᔐ
ᔓ--，hel....ᖇ ᔓレインは唇を噛む。
ᔓ-ᔑᔓe ᔓ- ->ᔕ <-ᐡ >elᑕc-ᔕᔐ
ᔓᔓcɔᐱ，-ᐱɔ eᔐ --Vcᔓᔐ
「ト？」思わず日本語の発音で聞き返してしまった。え、アルシェは？メルティアは？予定がダメになったってどういうこと？私が帰ってから１日も経たない間に何があったの。
ᔓ....ᔓcɔᐱ，ᐱɔᐱ ᑕ-ᔐᐡ <-ᐱ ᑕᖻ - ᑕᖻ c> ᔐcl，，ᔐ- ᑕᖻ，ᐱɔᐱ ᔓcᔑ ᐡleᔐᔐ
ᔓᖻ-，ᐱ-ᔐᐡᔐ
レインは首を傾げながら私の唇すれすれに鼻を近付けてきた。
ᔓᔓe< ᑕᖻ-ᐱ eᑕ l-ᑕl，，ᖻ-ᐱ ᔐeᔓ ᑕᖻ-ᐱ ᑕ-ᐱ，，eᔐᔕᔐ
ᔓ-ᔐ
恥ずかしくなった。何で息が良い匂いするのだって。そうね、まずは静のことから説明しないとね。
ᔓᑕᖻ eᑕ ᔐ-ᔓᑕᔑ-> le ᑕcl l-ᑕlᔐ
ᔓᖻ-，ᖻ-，，h-c，l- Vcᐡ eᑕ ᐱeᔕᔐ
ᔓ0e Vcᐡᔕᔐ

ᘓ-ꓥ--ᑐ ϶-->ᘓ
ᘓ--, ꓲ- eᑐ -ꓥ--ᑐ ∨-ᐣ>-ᘓ
私は婉曲的な言い方をした。こんな高等な言い方ができるなんて、私って凄い。レインはすぐにその意味を理解して、わっと驚いた。
ᘓꓲ- eᑐ -ꓥᑕc-ꓥ ᑐ৯-ꓥ ᘐ ᑐcᔑɔ-ꓤ -ꓲ ᐸeᐣ৯eꓥꓤᘓ
きゃっきゃと騒ぐレイン。あぁ、この顔、この声、この匂い、変わってないなぁ。って、そりゃそうか。しかしさっきの怯えた様子は何だったのだろう。後で説明すると言ってたけど……。それに何でこの子、石なんか持ってるのかしら？

さて、それはそうと静とお父さんはどうなったかしら。とても心配。お父さん、酷いことしなきゃいいけど。
そう思った矢先にドアが開いて、静が戻ってきた。お父さんはいない。静は青白い顔をしている。一瞬、胸がざわっとなった。何？何か嫌なこと言われたの？
「静……？」
「うん……」
なによ……いやよ、お父さんに何か言われてそれが嫌で私と別れるなんて言い出すんじゃないでしょうね。そんなの絶対嫌よ……。そんなことしたらお父さんのこと絶対許さないから。
「お父さんに何かされたの？」
「いや……凄いわ」静は腰を下ろす。
「え？」
「凄いよ、紫苑のお父さんは。ありえない……俺だって四半世紀で何千人も男を見てきた。でも、あの人は一番だ……」
「ど、どういう意味？」
「そのままの意味だよ。俺が会った中で一番尊敬できる男だってことだ」
「な、何を話してきたの？」
レインは猫みたいにちっちゃくなって私の腕の中でじーっと静を見てる。
「お父さん、全部知ってたよ。紫苑のアトラス旅行のこと」
「うそっ！？」
そんなまさか。私の日記を盗み見したの！？
「いや、細かくは知らなかったみたいだけど、紫苑が小さい頃から異世界に行きたがってる夢を見てたのは知ってたって。去年の 12 月に紫苑の髪が 1 日で急に伸びて顔つきも変わって……それで、よく分からないけど異世界に行ってきたんだなって何となく納得してたらしいよ」
「そ、そうなの……？そんなこと一言も言ってなかったのに」
「いまレインちゃんを見て、すぐにそこで出会った子だろうって思ったんだってさ。家に

誰か来た気配は俺しかしかなかったからって」
「え！？静の方はバレてたの！？」
「あぁ、そうらしい。でも２人しかいないと思ったところにレインちゃんが来たから流石に驚かれたようだよ。いきなり家に現れた上に靴まで履いてたから、例の異世界とやらから来たんだろうなって思ったらしい」
「靴？」咄嗟にレインの足を見る。ほんとだ……靴を履いている。あの一瞬でお父さんはそこまで見てたんだ……。す、凄い。そんな凄い人だったなんて知らなかった。
「レインちゃんの方は紫苑が世話になったからいくらでもいて良いってさ。お母さんには話しておくそうだよ」
「で、静については？」
「うん、あの人、言葉が端的だね。逃げられない雰囲気だよ。乗ってる車もクラウンだし、家も綺麗だし、身なりもいい。佇まいも大物の風格だ。一体仕事は何をなさってるの？」
「よく分からないけど、おっきい会社のわりと偉い人みたいだよ」
「ふぅむ……。それで、率直に聞かれたよ。娘の手料理は美味かったかって」
「え……」声が低くなる。殆ど呼気が漏れたような音だ。証拠は隠滅したのに。まさかお父さん、家の中にビデオカメラでも隠してるんじゃないでしょうね。
「紫苑は吸わないから知らなくても無理は無いけど、換気扇を付けてもタバコって匂いが残るんだよ。紫苑の家は誰も吸わないから気付いたそうだよ」
「そうなんだ……」
「紫苑に男が出来たんだなって思ってたそうだよ。俺のこと、ただの教師なんてハナっから信じてなかった」
「そうなの？」
「娘と付き合ってからどのくらいですかと聞かれたよ。素直に６月 27 日からですと答えた」
「あの……お父さん、変なこと聞かなかったよね？どこまで行ってるのか、とか」
　正直言って別に変なことじゃないと私は思い直した。父親にとって娘の処女性は重要な論点だ。娘は自分の身体であっても自分一人の身体ではない。それを軽んじるのは父親に対して失礼だ。それは分かってるけど、単にお父さんに知られるのは恥ずかしいのよ。
「そういうことは一切聞かなかったな。紫苑が選んだ相手だから間違いはないと思うって。それと、俺に紫苑のことをよろしくって」
「え、それだけ？反対とかなくて？教師なのに、みたいなこともなくて？」
「あぁ、俺も意外だった。学生同士のカップルならそんなもんだが、教師と生徒だもんな。でも、お父さんは何も言わないんだよ。俺の年も聞かない。紫苑の選択をただ信頼してるんだ」
　私は心が暖かくなるのを感じた。少しでも疑ってごめんね、お父さん。
「他には？」
「うーん」とお茶を濁す。

「教えて。変なことでもいいから。お父さんの私への気持ち、私にとってはとても大切なことなの。いつも答えてくれないから。お願い！」
「あぁ、うん。まぁ、紫苑は変わった子で、我が強くて、正義感が過ぎるところがあって、悪と思えば人の性格を力付くでも変えさせるような子で、付き合っていくには気の休まらない娘だと思うが、それでも見捨てないでやってほしいって」
「そんな風に私のこと見てたんだ……」
「ごめん」
「ううん。流石お父さんだなぁ。合ってると思うよ、それ。むしろそんな風にきちんと私を分かっててくれたことが嬉しい」
「そっか」と安心そうな顔。
「紫苑が正直な娘に育ったのが分かったよ。あの人相手に嘘は吐けない」
「あぁ、お母さんもあんな感じよ。お父さんはあれでお母さんに頭があがらないから」
「へっ？」と素っ頓狂な声。面白いなぁ。
「お母さんのお尻に敷かれてるから、お父さんは。だから私の中ではちょっと情けなく映るときがあるんだけどね。でも、今日のことは見直したなぁ。お父さんって凄かったんだ」
「凄いなんてもんじゃないよ。俺、殆どあの人のファンだぜ」息の荒い静。
　何だか今日は子供っぽく見える。さっき私のファーストキスを奪った大人の静はいまは眠ってるみたいいだ。私はレインに目をやった。
「レインはね、何か問題があってきたみたいなの。後で事情を説明してくれるって」
「え？じゃあ今までは何を話してたの？」
「近況とかかな。抱き合ったりしてる方が多かったかも。静のことも紹介したよ。レインの方から聞いてきた。「あのカッコいいお兄さん、誰？」だって」
「へぇ」と静は嬉しそうな顔をする。
「先生、浮気はダメよ。アルカのカッコいいはいくつかあるんだから。レインはパームって言ったの。気がある彼氏にはヴァルマっていうのよ」
「いや、浮気とかありえないって。だけど、恋愛ってのは誰でも最初は他人だから始めはパームって言うんじゃないのか？」
　ムッとして私は頬を膨らませる「ぷー。いくらレインが可愛いからって私以外の女を好きになっちゃ嫌よ」
「はは」と笑う静「ないない。そりゃ彼女は可愛いけど。って、俺たちばっか話してたら悪いだろ」
　静はレインを覗き込む「こんにちは」
　しかしレインはビクビクして困惑した顔で私を見る。
ᏮlᏯ ᎮeᏁᒍ ᒍᑐᏁᑐᏋᏁ - ᑕᏋᏯᏮ
　すると笑顔でᏮᒍᑐᏁᑐᏋᏁᏮ と返すレイン。
「その、ソーノユンっていうのが挨拶なのか？」

「そう。24 時間使えるの。コンビニ単語よね」
「なるほどね。しかし本当にアルカなんてのがあったなん……」静はしまったという感じで口篭る「いや、アルカを本当に聞けたってのが凄いなってな。他意はないんだ。……怒ったか？」
「ううん、平気よ。良かったね、彼女が妄想女じゃなくて。安心したでしょ」
「いや……なんていうか」
　静は居心地悪そうにした。これ以上言うのは可愛そうだな。止めておこう。
ᘐ∪cɔΛ，lə eᑕ….δᘐ
ᘐlə eᑕ ∪cZᑫ-ᘐ
　名前を紹介したが、レインはシズカという発音がしづらいようだった。何度か繰り返すがダメ。シズガとか、或いはシズカの zu の母音を強く呼んでしまうのだ。私のせいでもある。xizuka といったり xizka といったりするから。
　静はその辺はさすが研究生だっただけあって凄い。事の成り行きを理解している。
「zu の母音は無声母音になるからな。音声面では省略されることもある。アルカに無声母音はないのか？」
「ないわ。早いと脱落はするけど基本的にかなりハッキリ喋る言葉だから。勿論、シュワーはあるけど」
「じゃあ母音を落とした z の方がいい。その子の口を見ていると u の音で円唇の程度が日本語よりずっと強いからね。あと、「シズガ」になるところを見ると、子音が同化しやすいんだな」
「流石ですね、先生。ただ、アルカは xiz.ka に区切ることができるので、発音は可能なはずなんです」
　そうしてもう何度かレインに名前を吹き込んだら、ようやく xizka と言えるようになった。だが、それは明らかに単なるアルカの発音だ。
ᘐlee，∪cɔΛ，eᔑ lə ᑕcl eᔑᑕ c>Ɥəδᘐ
　別に変な名前じゃないのよ。そりゃアルカにすれば「限界のない場所」という意味になってしまうけど、それじゃ名前にはならないわね。
ᘐᑕee，ᑕə eᑕ eᔑᑕ ᑐɔᑐᑐɔeΛ elℓ leΛ-Λᘐ
ᘐ--…. ᘐと納得してくれたようだ。
　レインは立ち上がると、お父さんにしたようにルーフをして ᘐℓ-ᑎ>-，∪cZᑫ- ℓƬəᔑᔑɔə ᘐ と言った。静は挨拶を受けたと理解すると立ち上がって「あ、どうも。改めまして、水月です」と頭を下げた。
　レインは静の挨拶にきょとんとしている。この子にとってはアルティス教の習慣以外は全て想像の範囲外だからなぁ。今だって私のところに来たのになんでアルカが通じないんだろうって顔をしてる。私がかつてレインに話しかけた日本語を聞いても、未だに狐に抓まれたような顔だ。静は挨拶を終えるとまた座る。しかしレインは立ったまま私達を見下

ろしている。
「レイン？どうしたの？」
ᘐ乚cɔΛ，e丿 lclc丿 乚- -ʔ丿 (c丿δ ᘐと不思議そうな声。
　静が交互に私達を見る。訳が必要なようね。通訳の技術は一切アルバザードでは必要なかったけど、この状況では必須だ。
「どうして床に座ってるのかって。アルバザードは椅子文化なのよ」
「なるほど」と頷く静。私は机の椅子を引っ張ると、レインを座らせる。そして静を促して自分たちはベッドに座る。
「紫苑、よく考えたらもう 12 時をとっくに回ってる。いくらお父さんが黙殺してくれてからって、流石に帰らないと。レインちゃんに会えたから今日の目的は半分果たしたようなものだしね。アトラス旅行はできなかったけど」
「もう帰っちゃうの？」
「紫苑も寝ないとな。時差もないんだろ？レインちゃんだって眠いはずさ。それに明日から夏期講習だ。俺も寝ないとな。講習中はずっと朝から出勤だから」
　静は部屋を出る。
「送ってく」と言って付いていく。レインの手を引く。レインは不安そうな顔できょろきょろしながら付いてくる。必死に私の腕にしがみついてるのが可愛い。きっと私もアトラスに初めて行ったときはこんな感じに不安がってたんだろうな。しかも私のときと違って知らない大人がたくさんいるから怖いよね。
　電気を付けて階段を下りる。玄関に行ったところでお母さんが居間から出てきた。
「あら、いらっしゃい。もうお帰りですか？」
「はい。あの、申し訳ありませんでした。ご挨拶もなく急にこんな時間に上がりこんでしまって」静は深々と頭を下げる。
「ウチの子がまた我侭を言ったんでしょう。ごめんなさいね」と言ってくすくす笑う。
「いえ。いずれ改めてご挨拶に伺っても宜しいでしょうか」
「はい。歓迎しますよ。何せ紫苑の初めてのボーイフレンドですし。あと、授業も宜しくお願いしますね」
「はい。ありがとうございます」
「んー」と言ってお母さんはレインを見る。「何だか込み入ってるようね。私達の出る幕じゃないと思うけど、少し話を整理しておいた方が良いかもね。紫苑？」
「え？う、うん……」
　整理って何？
「水月さん、で良かったかしら？」
「はい」
「夏の勉強会で大変な時期でしょう。明日もお仕事でしょうし、夜も遅いんですけれど、こちらの可愛いお嬢さんのこともあるし、少し話をさせてもらっていいかしら。お時間が

なければお引止めはしませんけれど」
「お母さん、ダメよ。ほら……電車の時間とかあるじゃない？」
「んー、車で来てらっしゃるのに？」
　う……何で分かるのよ。ひょっとしてもう終電って過ぎてるの？子供の私は終電が何時かなんて知らない。どうしてこうもウチの親は探偵並みの洞察力があるのだろう。お母さん、いま私が吐いた嘘をネタに３年はからかうな、きっと。中々良い性格してるからな。ことあるごとに「電車の時間は大丈夫？」とか言って。それも良いタイミングで。
「私の方は一向に構いません。ただ、こんな形でご挨拶に運んでしまって宜しいものか若干迷うところではありますが」
「あら、日を改めて何を言おうかお互い練るよりも本音が聞けて楽しいわ」とくすくす笑う。
「ねぇ？」と居間に声をかけるとお父さんが「えぇ」と小さく言った。
「じゃあ居間で話しましょうか。お茶を用意しますね」と言って入っていった。付いていこうとする静の袖を引っ張る私。作戦会議しなきゃ。
「お母さん、ちょっと待ってて」と言って静を玄関の外へ出す。こんな時間に外へ出るのは久々だ。あれ？もしかしてこないだの大晦日以来かもしれない。
「どうしたの、紫苑？」
「ごめんね、お母さん変なこと言って」
「いや、別に何も言ってないだろ」
「じゃあこれから言うかも。お父さんはいつもあんなだから良いんだけど」
「お母さんはいつもと違うの？」
「いつもと同じだからまずいのよ！」真剣な顔で訴える「ああ見えて結構良い性格してるのよ。どんな失礼なこと言い出すか分からないから」
「大丈夫、紫苑で慣れてる」と笑う。
「むー！もう、心配してるのに」
「いや、別に悪い感じはしないよ。男からすれば男親の方が遥かに怖い」
「それは分かるけど、ウチはいわゆるカカア天下だから、お母さんの方が怖いのよ！」必死で訴える私。
「紫苑、何をそんなに心配してるの？お母さんと仲良いんだろ？」
「それは……だから、私はもしお母さんが変なこと言って、それが原因で先生が私のこと嫌いになって別れようなんて言ったらどうしようって心配なの……。ごめんなさい、私、自分の都合で考えてました」
「別に何を言われても紫苑のことは嫌になったりしないよ」
「ほんとぉ？」思わず涙ぐむ「私のこと、捨てたりしない？」
「しないって」と微笑む。あ、さっき私の唇を奪った先生の顔だ。久々に見た気がする。

先生は私が取り乱したことで却って落ち着いたみたい。２人で中に入った。レインの姿がない。しまった、置き忘れてた。
「レイン？」というと居間から ᏻ-ᑫᏯᏻ という声が聞こえた。レインは既に居間のテーブルでお茶を飲んでくつろいでいた。
「紫苑、お客さんに座ってもらってるから、自分の座る椅子を持ってきて」
「はぁい」お母さんに言われて２階から椅子を持ってくる。静がやってきて「運ぶよ」といって持ってくれた。私はお父さんの部屋に入って机から椅子をもうひとつ取った。静は「少しは好印象にさせて」といってその椅子まで取り上げてしまった。「階段気を付けてね」といって私は背中を見守る。
椅子を２脚持ってきた静を見てお母さんは「あらあら、お客さんに持たせて」と言う。「いえ、大丈夫です」といって静は椅子を置く。いつもは大きすぎるテーブルがちょうどいいくらいの広さになった。
お父さんの横にお母さん。お母さんの前に静。その横に私。そして斜め向かいがレイン。時間は 12 時を過ぎたところ。こんな時間だけど、一応お母さんはお茶とお菓子を出す。静は少し萎縮している。見ると額に汗をかいている。緊張してるんだろうな。レインはというと、くつろいだ顔でいい子に座っている。脚を揺らすわけでも髪をかき分けるわけでもなく、大人しくちょこんと座っている。
ᏻlecᐱ，ᑫᏯ eᑐ -ᑐᔆᔑ ᏻ緑茶を指して問う。
ᏻᖻ-，-ᑐᔆ„ ɭcc-eᑫeᑫ ᔑeᑫeᔑ ᑫᏯ eᑐ c>ᖻᏯ ᑫ-lᏻ
ᏻ-，-lᐱ-„ el ᔆeᐱ lec> eᐱ ɭcc-eᑫeᑫ ᑫeᑐ leᑐᑐe ɔᐱ -ᔑᑫ-Z-ᔑɭ ᐱ-„ ɔᐱ -ᑫᏯ，ɭcc-eᑫeᑫ eᑐ lec>„ ᑫeᑐ ᑐᖻᏯ ᔆeᐱ ᔑeᐱ leᑐᑐeeᑫeᑫ ɔl l-ᔆ >cl leᐱ- ᑐcl ᑫᏯ ᑐ-ᐱ„ ᑫᏯᔑ，ᑐᖻᏯ l-ᔆ leᑐᑐeᔑᏻ
WPM150 くらいのナチュラルスピードで話す私。レインはふつうに ᏻᑐeeᔑe，ᑐeeᔑe，ᐱɔᐱ ᔑccᐱ- ᑫᏯ ᏻなどと答える。その様子を見て流石の３人も驚いて黙って見ている。私はちょっと優越感に浸った。
「紫苑、その子、レインちゃんだっけ？」興味津々なお母さん。
「そうよ。レイン＝ユティア」
「どこの子？」
「ア……アルバザード」
「ふぅん。国の名前なの？」
お母さんは異世界から来たことを知ってるんだろうか。お父さんだって本当に異世界から来たと信じているのだろうか。静の話では知ってるかのような感じだったが、とても信じているとは思えない。
「うん。そこのアルナっていうところに住んでいるのよ」
「ご両親はご一緒じゃないの？」
「うん……亡くなってるから」というと「あら……」と残念そうな顔をした。
「日本へは何をしに？」

「分からない……とにかく慌ててたから。事情は後で聞くわ。とりあえず一晩寝せて落ち着いたら聞くことにする」
「そうね。まぁこんなかわいい子がいてくれればお母さんも嬉しいわ。好きなだけいてもらってね」
「あの……」と、静「慌ててたというか、危険が迫っているような口ぶりだったよね」
　するとお父さんは顔をぴくっとさせる。
「何か危ないことに巻き込まれてるのか、レインさんは」
「分からないけど……多分」
　お父さんは何て言うだろう。
「そうか。じゃあ尚更守ってあげなさい」
　危険なことに首を突っ込むなとレインを見捨てるように言うかと思えば、むしろ勇気付けてくれた。
「うん。私がレインを守るわ。前もそうだったもん。レインは私を助けてくれたから。だから私はレインを守るの。でも大丈夫よ。私のことは先生が守ってくれるから」
　静を見るとコクコクと頷く。「私では頼りないかもしれないけど」と言う。何だか口調が変だ。「私」だって。変なの。
「ねぇ、紫苑。お母さんよく分からないけど、危険ってどんなこと？言葉通り身の危険のこと？あまり危ないことしないでね」
「うん、私もそうしたい。ただ、とにかくレインに聞いてみないことには分からないから」といってレインを見てぎょっとする。この子……靴履いたままじゃないの。しかも屋外用の靴だ。どういうこと？家の外で地球に召喚されたの？
「レイン、靴履いてちゃダメよ。日本では靴を脱ぐのよ」といってレインの靴に手をかける。レインは ᠍ᑕeee᠍ と言って足を引っ込める。
᠍0ecᐱ，ə lecᐱeᒍ ᐸleᐱ lーᒍl ϑɔᑕ ᔑー ɔᐱ ᑕə ᑐーɻ᠍
᠍eᒍᘐ lーlー eᒍ ᑕЧə ーllecᐱeᒍ lーᒍl，ᒐcɔᐱẟ ᑕЧə eᐱ ᐱー ᑕᒐəẟ᠍
᠍hーɔr ᐳcl ーᑕə ᑕe ーᔑ६ーZーᔑɻr᠍
　私はレインの右脚を掴む。レインはテーテーと小さく叫んで逃げようとする。お父さんが咄嗟に「止めなさい、紫苑」という。私は素直に「はい」と従った。
「急にどうしたの？」とお母さん。
「だってレインが靴はいてるから。アルバザードでは室内と室外で違う靴を履くのよ。外用の靴を履いてるから……。第一ここは日本よ。従ってもらわないと」
「まぁ、嫌がってるみたいだから」お父さんは寛容だ「スリッパに履き替えてもらいなさい。室内用の代わりになるだろう。恐らくレインさんは私や水月さんがいる前で靴を脱ぐことが恥ずかしいんだろう」
「あ、そうね……。そうだよね。おいで、レイン」立ち上がってレインを連れて行く。玄関で靴を脱いでスリッパに履き替えるようにいうと、今度は素直に従った。なんでお父さ

んのほうがレインの気持ちを理解してるのよ……。レインは男に見られないようにこそっとスリッパに履き替えると、中へ戻った。
　台所から雑巾を持ってきて拭く。静が手伝うよと言ってくれるがお礼を言って制止する。するとようやくレインは ᘐᒐᓕᑐᐱ, ᐯ-ᐱᑕ„ ᐱᓗᐱ eᒐᑕᑐ -ᑐᓄᘐ と謝ってきた。いいのよ、別に。分かってくれれば。
「ところで水月さん」お母さんが静を見る「ウチの子、頑張ってます？」
「はい。娘さんはとても優秀な学生です。ウチの塾では常に一番の成績を取っています。本人に意思があればどこの大学でも行けるだけの実力を持っています」
「あら……。紫苑、あなた、随分頑張ってるのね」
「うん、まぁね。あのね……それで私思うんだけど、夏期講習、やっぱり行かないことにしようかなって思うの」
「えっ」と驚いたのは静だ。
「だってレインを置いて行けないでしょ。レインまで塾に連れてくわけにいかないし。こっちに来たってことは何か用事があってのことだと思うから……。ね、お母さん。私は先生も言ったように成績良いから、塾に行かなくても大丈夫よ」
「でも、夏期講習に行きたいって言ったのはあなたよね」
「そうだけど……あれは授業を受けたいからじゃなかったのよ」
「水月さんと会う口実がほしかったから？」と言われて私は顔が赤くなった「いいじゃない、せっかくだから授業受けてくれば。水月さんを先生って呼べるのも後半年しかないわよ」
　静が確かにという納得した顔をする。ああもう、あっさりお母さんに丸め込まれちゃんだから。
「うん、そうね。じゃあレインはどうすればいい？言葉も分からないのよ。身一つで私を頼ってきたんだから、見捨てられないわ。お母さんたちも家にいないし、一人で置いておくなんてできないよ」
「紫苑のために」ゆっくりとお父さんが口を開く「レインさんは学校を休んで言葉を教えて世話をしてくれたんだね」
　３人が一斉にお父さんを見る。お父さんはいつから心を読む魔法使いになったんだろう。いや、元々こういう人ではあった。急場になって偉大さが見えてきた。
「いや、お父さんがそう考えてるだけだよ。でも、もしそうなら、紫苑も同じことをしてあげていいと思う」
　静が尊敬しきった顔でお父さんを見る。でもお母さんが「一日中塾に行ってるわけじゃないし毎日授業があるわけじゃないわ」と言い出した。
「あるときは家に居てもらってお手伝いをしてもらうし、あるときは紫苑や水月さんに日本の街を案内してもらえば良いんじゃないかしら。あなた、どう思う？」
　するとお父さんは「えぇ、それがいい」とあっさり肯定した。認めるまでに要した時間、

０秒。お母さんの「あなた、どう思う？」は事実上何も意味を成さない。そう述べた時点で全て決定事項だ。お父さんはお母さんに逆らうことはない。
「紫苑は塾に行きなさい」と言うお父さん。ほらね。私は心中苦笑いしながら「はい」と答えた。
　するとお母さんは「ほら、お父さんが言ってるんだから」と言う。表面上はお母さんもお父さんを立てる。お父さんに意見を聞いて、お父さんが認めて、その上で決定したという体裁を取る。それでお母さんはお父さんを立てているつもりなのだ。私は彼らの演技には慣れっこだから、お父さんの方を向いて「わかりました」と答える。これは一種の儀式だ。
　でもお父さんはそんなことでプライドを立てられて喜ぶ人じゃない。どうでも良さそうに「うん」と頷くだけ。お父さんからしてみればお母さんの演技に付き合ってあげることによって、「私は夫のプライドを立てる妻」というお母さんの自負を満たしてあげてるだけ。娘の私はそれがよく分かってる。何とも滑稽な家族だ。
「じゃあ先生、お願いしますね」
「はい、お任せ下さい。尽力しますので」
「あと一応この子の母親として聞いておきたいんですけれど、娘のことは大切にしてもらえるのでしょうか」
「その……教師としてではなく、その……恋愛面においてでしょうか」
「ええ」と毅然とした態度。お母さんにはお父さん以上のカリスマがある。優しく綺麗な顔の裏に人を魅了して已まないカリスマを持っている。
「私は娘さんのことが一番大切です。ですが、そのことを伝える前に本来伝えなければならないことがあります。非常に申し上げにくいことですが……」
　私は顔を顰める。静の緊張感が伝わってくる。ねぇ先生、言わなくても伝わることも、あるよ。
「実は私には離婚経験があります」
「結婚されていたんですね。随分お若いころから？」
「大学のときの学生結婚でした。３年もせずに関係が終わってしまいましたが」
「そうでしたか。紫苑も知ってたの？」
「勿論、始めから承知だったわ。それでも私は先生が好きになったの。奥さんともきっちり別れて今後会わないことになってるわ。もう終わったことなの、大丈夫」
　嘘。静の中で蛍さんはまだ死んでない。心の中で怨霊になってる。でもいまはそう言うしかない。
　お母さんは試すように「奥様のこと、もうすっかり吹っ切ってしまわれたの？」と聞く。あぁ、だからお母さんと会わせたくなかったのよ。静の立場で未練があるなんて言えるわけがないじゃない。何でわざわざ嘘を付かせるのよ。
「いえ……正直、吹っ切って全てを無かったことにすることはできません」

　えっ、何言ってるの、先生。
「勿論、妻に未練はありません。愛情は全て娘さんに注いでいます。ただ、全てを吹っ切ることはできません」
　するとお父さんが好意的な笑みを見せた。といってもほんの少し表情が変わるだけだけど。お母さんはハッキリ微笑んだ。
「正直な人ね。ウチの娘の恋人にふさわしいと思いました」
「え……」
「本当ですよ。仮にも愛していた奥様を全て無かったことにするような冷たい方には任せられないわ。失礼ですが、離婚されたのは最近のこと？」
「えぇ、今年に入ってからです。別居は去年からしていました。恋人時代を合わせても同居は１年と少しでした」
「そして結婚されたのが学生のときなのね。お子様は？」
　ピタッと静が止まる。私も息を呑んで静を見守る。レインも雰囲気の重さを察して黙って見ている。ごめんね、レイン。あなた、何も分からないのにね。私が逆の立場だったら酷い孤独感を感じていたと思うわ。
「妻は……妊娠中にある日突然家を出ました。そのまま一度も連絡を取っていません。全て拒絶されました。離婚の原因は性格の不一致によるもので、互いの責務です」
「本当よ、お母さん。結構酷い人だったのよ、奥さんって」
「紫苑、黙ってなさい」とお母さん。鋭い言い方。私はビクっとして下を向いた。上下関係を見せ付けられた瞬間だった。
「紫苑、あなた、水月さんのことが好きなんでしょう？」
「うん……」
「じゃあ、その人が好きだった奥様のことを悪く言うなんて良くないことよ。あなたが奥様の立場だったらどう感じる？」
「あ……ご、ごめんなさい。私はただ……」
「紫苑は水月さんのほうが離婚の原因だったのではないかという偏見をあなたに持ってほしくなかったんですよ」とお父さんは述べた。
　なぜかお父さんはお母さんに丁寧語で喋ることが多い。人前でやられると恥ずかしいので止めてほしい。お母さんは「そうね」と頷いた。
「それで……別居されてから奥様はおなかの子をどうされたの？」
「一切連絡がなく、こちらから問いかけても一向に教えてくれませんでした。ですが先日戸籍を取りまして……。どうやら産んだようです」
「そう……」
　私は大きな目で口を半分開けてぼーっと静を見た。え……子供、ほんとに産んだの、蛍さん。まさかほんとに産むなんて……。
「紫苑も知らなかったみたいね。でも、水月さんの気苦労は耐えなかったでしょうね」

「いえ……」と言いながらも静は顔が少し赤くなっている。恥ずかしいのではない、心苦しいのだろう。
「産まれても一言も連絡がなく、紙一枚で確認させられたのはさぞや無念だったでしょうね」
「いえ……」という静の声は半分震えていた。もしかして先生……泣きそうなの？そんな泣くほど苦しいことがあったの？どうして言ってくれなかったの？
「お子様のことがあって、引きずってらっしゃるのね」
「……はい。でも、娘さんへの気持ちは決していい加減なものではありません」
「はい、分かりました。離婚は人それぞれの理由があってのことでしょう。私たちが娘の親として気になるのは、娘の恋人がどういう立場に立たせられているかではなくて、どういう人間かなんです。紫苑は良く育ってくれたわ。下手な嘘で誤魔化したり、過去の愛を愚弄するようなことをしない優しい人を選んでくれた。私はそれが嬉しいわ。ね？」とお父さんを見る。お父さんは無言で頷いた。
「お母さん……」こんなまともな一面があったんだ……。知らなかった。いつも私に甘えて絡んできたり、ご飯もロクに作らないだけの人かと思った。お父さんも凄いけど、それを従えてるお母さんはもっと凄いってことが実感できた。この人間性とカリスマで人を魅了するんだな。私は……この人達の子供なのに、その能力を正しく受け継げたのだろうか。申し訳が立たない気持ちになってきた。
　横の静がぎゅっと拳を握ったのが分かった。泣きそうなのを堪えてるんだ。……静、誰のための涙なの？蛍さん？子供？
　……私じゃないのね。でもいつかその涙を私の物にする、絶対よ。
「娘さん……紫苑さんが素晴らしい女性なのは、ご両親あってのことだと分かりました」静は心の底から一単語ずつ搾り出すように語った。
「水月さん、今日は話せて良かったわ。紫苑はきっとあなたと相性が合うと思います。血の気の多い子だけど、上手く扱えば便利な子だから、上手く操ってくださいね」
「お母さん！」
　便利って何よ！？私はご飯メーカーですか？
「ふふ……。あと、あなた自身を成長させてくれると思うわ、この子は。人と一緒に昇華する力のある子だから。きっとレインちゃんが今のところそれを一番実感してるんじゃないかしら」チラと見るとレインは愛想良くニコリとする。
「はい。ありがとうございます」と答え、静は時計を見る「ところで、流石にそろそろお暇しなければ」と立ち上がった。
「またいらしてくださいね。私達は娘の選択を信じています。彼女は信頼に値する人間です。だから紫苑に２人の行方は任せます。水月さんには大人の誠実な態度でこれからも接していただければと思います」
「分かりました。お約束します」

静はお母さんとお父さんにそれぞれ深々と頭を下げると玄関へ行った。私は見送る。外に出ると静は大きくため息を吐いた。緊張が解れたのだろう。
「大丈夫ですか、先生」
「うん……今日は……10 時に仕事が終わったんだけどね、白岡に着いてからまだ２時間くらいなのにさ、３日連続で仕事したくらい疲れたよ。あぁ、でも良い意味でね。紫苑のご両親にも会えたし」
「ウチの親、変わってますよね」
「ふつうと違うという意味ではそうかもしれないけど、良い方向に異なってるよ。お母さんが取り仕切ってるって言ってた意味が分かった。お母さんも凄いな。あんなに若くて綺麗なのにカリスマっていうのかな……俺なんか年が一回りかそこらしか変わらないだろうに完全にガキ扱いだ。格の違いを思い知らされたよ」
「そう？」
「あぁ、ほんとに。紫苑を見ていつも尊敬してたんだが、そもそもその紫苑を作った人たちだもんな、超人の超人はスーパー超人だよな。はぁ……」
「どうしたの。急に暗い顔して」
「いや……俺もあんな親がほしかったなって思っただけ。蛍もきっと同じことを言っただろうな。紫苑は何が幸せって、産まれたときからあの親がいたことだよ。そう伝えといて。じゃあ今度は夏期講習でね」
「うん、伝えとくけど。ひとつだけ覚えておいて。お母さんが綺麗だってことはお父さんの前では絶対言わないこと」
「え、なんで？」
「信じられないくらいやきもち焼くから」
「えぇー、そうは見えないな」
「ちがうの、ほんとなの。とにかくお父さんはお母さんのことしか頭にないから」
私の真剣な顔に静は「分かった」と頷く。私は「うん」と言ってにこりとした。
静が敷地の外へ出る。
「あ、先生」とてとて降りる「お別れのキスは？」
先生は首を振る。「とても萎縮してしまってそんなロマンティックな気分になれない。でも勘違いしないでね。お父さんたちのせいでキスできなかったとか考えちゃダメだよ。逆なんだ。ご両親を見て、尚更紫苑を大切にしなきゃって思ったんだ。キスひとつだってさっきみたいにお互いの気分が高まったときに１回１回大切にしていこうと思った。こんなに女の子が大切になったのはほんと蛍以来だよ」
「うん、実は私も今日は親を見直しました」といって笑う。先生はキスの代わりに私の頭を撫でて、去っていった。私が「気をつけてくださいね」と言うと背中向きのまま右手を掲げた。

居間に戻るとお父さんとお母さんがレインを囲んでいた。何をやってるのかと思えば、レインは私にやったようにアルカの字、幻字を書いていた。私は必要善でアルカを学んだけど、ここでは自分が日本語を必要善で学ばなければならないということを考えないのだろうか、この子は。
「紫苑、見てみて。面白い字ね」
というか、テレビを呼んできて「見てみて、面白い親ね」と言いたいわよ。
「それ、幻字って言うのよ。アルカだとハルムっていうんだけど」
「アルカ？」
「レイン語のことよ」
「紫苑が喋ってた言葉ね。随分可愛らしい言葉よね。聞きやすいわ」
「そう？」何となく嬉しくなる「８ヶ月くらい付きっ切りで教えてもらったおかげで話せるようになったわ」
「へぇ。あ、そういえば水月さんは今度いつ来るの？」
「分からない。夏期講習中は厳しいと思うよ」
「別にあなたが軽率な判断をしないなら夜来てもらっても構わないからね」
「軽率って？」
「軽々しく身体を許すことに決まってるでしょ、女の子なんだから。でも紫苑は慎重そうだからあまり心配してないけど。というか、水月さんに決めたの？」
なんでウチの親はこんなにオープンなんだろう。そりゃ娘の前で際どいセクハラをする親だからな……。私ばっかり恥ずかしがってても仕方ないか。
「まだその気はないし、先生も奥さんのことで傷ついてるから。夢見がちで何も知らない私より経験豊富な先生の方がむしろ乗り気じゃないんじゃないかな」
「でしょうね。残念でしょ、紫苑」
「べ、べつに……。ううん、まぁ、実際そうかも。女として見られないのは寂しいよ。でも私はまだ子供だし、しょうがないと思ってる。同級生の男の子みたいに見境なくてがっついてる子たちに比べたら先生は紳士そのものよ」
お母さんが「あなたみたいね」とお父さんに言うと、お父さんは微笑んでお母さんの肩を抱いた。お母さんに言われるとすぐ表情を変えるんだから……。
「ねぇ、もうキスはしたの？」
そこまで聞くの？せめてお父さんのいないところで聞いてよ……。
「うぅ……」
「へぇ、したんだ」
あぁ、私って何で嘘が付けないの？
「うん……今日、ね。ファーストキスあげた。というか先生が煮え切らないから私から迫ってった」
「やっぱりお母さんの子ねぇ」とくすくす笑う「幸せだった？」

「とっても幸せだったよ。もう先生無しじゃ生きてけないって思っちゃった。ねぇ、お母さん、こういうのってまだ早いかなぁ。付き合って１月も経ってないのに」
　お父さんはレインに字を教えてもらって真似して書いている。多分、私の話を聞かないアピールをしているんだろうな。明らかに聞こえていようとも。
「うん、早いんじゃない？」ハッキリ言われて落ち込む私。
「紫苑、落ち込まないでよ。だからってバカなことしたとは思ってないわよ。恋愛の始めって気持ちが強すぎるから自分で判断したつもりでも、お酒飲んで判断したのと同じようなものなのよ」
「そうなの？」
「うん。だって脳が異常な状態であるという点では全く同じだもの。普段の判断ができないのよ。身体を捧げても自分の判断だから正しいことをしてるって女の子は思いがちだけど、じゃあお酒を飲んで酔ったときの判断が翌日の自分にとって正しかったといつも言えるかしら？」
「なるほど、いえないね。そうか、酔ったようなものなのね。判断を誤りやすい。麻薬とかも同じ？」
「そうね。要するにまともな判断が出来ない状態なのに意識はハッキリしていて、あたかも通常の判断ができると思い込んでる状態なら何でも同じよ。恋愛の始めはどんな人間でも甘美な心の麻薬から逃げられないわ。そのときの判断が軽率だった場合、酔いが醒めてから後悔するのは自分よ。飲酒運転して起こした事故と同じで、責任は冷静に戻った自分が取らなくちゃいけない。それって不条理に感じるでしょうね。冷静な自分ならしなかった判断であれば尚更悔しいでしょうね」
「そうか……そうね。お母さんの言うとおりだわ」
　私は深刻に受け止めた。お母さんの言葉は蛍さんを介して私の心に浸透した。蛍さんも妊娠したときは先生のことを愛していたのだろう。先生との仲がぎくしゃくしてても、それでも過去の麻薬に囚われてた。気付くのが遅かった。妊娠して傷つくのは女。つまり私。
　蛍さんは軽率な判断をしたんだと思う。静もそのころは子供で、蛍さんのことを考えてあげられなかったんだと思う。そういう恋愛と結婚だった。そのときに出来た麻薬の残り香が妊娠を引き起こしたのだとしたら……。お母さんの言うことは良く分かる。
「だから私はキスは早いって言ったの。まぁキスくらいなら良いけどね。お母さんが言いたいのはね、心の麻薬が解けてから冷静な判断を下しなさいってことよ」
「その麻薬ってどれくらい続くの？」
「何だか科学だと３，４年っていうけど、私が言ってるのは恋愛初期の燃え上がる気持ちのことよ。相手のことしか考えられず、相手のためなら何でもしてあげたくなるような時期ね。それが終わってからでしょうね、最低でも。その気持ちが切れるのはどれだけ密に付き合うかにかかってるわ。密に過ごすほど心の磨耗も早いものよ」
「そっかぁ……お母さん、恋に詳しいのね」と言った瞬間、お父さんがチラッとこちらを

見てきた。少し心配そうな顔。大丈夫、お父さん。お母さんの経験は全てお父さんとの物ですから。
　お母さんが欠伸をする「もう寝ましょう」
　その声でお父さんもレインの傍を離れ、２人で居間を出ようとした。
「あ、紫苑。レインちゃんのベッド、どうしようか」
「一緒に寝るよ。ベッドは大きいし、女の子２人だし、寝れると思う。前もそうしてた時期があったの」
「へぇ。色々大変だったみたいね。あ、そういえば水月先生、大丈夫かしら」
「明日も夏期講習だからね。遅くまで引き止めて悪いことしたよ」
「じゃなくて、終電間に合ったかしら。ほら、もうこんな時間」
　ぷっとお父さんが吹き出した。
「お母さん！」
　豪快に笑いながらお母さんたちは２階に行った。ああぁ、絶対ネタにされるんだ……。

　居間を片付けると、私はレインと部屋に戻った。レインはお父さんたちの名前を聞いてきた。例によって名前で呼ぶつもりなのだ。だがそんなこと日本でされては困る。静はともかく、お父さんたちはいくら敬称を付けようが名前で呼ばせるわけにはいかない。それが日本の常識だ。だから私はその常識を説明し、お父さんを呼ぶときは単に ﾚｲｵｼｮｫ、お母さんは ﾙｫ- と呼んでもらうことにした。レインは不思議そうな顔をしながらも納得してくれた。
　ベッドがひとつしかなくて一緒に寝るけどいいかと聞いたらむしろ喜んでいた。
ｾ(ｲｶ eﾊ ﾊ- (ｫ e(he>ﾃｩ
ｾｵ-ｼｼｮ,, ｲ-ﾊ ﾊｮﾊ ｼccﾊ- ｳcﾚc- ｿｮｿｿeﾊ (ｲｶｫ
ｾ(ｲｶ ｼｮﾃｩ
ｾｲ-, >cl (ｲｶ e(l-(l,, ﾊｮﾊ ｼccﾊ- l-(l (ｫ-ﾊ,, <-ｿ (ｲｶ e(>el(--ﾊ
ｾｼ>, (ｲｶ ｳ-l -ﾊｿ, lecﾊ,, (e((ｫﾒ e(<le-,, (ｲｶ eﾊ ﾊ- h-ﾒ(ﾃｩ (ｫ ｿ-ﾚ e(h-ﾒ(ｮ eVeｼ -ｫ
ｾｵ-ｼｼｮ, ｵ-ｼｼｮ,, ｳcｮﾊ, ﾊｮﾊ ﾊ- ﾊ-ｫ (cﾊｿ- >cl ﾊｮﾊ -ｿ(ｼeﾊ >e (ｲｶｒ ﾊｮﾊ l--ｵ (ｲｶｒｫ
　レインは私に抱きつくと、ベッドに倒れこんだ。
　私達はきゃっきゃと遊んでじゃれあった。レインにまた会えて嬉しい。別れてから４時間くらいしか経ってないレインがこれだけ喜んでくれてる。私は８ヶ月もこの温もりを待った。レインが地球に来たのは想定外だったけど、場所がどこであろうとまたこの子の温もりを感じられたことを神に感謝しよう。って、違うか、悪魔に感謝なんだ……へんなの。

2006 / 07 / 21

　朝起きたらレインがいた。私は一瞬アルバザードにいるのかと思った。だが、ここは確

かに私の部屋だ。そうか……そうだった。レインは夕べ突然地球にやってきたんだ。先生のことがお父さんたちにバレて……レインのことも。レインは何か問題を抱えているようだった。詳しくは今日聞こう。一体何があったのだろう。

時計を見る。７時前だ。私はレインを起こす。レインもやはり一瞬何が何だか分からない顔をしていた。少しして事情を飲み込むと、落ち込んだ顔になった。

ᦵᒍᓗᐱᓗ，ᒪecᐱ„ ᒐeᐱ ᒐccᑕ ᐸ--ᒐᦵ

ᦵ-，ᓭ-ᦵ

下に降りてご飯を作る。いつも私の役目だ。パンが焼けている。グローブを付けて取り出す。熱くてかなわない。まな板の上において暫く冷ませておく。その間にスクランブルエッグを作る。パン切りナイフで切り分ける。冷蔵庫からハムやレタスやマスタードを取り出す。牛乳をコップに入れる。

その間、レインには料理の仕方や器具の使い方を説明した。進んでいるアルバザードでも家電は基本的に日本のものと大差ない。若干前世代的で不便という程度だ。レインはすぐに飲み込んだが、日本語が読めないので苦戦していた。そのうち付箋に訳を書いて貼っておいてあげよう。そんなすぐに漢字は覚えられないだろうから。

お父さんたちが来て朝食を済ませる。レインはこれといっておどおどする様子も遠慮する様子もなく、言葉も分からないのにそれなりに意思疎通していた。お父さんとお母さんはレインを特に気にもせず、邪魔にもしなかった。お客さんというわけでもなく、厄介者というわけでもない。私に一任といった感じだ。

「紫苑、今日は塾よね」

「夏期講習は行くけど、とりあえず今日は休むよ。レインが何でここに来たか聞いてないし、初日から一人ぼっちにしておくのは可愛そうだから。賛成してくれると嬉しいんだけど。あ、勿論明日は行くよ。先生にも連絡する」

「そう。いいんじゃない？」

あっさり認めてくれた。親は仕事に出かけた。私とレインは残って片付けをする。レインは親がなぜ料理を作ってくれないのかと聞いてきた。仕事で忙しいからよと答えたが、不思議そうな顔をしていた。

夏期講習に行っていることを説明すると、レインは受験経験者だから勉強の邪魔になるのではないかということを心配しだした。私はレインにしてもらった恩返しだといった。レインは私のために学校を休んで世話をしてくれた。いま私がお気楽に先生の授業を聞いてるわけにはいかない。それでもレインは罪悪感を感じているようなので、明日からは行くからといったら納得したようだ。

まずは家の中を案内した。１階を案内し、トイレやお風呂場の使い方を説明した。アルバザードもユニットバスではないのでレインはすぐに理解した。レインに生理かどうか聞いたらいまは違うと答えた。生理用品は私のを分けてあげるといい、使ったものは丸めてティッシュに包んでトイレの小さい箱に入れるように教えた。

レインはお風呂の脱衣所に鍵がないことに凄く驚いていた。そして各部屋に鍵がないことにも驚いていた。玄関とトイレだけがプライバシーなのねと意外そうな顔だった。

２階も案内した。日本は狭くて土地が高いので家が小さいが、ウチはこれでも普通だといった。恐らく悪気はないのだろうが、私の家よりだいぶ小さいねと言った。日本人が家の大きさを気にするということを知らないわけだが……。いや、外国人だってそれくらい気にするはず。単にレインはお嬢様だからそんなことをいうのよね……。

お父さんとお母さんの部屋が同じだということにも驚いていた。夫婦にはプライバシーがないのかと。あと、何をしでかすか分からないので親の部屋には入るなと言っておいた。

私の部屋にレインは住んでもらうことになる。これから共同だ。悪いけど、ベッドも共有。でもそれについてはむしろ嬉しそうだった。一人で眠るのが心細いらしい。洋服なんかは貸してあげるけど、下着とかは買ってあげることにした。共有ばかりじゃなんだから服も靴も買ってあげる……っていっても親が許せばだけど。

そのとき、ケータイが鳴った。机の上で震えてる。見ると、お父さんだ。どうしたんだろう。

「はい、なぁに？」

「紫苑。言い忘れてたが、レインさんに必要な物が色々あるだろうから、少しお金を用意しておいた。居間のテーブルの封筒に入っている。やりくりはお前に任せるから良く考えて使いなさい」

「え？は、はい。ありがとう、お父さん。あ、気を付けてね」

「うん」といって電話は切れた。用件しか言わない人だ。

レインを置いて下へ行く。封筒が確かに置いてあった。中を見て私は驚いた。

「10 万も入ってるじゃない……。身の回りのものを買うだけなのに、どこが少しよ。金銭感覚狂いそう。私がしっかりしないと！無駄遣いはしないわよ」

部屋に戻るとレインは椅子に座って窓枠を見ていた。どうしたのと聞くと、サッシの色や形がビルや集合住宅の窓みたいだといった。そうか、アルバザードのは木枠が多かったからな。

レインは自分のプライバシーエリアはどこかと聞いてきた。そうか、たとえ私とレインの間でもプライバシーを確保する空間が必要なのよね。引き出しは使っていいかと聞くので、４段ある引き出しのうち、２段をひっくり返して空にした。ここがレインの使っていい領域ね。零れたものを押入れに入れ、更に押入れを整理して半分のスペースに自分のものを埋める。空いた残りの半分がレインのスペースだ。レインは喜んでお礼を言った。

かといってレインにさしたるプライバシーなどない。着のみ着ままなのだから。それでもプライバシーを要求するところは真にアルティス教徒すなわちヴァルテらしい。

レインに花籠をあげると、ここに自分の物を入れるのと言って後生大事に籠だけを押入れに入れた。がらんとしたレインのスペースにぽつんと籠がひとつ。籠は今のところ空だ。

一息ついて静に電話した。静は運転中だった。
「危ないから後にしたほうがいい？」
「大丈夫だよ。何？それより昨日は良く眠れた？」
「うん、ありがとう。大丈夫よ」
「いや、紫苑もそうなんだけど、レインちゃんは？異世界からだと辛いはずだろと思って」
そうだ、そうだよな。彼氏だからって私のことだけ見てくれるわけじゃないんだ。人のこともちゃんと考えてる。
「レインも大丈夫よ。元々一緒に寝てたしね。起きたとき一瞬自分がアルバザードに帰ったのかと思っちゃったわ」
「「帰る」……ね。まぁいいや。そういえば用件は？」
「あ、うん。先生、今日はやっぱりお休みします。初日から流石に一人ぼっちにしておけないから。今日一日で身の回りのこと一通り教えないと危なかしくてしょうがないわ」
「まぁそうだね。親御さんにも言った？」
「うん、賛成してくれた」
「分かった。紫苑の顔が見れないのは寂しいけど、そっちはそっちで頑張ってね。あと、欠席連絡は教務にしてある？」
「ううん、これから。先生にまず言おうと思って」
「分かった。じゃあ俺も頑張るから」
「うん。……好きよ、静」
電話越しに小さい照れ笑いが聞こえた。
「朝から元気出たわ。じゃあね」といって静は電話を切った。
私がでれでれしながらケータイを見ていた。するとレインがからかってきた。
ᘐ--，ᑕЧa ノccΛ- ∪cZ⁀- ノɔa ノe ᑕcΛ⁀- cΛ„ ΛɔΛ Λ- ᑕЧa -lal く-Λ ⁀-ᕒᘐ
ᘐh-c，lecΛ，ᑕЧa lɔ ᑕɔ ɔΛ ∪cZ⁀-δᘐ
ᘐ>>δ --，I- eᑕ ᕒ-->，eᑕ lɔZ e ℓ-cZ -ᔑℓeノ ɔ eᔑᑕ Чalδ cΛ„ く-ノ I--ᑕ eᑕ ᑕɔδᘐ
ᘐeᕒδ ᑕЧa eΛ ∪-⁀leノ ノeᑕeδ I- I-ϵ ⁀- くel⁀c，eᑕ ∪-∪-Λ Λɔ-Λᘐ
ᘐh-ᔑδ ノɔΛ ᑕЧa >cЧaノ ∪-∪-Λ e Λ-Λ -I -Iᑕc-Λℊ 0-ɔᖵᘐ
いや、ワォじゃなくて……。アルバザードでも教師と生徒の恋愛っていうのは禁断の恋なのだろうか。
ᘐɔ> ᑕЧa -Iᑕc-Λ-ᑕ I-δᘐ
ᘐノ- ∪eIᑕ Vc-ᘐ
ᘐ>>....ᑕc-Λ-I ノ->„ ᑕЧa ノccΛ- I- ɔΛ ᑕɔδᘐ
ᘐɔΛ clᖵᘐ
ᘐclδ ᘐとレインは笑う ᘐᑕaᔑ，ᑕЧa eノ ᔑaaく Λ-„ I- -ノ ᑕcl -ɣeᕒᘐ
ᘐlecΛ，ΛɔΛ ノccΛ- Ч->- I--ᑕ -ノᖵᘐ
ᘐI-I-，くeᔑℓeΛ ᘐとレインは呆れ気味だ。でも私は静の欠点も好き。おかしいことじゃない

わ。だってそれを含めて静なんだもの。確かに欠点は悪よ。私が治してみせる。でも、その悪い欠点さえ好きなの。それをもっと良く変えてあげる。

レインを外へ連れ出した。靴は昨日のレインの靴。今考えると外行きの靴を履いてきてもらって助かった。

家に鍵をかけ、門を出る。レインはわーっと声を上げて辺りを見回した。

ᔕᑲ eᑕ ᑐ-ᒪ ᑲ-Λ, ᒐcɔΛᔕ

ᔕΛ- ᑕɔᔑᔕ

ᔕ>Կ᙮l ᑐ-l -l -ᔑΛ-ᔕ

そういえばアルナにちょっと似てるかもね。生垣とかレンガ造り風とか。

駅の方へ向かって散歩する。まさかレインを連れてウチの周りを歩くことになるとはなぁ。

ᔕ-ᑲ eᑕ ᔑ-cl, lecΛ,, ᒐc-l eᑕ <lɔΛ cᑕ -ᑲ,, Կ-Λ ᑲ eᑕ eᒐᑕ ɔ l-V,, ᒐc-l e ᑲ ᑐ-ᒪ eᑕ eΛᑐ ᑕcΛ - ᑕ -ᔑΛ-ᔕ

ᔕh--Λᔕ

ᔕ-ᕽ, ᑲ ᑐ-ᒪ eᑕ "ΛchɔΛ",, ᑕԿ᙮ >-l ᑲᙆᔕ

ᔕΛc, hɔΛᔑ ᔕ

違う、違うのよレイン。ニ・ホンというアルカの句ではないのよ。ニホンでひとつのまとまりなの。そうか、アルカの単語は常に第一音節にアクセントが来る。紫苑とか静といった名前はレインにとって受け入れやすいが、日本という言葉はレインの耳にはあたかもΛc と hɔΛ に聞こえるのか。

ᔕᑕeɔ, ᑲ eᑕ -ᔑ-, eᔑᑕ e ᑲ ᑐ-ᒪ,, "ΛchɔΛϬɔ" ᑕeᙆ elᒪ e ΛchɔΛ ᑕcl VceΛ eΛᑐ ɔΛ elᒪ<ɔ Λɔᒪ -ᔑᑐ-, ᕽ-ᔑᔑɔᔑᔕ

ᔕԿ-, -lΛ-,, >>....ᔑɔΛ, lclcᔑ >-leᔑ ᑐ- e VceΛ e <ɔ ɔΛ cl Veᑕᔑᔕ

ᔕԿ-ᔕ

ᔕh--ᖷ ΛchɔΛϬɔ eᑕ ᒐeᕽᖷᔕ レインは目を丸くする。そうね、拘束アクセントから見れば全ての単語について個別にアクセントを覚えなければならない日本語は難しいでしょうね。

因みに、いまレインは日本語と言ってくれた。アルカの発音だし、アクセントもアルカ式だ。だが外来語を受け入れたのは敬虔なレインからすればこれでもかなりの譲歩のはずだ。

病院の前の十字路に差し掛かったとき、それは突然起こった。

ᔕ-ᔑᑕeᖷᔕ

レインが急に叫んだかと思うと私に抱きついてきたのだ。

「どうしたの！？」

咄嗟に辺りを見回す。レインを抱きしめて。

何か変わった様子は……無い。辺りを探索しながらいつでも蹴りを放てる姿勢を作る。

ᔕlecΛ, ᑕɔ cᑐ ᔑɔᒪᔑᔕ

するとレインは道を指差した。

ᑫ->ɔᒋᓀ

「は？」

ᑫ->ɔᒋ ᑕᓴ ᑕ-ᐱ cᐱ-ᑕ ᔑeᑕeᒋ ->ɔ ᑐɔᓯ-ᑕ ᓯ-ᑐ ᐃᓴᒋᓀ

思わずため息が漏れた。なんだぁ……車か。そう、レインは車に驚いたのだ。科学力の発達したアルバザード娘のレインが何で驚いたかって？答えは簡単。アルバザードは歩道と車道は別の場所にあるか完全に区切られているから。人が歩くところを車が走るなんてことは救急車の類を除いてありえないからだ。

この辺りには駐車場が点在しているし、家々の駐車場にも車がある。レインはそれでも因果関係に気付かなかったようだ。

私は大丈夫だと言ってこれが日本の、というより地球のスタンダードだと説明した。ところがレインはこれがよっぽどのショックだったらしく、ᑫh-cZeᐱ，-l h-cZeᐱᒋᓀ と嘆き、祈り、聞く耳を持ってくれなかった。

いくら私が先に行こうとしても怖いと言って拒み、しまいには、怖いのに紫苑はなぜ私を連れて行こうとするの？と言って泣き出してしまった。体が小刻みに震えている。無理もないか。レインは特に臆病な方だからなぁ。アルシェなら順応できたんでしょうけど。

レインがあまりに怖がるので白岡の案内は十字路までとなってしまった。なんて短い冒険だったことか。まぁ、これだけ怖がってくれれば不用意にウチの外に出なくていいんだけど。これは困ったことになったわね。

とりあえず泣き出したレインをあやすと、家へ戻った。居間に戻り、苛めたわけじゃないのよと説明すると分かってくれた。

でも、日本にいる間は徐々にでも日本に慣れてもらわなければならない。私だってアルバザードに順応したんだから。まずは言葉よね。レインは私にアルカを教えてくれた。今度は私が日本語を教える番だ。

といってもアルディアの時代にアシェットが作った人工言語であるアルカは非常に簡単な造りをしている。それに比べて日本語は自然言語なので強変化にも富み、文法も複雑。そして何より文字が多すぎる。たった 25 文字で全てを表せるアルカとは大違いだ。日本語がアルカより簡単なのはせいぜい音素数と音節構造だけだろう。まぁ、細かいことをいえば関係詞が複雑なアルカと、事実上関係詞がない日本語では後者の方が簡単といった違いはあるが、なにせ人工言語が相手では自然言語は学びやすさにおいて勝ち目が無い。

ただ、レインの場合、私のときと違って母語で教えてくれる人がいる。そう、それって私のこと。私がアルカを覚えたときはメタ言語すら無かった。レインはアルカで日本語を教えてもらえるのだから楽だろう。

と思ってまずはレインに日本語を教えることにした。居間のテーブルに座らせ、自分の部屋の本棚から日本語教授法関連の本を引っ張り出してくる。まずは文字と音から教えないとな。レインもかつてそうしてくれた。

ところが私の授業は細かい計画を立てる前に頓挫することとなった。日本語を教えようとした途端、レインが拒否反応を示したからだ。しかし郷に入っては郷に従え。ここでは日本語を覚えないと生活できないよと諭した。ところが「紫苑が翻訳して」と言って聞かない。

私はちょっと苛立ちながらも、怒らないでおいた。レインは別に怠慢で言っているわけではないからだ。アトラスにおいてアルティス教は絶対。そしてアルティス教においてアルカは神の母語。それゆえ、アルカはアトラスが公認する唯一の言語だ。

遠いアルディアの時代、アシェットが先導し、世界中が結託して悪魔テームスを倒した。しかし一体どうやってアシェットは世界中の人類の祈りの力をまとめあげたのか。それは言語の統一だった。アシェットは神の言葉を改良してアルカを作ると、それを神に認めさせ、世界に公布させた。世界中がアルカという神の言葉で結ばれることによって悪魔テームスに勝てたといっても過言ではない。だからこそアルカは唯一の言葉なのだ。それ以外の言葉は神に背く言葉で、敬虔なレインの常識からすればたとえ異世界でも日本語を学ぶなど耐えられないことなのだ。

たとえて言えば、敬虔なイスラム信者が留学先の日本で飲み会に誘われて酒を飲むことができるかという問題と似ている。宴席に参加できなければコミュニティに参加できないと分かっていても、敬虔な信者は飲酒ができない。ある種の動物は勿論のこと、食べてよいとされたハラール以外のものも食べられない。

レインも将にそれと同じ状況だ。たとえこの家のコミュニティに入れなかろうと、それはできない相談なのだ。日本人にとっての禁忌で置き換えてみないとこの不快感は分からない。私で言えば、たとえば裸族と暮らしたとして、そこの男の人の前で服を脱げるかという話だ。或いはカニバルな人たちと暮らして、人間の肉を食べられるかという話だ。もしその選択を迫られれば確かにコミュニティに入れないかもしれない。

だが、私もそれで引くわけにはいかない。何時間もの説得の上、私から日本語を学ぶ授業は受けないけれど、日々の生活の中で学び取った日本語は使っていくという点で妥協した。しかしまぁ、何て疲れる強情な子だ。いや、それだけ敬虔な信者だということか。

それにしてもレインはちょっと頑固すぎる。元々敬虔さが高じて頑固だったが、日本に来てそれが更に感じられる。言語はまだ許せる。だが車のことなど宗教とは無関係だ。ただ自分の常識と違うというだけであんなに怖がるなんてどうかしてる。それとも、アルバザードの環境で育てば日本の道路事情はとても歩けないほど酷いものなのかしら。その辺は静に相談すれば何か分かるかもしれない。

説得に時間がかかってしまったのでお昼を作ることにした。夏だし暑いので素麺を作った。レインは手伝いながら、物珍しそうに観察していた。おつゆは醤油味だ。さて、レインにとって初めての醤油体験。どんな反応をするだろうか。もし味覚まで頑固にアルバザード式じゃないと食べないなんて言ったら、流石の紫苑さんも怒るからね……。

それにしても不安よ。レインがこんなんじゃこの家の環境には適応できっこない。始めはお父さんたちも慣れてないからと思って許すだろうけど、レインに適応する気がないってしったら図々しい子だって思うかもしれない。そうしたら私もレインも気まずくなってしまう。それなのにレインは人の気も知らずにおつゆをおたまでかき混ぜている。醤油味の湯気に近付くと、くんくん嗅いで、げほっとむせるレイン。はぁ……不安よ。

そういえばこの台所のタバコの匂いで静のことがバレちゃったんだったっけ。あ……いま久しぶりに静のこと思い出したわ。レインのことで一杯だったから。不思議ね。彼を思い出すだけで胸がどきどきして体が嬉しくなる。そう、体が嬉しくなるとか喜んでると表現するのが一番しっくりくる。

タバコ……禁煙してもらって良かった。アルバザードじゃ麻薬だもん。レインが見たら静に何ていうやら……。てゆうか、まず私に「別れなさい」とか言うだろうな。

意外なことにレインは素麺を気に入ったようで、おいしそうにしていた。アルバザードは色々な料理や食材があるから醤油味も経験済みなのだろうか。それとも私に気を使ってくれているのだろうか。……両方だろうな。

お昼を食べ終わってお茶を出した。今日は外には出れないし、日本語も教えられない。さて、じゃあそろそろここに来た理由を聞きましょうか。

ᘐlecᐱ，ᑫaᔑ ᑐ-ϑᑫ eᔐ ᑐЧa laᐱ-ᑐ -ᑐa ᔑeᑐᘓ

ᘐ-ᒐ....ᘓ

レインは神妙な顔。

ᘐᒐc ᑐЧa leeV-ᑐ leᐱ- ᑫ- ᑫ-ᔪᑐe，ᐱɔᐱ ɔ -ᔑᒐe ᔑcᑫ-ᑐ c ᑫ-ᔪᑐeᐱ„ c> ᑐa，ᒐe -ᑐ >eᑐ c S-ᐱ„ ᑫcᑐ，ᐱɔᐱ lɔᑐ ᑐa eᑐ ᔪ-c<-„ ᑐa ᔪ-c<- -ᑐ >eᑐ -l -ᑫɔ ᑫɔᑫᑫɔ <ɔ ᑫ-c„ ᐱɔᐱ <ᔑe>-ᑐ - ᑐa，ᑐ-ɸ-ᑐ ᑐa„ ᔐɔᐱ ᑐa eᑐ....ᑐaᘓ

石を差し出してくる。こんなものが天から降ってきたの？

ᘐc> ᐱɔᐱ -lVcᐱᔐ ᔐ-ᑐ ᑐa，ᒐe ɣ--ᒐ-ᑐ ᘐ0ec，ᔪe ᔐe< ᑐa -l -ᐱᖇᘓ „ ᐱɔᐱ ᐱ-ᑐ ᐱcᑫ ᑐcᐱ c> ᐱɔᐱ cᐱ la >cl la Vcᑫ eᑐ >Чal -l -Vɔ>ᖇᘓ

ᘐ-Vɔ> <cᐱ l-ᐱᘐ Ч-ᐱ la ᔑeᐱᔐ-ᑐ -ᔑᑫ-ẟᘓ

ᘐ-ᒐᘓ

狼のような人間がアルカで話しかけてきたのか……。

ᘐᔐɔᐱ -ᔑᒐe -ᔐ>-ᑐ ᑫɔᑫᑫɔ ɣ--ᒐ Ч∂l ᘐ0ec，ᑐc eᑐ ᐱeᘐᘓ „ ᔐɔᐱ la cᒐᐱ-ᑐ ᘐ-ᐱ eᑐ ᒐelᑐeᔐ ɮel ɮee>ᔐ e ᒐelᑐᖇᘓ

「そんなまさか！」思わず叫んでしまった。

月の悪魔シェルテスですって！？それって月の影のことじゃない。日本では月の影は兎。西洋では蟹なんてところもあるみたい。でも、アルバザードではあれは悪魔だ。狼の化身シェルテスが月の神ドゥルガとヴィーネに封印されているのだ。

本来、シェルテスはドゥルガとヴィーネの魔力が強大になる満月前後以外は月を離れている。だが、その時期になると神々に囚われて月に貼り付けにされる。それが毎月繰り返

されるのだ。

レインが話を続けるごとに私の顔は沈痛な面持ちになっていった。どうやら私がヴァルデを使ったことにより、悪魔ヴァルテの力が強まったらしい。悪魔ヴァルテはアルティス教徒の信者を意味するヴァルテとは全く別物だ。日本語のカタカナにすると同じになってしまうのでややこしい。

ヴァルテは悪魔最強の魔道士だ。９人もの部下を従えている。そのうち７匹の悪魔はソームといって、レインのところで使っているメル暦の曜日の名前になっている。アルディアの戦いでアシェットに敗れている。私がフェンゼル戦いで使った魔杖ヴァルデは彼の魔力を封じた杖だ。

私がヴァルデから無理に魔力を吸い上げたことが結果的にヴァルテの力を強め、同属である悪魔シェルテスの力を強めたそうだ。そして私がアルバザードを離れたディアセルの日は下弦の月で、ヴィーネの力しかなかった。強くなったシェルテスは封印を破るとヴィーネを襲った。いつもなら調伏するところなのだが、強大な力を持っていたため、ヴィーネは敗れてしまった。そして片割れのドゥルガもだそうだ。

神々はアデルと呼ばれる魔物たちを封印することのできるドルテという石を使い、シェルテスを封印しようとした。しかし失敗し、敗走した。ところがシェルテスはドルテに力の源であるヴィードを大量に奪われてしまった。シェルテスは咄嗟に神の手に噛み付いた。神は手を噛まれてドルテを落としてしまった。そしてそれがアトラスに降ってきた。

シェルテスは神々の目を盗んで行動し、ドルテを奪って自分のヴィードを取り戻そうとした。そして神より先にドルテを見つけた。それがちょうどレインの見た隕石だった。レインのところに落ちたのは、その直前までサールの王アルデスとエルトの女王ルフェルが召喚されていたからだと私は推論した。その強い力に引き寄せられてレインのいたカルテにドルテは落ちてきた。ちょうどレインがドルテを見つけたとき、シェルテスもまたドルテを見つけた。

そんな事情を知らないアルシェとレインは困惑するばかりだったが、シェルテスの邪悪な気配に気付いてドルテを渡すことを拒んだ。そのせいでアルシェはシェルテスに襲われたそうだ……。噛み付かれながらもレインにドルテを持って逃げろと言ったそうだ。レインは言われたとおりにすると、礼拝堂であるカルテンへ逆行した。

祭壇のサリュで神に祈りを捧げると、ちょうどドルテを探していたアルデス王が応えた。アルデス王はレインに事情を説明すると、自分が行くまで耐えろと言ったそうだ。レインは慌てて召喚したが、この時代の召喚技術は廃れているので、アルデスの意思があってもレインの魔力では神を呼ぶのに時間がかかった。

アルデスが来るまでレインは安全でいられなかった。シェルテスがカルテンのドアを叩き出したのだ。レインはアルシェが心配で青ざめたそうだ。ただ、アルシェのことだからレインがカルテンに入ったのを見計らって上手く逃げたのではないかとのこと。私は聞いていて胸が苦しかった。

ドアが破られ、シェルテスが入ってきた。レインは観念してドルテを抱きしめてその場にうずくまった。すると、突然光が現れ、中からメルティアが出てきた。私を地球に帰した後、異変に気付いて状況を見ていたのだ。メルティアは地球とアトラスを繋ぐ時空の穴を作り、ここを通れば紫苑の元へ行けると告げた。レインは迷う間もなくその穴に飛び込み……。

ᑫᒍᔑ，ᑕᖻ ᑕ-ᐱ eᐱ ᒍeᔑ -ᔑᓚe eᑕ ᕽ-ᒍᒍᓄ -Z ᒍeᑕeᑫ

気落ちした私の声。痛々しく肯うレイン。アルシェの身が気がかりだ。そうか、そんなことが……。

しかしその話を聞く限り、メルティアはここを当座の避難場所として提供したに過ぎない。ここにレインがドルテを持ってきたところで何の解決になるのだ。シェルテスはドルテを狙うだろう。神がシェルテスを封印するのを待ってから帰還するというのが期待されることだが、シェルテスは逃げ足が速く、ましてヴィードが弱っているいまでは非常に目立たなくて見つけづらいそうだ。

弱まってるとはいえ、私達人間からすれば悪魔としての脅威は健在だ。なにせあのアルシェまでどうなったか分からないのだから。

とにかく事情は分かった。といっても全て分かったわけではない。レイン本人でさえ事情を分かりきっていないし、これから何をすればいいのか誰も知らない。このまま無目的のまま日本にいても何ら解決にはならない。

レインは戸籍も何もない。日本で働くことさえできない。お嬢様だろうといまはお金もない。電話にもメールにも財布にもなる情報端末のアンセだってここでは使えないのだ。アンセを着けているレインの左腕を見て、違和感に気付いた。

ᑫlecᐱ，ᑕᖾ eᑕ -ᐱᒍe ᑕᖾ-ᐱ eᖻᓄᕽᑫ

ᑫeᕕᕽ....l-l- ᑕᖾ eᑕ ᑕᓄᕽ ᑕᖾ ᑕe -ᐱᒍe ᐱᓄ-ᐱ,, ᑐ--ᑕ ᑕᖾ ᑕe -ᐱᒍeᖵᑫ

ᑫᒍᔑ ᑕᖾ eᑕ ᑕᓄᕽᑫ

レインは首を振る。レインの左腕にはアンセの代わりに腕輪が嵌められていた。ビーズのような透き通る腕輪だ。こちらでアンセが一切使えないことを知ってたからだろう、本人も今まで気付かなかったようだ。結局、腕輪のことは謎のまま話が過ぎた。しかしこのままだと動くに動けない。困ったものだ。

「あ……」

大変なことに気付いた。

ᑫᐱee，ᑕᖾ ᐳ-ᓓ le ᐳelᑕc- l-ᛚ-ᑕ ᓓ-l-ᑕ -ᑕᖾ ᓓc ᑕᖻ l-ᑕ-ᑕ - ᑕᖾ eᖻᓄᕽᑫ

ᑫᐱᓄᔑ eᐱ ᒍeᔑ,, ᑕeᑕ....l- l-ᑕ-ᑕ ᓓcel - ᑕᖾ，ᓓcᓄᔑᑫ

ᑫᒍᔑ.... ᑫと言ったきり私は黙った。

レインも黙って下を向いた。小さく震えて、顔を紅潮させ、目には恐怖の色。

そう……もしレインが通った光の道をシェルテスも続けざまに通っていたとしたら？

2006 / 07 / 22

夏期講習は朝から始まる。残務を合わせると夜中まで仕事は続く。だが、今日は授業だけで片付けて夕方には帰ることにした。ちょっと同僚から顰蹙を買ったが、急用があるといって逃げさせてもらった。

昨日の夜、紫苑から電話があった。レインちゃんを案内しようとしたら街中で車を怖がってダメだというので助けてほしいという。アルカの喋れない俺に説得なんて出来るはずがないと言ったが、俺ならどうにかできるんじゃないかと期待しているそうだ。そんなこと言われても困る。通訳は紫苑がしてくれるそうだが。よっぽど親御さんに頼んだ方が良いんじゃないのか。あの２人の言うことなら誰でも聞きそうだ。

それはそうと午前中の授業に紫苑は現れた。一番上のクラスの担当になったので、紫苑がいるのは当然といえば当然だ。授業中は俺などまるで赤の他人であるかのように振舞っているのがおかしくて笑いそうになってしまう。

教壇から見る紫苑は気だるそうな女子高生に過ぎない。夏休みだというのに想像以上に制服の生徒が多い。紫苑もその一人だ。最近の学生は服を選ぶのが面倒くさいらしい。他にも授業後に部活に行くという理由でサブバッグにジャージという生徒もいる。

学生の中に埋もれていようと紫苑は目立つ。理由は単純。美人だからだ。この中の何人が紫苑に思いを寄せているのだろうなどと思う。男は結構狙っているのではないか。まぁ、ガキに自分の女を取れらるような間抜けじゃないがね、俺は。

紫苑は俺を支配したいらしいが、所詮は子供だ。最近、俺のペースにはまりつつある。紫苑は 360 度弱点がないかのように見えるが、恋愛については初心で無防備だ。色々な面について俺を支配しようとしても、俺が恋愛面でリードすることによって紫苑の支配から逃れることができる。俺に溶け込んでしなだれかかってきた儚い蛍には一切感じなかった恋愛の駆け引きだ。惜しむらくはその相手があまりに未熟だという点。

仕事を終えると逃げるように去り、車を出す。この時間だと普通のリーマンの定時より早いのでまだ道路は混んでいない。４時台には白岡に着いた。紫苑が家の駐車場を使えと言ってきたが、いつ開放されるか分からない。それまでに親御さんが帰宅されたら、埋まった駐車場を見てさぞや不快な思いをされるだろう。紫苑には悪いが駅向こうのパーキングに停めることにした。

駅から歩いて俺の足だと５分強というところだ。紫苑とレインちゃんしかいないそうなので、ドアホンを押す。すぐに紫苑が出てきて迎えてくれた。部屋に行くとレインちゃんが椅子に座っていた。俺を見つけると笑顔で ᘐ╰ᴄZ⁀- ᔑᔕᓄ, ᔑᔕᕢᐱᖇᘐ と言ってきた。かわいい子だ。

ᘐᔑᔕᕢᐱᓄᐯᕢ, lecᐱ ᕢ╰-ᐱᘐ と挨拶してみた。紫苑が今日の休み時間にアルカの文字と音を書いたメモを渡してくれた。「10 分で分かれ、文法！」というメモにはアルカの文法が簡潔に

書かれていた。そして「これだけは覚えるみゅ！」というメモには代名詞や動詞の他に敬称と挨拶語が 20 個ほど書かれていた。

俺の挨拶を聞いた彼女は首を傾げた。紫苑のメモには IPA で音声が書いてあった。この発音で間違いないはずだが……。

ᘐᒐᴐᐱ，ᑕᒐ-ᐱ eᑕ ᑕɔᵟᘐ

ᘐ--，lᵶ ᵽeᐱᒍ-ᑕ ᘐᒍᴐɔᐱɔ lecᐱ lccZᘐ - ᑕЧᵶ„ ᑕᒐ-ᐱ eᑐᒍ lccZ ɔᐱ ᐱchɔᐱɤɔᘐ

ᘐh--ᐱ，ᒍɔᐱ ᵽeᐱᒍ - lᵶ Чᵶl -ᐱᒐ ᐱɔᐱ leᒐ lecᐱ ᵽeᑕ„ ᒐɔ> ᐱɔᐱ -ᐱᒐ ᐸ-ᐱ lᵶ ᑕ-ᑕᑕ- -ᵮᑕᘐ

「ᵮ-ᒍᒍɔ„ あのね、レインが言う「ソウ」っていうのは男に使う敬称で、デュッソウより下なのよ。私の彼氏って紹介したから親しみが増したみたい。で、「ちゃん」はアルカだとリーズっていうんだけど、いまそのこと話したら、レインは呼び捨てが良いって。その代わり自分も呼び捨てにするからって」

「俺をいきなり呼び捨て？」

「アルカだとファーストネームで呼ぶのがふつうなのよ」

「はぁ」ポンと手を打った「それでか。それで紫苑は俺と会ったとき苗字じゃなくて名前で呼んでって言ってたのか」

「そう。ね、英語かぶれじゃなかったでしょう？アルカかぶれなのよ、ふふ」

「ようやく繋がったよ。うん、じゃあ呼び捨てでいこう。別に俺は気にしないしな」

紫苑はそのことを伝えたようだ。俺はレインの前に言って膝をついて話しかけた。訳は紫苑に全て任せ、話を進行させた。

「いいかい、レイン。君が何でここに来たかは後で紫苑から聞くとして、恐らくそれなりの期間日本にいるだろう。日本はアルバザードとは違う。紫苑から君の抵抗の理由は聞いている。アルティス教とやらの教えに背くことは嫌なんだね。自分の信念を守るのは大切だ。でも、環境が変われば行動もそれに合わせて適応させなければならない。最低限の適応をするために教義に背くことは必要悪だ」

紫苑は「必要悪……」と訳の途中で呟いていた。難しかったようだ。それに当たる語がないのか或いは単に知らないのか。

「最低限の適応をしなければレインは生きていけない。アルティス教は教義を曲げるくらいなら死ねと信者にいう宗教なのか？」

そこまで言うとレインは ᘐᑕee，ᒐᴐᐱ lᵶ- ᒐ-ᒐ-ᑕeᒍ leᐱ- cᑐᐱ ᐸ-l ᐱcl ᐸlɔ lᐸcᒍᘐ と応えた。俺は紫苑を見る。

「シオン様は現世で幸福に生きろと説かれました、だそうです」

「シオン様？」

「あぁ、私じゃないのよ。アルティス教の教祖が偶々同じ名前なの。それでこの子、初めて会ったとき私を教祖の生まれ変わりだと信じちゃってたんだけど」

「へぇ、凄い奇遇だな。で、幸せを優先させろと教祖サマが言ってるんだったら、殉教せよなんて言わないんじゃないかな。レインのやってることは殉教の三歩くらい手前だ」

「静、ごめん、変な比喩は使わないで。訳せない。三歩くらい手前……lecʌ，ᑕЧₔ Vɔᔑᑕ ᔐ-ᑕ ᒐcel ᐸccʌ- -ᔑᑕcᔐ ᑕ-l ᑕₔ ᑕel ᒐ-ᒐ e ᒐcɔʌ lₔ-」

「あぁ、悪い。で、レインが車を怖がるのは分かる。俺もあんな危ない道具が走ってるって考えると偶に怖い。でも殆どの人間は事故に合わずに生きて死ぬんだ。アルバザードには恐らく存在しない交通整理もたくさんあって、安全設計はされている」

レインは俺の言葉に頷くと、紫苑に ᘐϑ-ᔐᔐɔ，ʌɔʌ ʌ-ᔐᖷcᖷ,, h-Чₔ ʌɔʌ ᔑeᑕ - lclcᔐ Чₔl lclcᔐ Seᑕ ᑕₔ ᔐ-cl - ʌɔʌ ᘐと言った。

「納得したって。ありがとう、静。やっぱり先生は頼りになるわ」

「俺は別に……言ったことは陳腐だし、訳は紫苑だろ。２人の共作だよ」

「一番有効だったのはその真剣な目と落ち着いた声よ。先生らしい、ね」

「え？声か……意外だな。俺は自分の声が嫌いなんだが。まぁいいか」

２人を連れて外へ出た。紫苑が鍵をかけ、外へ出る。夏なのでまだ明るい。昨日に比べて今日は何度か気温が高く、天気も少し良くなった。ようやく夏らしくなってきたな。まぁ、それでも例年の７月に比べれば過ごしやすい方か。

レインが嫌がったという魔の十字路へ差し掛かると、レインはビクっとして紫苑の腕に抱きついた。俺は紫苑を止めて、遊歩道へ歩かせた。

「どうしたの？今日は諦められないのよ」

「いや、ベンチに座って暫く道を見てよう。思うに、この子は道の構造が分からないんじゃないかな。どこが歩道でどこか車道かとか。この子の頭の中じゃ車がいつどこから自分のところへ突っ込んでくるか分からないんだ。だから一歩も進めないんだよ」

「あ」と呆けた顔になって、紫苑は大いに頷いた。そして座ると俺の腕に抱きついてきた

「流石先生。私ったらスパルタばっかでダメね」

「紫苑が熱心だってことだよ。ほらレイン、見てみな」と指差す。レインは言われるまでもなく行き交う車を注視していた。首が左右に動く。面白い子だ。

「ここの道路は歩道と車道がきっちり別れている。ガードレールこそないがね。でも、ここが歩道だなってすぐ想像つくのは、日本では車と人が同じ道を走るからだろ。同じ道の端っこを人、その間を車。こういう概念がなかったら、パッと見ただけでどこが車道かなんて分からない。それにそこの小道」と左方を指差す「紫苑の家の方の道だけど、あそこは歩道さえないよな。車幅も狭い。歩道があったりなかったりで不規則だ。それが日本では当たり前だが、果たしてアルバザードではどうなのか。俺は知らんが、紫苑ならもう十分察せるんじゃないか？」

「はい。先生の言うとおりです」としおらしい「やっぱり私は子供ね。ごめんね、レイン」

「レイン、車の行く道に法則性があることに気付いた？」

紫苑が訳す。

ᘐЧ-，->ɔ ᔐecʌ ᐸɔʌᑕ ᐸ-ʌ ᖷ- ᖷɔᖷ cʌ,, ₔ ->ɔ lₔʌ- ᐸ-ʌ le ᐸɔʌᑕᘐ

「車道と歩道の違いに気付いたみたいよ。lecʌ，ᔑɔʌ leʌ- ʔɔᵘ ⌊ccᑐ le ᑕɔʌᑐ，ɘ-ᔑᔑɔẟ」
　レインが応じて立ち上がる。少しおずおずしているが、歩道を歩いていく。まるで歩道から落ちたらゲームオーバーであるかのような歩き方で、平行棒でも歩いているのかと思う。
　すぐに横断歩道に差し掛かった。レインは当惑する。紫苑は横断歩道と信号の説明をする。俺はアルカが分からないから、多分そういう説明をしてるんだろうなと思って聞いた。
　信号が青になり、紫苑がレインを促すが、とっさに俺は２人の手を引っ張って道に引きずり戻した。その刹那、乱暴なセルシオが右折をしてきた。
　レインは驚いた顔をして、紫苑を見た。ちょっと騙されたような顔をしている。紫苑も気まずそうにしている。
「レイン、悪い。ちょっと待ってて。えーと、ᑕcᵘ V-ᑐ，V-ᑐ„ ɘ-ᔑᔑɔẟ」
　紫苑のメモは役に立つ。最小限で最大限の効果がある。レインは俺のアルカを聞いて安心した顔に戻った。
「紫苑、とりあえず止まろう。信号なんかいつでもいいから。で、何て教えたの？」
「え……ふつうの親が子供に教えるのと同じよ。信号が青……じゃない緑になったら渡りなさいって」
「なるほど。紫苑の親はそう教えたのか、昔？」
「うん、そうよ」
「よーく思い出してみな。本当にそれだけか？意地悪な聞き方をしたいんじゃない。紫苑に自分で気付いてほしいんだ。レインの教育係として翻訳に責任を持ってほしいから」
「えと……右見て左見て、手を挙げて渡りましょう？でも誰も手なんて挙げないわよ。かえって不自然じゃない」
「そうだね、不自然だ。問題はそこじゃない。何で左右を見るのかな？」
「それは……赤信号でも無視する車がいるから？」
　だろうな。免許を持ってなくて車にも興味がなくて信号も歩行者信号しか気にしない女なら気付かないこともありえる。
「紫苑、歩行者信号が青のとき、歩行者に平行する車の信号も青なんだ。で、車ってのは基本的に信号が青のときに右左折をする。ただ、勿論歩行者が優先だ。だから今まで何度も横断歩道を渡ってる途中で車が通りたそうに曲がってくることがなかったか？」
「……あった。ありました」
「あれはそういう理由だよ。今みたいに乱暴なセルシオ……っていうか車もいるんだ。歩行者を優遇しない奴。いまレインに気を使って俺たちはゆっくりしてただろ。だからあいつは先に行っていいのかと勘違いして進んだ。そのとき紫苑はそれに気付かず前進を始めたんだよ。紫苑は最高の教師の素質がある。ほぼ何でもこなせる。そこに今度は俺も加えてよ。俺は欠陥が多いけど、紫苑の知らないことについては助けになれる。お、青だ。渡るぞ」

２人の手を引いた。レインは空気を読んで俺を信用したのか、指先を握っただけなのに向こうから俺の手首をぎゅっと握り締めて身体を寄せてきた。紫苑は下を向いて黙っている。唇を閉じて、目を細めている。これは……相当悔しがっているな。恐らく自分に苛立っているのだろう。だが何も説明せずにあれしろこれしろと結論だけ叩きつけるよりは、紫苑のような理性的な女にはずっと効果的だったはずだ。

ミニストップを通り過ぎ、駅前に行った。ちょうど電車が来たようで、人が降りてくる。美少女の紫苑でさえ目立つのに、外国の人形のような顔をしたレインまでもが揃うと、余計に目を引く。ましてその美少女２人がなぜか俺みたいな男にへばりついて歩いてる。周りの人間は悉く俺を見てきた。何となく居心地が悪い。冷や汗が出そうだ。

駅を通り越して向こう口へ出ると、紫苑はレインにさっきのことを謝った。レインの信用を損なったことを気にしていたようだ。俺は２人の少女を相手取るのが正直面倒で、夏期講習も忙しいことがあって、無性にタバコが吸いたくなった。しかし俺もお人よしだ。これから夏期講習を乗り切って、休みは紫苑とデートして蛍のことを思い出さずに気を紛らわせようとしていたのに、異世界からやってきた少女のお守りなんぞをしているのだからな。

ふぅ、と息を吐いた。レインは道に慣れてきたようだ。子供だから適応が早い。しかしその子供２人はさっきから男の俺を魅了する甘い体臭を放っている。夏だから密着されると特に感じる。

最後に抱いたのは蛍だが、その蛍にあの仕打ちを受けてから、俺は女を抱く気にはなれなくなった。だが、性欲はそれとは別に襲ってくる。といっても今年初めて感じたかもしれないくらい弱い波だが。そんな邪念を抱いている場合ではないのだが、男である以上、邪念が沸いたら簡単に抑える方法はない。かといって紫苑で欲求を満たすのは嫌だ。なぜって、そんなの大人のすることじゃないし、俺らしくないからだ。

駐車場に着くと、車に乗る。レインには後ろに乗ってもらった。RX-8 は４人乗りだ。後部座席を空けるときはドアが観音開きになる。前のドアを開けた後、後ろのドアを開けるのだ。レインの中で地球の車のプロトタイプがすっかり近年売れ行き不調なクーペになってしまったな。心中で苦笑した。

「どこに行こうか」

「うーん、まだ白岡を見せきってないからなぁ、先生にも。私の小学校や中学校がどんなとこだったか興味ない？」

「お、いいねぇ。行ってみようか。どこに通ってたの？」

「小学校はすーっごく近かったの。白岡東小っていってね、ウチから５分もないのよ」

「へぇ。俺も近かったよ。小学校のころは近いと良いよね。東小ね……あった」

ナビに登録して出発する。紫苑は後ろを向いてレインと話していた。

東小というのは比較的新しいらしく、紫苑はかなり初期の生徒だったそうだ。確かに外装からして新しい。紫苑が外側から内装を説明している。自分のころと部屋の名前が変わ

っているだのと言っている。
「近いのに久しぶりに来たの？」
「うん、あまりこっち側には来ないからね。行くのは駅ばっかだし。中学なんて……多分卒業してから行ってないんじゃないかな」
「あまり学校に良い思い出ないの？」
「友達いなかったしね……」
「そうか」
　これが学校だといったらレインは日本の学校はこうなっているのかと物珍しそうにしていた。言われるまで学校であるというのが分からなかったようだ。随分アルバザードのものとは違うのだろうな。
　次は中学校へ行くことになった。駅向こうに篠津中学校というのがあるそうで、ナビに任せて進んでいった。所詮は中学なので 10 分もかからずに着いた。校門が開いていたので勝手に車で乗り込んで入口付近に停めた。
「ここ、停めちゃダメだと思うけど……」
「どうせすぐ行くだろ？平気だよ。あぁ、普通の中学校だね。こっちの方が日本の学校って感じだ。レインに言ってよ」
ᘐlecᐱ ᑦᓀ ᐸelᑋ- ᐱɔᛦ le eᑢ ᛦɔ>ᑦᘓ
ᘐh--ᐱ„ ᑦeᑢ cɔ eᑢ eᐱᑋ - ᐸelᑋ- ᑦ -ᔪᕒ-Z-ᔪᛦᘓ
「どっちにしてもアルバザードのには似てないって」
「そうか。しかしここで紫苑が３年間中学生をやってたわけね」
　教室の配置図が置いてある。紫苑はどこを使っていたのだろうか。
「ここを毎日通ってたんだ。そのころからさぞかし可愛かったんだろうなぁ」
「え、どうかな」と赤面する「今度卒業アルバム見せるね。私を見つけて」
　珍しいな、卒アルなんてブサイクに写ってるから見せたくないってほうが普通だろうに。やはり自分の顔に自信があるのだろうな。
「制服ってまだ家にあるの？」
「うん、あるよ。着てみせよっか、先生？」からかうような笑みを浮かべる紫苑。
「いいねぇ、ここまで禁断の恋になったらいっそのこと地獄の底まで行ってみるか。でも、偶々着替えた後にお父さんと出くわしたらどう説明するの？」
「それは……昔の私を見てもらってましたーとか……写真と生を比べて３年間の成長を見てもらってましたーとか……」
「それ、多分、俺が後々殺されると思う」
「ふふ……殺される前に楽しんでってね」
　２人で笑っているとレインが１人でぼーっと辺りを見ているので、気になった。何だか１人だけ取り残しているとかわいそうだな。蚩そっくりのボケっぷりだが、この子の場合、言葉を知らないんじゃしょうがない。しかし教義のせいで日本語を覚える気がないとは

中々難儀な娘だ。

　車に乗り込むと、街に出ることにした。池袋にいきなり行くとゴミゴミしすぎなので、とりあえずウチの近くに行くことにした。時間は６時前だ。
「紫苑、親御さんに連絡を取らないと」
「はい。あ、一応親には言ってあるけどね。レインを連れまわすからって」
「そっか、じゃあ大丈夫だな」
「光が丘に着いたらお店に行っていい？レインのものを色々買いたいのよ。できれば買い物の間、どこかで待っててほしいの。ジュース飲んだりしてて。あの……女の子のものもあるから」
「あぁ、分かった。ゆっくりしといで」
「うん、終わったら迎えにいくね。どこか行きたければ行ってても良いよ。ケータイで連絡するから。あ、ナンパされても付いてっちゃダメよ」
「スーパーでナンパなんかされるもんか」と笑う。
「え？私、結構スーパーやデパートでも声かけられるよ」
「マジで？……流石は紫苑。原宿や渋谷行ったらスカウトが凄いだろうな」
「うん……物凄い勢いで勧誘されるから行かないの」
「あれは一人で歩いてると勧誘率が上がるからなぁ」
「先生も勧誘されるの？」
「あぁ……ホストが殆どだけど」と言ったら紫苑が「そう思った」と笑う。
「ああいう勧誘って一体何に勧誘してるんですか？」
「街によって違うね。新宿はホスト。女だったらキャバとか風俗とか水商売ね」
「キャバって？何となくいかがわしい単語なのは分かるけど」
　いかがわしいなんて今の子、使うんだ……。
「キャバクラ。キャバレークラブの略。まぁ酒飲んで女の子が接待してくれるわけ」
「つまり……遊郭？」
「はは、紫苑にとっては遊郭が「つまり」なんだ。流石だね。いや、良い意味で。紫苑のそういうとこ、凄い好きだよ。粋な女だなって思う」
　すると紫苑が機嫌良さそうに笑った。
「一方渋谷はAVが多いかな。原宿は芸能が多い。AVは分かる？」
　どもりながら「流石にそれくらいは……」と下を向く。
「まぁ、声かけられても応えないことだね。ああいう世界は落ちるとこまで落ちてくだけだから」
「ふぅん、そんなこと知ってて勧誘する男って悪人ですね」
「悪かどうかは知らないけど。あんなのに騙されるのがそもそもバカだしな」
「バカだけど、被害者だもん。それで騙した人は加害者だもん」

「まあなぁ。じゃああいつらが仮に悪だとしてさ、それでも儲けりゃいいんだろうね」
「あの仕事って儲かるんですか？ティッシュ配りみたいなものかと思ってました。似てるじゃないですか。道端で声かけて」
　はぁ、子供の目にはそう映ってるのか。しかしこういう話にはやけに食いついてくるな。そういう年頃だからかな。俺、紫苑に世の中の暗い部分を教えてるだけな気がする。紫苑はそういうことに疎いのに。でも、純白のキャンバスに絵の具を塗ったり、誰も踏んでない雪原を踏み歩くような快感があるな。
「結構金になるよ、上手くいけばだけど。あいつらはさ、女の子を掴まえて入店させるだろ。そうすりゃ店から紹介料をもらえるんだよ。その後女の子がそこで働くだろ。そうすると月末にその子の稼ぎの何％とか何割とかがリベートされるんだよ。だから別に大して可愛くない子にも声をかけるわけだ」
「そうなんですか」
「でも、AV は可愛くないとダメだし、芸能も同じ。だからこの関係のスカウトは良い人材を探してる。でも、ぶっちゃけいえば殆どのスカウトが騙しだよ。芸能大手はほっといても女の子の方から履歴書送ってきてオーディションになるからね」
「そりゃそうですね」
「でも稀に街でスカウトされて芸能界ってやつもいるにはいる。本当のスカウトもあるってことさ」
「詳しいですね。ほんとにホストとかやってたんじゃないですか？」
「まさか、俺はそんなに酒に強くないんだよ。ま、ホストは酒じゃないけどさ」
「なるほど。スカウトって始めは顔でしょ。先生がホスト勧誘されるのは分かる。他にも勧誘されますか？」
「うーん、芸能プロダクションとか……紫苑が言ったナンパもまぁ稀に」
「へぇ、ついてったりするんですか？」急に耳ざとくなる。
「いや……学生のときね。いまは紫苑がいるから」
「ふぅん、結構軽いのね。そのころ彼女いたんですか？」
「さぁ、どうでしょう」といって大きくハンドルを切った。
　紫苑は俺の横顔に近付いてきた。
「まさか、浮気が原因で蛍さんと別れたとか……」
「ないない」……ということにしておく「ほら、立つと危ないよ」
「はぁい。もう……カッコいい彼氏を持つと不安でしょうがないわ」
「俺だって同じだよ」
「え？浮気は男の人がするものじゃないですか」
「女の子もするでしょ、特に最近は」
「私はそんな女じゃないし、そんなの女だって認めないわ」
「はは」笑って後ろのレインに言う「そんなこといったらフランス文学は成立しないな。

なぁレイン、アルバザードでは貞操観念ってどうなってるんだ？」
「厳しいよ、結構。少なくとも今の日本よりは」と代わりに紫苑が答える。
「そっか。あのさ……ごめん、紫苑。俺、ちょっと調子に乗った。怒ってる？」
「え？怒ってないよ。不安なだけ」
「大丈夫だよ、紫苑相手に浮気なんてするもんか」
「でもなぁ。あれだけ詳しく裏社会のこと聞いちゃうと、なんか色々勘繰りたくなっちゃいますよ」
「おいおい」少し焦る俺「ほんとにそんな職に付いてたことなんてないって。ほら、ダチから聞いただけの話だよ。俺の体験じゃないって。ほんとだよ。信じないのか？」
「信じますよ」とあっさり「不良時代の友達に聞いたんでしょう？」
　なんだ？含みのある言い方だな。不良の友達でなく不良時代のってどういう意味だ。俺は何も余計なことは言っていない。俺は無言で運転を続けた。が、赤に引っかかってしまった。ふぅとため息をつく。ここの信号は長い。
「先生、いつケンカしてたんですか？」
「え？どういう意味？」
「不良だったでしょ。てゆうかケンカしてたでしょ」
「何それ。なんでそう思うの？」
　すると紫苑は俺の右手を掴んで胸元に引っ張った。制服の胸に軽く押し当てられて、思わず右手が緊張した。
「ほら、ここ。中指の第３関節頭が異常に化骨してます。正拳を裸拳で打ちまくるとこうなるんです。不良君たちは強がって拳ダコができたなんて言いますけど、度を越すとタコじゃ済まなくなってこうなります。こうなるには相当の衝撃と激痛があったはずです。何をどれだけ殴ったんですか」
「……さぁ。ぶつけたんじゃないの？」
「中指の第３関節頭ですよ？正拳で打ったのが一番考えられます。しかも普通の人は殴るとフック気味になって、小指の第３関節で打ってしまうんです。たとえ相手が静止物でも。ここを使って正しく殴れるのはストレートを打つ練習をした人です」
「真っ直ぐになるよう気を付けながら静止物を殴ったんじゃないの？電柱とか壁とか」
「何のために？たとえば癇癪起こしてですか？信じられません。人間、骨がこうなるほど静止物は殴らないものですよ。恐怖が先立ってしまって」
　信号が青になる。紫苑の手を離して運転に戻る。心臓がドキドキしてきた。
「でも、ケンカで手加減できずに裸拳で人の骨を殴るとこうなります。よほど強くですけど。私みたいに小さい頃から習ってる人は裸拳で打つなんて機会ないです。拳は大事ですし。ボクサーなんか拳をもっと大切にします。だけど、同じ道場の人で不良上がりの人がいて、その人の拳がこれにちょっと似てるんですよね……」
「はぁ……」とため息をついて無言の非難をするが、紫苑は止めない。

「先生、ケンカでできた拳ですよね。その後道場とか行ってたんですか？何の格闘技をしてたんですか？」
「さぁねぇ」頭を掻く「そんなこと知ってどうするの？俺と試合でもしたいのか？言っとくけど、紫苑に勝つ自信なんかないから」
「ううん、そういうことじゃなくて。もしものときに強い人で良かったって思ったの」
　紫苑は含みのある言い方をしたが、俺は不快だった。第一、俺はまず心が強くねぇ。
　くそっ、大学時代の結婚指輪は外せても、高校時代の拳は取り替えられないってわけか。

「それより、運転中にもう少しアルカを教えてくれ。不条理だとは思うが、レインに学ぶ気がないなら俺が歩み寄るしかない」
「そうね。でも私としてはこの頑固にどうにか日本語を叩き込みたいんだけど。レイン、こんにちは！」
　すると後ろからレインが「こーにちわぁ」と言ったのが聞こえた。なるほど、[N]音がなく、コンとニがくっ付いて[konni]という発音になるのか。しかもアクセントまでアルカ式だし。耳が悪いのか、この子は。いや、悪ければむしろこんな間違いはしないだろうな。
ᘐlecᐱ，ᑕᓀ eᑕ ᐱchɔᐱɣɔ„ ᓄɔᐱ ᔨeᐱ ᐸɔZ ᐱchɔᐱɣɔᖵᘐ
ᘐ-ᒐ，ᒐ-ᒐ-ᐱᘐと少し不承不承な声。
「はい、レイン。こんにちは」
「……こん、にちわ」
ᘐᕽ-ᓄᓄɔ，ᕽ-ᓄᓄɔ„ ᑕᓀ eᑕ ᔨ-ᑕᘐ
　随分と破擦音「ち」に含まれる摩擦が強いな。
　そんな感じで紫苑は日本語の表現をレインに教えていた。文法を教えるのではなく、最低限の表現を覚えこませるという考えのようだ。
　しかし、俺たち以外に知り合いはできそうもないからこんにちはなんて覚えてもしょうがないんじゃないだろうか。親御さんにはおはようございますというだろうから、それは覚えておいたほうがいいと思う。だが、ᓄɔɔᐱɔᖻᓀᐱ に比べるとあまりに長いよな。大変だろうな、先が思いやられる。

　光が丘に着いたときには８時になっていた。自宅の駐車場に車を停め、２人を下ろす。レインは物珍しそうにきょろきょろ辺りを見回している。
「なぁ、アルバザードってここより科学が進んでるんじゃなかったっけ？」
「家の造りは伝統的よ。ミロク革命は建築の世界にも古典主義をもらたしたから」
　紫苑の説明に俺は首を傾げる。何だか分からんが紫苑は向こうで相当色々な勉強をしたらしい。
ᘐlecᐱ，-ᑕᓀ eᑕ ᔨ- e ᒐcZᐡ-ᘐ
ᘐᐡ-c ᑕcᐱᐡ- ᐱɔᦰ ᔨ- ᑕᓀ-ᐱᖵᘐ

ᔕᑕee ᑕee，ᓚe Ⅴ-cᑐ eᑕ ᔑ- lɜɜᑕᔕ
ᔕ-，-lᐱ-„ ᑕɜ eᑕ ᐱɔᓚᔑ- ᔑeᑕeᔕ
何だか俺の部屋の窓を見ながら喋りあっている。なんだろう……。
「さて、もう暗くなってきたし、行こうか」
歩き出したら袖をぎゅっと掴まれた。紫苑かと思ったらレインだった。少しおどおどしている。
「怖いの？」
ᔕᑕЧɜ ᔑeᐱᔑ ᑕɔẟ ᑕЧɜ Seᑕ ᓚc-l e ᐱɔᔑ - ᐱɔᐱ，ᓚcZᑐ-ᔕ
「えーっと……」紫苑を見る。
「静の街だから静に案内してほしいみたいね」さらっと言うが、正直言ってレインの態度が気に入らないという表情が微かに見える。
会ったばかりの俺を自分より信用するレインに怒っているのか、カレシに慣れなれしくされて怒っているのか。両者だろうな。
「どうせ掴まってくれるんならカノジョの手のほうが嬉しいんだけどねぇ」とため息交じりに言ったら紫苑は「しょうがないよ。レインはまだ日本に慣れてなくて怖いんだから。大人の男として守ってあげてくださいね、先生」と言った。機嫌が直ってレインに対する配慮が戻ったようだ。
俺は余った左手で紫苑の頭を撫でた「こっちの手は暇そうにしてるけどな」
「ふふ」と紫苑は笑って俺の左手に頬を摺り寄せてきた「両手に花じゃ歩きにくいでしょ。あとで２人きりのときに甘えさせてくださいね」
マンションを出て少し歩き、陸橋の階段で上に上がる。レインは立ち止まると、陸橋から道行く車を見下ろした。
ᔕᓚcɔᐱ，ɜ ->ɔ lɜᐱ- -ᑕɜ ᔑeᑕeẟᔕ
ᔕЧ-，ᐱ- ᐱ-lᔕ
レインはふぅっと息を吐くと、陸橋と同じ高さを見回した。珍しそうにきょろきょろしている。通りすがりの連中がレインをじろじろ見てくる。外人が来てるという風に映っているのだろうな。外人には違いないが、異世界人とまでは誰も思うまい。
ᔕᑐɔ>ɔ….ᑕɜ ᓚc-l eᑕ >Чɜl -l -ᔑᐱ-ᔕ
ᔕ- Ч-ẟ ᐱɔᐱ ᑕ-ᐱ ᐱ-ᑕ ᔑɔ-，lecᐱᔕ
ᔕᑕeᑕ -ᔑᐱ- ᐱɔɬ -ᑕɜ eᑕ l-ᐱᑕ ɔ ᔑe< ᑕcᐱ….ᓚcZᑐ- ᔑɔɜ -lᐱ- Ⅴcl ᓚ-ᐱ -ᔑᑐ- ᔑeᑕeẟᔕ
ᔕЧ-，ᔑɔᐱ ϑ-ᔑᔑɔ„ ᐱɔᐱ ᑕ-ᐱ ᐱ- ᔑɔ-„ ᑕeᑕ cᓚᑕ- e ᑕɜ Scᐱ-<ɔᐱᑕ ᔑɔlᔑ leᐱ- hel -ᔑᐱ-ᔕ
何だか辺りを見ながらはしゃいでいる。
「レインの買い物をするんだろ。どこに行きたい？」
「日用品とか色々揃えたいの。あっちにダイエーがあったよね」とリヴィンの向こう側を指す。
「うん。そこにリヴィンあるけどね」

「リヴィンって？」
「ほらそこの。スーパーだよ。多分西武系列じゃないかな、店内似てるし。６階まであって、結構何でもあるよ」
「じゃあそこにするね。何時までやってるの？」
「９時まで。俺が案内したほうが早いだろうけど、女の子のものが何とかとかいってたから、俺はドトールで一服してるよ」
「一服って……タバコじゃないですよね」
「紅茶飲むだけだよ。タバコは紫苑で止めたからね」
　紫苑は満足そうに笑った「タバコはアルバザードじゃ麻薬なのよ。レインの前で吸わなくて良かったね」
　俺はわざとらしく肩をすくめた「それより、中で迷わないか？」
「ありがとう、地図見て動くね。とにかくレインとはぐれないようにすれば大丈夫だから」
「わかった。概ね何買うのか教えて」
「そうね、服とか雑貨とか……その……衛星用品とか。シャンプーとかは兼用するからいいけど」
「あぁ、じゃあ２，３階だな。本屋は５階だから」
「本屋？」
「レインに日本語教材を買うんじゃないのか？」
「先生、私、自分で教えますから。私もそうやってアルカを学んだわ。向こうの図解事典をひたすら読んだりして」
「そうか」と返し、俺は紫苑と別れた。２人の姿が見えなくなると、ドトールへ向かった。紅茶と夕飯代わりのサンドを頼んで席に着く。暫く虚空を眺めていたが、やおら立ち上がるとふらふらしながらゴミ箱へ近付いた。胸ポケットからキャスターを取り出すと、箱ごと捨てた。紫苑は小さいから俺の胸ポケットの中には気付かなかったようだ。
　席へ戻り、紅茶をすする。タバコが吸えないのが口寂しい。ふぅとため息をつく。このドトールも蛍と来たなぁ。そういえば恋人になって初めてのデートで行ったのもドトールだったな。正面に座って緊張して、俺が一生懸命話してるのに蛍の機嫌は悪そうで。単にコミュニケーションが取れないだけだったんだが、やっぱり付き合うって言ったけど別れたいって切り出したいのかななんて考えて気まずかった。
　正面っていうのがまずかったな。明るかったし。その後暗い堀の近くに連れ出して２人で地面に腰掛けてひそひそ話し合った。肩と肩をくっ付けて対面しない位置で。このほうがずっと男女は話しやすい。周りも学内で安全な誰もいない場所だったし、逃げようと思えばいつでも逃げられる見知った広い屋外だし。
　いかんな、彼女ができようが蛍のことを思い出してしまう。俺は紫苑を見るべきなんだ。時計を見た。まだいくらも経ってない。女の子の物といって口を濁していたが、その辺が子供なんだよな。既婚者の俺は、女の寝起きのむくれた顔からバカ面した寝顔まで知って

いる。１月のサイクルも自分のことのように知っている。見られるのが恥ずかしいのだろうが、俺にとっては女の下着なんかもはや洗濯物に入れて干すものだし、生理用品だってコンタクトのケア用品くらいに当たり前のものだ。ハッキリ言って初潮を迎えたばかりの女子中生より俺の方が製品ラインナップや使用感は詳しく聞いて知っている。

生活感漂うなぁ、俺。子供の紫苑には想像も付かないだろうな。ま、一度結婚してしまえば男なんてそんなもんだ。女に対する憧れや期待など、童貞のころが一番だ。恋人時代に理想は半分崩れる。その代わり、甘い現実がその半分を埋める。ところが結婚すると甘くない現実が全ての理想を壊す。既婚男性のいっちょあがりだ。

はぁ……タバコがほしくなってきた。俺は紅茶を飲み干すと、机に突っ伏して寝た。暫くは仕事のことなどを考えていたが、疲れていたので寝入ってしまった。気付いたときにはケータイが鳴っていた。はっとした。出る前に咳払いで喉を直す。

「はい。終わった？いまどこ、イマらへん？」

「今らへんって何ですか？」

「あ、いや、そうじゃなくて。そこらへんイマっていうんだよ。アイエムエーって書いてあるだろ、ドアとかに」

「え？あぁ、ほんとだ。ちょっと読みにくいけど」

「っていうかちゃんと買えた？」

「はい、大丈夫よ。ドトールに行けばいい？」

「荷物重いだろうから手伝うよ。さっきの入口に来て」

「あ、もうさっきのとこ来てるの」

「じゃあすぐ行く」といって店を出た。何となく走っていったら、紫苑は嬉しそうに手を振った。もう辺りはすっかり暗く、店の明かりが２人を照らす。

「先生、走って来てくれたのね、嬉しい。走ってる姿、カッコいいね」

俺は照れ笑いをした。蛍も俺のことを素直に褒めた。「別に走らなくてもいいのに」というような人の気持ちを撥ね付けるような女と付き合ったことがあるが、あれはすぐに別れてしまった。好意を素直に受け取らない女はダメだ。

「待たせたね」と素直な言葉が出るのも紫苑の言葉遣いのおかげだ。紫苑は確かに俺を上手く操っているかもしれない。まぁ、これは本人の素の性格なのだろうが。

両手一杯の荷物を持って車まで戻った。一旦車に荷物を置くと、少し光が丘を案内してほしいと紫苑が言った。しかしもう９時を過ぎている。駅周りはもう見たし、団地のほうも見た。あとはせいぜい公園くらいだが、もう暗いしな。朝じゃないと見通しも悪い。

「とりあえず今日は街は見せたし、レインも疲れただろ。白岡に戻ろう」

「いいんですか？」

「電車で帰すわけには行かないよ。遠回りだし、レインにこれ以上新しい刺激を与えるのもなんだしね」

「でも先生、ここ家でしょう？私たち送ってまた戻ってくるって面倒じゃないですか。な

んか迷惑かけてばっかりで流石に……」
「まぁ、そう思ってくれるだけで十分だよ。道、混んでるからどっかその辺で夕飯買って車で食べてもらえるかな」
「静は？」
「こうするつもりだったからもう食べたよ。マックとかでいい？というかレインって宗教がらみで食べられないものとかないの？牛肉とか」
「それは大丈夫だけど。うん、じゃあマックにする。レインに写真見せて嫌がったら止めるから」
　マックへ行き、メニューを指差す紫苑。アルカで説明を始める。内容を説明してるんだろうな。レインはうんうんと頷いて何か肯定的な口調で喋った。まぁ、入るんだろうな。俺は外で待っていた。紫苑とレインは５分ほどして戻ってきた。白い袋２つが大きなビニール袋に包まれている。

　夕飯を持って車へ戻った。紫苑は行儀が良く、歩きながら食べるようなことはしなかった。車に乗ると即効で車を走らせる。254 に出て、すぐ 446 を経由して 17 号新大宮バイパスに乗り換える。荒川を越える手前で埼玉に入る。白岡は北部のほうだからかなり北上することになる。さいたま市を通り、大宮を抜け、北区の辺りで 16 号とぶつかる。川越経由で 16 号を北上した場合もここにくるから、いわば合流地点だ。後は３号のほうに抜けていくだけ。17 号が無駄に西に蛇行しなければもっと早く行けるのにな。
「先生、運転ばかりで疲れませんか？私が我侭言って来てもらったから」
「疲れないっていったら嘘になるけど、これくらいなら大丈夫だよ」
「またここまで帰らせるって凄い気が引けます。いっそ泊まっていってくれればいいのに」
「それは……」と言ったら紫苑は慌ててポテトを口に咥えたまま首をぶるぶる振る。
「違います！変な意味で言ったんじゃないですよ！」
「いや、俺が言おうとしたのは、「それは親御さんに迷惑だろうな」なんだけど」
　すると紫苑はきょとんとして肩の力が抜けたようにシートに沈んでいった。少しガッカリしたような期待はずれのような、それでいて安心したかのような顔。
　このくらいの年の子にありがちな顔だ。セックスに興味があり、カレシもいる。十分セックスは可能性の範囲内にある。
　だが同時に不安も恐怖もある。身体的な痛みへの恐怖。精神的に自分が自分でなくなってしまうのではないかという変化への恐れ。そして女特有の妊娠への恐れ。
　好奇心と恐怖が天秤にかけられている。そんな多感な年頃だ。千回以上女とセックスして子供もできた俺と、ただの一度もセックスしたことのないまっさらな子供の恋愛。何て滑稽なものだろう。
　紫苑にとって一度のセックスがデータの全てとなる。だが、俺にとっては１パーミルにも満たないどうでも良いことなのだ。それが将に大人と子供の違いなのだろう。１パーミ

ルにもならない俺にとって紫苑を性的に意識することは少ない。逆に経験が０のくせに１回で100%の経験を得ようとしている紫苑は女なのに頻繁に思考を性に結びつける。

俺が見たところ、ふつうの女子高生は性についての禁忌が高く、性について潔癖で考えないようにしている節がある。紫苑はむしろ考えすぎで、性を意識しすぎだ。だが禁忌が低いという意味ではなく、むしろ「生涯に１人」という稀有な思想によって慎重になりすぎているため、過敏に反応しているのだろう。いずれにせよ、俺と彼女の温度差は大きい。

信号待ちをする。紫苑は後ろを向いてレインに食べ方を説明している。レインのところにもハンバーガーがあるのか、或いは見れば分かるからか、困難なく食べている。味についても文句を言わない。

紫苑の横顔を見る。子供だ。肌が特に。水を弾きそうだ。きめ細かく、艶やかだ。弾力に富み、痩せてるのにこけて見えない。ほどよい肉付きだ。やはり子供だなと思う。こいつをそのうち抱かなきゃいけないのかな。だるい。だってそうだよ、セックスして傷つくのは女だけじゃないんだからさ。セックスを通して幸せも不幸せも得た俺と、何も知らないこいつのどちらが幸せなんだろうかなどと考えたところで信号が青になった。

急いで行ったんだが、白岡に着いたときは10時台になっていた。途中俺の指示で親御さんに連絡させた。紫苑は「別に大丈夫ですよ」と言ってたが、教師としてというか年長者としてそういうわけにはいかない。

電話したら実際親は「分かった」と簡素だったというが、連絡がなければ心配にきまってる。あればこそ、こうして平穏でいられるのだ。そんなことも分からないのかと思ったが黙っていた。

家まで送ろうと思ったが、紫苑が夜の白岡周りを見せておきたいというので、車を駅向こうのパーキングに停めた。レインはここには慣れたようで、俺の腕にしがみつくのは止めた。ちょうど電車が来た時間のようで、人がどっと降りてくる。

「人、多いね」

「新興住宅地ですから。お店はないけど、人と車はあります」

駅を通って反対側に出て、まっすぐ歩く。遊歩道に差し掛かったところでレインが何か紫苑に話しかけた。紫苑は立ち止まって何か話すと、レインをベンチに座らせた。口を挟むまでもなく、用件があれば何か言ってくるだろう。立ってぼーっとしていた。運転のしっぱなしだったので暫くこうしていたい。タバコがほしいとこだねぇ。

「あの、先生？ちょっと……時間いいかなぁ」

「別にいいよ。紫苑は大丈夫？ていうかさ、ふだん何時に寝てるの？」

「12時には寝るよ」

「そうか、俺は２時ぐらいまで起きてるから大丈夫だよ」

「あのね、これ見てほしいんだけど」

差し出してきたのは一冊の本だった。紫苑の学生鞄の中に入れていたのだろう。

「装丁が随分立派だな。OED みたいだ」
「OED と違って表紙に何も書いてないけどね、これは」
「そういえばそうだな。じゃあ単に装丁のしっかりしたノートってとこか。どこで買ったの？」
「買ったんじゃなくて、レインのものなの」
「レイン？だって彼女は石しか持ってなかったじゃないか」
　チラッと見ると、レインはじっとこちらを見ている。そういえばレインはいつも話す人間の顔を見る。癖なのかアルバザードではそうするものなのか知らんが。
「レインがウチに来た次の日の朝にね、起きたら私の机の上にあったんだって」
「この子が見つけたのか。でも何ですぐ自分のだって思ったんだ？」
「レインのお父さんの部屋にあったものだからよ。私、その部屋を貸してもらって寝泊りしてたの。この本、見覚えあるわ」
「お父さんの部屋ねぇ。こういう本だらけだったの？」
「そうねぇ、本はたくさんってほどじゃなかったよ。書類が山になってた。始めは埃っぽくて……。掃除したら良くなったけど」
「本がそんなに多くないから逆に記憶に残ってたのか」
「それもあるけど、表紙が何もないのが特徴的だったし」
「なるほどね。向こうにいるとき読んでみたの？」
　ペラペラめくる。アルカが書いてあるが、読めない。字は習ったので厳密にいえば読むことはできるが意味はさっぱりだ。
「ううん。人のものだし。レインが言うにはね、お父さんがアルシアから持ってきたんじゃないかって。アルナの家には無かったし、カテージュの別荘でも見たことなかったからって」
「アルシアって確か２人がアルシェの連絡を待ってたところだったっけ」
「うん。魔杖ヴァルデが落ちたところね」
「で、この本が一体どうしたの？見た限り出版物ではないね。表紙は無地だし、中身の字も印刷されたものじゃない。日記か何か？」
　紫苑はレインを見てから俺を見る。
「それが……レインが言うには魔法の本らしいのよね」
「え？」タバコを咥えてたら落としていただろう「何だそれ」
「ここに書いてあるアルカ、魔法を使うための呪文なのよ。この本がアルシア産である傍証だわ」
「何で傍証なの？」
「アルシアには 11 魔将っていう魔道士たちがいたのよ」
「魔将って……紫苑のネーミング？」
「うん、訳語は私が付けたの」

　ゲームや漫画の見すぎだな。蛍そっくりだ。おおよそ魔法将軍とかいう意味なんだろう。くだらない。
「魔道士……魔法使いねぇ」
「魔法の話はフェンゼルのときにしたでしょ。地球になくてもアトラスにはある。ただそれだけのことよ」
「まぁ、別にからかってるわけじゃないよ。続けて」
「彼らはレインが生きている時代より遥かに昔、カコっていう時代の人なの」
「過去の人？」
「ちがくて。カコっていう時代の名前なの。彼らは優秀な魔道士で、アルシアで勢力を作ったの。魔法を中心とした武装集団よ。歴史的に見て、結果的に彼らは魔法学の始祖にもなったの。11 人の魔道士はそれまで系統付けられていなかった魔法を分類した。そしてその分類項目を１人がひとつずつ担当して鍛えたの」
「ふぅん、それぞれ得意な魔法が異なってたってわけか」
「アトラスでは魔法っていえばルティア国か、アルバザードのアルシアなの。だからアルシア産の魔法の本は曰くありげよね」
「はぁ。アルシアで製本すれば何でもいいの？」
「そういうことじゃなくて。これはレインのお父さんの字じゃないし、静が言ったように出版物でもないわ」
「誰かのノートってことにならないか」
「多分ね。内容の細かさからして魔法学に詳しい人のものよ」
「へぇ、もう少し見せて」
　ペラペラ見る。勿論アルカなど読めんが、俺の狙いは別だ。本は最初の方はびっしり書き込んである。雑感すると、一般書籍と変わらない。魔法の理論か何かが書かれているんだろうな。
　ページを進めるとレイアウトが変わっている。行がスカスカしがちだ。逆に言えば１行ごとが強調されている。これが呪文というやつか。
「紫苑、これが呪文なのかな」
「え？」紫苑は首を伸ばして俺の差し出したページを見る「凄い！教えてないのにアルカが分かるようになったんですか！？」
　そんなわけないだろ……。
「いや、何となくね。あと、これはわりと新しいな。少なくともカコという遥か昔の時代に作られたものじゃない。紙の痛みで分かる」
「さすが先生ですね。私はアルカで分かりました。カコの時代は凄い昔だし、そのころは古アルカっていう古い言葉を使っていたはずなんです。でもこれは現代の言葉で書かれてるから、少なくとも約 300 年以内の本なんです」
「へぇ、アルカは古いタイプから新しいものに分類されてまだそれしか経ってないんだ」

「いえ、学術的な分類じゃないんです。アルカは人工言語だから、作られたのがそれくらい前なんです」
「へぇ」俺は眉を上げる「アルカって人工言語だったのか。アルバザードの政府が作ったの？」
「いえ、アルディアの時代の人間と悪魔の戦争で、悪魔と闘ったアシェットが世界をひとつにするために創った言葉なんです」
「なんかそういうの聞いたことあるな。エスペラントだっけ。そういえば紫苑ってジュンクでそんな関連の本を読んでなかったっけ」
「はい、読んでました。エスペラントと違うのは神が加担したことです。神様がアシェットの案を採択して、世界中にアルカを告知したんです。だからあっさり広まりました。それでアシェットは首尾よく悪魔を倒せました」
「ふぅん、一種のデウスエクスマキナだな。言語の流布が急展開の結末を作ったとすると」
「デウス……？」紫苑は首を傾げた。文学や風俗関連には弱いのだろうか。
「まぁ、そのアシェットが活躍したのが 300 年ちょっと前ってわけだな。しかも世界中ってことはアルカがアトラス星の公用語なわけか。そりゃ便利だ」
「多様性は失われちゃってますけどね」
「外国語はないの？」
「事実上無いに等しいです。アルカの方言はありますが、共通語から理解できるものが多いです。それに彼らも共通語を使うことが多いので、世界中どこでもアルカだけで済みます」
「なんてコメントしていいのか分からんところだな。俺みたいに外国語のおかげで食えてる奴からすれば何ともありがた迷惑な世界だ」
「ふふ。レインが日本語覚えない頑固さは異言語への畏怖もあるんじゃないかなぁ」
「異言語は世界を繋がない非平和的存在と位置づけられているわけだ、歴史によって。それでレインは日本語も覚えたがらない。ふむ、アルティス教の教義も中々それなりの根拠があってできているんだな」
　俺はベンチに座った。紫苑が場所を空けて、俺は２人の間に座った。紫苑が俺の手に本を置く。２人がそれを覗き込む。こんな時間に少女らと「魔法の本」なんか見て何やってんだか俺は。
「で、魔法の本に話を戻そうか。現代のアルカで書いてあるなら 11 魔将とやらが書いたわけじゃないよな。じゃあ誰が書いたんだ？作者の名前は無いのか？」
「無いんです。序盤は魔法理論の説明で、中盤は呪文が書いてあって、後半は白紙です」
「そのようだね、読めないけど。まぁ、内容が魔法の本で、しかもアルシアから来たんじゃないかってことは分かった。問題は実際に魔法の本かどうかだ。試してみたの？」
「はい……」紫苑は俯き加減に答える。試したが何も起こらなかったということだろう。
「ま、アトラスじゃどうか知らないけど、地球じゃ使えないんじゃないの？」

「そうかも。魔法を使うにはヴィードっていう万物に潜在する力のうち、ラっていう力がないとダメなんです。でもこの世界にはひょっとしたらそれが無いのかも」
　落ち込み気味の紫苑。魔法を使いたかったのだろうか。とりあえず励ましておこう。
「朝起きたら机にあったってことは無意味なものじゃないと思うよ。誰が運んだのか分からんけどさ、何らかの意図があってのことだろ」
　紫苑に本を渡す。適当にページを開く。
「どんな風に魔法って使うの？向こうでやったみたみたいに唱えてよ」
「えぇ？恥ずかしいよ」
「真似するだけだから平気だろ。魔法を唱える姿を見てみたいし。ほらほら、どれでもいいから。手とか動かすの？」
「アトラスだと魔法は言葉で紡ぐものなんです。特殊な印を組む必要はありません。あ、でも印を組むとラの流れが良くなるらしいですけど、私はそこまで知らないんで真似できません。……読むだけですよ？」
「うんうん」
　すると紫苑は座ったまま咳払いをする。真剣な顔を作ると、響く声で魔法を唱えた。
ᘐᑕc ɮel ᐸ-c ᖻaᐱ ᐸ-ᔑ h-ᔑ e ᓀaaᑐ ᔑe ᐸcᑕ eᐱVc -l -ᐱ Vɔl V-ᐱɮ ᔑeᑕl -ᐱᑕ,, ᑕc, ᐸ-c e ᐸ-cl-ᖵᘐ
「へぇ、サマになってるじゃな――」
　俺の声に被るように、ボッっと音を立て、夜闇に火柱が上がった。
「――！」
　火柱だ。一瞬、電灯の明かりかと思った。空中に舞い上がっている。それこそ俺の身長はあろうかという火柱が空中に浮かんでいる……。
　キャッと叫ぶ紫苑とレイン。思わず本を落としてしまう。地面に落ちた本が閉じると同時に火柱は消えた。夜闇が戻る。そして静寂が訪れる。
　俺は何と言っていいか分からず、ふっと鼻で笑った。
「で……できたじゃん、魔法」
「……みたい、ですね」
　呆然とする紫苑。話を聞くに初めてではないそうだが、それでも驚きは尋常でないようだ。
ᘐᑕᖻa -ᔑcᑐ ᐳe -ᔑᑕ, ᒐcɔᐱᖵ ᑕcᐱᑐ-ᖵᘐ
ᘐᖻ-....ᑕeᑕ ᐱɔᐱ ᐱ- ᐱcᑐ ᑕcᐱᑐ- eᐱᑕɔ ᐱɔᐱ ᔑeᐱᒍ ᒍeᐱ ᐳcᖻa aᘐ
ᘐᑕᖻa -ᔑ-ᑕ 0eᔕ ᑕa, ᑕaᔕ e ᐸ-cl-ᔕᘐ
ᘐᖻ-, e ᐸ-cl-,, ɮccᐱ, leᐱ- ᒍeᔑcᑐ ᑕa eᑕ ᒐ-ᐱ lec ᑕ -ᔑᑕᘐ
ᘐᖻ-, lec ᑕ -ᔑᑕᘐ
ᘐᑕeᑕ, lecᐱ, ᐱɔᐱ ɮ-ᒍ leᐱ- -ᐱᒐ ᑕa leᒐ lec e lecᐱ ᐳcl ᑕa eᑕ eᔑcᒍ ᐸccᐱ-eᐱ ᑕᖻaᘐ
ᘐlec e lecᐱ....ᘐ
「ね、静。この本、レインの書って名前にしようよ。お父さんの形見なんだし」

　え、魔法が出たことに対する話じゃなかったのか？いつの間に話が飛躍したんだ。俺は生まれて初めて手品以外で火柱が立つのを見て、まだドキドキしてるというのに。
「良いんじゃない？じゃあ１ページ目にタイトル付けておきなよ」
「うん」と言って紫苑は鞄からペンを取り出す。変わったペンだ。そういえば塾でもジュンクでもいつもあのペンだ。黒に少し緑がかったような色の。
Ꮾlecᐱ，ᑕᖻ -ᒐᑕ eᔑᑕ ᑕə-ᐱ -ᑕə，-ᑕəᏮ
　レインは紫苑の指示に従って名を書いた。
「ついでに日本語名も併記しといたらどうだ、記念にさ」
Ꮾᐱee，lə ɮ-ᔑ ᑕᖻ -ᒐᑕ eᔑᑕ eᔑᑕel ᑕ-ᐱᏮ
Ꮾeᔑᑕ eᔑᑕelẟ ᐱchɔᐱɣɔẟ ϶-ᔑᔑɔ，ᑕ-l ᔑɔl ᑕᖻ -ᒐᑕ ᑕə ᚷcl ᐱɔᐱ ᔑɔ Vcl Ꮾ
Ꮾ϶-ᔑᔑɔᏮ と言って紫苑はレインから本を受け取ると、書こうとして手を止めた。少し考えてから書いたのは『玲音の書』という文字だった。
「玲音って……レインって読むの？」
「うん、折角だから漢字の名前を付けてあげようと思って。カタカナじゃ味気ないもん」
「なるほどね。綺麗な当て字だな。可愛いんじゃないか、レインっぽくて」
「えへへ」と紫苑は満足気だ。当のレインも日本語の文字を不思議そうに見ていたが、その目は好意的なものだった。
「ところで、魔法が出たことについてなんだが。驚かないのか？」
「驚いたよぉ。でもよく考えれば私、２回目だしね。ありえない現実には慣れてるから」
「俺は初心者だから興奮冷めやらんのだがね」
「そうね。先生もやってみます？」と渡してくる「字は教えたし、アクセントの仕組みも教えましたよね。それに、私たちの会話でアルカの口調って覚えたでしょ」
「その口調って女言葉じゃないのか？」
「呪文なので、それはないです」
「そうか。じゃあ紫苑が言ったみたいに読めば良いんだな」
　辺りに人が居ないのを見計らって俺は立ち上がった。
Ꮾᑕc ɮel ᚲ-c ᖻəᐱ ᚲ-ᔑ h-ᔑ e ᑎəəᑐ ᔑe ᚲcᑕ eᐱVc -l -ᐱ Vɔl V-ᐱɮ ᔑeᑕl -ᐱᑕ,, ᑕc，ᚲ-c e ᚲ-cl-ᚴᏮ
　しかし何も起こらない。
「ダメだな。発音の問題か。たどたどしかったからかな」
　ため息を付く。ちょっと魔法が使えるんじゃないかと期待してたんだが、どうもアルカを喋れない俺に神とやらは微笑まないようだ。
「何でだろう……もしかしたら私が魔法使いだからかもしれませんよ。ほら、私、ヴァルデも使えたじゃないですか。それに、男の人のほうが魔力は弱いらしいですよ。力が無い代わりに女は魔力が強いみたいです」
「そっか。平等で結構なことだな」若干拗ねながらページをぱらぱら捲る。どれを読んだって無理なものは無理だろうな。それに、あれだけ言わせておいて不発に終わったんでは

恥ずかしくてもう一度やる気にはなれない。
　ページが後半にさしかかってしまい、白紙が続く。前のページに戻ろうとしたところで、俺は目を疑った。文字が……赤い文字が浮き上がってきたのだ。あぶり出しみたいな特殊仕様なのだろうか。つくづく変わった本だ。文字はアルカのものだが、字のクセが明らかに異なる。それにこの炎が燃えるような赤い字は……先ほどの火柱と関連しているのか。魔法を唱えられたら次のレベルの魔法が浮かび上がるということだろう。ありがちだ。今度は火の海でも作るのか。
「なぁ、紫苑。これは本当に魔法の本だな。新しく文字が出てきたぞ。多分もっと凄い新しい魔法だと思う」
　差し出すと、紫苑が「何ですか？」といって首を伸ばしてくる。
「えーと、短いな……。-ᘗᐢeᔿ って書いてある」
　すると紫苑は「それ、凄い魔法ですよ！」と言って立ち上がった。俺は紫苑に本を見せながら続きを読んだ。レインも -ᘗᐢeᔿ という俺の言葉に反応して立ち上がる。
「-ᘗᐢeᔿ……えーと、ᘗᔿccl- ᐡ -Vɔ> ℓel ∪elᐢeᔿ――だってよ」
「え？」紫苑の顔が一瞬で凍りつく。
「何？」
　見ると紫苑もレインも眉を顰めて硬直している。
　どうしたのと問う間もなく、玲音の書が強烈な光を放った。何だ！？光の魔法か何かか。俺は咄嗟に本をベンチに投げた。だが本は開いたまま光を放っている。
「紫苑、どうしたんだ。一体いまの文はどういう意味なんだ？」
　紫苑の震えた唇が小さく呟いた。

「召喚――狼を統べるもの……シェルテス」

「シェルテス？」
「ごめんなさい、私が悪いの。レインがここに来た理由を説明してなかったから」
　そういえば聞いていないな。後で良いと思っていたし。
「レインはね、月の悪魔シェルテスに襲われて私のところへ避難してきたの」
「えっ！？悪魔！？」
「どうしよう先生……私たち、悪魔を召喚しちゃったみたい」
「どうしようって……じゃあこうするまでだ！」
　俺は立ちくらみそうな紫苑を支える代わりに、目の前のベンチに飛び掛った。光を出す玲音の書を鷲掴みにすると、あらんかぎりの力で本を閉じた。あまりに抵抗無く閉じたため、バンッという大きな音がして本は閉じた。光はなくなり、辺りに静寂が戻った。
「さっきの火の柱と同じだろ。閉じれば消えるんだ」
　辺りを見回すと道路の向こうで誰かが立っていてビクっとした。だが、ただのサラリー

マンが光ってたベンチを不審がっただけのようで、目が合ったらさっさと歩いていってしまった。悪魔らしき影は見当たらない。上空も見たが、何も無い。
「どうやらセーフだったみたいだな。でもまだ呪文が解けてないかもしれないから、これを開くのはもう止めたほうが良さそうだな」
　紫苑は頷いた。レインまで日本語が分からないだろうにこくこく頷いている。
ᘐᑦᓀ ᑦcl ∀-ᓄᐱ ᑦcᐱᒣ-, ᒐcZᒣ-,, ᛦ-c ᑦcᐱ ᒣᴐᒣ -ᔑeᚴᘐ
「勇敢でカッコいいって。アルシェみたいだって。私もそう思う。ごめんなさい、私、立ちすくむばかりで」
「２人が無事なら良かったよ」
　紫苑は髪を撫でる「おかしいな。私、前だったら真っ先に本を閉じてたと思うのよ。恋愛してすっかり女の子になっちゃったのかな」
「まぁ、それくらいのほうが可愛くていいよ。しかし本が反応したから俺も魔法使いということでいいのかね」
「それは分からないけど……シェルテスは反応したみたいね」
「あの文字を浮かべたのはシェルテスの仕業なのかな」
「多分。力が弱まっててこっちに来れないのよ、恐らく。或いは来てても私たちを探せないでいるか」
「後者だとしたら、俺たちを探してる途中で玲音の書の大きな魔力を嗅ぎつけ、血文字を出したってわけか」
「多分。さっきの炎で気付いたのかもね、もし来てたらだけど。もし静がアルカを読まなくても、血文字が浮かび上がれば召喚が自動的に成立する手筈だったのかも」
「そうだろうな。アルカを知らない俺だからのうのうと読み上げたわけで、紫苑だったら召喚魔法なんて読むはずがないもんな。あの文を読まなきゃこっちに来れないんだとしたら無意味だ。アルカ読める紫苑がそんな危険な文を口にするはずがない。どうやら俺が魔法使いという線はないな」
　俺はもう一度辺りを見回した。近くに人がいなくて良かった。
「とにかく紫苑たちは家に帰りな。送ってくから」
　歩き出すと、２人は黙って付いてくる。
「その本、バンドを巻いて開かないようにしといたらどうだ？」
「そうね……」
「魔法の本っていうのは面白いんだけど、危なっかしくてしょうがない。ところでさっきの話の続きなんだが、何でレインはシェルテスってのに襲われたんだ？」
　紫苑は事情を説明してきた。よく整理されていて分かりやすかった。俺はもはや紫苑が言う突拍子もないことに一々驚かなくなっていた。これが慣れというものなのだろうな。紫苑が説明をしているときに家についてしまったので、近くの小さな公園で話を聞いた。

「……じゃあ、レインはどうすればいいんだ。シェルテスから逃げて地球に来たって……いつ帰れるか分からないし、帰ったらシェルテスがいるかもしれないし、そもそも帰り方も分からないわけだよな」
「そうなの。向こうで神様がシェルテスを討伐してくれればメルティアが迎えにきてくれるんじゃないかななんて甘い考えを抱いてるけど」
「メルティアは紫苑に好意的なようだから、その可能性は無くもないな。それに同じ悪魔だからといってシェルテスの味方をするわけでもないようだし。問題は神に見つからないようにシェルテスは動いてるってことだよな。いつまで経っても見つからないんじゃないか？」
　紫苑は「うん」と言って俯く。紫苑もどうしたらいいか分からないようだ。
「そもそもさ、メルティアに神を連れてきてもらえば良いんじゃないか。神にレインが持ち逃げしたドルテっていうあの石を渡せばあとは神がどうにかしてくれるんじゃないか。メルティアはなぜ神を呼ばなかったんだろう」
「分からない……何か事情があったのかも。それに、そもそもメルティアは私たちの味方と決まったわけじゃないわ。レインを逃がしてくれたのは確かだけど」
　紫苑につられてレインを見る。日本語が分からないレインは会話に参加するのを諦めてさっきから滑り台で遊んでいる。
「アルバザードの奴らって自分の事でもあんなに他人事みたいな態度なのか？」
「ううん。かなり真面目な人たちよ。レインも。多分、落ち着かないのよ、怖くて。じっとしてられないんだわ」
　レインは視線に気付いてとことこ近寄ってきた。
「この子は何かあると紫苑が助けてくれるって考えてるのかな」
「助け合う仲間だって思ってるんじゃないかな。私もレインもアルシェも死線をくぐってきた仲間だから。レインは体力ないけど、頭があるからね」
「紫苑の方が賢そうに見えるけどな。この子はちょっと幼稚にみえる」
　日本語が分からないのを良いことに本音を次から次へとぶちまける。
「カテージュを出た後ね、私とアルシェは短気になってアルナへ帰ろうとしたの。でもレインは用心深くて冷静でね、アルシアに行くときの計画なんかも全部この子が立てたのよ。静も短気なほうでしょう？この子ののんびりしたところ、そのうち重要だって思うわよ」
「ふん」俺はざっと砂を蹴った「蛍みたいにトロいだけじゃないと良いんだがな」
「先生……」
「……悪い。レインがあまりに紫苑に任せきりだから。お前が危険に巻き込まれてるのが俺としては気に食わないんだよ」
「そんな風に考えてくれてたの？」紫苑は嬉しそうな顔をした。
「そりゃそうだよ、神とか悪魔とか。もうたくさんだ」
　紫苑は下を向いた。

「たくさんか……そうだよね。私も。でもレインのことは見捨てられない。レインがいなかったら私はアトラスで死んでたわ。先生はレインとは関係ないし、私、一人で片付ける」
「いや、そういう意味で言ったんじゃないよ。紫苑が心配なだけだって言っただろ」
「でも、私も貴方が好きだもん。私の我侭で危ない目に合わせたくないの」
　玲音の書を胸にぎゅっと抱く紫苑。泣きそうだ……。レインは紫苑の顔を見ると、紫苑を守るように俺を睨んできた。その腕を紫苑が掴む。
ᘐ(ee，lecʌ„ ʌɔʌ eʌ-ᔑ ›cl lₐ e(ʌcc(ᔑ-ᵔ - ʌɔʌᘐ
　レインは頷くと俺から目を離した。言葉が通じないとは本当に不便なものだな。
「まぁ、まだ危ないとは決まってないだろ。限りなく嫌な予感はするけどさ。もし危なくなったら……」
　なったら……俺はどうするんだろう。言葉を止めた。
　ガキの戯言を写し取ったようなティーンズノベルならきっと軽率に彼女のことを守るなどとほざくのだろう。そして実際に作中で守ってやるのだろう。だがそれは小説だからできることだ。キャラは作り物だし、作者はキャラを戦地に追い込むだけだ。そして主人公はいつも死線を無事くぐりぬける。決して負けない。死なない。殺されない。
　だがこれは物語ではないし、仮にそうだとしても俺は物語の主人公ではないかもしれない。キャラと違って俺には生活もリアルな恐怖もある。出会って間もない彼女のために命を晒すというのか。
　そう思ったとき、紫苑の凄さが分かった。紫苑は出会ったばかりの少女を強盗から助け、その後もその少女レインを何度も守り、最後は神や悪魔まで巻き込んで政府高官を倒した。聞けば銃撃を受け、魔法まで撃たれたそうじゃないか。雨の中、杖を持って都市から都市へ移動したり、指名手配を食らったり。それでもレインを守り続けてきた。その過程でレインもまた紫苑を支えてきた。……そんなの 17 のガキのすることじゃない。でも、紫苑はそうしたんだ。何の縁もない人のために。
「先生……？」紫苑が俺の顔を覗くが、俺は考え込んでいた。
　まてよ。逆に俺は一体誰のためなら動くんだ？縁って何だ？出会って恋愛して結婚して子供まで作ったというのに蛍は俺を裏切った。女というのは子供を腹に宿しながら相手を裏切ることができる生き物だ。縁といえば蛍などこれ以上ない縁だ。戸籍にまで保障された強い縁だった。それなのに脆くも崩れ去った。今ではどうでもいい人間同士になっている。あれだけ愛し合っても、もうお互いが死のうと何とも思わない関係になっている。妻であの結果なら、紫苑のような短い恋人は尚更縁などない。もっと酷い裏切りを受けるかもしれない。そう思ってた。俺はずっとそう思ってた。
　多分、それは正しい。紫苑だって蛍のように裏切るかもしれないし、俺が紫苑を裏切るかもしれない。でも、そんな打算をして動かないままだと、いつまで経っても何も変わらない。いつか誰かを守ってやるために力だけ蓄え続けて結局放出しないまま終わってしまう。

紫苑だってレインのことを始めから信用していたわけじゃあるまい。俺のことだってそうだ。死線とやらを潜り抜けて、その過程で自然とできあがったのがレインとの信頼なんだ。そうか……信頼は作るものじゃなくてできるものか。かといってできるのを待っていてもできないという非常に厄介なものだ。始めの一歩は自分から踏み出さないといけないのか。

俺は蛍にどう接してきただろう。いつも弱腰に、自分が傷つかないようにしていただけだったんじゃないか。結婚なんて紙を出せばできる。子供なんてセックスすればできる。縁なんていうほど大したもんじゃなかったんだ。

縁を築いたのは付き合おうと互いに言い合ったとき。

あの池のほとり。

あそこでの出来事に他ならない。

俺はあのとき以来、蛍と信頼を築いてきたか。ただ蛍を失ったときの辛さを想定して、あいつにあまり入れ込まないように冷たく接していただけだ。それでも……あれでも俺にしてみればかなり入れ込んだほうだった。だから中途半端な付き合いをして、中途半端に別れ、中途半端に傷ついた。

「先生？」

「ん、すまん。なんでもない」

「なんでもありますよ……」

「え？」

「蛍さん、でしょ？顔で分かるわ」

「……ごめん」

「あやまらないで。子供のこと考えてたの？俺にもしものことがあったらどうしようって？」

「え……いや、それは全然考えなかったな」

「そうなの？子供のことが気がかりなのかと思った。蛍さん本人なのね」

「そりゃ……俺は子供って言っても実物を見てないからな。レインを見るまでアトラスの実感が湧かなかったのと同じだよ。会って抱けば愛情も湧くのかもしれないけど」

「そう……ですよね」

「蛍との経験は色々俺に教えてくれたよ。おかげで紫苑みたいな可愛い彼女もできたしな」

俺は笑うが、紫苑は俺に合わせて苦笑いをするだけだ。きっと俺の笑いも苦笑いになっていたのだろう。

「危ない目にあったらどうするかはそのときの咄嗟の判断に委ねるしかないな。俺は漫画の登場人物じゃない。気安く命をかけるなんて台詞は吐けんよ。情けないカレシで悪いな」

「ううん。正直な人が彼氏で嬉しいです」

俺はすーっと鼻から息を吐いた。

「とりあえず今日は帰りなさい。レインの事情は良く分かった。こちらからは何ともしが

たいが、何か方策がないか俺なりに考えてみるから」
「はい」と言って公園を出ようとしたところで紫苑は振り向いた「あの……お別れ前に」
「ん？あぁ……」と言ったはいいが、相手の要求が分からない。抱けなのかキスしろなのか。というか別にどちらでも俺の好きなようにすればいいのか。
「でもさ、レインが見てるだろ」
「さみしいです。一緒にいたのに触れられないなんて。レインを家に戻してからって言ったら先生帰っちゃうでしょ？」
「うん……」俺は頭を掻いた。チラッとレインを見るが、ぼーっとこちらを見ているだけだ。俺は紫苑に近寄ると、肩に手を置いて髪を撫でた。紫苑は安らいだように微笑み、目を細める。右手を頭の後ろに回して手前に寄せ、抱きしめた。紫苑は俺の腰に手を回してぎゅっと引き寄せた。背中に玲音の書の感触がする。暫く髪を撫でていたら、紫苑は頬を摺り寄せてきた。この仕草が可愛い。そして俺の手に唇を歩かせた。柔らかな唇で手首から手まで撫でられて、くすぐったい。そういえば蛍は俺がこうしてやると喜んでいたし、蛍も俺にこうしてきたな。俺は紫苑を両腕でぎゅっと抱くと、顎を肩に乗せて長い髪の中に鼻先を突っ込んだ。深く呼吸をすると清潔な匂いがして、心が休まる。蛍にはいかんともしがたい性欲を感じたが、紫苑には感じない。魅力がないというわけではない。恐らく俺が年を取ったのだろう。鼻の先を右耳にあてがったら小声が漏れて、ピクッとした。あぁ、これ以上はまずいなと思って俺は身を離そうとしたが、紫苑は小首を持ち上げて俺の頭を両手で撫でるように抱えてきた。まぁいいかと思って俺はそのままキスをした。唇を離すと紫苑は暫く目を瞑って唇を微かに開けたまま吐息を漏らしていた。
「おやすみ」
紫苑はゆっくりと２回頷いた。目がとろんとしている。蛍みたいだ。というか、こうでない反応の女を見たことがない。多分、俺が付き合うタイプが一定だからだろうな。
「おやすみなさい……先生」
俺は紫苑の頭を撫でて、そのまま公園を後にした。去り際にレインの顔を見たら、赤くなって恥ずかしそうに下を向いて、俺と目を合わせなかった。アルバザードの人間もこういうときは同じように恥ずかしがるものなんだな。
この後、紫苑はレインと何を話すのだろう。少し気になった。後ろから声はしない。まだ呆けているのだろう。レインの声も不思議としない。

駅を越えて車に戻ると 12 時近かった。紫苑はちゃんと明日の授業に来るだろうか。何だかシェルテスの話を聞いていたらタダごとではない予感がしてきた。異世界から少女がやってきた時点で何かあるだろうことは予想されるが、まさか悪魔に追われてたとはな。
ふっと甘い匂いがした。何だろう。先ほどまで車にいた紫苑たちの残り香ではない。もっと甘い、フルーティな感じの。……そうか、俺の唇だ。紫苑のリップが移ったんだ。蛍もそうだった。横を歩いて話しているだけで風向きによってはリップの甘い香を流してく

れた。
　どうして一日中デートして殆ど徹夜で歯磨きもしない状況でその清潔さを保てるのだろうとずっと不思議だった。多分、恋のパワーなんだろうな。それは確信している。恋の力は凄い。徹夜も耐えられるし、病気にもならない。この恩恵は特に女が受けるのではないか。真性の処女だった蛍は殊更恋の力が凄まじかった。紫苑もその点では同じなのだろう。
　ただ、俺の方は変わってしまったがな。子供もできて離婚もすれば、あのときのような素直なときめきは感じない。甘美な気持ちにセーブがかかる。どこか冷静で、醒めている。こういう自分が凄く嫌いだ。損をしてると思う。

2006 / 07 / 23

　私は夏期講習を受けるために、電車に乗っていた。レインも少しは日本に慣れてきたし、今日は一緒に行動することにした。昨日のシェルテスの血文字のこともあるから一人にしておくのは不安だ。
　レインにとって日本の電車は初めてだ。アルバザードのものと違うので興味深そうにしている。満員電車でなくて良かった。アルバザードの感覚だとありえないものだからさぞや不安がったことだろう。
　電車の中吊りに気を取られているみたい。でも何て書いてあるかは読めない。さっきから男性誌の表紙を飾る水着姿の女の子の写真をチラチラ見ている。何でこんなところに水着の子が？と思っているんだろうな。アルバザードじゃ考えられないもんな。私がレインを見るとサッと目をそらして違う広告を見ていたような素振りをする。多分、気にしない振りをしたいんだろうな。
　レインにとって昨日の私と先生のキスは刺激的だったみたい。てゆうか私にとってもくらくらして倒れるんじゃないかってくらい刺激的だったけど。先生が帰った後、レインは何も言わずに赤くなっていた。私、貴方といない間にちょっと大人になったのよっていう顔がしたくて、くらくらしてるのをできるだけ隠した。
　先生とはいつもあんなことしてるのかと聞かれた。ちょっと見栄が張りたくて、そうねと曖昧に肯定した。ほんとはこないだファーストキスしたばかりだけど。レインは身体が熱くなったと言っていた。静は抱きしめるのが巧いけど、日本人はみんなああなのかなんて言ってた。そっか、静って巧いんだ。アルバザードの人の方が抱き合うことは多いはず。その国の人にそう思われるなんてね。でも、上手くなったのって蛍さんが原因なんだよな……気に食わない。
　しかし流石は女の子。レインは先生がいなくなってから矢継ぎ早に質問をしてきた。結局先生が帰ってから 20 分くらいはあそこの公園で話してた。レインには蛍さんのこと言ってなかったから伝えた。お父さんたちと話したときに一緒にいたけど、日本語だから理解してないだろうし。

静が前に結婚していたこと、子供ができて奥さんがいなくなってしまったこと、子供は産まれたらしいこと、そして離婚したこと。その後生徒の私と出会って付き合ったこと。レインは日本じゃ静の年だとそれが当然なのかと聞いてきた。勿論答えはノー。むしろ千か万に一人くらいじゃないかといったら驚いていた。

どうも離婚はアルバザードでも心象悪いようで、レインは私の心配をしてきた。静は良い人に見えたけど、実は悪い人なんじゃないかとか。どうして離婚したのか何度も聞いてきた。知らないといったら、頼んでもないのにあれこれと可能性を列挙してきた。

大酒飲み・違法ギャンブル好き・浮気性・暴力を振るう・麻薬に手を出す・女癖が悪い・借金癖がある・働かない等など。なんだかこの辺の事情はアルバザードでも変わらないのかな。私はしつこいレインを黙らせるために、「多分、お互い好きじゃなくなったのよ」とだけ返した。そんな理由じゃ子供がかわいそうとレインは呟いた。

家に帰ってベッドに入って明かりを消してから、またその話をしてきた。じゃあ紫苑は静のどこが好きで付き合ったのって。運命の人だと思ったのよって答えた。気付いたら好きになってたの。話せる相手じゃなくて、男の人として。

そしたらレインは何の性質を好きになったのかと聞いてきた。アルバザードの人間は細かくて困る。私はうーんと考えて、カッコいいし、頭良いし、気が利くし、優しいし、私を甘やかさない適度な厳しさを持ってて、そして傷つきやすくて脆いところが女として放っておけないと答えたら、分かる気がすると言っていた。

納得したかと思ったら今度はアルシェの話になった。レインは私がアルシェのことを好きなんじゃないかって思ってたそうだ。好きかと思ったけど違ったと答えたらやけに嬉しそうに安心した顔をしていた。あぁ、やはりそういうことかと私は理解した。でもアルシェの安否の話になったら急に２人とも口が重くなって、気付いたら眠っていた。

電車が止まる。川越だ。レインの手を引いて降りると、改札へ向かう。

ᘐʌee ∪cɔʌ，leʌ- -ʔᑐ ᔑcl ∪cZʔ- c> ᑕcᔑ ᔑeᑐeᵹᘓ

ᘐᔑɔl ʌɔʌ hɔᑐᘓ

ᘐʌɔʌ l-ᑐ ∪cʌ - ᑕelʔcᵹ ʌɔʌ ᑐ-ʌ ∪-ᑕᑐ l-ʌ - ᔑ-c> l--ᑐᘓ

ᘐᑐe- ᑐЧₔ -lʌ- ᔑeʌ ʌchɔʌɣɔᵲ lecʌ，ᑐЧₔ ∪- ∪eʌ-ᑐe ᑕlɔ ʌɔʌ ᑐeᔑ ∪-∪ l--ᑐᘓ

ᘐh-c h-c，-ʔ ᑐЧₔ ᑐeᔑ ∪-∪ l--ᑐ ∪el ᑕel-ʌ ɔ ᑐc-ʌᵹᘓ

ᘐh-ᔑᵹ --，lec> ɔ ᔑeᑕ，h-ɔᘓ

ᘐʌɔʌ ∪-ᔑ ᑐЧₔ ᑕel ᔑeʌ ₔ >cl ᑐЧₔ ʌ- ᔑɔ- ᑐeₔ ᘐ-，∪cZʔ-，ᔑeʌ ᑕ-∪ ʌɔʌ ᔑe ʌccᑐ ʔɔʔ ᑐɔ∪el,, ᔑee ᔑeʌ ∪cʔᔑ ʌɔʌ eʌᑐɔ ʌɔʌ ᑕc-ʌᔑ，∪-ʌ∪-ᘓ ，h-ʌᵹᘓ

「レイン！」

「ᔑ>ᔑ> ごめんなさい」と言うがサッパリ悪びれた様子はない。全く、私をからかうダシにするときはそういう話でも恥ずかしくないのね。それとも元々こういう子なのだろうか。私がアルシェに気がなかったと知ってから何となく私の恋愛への態度が違う。応援的とい

うか何というか……。

クレアモールの方へ向かい、手前でアトレを通る。左手にエクセルシオールがあるので覗いてみると、もうやってる。早いなぁ。ここでいいや。レインを中に連れて行き、お金を渡して買い方を教えた。買い物の仕方は大体どの店でも同じだから大丈夫なはず。こないだリヴィンで買い物したときに見てるから、この子ならできるはず。

ᘐᑕЧə lーᓄ ᑕɔδᘑ

レインはメニューを見て気に入ったものを指差す。

ᘐɘ-ᔑᔑɔ，ᔑɔᐱ ᑕЧə ᑕ-ə ᑕə ᑐɔᑐᑐɔ ᑕə ɣcl ᑕ-ᑕᑕ- ᐱɔᐱ,, leᔑ ᑕЧə ᔑɔ -ᓄ eᑕ Sc leᔑ ᑕЧə lーᓄ -l -ᑕe-ᐱ，ᔑe< ᑕə >-ɣl ᔑɔɔᔑ - lə，ɘ-ᔑᔑɔδᘑ

ᘐ-lᐱ-ᖵ -ᑕᑕe，ᐱɔᐱ,, -ᑕᑕe，ᐱɔᐱ ᘐ胸に千円札を抱えるレイン。

ᘐЧ-ᐱ ɸeeᑐ ᓗ- lЧə,, >-l，ᑕЧə leeV ᓗcᐱ -ləəᑕ -ᑕə -lᑐ-lᑕ ᐱɔᐱ ᑐeᑐᑐɔ ᑕЧə，ɘ-ᔑᔑɔδᘑ

ᘐЧ-，ᐱɔᐱ V-ᑕ <-ᐱ ᑕЧəᘑ

昨日レインに買ってあげた時計を指差す。謎の腕輪の横にこの防水時計をはめさせている。文字盤に何も書いてない簡素なものを買った。でないと却って混乱しそうだからだ。

ᘐᐱɔᐱ ləᐱ- ᔑcl -ᑕə c> ᔑecᐱelᔑ Vc-,, ᔑɔᐱ ᑕЧə V-ᑕ ᐱɔᐱ -lᑐ-lᑕ ᑕəᘑ

ᘐЧ-，ᑕЧə <el ᔑ-ᐱ，ᓗcɔᐱ,, Ч-ᐱ ᔑeᐱᑕ-ᐱᑕᘑ

私はにこりとしてレインをカウンターへ促した。レインは店員に向かって話しかけた。

ᘐᔑɔɔᐱɔ，ᐱɔᐱ lーᓄ ᑕə，ᔑeᑕ,, ᑕə >-ɣl eᑕ ᓗ-ᐱ -<eᑕ eЧɔδᘑ

「えと、こちらで宜しいでしょうか」

後ろにいる私に明らかにヘルプの視線を送る店員。

ᘐlecᐱ，lə ᔑeᐱᔑ Vcl -ᔑᑐ- >-ᐱ -ᑕə eᑕ ᐱchɔᐱ,, ᑕЧə ᔑeᐱ Sc ᑕcɔ leᔑ ᑕЧə lーᓄ Vecl ᑕЧə >-lー-ɮc ləᖵᘑ

するとレインは「あやー」と言って口を押さえた。人差し指でメニューを指差し、お札を出してコクコク頷く。店員は理解したのかしないのか、一応レインの希望のものを会計した。きちんと客のニーズに答え、分からないだろうからとお釣りをごまかしたりしないところがいかにも日本人らしい。外国で日本人が旅をすればあれこれ罠をはって騙そうとしてくるが、それとは対照的だ。私が日本人だったのはレインにとっても良かったのではないか。

レインを席まで連れていくと、私は店を後にした。レインが不安そうな顔をする。そりゃそうだ、私だってアトラスでおいてけぼりにされたことなんかない。胸がズキっとしたけど、数時間ここに座らせておくだけだ。誘拐されることもないし、言葉も分からないのでナンパに付いていくこともないだろう。店側も言葉が喋れないからといって追い出したり警察を呼んだりするわけがないし。

店を出てもレインは私をじーっと見ていた。私が動く方へ目を向ける。飼い猫みたいな子ね、猫飼ったことないけど。

歩いて塾へ入ると、まず静を探した。授業の準備をしているのだろう、いなかった。とりあえず今日のことを伝えようと思ったんだけど、メールのほうがいいかな。

教室に入って暫く単語帳を眺めていたら授業が始まって静が入ってきた。ふいに不思議な気持ちになった。こうしていると本当に先生なのに、その人が私の彼氏で、つい昨日の夜、私の家のとこにいたんだ。そして私を優しく抱きしめてキスしてくれた。昨日の光景を思い出したらうっとりしてきた。ごめんね、先生。何か説明してるみたいだけど、私、いまそれどころじゃないの。

結局夏期講習に何の意味があるんだろうか。私は静のことをぼーっと見て終わった。頭には何も残っていない。ま、受験生が習う程度のことはとっくに入ってるから良いんだけどね。授業が終わってわざとゆっくり片付ける。静と話そうと思って遅くしているのだが、どうも生徒が引かない。最後まで残っている男子がいる。

「あ……」

よく見るとウチの生徒だ。しかも前に私に告白してきた子だ。まず……確か、あの子って私の先生への想いに勘付いてたんじゃなかったっけ。しかしここまで残っているのは質問がある生徒だけだ。今更何も無かったかのように質問もせずに出て行ってしまっては逆に先生を意識していることを広告してしまうようなものだ。私はただ質問をしたいだけの生徒でなければならない。

先生は後ろ向きでホワイトボードを消している。私の彼氏が目の前で何でもないかのように教師として働いている。そしてそれを邪魔な男の子が監視している。微妙な空気だ。

「水月先生」

この呼び方、私にとってもはやへン。先生は「ん？質問？」といって振り向く。私のことなど苗字さえ覚えてないかのような素振りだ。

「はい、この問題なんですケド……」

無難に何でもない質問を終えると私は世間話もせずに愛想無く「ありがとうございました」と答えて去った。部屋を出るときに肩が凝ったのをアピールするために肩を上げたり首を回したりして軽いストレッチをした。普段はしても、好きな男の前でこんなことする女子はいない。これで彼は私の先生への気持ちを誤解だと考えるはずだ。しかし邪魔なことを……。

ふと廊下で立ち止まった。邪魔っていうのは言いすぎかもね。向こうは好意を持ってくれてるわけだし。いくら静に心酔してて他の男の子に一切興味がないっていっても、邪魔とまで思っては失礼な気がする。私はこういう風に考えるところが男っぽい気がする。

「シオン！」

急に後ろから呼び止められてドキっとした。ちょっと先生、まだあの男の子がいるっていうのにどういうつもり？振り返るとしかしそこには例の男の子。これから部活だろうか、制服を着ているがサブバックを抱えている。

あれ？先生じゃない……。なによ、貴方に呼び捨てにされる覚えなんかないわ。不満げ

に男の子を見る私。「何？」と言おうとしたところで急に彼は私に近付いてきた。そして突然、右手で私の首を鷲掴みにしてきた。

「ぐっ！」

あまりに突然のことで声が出ない。何？何！？男の子は顔を近づける。ちょっと！まさかこんな形でキスするつもりじゃないでしょうね。どこまでがガッついてんのよ、この年頃のガキどもは！

私は膝を曲げて左半身を少しだけ沈め、それと反比例に右上を突き上げた。10㎝ ほどの隙間を縫って掌が彼の顎を打ち抜いた。顎が砕けても文句は言わせない。レイプすれすれよ。

死角からの攻撃によろめく彼。でも私は重心が安定していなかったから威力は殆どない。彼の握力は強い。私の首を外さない。息が苦しい。げほっと咳き込む。彼はまだ私にキスしようとしてるのか、吹っ飛ばされた顔をゆらっと元に戻してくる。

冗談じゃないわ。先生以外とキスするくらいなら先に自分の唇噛み切って使えないようにしてやる！彼が反動をつけて頭を戻したタイミングを狙って私は思い切り頭突きを食らわせた。硬い額を相手の硬い額に当てるような自爆は決してしない。頭突きの場合は必ず相手の鼻っ柱か人中を狙う。柔らかく脆いところを狙うのが原則だ。それに私は女だからまず間違いなくふつうに頭突きを放てばその位置に当たる。

キスの代わりに頭突きを食らった彼はさすがにたたらを踏んでよろめいた。その隙に私は首から手をほどいた。その瞬間「何やってんだ！」と声が聞こえた。静だ。彼が私の首を掴んだ最後の瞬間を見ていたようで、一瞬で事態を理解したらしい。鞄を床に放り投げるとこっちに近付いてくる。

彼は静を見ると唸りを上げて突っ込んでいった。すると静は咄嗟に左前足で前蹴りを放った。足は彼のみぞおちに当たると、彼は１ｍくらい吹っ飛んでいった。その瞬間、私は理解した。静はキック出身だったのね。しかもそれなりの訓練経験があるに違いない。咄嗟のタックルに合わせるなんて未経験者じゃできない。

前足の蹴りはプロでも中々避けられない牽制の蹴りだ。接近する相手との間合いを取るために最も有効な手段だ。その代わり攻撃力は殆どない。ただ、攻撃力はなくとも反作用で吹っ飛ぶので、入れば漫画みたいに大きく後方に押しやれるのが特徴的だ。

しかし、後方に飛ばすのは言うほど簡単ではない。彼は静より体格が上だ。怯んでしまっては重量に押し切られて脚ごと倒されてしまう。でも静は彼を吹き飛ばした。体重を前に向けたからだ。突っ込んでくる相手にこの動作はむしろ近付くことになる。未経験者は怖くて腰が引けてしまい、結局相手にやられてしまう。間違いない、静はやはり経験者だ。

尻餅をついた男の子が立ち上がる。静にまた向かっていく。静は舌打ちして左前足でローを放った。まずいと思った。脛で相手の腰を押す角度ならともかく、横からの回し蹴りのような形の場合、前足のローで相手の突進なんか止められない。タックルを食らってマウントされたら体格で劣る静に勝ち目はない。

しかもいまのローは殆ど力が入ってなかった。生徒を攻撃するのが教師として躊躇われたのだろう。だがそれだけじゃない。静は自分よりガタイが良い相手を怖がっている。人間、相手が怖いと牽制しか打てなくなる。間合いに入っての攻撃を避けたいので、どうしても前足を多用しがちになる。先ほどの牽制の前蹴りは避けづらいが、２度目は警戒されているので入らないだろう。だからローにしたのだろうが、これは良くない。

やはり彼は静のローを物ともせず、そのままタックルした。静はタックルを食らって後ろの壁にぶつかる。壁のおかげでマウントを取られなかったのは幸いだ。私は後ろから彼を蹴ろうと近付いた。

静は彼の首に腕を回すと、一瞬ぐいっと手前に引きつけた。彼は咄嗟に後ろに身を引こうとする。その流れを利用して静は彼の頭を後ろへ押しやる。すると逆に今度は彼は引き離されまいと前に戻ろうとする。一見イタチごっこに見えるがこれは……。

「シュッ」と鋭く息を吐いたかと思うと静は彼の腹部に膝蹴りを放った。静自身、腰を引いてからの膝蹴りだ。たった１回の膝蹴りでもこのように相手の頭を取って反動を利用すれば威力は激増する。というか反動を使わないと膝蹴りなど本領を発揮しない。

「ぐっ」と声にならないうめきを上げる彼。静は力で無理やり彼を引き剥がして突き飛ばした。私とは違う。流石男の力だ。私は援護攻撃の機会を狙って間合いを取る。

「おい、お前、ふざけんなよ」

静が下の受付や教室に聞こえないように控えめに怒鳴るが、彼は諦めずに今度は右手で殴りかかった。しかしそれは大降りで、外側からのフックのようなストレート。要するに未経験者パンチ。体格はいいけど格闘は知らないようね。静はあっさり左手を内側から外側に動かし、彼の突きを手首の部分で止めた。と同時に静は間合いを詰め、右脚で相手の右脚を刈った。大外刈り！？キックに大外なんてあったかしら。空手なら流派によっては使うけど、キックはどうか知らない。

かと思いきや静は右掌を彼の顎に、指を彼の目頭に突きつけ、顔をロックした。脚を刈られて重心を失った彼を右手で地面に向けて叩きつける静。

「ダメ！」と私が叫ぶと同時に静はロックした右手を首にスライドさせ、右手を下方に突き下ろすことによって彼を地面に叩きつけた。これはやりすぎだ。頭から落としたら下手をすれば死んでしまう。

しかし静はその辺は考えているようで、着地する前に更に手を首から鎖骨辺りにずらし、胸から地面に押し付けた。結果、彼は肩から地面に落ちた。それでも彼が受身があまりに下手だったら頭もゴツンと打って死んでしまうこともある。たまたま彼は倒れたときに自分の臍を見る形になったのでセーフだったが、これは危険だ。静がケンカ上がりだということを裏付ける咄嗟の攻撃だ。

彼が抵抗できないように静は寝ている彼の腕を取って、腕から肩にかけてロックした。これで彼は無力だ。

「紫苑、こいつに怨まれる覚えは？」

「あ、えと……前に告られて振った！」
　こういうときに慌ててトロトロしてると静は絶対怒る。私はとにかく質問に無駄なく迅速かつ簡潔に答えることに徹した。
「あぁ、メールで言ってたやつか。北城のガキだな、こりゃ。俺らのことは知ってるのか」
「はい、多分。関係を疑ってた！」
「そうか」キビキビした私の返事のおかげで静は気分を害さなかった。蛍さんのトロさが嫌だといってたから、静はきっとぐずぐずしてるのを見るとキレる人なのだろうことは分かってる。いつもは冷静にしているが、こういうときは冷静でいられないので私が少しでもバカみたいに放心してたら、きっと私のことを呆れるだろう。それはいやだ。だからとにかく軍隊みたいにキビキビ答えた。
「おいお前、何で紫苑を襲った。ハナから俺をやればいいだろう」
　あら、静。何て嬉しい、もとい、カッコいいことを。
　しかし彼は唸って静を睨むばかり。何だろう……目がおかしい。私が近寄って見たらキッと私を睨んできた。その目が一瞬光って見えた。「ひっ」と声を上げたら静に「近付くな！」と怒鳴られた。私はビクっとして即座に一歩後ろに引いてから「ごめんなさい！」と素早くレスポンスを返した。静はそれ以上何も追求しなかった。あぁ、やっぱりこういう性格なんだ……短気っていうか……お父さんと逆のタイプ。のんびり蛍さんとはそりゃ合わなかっただろうなぁ。レインとも絶対合いそうにない。レインなんかおろおろするだけで、すぐ静に飽きられて捨てられちゃうだろうな。蛍さんも結婚生活の中でとっくに捨てられてたんだろうな。恐らくそれを自覚して出てったんだろう。
　彼の目が光ったかと思うや否や、急にすっと力が抜けて、彼は目を閉じた。
「え？」私と静は同時に声をあげた。一切の力が抜けたからだ。互いに顔を見合わせる。
「こいつ、気絶……した？」
「多分……」
　静は腕のロックをそろりと外し、暫く様子を見る。動く気配はない。
「胸は動いているから生きてはいるな」
「先生、どうしよう。私たちの関係バレちゃってるよね。それにこの子をこのまま放置しとくわけにもいかないし……」努めて感情を煽らないように、まるで殺人の共犯者が死体をどう捨てようか冷静に話し合うかのように話した。
　私が静と付き合って思ったことは、静は怒らせなければとても良い人だということだ。とても繊細な人なので蛍さんみたいな大雑把で心の機微のない人はダメ。彼を無駄に怒らせてしまう。劣等感やプライドを傷つけられたという誤解や愚鈍さに対する苛立ちを覚えさせなければ、静はいくらでも上手く扱える。要するに怒らせなければいい。そうしなければこちらの良いところを見てくれるし、私を認めてくれる。必要以上に甘えさせて大事に扱って尊重してくれる。お父さんよりずっと甘い言葉を囁いてくれるし、すっごく紳士的。とにかく怒らせたらアウト。こっちをバカだと思い始める。そしたら終わりよ。だか

ら彼と付き合うのはとてもシビア。でも、シビアなようで扱いは慣れてしまえばとても単純。後は静を逆に甘えさせないように適度に手綱を引けばいい。結構この人はバランスオブパワーな付き合いを好むようだ。どちらかが依存する甘えた関係はダメみたい。そういう意味じゃお父さんよりアルシェに似てるかしれない。

そんな思考の寄り道をしていると、静が声をかけてきた。

「こいつをほっとくわけにもいかないし、教務の連中に言ったら事情を言わなきゃいけないし。参ったな」

「じゃあ口封じしよっか」といったら静がぎょっとして私を見た。そう、こういう口調とこういう態度でこの人を圧倒する。そうすればこの人は私を舐めてかかれない。結果的に私を尊重する。これがこの人との付き合い方だ。これが一番彼を支配する巧いやり方だ。

全て彼をつぶさに観察し、会話やメールを覚えて分析し、蛍さんとの出来事を解析した結果、分かったことだ。最近の付き合いで会得したことでもある。私はこの人に紳士的で優しくてカッコいい良い男でいさせ続けることが義務なんだ。そして義務であると同時に私が提供してあげられることでもあるし、私にも甘い見返りのあることなんだ。

そうそう、男にとって、この女といると俺は自分が良い奴に思えるっていうのは甘美なはずだ。この女といると気分が良い。良い自分でいられる。それは静みたいなプライドの高い男には甘い音色に聞こえるだろう。私は甘い音色を奏でてあげる。

その代わり、貴方は私を優しく包んでくれる。私に愛をくれる。お金なんていらない。お金は愛されれば付いて回るから。男は愛する女のためにはお金を惜しまないし、その上もっと稼ぐ努力をしてくれる。賢い女の惜しみない愛と支援を受けた男って出世するって聞いたわ。だから愛されることのほうが包括的で重要なのよ。これが巧い男の使い方。ふふっと私は心の中で笑った。その笑いが顔に出たのだろう、静かは口封じを本気にしたのか、深刻な顔をしている。

「いま叩き起こして話を３人でつけて、内々に片付けるの」

「あぁ、なるほど……。でも、寝てる虎を起こすのはどうかなぁ」

「大丈夫よ、ここに龍がいるから」といって憧れた顔を向けると静はすっかり良い気になって「そうだな」と言った。案外単純なのね、男の人って。特に静みたいなプライドの高い男は上手く褒めてやることで凄い力を出しそう。うん、何だかだんだん私のペースになってきたぞ。よしよし。貴方はいつまでも私の元を離れられないんだからね、先生。一生私の傍を離れられないようにしてあげる。

「おい、お前起きろ」

静は平手を頬に打つ。すると彼は「うーん」と唸って目を開けた。私たちは再度警戒する。

「え……？」

目を開けた彼はきょとんとして私たちを見た。

「水月、先生……？え、な……何してんすか？」

「え？」きょとんとする静。彼の態度の変わりように驚きを隠せない。だが、不思議なことに、彼の態度はあまりにも演技っぽくない。本当に何が何だかという感じだ。同一人物とは思えない。
「俺……ここどこ？塾？え、何で？俺、授業が終わってこれから部活……え？え？」
　だんだん混乱してきた。これは演技には見えない。
「大丈夫か。君、何も覚えてないのか」
「何って……何かあったんですか？」
　この変わりようは演技には見えない。この子……なんなの。頭がおかしい人？それとも頭打って記憶が飛んだの？
「いや……急に君が倒れたから駆け寄ったんだが」
「マジすか！？いてっ……なんか腹とか肩とか全身が痛いんですけど」
「転んだ際にぶつけたのかもしれないな」
　しゃあしゃあと言う静。こっちはいかにも演技っぽい。見ていて分かる。でも、この子はスポーツ少年のくせにあまりにオスカー賞並みだ。
「マジすか……なんだよ……訳わかんねぇ」
　チラっと私を見ると照れくさそうに苦笑いする。あぁ、まだこの子は私のことが好きで、カッコ悪いとこを見られたと思って恥ずかしがってるんだな。さっきまでの彼とはまるで違う。どういう仕組みか知らないが、少なくとも今の彼は今の騒動を知らないようだ。
　静はそれ以上何も追求しなかった。これが実は演技で、下に行った途端に経緯をバラされるというのは困る。彼の身体に痣があれば理由はどうあれ静は立場を失う。だから追求したいのだろうが、彼の態度はあまりにシロだ。だから余計なことを言うべきでないと考えているのだろう。
「立てるか……？」
「あ、はい。大丈夫っす」
　私を意識してるのだろう。さも何でもない風に元気な素振りを見せる。可哀想な子。そんな空元気を出してアピールしても私の心は少しも貴方に傾かないのに。ふふ、私も女なんだなぁ。メスは優れたオスがほしいっていうもの。クラスでこの子が人気あるのは結局クラスの女子もお子様だからなのよね。
「じゃあ……下に行こうか」
「あ、大丈夫っすよ。俺、もう行きますんで」と言って彼は足早に去ってしまった。私は彼を監視するために静を残して去った。私と静が一緒に下に降りると関係を疑われるかもしれないので、静は静止しなかった。
　彼は普通に塾を出ると、そのまま去っていった。私は何だか拍子抜けした気分になった。静のところに戻ろうとしたら、ちょうど上から降りてきたところだった。何も無かったかのように仕事をしている。ぼーっとしていたら教務の先生が「どうかした？」と声をかけてきた。私は「あ、大丈夫です」と適度な愛想の良さで返し、頭を下げてその場を去った。

塾を出て歩いていたらメールが入った。静だ。抜け出して打ったのだろう。何かあったら電話しろ、駆けつけるだって。王子様みたい。ふふ……。それに電話しろっていう命令口調が「俺の女」みたいな感じで良い。私は支配したい女だけど、好きな男に所有される快感も感じるみたい。

さて、レインを迎えに行かないと。そろそろあの猫も暇を持て余してるころだわ。私は小走りで駅へ向かった。

喫茶店に戻るとレインは私を見つけて笑顔で駆け寄ってきた。数時間のことだが、さぞや不安だったろう。レインの頭を撫でると、外へ出た。いまあったことをレインに言おうか迷ったけど、言わないことにした。頭の変な子とはいえ見た目はイケメンだし、男の子に好かれるあまり襲われたなんてちょっと自慢っぽくない？

ᘐlecʌ，leʌ- ∪eʌ ∪ccᑢ h-ᄊᓭ ᑋ- le ᔑe-ᘓ

階段を降りてクレアモールに入る。今日の授業はこれで終わりだ。私は英語しか取らなかったから。ま、理由はもはやお母さんたちにはバレバレなんだけどね。静は午後は他のクラスの英語だそうだ。終わってからもお仕事があるみたいで今日は私たちの相手はできないみたい。いまごろ私のこと心配してくれてるかな。だといいな。なんて……心配してほしいなんて我侭だよね。心配させないのが良い彼女でしょうに。

ᘐʌee，ᑢЧə ∪eʌ l-ʌ ᔑcc- ɔʌ….ɔʌ….-ɣ，ʌɔʌ eʌ ᔑeᄊ Veᑕ I eᑋᔑ "ᔑɔϧ-"ᚴ レイン、そば食べてみない？おそばᘓ

ᘐ∪eʌ l-ʌ ᔑcc- Чəl ᑢɔẟ ᔑɔϧ-ẟ ᔑɔϧ- eᑕ ᑢɔẟᘓ

「あー、えっとねぇ」少し歩くと富士そばというお店があった。私が指をさすとレインはとことこ中に入っていってしまった。そっか、さっきの喫茶店と同じ要領のつもりなんだ。外の券売機に気付きもせず。私がレインを追いかけようとしたら自動ドアが開いてレインが出てきた。

ᘐᔑɔϧ- eᑕ ᑢɔᑋ- cʌ„ Ч-，ʌɔʌ ᔑeᄊ ᑢɔᑋ-ᘓ

ᘐᑢɔᑋ-ẟ ᑢЧə ∪eʌ ᔑcc- ᑢɔᑋ-ẟᘓ

ᘐЧ-„ ʌɔʌ ᔑccʌ- ᑢə„ ∪eʌ ∪ccᑢᘓ

ᘐϑ-ᔑᔑɔᘓ

ᘐ-ϑ，∪cɔʌ，ʌɔʌ -ᔑ> l-ʌ ∪e - ᑢЧə….ᘓ

ᘐclϑ-ᔑᔑɔᘓ

ᘐ->>….ᑢə eᑕ <-lᑢcẟ ɔl ᔑɔ-，ᔑɔʌ ʌɔʌ ∪eʌ ᚴcʌ ᑢə >cl ʌɔʌ ʌ-lᓭ ᑢЧə ɣ-ᑋ <-lᑢc <ccʌ- ʌɔʌᘓ

そっか。静……やっぱりコミュニケーションが取れないと人のことは分からないね。レインはとても良い子だよ。私のことを気にしてくれてるし、相変わらず利他的な甲斐甲斐しい子よ。

ᘐᚴᔑccl ʌɔ-ʌ eᑕ ᑋ-ɣ ᑢcʌ >Чəl ᚴᔑccl ᑢə-ʌ„ Ч-ʌ ᑢɔᑋ- eᑕ <eᚴ„ ᔑɔʌ，ϑ-ᔑᔑɔ --ᘓ

するとレインはにこにこして子犬みたいに頷いた。券売機の使い方を教えてあげたが、

これは難しかった。名前しか書いてないので選びようがない。レインはどれでも良いというので山菜蕎麦を２つ買った。

女子高生が入るのはちょっと珍しいと思う。おじさんが多い。そもそも女の人が少ない。でも、レインに蕎麦を食べさせてみたかった。ま、レインはアルバザードで食べてたみたいなんだけど、日本の蕎麦はきっと味が違うでしょう。

私自身、ここに入ったことはない。あるのは知ってたけど。驚くほど早くできあがったので驚いた。セルフサービスみたいで、水どころか蕎麦までも自分でプレートに載せて持っていく。立ち食いじゃないだけいいか。

結構安いわりにはおいしかった。お父さんが連れてってくれる高いお蕎麦屋さんより味が濃くて麺も上物という感じではなかった。大衆的な味。でも結構おいしい。

私は食べるレインをじーっと見た。意外なことにレインは箸を使うのが巧い。レインの家に箸なんてなかったよね。でも蕎麦を食べたことあるってことはふつうは箸を使うんじゃないかな。まぁ、レインはお金持ちのお嬢様だから外国で食べたことがあるのかも。それで箸も使えるんだろうなぁ。

しかしレインは器用というか、家庭的だ。確かにトロくて泣き虫で、有事の際には慌てて役に立たないことがある。まぁふつうの女の子だ。静には合わなそうな感じ。アルシェにも合わないんじゃないかな。こんな良い子なのに。性格も良いし、顔も可愛い。家事は全部できるし、料理なんて子供のころからしてた私より巧い。

居候という身分を気にしてるのか、ウチの家事はレインが率先してやっている。最近は私はレインに料理を教える人でしかない。しかも巧いのだ。和食なんか作ったことないだろうに、少し教えただけでささっと作ってしまう。お米を研ぐのも上手いし、お釜もミスらずにセットする。うっかりミスをしない。こういうところは少しもトロくない。アルナで暮らした頼れるレイン像そのものだ。この子は家の中にいた方がいい子なんだろうな。

親はレインを激賞。お父さんまで褒めてた。私がやっても褒めてくれないくせに……。娘を何だと思ってるのよ。洗濯や掃除までレインはやってくれる。面倒くさがりなお母さんは素直に喜んでる。ふつうはよその女に台所や家の中を弄られるのって嫌がるものじゃないの？

レインも上手いもので、親のプライベートな部分にまでは家事であっても立ち入らない。親の部屋に入って掃除はしないし、洗濯も自分と私の分はするけど、親の分は親が嫌がるだろうからノータッチにすると私に訳させた。親もそれはそうしてくれたほうが助かると言って歓迎していた。

お風呂の掃除もすぐに覚えたし、私より綺麗に掃除する。トイレまで掃除してるので驚いた。昨日なんか換気扇を見てあれは汚れないのかなんて言って、掃除をしだした。自分の家でもそこまではしなかったはずだ。多分、居候をしていることで相当気兼ねしているのだろう。静はレインのこと少しも分かってない。誰よりも私たちを気遣ってくれてる。一緒にいないし言葉が通じないから誤解しているだけよ。

静はレインが私の唯一無二の親友だと知っててもレインを悪く言う。でもレインは静の悪口を少しも言わない。私の彼氏と知らなくても恐らく言わないだろう。眼が綺麗とか、カッコいいとか、肯定的なことを素直に言う。私はそんなレインがすき。

横を見ると、おつゆをこぼして「あやー」と言っていたので、ハンカチを貸してあげた。この「あやー」というのは ᦵ- ᦓ-ᦵ のことだと思うが、最近やけに日本語の音に聞こえる。こんな感動詞は日本語にないが、何となく面白い響きだ。まるでレインの口癖みたい。何となく間の抜けた「あらぁ」みたいな口調なのもおっとりしててレインらしい。

2006 / 08 / 06

夏期講習で、日曜はテストなんかをやったりする日だ。私は塾に来ている。レインも一緒に家を出たが、エクセルシオールで待たせてある。最近あそこの住人と化している。冷房のせいでおなかを壊すと言っていたのでひざ掛けを持たせた。レインは甲斐甲斐しいもので、飲み物にお金がかかるから何も要らないといってきた。が、それでは店側が困るので、何か頼んでもらってる。

最近静との恋愛ですっかり勉強も運動も手が付かないが、それでも首席はキープしている。テストもあっさり解いて終わらせてしまった。お昼に外に出てレインと食べ、夕方には塾を出る。そんな生活だ。っていっても私は英語しか取ってないので曜日ごとにリズムが異なるけど。

しかし今日は暑い。天気も良い。私は服を選ぶのが面倒なので制服を着ているが、うっすら汗で滲む。上着が基本的に白だから下着の紐が透けて見えるのが恥ずかしい。それが嫌だから最近は白い下着ばかり着けている。

いまは昼だ。私は塾を出てレインを迎えに行く。周りは友達と食べてるみたいだけど、友達のいない私はいつだって一人だ。でもレインがいるからいいもん。

カフェに迎えにいくとレインがとてとて笑顔でやってくる。かわいいなぁ。今日はロッテリアで食べることにした。２人でいるときも買い物はレインにさせる。レインに日本での暮らしを覚えてもらうためだ。レインも段々慣れてきたみたい。日本語じゃなくてジェスチャーに、ね。

お昼を食べた後、少し時間があったのでクレアモールの中を歩いてた。あっつい……。今日も良い天気ねぇ。駅から離れたところ、右手に少し大きめな公園があった。そこに入ってベンチに座る。暑くて長々歩いてられないわ。アルバザードの夏と違って蒸し暑いからレインはさぞやへばってることだろう。日本人が向こうへ行く分にはいいのだが、アルバザードの人間が日本に来ると、気候がキツイだろう。日本は過ごしにくい国だ。さっきコーラをセットで飲んだばかりなのにもう喉が渇いてきた。

レインを見ると涼しげな顔できょろきょろ周りを見てる。アルナでも思ったけどストレスに強い子よね。襲われて異世界に来たのに基本的に旅行気分なんだから。帰ったら大学

の勉強どうしようとか、考えてないのかな。私は自分のとき、家が大騒ぎになってるんじゃないかって心配してたのに。

ᔕᒐcɔᐱ，cᐱ，ɔ>-ᖵᔕ

ᔕ-，ᖻ-ᔕ

柴犬を連れた人が歩いてきた。レインは犬を珍しそうに見ていた。アルバザードは犬をよく飼うそうだが、レインの家には何もいなかったから珍しいのかもしれない。レインは腕を逆手にしてアメリカ人がやるような手首のスナップで「来い」というジェスチャーをした。日本人だと男の人が喧嘩のときに相手を挑発するときにやるような仕草だ。そしてちゅっちゅっと舌打ちを繰り返す。へぇ、アルバザードの人って犬にそうやって呼びかけるんだ……。日本人なら「おいでおいで」かな。

犬はたいそうバイリンガルなようで、レインにつられてとことこ歩いてきた。飼い主はふつうのおばさんだ。レインを見て確実に外人だと思ってることだろう。レインは物怖じもせず犬の頭を撫でた。右手で頭をなで、左手で頬を撫でる。犬は嬉しがってレインに飛び掛る。私は思わずビクっとしたがレインはきゃっきゃと笑っている。飼い主は「こら！ダメよ」というが、レインと犬はお互いペット同士あまり気にしていないように見える。「すみません」という飼い主にレインは ᔕlᓲ eᑕ -ᐱᒣ ᑕcᐱ„ eᔑᑕ eᑕ ᑕɔẟᔕ と話しかける。飼い主が「え？」というのと同時に私が「すみません。この子、犬好きみたいで」と言う。レインは暫く撫でていた。

しかし、よく怖くないよな。柴犬ったって結構大きいわよ。中型じゃないの。もし噛まれでもしたらどうするつもり？狂犬病になっても貴方保険証ないじゃない。どうやって医者に連れてけばいいの？私、アルバザードでそういうこと常に気をつけてたんだけどな。レインはどうもおっとりすぎる。ちゃんと後先を考えてるんだろうか。けど……まぁこの犬が可愛いのは分かる。撫でてみるくらいなら大丈夫かな。

「あの……私も撫でていいですか？」

飼い主が「どうぞ」と微笑む。おそるおそる手を出してみた。そしたらこの犬、私が手をかざした瞬間、表情を変えて唸り、突然吠えたかと思うと手に噛み付こうとした。「きゃっ」と叫んで思わず手を引っ込めると飼い主が慌ててリードを引っ張って犬を叩く。

「ごめんなさい、大丈夫？」

「はい、大丈夫です……」

飼い主は何度か謝って去っていった。何となく気まずかった。なんで？なんで私だけ……。呆然としている私を気まずそうにレインが見てくる。

ᔕᐱɔᐱ lɔ l- ᐱ-ᑕ ᐱcᑐ >cl ᑕᖻ <ᔑe> l-ᔑ ᔑɔᑕ h-lᔕ

なるほどね。だからって噛むことないじゃない……。可愛くない犬。でも……なんていうか、私が手をかざしたから驚いたっていうより、何か完全に敵意を向けられたような気がしたんだけど。

ᔕᖘɔᔑ ᒐccᑕᔕ

鞄を持って立ち上がると、レインを連れてその場を去った。

2006 / 09 / 01

昨日で夏休みは終わり。夏期講習は科目が少なかったから楽だったなぁ。夏休みが明けて久々の高校だ。でも始業式をしてちょこちょこ雑用を済ませて午前中には解散だ。アルバザードにも始業式というのはあるらしい。午前中で終わるの？と昨日レインに聞かれた。向こうも似たようなものらしい。

午前ですぐ終わるからレインとは終わったら遊ぶ約束をしている。そういうわけでレインには上福岡の駅近くのドトールで待機してもらっている。

私はいま教室にいる。久しぶりの退屈な空間だ。夏休みはレインや静がいたから寂しくなかった。ここに来て久々に孤独を味わったら、違和感を覚えた。あれ、何だか私、凄い冷めた仏頂面してない？そっか、友達いないからって私こんな冷めた顔してたんだ。そりゃ余計友達できないわって気付いた。かといって今更明るく振舞う気も起きない。

担任が何か言っているのを横耳で聞きながら窓の外を見る。雨だ……。今年は暑い日もあったけど、総じていえば冷夏だったなぁ。９月に入ったばかりだというのに涼しくて過ごしやすい。今朝、レインが可愛かった。夏休みにレイン用に傘を買ってあげた。ピンクの可愛いの。私は差せない。でもレインなら似合うと思った。やっぱり似合ってた。長靴まで履かせようかと思うくらい。可愛い子は得だ。私じゃ白々しい。可愛いなんて言ってくれるのは静くらいだと思う。でもそれはお世辞じゃない。だから嬉しい。静が可愛いっていってくれるならそれで十分。ただ、やっぱり私にあの傘は似合わないと思うのよ。そんなわけでお父さんの紺色の傘を持ってきた。

いつの間にか教室が散会になった。今日は金曜なので夏休みが終わったと思いきやまた２日休みだ。教室を出て下駄箱に行く。上履きを脱ごうと膝を曲げたところで「ねぇ」と呼ばれた。女の子の声だ。しかも何だか感じの悪い声。

「え？」と振り返ると同じクラスの女子だった。名前は……覚えてない。ちょっと可愛い子だが、キツイ感じの。ポットのCMやってる中山エミリが若かったらこんな感じだと思う。髪を染めているのだろうか、少しだけ明るい。進学校なので怒られない程度に染めている。顔が少しハーフっぽいので染めてても何も言われなそうだけど。

「あのさぁ」と詰め寄ってくる。

……何か怒ってない？近くにくると香水の匂いがツンとした。学校に付けてくるなよ、くさいなぁ。

「はい？」

「何でフったわけ？」

「……え、何？」

「フったって聞いたんだけど。告られたんでしょ？」

あぁあぁ、１学期のことか。あのイケメン君のことね。……何を今更。
「あぁ……彼のこと？だってよく知らなかったし」
「知らないってことないでしょ、同じクラスなんだしさ。てゆうか何？その態度」
「え……あ、ごめんなさい」
鞄を抱えたまま俯く。何が悪くて怒られてるのか分からないけど、こういうバカは相手にしないほうがいい。多分、この子はあの男の子のことが好きなんだろう。でも彼が私を好きだから敵意が私のほうに向いてる。まずいなぁ。これが原因でいじめにあったりしたら面倒だ。一瞬で自分がいじめられてる光景が浮かんだ。ほら、よくあるじゃない？机に落書きとか、下駄箱に画鋲とか。まぁ進学校だから大げさなことはしないだろう。無視が基本だろうな。でもそれなら事実上今と変わらない。じゃあ別にいいか。なんて考えてたら相手に無視したと思わせたらしく、余計に怒らせてしまった。
「あんたさー、もっと明るくしたらどうなの。だから友達いないんでしょ」
「別に……」ちょっとイラっとした。何であんたにそんなこと言われなくちゃいけないのよ「関係ないです」
「は？」と言って眉間に皺を寄せると彼女は私を軽く突き飛ばした。うっとよろめいて下駄箱にぶつかる。あぁ、嫌なムード……。かといってこの子を張っ倒したら私の大人しいイメージが崩れてしまう。変なことで一目置かれるのは嫌だ。とりあえず謝り通そう。と思って顔を上げた瞬間「ヤー！」という甲高い声が聞こえた。彼女ではない。右から聞こえた。
「――レイン！？」
なっ、なんでここにいるのよ！？
レインは朝別れたままの格好で校内に上がりこんできた。勿論土足で。あぁ……泥が付くからやめてぇ……。
急に私服姿の外国人少女に怒鳴られ、彼女は困惑した表情を見せる。
「なに……アンタ」
レインはつかつか彼女に歩み寄ると、両手を突き出して彼女の胸を思い切り押しやった。彼女は小さな悲鳴を上げて下駄箱にぶつかる。下駄箱がどんと揺れる。
ᘐ-ㅣ- ᑕc ᑕɔᔑ ᒐcɔΛᖇᘐ
「いった……何すんのよ！」
レインの胸ぐらに掴みかかる彼女。私はといえば周りに人がいないか見計らってばかり。
ᘐ-Λ cΛ-ᑕ ᑕc ᔑɔᖫcᖫ ᒐcɔΛ - ᑕᓁ ᕒ-ㅣ e Zɔ> <cΛ -Λ eΛ ᓄeᔑ ᑕᓁ eᑕ ᑕɔ„ ℓccΛ ᒐcɔΛ Λ-ᑕ Ч-c cΛ„ ᓄɔΛ -Λ Λ- Sɔ - ᑕc -ᖇᘐ
「はっ？てゆうか日本語話せよ。訳分かんないから！」
ごもっとも……。まず始めに「アンタ誰状態」な上、言葉までアルカだもんな。心理的にレインの勝ちだわ。
レインは彼女の耳に手を伸ばすと、思い切り抓り上げた。彼女はイタイイタイと甲高い

声を上げながら膝から崩れていった。レインは左耳を抓り上げたまま彼女に近寄る。
ᘐᒄe ᘏᘋ -ᐱᑕeↄ - ᒐcↄᐱ Vecl -ᐱ Scᒍ V-ᐱ (e> (ccl„ h-ᒄᘐ h-ᒄᘐᘐ
「イタイって。離してよ！」涙が滲んでくる彼女。災難ねぇ……。
ᘐ-ᐱ Vceᒄcᘀ - (c Ꮆᘋl ᘏᘋ -ᐱᑕeↄ - ᒐcↄᐱᖇ (c (cl >-ᒐ ↄᐱ (e> >-ᐱ (c ᒍ-ᖮ (eᐱᛚ„ ᒐcᐱ-，-ᐱ Scᒍ ᒍeᐱ ᒍↄᐸ (ᘋᖇᘐ
何かを命令されていることは分かるようだが、アルカが分からず彼女は悶えている。仕方なしに私に助けを求める眼差しを投げかけてきたので同級生のよしみで訳してあげることにした。
「えっと……「紫苑にごめんなさいって言わないと耳を引き千切るわよ。アンタの耳、ピアスの穴のおかげで簡単に破れそうだわ」だそうです」
「はぁっ！？ちょ……なんとかしてよ！ほんとイタイって！」
「ええと……私に謝ったことにします？別に本当に謝らなくてもいいから。私も彼に悪いことしたって思ってるし。それでいい？」
「何でもいいから早く止めさせて！」
ᘐlecᐱ，(ᘋ eᑐ ᘀ-ᒐ„ ᒍeᐱᑐ-ᐱᑐ„ ᒍeᛚ l-ᒍ c (e>ᘐ
するとレインはすっと手を離した。彼女は泣きながら顔を真っ赤にして耳を押さえている。ここで大丈夫？などというと火に油だろう。
「あのさ……彼にも貴方にも悪いとは思ってるの。けどね、彼も私に好きな人がいるってことで納得してくれてるの。いま凹んでるんでしょ、彼。それ見て怒ってるんでしょ、貴方。私に怒るの良いけどさ、好きなら凹んでる男寝取ったら？意外と簡単に靡くよ、男なんて」
「えっ？」
ぎょっとした顔で私を見上げる。優等生の私の口からこんな言葉が出るとは思わなかったんだろうな。勿論これは演技なんだけど。
「振られたんでしょ、彼に。男なんて始めはそうよ。でも本音じゃ慰めてほしい弱い生き物なのよ。むしろいまが自分のモノにするチャンスね。それじゃがんばって。あ、今日のこと、お互い内申に響くと後々ウザいから黙っとこ。いいね？あと、抓られたとこなんだけど、耳ピの要領で冷やしときな。でないと後から青くなるから。じゃあね」
「……」彼女は何も返せず、その場に座っていた。大人しい子だと思ってた相手が悪女だと知って驚いた様子だ。こんな演技にあっさり引っかかるなんて、所詮進学校でいきがってるだけの子ね。
ローファーに履き替えて学校を出る。バスには乗らずに傘を差して歩いていく。校門を出て左に曲がって彼女から見えなくなったところで私達は大きくため息をついた。なんだ、レインも演技してたのか。
ᘐᒐcↄᐱ，(ᖵᘋ eᑐ ϶-ᒍᒍↄᛑᘐ
ᘐᖵ-，ᒍeᐱᑐ-ᐱᑐᘐ

ᑫʌɔʌ ᔑeᔭ ᑕᖻ ʌɔℓ ʌɔʌ eᑕ Vceʌ ᑕcʌᑐ-„ ᑕeᑕ ʌɔʌ V-ʌℓ-ᑕ ㅣ- >cㅣ ᑕᖻ V-ʌℓ Vcㅣ ㅣ- ᒐeㅣ <eㅣ-ʌ h-ᒐᑫ

ᑫh--ʌ, ᔑɔʌ ᑕᖻ ℓc-ʌ-ᑕ eᑕ-ᑕ Vceʌ ᔑeᑕeᑫ

ᑫᖻ-, ʌɔʌ ʌ-ᑕ Ve> ᑕcʌ -ᖵ ᑫといって珍しく大口で笑うレイン。

しかし彼女も災難ね……。それにしてもレイン、全く日本語覚える気配がないなぁ……。

2006 / 09 / 11

夏期講習中、殆ど静に会えなかった。夏休みは色々デートしたりできるかなって期待してたのが外れてしまった。やっぱ社会人が彼氏だとそういうところは辛い。でもメールと電話は毎日している。

夏休みが終わってもやっぱり静は忙しくて、中々会えない。偶に会ってもレインと一緒だからあまりイチャイチャできない。私は我慢してるけど、静は正直いってレインを邪魔がってるみたい。その気持ちはちょっと分かる。もっとラブラブなデートがしたいよ。

でも今日は静に会える。今日は仕事が早く終わるのでウチに改めて挨拶に来るそうだ。前に改めて挨拶に行くって言ったままだったから気になってたみたい。本当は昨日の日曜っていう話だったんだけど、なんだか大人達の事情で今日のほうが却って都合良くなったみたい。

始業式のことがあったから学校であの後何かされないかドキドキだったけど、彼女は何も言ってこなかった。いつもどおり変わらない日常だ。学校が終わってバスに乗って上福岡へ行く。午前中から雨が降っていたが、下校時刻には雨足が強くなっていた。こりゃとても歩く気はしないなと思い、バスに乗った。バス停から駅までの約５分でさえかなり濡れてしまった。

川越で降りて塾に行く。授業を受けて出るともう夕飯の時間だ。でも今日は家で夕飯を食べることになっている。なんとあのお母さんが作るというのだ。珍しい。静に感謝。っていっても留守番してるレインに手伝わせるんだろうけど。

新白岡駅に着いたときはもう８時を過ぎていた。少し遅い夕飯だ。おなか空いたな。とことこ家に帰るとレインが出迎えてくれた。静からまだ連絡はない。濡れてしまったのでお風呂に入った。お風呂を上がったら静からメールが入ってた。道路が少し混んでるそうだ。結局９時前くらいに静が来た。ウチは駐車スペースが１台しかないし家の前に停めておけないそうだから、毎回面倒をかけてしまう。

静はさっき塾でチラっと見たままの格好をしていた。玄関先でお母さんとお父さんに挨拶をしてお土産を渡して上がった。なんだかかしこまった感じで私からすれば違和感がちょっとある。レインはとても不思議そうにみていた。３人の仲がそんなに良くないではないかと勘違いしているだろうから、あれが日本の礼儀だと伝えた。

テーブルには料理が容易されていて、椅子もちゃんと私が持ってきた。席に着いて歓談

をする大人達。なんだかな、私は少し取り残されてるみたい。
「紫苑さんは子供のころどんな風だったんですか。その頃から活発で聡明だったんでしょうか」
「え、これ以上子供のころですか？」
　これ以上とか言うな、お母さん。
「そうねぇ、ウチのことは何でもしてくれてたし、運動も勉強もよくやってたわね。無茶をする子だったんでハラハラしてました」
「あぁ、何となく想像できます」
「想像できるのね、先生？」と口を挟んでみる。
「うん？まぁね。今とそんなに変わってなさそうだし」
「この子の昔の写真とかビデオとかあるんで、もし良かったら見てくださいね」
「あぁ、それは興味ありますね。習い事の発表会や運動会のビデオですか？」
「はい。習い事っていっても空手とかで、ピアノとかじゃないんですけど」
「お母さん、やめてよ」
　なぜ親はロクでもないことしか言わないのだろう。結局会話してるのは主に静とお母さんだ。静はお父さんが黙っているのを気にしているようだが、お父さんはほがらかな表情だし、話をしている人のほうを向いているので聞いてるオーラは伝わってる。それで静は納得したのか、主にお母さんと話してた。レインはアルカでどれを自分が作ったといって私に聞かせてきた。結局言葉の壁というか年齢の壁というか、私はレインのお守りをしてて、静はお母さんと話してて、お父さんは何となく見てるという感じ。
　食事が終わると先生は御礼を言って帰ろうとした。もう 10 時だし、大人の常識ではここで去るというのが当然なのだろう。でも私は折角会えたのに殆ど話せてない。帰ろうとする静を引き止めた。
「ちょっと待って、先生。ほら、私の写真とか見るんでしょう？」
「でも今日はもう遅いしご迷惑になるから」
「だって親と話してばっかだったじゃない。挨拶はもう終わったでしょ。今度は私の番よ。ねぇねぇ」と駄々をこねてみた。わざと子供っぽくしたほうが今は有利な気がした。
　お母さんにもお父さんにも見透かされてるとは思うんだけど、２人とも苦笑して「あまり水月さんにご迷惑がかからない時間までにしなさいね」と言った。よし。片付けを親とレインに任せて私は静を部屋に連れて行った。
　部屋に入ってドアを閉めると私はいきなり静に抱きついた。
「お、おいおい、どうしたの」
　何も答えず胸に頭を埋めて顔を擦り付ける。私、ネコみたいだな。
「あぁ、やっと先生と２人きりになれた！いつぶり？」
「そうだな、結構なかったよね。レインがいたし」
「洗い物は 15 分もあれば終わっちゃうから、それまでくっ付いてたいです」

ハッキリ要求を述べた。静は親と話した直後で気まずいという感じだったが、そんなの知ったことではない。もう私の「静カモン指数」は限界値を突破しているのだ。ベッドへ連れていって座らせる。私は後ろから抱きついた。そのまま５分くらい黙ったまま抱きついていた。はぁ……癒されるわ。

「ねぇ、今度はねっころがって抱きしめて。先生から」

そう言って私はころんとベッドに仰向けに倒れると、じゃれるように腕を伸ばして誘った。静は苦笑して私の上に覆いかぶさってきた。何度かキスしながら抱き合っていた。ぎゅっと抱きしめられると気持ちが良い。恥ずかしいって昔は思ってたんだけど、実際自分がしてみると恥ずかしいとは思わない。単に嬉しいとか幸せって思うだけだ。人がやってるのをみるから恥ずかしいんだな。

鼻先や唇で静の顔をくすぐる。静はくすぐったいように笑うと、私の耳を唇で撫でてきた。これは何か凄く……変な感じ。嬉しいとかではなくって……変な感じ。そのまま５分くらい右耳をいじられていたら、何だか自分の息が荒くなっていくのが分かった。なんだろこれ。小さなくぐもった呻きみたいのがおなかの中から出てくる。身体がピクッとしたりするし。もう少しでこの感覚が何だか掴めると思ったところで静が身を離した、私は「やめないで」と静の肩を引き寄せた。

「いや、レインが来る」

「え？」いつの間に 15 分経ったの？

そう思う暇も無くガチャっとドアを開けてレインが入ってきた。私の上に馬乗りになってる静。私はその肩を押さえてる。見ようによっては私が静から逃れようとしている風にも見える。というかむしろ見た目はそういう構図だ。

レインはきょとんとして何も言わない。ちょっと目を細めてこっちを見てくる。手にはお盆とお茶。

Ꮾlecᐱ，ᴗeeᐯe ᐳcl ᑫᏂ -ᐯcᐧ h-ᑫ 0eᐱᏮ

ᏮᏂ-,, h-c，ᐱɔᐱ ɭclcᐧ lclcᴗ -Z ᒐcZᐧ- hɔᑫᵹᏮ

ᏮᏂal leᐱ-，leᐱ- cɔᏮ

Ꮾ....ᵹ-ᴗᴗɔᏮ

静は私の上からどいてベッドに座った。

「なぁ、俺凄い嫌悪された？」

「大丈夫だと思う……」

レインはいつもの顔に戻って私達にお茶を渡し、机の椅子に座る。私は気まずさを取るために押入れを空けて昔の写真を引っ張りだした。

「これ、私の写真」

２人に見せると面白い反応だった。２人とも潰れたあんぱんみたいにくしゃくしゃな笑顔の私を可愛いと言ってくれた。そういえばこの頃はよく笑ってたな。幼稚園のとか小学校の入学式のとか色々。

篠津中のは良い思い出が無い。私、どれもつまらなそうな顔をしてる。林間学校なんて集合写真さえアルバムに入れてない。中学３年間の個人的な写真が数枚しかない女の子というのは極めて珍しい人種だと思う。
「中学ってこんな制服だったんだ」
「うん。あ、制服フェチですか？」
「だから教師やってると飽きるんだって」
「ふふ……着ろって言ったら着てあげますからね」
「蛍みたいなこと言うなよ」と言ってふいに口を押さえる静。
「別に気にしないでいいですよ。あ、小学時代に戻っちゃった」
小学校のころのほうがまだまとも。親が取るから枚数はそれなりにある。でも学校にいるときの私はあまり笑顔じゃない。親に遊びに連れてってもらったときの写真はくしゃくしゃに笑ってるんだけど。
「可愛いじゃん。入学式とかおしゃまな感じ。このころから美少女だね」
「えぇ？冷たそうじゃないですか？」
「頭良さそうだよ。それに可愛い」
「えへへ……」
遡ってたら赤ん坊のころの写真もあった。見せてる途中であっと思って私は両手で写真を押さえた。
ᑫeᔑ ᑕᖻ ᐱeᔐᑕ ᑕᘏ ᔑeᔭδᑫ
「それ、何の写真？」
「別に……赤ん坊のころのです。多分２歳いってないくらい」
「あぁ、裸ってことか」静は察して頷く「別にいいじゃん、２歳だろ。見せてみなよ」
静は私の指を持ち上げる。
「ヤですよ！恥ずかしい」
力を入れる私。
「レイン、ええと……ᑕᘏ ᔑeᔭ　あー eᑕ……-ᒪᔑ-ᕈ,, ᒐcᔑᐱ eᑕ -ᒪᔑ-ᕈ, -ᒪᐱ-δ」
するとレインは ᑫᖻ-, ᖻ-, -ᒪᐱ-ᖇ ᑫと言ったかと思いきや、へらへら笑った。
ᑫᐱᔑᐱ ᑕ-ᐱ cᐱ ᒪ-ᐱ ᑕᘏ, ᒐcᔑᐱ,, ᑕᖻ ᐱ- ᔦᔑᐱᒪ ᑕᒐᘏᑫ
ᑫᑕeeeeeeeeeeeeeeᔑᖇᑫ
レインは私のわき腹をこしょこしょっとくすぐった。「あはは！ヤダ！」と叫びを上げてレインの手を払うと、レインはすかさず足で静のほうへアルバムをパスした。静は少年のように笑って写真を抜くと立ち上がって写真を見た。
「やだー、みないでよぉ」
私は奪おうとするが、静は腕を伸ばす。ぴょんぴょん飛び上がるが、全く届かない。いつの間にかレインも来ていて下から見上げていた。
「おぉー、はしゃいでるねぇ、紫苑」

ᔕ-, ᑕᖏ -ᑕ ᑕᑕ- -ᐱᑐ ᑕᑕ, ᒐᑕᑐ,, ᑕᖏ ᐱ-ᑕ eᔑᑕl Vᑐl leᐸ ᐳeᔑ- ᔑ-ᑕᑕẟᔕ
「もうっ！レイン！先生！」
　私は写真を奪い返すとアルバムに戻した。２人とも笑ってる。なんか私も怒ってるはずなのに笑ってる。きっとこうして人とじゃれたことがない私は、こういうからかいが貴重なんだろうな。アルシェといてもこういうことは無かったなぁ。あのときは状況が逼迫していたし。こういうのが振り返ると楽しい時間なんだろうな、恥ずかしかったけど。
「今度先生の家にいったら先生の裸の写真見せてくださいね。それでおあいこです」
「ははは、そんなのあったっけな。まぁ息子だからあるかな。娘のは珍しいかもね」
「ウチの親は多分そんなこと気にしなそうだから……蛍さんのは無かったんですか？」
「ん？写真あんま無かったからね。俺と同じで。赤ん坊のころのは全部おくるみ着てて、後は幼稚園まで飛んでたからな」
　見るとレインがしげしげとしつこく私の裸を見ていたので、ぺしっと後ろから頭をはたいたら「あぅっ」と言って頭をすりすりしてた。
「もうアルバムは終わりです」
「面白かったよ」
「初めて見てもらうのが赤ちゃんのころのだなんて最悪ですよ……」
「え、そんなことないって。カウントに入らないよ。いまの紫苑が紫苑じゃん」
「そう思います？」
「そりゃそうだよ、レインだって面白がってるだけだし。それより、そのうちいまの紫苑を見せてもらうよ」
「え……」思わず赤くなる「からかってるんじゃないんですよね？」
「半分冗談。でも、半分本気」
　さらっと言う。言い方がカッコいい……。私はその一言で黙らされてしまった。
「じゃあ面白いものも見れたし、そろそろ帰るよ。夜に大騒ぎしちゃったな。お母さんたちに悪く思われてなきゃいいけど」
「多分、娘がはしゃいでるのを初めて聞いて感動してるころだと思いますよ。「あの子にも子供っぽいところがちゃんとあったのねぇ」とか何とか言ってる頃だと思います」

　静を玄関まで送っていった。レインも着いてくる。
「あ、そういえば食事のとき質問があるって言ってなかった？慶応の問題だっけ」
「そうでした。ちょっと待っててください」
　上から鞄を持ってきて戻る。既に静は親に挨拶を済ませて外に出ていた。玄関先で質問をする。静は丁寧に教えてくれた。
「相変わらず受験を超えた大学レベルの……いや、学会レベルの質問だな。やりがいがあるよ」
「えへへ」

レインは英語のアルファベットをしげしげと見ていた。日本語の文字と何となく雰囲気が違うとは思っているようだ。賢い子だから口には出さないけど日本語について色々考えたり法則を見つけたりしてるんだろうな、頭の中では。アルティス教徒ってほんとに難儀な人たちね。

前に he と書いたら he って何と聞かれた。そういえばアルカとアルファベットは同じ形のものがある。音が似ているものもある。異世界なのに不思議な偶然だ。hel と hell なんてかなりニアピン賞ではないかしら。

などと思っていたところで急にカラスの鳴く声が聞こえた。随分大きい。間近だ。ふっと上を見上げたら電線のところに闇に紛れて止まっていた。

「カラスかよ……はぐれて帰れなくなったみたいだな」

「日本だとカラスが鳴くと不吉っていわれてるけど、アルバザードだとどうなのかなぁ。ねぇレイン――」

とそのとき、カラスが急にこちらめがけて急降下してきた。「きゃっ」と叫んで両手で顔を隠す。カラスは私の鞄に激突した。よろめいて落ちたカラスを静が咄嗟に蹴り飛ばす。カラスは奇妙な声を上げて門扉を越えて行った。羽をやられたのか内蔵をやられたのか、そのまま飛ぼうとしたものの、墜落した。

「こ、殺しちゃったの……？」

「さぁ、とりあえず危害を加えてくれば容赦はできない。本気で蹴ってはないが、死んでも仕方ないとは思って蹴ったな」と言いつつ外へ出る静。

「おいっ、紫苑！」大きな声を上げる静。

「えっ、は、はい」

慌てて駆け寄るが、特に何もない。カラスは死んでいたけど。

「いま、こいつの目が光った気がするんだが、カラスって目、光るっけ？」

「さぁ……分かりません」

ᘏ⑅ᑦᐱᖇᘏ

今度はレインの声。ト？と振り向くとそこには犬。黒い犬だ。どこから現われたのか、唸り声を上げて私を睨む。なんで私なの……？

「おいおい、白岡は犬、放し飼いかよ。紫苑、家に入れ。刺激しないようにゆっくりな」

「はい」

騒ぎを聞きつけたか、お母さんたちが「どうかしたの？」と出てくる。

「お母さん、来ないで。危ないから！」

「え？」

犬は私が一瞬目をそらした隙に襲いかかってきた。咄嗟に静が間に入ろうとするが間に合わない。私は手提げ鞄をくるくるっと回転させた。鞄の紐が手首に絡まり、紐の長さが最短になって私の手首と一体化する。その右手を犬の眼前に出すと、犬は鞄に噛み付いた。そのまま私は腰を捻って左足の回し蹴りを放った。横腹を蹴られ、犬は奇怪な悲鳴を上げ

て吹っ飛んでいった。驚いたのは静だ。私がこんなに強いとは思わなかったようだ。
　犬は流石にカラスよりは強いようで、生きてはいたが戦闘不能になったようだ。しかし一体何なのよ。
「犬とカラスに襲われたの。でも大丈夫よ。先生が助けてくれたし」と玄関先のお母さんに言ったところで ᘐ|->cr ᘐ と叫んだレインに突き飛ばされた。私の視界の端を別の犬が過ぎ去っていった。
「おいおい、どうなってやがんだ」
「紫苑、水月さん、全員中に入りなさい」お父さんが素早く指示を出した。
ᘐᔑe |-ᑐ，cl - ᔑ-r ᘐといって走る。ところが犬は私を狙って飛び掛ってくる。だからなんで私なのよ。静が振り向いて犬に前蹴りをかけるがかわされてしまう。
　犬は一旦着地して私に向かって飛び掛ってきた。後ろ向きの私は攻撃しづらい。ましてこんなに人が多くては。思わず恐怖で目を瞑りそうになった瞬間、お父さんがゴンと空中の犬の頭に拳骨を食らわせた。犬はギャンと叫ぶとそのまま地面に落ちた。お母さん以外みな沈黙してお父さんを見る中、お父さんは「入りなさい」と言って皆を先に入れた。お父さんは外を見ている。まだカラスと犬が１匹ずついるのだ。
　レインが怖がっておろおろしている。お父さんはレインの頭を撫でると、優しく「こわがらないで」と言った。そしてなぜか私を目掛けて飛んできたカラスを上蹴りで――２ｍ以上足元から離れている飛んでいるカラスを上蹴りで――正確に打ち抜いた。レインは両手で口を押さえて「わぉ」と叫ぶ。
　でもまだ恐怖が抜けないのか、レインは膝が震えて動けない。お父さんはレインの腰に手を当てた。上下に何度か優しくさすって、ぽんぽんと優しく叩いて「君なら走れる」と言った。そしたらレインは嘘みたいに震えが止まって家の中まで走ってきた。ドアの前で、犬がお父さんに飛び掛っていった。でもどちらかというとお父さんを抜いて私を狙っているかのよう……。お父さんはレインに向けた優しい顔色を変えずに後ろ回し蹴りで犬の顔面を蹴り飛ばし、そのままドアを閉めて鍵をかけた。
　お母さんは「何だか大変ねぇ」と言いながらも涼しい顔をしている。また恐怖が戻って震えているレインを抱きしめて撫でてあげてる。レインは真っ赤な目をしてお母さんの腕にしがみついている。お父さんは覗き穴から外を見ているが、表情は変わらない。この人たちは若い頃どうやって出会って何を潜り抜けてくたのだろうと思った。そういえば私、親のこと何も知らない。もしかしてこの人たちって凄い人だったんじゃないか……。
「ねぇ、殺したの？後が面倒ね。ご近所にも迷惑だわ」
「そう思って死なない程度にしました。大丈夫です」とお父さん。
　お父さん、あなた……いつカラスや犬の急所なんて学んだのよ……。
「あらあら、じゃあ紫苑と水月さんは殺しちゃったみたいね。片付けないと車にも迷惑だわ」ふぅとため息を吐くお母さん。
「そうですね。後で片付けておきましょう。紫苑、家中のドアに鍵をかけなさい。水月さ

ん、娘を守ってやってもらえますか」
「は、はい！」私と静は同時に答えて走り出した。

　家中の鍵を確認して戻ると３人は居間にいた。
「紫苑、あなた犬に怨まれるようなことしたの？」
「してないわよっ！」どかっと椅子に座る私。
「まぁそれはそれとして、今の騒ぎは何？検討も付かないの？」
「ううん……多分」言いよどむ私。全員がレインを見る。
「……だと思う」と静。
　私達は頷く。レインは日本語が分からないけど、何を言われてるのかは分かっているようだ。
「でもさ、犬はむしろ紫苑を狙ってたように見えたんだよな、俺」
　口調が通常になっている静。親はしかし気にした様子はない。というかもはやそんなこと気にしている状況ではない。いきなり犬やカラスに襲われるなんてどう考えてもおかしい。どう見たってあいつらは……。
「あいつらは……私を狙ってたとしか思えないのよ。恐らく……操られて」
「俺にもそう見えた。でも何で紫苑なんだ？むしろレインなら納得いくっていうか……」
「うん……まぁそうよね。私を狙う意味なんて無いと思うんだけど」
　暫く皆黙り込む。ふとお母さんがお父さんに聞く。
「ねぇあなた、どう思う？」
　じっと皆が見る。お父さんはふぅとため息をついた。
「私には紫苑ではなく紫苑の鞄が狙われているように見えました」
　淡々と語るお父さん。レインを除いて皆ハッとする。そうだ……犬はむしろ私の鞄目掛けて飛んできた。カラスもそう。犬が鞄に食いついたのは偶然じゃなかったのかもしれない。
「あら。鞄の中にごちそうでも入れてたのかしらね」
「多分、そうかも」
「え？」お母さんは下らないジョークを流さなかった私に意外な顔を向ける。私は鞄を開けると中から髪のゴムバンドで結わいた玲音の書を取り出した。
「これが「ごちそう」よ。……悪魔のね」
　流石のお母さんも目を丸くして黙っていた。

　私は去年アトラスへ行って体験したこと、そして今回レインが来た経緯について皆に話し、情報を整理した。お母さんは始めは驚いていたけど、すぐに面白そうな顔をして話に乗ってきた。こういう話、好きだったのね……。お父さんはいつも通り涼しい顔。
「なるほどねぇ。お母さん、そのアルシェって子に会ってみたいわ。そうすれば全員と顔

合わせよね」
「私も会いたいわ。安否が分からないからとにかく安全を確認したい。一番の戦友だし」
「それにしてもレインちゃんも大変ねぇ。レインちゃんはただ巻き込まれただけなのね。災難だわ。どうにかならないものかしら」
「神がシェルテスを封印してくれて、メルティアがレインを戻しに来てくれれば丸く収まるんだけどね。でもいまのところ何の動きもないわ。あったといえばこの玲音の書くらい」
「それ、誰の贈り物なのか分からないのよね？」
「そうなの。魔法の本だし、こっちの武器みたいだから、多分私たちの味方がくれたんだと思うけど、それが誰かは分からないの」
「ふぅん。ねぇ、危ない目にあったのって今日が初めてなのよね？」
「うん、今日よ」といったところで静がさえぎってくる。
「なぁ紫苑。思ったんだけどさ、夏期講習の始めに例の生徒に襲われただろ？」
　聞いてるお父さんが眉をピクっと上げる。
「あのときさ、あいつ気絶した後なんでもなかったかのように振舞ってただろ。あれっておかしいとは思ってたけどさ、もしかして今回のことと関係あるんじゃないか？」
「あ、そうかも……。でも随分時間離れてるよね」
「その間に何か襲われたりとか無かったのか？」
「ないわ……あ、ちょっと待って。いつだったか、公園で犬に噛まれそうになったの、突然。レインは平気だったんだけど。あのときもそういえば玲音の書の入った鞄を持ってたわ」
「凶暴な人間と犬、そして玲音の書か。無関係ではなさそうだが、どこに繋がりがあるのか甚だ謎だな」
「水月さん、もしかしたら狼じゃないかしら。ほら、月の悪魔なんでしょ、シェルテスって。凶暴化する狼男と、犬科の動物と、悪魔を召喚したかもしれない玲音の書」
「あぁ、なるほど。そうですね」
「ううん、それはないわ。そういう設定の狼男っていうのはアルバザードの神話に出てこないもの。西洋神話とは違うのよ」
「それもそうね」
「ただ、狼の代わりに現代日本では犬っていう線はアタリだと思うわ。思うにシェルテスは私が火の魔法を使って先生が呪文を読み上げたときにこっちの世界に召喚されたんだと思う。力が弱まっていて神の目もあるかもしれないからきっとこそこそ隠れてるのよ。それで動物や人を凶暴化させて玲音の書を奪おうとしてるんだわ」
「奪う……？玲音の書がほしいってことか」
「そういえばそうね。玲音の書がほしいってことは少なくともこの本は敵のシェルテスがくれたわけじゃないわね」
「でもおかしいな。シェルテスからすれば一番奪いたいのはドルテのはずだろ。自分の力

を封印された魔石だ。ほしくないはずがない。それより玲音の書がほしいっていうのは何でだろう……」
　言われて考え込む面々。あれこれ可能性は思いつくものの、どれも憶測も域を出ない。だからか、皆黙っている。
「とりあえず、玲音の書をどうするか決めないとな。このまま紫苑が持ってるのは危ないよ」と静。
「うん……でも本が狙われてるんだから置いとくわけにもいかないし……。やっぱり私が預かってるのがいいと思うのよ」
「紫苑が？」
「うん、今みたいに襲われたら今度は魔法を使えばいいと思うのよ」
「レイン本人じゃ駄目なのか？」
「この子も魔法は使えると思う。お父さんが召喚省にいたくらいだし。才能はあるんじゃないかな。でも、咄嗟に犬や人が襲ってきたらレインは戦えないと思うのよ。私なら大丈夫。格闘もできるから。魔法戦士みたいな感じかな」
「俺は魔法は使えなかったな、実験してみたけど。一方レインは格闘ができない」チラと親を見る静。というかお父さんを見ている。
「先生、お父さんは駄目よ。アルカ知らないから魔法は使えないわ」
「そうか……。でも紫苑に持たせておくのは心配だよ。明日から学校や塾を休んで家に篭っていたほうがいいんじゃないか」
「家も安全じゃないかも。さっきのことで住んでるところはバレちゃったと思うし。それにいつ襲ってくるかも分からないのに学校を休んではいられないわ」
　ためいきを吐く静。親は何も言わない。レインは沈痛な表情で何かを考えている。私は今までの話をまとめ、レインに訳した。レインは控えめな声で私が持っているのが一番戦力になると思うといった。
「さて、もう俺は帰らないとな。明日も仕事だし、どうやら今のところシェルテスの第２波はないようだし」
「一人で大丈夫？危ないですよ。今日はウチで寝て、明るくなってから車で川越に行けばいいんじゃないですか」
「いや……」気まずそうな顔をする静「そういうわけには行かないよ。それにほら、教材とか授業計画表とか色々さ、家に置いてあるから」
　別にそれでも朝早く出ればいいだけじゃない……。ここに泊まるのが気まずいってことなのね。私は頷いた。
　静は親に挨拶をして出て行った。私は玄関まで送っていったが、静は外に出ないようにという。親の目もそこにあることだし、お別れのキスができなかった。寂しいまま別れ、電話をくださいと言った。
　静が去ってから暫くして車に乗ったと連絡を受けてひとまず安心した。その間にお父さ

んがいつの間にかいなくなっていていた。戻ってきて何をしていたのか聞いたら犬やカラスを片付けてきたという。
お父さんたちはそのまま寝てしまった。私はレインと少し話してから２階に行って、２人で寝た。レインは元気がない。私を巻き込んで危ない目にあわせたことが相当ストレスなんだろう。危険は歓迎しないけど、レインを守るのは私の役目よ。

2006 / 09 / 12

当たり前だけど、よく寝れなかった。いつ奇襲されるか分からないから眠りが浅かった。今日は火曜日。私はいつものように着替えて準備をする。レインも朝ごはんの準備をする。昨日のことはあえて触れない。いつもと変わらない日。ただ違うのは、私が常に鞄を持って、中に玲音の書を入れているということ。起きてきたお父さんたちも昨日のことは特に触れなかった。お母さんが一言静が無事に着いたかと心配していた。
レインをどうしようかが問題になった。学校には連れて行けないし、家においてけぼりも不安だ。でも外にいるよりはマシだろうということで家に置いておくことにした。ドルテはあくまでレインが持ちたいそうだ。シェルテスが狙っているのが玲音の書とはいえ、ドルテを欲しがらないわけがない。レインの身が心配だ。本当はドルテは私が預かっているほうがいい。でもレインは私がこれ以上狙われるのは嫌だといって手放さない。アイテムを持ち合うことでレインは私へのすまなさを表現しているのだと思う。勿論、そんなこといっても危険になればレインは非戦闘員だから私が無理にでも預かるけど、いまはまだこのままでいいだろう。
家を出る前に静から電話があった。今出るところよといったら、ちょうど出るころだろうと思って電話をくれたそうだ。どうやら駅まで私が無事か、電話で確認しながら歩かせたいらしい。少し、いやかなり嬉しかった。

結局今日は何事も無かった。昨日の強襲が嘘みたいに普通の一日だった。レインも無事。静も無事。不穏な気配さえ無かったとのこと。本当にあれはシェルテスの仕業だったのかと一瞬思った。

2006 / 09 / 24

先週の日曜は仕事で忙しかったので紫苑とデートはできなかった。結局こないだ襲われてから、特に何事もなく平穏に過ごしているようだ。俺のほうにも何も起こらない。それでもいつ襲われるか分からない不安がある。どうも最近レインは家にいるそうだ。鍵を厳重にかけて。毎日紫苑が帰ってくるまで怯えているそうだ。紫苑も紫苑でレインが無事か気にしているようで、俺の授業に出ていても気がそぞろで時計をチラチラ見ている。複雑

な気持ちだが、レインの身の安全のほうが重要だろう。
　紫苑はケータイで休み時間ごとに家に電話をしてレインと連絡を取っているらしい。それならレインにケータイを持たせればいいんじゃないかと思うのだが。ケータイのほうが何かと便利だ。これから常に家に居られるとも限らない。次に襲われて家から逃げなければならなくなったときにケータイがないと連絡がつかない。
　そこで先日レイン用にケータイを買ってやった。紫苑には言わずに、俺名義で新規で買った。言えば必ず向こうが金を出すというだろう。そういうのが嫌なので事後承諾にすることにした。
　池袋でデートになったので、駅の改札で昼に落ち合った。大宮を経由してくるので都心に早く出れる。大宮は何かと便利だ。新白岡は大宮に繋がる宇都宮線上にあるから幸せ者だな。
　改札で２人を見たとき凄い違和感があった。一瞬、紫苑とレインを取り違えた。というのもレインがアルティス教の服でなく紫苑の高校の制服を着ていたからだ。二人は体型が似ているので交換可能なのだろうが、どういうことだろう。一方、紫苑はというと。
「――あれ、どうしたのその服？」
「えへへ、久しぶりに中学のときの制服を着てみました。私ちょっと童顔だからまだサバ読めますよね？」
　その年でサバもサンマもあるもんか。
「へぇ、中学のときの……。こないだ写真で見たね」
「こういうの好きですか？それともやっぱり飽きてます？」
「中学生は新鮮かな。もはや 10 年前の古い思い出だからな、俺にしてみれば。でもさ、高校のも中学のも結局は学校ごとのデザインだから、服だけ見て中高の区別なんて付かないよ」
「じゃあ転校した風に見えます？」
「そうだね。特に女子はふつう高校で背が伸びたりしないから、中学のを着てても違和感なくみえるね。っていうかさ、若干その……恥ずかしいみたいのなかった？」
「ん？恥ずかしいですよ」とあっさり認める「でも理由があるんです」
「理由？」
「私、中学のとき良い思い出ないんです。この服にも良い思い出がないんです。だからね、今日は先生とデートして幸せになって、それでこの服を着ていた私を幸せにしてあげたいんです」
「……そっか」俺は多分かなり紫苑を好意的に見つめたと思う。やっぱこの子は蛍に通じるものがあるなぁ「とりあえずコスプレ趣味じゃなくて安心したよ」
「そういうの嫌いですか？」
「嫌いというか……ふつうのほうが安心するだけ」
「ふぅん」紫苑は手を顎に当てて考える。表情は中学生に見えっこない「ちょっとロリな

姿で先生を誘惑しようという下心もあったんですけどね」
「え？」
「ですけど、失敗しました」
「……そう。ごめん、ノリ悪くて」
　俺は淡々と答えて歩き出した。この言い方がこの子なりの冗談なのだろう。この辺りの口調は蛍とまるで違うな。
「ところでレインはなんで制服を着てるの？」
「日本の学生服を着てみたいんですって」
「へぇ」少し好意的な笑顔の俺。レインに話しかける「日本に順応しようって気になってきたのか。成長したな、レイン」
　レインは首を傾げる ᘐeᔑ ᑦᖻ -ᔑeᓚ, ᓚcZᑫ-δ ᘓ
「……日本語のほうはまだまだのようだけどな。ほら、レイン、服だよ、服」
　レインの肩を抓んで制服を上下に少し揺らすと、レインは服装について何か言われたのだということが分かったようだ。
ᘐ--, ᑦᖻ -ᔑeᓚ-ᑦ >cl ∧ɔ∧ lecᐱeᔑ ᑦə ᔑeᑦe,, >>δ ᑦᖻ ᔑccᐱ- ∧ɔ∧ ᑫɔᑎɔeᐱ <elᔑ e ᓚcɔ∧δ ᘓ
「ええと、何いってるのかサッパわからんな。ᑦc ᔑccᐱ- ∧chɔ∧δ」
ᘐeᕽδ ᑦᖻ eᐱ ᔑeᐱᔑ-ᑦ ᓚe ɔ∧ ᔑ-ᕫ ∧ɔ-∧ eᖻɔδ ᘓ
　紫苑が俺らの会話を聞いてくすくす笑っている。訳せよ、訳せって。そんなに意思疎通できないもんなのか？ボディーランゲージも通用しないって……「明日がある」の歌詞じゃん。
「先生、レインが私の服着てるの見てどう思った？」
「あぁ、始め一瞬間違えそうになったよ。顔見て分かったけど。いや、むしろ髪見て気付いたかな。肌とかも違うし。紫苑は色白だけどレインはもっと白人に近いからね。ハーフの女子高生みたいだと思ったよ。電車で稀に見かけるようなさ」
「レインのほうがずっと可愛いと思いますよ、そこらの子より」
「そこらのと比べればそうかもな。ただ、俺は紫苑のほうが可愛いと思う」
「えぇ？」と笑いながら言う紫苑。嬉しそうだ。
　東口へ出る。目の前の長い横断歩道を目にするとレインはすかさず俺の腕にしがみついてきた。紫苑はいまの俺の言葉があったからか、或いはしょうがないと思っているのか、険悪な表情は見せなかった。むしろ険悪だったのは俺のほうかもしれない。俺はふつうの、どんなに若く見積もっても大学生くらいにしか見えない格好だ。それが女子高生と女子中生を連れて歩いてるから、やたら行き交うやつらに見られる。ただでさえ紫苑みたいな美少女つれて歩くと見られるというのに、レインがプラスされてその上制服じゃな……。
　まずい、緊張で冷や汗が出てきた。いまは昼なのでまだいいものの、職質とかされかねん。とりあえず俺の見た目は遊び人っぽく見えているだろうから、どうにか金で買ったとは思われまい。そこはセーフだ。と同時に、良いパーツをくれた親に感謝だ。

横断歩道を渡ってもレインは離れようとしない。きょろきょろと辺りを見回し、通る人にぶつからないよう警戒している。
「こういう雑踏ってアルバザードにはないの？」
「ないかなぁ。こんなゴミゴミしてないからね。レイユっていう時代の始めごろはきっとこんなんだったと思うけど」
左折して目の前の横断歩道を渡り、右折。左手のビックカメラを過ぎる。レインが何か配っている連中をじっと見ている。何か手渡されそうになり、怯えて俺の腕を更に強く抱きしめた。田舎者でもこんな反応はしまい。
直進するとまた横断歩道。ここからはサンシャイン通りだ。急に車がないのでレインはどこが歩道なんだか分からず、困惑した表情だ。確かにこう考えると日本の道路事情は悪いな。それでも自転車をやってると、道路に平気で穴が開いてるようなフランスとかよりずっとマシだと思うんだがな。
なんだかレインは歩くだけでストレスなようだ。不安にさせると悪いのでサンシャインへ入った。エスカレータで地下に降りて建物の中に入ったら少し落ち着いたようだ。
「あのさ、レイン。悪いけど、手を離してくれないかな」
くいくいと腕を動かして指示すると、レインは意を汲んで ᘛ⁐̤ᕐᐷ͈ᵉᐷ͈ᶜ⁐̤ᕐᘚ といって離れた。別にレインが嫌だというわけじゃないんだが、どうせしがみついてくるなら紫苑にしてほしい。ま、生憎俺のお姫様は推察するに俺より強そうなんだがね。

「ええと、昼は何にしようか。特にリクエストない？」
「うーん」と紫苑は顎に人差し指を当てて、目をくりっと動かす。この動き、ジュンクで初めて見たものだが、変わらないなぁ。
「そうですね、特に食べ物の内容ではありませんけど」
「うん」
「蛍さんと行ったところがいいです」
「え」
「私で塗り替えたいんですよ、彼女の記憶を。そうすることが彼女の影を消す方法だと思うんです。完全には消えないと思いますけど」
「紫苑はそれでいいの？」
「はい。私がそうしたいんです。前の女の匂いを消したいから。「あぁ、この店は蛍と来たなぁ」とか思うでしょ、どうせ。それでもいいんです。１回行けば今度は「こないだ紫苑と来た店」に変わるでしょう？」
「それって紫苑にとって辛くないか？」
「私へそ曲がりですから。蛍さんに勝った気がして、わりと良い気分ですよ」
「別に蛍は俺が死のうが生きようが何とも思わないよ。だから俺が誰とどこ行こうが一顧だにしない。俺があいつに対してそう思っているように」

「んー、いいです。自己満足ですから。さ、どこのお店にします？」
「そうだな……じゃあそこの「ぱすた館」にしようか」
「ラパウザみたいなパスタ屋さんですか？」
「いや、お好み焼きなんだよね、意外なことに。お好み焼き大丈夫？レインはどう？」
「大丈夫です。レインも宗教的に食べられないものとかないですし」
　ぱすた館に入ると席に着いてメニューを眺めた。お好み焼きについて少々説明をしてから注文を取る。紫苑は俺のお勧めを聞いてレインに訳し、絵を見せながら何か喋っていた。もんじゃ焼きを見せたときに怪訝な顔をしてᘏeᔑ el ᒐeᐱ leᔑ ᒐeᐱ Ꮆᓀ ᐳɔ-ᖵᓓ と言った。紫苑は１秒ほど間を開けたと思うと、ぷっと吹き出してわりと豪快に笑った。爆笑しているようだが、俺には分からない……。
　結局レインはお好み焼きを頼んだ。もんじゃがどうかしたのだろうか……。具が来る間、ぼーっと時計を見ていた。紫苑の言うことは当たっている。確かにここは蛍と来た店だ。でも、今度はもう紫苑と来た店になるだろうな。こうして蛍はどんどん消えていくわけだ。ほんとに文字通り蛍だな。
　店員が丼に材料を入れて持ってくる。混ぜましょうかというので３人分頼んだ。
「へぇ、この透明な蓋をかぶせるんですね。で、この砂時計が落ちたらひっくり返すのね」
「そうそう。昔より焼くのが早くなって便利になったよ」
「そうなんですか？」
「あぁ、昔はこの蓋がなくてね。食べるまで 15 分くらいかかった。俺も蛍も学生で腹減ってたからさ、早く焼けろーとか思ってた」
　焼けたものを俺がヘラでひっくり返してやる。砂時計をひっくり返す。レインはきゃっきゃと楽しそうにしている。お好み焼きという食べ物が面白く映っているようだ。青のり、ソース、マヨネーズをかけ、テーブルの横に付いているボタンで鉄板を保温状態にして切り分け、皿に載せていく。
「そういやさ、レイン、砂時計ってアルバザードにもあるのか。lecᐱ，ᑕᓀ eᑕ ᑕɔᛥ」
ᘏ>>ᛥ ᑕᓀ，ᔑ-<>ᛥ ᓄɔᐱ ᒐe->elᑐ„ ᒐcZᑐ-，ᒐe->elᑐᓓ
「ᒐe->elᑐ ね。やっぱあるんだ、異世界にも。へぇ〜。なぁ紫苑、向こうの時計って右回りなの？」
「そうです」
「じゃあアルバザードは北半球か」
「はい、さすが先生」
　蛍と違って紫苑にとってはこのくらいの推測は当然のようだ。
「あ、これおいしいです。lecᐱ，ᑕᖵᓀ ᐱ->ᑕ -ᒐ ᑕᓀ >cl ᑕᓀ eᑕ h-ᔑᑕ」
ᘏ-ᒐ ᘏレインは真剣な顔になってお好み焼きを突いている。日本人２人でレインを見つめる。ぼそぼそと突いて小さな破片を取り出すと、慎重に口に入れた。じっと見ている２人。レインは恥ずかしそうな顔をしてᘏᑕe cᐱ ᐱɔᐱ，ᖵ-ᐱ ᒐeᐱ，lclcᔑᘏと言った。

紫苑が ᘐ-ᑕᓚẟ ᘐと聞くと、レインは「んー」と言って苦笑いした。
ᘐᑕᓀ ᓚɔc eᑕ cᐳᖻᓀ ᓚ-ᐻᑕ ᐱɔᐱᘓ
「そうねぇ、日本人は世界中の料理を食べるから色んな味に慣れてるけど。アルバザードもその辺りは同じじゃなかったかしら。まぁ、日本人だってインドの珍味とか食べないから慣れない味に抵抗を感じるのは仕方ないね」
「ん、レインはこれ嫌いだって？」
「ううん、珍しい味だって。それだけ」
「そうか、まぁそうだろうな。でも嫌いで食えないんじゃないなら御の字だ」
レインは何口か食べているうちに慣れてきたようで、パクつきだした。
「そうだ、レインにプレゼントがあるんだ」といってケータイを出す。
「ケータイ……ですか？」
「あぁ、紫苑が毎日家に電話してるみたいだけど、何かあって家から出なきゃいけないときとか、今日みたいに外に出ていて万一はぐれちゃったときのためにさ、持ってるといいと思うんだよ」
「なるほど。でもこれ一体どうしたんですか？先生が買ったの？」
「あぁ、俺名義だよ。紫苑と俺のケータイへはいくらかけてもタダになるように設定してきたから、気兼ねなく使って」
「え……でも固定料金は取られますよね」
「そりゃそうだけど、そんなのどうでもいいよ。紫苑とレインの気が休まれば」
「うん。そう、そうね。うん、ありがとう、静。ほらレイン、ꓤ ᐸcᑕcᑐ ϶c-ᑫ-϶ - ᑕᖻᚴ」
ᘐᑕᓀ eᑕ ᓚ-ᐱᑕẟ 0--，ᔑeᐱᑕ-ᐱᑕ，ᓚcZᑫ-ᚴᘓ レインは嬉しそうだ。
紫苑はケータイの使い方を説明しようとしたが、最近の女子高生にはあるまじきことで、使い方の説明ができなかった。しょうがないので俺が紫苑に説明をし、それを訳してもらった。何だか紫苑にまでケータイの使い方を教えてしまったようだ。
レインは賢い子で、すぐ使い方を覚えた。試しに俺と紫苑のケータイにかけて練習してみた。俺に電話をかけてきて、目の前で俺を見ながらくすくす笑ってる。この状況が面白いのだろう。
ᘐᑕᓚ-ᐱᑕeẟ ᑕᓚ-ᐱᑕeẟ ᑕᖻ eᑕ lecᐱ,, ᓚcZᑫ-，ᔑeᐱᑕ-ᐱᑕᚴᘓ
「ん？もしもし。聞こえるよ」
そう返したところで切れてしまった。レイン語はほんと分からん。

会計を済ませて店を出ると、すぐ左に曲がって直進し、エスカレータに乗る。店で随分時間を使ったな。もう昼をかなり過ぎている。
「なぁ、ジュンクに寄っていいかな」
「うん」
エスカレータを降りようと前を向く。すると一番上のところで通せんぼするように男が

ぼーっと立って下を見ていた。邪魔だな、どけよと思いつつ、後ろを見る。後ろの誰かを待ってるようだが、それじゃ通れないだろ。俺が無言で睨みを利かせると少し後方へずれた。そのまま怪訝な顔のまま俺が横を通り過ぎたとき、ふいに男が紫苑めがけて両手を突き出した。
「おいっ！」と叫ぶと同時に俺は男の胴を蹴り飛ばしていた。咄嗟なので威力は無いが、男は一瞬よろめいた。
「えっ！？」と紫苑が驚いた顔でエスカレータを降りる。
「突き落とされそうになったんだよ、いま！」
「えぇっ！？」紫苑はとっさにレインを後方へ下げる。他の客は俺らの間を走るように縫って逃げていき、下のほうにいた客は気付いていない。俺はエスカレータから少し離れ、男を誘導した。
「なんだお前、いきなり危ないじゃねーか」
　しかし男は何も言わずに呻った。髪を茶色に染めた 20 台後半の男で、格好が土方みたいで、ガタイは俺より良い。なんだってんだよ。男はポケットに手を入れるとナイフを取り出した。おいおい、なんでそんなもん持ってんだ。
「先生、こいつ目がおかしいわ！シェルテスの眷属よ！」紫苑は玲音の書を取り出した。
「やめろ、紫苑。ここで魔法を使うのはまずい。ナイフ出してるし目撃者も出てる。もうこの時点で夕方のニュース決定だ。その上魔法なんか出てみろ」といって構える。
　男が横にナイフを振って突っ込んでくる。バカか。ナイフの高さはせいぜい胸。薙ぎ方は右上から左下へ。振り上げた瞬間右に一歩ステップして、身体を斜めにして後ろ足にした右脚で前蹴りを高く放った。ナイフに脚が掠めるのを避けたのだ。だが、いうほど簡単ではない。相手はゆっくりナイフを振るわけではない。小刻みに何度もブンブン振るわけだから、タイミングを見誤ると脚を切られる。今回は運がよく、当たってくれた。吹っ飛ぶ男。きゃあという観衆の女の声。
　男はすぐに立ちあがる。マンガならナイフを叩き落したり腕を捻ったり蹴りでナイフを持つ手を弾いたりするが、あれは実際はまず無理だろう。演舞じゃないんだ。当たれば一発でアウト。攻撃力は無くとも最もナイフと接触しないタイミングを狙って徐々に警察が来るまで耐えるしかない。
「どいて、静！」
　そう思ったと同時に紫苑の甲高い声が空間を切り裂いた。紫苑も構えている。あれは空手だ。極真のようだな。あの綺麗な顔、華奢な身体でよくもまぁ。
「来い！アンタの狙いはこの本でしょ」と鞄にしまった玲音の書をパンと叩く。
「やめろ、紫苑。逃げるんだ！もしくは警察が来るまで待て」
「先生、援護してください。私に振ってきたら私はガードするから先生が後ろから蹴って。lecʌ，ʌɔʌ ɻc-ʌ ʌ-ʌ ∨-ᒍ lɐ ∨cʔ„ ᒍɔʌ ᑢЧɐ ᔑeʌ ʔɔᔑ I-ʌʔ lɐɐᑢ ᒍe ≻cʌᒐ，∨-ʌɻ lɐ ʔɔʔʔɔ ɻɔlᖵ」
「駄目だ！危ない！俺が囮になる」

男は俺と紫苑に挟まれやや困惑気味だが、結局紫苑に照準を定めた。俺は紫苑を守るために男の前に出た。刺されるわけにはいかない。体力を削りきるまで上手く蹴りを当ててやる。と思った瞬間、ゴッと鈍い肉と骨の潰れる音がした。その瞬間男は叫んでナイフを落し、血の噴出する左耳を押さえた。

見るとそれはレインだった。いつの間にか消えていたレインが石を投げつけたのだ。それが見事命中し、男は沈んだのだ。このチャンスを逃す手はない。俺は男に駆け寄ると地面のナイフを紫苑のほうに蹴った。ナイフは紫苑のほうへスピード良く転がり、紫苑が回収した。俺はうつぶせに倒れこんだ男の顔面を下から思い切り蹴り上げた、男は声にならない声を出して倒れた。

ᏮcΛᖬ ᒐeᑕal c ᑋa-ᖬᏭ

ᏮeᎭᎴ -,Ч- Ч- Ч-ᖬ le eᑕ ᑕɔᎴ ᔑeleᔑᎴᏭ

ᏮᔑeΛᒐ-ΛᖬᏭ

「なんだ、紫苑」

「この人の口から何かでませんでした？」

「さぁ……」と目を凝らす。すると異変に気付いた。確かに色の付いた小さな煙みたいな塊が男の口からでてきた。

ᏮlecΛ, le eᑕ….Ꮽ

Ꮾᔑeleᔑ eЧɔᎴᏭ

Ꮾel cΛ ᔑeΛ ᔑeleᔑᎴᏭ

Ꮽ>>….Ꮽ

するとその煙はふわふわと飛んでいき、近くでこの騒動を見ている野次馬の若い男にぶつかってすっと消えた。男は年は大学生くらいだろうか。でも明らか大学には行ってなさそうなガラの良くない不良という感じだ。今までぼーっと静観していたのに、急にこちらを睨み付けて近付いてきた。

「紫苑、まずいな」

「いまのセレスが人を凶暴化させたの？」

「セレス？アルカの単語か？よく分からんが凶暴化という点では同意だ。あいつも来るぞ」

「キリがないですね。それにもうすぐ警察が来るはず」

「逃げるぞ、エスカレータを逆走しろ。レインからだ！」

ᏮlecΛᖬ leΛ- elᐸ l- Vcᑋᖬ leᐸ ᑕa ɔVΛ-ᐸ cᑕ -ᑕaᖬᏭ

レインは脱兎の如くエスカレータを駆け下りていった。乗っている人が若干名いて、驚いた顔でどく。紫苑もそれを見て走る。俺はそれを確認し、走る。するとやはり男はスピードをあげて走ってきた。

「先生っ、レインが先頭じゃ次どうしたらいいかわからないわ」

「降りたら右だ。迂回して最終的には車に戻る。ハンズの裏辺りのパーキングに停めてある」

「じゃあ先生が先頭行って！レインが２番。私が後ろに付いてレインを挟んで守るから！
lecʌ, ∪cZ⁊- ϑcɔ leʌ- -l ->ɔ,, ∪ɔʌ ∪c leʌ- ⁊eʌℓ c (ϑ, ∪cZ⁊- e> ɔ∪ʌ,, Ч-ʌ (Чϑ e> ∪eel,
ʌɔʌ e> he(, ϑ-∪∪ɔ ℊ」
ᵒЧ-, ϑ-∪∪ɔ⊦ᵒ

エスカレータを降りると、男はもう数 10cm の距離まで来ていた。俺は振り向きざまに後ろ回し蹴りを入れた。これは得意技じゃない。というか殆ど打ったことがない。だが不意を突かれた攻撃だった上に運良く膝に当たったらしく、男は呻いて一瞬崩れた。これで機動力が低下しただろう。

順番を入れ替え、走る。右折して動く歩道の通路をひた走る。レインの遅さが気になりつつも、走る。右折して長いエスカレータを人を掻き分けながら昇り、ハンズの横へ出る。振り向くとレインは付いてきていたが、疲れている。紫苑も付いてきているが、男もだ。

「こっちだ」といって左折する。後ろを気にしながら走る。左折してまた直進。すると十字路が見えた。手前左にパーキングがある。今日はそこに停めた。まずいな、観音開きと言ってもクーペの RX-8 は後部に乗せるのに時間がかかる。マツダもこんなケースは 100％考えてなかっただろう。俺はドアを開けると速攻でレインを乗せる。

「レイン、乗れ！」

手で促す。男は紫苑に追いつきそうだ。むしろレイン中心の低速でよく追いつかれなかったものだ。蹴りが膝に効いているのだろう。先制攻撃をしかけておいて良かった。俺は財布をポケットから出し、紫苑に任せて自分が倒すかどうか一瞬考えたが止めた。パーキングの料金を払わないと出れない。だが紫苑にそのやり方が分かるはずがない。更に、生憎今日は前向き駐車だからバックから出ないといけない。それも時間のロスだ。２重のロスは痛い。

「紫苑、時間稼ぎをしてくれ」

「はい！」と紫苑は構える。息が殆ど乱れてない。男も構えて警戒する。良かった、さっきの土方と違ってナイフみたいのは持ってないみたいだ。両者が構えると膠着するので時間は結構稼げる。

駐車番号を選択し、金を入れる。釣りなんか気にする暇はない。最低限の操作をすると紫苑に加勢しとうとした。男は紫苑に特攻した。紫苑は高く男の顎を蹴り上げたが、外されてしまい、肩に当たっただけだった。男は脚を掴むと、そのまま突っ込んで紫苑を押し倒した。小さく悲鳴を上げる紫苑だが、受身を取った次の瞬間、男に右手で目突きを入れた。少林寺系の普通の目突きじゃない。空手でもあれは教えない。オリジナルか？指４本使って威力を減らし、その代わり命中率を上げた目打ちだ。なるほど、目を潰さずとも暫く視界を遮ればＯＫってことか。マウントを取った男は叫んで目を押さえた。

その刹那、俺がステップインして右脚の回し蹴りを放つ。最も得意な技のひとつだ。格闘技をやってない奴ならこれを太ももに当ててほぼ一撃で沈めることができる。今はその蹴りをマウントしている男の頸部めがけて放った。目を押さえる男の手を巻き込んで首か

ら思い切り吹き飛ばしてやった。右上から左下へのベクトルで蹴りを首に食らい、男は吹っ飛んで地面に横向きに倒れた。手首や指は折れたことだろう。紫苑はすかさず立ち上がると、思い切り男の足首を踏みつけた。男が叫ぶ。
「これで動けないはず。乗ります！」といって紫苑は運転席から入り、素早く小ネズミのように助手席に飛び移った。後ろから見ているとスカートの中が完全に見えるのだが、全く気にしていない様子だ。なるほど、これが戦士たる所以か。だがこうなることをある程度見越していたのだろうか、スカートの下には短い黒のスパッツを履いていた。
　バックで轢いたら流石に死ぬだろう。俺は膵臓の裏を狙って蹴りをガンガン入れ、男を脇に数mずらした。翻って運転席に乗り込むと、ベルトなどするはずもなく即座にドアを閉めてエンジンをかける。後方確認は乗る前にしておいたので確認せずバックで一瞬で出て、方向転換して爆走した。とりあえずここを離れたい。

「ひとまず安心だな。これはニュースで報道されるだろうか」
「多分大丈夫です。見ていた人殆どいなかったし、喧嘩くらいに取られると思います」
「セレスっていってたな。それって何だ」
「魂とか霊魂とか……そんな感じのものです。死ぬと人間から出ていくんですが、今回の場合は違いますね。セレスじゃないのかも。あの魂っぽい光が人や動物の身体に乗り移ると凶暴化するみたいです」
「シェルテスの邪念が形になったものってことだな。あの光が邪念の具象形か。ああいう存在はアルバザードの神話にはないのか」
「あるけどやっぱりセレスですね」
「魂とは語法が違うってことか。ああいう邪念の塊であろうと、シェルテス本人が死んでなかろうと、その意思を持ったああいう物体なら魂の一種なのか」
「特定の誰かの意思や性質を持ってその誰かの体から分離した存在一般を言うんでしょうね」
「あぁ。まぁそんなことよりこれからどうするかだが」
　254 に出た。後ろを見るとレインはまだ震えている。非戦闘員は自分が戦えないことでフラストレーションが溜まるだろうな。それに戦えないので不安も大きいだろう。しかしレインは運動神経こそ悪いが蛍ほどトロくなくて良かった。今回の件、巻き込まれたのがあいつだったら、とっくにこの時点で終わってたな。
「どこに行きましょう……」
「安全な場所はどこだろうな。とりあえず車の中は襲われる心配はないが」
　と言った瞬間、ガンという音が聞こえて身体が揺れた。何だと思ったら左のバイクだった。ヘルメットをしていて顔が見えないが、このライダーが横から蹴りを入れてきたのだ。
「おいおい……ふざけんなよ」
「こいつも操られてる！」

「愛車を蹴られて黙ってられるか」窓を開ける「おいテメェ、コラ！左に詰めて潰すぞ！」
　実際夜で人気がなくてカメラもなければ潰してただろう。
　男は反応がない。信号は青でまっすぐ進んでいる。後続車は俺が蹴られているのが見えているだろう。目立つのはまずいのだが。
　俺は左にやや詰めた。紫苑が殴られたり髪を引っ張られるとまずいので窓を閉める。
「先生！ほんとに轢いちゃまずいですよ！操られてるだけなんだから」
「ギリまで詰めて危険を感じて後ろに回れば良し。そうでなくてもギリまで詰めれば脚を伸ばしきれないから蹴れない」
「なるほど」
「車も安心できないな。しかもセレスがバイクじゃなくて車に乗り移ったらまずい」
「突っ込まれるってことですよね」
「あぁ。くそっ、高速なら負けねーのに！こう雑魚車がうじゃうじゃしてっと避けんのも避けらんねぇ」
　遠くで信号が赤になり、徐々に車がスピードを落す。停まられるとまずい。停まったらこのバイクが猛攻をしかけてくるだろう。俺はとっさに右ウィンカーを出し、第２に入ろうとした。ウィンカーを出してるのに第２にいる奴は道を譲ろうとせず、スピードを落さない。俺はむしろ前が赤なのにスピードを上げ、スレスレのところで無理やり第２に入りこんだ。後ろからクラクションを鳴らされる。
「うっせーボケ！死にたくねーなら入れさせろ！ウィンカー出してんだから気ぃ利かせ、バカが！俺が止まるわけねーだろボケ！」窓を開けて後ろに怒鳴りつける。紫苑が目を丸くして俺を見てくる。
「悪い……ドン引きさせたな」
「いえ……そんな調子で蛍さんと喧嘩してたのかなって。で、私もいつかそんな風に扱われるのかなって」
「いまは緊急事態だからテンパってるんだよ。紫苑のオヤジさんみたいに冷静な人なら大丈夫だろうけど、男なんざこんなもんだ。血が熱いほど特にな。なんだよ、トラックの運転手やガテン系の男に限定的な口調だと思ったか？」
「ガテン系が何かは知りませんけど、そういう男の人を見たことがなかったから驚きました。でもね、アルシェもそうだったかも。結構こういうときに汚い言葉を怒鳴ってたから。アルカより日本語のほうが私にはショックが大きいのよ。ほら、逆にレインは特に気にしてないでしょう？」
「あぁ」と言いながらバイクを見る。第１に取り残され、第１の車に進路を絶たれている。これで一安心だが、安心は１分も持たないな。
「まぁ別に俺の本性はこうだけど、こういう面を出すのはこういう状況だからね。人間は本性を抑える動物だ。一々何でもないのに本性を見せるようなことはしないだろ。別に紫苑がこう扱われる心配なんてないよ」

「そうですね。先生は優しいから、信じてます」
　俺は何も返さずにいた。信号が青になる。
「別にフェミニストじゃないけどな、俺は。バカは嫌いだ。男でも女でも変わんねーよ」
「あ、先生」
「ん？」
「その言葉遣い、私は嫌いです。恋人が横にいるの。いつもの優しい言い方にして。不安だわ。私に向いてなくても私まで冷たくあしらわれてるようで不安なの。お願い」
　紫苑の気遣った言い方で俺はプライドを保たされた。それによって冷静さを取り戻した。男というものはある程度こういう生き物だが、俺は特に自尊心で生きる傾向が強い。どんな逆境だろうと自尊心を保てる状況にあれば強くいられる人間だ。
　蛍は無言で怯えて何も言わずにおろおろ気を使うばかりだった。そのことが余計心配性の俺の不安を膨らませ、様々な被害妄想に駆り立てた。自尊心を失い、優しい男を演じる余裕もなくなった。蛍が悪いわけではないが、少なくともああいう女は俺みたいなプライドをガソリンとする男には有毒だ。全く役に立たない。紫苑はその点は大きくクリアだ。
　案の定、バイクが第２に入ってきた。また左寄せをする。バイクは第１の車と挟まれて蹴れないが、事情を知らない第１の車がクラクションを鳴らしてくる。うっせーな。
　そろそろときわ台駅の近くだ。突如、俺はスピードを落す。また後ろがクラクションを鳴らしてくる。バイクも速度を落す。前の車と俺との距離が開く。交差点の信号は青だ。「舌噛むなよ」と言って一気にアクセルを踏んだ。紫苑が「きゃっ」と言って後ろによろめく。加速を加えて一気に前との車間が詰まる。前の車の左にはまだ誰もいない。第１には白いトヨタのコロナ。まだこいつは遅い。俺は更に速度を上げ、前にいるニッサンティーダにぶつかるスレスレのところで第１に入る。コロナが当然の如くクラクションを鳴らすが気にも留めず、そのままウィンカーも出さずに横断者と別のバイクの巻き込みだけ確認して奇襲の左折で環七方面に入った。バイクは 254 を出るは愚か、第１に入るはことさえできずに直進していった。
「よし、勝った！」
　バンとハンドルを叩く。爽快だ。紫苑は「すごーい！先生！」と褒めてくれた。そうそう、ここで褒めてくれる女が良い。蛍も褒めてくれたが、とりあえず褒める以前に今頃怖がっていただろうな。俺がその後「凄くない？俺」と言わない限り褒めてくれなかった。つまらない女はいらない。蛍はその点では良かったが、他の女は俺の奇行を咎めるだけのつまらない「良識ある」女ばっかだった。俺は自分の破格さを肯定してくれるような女がほしい。だから蛍は快適だったが、その蛍でもこのプレーを見せられた後は心臓がドキドキ言って何もコメントを付けられなかっただろう。どうやら紫苑とは年は離れているものの、相性は相当良いようだ。
「今のかなり危なかったね。プーって一杯鳴らされちゃったね」
「あぁ、かなり迷惑だったろうな」と笑う「レイン、大丈夫か？ ᑫᓀ eᑫ ᕽ-ᔑᔑɔẟ」

ᘏЧ-，ΛɔΛ Λ-ᑐ ΛcᑋᑐcΛ ᑐ-Ⅰ ϶-ᒧᒧɔ….ᘏ と具合が悪そうだ。まぁこの辺りの反応は蛍と同じか。レインには何の感慨も湧かないのでどんな態度だろうとどうでもいいことで気にならないが。
「先生の家に行きますか？」
「うん。でも 254 から外れたからね。まっすぐ行けば桜台行って、練馬から大江戸線沿いに昇っていって光が丘だけど、迂回のしすぎだな。小竹向原を過ぎたからな……一旦新桜台のとこで折り返して有楽町線沿いの 441 に乗り次ぐか。そしたら氷川台にぶつかるから、左折して直進。平和台過ぎて左折して環八に入ると遠回りだから後は地元の道を使ってくよ」
「なんだかよく分からないけど、分かりました。先生に任せます」
　紫苑とレインは辺りを警戒していた。俺は運転に専念した。運の良いことに、車の運転手には乗り移らなかったようで、どうにか家まで無事たどり着くことができた。車を停めると蹴られた部分を見る。紫苑は文句もいわず、むしろ心配した顔で「大丈夫ですか……」と聞いてくる。凹みや傷は無いようだ。良かった。
「こっち。早いとこ入ろう」といって２人を促す。２人は辺りを警戒している。俺は部屋を片付けてないし、家に家族がいるか知らない。だが四の五の言ってる場合じゃないので連れて行った。鍵を開けて中をみたら運良く誰もいなかった。中に入って鍵をかける。ふぅと一息つく。
「いま誰もいないみたい。ちょうど良かった。あがって。何飲みたい？」
「あ、お構いなく」
「なーに可愛げのないこと言ってんの。バーテンじゃないけどふつうの飲み物ならいくつか置いてあるから」
「じゃあお水ください。喉の通りが一番いいから」
「レインは？」
ᘏᑐЧa ᒐeΛ Ⅰ-Λ ᑐɔδᘏ
ᘏ--，ᐸcᑐ eᒧ - ΛɔΛ，ᒧeᑐᘏ
「お水がいいって」
「はいよ」と言ってコップに水を入れて渡す。俺も飲む。水でいいや、もう。
　部屋に２人を入れた。
「汚れてるけど」
「そんなことないです。男の人の部屋ってもっと荒れてるのかと思ってました。うわぁ、何か凄い部屋ですね」
「さて、どこに座ってもらおうかな」
「私とレインはベッドに座っててていいですか？」
「うん、それでいいなら」
　ちょこんと座る２人。俺は机の椅子に座る。

「そういや凄い部屋って？」
「え、ほら……まず本がたくさん。あと、このスピーカーとか。なんかおっきいＣＤプレーヤーみたいのもあるし。そっちのは何ですか？」
「アンプだよ。高いのになると再生機とスピーカーと増幅器は別々になっていくから。アンプだってほんとは２つくらいに分かれるもんなんだけど」
「へぇ……男の人の部屋ってこうなんですか？」
「いや、人によって全然違うよ。趣味が出やすいだろうな、男は。女の部屋は合理的なもので満ちてるんじゃないか。男の部屋は夢の置き場だよ。女の部屋は実用空間だ。違うかな？」
「どうでしょう。私の部屋、そういう風に見えました？」
「そうだな、やっぱりすっきりしてた。女の部屋はごちゃごちゃ汚いか整理されてるかの違いで、中身は大差ないと思う。行かなくても人見てれば分かるよ。普通の女の荷物も大体想像つく。一体型の小さいＣＤプレーヤーだろ、何枚かＣＤがあって、机と椅子。日記やノート。クローゼット。化粧台みたいなやつ。後は雑誌やら本やら。他には食い物かな。小物とかもあったりする。あとは見られたくないものがちょこちょこ引き出しとかに入ってたりな。押入れはアルバムや服や昔のものが適当に突っ込んである。大体こんなとこだろ」
「私はよく分からないけど、とりあえず私とレインについては当たってますね。何となく女のこと見下してます？」
「そう聞こえたかな。そうだろうな。まぁ、趣味のないというか夢のない空間だなと思ってるよ。でも女で地に足が着かない奴は男の支えにはならない自己中な奴だと思ってる」
「それって……どっちがマシなんですか？」
「マシも何も前者だよ。見下してるようだけど、俺の好みとしては将にそれでいいんだ。女らしくてまことに結構だ」
「そっか……私、静がそのほうが好きならそれでいいわ。フェミニストでも何でもないし。たとえ静が女を見下すタイプのショービニストだとしても、要は私のことを好きでいてくれれば構わないもの」
「そんなもんかね」
「はい、そうです。蛍さんはどうでした？」
「ん？蛍……も同じだったな」
「そっか……じゃあ私はあまり先生が増長しないようにしないとなぁ」
「はは」思わず笑う「最近お互い、心の中の言葉が外に出やすくなってるんじゃないか？」
「ふふ、そうかもしれませんね。ん……私、先生が好きですよ」
「え？」何の脈絡でだ？
「何となくいまそう感じたの。で、言いたくなったの。それだけ。気持ち、ハッキリ伝えたいから」

「そっか」と頷いた。蛍も脈絡なく言ってきたな。あいつにとっては脈絡あったんだろうけど。
「蛍さんの荷物ってないんですか？」
「昔は溢れてたよ。とにかく片付けない子でね。荒らされてた。あいつの荷物で歩くのが大変だったよ。服とか化粧品とか本とか書類とか色々……足の踏み場がなくて、俺が時折片付けてた」
「へぇ、意外。大和撫子な感じかと思ってました」
「俺もそう思ってたよ。でもそういうと決まってこう返してくるんだ。「私は病撫子だからなぁ」って」
「自己卑下する人なんですね」
「生涯苛め通されてきた子だからなぁ」
「私と似てるようで似てないんですね。いなくなってから荷物はどうしたんですか？」
「一切連絡してないからね。戻ってこないのは決定したし、実家も当たってないし、悪いが勝手に処分させてもらったよ。膨大なゴミだった」
「何も持ってかなかったんですか、家出のときに。あの……聞いちゃいけないとは思うんですけど、いい機会だと思って」
「持ってったよ。パスポート、印鑑、身分証、通帳、アルバムなどなど、家出に必要なもの全部用意周到にな。前日というか出て行く数時間前までは普通にしていたんだ、２人ともな。まさかあのあと、つまり俺が寝た後、スキをついて出て行くなんて思わなかった。最後の夜な、２人とも疲れてたんだ。で、蛍が眠いって言ったんだ。俺は「あまり疲れてるときって一瞬で眠りにつけるよなぁ」なんて言って寝かせたんだ。俺のほうがむしろ後に寝たんだ。だがタヌキ寝入りをしていたのか夜中に起きたのか……よく分からん。明け方な、ガタガタ押入れを開ける音がしたんだ。何をしてるのかなって夢の中でうつろになりながら思った。会社に早く行くことになったのかなと感じた。もしかしたら夜中に発作的に起きてヒステリーを起こし、全てに悲観して前々から出て行こうと思っていたのを決行したのかもしれない。或いはもう寝る前からタヌキ寝入りをして俺に見つからないように最小限の携行品だけを持って逃げようとしていたのか……」
「今度喧嘩したらもう出て行こう、私耐えられないって思ってたんじゃないですか。信号を先生はキャッチしなかったんじゃないんですか。そう思います。蛍さんの信号のことだから気付かないくらい弱そうだけど。で、くすぶってた思いが出て行った日に高ぶったんでしょうね。ただ、寝る前からある程度計画していたかは分かりません。ガタガタ押入れを漁る音がしたっていうのは、計画がばれないように最後の最後で慌てて準備したのか、静が寝ている横で発作的にもう駄目だって思ったのか、分かりませんけど」
「分からんな、あのときは俺も蛍も精神的に参ってたからな。あいつはあいつでつわりが酷かったし。躁鬱も酷かった。見ていて不憫だったよ」
ᘏ⌡c⊃Λ, ⌡cZ⁀- Λ- Sɔ Λ-,, (ə e(>-Λ ⌡el(e⌣ ⌣e(eδ ɕ

ᑫlecᐱ，ᕽeᐱᑕ，ᓚ-l ᓄeeᔑ ᛚᕼ heᐳᑫ
ᑫ….-ᓚ„ ᑕcɔ ᐱɔᐱ ᐱ-ᕒᓚ-ᑕ ᓚcZᑐ- ᐳcl lᕼ ᐱ- ᑐcᐱ cᐱᑫ
ᑫlecᐱ…. ᑫ紫苑はレインの肩を抱き寄せ、頭を撫でた。
「結局分からず仕舞いですね。ん……」紫苑は何か言おうとして迷ってやめた。何か言いにくいことなのだろう。俺は普段ならそういう仕草は嫌いなのでイラっとしながら「何？」と聞くのだが、不思議と紫苑の仕草は苛立たせない。俺がこういう態度でイラつく理由は、躊躇されることが嫌いだからだ。躊躇するってことはこう言ったら俺が怒るんじゃないかって思われてるからだ。俺は自分が神経過敏で怒りやすい人間だということを気にしている。だから躊躇されると「コイツは小さいことでごちゃごちゃ言う奴だから言い方気をつけないとな」と思われているみたいに聞こえる。それがプライドの高い俺には耐えられない。それでイライラして「何だよ、早く言えよ」と思う。実際に女が俺に対してそう考えてるかどうかは分からん。恐らく考えてないだろう。でも俺が被害妄想を感じるかどうかが最大の問題なのだ。実際どう思ってようが俺が感じなければどうでもいい。真実よりも俺の気持ちが優先だ。紫苑は俺に被害妄想を与えないのだ。俺のことを気遣うのではなく俺のプライドを気遣う小さな仕草や口調や目つき。これが心地よい。男の兄弟がいるわけでもないのにそうできるなんて奇跡的だ。春に会ったころと随分変わった。そうか……俺を分析して合わせて上手く操っているんだ。つまり俺の思考は全てお見通しってわけか。なんて良い女だ。そしてなんて恐ろしい女だ。俺も紫苑を操らないと、食われてしまう。紫苑のトラウマを癒し、弱さを守り、紫苑のコンプレックスを先回りに理解してやる。それが重要だ。俺が蛍を敬愛していたころそうしていたように。蛍と違って紫苑は敬愛たる人物でい続けてくれるだろう。
「ん……まぁ、その……蛍さんの荷物は全部捨てちゃったんですね」
「全部じゃないけど、まぁ多くは。押入れの中にしまってるのも多いな」
ᑫᓚcɔᐱ，lclcᓄ ᓚɔɔᑐ-ᔑ ᑕᔕ ᖻᕼl eᐱ ᓚelᑕeᓄᔕ ᑕᖻ ᔑeᐱᓄ-ᑕ ᑕɔ - lᕼᔕ lᕼ ᐱ- ᑐcᐱ cᐱᑫ
「ᐱ-ᓄᑐ„ この話はもうやめましょう。レインはシェルテスで頭が一杯だし」
「そうだな」
「それにしてもさっきの運転凄かったですね。運動神経いいのね。映画のヒロインになったみたいでした！」にこりとする紫苑。太陽のように明るい。この子のどこに傷があって今までこんな日陰で暮らしてきたのだろうか。天才は孤独……ということだろうな。俺には分からん世界だ。
「スリルはわりと好きなほう？」
「リスクもありますけど、どうせドキドキする体験ならホラーよりアドベンチャーのほうがいいわ。好きではないけど、降りかかってくるなら少しでも好転させたいんです」
「なるほど、紫苑は強いな」
「それにしてもシェルテスの力、強まってきましたね」
「日々、神にやられた傷が癒えてるんだろう」

紫苑はレインに俺の言葉を訳す。
レインは少し考えて ᘐh-c，ʌɔʌ lɔ ᒐelᑕe⌣ l-ʌ- eʌ ɮɔlᑕe ᑕeᑕ lec e lecʌ >cl la e⌣ --Vcᒐ„ ɔlᑕ- la ᒐc> ɮɔlᑕe，la ᑕcl Vcl cl eʌVc e ʌ-ʌ ʌ-„ ⌣ɔʌ la l-ʌ- lec e lecʌ c> ʔcᑕ >cl la ʌ-Ve> - ᑕa ʌɔʌʌɔẟɞ
ᘐh--ʌ，ʌɔʌ ᒐ-> ᑕЧa，lecʌ„ ᑕЧa eᑕ leᒐeᖷ ᑕa eᑕ ⌣eʌᒐ-ʌ„ >ɔʌ la eᑕ -ʌc ᑕcʌ cʌ„ ᑕe- la ᑕe -ʌc，ᒐɔ> la V-ʌɮ-ᑕ -laaᑕ leʌ- ʔɔʔʔɔ aɞ
レインは「ヤー」と言ってからハッとした ᘐᑕa eʔᔐ….ᒐelᑕe⌣ e⌣ c>-„ Ч-ʌ ᒐc ᑕa，la V-ʌɮ <-ʌ leʌ- eЧɔ….ẟɞ
「あ……」青ざめる紫苑。
「どうした？」
「シェルテスはどうしてドルテじゃなくて玲音の書を狙ったかについて……」
「そりゃ玲音の書が武器だからじゃないか。ドルテを手に入れる前に焼き殺されたら終わりだろ。本丸であるシェルテス本人が襲ってきてさ、本持った人間相手におめおめやられたら笑い話だろ」
「で、シェルテスは日々癒えてるんですよね。ということは……」
「……本丸登場もありえるってことか……？」
「レインが言ったのは先生の意見とほぼ同じよ。私だけ気付かなかったみたい。ね、レインも役に立つでしょう？」
「そうだな……というか問題はシェルテスだよな。いまは部屋だから安全だけど」といって俺は立ち上がる。
「敵！？」ハッとして紫苑が立ち上がるのを手で制す。
「いや、向こうの部屋の窓とか鍵かけないとと思っただけ。紫苑、敏感になってるね。無理もないけど」
俺は部屋を出ると親の部屋などをチェックした。戸締りはＯＫだ。
「なぁ紫苑、こうなったら武器みたいのを携帯したほうがいいよな。こんな感じの包丁とか、或いはネットでボルト数の高いスタンガンとかさ」といったところでレインの悲鳴が聞こえた。
「どうした！？」と飛び込むといつの間にか客が１人増えていた。いや、１匹というべきか。それは仄かな水色の光を放った白い毛の狼だった。紫苑がレインの前で立ちはだかっている。狼は唸りを上げている。
「マンションに犬禁止は付き物なんだがな。どこまでも異世界の奴らは無礼なもんだ」構える俺。しかし構えなんてものは犬相手では意味がないのではないか。犬用の構えを開発してほしいところだ。
チラと俺を見る狼。左目は青いが右目が金色だ。右目が光っている。そんなバカな。オッドアイはありえるが、金に光る目なんて。こいつは今まで襲ってきたただの犬じゃないな。どう見ても自然界の動物ではない。つまりこいつが……。

ᑫOecᖇ ᑕc eᑕ ᛚeeᚲᒍ ᒐelᑕeᒍ ᑐɔᑐ ᛦᔕ

紫苑が叫ぶと狼は発光した。思わず目を細める。光が人型になったと思うと、そこには紫苑のオヤジさんより背の高く、ガタイのいい男が立っていた。変身した……のか？しかし凄い胸板だ。白人マッチョみたいな感じだな。格闘で俺に勝ち目は一切ないな。無論紫苑にもないだろう。

ᑫ-ᒐ，-ᐱ eᑕ ᛚeeᚲᒍ ᒐelᑕeᒍᑫ

いまのは聞き取れた。やはりこいつがシェルテスのようだ。狼の化身か……。まさか悪魔に合間見えるなんてな。しかしタイミング最悪だ。つい今しがたシェルテスが来たらどうしようなんて話していたところだったのに。忌み名なのかな、呼ぶとほんとに来るから気をつけろみたいな言い伝えがアルカにもあるのか？まさか……。英語の bear じゃあるまいし。

しかしでかいな、この野郎。じっと見つめる。人間でいうと年は 30 台くらいだろうか。いや、見方によっては上にも下にも見える。分からん。白人と黒人を混ぜたような肌だ。筋骨隆々で、髪は白髪で獣のように長い。全身に毛が生えている。やはり白髪だ。かなり毛の濃い奴だな。髭もぼさぼさで長くて凄いもんだ。裸ではない。虎か何かの皮でも剥いだかのようないかにも原始人が着てそうな服を着ている。いや、皮を刳り貫いてなめしてシャツにしているような感じだ。長さが長いので太ももの辺りまで届いている。目はやはり狼のときと同じ色だ。でかくなった分、迫力は増している。

「ついに本丸のおでましか」

しかしシェルテスは俺を無視する。アルカ以外は受け付けないという姿勢はどうやら悪魔まで徹底しているらしいな。ヘンなところばかり仲良く共通してやがる。ふざけやがって。

ᑫ-ㅣ- eᒍ ᑕc laᐱ-ᑐ -ᐱᒍᖇᑫ

ᑫㅣ-ᐱ- ᑕ-ᐸ ᑕa lec ɔ ᛚɔlᑕe„ -ᐱ eᐱ ᐱ- lɔl - ᑕccᒍ cl，eᑊᐱ e ᖻaaᚲ-„ ᒍɔᐱ -ᐱ ᒍeᑕ elᐸ ᑕccᒍ ɔl ᑕccᒍ ᐸcᑕ ᑕaaᒍ -ㅣ -ᐱᑫ

ᒐcɔᐱ ᑫ-ᐱ ᐸcᒐ ᑕcᖇ ᑕc V-ᐱᛚ-ᑕ -ᐱᒍ ᑐɔᐱ ᑊeᒍᑫ

lecᐱ ᑫᑐ--ᑕ ᐱɔᐱ ᒍɔ Vcl ᒐel V-lᑕeᖇᑫ

ᒐelᑕeᒍ ᑫᒍɔᐱ -ᐱ ᒍeᑕ ᐸ-ㅣ ᑕccᒍ ᑕeᑊᑫ

シェルテスが殺気を顕にして紫苑に歩み寄った。させるかよっ！

マンガとは違う。声は出さない。隙を見て一足でシェルテスに飛び掛り、手に持った包丁を胸の後ろに刺した。

ᑫ----ɣᖇ ᑕc，ɐeɔ-lᑕᐸc-ᐱᖇ ᑫシェルテスは叫ぶと、振り向きざまに腕を大降りに振った。俺は右腕を下げて肘に合わせた。ガードは成功したが、あまりの力でたたらを踏んでしまった。なんだこの力は！ガードが綺麗に成立した上に向こうは腰も入れずにただ腕を振っただけなんだぞ！？ふざけやがって、デカブツが。

「紫苑、早く逃げろ！」というが早いかシェルテスは俺を振り向いてストレートを打った。

動きは雑、格闘技術は一切ない。流石は狼だ。人間の身体での格闘は辛かろう。だが俺は誤った。いつものつもりでパリーしようとしてしまった。だがそれでは防げない力だと気付いて慌てて後ろにステップしたが間に合わす、腹部にもらってしまった。ステップして外したというのにかつてない威力だ。腹筋を鍛えてなければ内臓をやられてたかもな。

打たれた瞬間、呼吸が乱れるのが分かった。痛さと気持ち悪さがこみ上げてきて、部屋のドアに吹き飛んだ。運の悪いことにドアの取っ手に良い勢いで腰をぶつけてしまい、激痛が走る。

その瞬間紫苑が玲音の書を開き、呪文を唱えた。何を言ったか分からないが、最後に eμcΛ と叫んだ。すると紫苑の目の前にみるみるうちに尖った氷柱が現われ、物凄い速度でシェルテスの背中を刺した。氷は砕けたかと思うと、まるで生き物のように今度はシェルテスの全身を包み込んだ。これで固めてしまうつもりのようだ。今や氷は薄い赤に変わっている。シェルテスの血を含んで赤くなっている。そしてその赤い氷の棺にターゲットを封印しようとしている。なるほどな、これがアルシアの 11 魔将エリンの氷か。魔法というだけのことはある。凄まじい威力だ。それにしても悪魔も血は赤なんだな。

しかしシェルテスもしぶといもので、氷の棺を破壊して中から出てきてしまった。氷は霧散すると雪の粉のようにキラキラ光って消えた。俺はシェルテスの横を通って紫苑の側に寄った。紫苑の前に立ちふさがって守る。

「先生、危ないよ。前線はやめて」

「その呪文唱えるまで数秒かかるだろ。お前がやられたら終わりなんだよ。俺が時間を稼ぐ。とても逃げられそうにないしな」

「逃げられるよ。今ので弱ったし、元々病み上がりの悪魔だし。一人なら逃げられる」

「レインをってことか。賛成だな」

「違うよ、先生を逃がすの」

「は！？」思わず紫苑を一瞬見てしまう「何言ってんだ」

「悪魔相手に勝てる見込みはないよ。一人逃がすので精一杯。私はレインと死線をくぐってきた。でも先生は私と付き合ったばかり。結婚したわけでもないし子供もいない。それどころかその……男女関係もないもの。それなのに私にこれ以上付き合わせられない。お子さんできたんでしょう？いくら会ってないからってこんなとこで死なせられないわ」

「何バカ言ってんだ」俺はシェルテスに対峙する。もう怒りが恐怖を凌駕している。逆境に合ってついにブチ切れてしまった「おぉ、来いよテメェ！俺じゃ勝ち目はねぇがな、テメェの腕や目のひとつは必ず引き千切ってやるから覚悟しろ！」

俺の怒声は恐らく凄い。よく通る声な上、色々な経験から、かなり気迫のある声が出る。これには悪魔も驚いたようで、２歩後ろに後退して犬の姿に戻った。変身が解けたのか。ところが紫苑がぐいっと俺を引っ張る。

「先生、付き合って間もない女のために命かける気でしょ。これはテレビじゃないのよ。マンガでも小説でもない。主人公が死なない設定なんてないのよ。30 秒後に自分がこの世

からいなくなってる絵を想像してみなさいよ！先生は魔法を使う悪人の力でどれだけの災厄が起こるか知らないからそんな風に振舞ってられるのよ！」
「何バカ言ってんだ、俺がやるったらやるんだよ！お前はいいからさっさと魔法作れ！ごちゃってるとほんとに殺されるぞ！」
　もう言い方なんかお互い気にしてられない。そりゃそうだ、いつの間にやらここは戦場化しているのだからな。
「戦ったら殺されるのは全員よ！戦っても勝てない。私はレインより静に生きてほしいの！レインは巻き込まれただけだけどアトラスの人間よ。それに私は両足突っ込んだの。だから私も逃げない。一人だけ逃がすなら貴方だわ。貴方は子供のために生きてよ！」
「いきなり何言ってんだ。悲観的になんな。フェンゼルに勝ったのはお前だろ。どんな惨事を見たのか知らんが気弱になるな。こいつは現に怯んでるじゃねぇか」
「ルーキーテの惨状を見なかったから言えるのよ。惨たらしく半身を吹き飛ばされて絶命できない女の子を何人も見たわ。あと１分もしないうちに引き裂かれて殺される映像を想像できない人はここには要らない！」
　無茶苦茶な理屈を言う紫苑。議論でさえない。全くの平行線だ。だが俺は諦める気はない。前に思った。もしものときに紫苑を守るかどうか。答えは意外なものだった。怒りが恐怖を超越すると後先考えずに突っ込むようだ。愛の深さとかそういうことじゃなかった。とっさに見知らぬ日本人を助けるために新大久保らへんで何年か前に JR に飛び込んで死んだ韓国人がいたが、そいつだってまさか自分がそんなことするハメになるとは思ってなかったはずだ。その場の咄嗟の判断なんだ、人間というものは！
　シェルテスが動いた。俺は空気清浄機を持ち上げると、投げずに盾にした。投げても当たりっこない。シェルテスは清浄機にぶつかって、端っこを噛んで宙にぶらさがった。そのまま俺は腹に蹴りを入れたが、威力が足りないので空気清浄機ごと押入れの壁に投げつけた。清浄機は押入れにぶつかったが、シェルテスはぶつかる前に離れて着地した。流石の運動神経だな、このクソ犬。そして俺の喉元目掛けて飛び掛ってくる。その刹那、紫苑が呪文詠唱を終えて風の魔将テーゼンの魔法を放つ。強風が飛び掛るシェルテスを吹き飛ばし、疾風が刃となって幾重にもシェルテスを刻み付ける。
「早く！」といって紫苑が俺の腕を掴む。
「逃げねぇよ！いいから次の呪文打ってくれ！いけるって！」
「いけないのよ！悪魔の力量を静は知らないんだわ。ううん、知ってるでしょ。知ってるからこそ自分が犠牲になろうとしてるでしょ。あのね、じゃあこういう想像できる？私はバカな女なの。貴方をしつこく愛してると言って一生傍にいるわといって貴方に抱かれて子供を宿した蛍さんと同じ、女というバカな生き物なの」
　ピクッと俺の動きが止まる「なんだよ、それ……」
「女の心なんて一時のもので移り変わりが激しいの。男には信じられないでしょうけどね。信じられないでしょうけど、私は自分よりもレインよりも静が大切なの。恋する女はそこ

までバカなの。信じられないでしょう！？でもこれが本音なの。会って短いけど、私のバカな脳がありえないくらい脳内物質出してるせいで自分の命より貴方のほうが大事なくらい頭おかしい判断するようになってるの！でもこれが今の私なのよ！」

テーゼンの風はシェルテスを拘束し、狼はもがいてどうにか呪縛から解き放たれようとしている。紫苑は腕を引っ張って俺を振り向かせる。

「でもね、想像できる？所詮は莫大なホルモンの所作だってこと。貴方へのこの愛もいつかは枯渇する石油みたいな汚れた泉だってこと。想像できるでしょ、蛍さんに裏切られた貴方なら！「俺が死んで紫苑を守って幸せに生きてもらおう？」はっ、そんなこと考えてるようじゃ貴方はオスとして失格ね。もし貴方が死んだら私は悲しむわ。一生分の涙が出たんじゃないかってくらい泣きはらすわ。二度と男なんて愛さないって誓う。でもね、女は弱いのよ。誰かに優しくされるとふらふら付いてくの。その男が私の体を欲せば私は捨てられないために体をあげるわ。そして結婚して子供を作って幸せに暮らすのよ。貴方はそのうち命日にふっと思い出される程度の存在になる。静が死んでくれたから今の私の幸せがあってこの子たちを授かったのねなんていって貴方の死が肯定される。想像しなよ、私は他の男の子供を産むのよ、貴方の遺伝子じゃなくて。オスとして失格ね。いま私の幸せを考えて私を守って死ねば、貴方は遺伝子どころか記憶まで風化されるのよ。私でなく横取りする男のために命を捨てるようなものだわ。弱い男は結局死んでいくだけなのよ！」

堪えていたが、あまりの言い草にカッとなって拳を握る。引っ叩こうと思ったが、すんでのところで歯止めが利いた。すると紫苑は俺の手首を握ったかと思うと、全力で俺の手を動かして自分の頬を打たせた。

「なっ」俺は絶句する。

「いまのは殴って然るべきシーンですよ、先生。私、最低な女ですから。女は脳がどうとかとか、夢のない部屋とか、そんなことどうでもいい。女に国を任せたら科学が発展しないで他国に攻められただろうなんて言い争いもどうでもいい。レディースデイがあろうがなかろうがどうでもいい。お茶汲めとかセクハラとか、そんなことどうでもいいの！一々区別と差別を取り違えた馬鹿どもや取り止めのない言い争いを相手になんてしたくないんです。だけどね、女だから何があっても殴っちゃいけないなんて、それこそ私には不快な差別です。必要なら殴ってでも愛する女を治しなさいよ」

「そんな方法で巧くいくほど甘くないんだよ。ガキだな、お前は。一体何をしたいか分からないよ」

「分からない？最低な私を殴って見限ってここから逃げて生きてほしいの。それくらい分かるでしょ」

「分かってお前の白々しい悪態なんか聞けるもんか。それより俺が傷つきそうな言葉をそれだけ言えるってことはさぞや俺のことをよく分析してるってことだ。それだけ俺のことをよく見ていて……好きでいてくれてるんだろ？」

紫苑は泣き出しながら「うん」と頷いた。この騒動で気が動転していて皆おかしな行動

を取っている。どうにかこの混乱を収められないものか。レインは恐怖で固まって動けないし。俺は紫苑を力いっぱい抱き寄せると強引にキスをした。紫苑の体がピクッと震える。レインは状況が分からないという顔でおたおたしている。俺は唇を離した。
「俺も脳内物質出まくってるみたいだな。来年のことは知らんが、いまは命がけでお前を守りたい。いや、違うな。俺も死にたくないし、お前も失いたくない。まだ抱いてもない女を殺されてたまるか」
「そう……そうね、先生」
　そうこうしているうちにシェルテスが風の呪縛を解いた。こちらを睨むと、低く唸った。紫苑はファイラの炎を唱えた。炎の柱が立つと、シェルテスに向かって生き物のように向かっていく。しかしシェルテスは咆哮を上げて眼前の炎を掻き消してしまった。そんな馬鹿な……あの魔法を咆哮で掻き消しただと？これがシェルテスの本気なのか。これは確かに勝ち目がない。紫苑の言うとおりだな。さてどうしたものか。だが何をすればいいか分からない。ここが上空何mかも忘れて窓から飛び降りる企画が頭を掠めたくらいテンパっている。
　シェルテスは口を開いた。青い光が溜められていく。よく分からないが何かマンガに出てきそうなエネルギー波みたいのが来そうなのは明白だ。
「危ない！バリアを張ります！」
　紫苑は利を司るプロティスの魔法でバリアを張った。俺たちの周りを透明度の高い光のドームが囲む。それと同時にシェルテスがビームのような光を放つ。見ると紫苑の体から赤い光が出ている。これが魔法を使う人間なのか……というか俺の新しい彼女かよ……。
「まずい……持ちません」
「……駄目そうか」
「ごめんなさい先生。巻き込んでしまいました。私……どうしよう。いまのが最後のキスなんていやぁ……」
　泣き出す紫苑。するとレインが紫苑の手に自分の手を載せてプロティスの魔法を読み上げる。レインの体から赤い光が出た。バリアが強化されるが紫苑ほどの力はない。
　かつて紫苑が自分は魔法使いといっていたのは本当だったようだ。紫苑は魔力が高いようだ。本自体は玲音のもののようだし、紫苑によるとレインが新たな魔法を学問上の知識を元に編み出していっているそうだ。
　そのおかげでこないだ白岡で襲われてから玲音の書を使ってかなりの魔法を習得したそうだ。その意味では確かに玲音の書なのだが、肝心の術者が弱いので、主な使用者は紫苑だ。
ᘐᒐᑕᔑᐞ ᔑᓀᐱ ᓀᒐᘉᓀᔑ ᘐᑐᘐᑐ ᒐᑕᘐ-„ ᐱᑐᐞ ᘉᑕ- ᘉᖻ„ ᖻ-ᐱ ᒐᑕᘐ- eᘉ ᐯᑐᒐ - ᐱᑐᐞ ᘉ-ᐱ ᚷ-ᐱ ᖻ eᘉ -ᒋᘉc-ᐱ ᘉ-ᐱᘐ
　とんっ。レインが俺と紫苑を押した。紫苑の手が離れる。バリアが弱まる。俺と紫苑はシェルテスの魔法光線の範囲から出た。レインの声が聞こえる。何か魔法を唱えているよ

うだ。こんなギリギリになってレインが自分を犠牲にする気か？俺といい紫苑といいレインといい、どうしてこんなにもお互いが大切なんだろう。一緒に生きろよ、馬鹿どもが。俺は魔法を放つシェルテスに一足で飛び掛ると、渾身の力でわき腹を蹴った。ぎゃうっと悲鳴を上げて吹き飛ぶシェルテスだが、すぐ体勢を立て直してまた光線を打とうとする。こりゃもう逃げ場がないなと思った瞬間、レインのほうから強烈な光が見えた。何だと思ったらレインの腕輪だった。白く光っている。

ᔕlaʌ-ʏᔕ

レインがあらんかぎりで叫ぶ。紫苑がレインの手を掴む。レインの体が光の中に消えていく。紫苑が俺に手を伸ばす。俺は無我夢中でその手にしがみついた。そして光の中に俺たちは消えていった。

光が収まると、急に目の前が真っ暗になった。トンネルでもそうだが暗順応のほうが明順応より早い。それでも目の痛みを感じながらゆっくり目を開く。

「どこだ……ここは。まっくらだ」

視界がおぼろげだが俺の部屋でないことは匂いで分かった。

「紫苑？いるか？」

「うん、大丈夫よ」と紫苑が手を握ってくる。

「良かった、無事で。一体何があったんだ？レインは？シェルテスは？」

レインという語に反応してレインがᔕ-ᑕaʏᔕと答える。どうやらシェルテスだけいないみたいだな。一安心というところか。

目が慣れてきたと思ったらレインがᔕ-ʏ leʌ- ᑐɔlᑕcᑐ ᔑ-ʏᔕと叫んだ。

「先生、ここレインの家の倉庫よ」

「えっ！」

思わず辺りを見回した。確かに……倉庫だ。まさか俺は異世界アトラスに来ちまったのか？

「ま……間違いないのか？」

「うん……残念ながら地球ではないわね。私がレインと初めてあった倉庫ってここのことよ」

「おいおい……まさか、そんな……。いや、レインのことがあったから疑ってはいなかったけど、それにしたって本当にこんなところに来ちまうなんて……」

「想定外ですか？」

俺はケータイを取り出した。圏外になっている。

「むしろ予想 GUY です」

「ふふ……。あ、折角レインのケータイ買ってもらったばかりだったのに勿体無いですね」

「いや、別にそれはいいんだが。そんなことより何で俺たちはレインの家にいるんだ？」

ᔕlecʌ，eᔑ leʌ- laʌ-ᔑ -ᑕaδ ᑕa ᑕ-ᑐl -ᑕ ᕮ-ᔑ ᑕcʌᑐ-,, ᑕa ᕽelℓ-ᑕ leʌ- -ᑕa eЧɔδᔕ

ᔕᓀ-，ᐱᓄᐱ ᑕ-ᐱ ᐳ ᔑᓄ-„ ᔑᓄᐱ ᑕᓱ eᑕ h-ᓄ ᓚe ᐯ-ᔑᑕᓯc-，-ᐸc….ᔕ
ᔕ>elℓc-δᔕ
ᔕᓚcel….ᔕ
「ヴァルデの話は覚えてる？」
「アシェットとやらが悪魔テームスを倒すときに使った武具のひとつで、こないだ紫苑がフェンゼルを倒すのに使った杖だろ。ヴァストリアのひとつとかなんとか。いまヴァストリアって言ってたよな、レインが」
「うん、どうもこの腕輪がメルディアっていうヴァストリアだったかもしれないのよ」
「何の効果があるんだ？」俺は腕を組んで話に集中した。心なしか紫苑の言い方がぎこちない。つい数分前に悪態を付いたり愛を叫んだりして本音をぶちまけた後だ。いつもの会話をするのが気まずい。だが今はそのいつもの会話に集中することが、気まずさからの唯一の逃げ道だ。
「時空を歪めることができるの。具体的にはタイムマシンとかワープマシンみたいなものなんだけど。今の感じだとワープマシンみたいね」
「異世界との橋渡しってわけか……ふむ。シェルテスに襲われて、もう駄目だという局面になって初めて発動し、とりあえず使用者であるレインの縁の場所に来たってわけだな。つまり俺たちを逃がしてくれたわけか」
「そうみたい。シェルテスはしばらくこちらに来れないはずよ」
「俺の部屋……というかウチのマンションごとぶっ壊されてないと良いんだが。なぁ、時間は地球と平行なのか？つまりここでも今日は９月の 24 日なのか」
「分かりません……。前に私が地球に帰ったときは時間を元に戻してもらったけど、今回はどうなんだろ。あ、因みにアトラスはメル暦なので９月じゃないですけど。まぁそれはともかく……」
「カレンダー付きの時計とかないのか？」
「あ、あります、居間に電子カレンダーなら。見に行きましょう」
　レインの家にもかかわらず紫苑は慣れた足取りで倉庫を出る。俺とレインは付いていく。
「うわぁ、変わってないなぁ。そっか、レインが地球に来たのはこないだの７月で、今は９月だから、時間を戻してもらった私にとっては久しぶりでも、レインにとってはまだ２ヶ月ぶりなんだっけ」
「よく分からんが、まぁそういう計算なんだな。ん、時計はあれか？」
　隅に大きな柱時計がある。文字盤にはアルカの字が書いてある。俺の知らない字で、音を表す文字より複雑だ。アルカの数字でもない。規則性もない。なんだこの文字は。でも 12 時間法のようだから針の角度だけ見ていれば良い。あのヘンな文字はシカトしよう。あ、そうか、それでレインは文字盤が無地の時計を紫苑に買ってもらったわけか。
「はい。カレンダーはこっちです」と壁を指す紫苑。
　電子カレンダーで、緑に文字が光っている。時計とはまた違う文字だ。なんだ、日付ま

で数字で表さない言語なのか？
「上のは年号なのか？メル……367 年？」
「はい。あ、今日の日付ですね。時間は地球と平行しているみたいです」
「なぁ、地球に戻るときは時間を元に戻してもらえるんだろうか。俺は会社だし、紫苑は学校があるし」
「私は学校休んだくらいじゃ平気ですけど、先生はお仕事ですからまずいですよね」
「まぁな。もはやそんなこと言ってられる状況でもなくなってきたが」
　ふぅとため息を吐いて紫苑は食卓に着く。レインもちょこんと座る。なんだろう、この慣れた感じは。生活感がある。紫苑はあたかも自分の席であるかのように座った。多分、前回ここにいたとき、常にこの椅子に座っていた癖が残っているのだろう。
「もし時間が戻らなくて先生がクビになっちゃったら私と結婚してください」
「え？」
「私が食べさせてあげるから」
「いや、男は仕事がないと生きてけない生き物なんだよ、生憎だが。前にも言わなかったっけ？」
「でも、責任感じるわ」
「それより今は生き延びることを考えないとな。っと……俺も座っていいか？」
「勿論です、どうぞ」
　俺も座る。多分……来客用だろう。アルシェが座ってたのだろうな。
「そういえば、アルシェはどうなったんだろうな。襲われてから２ヶ月経ったわけだろ、こっちの世界でも」
「そうなんです、いまそれを考えてました。lclc⌒ (e゚ (Ч゚ ɔ -ᄊe V-Λⱡ-(Ч゚ ->δ」
ᘐ)-)-ᑎ(e,, ゚ し-(-(゚ (cし leΛ-,, Λ-lし (cΛ l-….ᘐ レインは泣きそうな顔になる。
ᘐ(Ч゚ ⌒c -Λ⌒e c> (゚ᵴᄊ,, (゚ e(Ч->,, el c)Λ)cΛ (-((- しec -Λ⌒e)- -(ɔl-⌒ᘐ
ᘐc>)c(, leΛ- -)( )e しcc(ⱡЧ゚⌒⌒ɔ゚ h-cΛ (e゚)--Λ (-ᄊe ΛɔΛΛɔᘐ
ᘐЧ-, し-> (Ч゚,, l- ⌒eᄊ -l゚゚(しe Vɔl,, ⌒ɔΛ)ɔᄊ しcc(-ᄊ(e-δᘐ
　紫苑が立ち上がるとレインも立ち上がる。
「先生、今から召喚省に行きます」
「役所回り？」
「はい、アルシェの安否を確認しに。彼のお父さんは召喚省のトップですから。早くしないと外に出れなくなります。アルバザードは夜間禁止令が出ていますから」
「危ないところなのか？」
「いいえ、極々安全な世界ですよ。その代わり規則が色々厳しいんです。あ、先生、間違ってもタバコなんて持ってませんよね。ここはタバコは麻薬ですから。素行には十分注意してくださいね」
「憲兵隊かゲシュタポでもうろついてんのかよ」

「そうじゃないけど……厳しいんですよ、色々」
「分かった。それはそうと、服と靴はどうするの。俺はカジュアルだが、この国ではきっと異民族扱いだろ。紫苑とレインも日本の学生服だ」
「う……」紫苑は言葉に詰まった「アルバザードは文化のサラダボールだから大丈夫だと思います。なんにせよ一番重要なことはアルカを喋れるかどうかですから。ゴスロリで歩いてる街中の女の子と同じような視線を受けるだけです」
「つまり蛍＠原宿になるってことか」ため息を付く。
「え？」
「なんでもない。冷や汗かきそうだが、行くか。靴は大きめのサンダルをもらえればいいよ」
「レインのお父さんの靴を試してみます？」
「あぁ、お願い」
　紫苑が事情をレインに説明する。
「お父さんの部屋にしまってあるそうです。私が寝てたとこ。行く前にレインの家の案内をしますね」
「お願いするよ」

　２人に連れられ２階に上がる。広いな。紫苑の家よりずっと広い。俺のマンションなど況やだ。
「ここです」と案内された部屋に着くと俺はドアを開けて中に入る。
　ガチャっとドアを開けた瞬間、目の前に棒を振り上げた男がいた。は？と思う間もなく、男は棒を俺の頭めがけて振り下ろした。俺はとっさに身を屈めて右腕を頭の上に乗せる。頭の部分に肘をかぶせる形だ。下腕で受け止めると腕が折れる。肘のような硬い部分も関節が潰れる。前腕屈筋群の膨らみと上腕の筋肉で防ぐ。ここが一番防御力がある。勿論運悪く他の部分を打たれて腕がやられるかもしれないが、頭だけは何としても守らなければならない。ボクっと鈍い衝撃が走る。運が良かったようで、前腕に焼けるような激しい痛みが走る程度で済んだ。
ᘛ⁽⁽◟(ꇴ)◞⁾⁾ᘚ
「ダメ！」
　男と紫苑が何か叫んで怯んだが、俺は既に反撃を開始していた。沈めた上体を戻しつつ、腰を捻って半身になり、その勢いで側刀を放つ。蹴りが男の腹部を捉えると、男は呻きを上げて１歩後ろに下がった。こんなんで倒せるわけがない。即座に懐に飛び込んで棒を持ち、棒を持つ手を蹴り上げた。男はショックで棒から手を離した。これはモップの柄か？危なかった。木刀のような頑丈な棒だったら腕を持ってかれてるところだった。俺はモップを後方に投げ捨て、構えた。
「ざけんじゃねぇぞ、テメェコラ！」

日本語で、つまり異言語で凄みを利かせる。異世界の馬鹿どもには精神的に有効だろう。
「待って、先生！」
突然紫苑が俺の胴体に抱きついてくる。
「な、なんだよ、危ないって！」
「アルシェなの、これがアルシェ！」
ᑫᑕeↄ，ᑕeↄr ɮeΛ V-Λɮ -Λr -Λ eᑕ -ᑭ‿er -ᑭ‿e ɮel h-ᑯΛ e ‿cↄΛrᑫ
男は両手を前に出して止めてくれと言わんばかりに叫ぶ。
「え……？」
「アルシェなの！私のこと紫苑って呼んだでしょ！咄嗟のアルカ発音で聞き取れなかったかもしれないけど。-ᑭ‿e，ϑ-ᑐᑐↄ，clϑ-ᑐᑐↄ„ lᵃ e> h-ᑯΛ ᑕᵃ-Λr」
ᑫч-，ч-„ -lᑀ -Λ，‿cↄΛ„ -Λ ‿-ᑀl-ᑕ ᑕᵃ eᑕ ᑕccᑐ，ɮ-c>-ᑕ V-Λɮ„ ᑕ-l lᵃ V-Λɮ-ᑕ ‿-l -Λrᑫ
「-lΛ- -lΛ-r 先生、アルシェは私達じゃないって思って襲ってきたみたいなの。でも私を見て誤解だって分かって攻撃を止めたんだけど、言葉通じないから先生に攻撃されて参ってるのよ」
「あぁ……あぁ。なるほどね、壮大な人違いって訳か。どうりで俺にしちゃ上手く相手に攻撃が入ったと思ったよ。それに彼がアルシェなら俺よりずっと白兵戦は強いはずだしな」
俺は構えを解いてアルシェを見つめた。ほっとした顔で手を下げるアルシェ。
ᑫ-Λᑕeↄ，-lΛ--ᑕ cᑕeΛ -lᑕ<c-ᑫ
「君がアルシェ君か。随分な挨拶だったな。悪いが俺は紫苑と違って君らの言葉は喋れんよ。郷に入っては郷に従えだからある程度君らのやり方には合わせるが、お宅のレインが頑固だったから、俺もアルティス教徒に合わせてやる義理はあまり感じんね」
ᑫ--，ᑕc ᑀᵃ Vcl -ᑭᑀ- ᑀↄᑀ„ ϑeΛᑕ-Λᑕ„ --，-Λ eᑕ -ᑭ‿e，-ᑭ‿e -lᑕee>ᑐᑫ
アルシェは両手の拳を互い違いにしてぶつけた。
「ん？なんだ。彼は喧嘩がしたいのか？」
「違います違います！セルジュっていう挨拶です。男として相手を認めたときにする挨拶なんです」
「ほぉ……」思ったより悪い奴じゃなさそうだ。
「俺はこういう場合どう返すべきかね」
「日本式で良いんじゃないですか？本当に敬虔なアルティス教徒は異教徒に寛容なんです。レインは純粋主義なんで実はちょっと異端なんですよ」
「へぇ」と頷く「どうも、水月静です」といってお辞儀をする。アルシェは俺を見つめたまま ᑫeᑐᑕↄlrᑫ と笑顔を返した。
ᑫlᵃ eᑕ ‿cZᑀ- >cZᑀcᑫ
「よろしく、アルシェ君」
ᑫlᵃ ᑕ-Λ ᑭeΛᑐ eᑐᑕↄl - ᑕчᵃᑫ
ᑫч-，-Λ Λ- Λ-ᵃ >-Λ -Λ -ᑀᑕ ᑕc，ɮчᵃᑐᑐↄᵃ ‿cZᑀ-ᑫ

「会えて嬉しいです、静さん――です」
「じゃあ自己紹介はこのくらいだな。どうやら靴はもういらないようだ」
　棒で叩かれた腕を見る。ミミズ腫れのように膨れ上がっている。
「先生、見せて。わ……ひどい。ごめんなさい、私が先に入ればアルシェは早く気付いて攻撃しなかったのに」
lecʌ Ꮆᑐc eᑐ ϶-ᒍᒍɔẟ eɣ，ᑐə eᑐ Vcᓚ <əɔ„ ʌɔʌ >elℓ ᒣe ϶cᑐ-Ꮆ
　レインは走っていってしまった。
「いや、これくらい大丈夫だよ」
-ᄊᓚe Ꮆ-ʌᑐeɔ，ℓЧəᒍᒍɔə„ ᑐə eᑐ Ч-c cʌᎶ
「あ？あぁ、϶-ᒍᒍɔ ϶-ᒍᒍɔ」と笑う。
Ꮆ--，ᑐc ᒣə ᒍeʌ ᒣ-l -ᄊᒣ- ᑐeᄊ„ ℓccʌ V-ʌᑐ-ʌᑐᎶ
　レインが戻ってくる。薬箱みたいのを持っている。
「いいよ、大げさだな。紫苑、伝えてくれないか」
Ꮆlə eʌ ᓚcᄊ ϶cᑐ- <cʌ lə ᒍeʌᑐ ᑐЧə，lecʌᎶ
Ꮆ--，-lʌ-„ ᑐЧə ᑐcl ʌɔ- <-ʌ，ᓚcZᒣ-ᖵᎶ
「強いんですね、だって。あ、血が出てるわ。見せて」といって紫苑は傷口に唇を這わせた。ちろっと傷口を舐める。アルシェは少し驚いたような顔で紫苑を見た。
「えへ、紫苑特製の薬です」
「ん……。一番効く気がするよ。つーかもう治った」
　俺は捲くった袖を元に戻した。
Ꮆᓚcɔʌ，lə ℓe h-ᔑʌ ᑐccl ᑐ-l….ẟᎶ
ᎶЧ-，lə eᑐ -lᑐc-ʌ ʌɔ-ʌᎶ
Ꮆ….-，--…. Ꮆアルシェは深い声で呟いた。
「何て言ったの？」
「彼氏って紹介したんです」
「あぁ、なるほど」
　改めてアルシェを見た。これが紫苑が初めて好きになりかけた男か。どことなく俺に似ている気がする。ハッキリした目鼻立ちで、太めの眉で、凛々しい感じの顔つきだ。イケメンだな。というかどことなく俺に似てないか？紫苑は本当にアルシェが好きじゃなかったんだろうか。
　体型は俺と同じくらいか。少しこいつのほうが大きいかもしれないな。パッと見、俺を明るく強くしたような感じだ。俺が月なら彼は太陽だな。年齢は俺と同じくらいか。服装はローブのようなものをまとっている。ゲームのキャラのようだが、アルティス教の服なのだろう。少し埃で汚れている。
　アルシェは複雑な顔つきで俺を見ている。俺が分析しているように分析しているのだろう。こっちは日本語で、向こうはアルカで。さて、それにしてもアルシェは紫苑のことを

どう思っていたのだろうか。などと考えていたところでレインが横を通ってアルシェに抱きついた。そして何かアルカで言いながら泣き崩れた。アルシェはレインの頭を撫でた。

紫苑は複雑な表情を見せるかと思いきや、レインと同じようにアルシェに近寄って抱きついた。これにはちょっと腹が立ったが、戦友の無事を確認して嬉しかったのだろう。男として彼を見ているなら、俺の前ではむしろ抱きつかないはずだ。

やはりアルシェは紫苑の頭も撫でる。アルカで３人で何かごちゃごちゃ言ってるが、さっぱり分からない。なんで紫苑は１年も経たずにこんなに異世界の言葉を喋れるようになったのだろう。この３人の結束というのはどんなに強いのだろう。その結束を生むほどフェンゼルとの戦いは凄いものだったのか。果たしてその戦いを経たアルシェと俺、紫苑はどっちが好きなのだろう。一緒にいたらそのうちアルシェに靡いてしまうのではないか。

紫苑が戻ってくる。

「なぁ、アルシェ君のことだけど、一緒にいたら俺より彼のことが好きにならないか」

「えっ？やだ……そんな風に見てたんですか。いま全然違う話してたんですよ。２ヶ月の間どうしてたとか、私がここに戻るまでのタイムラグを入れた約 10 ヶ月どうしてたのかとか。アルシェとは先生より濃く一緒にいたんですよ。それでもキスさえしなかったよ。抱きついたのだって今が初めてかも」

「そうか」

「嫉妬してくれたんですね。ちょっと嬉しいです」

「俺が彼のように離れ離れになって１年もしたら紫苑はどうする？」

「追いかけます」と即答した「決まってるじゃないですか。私が待つわけないです。追いかけます、世界の果てどころか異世界まで。だって先生は彼氏だもん。アルシェは戦友よ」

「そうか」俺は少しはにかんだ。

居間に戻って４人で話をした。とはいえ、アルカ人口のほうが多いから、俺は黙って部屋の中を見ていた。わりと深刻な話をしているようだが、俺には分からないしな。……そうか、俺たちが深刻な話をしていたのにレインがふらふらしてたのはこういう気持ちだったのか。話の輪に加わることができず、時間を持て余しているので何となく周りを物色する。そうか、これか。参ったな、立場が逆転してしまった。早く地球に帰りたい。

話が終わって紫苑が要約をしてくれた。

「そもそも事の始まりは私が地球に帰った日、私にとっては去年だけど、この世界ではまだ２ヶ月前のことです。ハインさんの召喚に応じてアルデス・ルフェル王に謁見し、その後私はメルティアに地球に帰してもらいました。ちょうどそのころ、月の神ドゥルガとヴィーネが月に封印された悪魔シェルテスに襲われました。神々は魔石ドルテにシェルテスの力の大部分を封じ込めましたが、シェルテスに手を噛まれて人間界にドルテを落しました。ちょうど私が地球に帰って礼拝堂であるカルテンを出たレインとアルシェは落ちてきたドルテに気付きました。そこをシェルテスが襲ってきたわけです。アルシェはレインを

カルテンに逃がし、戦いました。ここまでは話しましたよね」
「あぁ、レインはアルデスを召喚し、アルデスが応じたが間に合わず、シェルテスがカルテンに入ってきた。危機一髪メルティアが現われてレインを地球に送った。それがこないだの７月だな。で、アルシェ……呼び捨てでいいかな……彼はどうしていたんだ」
「悪魔シェルテスには当然適いませんでした。シェルテスの狙いはドルテを持ったレインだったので、吹き飛ばされただけで殺されはしなかったそうです。シェルテスが中に入ったのを見てアルシェは追いかけました。そのときレインがメルティアに連れられて逃げていくのが見えました」
「なるほど。その後は？自分の家に帰ったのか？」
「いえ、結論から言うと今度はシェルテスに命を狙われるようになりました。シェルテスはレインの持ったドルテを求めたんですが、逃げられました。力を取り返せなかったので、人間界に潜伏することにしました。人間界すなわちユマナが一番神の目が行き届かないからです」
「それとアルシェが狙われることに何の関連があるの？」
「人間界は神の目が届きにくいけど、その代わり人の目は届きやすいです。弱ったシェルテスが相手なら召喚省が総出になれば倒せます。倒せなくとも神にシェルテスの居場所を教え、神を召喚し、倒すことができます。アルシェは召喚省長官であるアルタレスを務めるハインさんの嫡男です。シェルテスからすればハインさんの次に消えてほしい人物です」
「なるほどな。ところでアルデスは何をしてたんだ。レインの通信を受けたんだろ？」
「シェルテスは潜伏しやすい環境を作ろうとしてまずはアルシェを狙いました。なにせ目の前にいましたからね。ところがそのときようやくレインの頼んだアルデスが現われたんです。当然シェルテスは脱兎の如く逃げました。アルシェはアルデス王に事情を説明すると、王はハインさんではなく当事者のアルシェにシェルテス捜索を命じました」
「つまり神託によってアルシェが召喚省の指揮を執ることになったわけか。棚ぼた大出世だな」
「シェルテスは狼の化身で耳が良いです。王の命令はシェルテスにも聞こえたようです。それでアルシェを召喚省のハインさんたちと合流させまいとあれこれ狙ってきたようです」
「シェルテス本人が？」
「いえ、私達にやってきたようにセレスを使って人や動物を操ったそうです。先生がモップでぶたれたのも操られた人だと思ったみたいです」
「なるほどね、納得。ハインにはどうやって事情を伝えたんだ？」
「アルシェはハインさんと合流していないそうです。２ヶ月間サバイバル状態らしいです。でも恐らくアルデス王がハインさんにも神託を下してると思います。アルシェを頭としてシェルテスを捜索せよと」
「ハインに伝わってるなら召喚省が総出でアルシェを迎えに行けばいいだろ。シェルテス

は居場所をチクられるから出て来れないし、手下くらいなら倒せるはずだ」
「この世界、アンセが壊れると何もできないんです。腕輪型のケータイを進化させたような情報端末なんですけど」
「アルシェのも壊れたのか？」
「シェルテスとの格闘で壊されました」
「それで連絡が取れずに２ヶ月か。神託を受けた後、すぐ家に戻らなかったのか？」
「アルデス王が去ってから、家に帰ったそうですが、誰もいなかったそうです。翌朝召喚省に出向しようとする途中で動物に襲われ、人にも襲われ、これはおかしいと気付いたそうです。家に逃げ帰るとシェルテスが現われ、咄嗟にアルデス王を召喚しましたが、シェルテスは即座に逃げてしまいました」
「イタチごっこだなぁ」
「その後はいやらしく手下ばかり放ってきたそうです。家は居場所が割れてしまっているので、別荘を転々としたそうです」
「召喚省にはたどり着けなかったわけか」
「とにかく人のいるところは人が操られてしまうので避けたそうです」
「そんなことしてたら召喚省へはいけないよな。それで各地を転々としてたわけか」
「シェルテスは鼻がいいので、一定期間で居場所がバレてしまうそうです。特にアルシェ自身の匂いがついている自宅や別荘は見つかりやすいそうです」
「それで２ヶ月困った末、レインの家にいた、と」
「はい。倉庫や部屋に隠れていたそうです。今日は部屋にいたそうですが、物音が聞こえて居場所が知られたと思ったそうです」
「それでモップを振り上げたわけか。それなら仕方ない。さぞかし大変だったろうなぁ。心中察するよ。ところでひとつ疑問なんだが、なんでシェルテスは地球に来れたんだ？」
「分かりません。でも……玲音の書と関係がありそうですよね」
「あぁ」大きく頷く「なんにせよあのとき白岡のベンチで炎を出して、シェルテスを召喚する血文字が浮き上がった時点で２つの世界がリンクしたのは間違いなさそうだ。玲音の書を通して奴は世界を行き来しているんだろう」
「そうみたいですね」
「じゃあさ、玲音の書って一体誰のものなんだろうな」
「私も謎です。てっきりアルシェは事情を知ってるものかと思ったら玲音の書の存在自体知らなかったんです。あ、でもひとつ分かったことがあります。魔法学者の立場から見た結果、アルシアのものではないそうです」
「え、だってアルシアの別荘に置いてあったんじゃないの？」
「そうなんですけど、当時のアルシアの製本方法とは異なってるそうなんです」
「元魔法国家アルシア産のノートじゃなかったってことか……。誰が紫苑の部屋の机に置いたんだろうな。メルティアかアルデスしか考えられないが」

「私もそう思います。でもこんな魔法の本なんていうヴァストリアは歴史にないんです。不思議ですよね……」
　いや、魔法が歴史に名を残していること自体不思議なんだが。不思議な物語の中に登場する更に不思議な話というわけか。頭が混乱してきた。第一アルカ関係の横文字が多すぎてごっちゃになる。アルシェとアルデスを何度か間違えそうになった。似てるんだよ、名前が。あとアルシアとかアルタレスもだ。アルで始まるのはもう勘弁してくれ。アラビア語の定冠詞かってんだ。
「ヴァストリアでない……つまり神が貸してくれたわけでもなさそうというわけか。その上アルシア産でもない。となると後は魔法国家ルティアくらいか？」
「そうなんです。けど、アルシェに言わせればルティア産でもなさそうなんです。紙や表紙の材質がどうのって言ってました」
「ふぅむ……謎だらけだな、玲音の書は。でもアルシアの 11 魔将の魔法が記載されてるんだろ。じゃあアルシアと無縁なわけはないよな。うーん、分からん。いずれにせよシェルテスが狙ってるってことは脅威であることに違いはない。黒だろうが白だろうが使えるものは使うということで良いんじゃないか？」
　紫苑は深く頷いた。
「しかし、俺たちがこっちに来たことで状況は変化したな。シェルテスはアトラスでは召喚省と神の目を恐れ、アルシェに手下を放った。一方、地球では玲音の書を恐れて手下を放った」
「シェルテスにとっては怖いものが一箇所に集まったことになりますね。そこでレインの提案なんですが、召喚省に今から行こうっていうんです」
「うん、賛成だ。とにかくハインとやらに合流するのが先決だ。今まではアルシェ一人で何もできなかったが今は玲音の書があるからな。堂々と正面から行ける」
「ただ、懸念要素があるそうです。恐らくシェルテスが手下を大量に放つだろうということです」
「それは面倒だな。それにハインが操られたら元も子もないんじゃないか？」
「あ、それは多分大丈夫です。魔法学者のアルシェによるとああいうセレスは悪意を持った人間や下等な動物しか操れないそうです。召喚省は敬虔な人間が多いので、市街はどうか分かりませんが、中に入れば大丈夫なはずです。特にハインさんが操られることは考えられません」
「ちょっと待って。悪意ってどういう意味？」
「さぁ……直訳ですから。私が思うに、邪念とかそういうマイナスのエネルギーを突いて人を操るんじゃないですか？」
「ってことはさ、あの塾のガキとか、サンシャインの土方とか、不良っぽいガキとか、バイクのライダーとか、あの辺は全部悪意を持ってたってわけか？」
「ん……」紫苑は口元に手を当てて考える「そうかも……。私ほら、あの男の子のこと振

っちゃったし」
「それで逆恨みか……。でも他の３人についてはどうなんだ。一期一会だぜ？」
「全く心辺りないですね。変ですね、他にもあそこには人いたのに」
　俺はしばし考え込む。悪意……ねぇ。ところで何で男ばかり操られていたんだ？
「あのさ、もしかしてなんだけど。悪意とか邪念ってのはさ、恨みとは限らないんじゃないかな。塾のガキはさ、性的な意味で紫苑に邪念を持っていたんじゃないか？」
「えっ！？」
「いや、男ってそういうもんだし。そう考えると説明が付くんだよ、他の３人についても。俺は今日、一般の男から見ればかなり羨ましい環境で歩いていたと思うんだよ。突然だけど紫苑って俺の見た目どう思う？」
「え……カッコいいと思いますよ。付き合う前からモテそうだなとは思ってました」
「だよな。俺もこれだけ生きてれば自分に対する周りの評価くらい知ってる。そして紫苑自身とレインの見た目についてどう思う？」
　紫苑はややあってから目をそらしつつ「可愛いんじゃないですか……？」
「だよな。で、今日の構図を手っ取り早く言うとだな、イケメンが美少女２人連れて両手に華で歩いてたってことに要約される。わかるか？」
　無言で頷く紫苑。
「しかも一人はハーフだし、一人は大和撫子だ。その上片方は女子中生の制服を着ていて、もう片方は女子高生の制服だ。恐らく大概の日本人の男は羨ましがるシチュエーションのはずだ」
「そういうものなのね……」
「まぁ、多分な。そう考えれば何で襲ってきたのが若い男ばっかりだったのかってこと、理解できないか？」
「なるほど……」
「思えば人に襲われたのはいつも俺と一緒のときだ。特に塾のガキにやられてから今日まで何もなかったのに今日連続して襲われたっていうのがそもそもおかしいと思ってたんだよ。でも今日の行動を考えると相当嫉妬されてたはずだ。邪念だらけだったはずだぜ」
「はぁ、なるほど」紫苑は関心したような表情だ「そんなに若い子と制服が好きなのね？」
「いや、あいつらが、だけどね」
「じゃあアトラスだとその点は平気ね。この格好は何ら男性にコンプレックスを持たせないでしょうから。むしろルフィやラーサを着てるほうが危ないわ……」
「なんとも下らない話だが、人間って生き物が下らないんだよな、結局は。そういう理由で勝手に邪念を持って、それを良いことに悪魔に利用されるんだから。月と狼が凶暴性に結びつくってのはアトラスでも地球でも同じだな。科学的根拠があるんだろうか。そういえば犯罪は満月の夜に多いと聞くが」
　俺は尻すぼみに呟いた。そろそろレインとアルシェが暇な表情を見せる。

「さて、事情は分かった。じゃあそろそろ召喚省とやらに行くか」

アルシェは替えの靴を持っていた。彼とはサイズが同じだったので靴を貸してもらうことにした。革靴で、紐がついているが、色は黒でなく茶色い。変わっているな、異世界のものは。しかし履き心地は悪くない。踵も爪先も硬い。蹴りには使えそうな靴だ。

戦闘の可能性があるが、刃物は持ち歩かないことにした。操られている人間を殺すわけにはいかないし、もし刃物を奪われたらこちらが殺されかねないからだ。つまり肉体と玲音の書が武器だ。

３人は格闘ができるが、レインはできない。しかも魔法は紫苑限定だ。レインは非戦闘員で、連れて行くのが躊躇われる。だが、紫苑がさっき訳して聞かせてくれた話や諸々の作戦は全てレインの提案だ。戦闘には向かないが、策士としては機能しているようだ。それに魔法は紫苑限定といってもレインも若干使えることが分かっている。その気になれば玲音の書はレイン本人に使わせてもいいだろう。

俺は気がはやって召喚省に行くつもりだったが、レインの提案で敢えて夜行くことにしたそうだ。夜間に歩いていると職質され、逮捕されるというのになぜだと思ったが、夜のほうが人通りが少ないからだそうだ。アンセがあればアルシェの顔パスで警察の尋問など避けられるのだが、いまは見つからないように行くしかないそうだ。

ヴァルゾンの刻、すなわち夜８時になったら出発することになったそうだ。先に夕飯を済ませるということになり、レインと紫苑が作ってくれた。男２人は居間で座って待っていた。アルシェと相対して座っている。向こうでは２人が料理する音と会話が聞こえる。正直言って気まずい。アルシェのほうは俺を見て何か言いたげにしている。俺は目をそらしていたのだが、目が合ってしまったので苦笑いした。この苦笑いがアルバザード人に通じるのかどうか甚だ分からんが。

ᘐ-，ᑕc ᑐᓀ ᓄeᐱ -ᒪᑐ- -ᑕc ᑐ-l ᑐɔᑐδ ᑕc lɔᑐc leᓄ -ᐱ ᑐᓀ c> ᑕᓀᒪδᓓ

「いや、悪いが俺は君らの言葉を喋れないから。ほんの挨拶語的な言葉は覚えているが」

ᘐᓄɔ Vcl ᑕeᒪ…. h-c，-ᐱ -ᐱᓗ <leᐱ ᑕc leᓗ ᓗcZᑐ-δᓓ

「ん？俺の名前言ったの？早くて分からないんだよ、悪いけど。いくら人工言語でもさ、リスニングしてる限りは自然言語と変わらないんだよなぁ。あ、そうだ、筆談しようよ」

俺は手帳とペンを取り出すと ᘐ-ᐱ -lᐱ- Vcl <ɔ„ ᒪeᐱ -ᓗᑕ ᘐ と書いた。これで通じてくれるか。

ᘐ>>….ᓗcɔᐱ ᓗ-ᓗeᓄ - ᑕc Ꮆᓀl Ꮆᓀᐱᑐeᑕ ᑕ-ᐱ cᐱ….„ lɔZ，lɔZ -….„ ᑕ-l -ᐱ lɔᑐc ᓄeᐱ leᓄ ᑕc ɔᑐᑕᓓ

アルシェはなるほどという顔で頷いた。俺がペンを渡すと ᘐ-ᐱ -ᐱᓗ <leᐱ ᑕc leᓗ ᓗcZᑐ-δᓓ と書いた。

「私は静である貴方をアンシュしていいですか？――おーい、紫苑」台所に呼びかける。

「はーい」

「アンシュって何？アンシュに許可がついてるやつ」
「ああ、目的語を leᓄ 格という名前で呼ぶって意味の動詞よ」
「ありがとう。……なるほどね。つまり呼び捨てしていいですかってことか。あれ？「勿論いいです」って何て言うの？」
「ᘐh-ɔ，clɘ-ᒧᒧɔᘓ かなぁー」
「オッケー。h-ɔ，clɘ-ᒧᒧɔ、と」
　するとアルシェは笑顔で頷いた。
ᘐᑦc eᑦ -lᑦc-Λ e ᒐcɔΛ ᑦeᔑᘓ
「ん？テルって最後に来てどういう意味になるんだ？形容詞だよな。「聞かれた紫苑」ってどういう意味だ……」
　そう思ったとき、とことこ紫苑が歩いてきた。
「もう、料理してられないわ。なになに？」
「ごめんね。このテルってやつなんだけど」
「形容詞じゃないわ。文末に来て伝聞を示すのよ。「〜だそうだ」っていう意味よ」
　紫苑は台所へ戻っていった。
「なるほど、つまり君が紫苑の彼氏だそうだねという意味か。-ᓄ，-Λ eᑦ -lᑦc-Λ e ᒐcɔΛ と」
ᘐᑦc -ᑦ ᚷɔ- -lᑦc-Λ c> ᒐcɔΛ lɐΛ- -ᑦɔl-ᒧẟᘓ
「紫苑〜」
「単語だけ言って〜」
「もあー」
「既にー」
「はいよー。「紫苑がアトラスに来たとき既に彼氏だったのか」ってことか。ᑦeɔ、と」
ᘐ0e h-ᑦc- ɔle ᒧ- ɔleẟᘓ
「オレって？」
「相手よ」
「え、何？」
「あいてのことよ。ɔle でしょー？」
「はいはい。えっと、なんだろね……紫苑」
「はいなー」
「俺とお前どっちが先に好きになった？」
「いたっ！」
　台所から紫苑の声。
「おい、どうした」慌てて駆けつけると紫苑が包丁で指を切っていた。へらへら笑ってる紫苑。
「だいじょぶ。かすり傷」
「そう、なら良かったけど、気をつけてね」

「うん、いきなりヘンなこと聞かれたから気が動転しちゃって」
　俺は紫苑の手を取って指を咥える。
「さっきのお返し。薬代わりだ」
　紫苑は真っ赤になってにやけた顔で「治ったぁ」と言う。レインがくすくす笑ってる。席に戻るとアルシェは苦笑して ᘐ-Λ lɔʔc ›ɔ-„ ʕ₰ eʕ ∟cɔΛ cΛ ᘐと書いた。ちょうどそのとき紫苑が「どっちかといえば私が押しかけ女房でしたよね」と言ってきた。

　紫苑とレインの手料理を食べたのは初めてだった。２ヶ月の間留守にしていたので、殆どの食料はダメになったかアルシェが消費していたらしいが、ありあわせにしては中々良い出来だった。
　どうもアルバザードの人間というのは食事をゆっくり取るらしい。食後もすぐに働きはしないそうだ。日本人の俺からすれば信じられない。昼などたとえば松屋で牛丼というパターンなら大盛りでも 10 分、早ければ５分で仕事で平らげる。時間をかけるなど休日に人と食べるときくらいだ。このときはわざと時間をかけて食べるが、日々の生活では松屋５分が基本だ。周りの男を見てもそれが通常だろう。ガバっと食って即仕事に戻る。それが日本人だ。
　食後は少しアルカを教えてもらった。よく使う語をもう少し教えてもらった。俺に話すときは一語ずつ区切って言うか、筆談にしてくれと紫苑に頼んでもらった。あと、カレンダーの文字を教えてもらった。時計は角度で分かるが、カレンダーは覚えるしかない。しかし 28 文字も系統なく存在しているので覚えるのが大変で、こりゃすぐには覚えられないと匙を投げた。
「なぁ紫苑、ここに来て早速感じたよ、紫苑の凄さ。よくここに日本人一人で生活してこれたもんだなぁ。言葉も速攻覚えたんだろ？ありえないよ」
「でもほら、私は子供のころから異世界を願ってたわけですから、準備は万端だったんですよ」
「それにしても凄いって」
　そうこうしているうちに８時になった。家の明かりを消して外へ出る。初めてアルバザードの土を踏んだな。暗い……住宅街なのに暗い。そうか、夜間外出禁止だから暗いんだ。白岡は……わりとこんなものかもしれない。
　それにしても光が丘とは比べ物にならない。光が丘公園の暗いところとか高松とかのほうの細い道だったらこういうところもあるけど、こんな大通りでこんなに暗いなんて考えられない。イマやリヴィンのところの明るさと比べてみろよ。とても日本より先端を行く文明とは思えない。家の造りだって中世っぽいし……。そのくせ道は広い。駅前の大通りよりずっと広い。ありえないだろ……。
　レインは夜のアルバザードが珍しいのか、少しはしゃいだ様子だ。そうか、ここで生きていると夜中に歩くこと自体がはしゃぐ対象なんだ。道は広いのに人っ子一人いない。道

路は片側一車線で、それぞれに歩道がついている。
「あれ、車はないんじゃなかったっけ」
「あそこは自転車道なんです。こっちが歩道です」
「へぇ、ほんとに車と分離されてるわけだ。信号もないんだな。なるほど、こりゃあレインが怖がるわけだよ」
　高速でガス欠して避難場所やガードレールがなかったら誰もが怖いだろう。それと同じような恐怖をレインは感じていたのだろう。たとえそれが現実には誤解でも彼女の頭の中では高速に捨てられたような気分だったはずだ。ふむ、相手の身になってみなければわからないことだらけだ。でも紫苑はアルバザードの道路を知ってた。つまり自分にとって興味や知識のないことについては知っていても共感しづらいということだな。恐らく俺と紫苑とではアルバザードの見方が異なるのだろう。
　アルシェが周りを警戒しながら「来い来い」とジェスチャーをする。よく使うジェスチャーは先ほど教授してもらった。教師だというのに先ほどから生徒役ばかりだな。
「ここがカルテよ」
「え、これが公園なの？随分大きいね」
　地図が置いてあるのでチラっと見てみる。ここから入口までがあのくらいの距離だから……おいおい、光が丘公園よりずっとでかいぞ。どうなってんだ。しかも完全な円形だ。蛍のところはいびつな円だったが、ここは完全に円だな。
　カルテの中の植栽に入り、草むらをかき分けて進む。カルテを通るのが近道だが、カルテは警戒が厳しいらしい。それで草むらを歩いているわけだ。リーバイスを履いてきて良かった。ジーンズは丈夫だ。心配なのは女子２人だ。
「紫苑、脚傷つかないか？」
「ちくちくしますけど、大丈夫です」
「不良娘じゃなくて良かったな」
「え、なんで？」
「スカート丈短くしてたら余計痛かっただろ」
「あ、そうですね」と笑う。
「かぶれる物質とか出てないと良いんだが」
「そうね、脚が赤く汚れちゃったら恥ずかしいな。ふふ……やっぱり静って優しいのね。アルシェは絶対そんなこと言ってくれないから。レインには言うかもしれないけど」
「なんだそりゃ。紫苑には厳しいのか？」
「女の子扱いされてませんでしたからね」
「なぁ、アルシェは紫苑のこと好きだったのか、それともレイン？」
「うーん、そこは私も分からないです。うぬぼれかもしれないけど、アルシェは私のほうが好きだったと思います。レインはおっとりしすぎてて彼に合わないと思うのよ」
「それは確かに。さっきも俺と紫苑の馴れ初めを聞いてきたり、指を咥えるのを見て苦笑

したりしてた。彼がシェルテスに操られなきゃいいんだけどな」
「やだ、怖いこと言わないでくださいよ」
-ᔑᓚe ᘐᑐccᔐ ᓚɔɔᑐ-ᔑ (ɔ c ᔐeᔐδ ᘓ
ᓚcɔᐱ ᘐ>>, Vcᑐ - (ᓀ -ᐱɔᘓ
-ᔑᓚe ᘐᕽ-ᔐᔐɔ….ᑐcɔ -ᐱ (e>cᑐ eᔐᑐ e ᐱɔᔐᔐeᘓ
ᓚcɔᐱ ᘐ- Ч-δ ᘓ
「レインはどうなんだろうな。アルシェのことが好きなのか？」
「多分。ずっと彼の心配ばかりしてたし」
「それにさっき思い切り抱きついてたもんな、泣きながら。まぁ、明白か。良かったんじゃないか、泥沼にならないで。親友を失うところだったじゃん」
「うーん、でもさっきの話だとアルシェは私のことを好きかもなんですよね。それって問題アリかもしれません」
「レインまで操られたりしてな」
「先生！」
　ぎゅっと手の甲を抓られた。

　カルテを抜けると住宅街には見えないところに来た。随分歩いた気がする。本当に誰もいない。何人かパトロールと出くわして影から見たが、それくらいだ。日本じゃ考えられない。紫苑曰く、北区だそうだ。学校や企業や省庁などが集まっているらしい。紫苑がフェンゼルと戦ったところもこの近くだという。
　暫く歩いたところでピタっとアルシェが止まった。
ᘐᐱ->ᑐ, ɔ>- ᑎɔᑐcᘓ
「使い魔です」
「また犬か。無傷で犬に勝つのは厳しいな。犬用に武器を持ってくれば良かった」
　犬がギャンギャン吠える。馬鹿、吠えるな。人が来るだろ。アルシェも同じことを思ったか、突如駆け出した。犬は戦闘態勢に入る。こうなると逆にギャンギャン吠える暇がなくなる。飛び掛る狂犬。アルシェは犬との戦闘にもう慣れたのか、倉庫から持ってきた硬い棒を薙いで犬を弾き飛ばす。ギャンっと言って犬が吹き飛ぶ。ふつうの犬ならここで負けを感じて引くのだが、こいつは使い魔だから引くことを知らない。
ᘐᓚcɔᐱ, lec e lecᐱᖇᘓ
ᘐ-lᐱ- <cl>ɔ-ᖇ ccᔑe ᑐ ccᔑeᔐᖇᘓ
　紫苑が玲音の書を開き、呪文を唱えると、本が光って紫苑の体が淡い光に包まれた。本が宙に浮かび、紫苑の右手の数 cm 上を浮遊する。光の風で紫苑の前髪が軽くかきあげられる。紫苑が左手を高く上げると頭上でプラズマが発生した。そして指を犬に向けて振り下ろすと、プラズマが光速で飛んでいき、犬を焦がした。犬は声を立てる間もなく痙攣すると、やがて絶命した。紫苑はバツの悪い顔をしながら本を閉じた。

「凄い威力だな……地球で使ったときよりずっと強い。ラとかいう魔力がたくさん流れてるからか？」
「はい……そうだと思います」
「紫苑」俺は背中をさすってやる「心苦しいのは分かる。魔法にはトラウマがあるものな。でも、いまはその力が必要なんだ。シェルテスに渡すよりはずっと良い。これは善行だ、大局的に見れば」
「そう、ですね」少し震える紫苑。アーディンという女性のことを思い出しているのだろうな。その名前を出すと自我を崩壊させかねないのでぎゅっと抱きしめて落ち着かせてやった。
「どうだ、人に抱きしめられると落ち着くだろ」
「はい……」
「皮肉にも蛍に教わったことだ。……一人よりはずっと良い。苦しみは分け合おう。いいね？その代わり喜びは２倍にする。蛍とは常にはできなかったが、できるだけそうしよう」
「うん……うん」
ᘐOec，ʔe ᒐccᑕ，ᒐcɔΛᖇᘓ
　アルシェがはやる声で紫苑を呼ぶ。
ᘐOec，ᑕc eᔑ ∨ceΛ ∨cᔑᑕ ʔɔʔẟ eᔑẟ ＞-Λ ᑕc eᔑ ᑕc-Λ e ᒐeẟᘓ
ᘐЧ-，ʔ-＞cl„ ᑕ-I ϶-ᔑᔑɔ，ΛɔΛ ᒐ-I ∨-Λɔ-Λ e lecΛᘓ
　急ぎ足でその場を去る。長くいたらパトロールの奴らに捕まる。
　もう少しで召喚省というところで、アルシェは立ち止まった。レインがアルシェと紫苑に何か指示する。紫苑が頷く。
「どうしたの？」
「あそことあそこ、召喚省に行くまでにカメラが２台あります」
「新宿かよ！」
「映れば召喚省に入る前に警備兵に捕まります。捕まったら身分のない私達は拘留されます。逆に、上手く誤魔化せた場合、恐らくシェルテスは警備兵を操ります」
「それでカメラをぶっ壊そうというわけか。でも壊したらいずれにせよ警備員が来るだろ？」
「そこで、この魔法を使います」
　紫苑は呪文を詠唱した。やはり紫苑の体が淡く光る。今度は黒紫だ。
ᘐ∨el e ∨elᑕcᔑ ᔑe lɔϵ leeᔑ ʔ-ᒐΛᖇᘓ
　しかし俺の目には何も起こらなかったように見えた。
「よし、行きます」３人は走り出した。俺も付いていく。
「いま何も起きなかったよね」
「いいえ、闇の魔法を使いました。カメラを壊すとまずいんですよね。だったら闇でレンズをすこーし覆ってしまえばいいんです。そうすれば私達は画面に映りません」

「便利だな。赤外線センサーとかはないんだ？」
「センサーならありますよ。アルシェがここのセンサーの仕組みを教えてくれました。闇でセンサーの光線を屈折させました。屈折率とその計算はレインが今しました。このまま直進すれば引っかかりません」
　化け物だ、こいつら……。というかなんだレインの知識量と機転は。センサーの光線を屈折させてずらすだと？これが白岡の滑り台で呑気に遊んでたガキなのか？
　もう召喚省の入口が見えたというところで、大通りを横切っているとふいに青白い炎が目の前に起こった。これは……。
ᘐᒐelᑫeᒍᚴ ᘐアルシェが叫ぶ。
「ついに痺れを切らして出てきたってわけか」
　紫苑は即座に玲音の書を開く。玲音は道に座り込んで祈りだした。
「レイン、何やってんだ」
「祈ってるんです」
「バカ！祈ってどうすんだよ！」
「だから、召喚するんですよ！」
「あ！」
　そうか……そうだった。ここは神が実在するんだった。そうだ、神にシェルテスが現われたことを通信しなきゃいけないんだった。おいおいレインはそしたら重要な役回りじゃないか。このパーティでの召喚士に当たるわけか、言い換えれば祈りの巫女。ぴったりの役柄だな。で、俺らは戦士か。
　バンッとアルシェの背中を叩く。振り向くアルシェ。
「やるぞ。俺らの仕事は時間稼ぎと、無事生きて姫様の元に帰ることだ」
　セルジュという先ほどの拳を合わせた挨拶をしたら、アルシェは笑顔になってᘐᓀ-ᚴᘐと力強く言った。
　シェルテスが人狼化する。金色の目が光る。即座に俺たちはシェルテスに飛び掛る。悪魔に素手で飛び掛る馬鹿は俺たちくらいのものだろう。アルシェが棒で突きを入れる。鼻を突いた一撃にシェルテスが怯む。合わせて俺は渾身の力で右足の回し蹴りを放つ。しかし太く鍛えられたシェルテスの脚はこれくらいでは沈まない。まるで木でも蹴っているように硬い。こりゃまずいな。軽量な俺の蹴りじゃ威力はほぼ皆無か。
　シェルテスが左足で蹴りを放つ。こいつは格闘センスはゼロなのであっさり避ける。咄嗟にアルシェが軸足となっている右脚を棒で薙ぐ。これで普通は転ぶのだが、やはりアルシェも軽量なので力が足りない。というか誰がこんなボブ＝サップを更に縦にでかくしたみたいな奴に勝てるかってんだ。
　俺はステップインして思い切り前蹴りを放った。胸部に直撃したのに奴は一歩後退するだけだ。おいおい、俺は前蹴りは得意なんだよ。胸なら肋骨、腹なら内臓は貰う自信はあるぜ。どんだけ重量あるんだよ、こいつ。

アルシェが棒でわき腹を叩くが、全く効かない。シェルテスは棒を取ると思い切り引っ張った。アルシェは空中を浮いて引き寄せられそうになり、棒を廃棄した。俺は飛び掛って白い髪の毛を引っつかんだ。そのまま前方にジャンプして髪にぶらさがるような形になった。このまま体重で後ろに倒してやる。ところが左腕で抱き寄せられてしまった。物凄い力だ。次の瞬間、シェルテスが牙で俺の首に噛み付こうとしたので思わず首をそらし、目をめがけてありったけ唾を吐きつける。目に入って一瞬怯んだスキに脱出しようとしたが、あまりに力が強いわ空中に浮いているわで身動きが取れない。アルシェが高い回し蹴りでシェルテスの左腕を蹴るが、シェルテスは怯まない。まずい。

「静！」

紫苑が叫ぶ。そして唱え終わった魔法を放つ。と同時にシェルテスが俺の喉元に食らい付く。だがその瞬間、シェルテスの牙が折れた。俺の首が青く光っている。なんだ、紫苑がバリアを張ってくれたのか。

歯が折れて悲鳴を上げるシェルテス。紫苑は続けて ᘐᒉcl e ᒷ->cℓ ᔑe V-Λℓ ᒷ-Λᒉᑦᒉ e ᒐelᑢe⌟ᖇᔕ と叫ぶ。白い光が収束して刃となる。

「静、動いちゃダメ！」

シェルテスは紫苑の言葉を聞いて一瞬硬直する。俺は言われた通り抵抗をやめた。すると神々しい光がシェルテスの左腕を切り裂いた。ザクっと音がしてシェルテスの腕が落ちる。叫ぶシェルテス。千載一遇のチャンスだ。俺はシェルテスの胸を突き飛ばして、拘束から逃げた。

「ナイス、紫苑！やっぱ日本語はいいわ！俺らの間で作戦が使える。何を喋っても相手にバレないからな。ははっ、悪魔のくせに外国語ひとつ分からないとはバカな奴だ！」

「実はさっきサンシャインで逆にレインとアルカで同じことをしたんだけどね。静、こっちきて。-ᔑᒐe，ᒷaᐱ- -Λᖇ」

駆け寄る２人。そのとき跪いていたレインが光を放った。召喚魔法が完成したのだ。

ᘐh0-ᖇ ᐱᓄᐱ -ᔑᑢeᒐc⁀) ℓ-cZ -ᔑℓe⌟ᖇᔕ

シェルテスは俺らに飛び込んでこようとしていたが、その光を見ると、ぐっと悔しがって立ち止まった。ゆらっとしゃがむと、切り落とされた左腕を持ち、立ち上がった。

ᘐ-ᐱ ᐱ-V ᒷaᑢ ᑢa lec ɔ ℓɔlᑢeᖇᔕ

悔しげな言い方はどの言語でもどの生き物でも同じなのだろうか。憎憎しげに言うと、シェルテスは霧散して消えていった。

ふぅとため息をつく４人。ふとアルシェと目が合う。ふっと笑ってアルシェは右手を挙げてきた。俺はその拳に拳をぶつけた。パシンという乾いた音がした。お互いははははと笑った。高校以来だな、こんな清々しくガキの気持ちに戻ったのは。まったく、一児の父のすることじゃないわ。

「紫苑、セルジュの意味が分かったよ。あれは本来２人でするもんなんだろ」

紫苑はにこりとして頷いた。

「さて、召喚省とやらに入るかね」
　俺たちは召喚省に入っていった。当然ドアは閉まっている。アルシェは緊急用に開いている扉があるといって抜け道へ案内した。召喚省といっても壮大なビルだった。この辺は確かに近代化されているようだ。
「なぁ、六本木ヒルズの森タワーに少し似てるな。こっちのほうが更に凄いが、何となく方向性は似てる」
「え……さぁ、行ったことないですから。今度連れてってくれます？」
「うん、いいよ。……地球に帰れたらな」
　なんて凄い約束だか……。
　歩いていたら守衛に止められた。当直がいるのは当然だろう。しかしアルシェが顔を見せると守衛は驚いて姿勢を正した。なるほど、この建物の中は顔パスってわけか。オヤジの力が凄いっていうのは何とも羨ましい話だな。
　アルシェは守衛にハインとの中継ぎを命じた。俺たちは待合室に通され、ソファーに座って待った。かなり歩いたから疲れた。皆同じだろう、黙って下を向いている。冗談を言う気にもなれないようだ。
　１時間ほどしたら物音がしてドアが開いた。先頭に立っていたのはアルシェと同じようなローブを着た目に力のある 50 がらみの男性だ。端整な顔立ちで、髭も綺麗に剃ってある。顔がアルシェにそっくりだ。この人がハインか。
ᘓh-cᐱrᘓ
「えっ？」
　いまアルシェ、オヤジのこと呼び捨てにしなかったか？驚いて紫苑を見る。
「あ、アルバザードの人は親でも名前で呼ぶことがあるから。だからウチでは絶対レインに親の下の名前を教えなかったのよ」
「納得」
　ハインのローブには血が付いていた。何かあったのだろうか。彼の後ろには何十人もの人間がいた。俺たちは部屋の外へ出た。人数が多いのでロビーで話す。どうやら紫苑とハインは顔見知りのようだ。確かそんなことを言ってた気がする。俺だけアルカができないこともあって、蚊帳の外という感じだ。ハインの連れてきた衛兵たちが囲んで警戒する中、俺を除いた４人が話し合っている。暫くすると紫苑がとてとて走ってきて俺に事情を説明する。アルシェとレインを除いた全員が異世界の言語で会話する様子を見て不思議そうな顔をする。ったく、これだからヴァルテは。
「何を話してたの？てゆうか何であの人血がついてるの？」
「ここに来る途中でシェルテスの妨害にあったんだって。何人か……亡くなったらしいの」
「そうか……玲音の書がなければ俺たちも危なかったな」
「ハインさんも怪我をしたらしいわ」

「魔法で治せないのか？」
「小さな怪我だから治したわ。でも万能な回復魔法にあたるものは残念ながら存在しないのよ」
「アシェットとやらの時代はさぞ大変だったろうなぁ」
「そのころはね、たとえば腕を切られた瞬間に魔法で接合したりしていたそうなの。回復じゃないから、さしずめ魔法手術かな」
「なるほどね。まぁそれはそれとして、これでハインさんと合流できたわけだ。このまま玲音の書を武器にシェルテス捜索隊ないし討伐隊を編成すればいいってわけだな」
「そう。それが終わればメルディアを使って地球に帰りましょう」
「発動するのか、メルディアは」
「使い方が分からなければハインさんに頼んでアルデス王を召喚してもらって、王にメルティアを呼んでもらうわ。前もそうだったもの」
「なるほど、じゃあ一安心だな」
　ふぅと息をつく。アルシェはハインと話している。レインは衛兵からシェルテス討伐作戦の説明を受けているようだ。
「まさか異世界に来るとはね」
「私もまさかまた事件に巻き込まれるとは思いませんでした。その上今度来るときは彼氏ができてるなんてことはもっと思いませんでした。私、素敵な彼ができないことが最近の不満だったんです」
「素敵な彼って誰よ」
「もう、先生に決まってるじゃないですか」
「はは、そりゃ良い殺し文句だな。俺も全く予想だにしなかったね。塾に入ってきただけの今年の新入生とさ、まさか付き合うことになるなんて思わなかった。その上その子が異世界体験者で、実際にそこに行くなんて少しも思わなかった。付き合うかもしれないことは何度かデートして想像したけど、異世界は全くの予想外だったなぁ。仕事も蛍のことも忘れて動いたのはほんと久しぶりだったよ」
「結構刺激になりました？」
「かなりね。スリル満点だ」と笑う。
　笑い声を聞きつけてレインがチラとこちらを見てくる。俺が目を合わせてにこりとするとレインは前を向いて……叫んだ。
ᘐ--ɾ（eeɔɾᘐ
　説明をしていた衛兵がレインの胸元に手を突っ込んだのだ。目の前で見てしまった。レインは叫んで身をくねらせる。何が起こったのか分からなかった。衛兵はレインの腹を殴った。
ᘐ-ɣɾᘐと呻くと、レインは声も出せずに腹を押さえて床に沈みこむ。
「レイン！」紫苑が衛兵に飛び掛る。ハインと話していたアルシェは判断が一瞬遅れた。

紫苑から衛兵までの距離は 10m近い。衛兵は手にドルテを持っていた。そうか、胸元に隠したドルテを狙ったのか。おい、今更気付いたよ。あいつ、シェルテスに操られてるんだ。そりゃそうだ、こんなところで痴漢なんかするもんか。俺も遅れて走りだす。

紫苑が男に飛び掛って蹴りを繰り出すが、男は後ろに大きくジャンプして避ける。そのときロビーの窓が割れた。青白い炎が巻き起こり、狼の姿のシェルテスが現われた。衛兵がドルテを投げるとシェルテスは石を口に咥えた。

「しまった！」俺は思わず叫んだ。

その刹那、轟音がして落雷がロビー前に落ち、衝撃で窓ガラスが全て粉々に砕け散った。ハインはとっさにバリアを張り、皆を守った。流石はアルタレス。バリアがなければ巻き込まれて皆それぞれに怪我をしていたところだった。紫苑やレインの肌が傷つくのは許せない。

落雷の中から男が現われた。荘厳な顔つきの若い男だ。ハッキリした顔立ちのイケメンで、若干東洋人っぽい。心なしかアルシェに似てないか？

「アルデス王！」紫苑が叫ぶ。

「え……あれがサールの王！？」

「さっきの召喚が効いていたのよ！シェルテス、甘かったわね」

アルデスは腰に刀を差していた。刀だ。剣ではない。そしてシェルテスを睨みつける。シェルテスはバッと飛び去った。しかしアルデスは刀を閃かせると、一閃でシェルテスを一刀両断した。咆哮を上げ、ロビーに落ちるシェルテスの２つの半身。上半身が呻きながらバタつく。アルデスは右手を前に突き出すと、手から光を放ち、下半身を照射した。光が消えた後には何も残っていなかった。床面が抉られ、穴の周囲は床の材質が散らばったり溶けたりしている。

「これが神の王……」

恐ろしい。シェルテスは弱まっているとはいえ、俺たち人間にとってはあまりに脅威だ。それをいとも簡単に殺してしまうとは。

-ᛖɬeᒍ ᘐ乚cɔᐱ ->-ᐱZe ᛖe ᒍe< lec -l -ᐱᚴᘐ

乚cɔᐱ ᘐ-乚，ɬ-cZᚴᘐ

アルデスが何か紫苑に言うと、紫苑は慌てて玲音の書を投げようとした。その刹那、別の衛兵が紫苑を羽交い絞めにした。

「なっ！」

衛兵は紫苑の手から玲音の書をもぎとった。その瞬間、アルデスが抜刀し、衛兵を縦に真っ二つに切り裂いた。しかし衛兵は半分になった体で絶命する前にシェルテスのほうへ玲音の書を投げた。その瞬間、シェルテスはなんとドルテを口から吐き出した。とっさにアルデスが動くが、シェルテスは玲音の書に向けてドルテを吐いたのだ。ドルテは突っ込んでいき、本の中へ消えていった。これにはアルデスも驚いたようで、間一髪のところでドルテを取り逃がした。そしてその一瞬のスキを付いてシェルテスは霧散して消えた。

悪魔は狡賢いというが、神をも出し抜くとは将に悪魔の智慧だな。いや、単に殺そうとするものと生きようとするものとでは必死さが違うというだけの話だろう。結末を決めるのは生への執着なのかもしれないな。

半分になった衛兵がバタリと倒れる音だけがこだました。皆、あっけに取られて何も言えなかった。アルデスは刀を納めるとすっと消えた。術者レインの力が弱いため、召喚のタイムリミットが過ぎてしまったのだろう。本来なら限られた時間で計画を遂行できる予定だったのだ。チャンスを逃してしまったのだ、俺たちは。

「……紫苑、大丈夫か」

「うん、私は大丈夫。でも……この人が可哀相」

神に切り捨てられた衛兵を涙ぐんで見る紫苑。

「邪念があった人間が操られたんだ。魔法の本を手に入れたら自分はもっと権力を得られるのではないかというフェンゼルのような邪心を利用されたんだよ。悪魔のやりそうなことだ。紫苑が悪いんじゃない。お前のせいじゃない」

「うん」と紫苑は抱き付いてきた。泣いている。震えている。また自分のせいで誰かが死んだと考えているのだろう。ドルテを奪ったほうの衛兵は操りが解けて地面に倒れている。むしろ生きているこいつのほうが今後辛い目に合うかもな……。

アルシェはというと、「おおぉぉ……」と震えながら泣きじゃくるレインをあやしている。レインの泣き方は尋常ではなかった。よっぽど怖かったのだろう。掠れた低い声で、喉から息を掻き出しているようだ。掃除機でティッシュを吸い込んだときのような声だ。なりふり構わずだな。よほど怖かったのだろう。しかし、男はいつどこで泣けばいいのだろう。

ハインがアルシェに話しかける。アルシェはあやしながらもハインと真剣に話し合う。紫苑は「行かなきゃ」といって輪に加わる。強い女だ。とても 17,8 の少女とは思えない。俺は後ろから付いていって手を握ってやった。俺にできるのはこれくらいだ。

暫く話し合った結果、どうやらシェルテスは玲音の書を通って地球に行ったドルテを追うのではないかという意見で一致した。奴がドルテをこのままにしておくはずがない。だが、今は深手を負っているのですぐには向かえないだろうとのことだ。

尚、興味深いことにハインらも玲音の書が何なのか知らないようだ。世界最強の国家アルバザードが誇る召喚省が知らないのであれば、人類が知る由もない。しかし紫苑によるとアルデスは紫苑に「本を渡せ」と命じたらしい。神のアイテムなら「本」でなく何らかの名称で呼ぶはずだそうだ。確かに。ということはアルデスも知らないものなのか。

俺は待合室で紫苑と話していた。ハインやアルシェやレインたちは向こうのソファー周りで話している。ハインは今みたいな不始末が起きないように衛兵を全て帰還させた。ロビーには死体があり、その片付けをしてから帰還するのだろう。下っ端は大変だな……。

しかし神を信じて召喚省に入ったのに、神に切り殺されるとはな。いや、神を冒涜する邪念を起こした罰を受けたということか。いずれにせよヴァルテでなければ死ななかった

ろうに。そんな宗教に何の意味があるんだ？人の救いになるものじゃないのか？
　いや、違うな。この世界は神が実在するのだ。信仰対象としての架空の存在ではないのだ。人が人のために案出した救いの思想ではない。絶対的な力を持った現実の存在を崇めているのだ。そうか、地球とはまるで事情が異なるんだな。
「つまり、シェルテスに先にドルテを奪われたら終わりってことだな」
「そうみたいです。シェルテスが回復するのは間もないと思います」
「神は召喚できてもすぐに時間切れで帰ってしまうから当てにできないな。地球ってことは俺らが行くしかないってことだろ」
　頷く紫苑。
「俺と紫苑は行くとして、レインのメルディアがないと戻れないからレインも行くだろ。アルシェはどうするか」
「アルシェにはこっちに残ってハインさんと連携してもらったほうが良いと思う」
「こっちはまた３人か。正直彼がいると助かるんだが、衛兵さえアテに出来ない状況でハインさん一人置いとくわけには確かにいかないな」
「じゃあ早速帰りましょう。ドルテを回収して帰るだけならすぐですよ」
　紫苑はアルバザード人の輪の中に入ると、事情を説明した。納得したようで、レインがこちらにやってきた。アルシェが俺らに激励の言葉をかける。俺は何を言われても分からんから、首を傾げて苦笑した。するとアルシェが右腕を挙げたので、俺も挙げた。
ᘐᛇᴐᴐV- ᛇᘏ eᐱ ᐸcl, ᒐcZᐡ-ᘐ
「またあとでな、アルシェ」
　レインの手を握る俺と紫苑。メルディアに向けて呪文を唱えると、光が出て、先ほどのようにまた光の中に包まれていった。

　目を開けたら自宅にいた。俺の部屋だ。窓の外は暗い。夜だ。もう 10 時ごろか。
「帰ってきたな……」
　親はもう寝ているようだ。ちょうどいい。俺は電気を付けるとドルテを探した。玲音の書は今のところこの部屋とアルバザードの召喚省を繋いでいるはずだ。玲音の書がトンネルだとすればメルディアはそこを通る電車みたいなものだ。人間の俺たちは電車がないと行き来できない。シェルテスは恐らくトンネルさえあれば行き来できるのだろう。
「あった！」紫苑がベッドの下に落ちていたドルテを見つけた「ん？なんか……こんなのも出てきましたけど」
「いや、それは別に」
「DVD ですよね、これ。曰くありげ」タイトルを見ると、俺をじいっと見てくる。
「えーと、「レッド、愛しの女子高生たちよ中――」……女子高生に興味ないなんて嘘じゃないですか」
「いや、それは違うんだよ」

「こっちは――極悪非道なザー……マニアの勝手なリクエストに」
「読み上げんでいいから！」
　紫苑はじろっと睨んできて、無言でDVDを渡してきた。
「私がいるのに？」
「いや、違うって。これは蛍と買ったんだよ」
「蛍さんと？どうして？ありえないでしょ？」
　レインは何が何だかという感じで俺らをきょろきょろ見ている。
「いや、マンネリを解消するために見たんだって。本当に。レンタルだってしてたよ」
「女の人がそんなとこ入るわけないじゃないですか」
「いや、入るって。ほんとに。紫苑は知らないだけだよ。カップルは結構来るんだって。いや、結構ではないけど、稀にあるんだって、ほんとに！」
「ふぅん……じゃあなんで捨てなかったんですか？蛍さんの荷物はあらかた片付けたんでしょ？」
「それは……」
　慌てる俺。すると紫苑は急にぷっと笑った。
「あはは、嘘嘘。ちょっとからかってみただけです。男の人ならこれくらい普通なんでしょ？私、これくらいじゃ怒らないわ。先生の慌てた姿が見たかっただけです。でも女子高生関連を持ってるのはビックリしました。お姉さん系が好きだったんじゃないんですか？」
　悪戯っぽく笑う紫苑。
「暫くこれをネタにからかいますから」
「勝手にしてくれ。もう帰るぞ」
　レインが何々と聞いてくる。
「おい！レインには訳すなよ！この子の精神構造だとギャグじゃ済まないに決まってるから！」
「はいはい。ʌɔʌ ᔑ-ʔcʔ ɣ-ᒧ ʌeʔᑐ le ᑐcl ᑐe∪ eᔑᔑe」
ᑫeϑ ᘐ ᑫ と言ってレインは口に手を当てて俺を見てくる。何も言わないが、驚いた顔。明らかにドン引きしてる。
「紫苑……バラしたろ」
「んーん。さ、帰りましょ」
「あのな、異世界人に誤解されたら解けないだろ、２度と」
「だいじょうぶよぉ。lecʌ，leʌ- ʔɔlᑐ ∪ccᑐ -ᑐɔl-ᔑ„ ᔑɔʌ -ᒧ ＞elɮc-」
　レインは「ヤー」といってメルディアを発動させる。俺が手を握ると上目遣いにちろっと見てくる。紫苑め……あんなこといって本音ではやっぱり怒ってたんだ。仕返しにレインにバラしやがって。手を握ってるだけなのに勘違いされそうじゃねぇか。
　ところが光が起こらない。
「あれ？」

もう一度レインが呪文を唱える。しかしまた空振り。
「どうなってんだ？」
「先生が DVD の邪念を持ってるから発動しなくなったんじゃないですか？」
「紫苑！」
良い性格してるな、この女。
「さて、実際困りましたね。ᑕc lɔ eᓄ ᑕa ᑕe -ᒧδ」
ᘐ乚cel，ᚣcl ᑕa ᓄcᓄ Vcᒧᘐ
「魔力が切れたみたいです」
「つまり……分かりやすくいうと電池切れ？」
「はい」
「充電するには？」
「魔力を溜めるには術者のレインが魔力を回復する必要があります」
「紫苑じゃダメなのか？」
「私は玲音の書で魔力を使ってます……。それにメルディアは外れないんです。ほら」といってレインの腕を持ち上げる。
「確かに……繋ぎ目がどこにもないな。この腕輪を嵌めることができるとすれば、子供のころに手を通し、体が成長するまでずっと手から落ちないように育て上げるしかないな」
「ですね。なので取ることはできません。多分メルティアが魔法で嵌めたんでしょう」
「参ったな、レインの手を切るわけにもいかんし、腕輪を切るわけにもいかんしな」
頭を掻く。
「魔力を溜めるには月光を浴びるのが一番です」
「月の光か……今日は月でてるっけ？」
「月齢２くらい……ほぼ新月くらいだと思います」
なんで覚えてるんだよ、そんなこと……。
「晴れててもどっちみち、ですね。でも僅かな月の光で夜闇が魔力を帯びているので、外に出るのが良いと思います」
「夜の空気に触れれば魔力が回復するわけか。いずれにせよここから出るのは賛成だ。ここはシェルテスに割れてるからな。ドルテを先に回収できただけでも良しとしよう。レインの魔力が回復するまでの辛抱だ。それまで場所を転々と変えて追撃をかわそう。アルシェの取った方法を借りるぞ」
「はい、先生！lecᐱ，ᑐɔᒧ ᒐccᑕr leᐱ- elᏦ ᒐelᑕeᓄ cᑕ -ᑕar」
レインの手を引く紫苑。俺は親を起こさないように静かに部屋を出ると、家に鍵をかけて外に出た。
「シェルテスは親を襲わないかな」
「大丈夫だと思います。操りはするけど人間を一々傷つけないみたいですから、今までの傾向でいうと。わざわざ労力を割いてまで人間を殺したりしないんでしょうね。私達の命

なんてあいつらにすればその程度のものなんです」
「そうか……。悪魔め」
　駐車場に降りる。紫苑が状況をレインに説明する。車に乗せる。
「もし襲われたらカーチェイスかもな。最悪廃車も考えないとな」
「ん……やっぱ車は止めませんか？先生にとってこれは大切なものでしょう？」
「でも車は盾になるさ。盾は姫を守るのが役目だ」
　エンジンをかける。紫苑がじっと見てくる。
「静……惚れ直しちゃった。カッコいい」
　抱きついてキスしてくる。
「嬉しいけど、事故るから後でな」
　マンションを出る。ガソリンが半分くらいになってるな。どれくらいの時間走るか分からん。どこかで補充しないとな。
「どこに行けばいい？魔力の吹き溜まりみたいのって無いのか？」
「あります。でもどこかは分かりません」
「とりあえず目的地を決めないか。ただ走るというのは中々難しいんだ。どこでもいい。できるだけ遠く」
「え……私じゃ分からないです、ごめんなさい。先生が選んでください」
　254 に出た。とりあえず右折する。
「どこでもって言われても俺も困るな。なぁレイン、今魔力を感じるか？」
ᘐᑦᓀ ∧- Vcᔑ c> ᑦᓀᔑδᘐ
ᘐᓀ-, ᑦeᑦ ᑦᓀ eᑦ lecZ ᔐc∧ᘐ
「感じるけど弱いそうです」
「そうか、何か魔力の出やすい場所の共通点ってないのかな」
「あってもレインは池袋とここと白岡と川越くらいしか行ったことないですから……そうか、逆に先生が魔力を感じれば良いんだわ」
「はっ？俺は魔道士じゃないぞ」
「魔力を感じるところって不思議なところなんです。何となく記憶に残りやすく、ふっと夜にぶらっと訪れたくなるような場所。但し、蛍さんの家とか大学とかそういうのは除きますからね。そんなに思い出もないのに何となく来てしまう場所。散歩癖のある人じゃないと分からないかもしれませんけど」
「じゃあ好都合だ。俺は散歩癖ありまくりだからな。ははぁ、そう言われてみればあるな、そういう場所や道。この道通ると何となく不思議なわくわくしたファンタジーの世界にいざなわれそうな気持ちになる……そんな感覚、中坊くらいのとき感じたよ。夜中にチャリ漕ぎながらな。大人になっても何となくデジャブるような場所に何度か出くわした。不思議とそういうところはランドマークになって何度も言っちまうんだよな。よし分かった」
「心当たりあります？」

「アタリだと良いがな」
　上板橋駅の近くで右折し、城北中央公園の辺りを周る。人気がないところで路駐し、車を停める。
「ここですか？」
「違う。もっと遠くだよ」
「ナビ入れなくてもいいんですか？」
「あぁ、ウチから車で行ったことはないが、地図は頭に入ってる。まぁ細かいところはナビに頼るとしても、別に目的地を入力するほどのことじゃない」
　俺はドアを全開にし、レインの座る後部座席に置いてあるシート状の黒い袋を取り出した。
「何をするんですか？私にも手伝えることがあったら言ってくださいね」
「あぁ、大丈夫だよ、ありがとう」
「何か手伝わないといられない性格なんですよね、おせっかいだから。ちょこまかしたらうざったいですか？」
「別にそんなことで一々気にしないよ」と笑うが紫苑の言葉は適切だ。「怒りますか？」と聞かれると俺はムカつく。気が短い人認定をされてるからだ。「うざったいですか？」だとそういうニュアンスがなく、俺の耳に優しい。良い女だな、紫苑は。つい優しい言葉をかけたくなる。
「紫苑も疲れてるだろ。俺に任せて休んでてよ」
「嬉しい。でも甘えた女になりたくないです……。見てていいですか？面白そう！」
　そうか、そういう見方もあるのか。面白そう、ね。良い響きだ。
「でもこれを見たらどう思うかな。……よっと」
「ん？ナンバープレートですか？外すの？」
「いや、かぶせるんだよ、２重にね」
「このプレート、元々貼ってあるのと違いますよね」
「事故ったり特にオービス取られたりしたとき、ナンバープレートが証拠になるんだよ」
「オービス？」
「自動速度取締装置のこと。道についてるよ。夜だと赤いライトがカシャッと光るんだ。30 キロオーバーくらいで裁判行きさ。でも所詮カメラだからな、顔とナンバーしか撮られない」
「え、顔撮られたら終わりじゃないですか？」
「いや、ナンバーをすりかえておけば俺のとこに通知はこないよ。いくら顔が撮られてようが、それが水月静だってことは誰にも分からないさ」
「あ、そうですね。で、どうしてナンバーをすりかえるんですか？」
「そりゃこれから違法する可能性があるからだよ。シェルテスが襲ってくるかもしれんからな。違反っていうのは速度違反等諸々のこと。そうなったら一晩で免許取消くらいの点

数を稼ぐだろうな」
「え……」紫苑の顔が引きつる。
「16 号で前に話したろ。夜の俺の運転はちと怖いぞ。お嬢ちゃんたちはトイレ行っとけよ」
「何キロ出すんですか」
「さぁね。速度はあまり問題じゃないと思うが、わくわくしてきたとだけ言っておく」
「ねぇ、ナンバーを黒い布で覆うんじゃダメなんですか？」
「ダメだな、却って怪しい。スピード違反で捕まる前に 254 で逮捕だよ。そこで取り出だしたるはこのナンバー。付け替えは面倒だし難しいから、貼り付けできるように工具を揃えてある。特に後ろの付け替えは面倒だからなぁ」
「ってことは前科アリってことですね」
「はは、まぁそういうことになるな。でも本気でウチの近くを走るのは今回が初めてだ。さて、これでよし、と」
　車に乗り込む。
「このナンバーってどこで買ったんですか？」
「買うわけないだろ。第一買ったら誰が所有者か分かっちまうじゃないか」
「あ、そうですね。え、じゃあ他人のを盗んだんですか！？」
「違うな。そんなことしたら所有者が警察に連絡するだろ。そんなナンバー貼ってたら即盗難扱いで御用だよ。ほら、森や林に廃車が捨ててあるだろ」
「はい、何となく見たことあります」
「ああいう奴から剥ぎ取ったんだよ。所有者は取られたって報告などしないし、警察も廃棄された車を逐一把握しているわけじゃない」
「なるほど……」
「しかも比較的新しい奴だな。これなんか剥ぎ取って 1 年くらいだ。本来の車検期限まで余裕のある事故車だよ。偶にいるんだよ、事故車を廃棄するやつって」
「ナンバーに習志野って書いてありましたけど、本当はこれ練馬ですよね」
「そんなの誰も嘘だって気付かないから大丈夫」
「そっか……先生って頭いいのね」関心したような紫苑「習志野なんて聞いたことくらいしかないわ。千葉のほうだっけ？」
「あぁ、船橋とかあの辺のナンバーだな」

　11 時を過ぎて道が空いてきた。快適だ。石神井川に沿って走り、318 にぶつかって北上し、254 に戻る。速度を上げて飛ばす。思わず笑いが漏れる。
「静、気持ちいいの？」
「あぁ、爽快だろ？」
「スピード狂なのね。皆の命は守ってね、静」
「シェルテスにやられる前に死んでたまるかよ。俺の腕を信じな」

「いまはスピード出す必要あるんですか？」
「ないよ。気分の問題。俺も相当ストレス溜まってんだよ」
「へぇ」紫苑は珍しそうな顔「そうなんですか？」
「あぁ、ぶっちゃけ教師ということを忘れつつあるな。むちゃくちゃストレスたまっとるわ」
「じゃあストレスぶっちゃけちゃってください」
「ええ？……そうだな、まず異世界に行ってクソ狼と戦わなきゃいけないこの不遇な。で、あとは蛍な、とにかく蛍！」
「ちょっと待って……シェルテスのことより蛍さんなのね？」
「ったりまえだ！ハッキリ言うがなぁ、俺はあんな屈辱受けたの初めてだ。朝起きて居なくてそれきりで、ガキ産んだことさえ知らせずに、ある日戸籍を取ったら勝手に戸籍に記載されて父になってたときの惨めさが分かるか！」
　ドンと窓を叩くと後ろでうたた寝していたレインがビクっとした。すると紫苑はふっと笑うと、同じように窓をドンと殴った。おい……俺の車なんだけど。
「私もムカついてるんですよ。大切な静をそんな目に合わせたその女に。貴方が受けた傷の分だけ私が癒してあげなくちゃいけないでしょ。一発殴ってやりたいわ」
「いや、それは止めてくれ……蛍はいまでも俺にとってはある意味大切な存在なんだ」
　急に声が弱気になる俺。
「アンビバレンスですね。その気持ち、さぞ苦しいでしょうね。私がアーディンに感じたアンビバレンスと同じ。敵としての憎悪、無力な捕虜への慈悲……」
「……ごめんな、紫苑。紫苑の横で荒い言い方して」
「私もごめんなさい、先生の車叩いちゃった。蛍さんがここに座ってたと思ったらイライラしたの」
「俺らが喧嘩になったら凄そうだな。速攻で紫苑に蹴り殺されそうな気がするよ」と笑う。
「大丈夫ですよ。私が怒ったのはわざとですから」
「え？」
「ふふ……静が怒ってるから私、気をそらすために怒ってみたんです。怒ってる私って醜いでしょ？静には本来のカッコいい姿でいてほしい」
「なるほどね。ほんとに紫苑は 17 とは思えないな。高校３年生だって設定をすっかり忘れてたよ」

　ひたすら 254 を進み、文京区で 17 号に乗り換える。秋葉原のほうへ南下し、神田や東京へ進み 15 号沿いに行く。新橋を過ぎて浜松町の辺りの大門で右折し、増上寺のところで右折し、すぐ左折。このころには紫苑もどこに来たのかようやく気付いたようだ。
「東京タワー！」
「あぁ、夜の elopement なデートにはおあつらえ向きだろ」

「うん！きれー！ねぇレイン、起きて起きて、東京タワーよ！」
「あまり来たことないの？」
「はい！なにせ南埼玉郡ですから！」
　すっかりはしゃいでるな。俺だって都民だけどそんなに来るわけじゃない。車をその辺に停めて外に出る。時間はもう１時近い。
ᑫ0--，ᑕa eᑕ h-ʌɔc l-ʌᑕrᑫ
　レインも気に入ってくれたようではしゃいでいる。俺は２人を麓まで案内した。
「残念ながら営業はもう終わってるから入れないけどね。でもこうして電飾はついてる」
「綺麗……オレンジ色ってそんなに好きじゃないんです。でも、こんなに綺麗なオレンジの光は初めて」
「もしかして夜のタワーは初めて？」
「はい。昼じゃないと帰りが遅くなっちゃうから。だから私は真っ赤なイメージなんです、東京タワーって」
「なるほどね。俺はむしろオレンジのイメージかな。夜に来ることが多いから。これって月散歩かな」
「ふふ……そうかもです。レインのはしゃぎようを見てもそんな気がします」
「あそこにクレープ屋があってね、やってないのが残念だが」
「入口はそこですよね、閉まってますけど」
「うん」
「電飾、凄い綺麗ですね」
「電飾は日によって結構色が変わるんだよ」
「え、青とかあるんですか？」
「そうじゃなくて、節電してたりフルパワーだったりして、色合いが変わるんだ。あと、これは確かに綺麗なんだけど、何時間か前だったらもっと絢爛だったよ。12 時か１時くらいになると電力を抑えるからね。光が半分くらいになってしまうんだ」
「先生、詳しいんですね」
「わりと好きなんだよ、ここ」
「わぁ、支柱ってこんなに太いんですね。とっても細いイメージでした。前に来たときはそこまで細かく見なかったから。すぐお父さんに展望台に連れて行かれたの」
「そうか。東京タワーは上から下界を展望するもんだよ。でもなぁ、俺は不思議と展望台よりこの下からの眺めのほうが好きなんだ。皆が天の神になって下界を見下ろしてるところをさ、俺だけ地から天の奴らを見上げてやるんだ。きらきらオレンジに光るこの塔をな、アティーリに出てくるエルト神の塔のように見上げてさ」
「そういう見方もあるんですね」
「あぁ、皆ここに来て何をする？展望台で下界を見るだろ。それが正統な遊び方だ。でも俺は一人馬鹿みたいに天を見上げてるわけ」

紫苑が支柱を支える石の柱に寄りかかる。
「どうして？」
「え？……そうだな、俺は東京タワーを見にきたんだ。展望台から東京を見にきたわけじゃないんだよ」
「ふふ、先生らしいです」
俺はすっと目を細めてぼーっと紫苑を見つめた。
「なぁに、また私の後ろに誰か見えたんですか？」
「あぁ……話して良いか？」
「はい。聞かせて」
「あいつと来たときな、まだ付き合いたてで……でもガキだから結婚したらなんて話を安易にするわけさ。で、結婚してもデートは続けようねって俺が言ったんだ。蛍は喜んでね。その後実際結婚してお台場周ったあと、フェリーでこっちに来てさ、またここに来たんだ。夏だったなぁ。院生をしてたよ。で、あのときの約束守ったよっていったら喜んでくれてさ」
「そういう……そういう幸せな思い出、良い思い出も一杯あるんですよね。だから憎んでも憎みきれないし、逆に許そうにも許せない。最も憎くて最も愛しい……そうなんでしょう？」
俺は大きくため息を吐いて頷いた「自分でも自分の気持ちが分からない」
「分かってますよ。ちゃんと分析できてるじゃないですか」
「この矛盾した気持ちが整理できない」
「それはしょうがないです。私もアーディンのことが整理付きません。さっきのハインさんの衛兵のことだって……話すまい考えまいとしてるんですけど、なかなか……」
「そうだな、そうだよな……」
ᘏ⑅ᑦ∧，ᑦ∧，ᑦ∧ᖷᘏ
子犬のようにはしゃぐレインに呼ばれ、紫苑が走っていく。あ……まだ２人とも制服のままだ。夜中歩いてたらまずいな。警察に捕まるわ、こりゃ。しかしさっきの衛兵の返り血が制服に付かなくて良かった。服が嫌な思い出になってしまうところだった。確かあの服を着ていた中学の自分を救ってやりたいとか言ってたな。
ふぅとため息。ため息ばかりだな。空を見上げる。支柱を見る。オレンジの光をぼーっと見つめる。何をしても蛍のことを思い出す。いまの蛍じゃない。あのころの――互いに好きだったころの蛍だ。紫苑がいま言ってたな、幸せな思い出があるじゃないかって。確かに。
遠くから紫苑が大きな声で俺に声をかけた。
「言い忘れてました。東京タワーも私で塗り替えです！」
俺は「ははは」と苦笑いして手をパタパタ振った。

　レインは魔力が少し回復してきたようで、腕輪を見せてきた。メルディアは微かな光を放っている。
「まだ暫く時間がかかりそうだな。この辺りをうろついてるか」
「はい」
「時期的に寒くなくて良かったよ。冬ならキツいところだ。それにしても紫苑、スカートで寒くないか？」
「不良じゃないんで丈が長いですから」といって笑う。
「そこの増上寺のほうに降りていくとコンビニがあるんだけど行くか？トイレとか我慢してるだろ」
「あ、はい。ずっと行きたくて。レインも行きたがってると思います」
　東京タワーを離れて歩く。下りの道だ。増上寺の横を過ぎて大通りのコンビニに入る。食料や水分を買った。何か武器になるものはないかと物色したが、特に思いつかない。ヘアスプレーとかは武器になるだろうか。いや、こんなので目潰しするくらいなら蹴ったほうが早いな。
　コンビニを出て車へ戻る。今夜はここでぶらつきか。
「なぁ紫苑、いまは比較的安全だと思うんだよ。即座に戦闘っていう可能性も少ないから、いまのうちに親御さんに電話しといたほうがいい。池袋にレイン連れてデートしにいったにしちゃ遅すぎる」
「大丈夫かなぁ、電話しても……」
「俺が警戒しとくよ」
　紫苑はケータイを取り出して電話する。紫苑の声が聞こえる。状況を説明している。相手は親父さんのようだ。数分話して紫苑は「はい、わかりました。おやすみなさい」といって電話を切った。
「どうだった？」
「ウチに戻ってきなさいって」
「そうだろうな。で、なんて言ったの」
「新白はバレてるから帰れないって。そしたら納得したみたい。帰ったら尚更危険じゃ帰れないもんね。３人とも無事って言ったら安心してたみたい。お母さんが心配するからお母さんに頻繁に連絡するようにって」
「そうか……」
「あと、先生によろしくって。その……娘のことを任せても良いですかって」
「そうか、直に話したほうが良かったな。お父さんたちに来てもらえないかな。特にお父さんは強そうだから戦力になるんだけど」
「お父さん、そう言ってました。でもウチは眷属に見張られてるだろうから、合流したら居場所がバレちゃいます」
「なるほど。お父さんもさぞ心配なさってるだろうな」

「んー、わりと普通でしたね。娘が殺されるかもしれないのに」
「まさか」
「わりとそういう人なんですよ」
「そんなわけないだろ」俺は少し苛立った声で言った。
　紫苑は「うん……」といって下を向いた。
「……いや、お父さんのこと悪く言うなよ……それだけ」
「悪くじゃなくて……ほんとにそう聞こえたんだもん……」
　辛そうな顔の紫苑。そうか、自分自身が一番蔑ろにされたようで精神的にキツいんだ。俺の言い方はなかったな。
「悪い……」
「大丈夫。……レインは？」
「車で窓開けて寝てる。紫苑も少し寝るか？」
「そうですね。魔力が溜まるまで少し」
　とそのとき、ギャーという汚い声がした。人の声じゃない。
　真っ黒な物体が紫苑目掛けて飛び掛ってくる。紫苑はとっさに顔を守った。
　カラスだ！しまった、バレたのか。
　俺は手でカラスを振り払った。が、カラスはしつこく紫苑の頭や腕を突く。
「イタイ、イタイ！」珍しく泣きそうな声で叫ぶ紫苑。
「ちょ、ざけんなコラ！」腕を振り回しているとそのうち１発がカラスに当たって吹っ飛んだ。羽を片方やられたみたいで、バタついている。即座に俺はカラスに詰め寄ると、靴で思い切り踏みつけて潰した。カラスを踏み殺したのは初めてだ。
「紫苑、大丈夫か！？」
「顔や目は大丈夫です。制服は固いから突かれたところも大丈夫。でもちょっと頭のてっぺんを食べられました。あと、手がちょっと傷……」
ᘙ⌒ω⌒ᘗ
　レインが飛び出してきた。今更気付いたらしい。紫苑の手を見るとカラスを見て、ᘙ｡(｡)ᘗ と俺に叫んだ。
「えてっく？」
「お茶のことよ」
　なるほど、消毒か止血の代わりだろう。水よりはマシと考えたのか。賢い女だ。俺はコンビニで買ったペットボトルを開け、紫苑の手にかけた。
「頭にはかけられないよな」
「うん……どっちも軽傷だから平気よ」
「ちょっと見せて……血は出てないな、赤くなってるかも。暗くてよく見えない」
「大丈夫よ、ありがとう。それよりここから早く逃げましょう」
「白岡か？もうバレたんならお父さんたちと合流したほうが良い」

「ウチは重点的に警戒されてるからカラスじゃ済まないと思うのよ。それよりは敵のこないところを新たに見つけたほうがいいわ」
「分かった。じゃあ車に」
ᑫlecᐱ，-l ->ɔᖵᑫ
車のドアを閉めようとしたところで別のカラスが襲ってきた。ドアを閉めるとドアに激突する。間一髪だ。エンジンをかけて発進する。１速から一瞬で２速、３速にし、３速で速度を無理やり上げる。そこから一気に４、５、６速に上げる。ほんの数秒の所作だ。マツダは 100m走れば分かるというが、この局面においては 70mもあれば余裕だ。素人にしちゃ無茶な運転だ。
増上寺の横を滑って丁字路で信号を無視して６速のまま左折。
「きゃあっ！い、いま赤信号でしたよね！？」
「後ろ見てみろ」
「え……わっ！」
ルームミラーに忌々しい青白い炎が映っている。レインが後ろを見て叫ぶ。
ᑫᒐelᑐ V-ᐱᛦ-ᔑ leᐱ-ᖵᑫ
「-lᑎᖻᐱᑎ だ、レイン。よっ！」強引な左折で 405 に乗り換える。確かこのまま西にいけば 20 号にぶつかるはずだ。
シェルテスが口から青い炎を吐いてくる。
「先生、危ない！」
俺は対向車線に出て炎を交わす。爆音がして道路がはじけたような音が聞こえた。すぐに車線を戻してスピードを上げる。信号は全て無視だ。シェルテスもスピードをあげる。
「しつこいやつだ。紫苑、レイン、前に吹き飛ばないように気をつけろ。あと舌噛むな！食らえ！」思い切り急ブレーキをかける。「ぐっ」という紫苑の呻きが聞こえたかと思うと、車は急にストップする。シェルテスはとっさのことに止まれず、思い切り後部バンパーにぶつかる。ドンっという衝撃が聞こえた瞬間、俺はギアを下ろして一気にアクセルを踏む。一瞬でギアをあげていき速度を作る。
「今のは相当キツかったはずだ」
ᑫɔə，ɔə，ᛦ-ᕽ eᔑ Ꮆ-c，ᛦ-ᕽ eᔑ Ꮆ-c„ ᐱɔᐱ -ᑐ ᛦ-ᑎᑐ ᑢcᐱ - ᔑᑎcᑐ ᔑcᐱᖵᑫ
レインがおでこを腫らしながら泣きそうになる。
ᑫlecᐱᖵ ᑢᖻ eᑐ ᕽ-ᔑᔑɔ ᔕ ᑫ
ᑫ-əəə….ᑫ
あ、しまった、レインに日本語で言っても分からないんだった。ごめんな。でも日本語覚えろよ。
「レイン、大丈夫そう？」
「今度は計画もう少し早く言ってくださいね。サプライズすぎて私の心臓、破裂しそうよ」
「あぁ、あと紫苑さ、「危ない」の代わりに具体的な指示をくれると生きる可能性が上がる

と思うんだ。頼むよ、期待してる」
「はい、あなた」紫苑はからかうように言った。半分この状況を楽しんでいるかのようだ。
「シェルテスは一旦消えたな」
「ここはどこですか？」
「赤坂の辺りだよ。ここを越えると四谷。上智大の辺りだね」
「目的地は？」
「目的なく走ってるからな、知ってる道をただ通ってるだけ。一応 20 号に乗るつもりだから、このまま行くと丸の内線沿いで新宿方面だな」
「へぇ……私には何が何だか」

　左折で 20 号に乗り換えると直進する。
「ねぇ先生、あの車変じゃないですか。後ろの……」
　ミラーで確認すると、インプレッサだった。確かにヘンだ。俺はいま 120 キロで走ってる。なのにこいつだけ追いかけてくる。試しに赤で突っ込んでみたが、こいつも同じく突っ込んでくる。しかも抜かそうではなく、追い上げてぶつかろうという感じだ。こいつ、走り屋じゃない。
「操られてるのか」
「でも邪念なんてどこにあるんです？」
　俺はアクセルを思い切り踏む。
「走り屋なんだろうよ、あいつは。RX-8 もインプレッサもクーペだ。調子こいて国道走ってる俺見て血が騒いだんじゃねぇの。男なんてそんなもんだ」
「ばっかみたい！」
「馬鹿で結構！予告だったな。転回しまーす！そらっ」ブレーキを一瞬グンと踏んでから思い切り転回する。マンガのようなど派手な音がして地面が擦れる。無理やり対向車線に入った。だが驚いたことにインプレッサも対向車線に入ってきた。
「この野郎、つーかシェルテスの野郎、よりによって走り屋なんか使いやがって。紫苑、もうずっと吹っ飛ばされないようにしがみついてろ。舌噛むなよ！」
「待って！訳すから！lecΛ」
「時間ない！」俺はハンドルを左に切る。
「せんせっ！lecΛr >-ɣr Λ->(r ɐc) <cr ɭeΛ)ar」
　地面とタイヤが激しい摩擦を起こして急速転回する。その後ろをインプレッサが突っ込んでいった。車高があれば横転確実だな。ボックスなら死んでるとこだ。と同時にクラクションが盛大に鳴る。そう、ここは対向車線。しかもそこで転回ってことはつまりは逆走だ。前から突っ込んでくるのはトヨタのハイエースと思しきデカブツ。
「きゃあ！」女らしく紫苑が悲鳴を上げる。俺は冷静に見据えてブレーキを踏まずに左に完全に切ったハンドルをむしろ甘く戻す。寸でのところでハイエースを避け、元の車線に

戻る。
「よしっ！！これでもう戻れねぇ！」バンとハンドルをブン殴る。脳内ホルモン完全に出切ってるな、俺。
「おおおおおおお、気持ちいいわ！蛍のストレスぶっ飛ぶわ！人生の快感ランキングベスト 10 に入るわ、今の！」
　ガタガタ震えながら紫苑が見てくる。
「映画が現実になるとこんなもんだ。魔法で戦うファンタジーより現実的な分、怖いか？いっとくがな、俺はいま良い気分だ。ブチ壊すなよ。こんなことくらいで喚くような女じゃアトラスは救えないぜ」
　紫苑はぐっと唇を噛むと「このくらい何でもないわ！私、静を信じてたもの！レインが可哀相になっただけよ」と言い放った。
「強情な良い女だ」
　俺はスピードを上げた。
　四谷４の交差点で 430 に乗り換えた。すぐに左折して 305 で新宿御苑を周遊する。御苑周りの 24 時間パーキングに駐車すると、一旦車を降りた。
「ここが新宿ですか？」
「あぁ、御苑の周りだよ。っていっても広いからな。ここは新宿側だよ。あっちが高島屋」
「高島屋があるんですか」
「新宿ってあまり行かない？」
「はい……。特に用事ないですし。あの、どうしてここで降りるんですか」
「シェルテスの追っ手が暫く来てないっていうのと、レインがもう限界のようだから」
　レインを見ると胸を押さえて地面に蹲っている。よほど怖かったのだろう。顔を赤くして泣いている。よく泣く子だな。紫苑がレインをあやす。
「なんか……俺、悪者？」
「えっ！？」紫苑が慌てて振り向く「何言ってるんですか。先生があの運転しなかったらぶつけられて死んじゃうところだったんですよ！」
「そっか……じゃあいいけど、レインはどう思ってるのかな、と」
ᘐlecᐱ ᑦᖷᓀ ᓄeᔮ ᒐcZᑫ- -lᑫ-ᑦ leᐱ- ᓄeᑦeẟᘐ
ᘐᖷ-，h-ɔ h-ɔ，ᓄeᐱᑦ-ᐱᑦ ᒐcZᑫ-„ ᑦcɔ ᐱɔᐱ ᐱ-ᑦ Ve› ᑦcᐱᑫ---ᘐといってまた「あぁあ」と泣き出す。
「えっと……大丈夫です。先生には感謝してるわ。ただ怖かったんだって。背中さすってあげて」
「あぁ。ごめんな、レイン。もうちょっと優しい運転だったら良かったんだけど」と背中をさする。
「優しい運転じゃ死んでました。あれで良いんです……」
「思うにさ、車は避けないか？」

「どうしてです？」
「危ないんだよ、車に乗ってると他の車が相手になるだろ」
「でも生身でシェルテスが来たらどうします？」
「そこなんだが……一番怖いのは生身のシェルテスか車かのどちらかだろ」
「はい」
「逆に怖くないのは凶暴化した動物か人間だ。こっちのほうが格闘と魔法でどうにかなる。シェルテスが出てくると恐ろしいんだが、人ごみだとシェルテスは俺らを見失いやすい。その上人が邪魔で戦いづらい。今までの傾向を見ると人を操る方向でくる。そこでだな、無関係な人間巻き込むこと前提で、新宿のほうへ行かないか。夜で人ごみといえばあっちのほうしかないだろ」
「つまり、わざと戦地に行く代わりに敵のレベルを下げるってことですか？」
「そうなるな。レイン、あとどれくらいで魔力が溜まる？」
　腕を取る。レインの腕は白くて細くて柔らかい。頼りない手。すぐに折れそうな、小枝のような手だ。まだ多少震えている。脈が凄い勢いで動いている。小動物みたいだな。メルディアはだいぶ光が増したみたいだ。
「あと少し……だな」
　紫苑が事情を説明する。レインは少し驚いたようだが、納得して立ち上がった。
　俺たちは新宿駅へ向かった。
　意外なことに人が通ってもすぐには襲われなかった。高島屋の前に出ると、右折する。ガード下をくぐると、東南口の下に出る。
「うわ、おっきなテレビ」
　ビルに張り付いたテレビを見て驚く紫苑。レインの肩を叩いて見せる。レインも「おー」と驚いている。
「テレビ、付いてたらいいのになぁ」
「あぁ、フラッグスか」
「フラッグス……ですか？」
「建物の名前。そっちがルミネ。これはＣＭで聞いたことあるだろ」
「うん」
「あそこのテレビは多分 11 時くらいまでやってると思う。何度か通ったときの感覚だと、その辺りで切れてる気がする。もうちょっと早かったら見れただろうな。今度連れてくよ」
「嬉しい。先生ってほんと何でも知ってるのね」
「いや……それより少し休もうか」と言って近くの銀の円形バーに腰を乗せる。
　通りゆく人たちがチラチラとこちらを見てくる。
「やばい……ファンタジーに慣れすぎて現実的なことをすっかり忘れてた。紫苑、レイン、そのカッコ、まずいわ。子供は夜うろつけないんだよ、ある意味アルバザードと同じだな」
「え、私のところは平気ですよ？大晦日も外出てますし」

「いや、大晦日は良いと思うけどさ、そうじゃなくて、援助交際とか少年犯罪を減らすためにガキはうろつけないんだった。私服で歩いてるんだよ最近のガキは」
「そうなんですか？」
「あぁ、前までブクロの北口らへんで売春してた女子高生とかさ、家に帰りたくないからってリーマンをホテルに引っ張って金と寝場所を確保してやがった。石原の思惑がむしろ逆に働いてらぁな。しかもケーカンがうざいからってご丁寧に鞄に私服入れてさ。夜になると女子便所とかで着替えるわけだ。制服は珍しくなったけど私服女子高生はうようよしてるよ」
「へぇ……ほんとに何でも知ってるのね。さすが元不良」
「決め付けるなって」
「もうバレてますよ？」
「いーんだよ、余計なことは知らなくて。さ、警察が来るとまずい。特に俺がな」
「あは、彼女なんて言っても信じてもらえないかも。私が「この人に５万でどうだって言われたんです。しかも友達と合わせて２人で！」とか言ったら大変ですね」と笑う。
「あのなぁ……緊張感解けるだろ」歩き出した。２人は付いてくる。……５万は安すぎだ。
「解いてるんですよ、わざと」

　歌舞伎町のほうへ歩いていく。この時間に制服なのが目立つのか、或いは紫苑たちの見た目のせいか、随分と見られる。このまま駅沿いに行くと確か交番があったな。横断歩道を渡る。迂回してアルタ前まで行く。夜だというのに全く賑やかな街だ。思ったとおりシェルテスは襲ってこない。メルディアはもう随分光ってきている。あと少しだと思うのだが……。
　スカウト通りを抜けて下りていく。レインはきょろきょろ物珍しそうにしているが、紫苑は緊張しているのか、よそ見をしないようにさせている。だが、ある意味よそ見は必要だ。というのも、いつシェルテスが人を操るか分からないからだ。
「ねぇ先生……ここっていくらなんでも邪念ありすぎませんか？ここで喧嘩なんかしたらすぐにバレるんじゃ……」
「そうしたらカメラを先に魔法で壊すしかないな。襲ってくる連中はあらかた魔法で片付ける。格闘じゃ人数が多いとムリがあるからね」
　神妙な面持ちで歩いていく。
「まぁ、ここで暴れればニュースになることは間違いないだろうな。尤も、容疑者知れずになるが」
　スカウト通りを抜ける。
「何もありませんでしたね。ここは？」
「そこが歌舞伎町。で、その左っ側……ほら、エスパスって書いてある下、あそこが西武新宿駅」

「へぇ。歌舞伎町って怖いところってイメージです。でも意外と襲われないみたいですね。シェルテスはまだ私達を見つけてないのかも」
「かもね。さっきインプレッサを出し抜かれた後、見失ったのかもな。そうなると人ごみに隠れてるほうが安心かもしれない。匂いや気配が混ざるから」
「シェルテスが何を手がかりに私達を探してるのかが分からないのが辛いですね」
「そうだね。さて、車降りてから 30 分以上経ったな。戻れば 1 時間か。そろそろ戻ろうか」
「東京タワーのときよりずっと時間稼げましたね。人ごみに混ざるのってアタリだったのかも。でも、今までのこと考えるとそろそろ限界でしょうね」
　歌舞伎町には入らず、スカウト通りを遡る。アルタ前を通り、右折。そして直進。
「ここさ、昼は店やってるんだ。パールレディとか言ったかな。タピオカ入りのジュースを売ってるんだけど、美味いんだよ。今度買ってあげる。レインもいればいいんだけどな」
「夜で残念なことばっかですね」元気のなさそうな紫苑。
「うーん……清水寺って行ったことある？」
「え、京都のですか？はい」
「昼だった？」
　頷く紫苑。
「あそこ、夜は閉まるんだよ。開門も閉門も 6 時。早いよな。でかい門が閉まって入れなくなるんだ。白い札が門に張ってあってさ「閉門中御用のお方清水寺側警備詰所へお越し下さい」とか書いてあるわけ」
「よく覚えてますね、そんなの」
「まぁな。で、門の前は坂なんだが、坂を少し下りてパーキングの近くにある横道に小さな石階段があるんだ。私道なのかな、そこを昇ってくと八橋なんかが売ってる商店街に出る。そこの坂を上ってくと黄色いキープアウトのチェーンが引かれて、やっぱり入れないんだ。チェーンだから跨げばいいんだけどさ、守衛がいるからムリなんだ。だから近付けるのはそこまで」
「もったいないですね、折角いったのに」
「京都って関東人の感覚だと修学旅行だろ？絶対清水のイメージは昼なんだよな。じゃあさ、清水の夜景って知ってるか？閉まった後の清水がどうなるか」
「え……」
「ライトアップされるんだよ。あの歴史的な寺がさ。守衛室の前から見えるのは朱門と清水だが、光ってるのは清水だ。そういうとき思うんだよ。ガキのころの力じゃ見れなかったものを見ることができたって。東京タワーも同じだよな。展望台に行って見下ろすのが楽しみ方か？清水は舞台から飛び降りるマネをしてふざけるのが楽しみ方か？既製品の娯楽じゃ楽しめない。楽しみ方は俺が決める」
　紫苑は何も言わずに黙っていた。
　右手に先ほどの東南口が見える。ガード下をくぐった。道路向こうに見える高島屋を横

切る。あとはここを過ぎたところで左折してパーキングへ向かう。
「今日、来て良かったです」
「ん？」
　５分ほど黙っていた紫苑が口を開いた。
「思ったの。夜で色々楽しめなかったけど、先生といられたから幸せだって。でも、それって言い訳。やっぱり楽しみたかった。いるだけで幸せなんて単なる合理化だわ。さっきの言葉聞いて思ったの。私、今日は楽しい。少なくとも今夜は楽しい。先生のおかげです」
「そっか」俺は頬を掻いた。
ᑫ╰cɔʌɾ ⊢ eᑐ Z-⊢ cʌɾᑫ
　レインがハッとして小さく叫ぶ。
「誰？あの人のこと？ᑫee，⊢ eᑐ ＞cʌ ᑫco」
　レインは前方の女を敵と勘違いしたようだ。水商売風の女だ。ヴィトンのバッグを持っていて、髪をパーマにして、茶色く染めている。この辺によく居そうな女だ。だが、歌舞伎方面ならともかく、夜のこの場所は確かにちょっと……な。ガード向こうはゲーセンだなんだで賑わってる。足取りからしてそちらに行くのだろうが。
ᑫe╯ᑐЧ₰ ⊢ɔᑐ ⊢ eᑐ Z-⊢δᑫ
ᑫᑐee，⊢ eᑐ Z-⊢ɾ ᐟeʌ cʌ cʌ╯⊢--ᑐɾᑫ
「えぇ？」顔を上げる紫苑。するとヒールのコツっという音が響き、女が紫苑の前に立ちはだかった。
「あの……」と言うや否や女は紫苑の髪を引っ張った。
「きゃぁっ！」紫苑は思わず腰を引く。
「おいっ！」俺はしかしためらった。相手が女だと一瞬手出しが躊躇われる。
「何すんのよ！」紫苑は引いた腰を戻す反応で女の顎を蹴り上げた。
「ぎゃ」と叫んで女が一歩下がるが、手を髪から離さない。
　そのまま女は紫苑の髪を力任せに引っ張ると、ブチブチという音と「痛い！止めて！」という紫苑の悲鳴がして女の手が離れた。手には紫苑の長い髪が何本も握られている。
「な……な……」声にならない紫苑。髪というのは抜かれるとかなり痛い。勝手に涙が出てくる。空手で打ち合う紫苑だが、これには自然と涙が出たようだ。
「このっ！」
　紫苑はステップインすると女の腿に回し蹴りを入れた。格闘技の経験などあるはずのない女は「いたぁい！」と叫ぶとその場に崩れた。紫苑はその顔に横から前蹴りを食らわせる。直撃を受けた女は上半身から吹き飛ばされ、強く頭を地面にぶつけた。
「おいっ！やりすぎだって！」思わず紫苑に飛び掛って止める「女相手だぞ。その威力で蹴ったら地面に頭ぶつけることくらい分かるだろ。少し加減してやれ」
「ごめんなさい……ついやりすぎました。だって先生のためにある綺麗な顔なのに、傷つけられたら嫌です。髪の毛を抜かれたから、顔を潰してやろうと思ったの」

「……」俺は黙った。女は怖い生き物だ「とにかく早く行こう。人が来る。レイン、leくしccᑎ」
　走って駐車場に戻る。御苑の裏の小さなパーキングだ。
「あのね、そもそも女だから殴っちゃいけないなんて差別だと思うのよ」
「別に気にしてないよ。状況次第じゃしょうがないよね」と見透かしたように言うと紫苑は黙って下を向いた。
「レイン、メルディアはどうだ？」
ᘐlecᐱ ᑕᖹᓄ -ᔑ ᓄeᐱ ᐳcᖹᓄ ᐳelℓc-δᘐ
ᘐᑕee，ᐱecᘐ
「まだか……」
「あれ、先生分かったんですか？」
「ᐳɔ- が既にだろ。ᐱec だったら ᑕeelVeᑎ ってやつで「まだ〜ない」って意味になるんじゃないか、アルカの場合。その辺人工言語だから簡単だよな」
「メルテーブルをリスニングで応用できるって高等ですよ」
「参ったな、もう少し散歩をしなきゃいけないようだ。夜の散歩としゃれ込むかね。脚は大丈夫かい」
「はい、レインのほうが心配だけど、車でカーチェイスはもう懲り懲りですから」
「ははは」と笑った「実は俺も懲り懲りだよ」

　一休みしている暇はない。常にこそこそ動き回っていないと襲われるというのは非常に体力と精神力を消耗する。一人で２ヶ月戦ったアルシェは凄い男だな。
　東南口へ戻ると長い階段を登る。もうひとつのルミネで右折。小田急前の広場で左手の道路を渡る。
「そこの宝くじ屋でナンバーズがあってね。俺はギャンブルに興味はないんだが、遊びで大人買いしたことがある」
「へぇ、当たりました？」
「いいや、ハズレ」
「あはは。良いんですよ、先生にお金は似合いません」
「へーえ？」
「この辺も人多いですね。気をつけなくちゃ」
　小道に入っていく。
「この辺りにね、前に喜楽茶っていう店があったんだ。イージーウェイとかいったっけな。よくきてた。タピオカ入りのお茶でね、美味かったよ。さっきのはジュース感覚で原宿の竹下通りとかにもあるんだけど、こっちはちょっと高級な感じ。緑の看板でね、面白い体験をしたよ」
「へぇ、どんな？」
「蛍と１日英語だけで過ごしたんだ。当然店でも英語。結構日本人は喋れないもんだね、

６年も習っているのに。喜楽茶の店員は慌ててたよ。結局ジェスチャー。ってことはレインが行こうとそこら辺のメアリーちゃんが行こうと同じだってことだ」
「面白いですね。私もアルカでやってみようかな」
　ぐるぐる動いてKDDIのビルに来る。急に人が減った。
　誰もいないビル間の道を通り、奥の段に座る。そこで少し休憩した。俺は上を向いて空を見る。真っ暗だな。明日の仕事はどうしよう。行けっこないな。紫苑の頭を撫でると猫のように擦り寄ってきた。
　５分ほど休んでまた歩く。KDDI を直進し、道路を渡って都庁へ行く。一回地下に下りてサブウェイの横を通り、また上がる。誰もいないものだ。
「ここって都庁ですか？」
「そう、すぐ上ね」
　階段を登って都庁周りを歩く。
「あっちが中央公園」
「へぇ……あっちは」
「あれは東京医大のほうだな」
「全方位知ってるんですか！？」
「まさか」
「じゃああっち！」
「右前のほうか？じゃあ工学院大のほうだな」
「じゃあ後ろは？」くるっと向く紫苑。
「あっちは文化女子短大のほうだろ、確か」
「わぁ、結局全部知ってるじゃないですか」楽しそうな紫苑。街が珍しいのだろうか。クイズが好きなのだろうか。かなりはしゃいでいる。
「都庁のほうは大江戸線が通ってるからね。光が丘から新宿までは簡単にいける。それで知ってるだけだよ。ほら、あっちが都庁前駅だ」
　少し歩いたら都庁でレインが紫苑に何か言った。
「疲れちゃったんで少し休んでいいかって」
　またか……いま休んだばかりなのにな。
「じゃあそこに座ろうか。lecʌ，ɘ-ᒧᒧɔ，ᐸc-ʌᒧ」と言って石のベンチを指差した。
「あぁ〜俺も疲れたわ」
　ひとつ横のベンチに行って寝転がって天を仰ぐ。
　あーっと声を出して空を見ていたら何だか涙が出てきた。
　あー、俺たちなんでこんなことになっちまったかな、蛍。
「あ、先生、寝てるのね？」
　紫苑が来たので慌てて腕で顔を覆う。
「運転で疲れたでしょう。少し休みましょ」

俺は掠れ声を聞かせたくなくて黙って頷いた。あのときの空も真っ暗で吸い込まれそうだったな、蛍。これはさ、やっぱ俺に与えられた罰なのかな。お前は俺がこの戦いに巻き込まれて死ねばさぞや喜ぶんだろうな。或いは何とも思わないんだろうな。

悪魔はお前だ。

「先生？……静？」紫苑が呼ぶが、俺は寝た振りをした。

何も答えないでいると、フルーツの香がして、唇に柔らかい感触がした。リップ付け替えたんだな、こんなときだっていうのに女って生き物は……。

そのまま紫苑は頬を摺り寄せて、レインの元へ去っていった。俺は交差した腕の中から目を細めて闇を眺めていた。

「この空の下のどこかで……」

小さく呟いた。

「行こう、静」

肩に手を置かれてはっとした。時計を見る。いつの間にか眠っていたらしい。

「俺……どのくらい？」

「20 分くらいです。レインも寝せました」

「紫苑は寝てないだろ」

「見張りしてましたから。気にしないで。後でたっぷり腕枕してもらいますから」といって笑う。おかしい、徹夜のはずなのにあまりに元気だ。……そうか、若さか。17 といえば俺は２日徹夜で遊んだりしてたころだ。今じゃ１日だってキツいのに。はぁとため息をついた。

ᘐlecᐱ，ᑐɔᔑ ᒐccᑢᘓ

ᘐᓬ-ᘓ 紫苑に言われ、レインはにこりとして立ち上がるが、やや顔が赤い。立ち方を見て俺はレインを呼び止める。振り向くレイン。

「えーと、lecᐱ，ᔑᑐcᐱ ᐳe„ 見せるって何ていうの？」

「ᔑcᐱᔑ です」

「ありがと。ᔑcᐱᔑ Z-> -l -ᐱ」

ᘐᑢe，ᑢeeᓬᘓ レインはぷるぷる首を振る。

「何で足を見たいんですか？アルティス教の女の子は生足みせませんよ」

「そうか、そうだったなぁ。じゃあさレイン、ᑢc lᓀᑐ ᔑeᐱ ᒐ-ᐱᔕ」

ᘐeᕫᔕ h-ɔᘓ

「嘘付け。アルティス教徒は嘘付かないんじゃないのか。歩けないだろ、この足じゃ」

靴ごと足を握るとレインは「んっ」と言って首を縮めて目を閉じる。

「レインにこのローファー、合わないんだよ。慣れてない靴だから靴擦れしたんだ」

「え……本当なの、レイン？どうして言ってくれなかったの？」

「言ったら迷惑かかると思ったからだろ」

口調と状況で内容を察したレイン。えへへと笑いながら ᔕᕽ-ᔑᔑᓄ ᕽ-ᔑᔑᓄᔕ と言う。
「eᐱ ᕽ-ᔑᔑᓄ だ、バカ。痩せてる子がやせ我慢するな。鶏がらになるぞ。紫苑、おぶるって何ていうんだ」
「え……ᓚᓄᔑ ですけど」
「背中の転換動詞か。つくづく面白い言語だな。lecᐱ，-ᐱ ᓚᓄᔑ Ⅴ-ᐱ ᑕc」
するとレインは首を大きく振って「ぱっそぱっそ」と繰り返す。
ᔕᖘᓄ- -l -ᐱᔕ
ᔕᑕ-lᓫᑕc eᑕ -lᑕc-ᐱ e ᓚcᓄᐱ,, ᑕᖻ -lᖘ ᐸᓄᐯ ᐱᓄᐱ Ⅴᓄl ᔑᓄ-ᔕ
「ん？」紫苑を見る。
「私の彼氏だからおぶってもらうわけにはいかないって」
はぁとため息をつく。しゃがんだまま後ろを向いて喋る。
「友達って h-ᔑᐱ だったよな。ᑕ-l -ᐱ eᑕ h-ᔑᐱ ᑕccl，lecᐱ,, -ᐱ ᓚᓄᔑ ᑕc,, ᖘᓄ-」
レインはチラッと紫苑を見る。紫苑が頷くとレインは ᔕᔑeᐱᑕ-ᐱᑕ，ᑕᖻ eᑕ ᐱccᑕᔕ といって乗ってきた。
「よっ」と立ち上がるとレインは「わぉ」と言って驚いた。
「うわ……レイン、軽いな」
手が多少尻に当たってもセクハラじゃないって信じてもらえるだろうか。
「まさか紫苑をおぶる前に別の女をおぶるとはな」都庁を戻る方向で歩き出す。
「蛍さんもおぶってあげたんですか？」
「あぁ。同じように足が痛いっていうから駅から一度な。喜んで日記にまで書いてたみたいだよ」
「結婚したてですか？」
「いや、出て行く少し前」
「え……」紫苑は黙ってしまった。
「何？」
「ううん、なんでもないです。……いえ、何でもあります。私、やっぱり蛍さん、何となくですけど、嫌いです」
「……そうか。あまり片方の意見だけ聞くなよ」
よっとレインをおぶり直す。
レインが軽くて助かった。しかも体が柔らかいので疲労も少ない。制服が固いことが唯一の問題だ。レインはすっかり俺に懐いてしまったようで、始めは恐る恐るおぶさっていたのだが、途中からは俺の首や肩に手を回してに抱きついてきて、俺の肩に頭を乗っけてすやすやと息を吐きながらうたた寝していた。
「まったく、こいつは子供だな。娘ができればこんな感じなんだろうな、小学校くらいまでは」
「私もお父さんにおんぶしてもらってました。背中が固くて乗り心地が悪かったんですけ

ど、お母さんよりずっと安心できるの」
「へぇ？安心か」
「今のレインみたいな感じよ、きっと。おっきくて暖かいの。良い匂いがするし」
「あの親父さんじゃそうだろうな。俺は大きくもないし良い匂いもしないがな」
「そんなことないですよ。今度のっけてくださいね。そういえば、レインの印象、良くなりました？」
「あぁ」苦笑いをする「正直始めはあまり良くなかったけどな。俺がアトラス行って異言語に囲まれる厳しさを知って、そんでこっちに戻ってきてこういうことが重なって、いまでは結構好きだよ」
「良かった……この子は私の初めての友達だから」
「そうか。実際いい子だよな。自己中かと思ったら意外とひたむきで優しくてさ。いまだって痛いの我慢して笑ってたもんな、心配かけまいと。可愛いもんだよ」
「……」
　しまった、ちょっと褒めすぎたか。
「アルシェはそれでも俺と同じで紫苑が好きなのかな。あいつがライバルになると厳しい」
「やだ」笑う紫苑「そんなことないですよ。彼は戦友だもん。それに私は静しか目に入らないもん。女ってそういうものよ。蛍さんに習ったでしょ、先生？」
　俺は苦笑した。

　途中流石に休憩を入れたが、車までどうにか辿り着いた。シェルテスの眷属が襲ってこなかったのが幸いだ。
　レインを下ろし、駐車料金を精算する。流石にもう疲れた。というかレインが歩けない以上、移動手段は車しかない。
「やーっ！」
　え？突然聞こえたレインの声。おつりの流れてくる音が聞こえる。
「どうした？」
「先生、メルディア回復！行けます！」
「よしっ！行こう！」
「車はどうします？」
「何年置いといたって構うもんか。シェルテスが来る！」
　レインが呪文を唱えだす。とそのとき青白い炎が現われた。
ᘐ-ᐱ ᑐaᑕ ᐱɔᔑ ᐱ-V Iaᑕ ᒐoIᑕe ɔ lec ᑐɔᑐᚴ ᑕc, ᚷcV- e ᖻaaᚷ-ᚴᘐ
「はっ、この機会を逃すわけがないよな、シェルテス。来ると思ったぜ。日本で死ね！」
　構える俺。紫苑が玲音の書を開いて魔法を唱えだす。シェルテスは人狼化すると、物凄い速度で詰め寄ってきた。俺はサイドステップしてから即座に腰を捻り、ストレートを繰り出す。実は俺は右ストレートが強力だ。綺麗に胸に入り、シェルテスは怯む。俺は構え

て奴の四肢に注意を払う。重量で来られたら負ける。リーチも向こうのほうが長い。蹴りの技術の差しか強みはない。今みたいなストレートなど二度と入らん。

とそのとき俺の左頬と耳に激痛が走った。

しまった！眷属がいたのか！？

だが違った。俺を打ったのは奴の尻尾だった。そうだ……狼には尻尾が……。

その瞬間、シェルテスのいい加減な前蹴りを腹部に食らった。物凄い重量による威力。腹筋を固めて更に半身にずらしてガードしたが一瞬で吐き気を催した。適当な前蹴りなのになんだこのバカみたいな威力は。と思った瞬間、シェルテスは俺の横を通過した。

くそっ、俺は眼中にないのかよ。

「紫苑、危ない！」

ᘐ<-c e <-cl-ᚴ ᚸe >eᒧ -ᐱᚴᘓ

炎の壁が宙に浮き、紫苑の周りを囲む。炎の壁だ。巧い！ガードした。

と思った刹那、シェルテスはレインの眼前に降り立った。ビクっとしてレインが呪文の詠唱を止める。シェルテスを見上げた瞬間、奴は４本の指をレインの喉元に突き刺した。声にならない叫びをあげてレインがのけぞる。

レインは喉を押さえて悶絶しながらも、メルディアを発動させようとする。だが喉をやられて肝心の呪文が唱えられない。しまった、これが狙いか。

ᘐ<-cl-，ᚸe <-c laᚴᘓ

紫苑が壁となった炎をシェルテスにぶつける。これにはシェルテスも適わない。低い唸りを上げて炎に包まれていく。

「紫苑！車に乗れ！」

ᘐlɐVcᐱ ᚸe ɮe> ᒣ-ᒐᐱᚴᘓ

紫苑が叫ぶと黒い光が辺りを包む。俺はレインの腕を掴んで車に突っ込み、ドアを閉める。紫苑は助手席に入っている。ナイスチームワーク。ドアを閉めるとベルトなど付けるはずもなく即イグニッション。そのままバックを限界まで踏み込み、シェルテスを轢く。ドンという音がしてシェルテスが吹き飛ぶ。一旦駐車場の出口をバックのまま出て、１速にし、アクセルを踏む。２速にして更に加速し地面に倒れてるシェルテスをはねる。柔らかいものに乗り上げる感触がした。そのまま何度か前後に車を動かし、シェルテスの動きが弱まったのを見てから駐車場を出た。

「レイン、大丈夫か！」

305 の明治通りに出て爆走する。

紫苑が診察する。レインは喉を突かれたようだが幸い出血は少なく、内出血が少しある程度だそうだ。のけぞったので威力が最小限になったのだろう。だが呪文を唱えるのはムリで、ひゅーひゅーと喘息患者のような音を立てている。つくづくロクな目に合わない子だ。まぁ、俺も紫苑も怪我はそれなりに食らってるが、レインは痛みに慣れてないのでリアクションがどうしても大きくなってしまう。

「どこに行くんですか！？」
「もう見つかってるしメルディアが回復したいま、シェルテスは決死の覚悟でくるさ」
「ウチに来ますか！？」
「遠すぎる。そこまでカーチェイスで生き延びる自信はない。せいぜい俺ん家だな」
　山手線沿いに新大久保、高田馬場、目白を通り過ぎる。ここから池袋に向かう際に急激に駅に接近するはずだ。
　ルームミラーを見る。ジュンク堂の横を通りかかったとき、月が襲ってきた。
「速い……くそ、ここは夜でも人がいるが……止まってられんわ！」
　赤のまま突っ込む。まだ 80 キロだ。池袋を過ぎてサンシャインから少し離れたところで 254 に乗り換える。シェルテスが速度を上げ、バンパーにぶつかる。そして今度は併走し、レインのいる後部座席の窓に突撃する。俺は左に寄せて左側の壁との間に挟む。シェルテスが擦れて後方へボロ雑巾のように吹っ飛んでいく。が、すぐに立ち上がるとまた追いかけてくる。
ᑫᐱᓂᐱ ᓭᓯ….ᕽᓭᓭᓂ„ ᓭᓯ ᓭeᐱ ᚣcᖻᕽ….ᚣelᛦcᓭᑫ
　レインの声が回復した。だが、車の中では使えない。もしここで使ったら次地球に来たとき一瞬で猫の死体になってしまうのがオチだ。なにせ戻ってくるのが路上だからな。俺は速度を上げる。160 キロを越えた。もっと上げる。偶にいる車を車線変更とスピード調節で追い越す。
「ハッキリ言って生きて練馬まで行ける確信はない！」
「わ……分かったわ！」
「レインに俺の肩を触らせておいてくれ。事故りそうになったらレインの判断でアトラスへ連れてってくれ。分かってると思うがその場合二度と地球に帰れない。帰ったら即死亡だ。ここに召喚されなくとも、廃車として処分されたゴミ山の中にワープして窒息死か圧死が関の山だ。つまり……いま事故ったら死ぬか、或いはアトラス住まいだ」
「はい」紫苑は神妙に頷いて訳した。レインの小さな手の感触がする。
「まて、紫苑が判断してくれ。レインじゃ向こうの世界に帰りたい気持ちが強くて甘い判断をしそうだ。レインは最後の一語を唱えればいいだけの状態に保っていてくれ」
「わかりました！」
　緊張する。だが不思議と高揚している。速度が限界を越えた。馬鹿な、ここは国道だぞ。高速じゃない。
　まるで人生ゲームの上で残り 1 機のレースゲームでもしているような感覚だ。遠くがやけによく見える。クラクションさえもはや鳴らされない。あまりの速さにパトカーさえ対応できない。或いは単に見張りが今はいないのか知らんがな。
　結局、俺の運転テクニックなのか運なのか、下赤塚まで無事に来れたのだが、これはほぼ奇跡だと思う。ところが下赤塚駅近くで前が少し詰まっていた。抜かせない。仕方がないので速度をグンと落し、無確認で左折する。轢かれるなよ、歩行者ども。つーかこんな

時間に出歩いてるんじゃねーぞ！
　442 に入り、光が丘公園のところに出る。周回して俺の家へ向かう。小道へ入る。速度はグンと落としてある。ルームミラーにシェルテスが映る。だがこの道で速度は出せない。
「右行け！」
　突然紫苑が叫ぶ。え、と前方を確認した瞬間、人が映った。慌ててブレーキを踏んでハンドルを切る。だが、ドカっと乗り上げた感触がした。すっと青ざめるのが分かる。
　轢いたのは少女だった。ルームミラーに青白い炎ともがく少女が映る。少女がこちらを向く。
　その刹那、紫苑が右手を伸ばしてライトを消して叫んだ「走れ！」
「え」
「早く！」
　鬼のような形相で俺を怒鳴りつける紫苑。俺は 1 速に入れて無灯火で車を飛ばす。
　……今のは制服を来た少女だった。なんでこんな時間にいるんだよ。ありえないだろ。いや、稀にありえる。いや、そんなことはどうでもいい、現実にここにいたんだから。いま、俺は避けた。だが乗り上げた。車というのは上下の揺れはかなり感じる乗り物だ。轢いといて気付きませんでしたということはまずない。酔ってないかぎりな。特に低速だと 100％気付く。今俺は確かに避けた。ということは左足を轢いたのか。ついでに左脚にも当たったかもしれない。40 キロは出ていた。そしたら大腿骨骨折などは避けられないだろう。足を踏んだだけならまだ軽傷だが……それにしても。轢いてしまった。本当に。はっとしてライトを点ける。
「紫苑、なんで……」
「何でも何も、あんなところで人に構ってたら皆殺しだからですよ。あの道路で降りてメルディアを使うなら悪くないです。でも呪文を唱えるまでの間の戦闘はどうします？今の子は確実に殺されますよ、攻撃の巻き添えで。今のシェルテスは大技を放つ覚悟です。体力を削ってでも。巻き添えで爆破されるよりは足のひとつで済むんだから安いものでしょ」
「そんな言い方……」
「一番合理的な方法を選ばないと皆死ぬのよ。戦闘中は倫理観を捨てて」
「じゃあ何で電気を消した？」
「ナンバーすりかえたって車種は分かるじゃないですか」
　しれっと言う紫苑。
「横で見たけど、足を踏んだだけですよ。車体との接触じゃないから車の塗料はどこにも剥がれて付着していません。塗料があれば警察には車種が分かるんでしょう？でも塗料は落ちなかった。そして目撃者は生きている。じゃあ目撃者が見なければ良い。あと、生憎あの子はどうもサンダルだったみたいなんですよ。制服なのにサンダルですよ？ヘンじゃないですか？なんか訳ありですよ。家出かな、どうでもいいけど。で、タイヤの跡なんですが、足の先に乗り上げたようです。爪とか潰れたと思いますけど、殆どタイヤの跡は女

の子の足先にちょっと残るくらいで、これも特定は難しいと思います。ひき逃げの場合、捜査が始まれば警察は手始めに半径２㎞の事故車を探すそうですね。先生の家は入ります。でも事故車じゃないし車種も不明、塗料もタイヤ痕もない。そして目撃者もいない」
「……」絶句した。
「そう判断してライトを消したんですよ」
「それ……いま考えたんじゃなくて……？」
「あのとき一瞬で考えました。先生が青ざめてる間に」
「お前……車のこと知らないんじゃなかったのかよ」
「好きな人が好きな物は調べてみるんです。でもカレが得意にしてるのに知ったかぶって話す女は可愛げないと思われるから黙ってたんです。ふふ。先生、車の運転、上手ですね」
　笑う紫苑。寒気がした。
「なぁ、いつか俺が邪魔になったらそうやって殺すのか」
「はい？何言ってるの？私が愛しているのは貴方だけですよ、先生。だから証拠を隠滅して守ったんじゃないですか」
「……」
　寒気がする。この女に関わったのは間違いだったかもしれない。いや……でも、蛍もこうだった。ただ、ベクトルのスカラー量が強烈なだけで。
　ルームミラーでレインを見る。レインも青ざめた顔で胸に手を当てて紫苑を見ている。なるほど、これがアーディンを殺したときの紫苑の顔か。これが人殺しの顔か。……恐ろしい。

　マンションについた。駐車場に車を停める。
「ここなら大丈夫だろ。シェルテスは追っかけてこなかったな。さっき電気消したせいで見失ったのか？まぁ１分もタイムラグはないだろうがな」
　レインの手を取る。
「頼むぞ、レイン」
　レインはメルディアを光らせ、呪文を唱える。そのときドアに衝撃が走った。シェルテスだ。突撃してきた。見ると人狼化している。器用なことに手で車のドアを開けやがった。
「シェルテス！」紫苑が叫ぶと同時に悪魔は紫苑の肩を掴むと車から引きずり下ろした。
「きゃあっ」
　咄嗟に玲音の書を開こうとするが、紫苑は本を落としてしまう。紫苑を助けようとレインが後部座席から身を乗り出して玲音の書を取り、車の外へ出る。俺も助手席から飛び出て車のドアを蹴り閉める。
「紫苑！」
᠍ᐱᓄᐱ ⁻ᑭᐧ ᑕᖻᓀ，ᒐᓄᐱᚴ᠍
　レインが本を開く。

ᘐᑭeↄ，lecΛᚱ cᔑ -ᔑᑭᚱ -ᔑᑭ ᒐcᔑ Vcᔑᘐ
ᒐelᑭeᔑ ᘐlecΛ Ꮆᘓᑭc-ᚱ ᔑe ᔑe< ᛚↄlᑭe -l -Λ Vecl -Λ ᔑeᑭ lᘓ l-Zᘐ
　シェルテスは宙に浮かぶと右腕で紫苑の首を絞める。紫苑は宙でもがきながら両手で右腕にしがみついて窒息を避ける。
ᘐↄ𝒹-，-Λ ᛚe l-Z ᑭ-l >-Λ-ᚱᘐ
　脚をバタつかせて何度も蹴るが、小柄な紫苑が空中で蹴ったのではシェルテスには何にもならない。
「レイン、シェルテスは何て言ってんだ！」
　肩を揺さぶる。紫苑は腕に力をこめられまともに喋れない。
　レインは困った顔で俺を見て途切れ途切れに喋る「しずか　あたえる　どるて……をシェルテスに。あーうーVecl　Vecl　シェルテス　あーあぁうぅ　ᔑeᑭ！　ᔑeᑭ！　シオン！」
「つまりドルテと紫苑の命を引き換えにってことか」
ᘐᑭeↄᚱ lecΛ，ᛚeΛ <cᑭ ᛚↄlᑭe - lᘓ„ lᘓ ᔑeᑭ -lᘓᘓᑭ leΛ- cl ↄl ᑭc <cᑭ….あぁっ！ᘐ
　右腕に力をこめるシェルテス。夜の光が丘に紫苑の悲痛な叫びがこだまする。
「静、レインとメルディアで行って！」
　これ以上痛めつけられたくないのだろう。日本語で俺にしか分からないように言ってきた。だがもう危害を止めてほしくて日本語を使っている紫苑は明らかに恐怖を感じている。
「早く！どの道ドルテを渡したら殺されるわ！それ持ってアトラス行ってハインさんに渡してアルデス王を召喚すれば勝ちなのよ！」
「……いやだね。誰の勝ちだよ？神の勝ちか？アトラスの勝ちか？……ざけんじゃねぇ！俺はアトラスも地球もどうでもいいんだよ。蛍をお前で乗り越えられるかどうかしか興味がねぇんだ！世界のことなんざ知るかボケ！」
　レインの胸に手を突っ込み、ドルテを取る。
ᘐᒐcZᘁ-，ᔑeΛ -lᘁ ᒐcↄΛ Vↄl <cᑭ ᑭᘓ - ᒐelᑭeᔑ ᔑeᑭᚱ ΛↄΛ l--ᕽ ᒐcↄΛ Λↄᛚ ᑭↄᑭ-lᚱᘐ
「悪いなレイン、何言ってんだかサッパ分かんねぇ。日本語か英語でも学べや。でもきっと俺に賛成だな。つーわけで、オラ、シェルテス！てめぇのほしがってたもんだけどな、俺はいらねぇんだよ、こんな石ころ！」
　後ろを振り返って渾身の力でドルテをぶん投げる。石は彗星のように飛んでいった。
ᘐᖵeↄᚱ ᘐシェルテスが紫苑を投げ捨て、投げた方向に飛んでいく。恐ろしい速度だ。
「紫苑！」俺とレインはすかさず紫苑の元へ走る。
　紫苑は背中から着地すると「うぐっ」と声を立てる。良かった。足を捻挫したり頭から落ちたらコンクリ相手じゃシャレにならん。受身が巧くて助かった。
　俺、いつから紫苑の身をこんな本気で自分の体のように心配したんだろう。……あ、分かったわ。俺、この女のこと愛してるんだ。蛍にしか感じなかったような気持ちだ。
「せんせっ……ドルテ……投げちゃったのね」

「悪い、世界を投げちまった。お前がほしかったんだ」
　紫苑は困った顔をしながら微笑んだ。
　と同時に轟音がし、後方から強い青い炎を感じた。振り返るとそこにはより狼に近く変化した姿に人狼化したシェルテスが立っていた。先ほどまでの人間に毛を生やしたような姿ではない。顔も限りなく狼のそれに近く、全身の殆どが毛に覆われている。白い毛はゆらゆら逆立ち、青い炎を発している。
「お前が……悪魔シェルテス」
　震える声で俺は呟いた。
ᑫ-Λ cᑐ ᒉe ᒉeᔑ ᑐɔΛ ɻɔlᑕeᖵ -h-h-h, c> ᑕaᔑ, -Λ cᑐ ᒉe ɻeeᒉᒍ ᒐelᑕeᒍ --ᖵ ᑐɔΛ ᑕa eΛVc, -Λ ᒍeᑕ ᑐe ɻaaᔑᛉ- ɔ Vcc^e -ᔑᒐ-ᖵᔓ
　それは空気を震わせるような声だった。誰もが動けない。殺される……いや、殺されてたまるか。
「レイン、メルディアやってくれ！ᒉelɻc-！」
　命だけは拾わせてもらう。アトラスに退却だ。咄嗟にレインは呪文を唱える。ところがメルディアの光が弱まる。
ᑫ-Λᑕeɔᖵ ΛɔΛ ᒐcᔑ Vcᔑ <ecΛ ᒉ-Λ ΛɔΛ ЧɔI-ᑕ Vcᔑ IecZ c> ΛɔΛ -lᑐ ᒍ-ᑕ ᒐcɔΛᖵᔓ
「私助けようとしたときに魔力少し使っちゃって足りないって！」
「マジかよ……！」
　シェルテスが手をかざす、青い炎が光線となって照射される。俺は思わず紫苑に抱きついて守ろうとした。ところが紫苑はその俺を横に突き飛ばし、レインから玲音の書を奪うと、光線に向けて突き出した。玲音の書が光ると光線は本の中に吸い込まれていった。
ᒐcɔΛ ᑫOec, ᑕaᔑ ᑕc ᑕɔ V-Λ ᘐ ᔑcᛉ I-ᒐ ᑕa Iec I eᑕ <ɔΛᑕ ᒍɔVeΛ -ᑕɔI-ᒍ ɔ ᑕa c<-ᘐᔓ
　本を盾に脅しをかける紫苑。そうか、玲音の書はアトラスと地球を繋ぐトンネル。これを破棄すればシェルテスはアトラスに帰れない。
ᒐcɔΛ ᑫIeeVᖵ ᒐelᑕeᒍᖵᔓ
ᒐelᑕeᒍ ᑫI-Z ᖷeɔᖵ -Λ ᒍeᑕ ᑕc c> ᒐeᖵᔓ
　シェルテスは憎憎しげに言い放つと青白い炎に変身し、高速で玲音の書の中に突っ込んで消えていった。

　紫苑はバンと玲音の書を閉じる。その音で静寂が取り戻された。
「シェルテスは……？」
　光が丘の駐車場に静けさが取り戻される。急に世界が音と速度を失ったようだ。
「玲音の書が壊れたらアトラスに戻れなくなるわよって脅したの。そしたら慌ててアトラスに帰っていったわ。あくまで奴は目的を果たしたしね。でも、私を殺すって……だからラズじゃないんだってば、マナだっていってるでしょ！」
「ラズ？」

「なんでもない。とりあえず……結論としては私達の負けよ」
「……そうか。俺のせいだな」
「誰かのせいにする反省会を開く気はないわ。強いていうならシェルテスのせいよ」
　ふっと笑う「そりゃそうだ。さすが紫苑」
「でも困ったわ。アトラスはどうなってしまうの」
「人間の力でどうにもならなければ神が倒してくれるだろ。始めから召喚省に頼まずに自分で動けばいいんだよ」
「神にも事情があるのよ。神はかつてエルトとサールの２派に分かれてラヴァスの時代にアトラスで戦ったの。停戦後はアトラスを人間の土地にして、それぞれの神の世界に移り住んだのよ」
「つまりあれか……人間界ユマナは緩衝地帯ってわけか。そこで神がのさばると最悪ラヴァスの繰り返しになる。だからできるだけユマナのことは人間に任せてるってわけか。神にも政治があるんだな。ってことは待てよ。誰があいつを倒すんだ？」
　紫苑はスカートの汚れを払う。
「アルディアと同じよ。人間界のことは人間が解決する」
「元はといえば神が落とした不始末をか？」
「そういうこと。神だって好きで落としたわけじゃないわ。落として困ったから人間に申し付けたんでしょ。自分でアトラスで暴れまわるわけにはいかないから。神は人間に召喚された大義名分がないと暴れられないのよ。しかも時間限定」
「ウルトラマンかよ……」
「３分も無いんじゃない？タチ悪いよね」
「どんなカップめんよりも早そうだな」
　ため息を付く。
「つまりアルシェたちが倒すのか？殺されちまうぞ」
「うん……だから……その……私達が行かないといけないと思うんですよね。非常に言いづらいことなんだけど」
「はぁ……そうだろうな。ここで逃げることもできるんだが、その場合少なくともレインは帰せなくなるな。いまあいつが消えてからどれくらい経った？」
「２分くらい……もうシェルテスは召喚省に戻ったあと、怯むハインさんたちを無視してドゥルガ・ヴィーネ神に復讐を開始するころでしょうね。捨て台詞でそう言ってたから。恐らくアトラスで暴れまわると思います。人間が戦うことになるわ。戦力が必要よ。特に私みたいな魔道士が」
「うん……」頭を掻く。
「異世界のことはほっといて俺と暮らすっていう選択肢はないのか？」
「あります」
　意外とあっさり答えた。

「好きな人にそう言われれば従うと思います。でもね、ここで逃げようとする男に付いていく気はないの。そんな弱い男は嫌い。先生はどう思いますか？」
「俺は……」正直死にたくない「正直死にたくないよ。だけどな……このままってわけにもいかんだろ。あぁなんだろな、第二次世界大戦？」
「え？」首を傾げる紫苑。
「いや、何でもいいんだけど、戦争に行く男って日本じゃ歴史の教科書でしか見ないだろ？俺はガキのころからおっそろしいと思ってた。誰が行くもんかって思ってた。でもな、こういう気持ちなんだな、やらなきゃいけないっていうのは。行きたくないんだよ、もう心全開で拒絶してる。でもそれを凌駕するほど行かなきゃいけねぇって思ってる。こういう気持ちだったんだな、兵士たちは。まさか現代で実感するとは思わなかったよ。それにしても紫苑は怖くないのか？」
「怖いですよ。自分が死んで無になるって考えたら発狂しそう。アーディンや衛兵みたいに無残な死体になってこの唇も言葉を紡がなくなるのかって考えたら逃げたくて逃げたくて仕方ないです。先生とレインと逃げて玲音の書を燃やして異世界との繋がりを切って、３人で仲良く暮らしたい。でも……なんていうか……」
　同時に喋った「そういうわけにはいかないから」
　そしてお互い頷いた。
「紫苑、シェルテスはもう召喚省を去ったと考えられるんだな。じゃあ向こうにも時間があるから焦って行かなくてもいい。少し休んだり準備したりしよう」
「そうですね。じゃあまず……」紫苑は呪文を唱える ᘐᕒᔑᓄᑢᓄ, ᔑe ᘁe- ᚷ-ᐱ- Ie ᒐcZᘁ- Vcᒐ-ᑐ ᘁᓄᐱ ->ᓄᘐ
　玲音の書が緑に光り、緑色の泡が出てきた。と思ったらその泡はどこかへ飛んでいってしまった。
「今のは？」
「完全な回復魔法はないって言いましたよね。それは飽くまでも悪魔との戦い、アルディアみたいな規模の話です。手足を切断されて暫く経った後やバラバラに吹き飛ばれた人間を元には戻せないってことです。戦争で負うような重要が治せないんです。裏を返せば小さな怪我くらい魔法を使えば治せます」
「なるほど、そうだろうな。じゃなきゃアシェットの連中もたった 28 人で連戦できなかったろうよ。でも、痛みが消えた気はしないけど」
「さっき車で轢いちゃった女の子ですよ。これで治ったはずです。痛かった精神的苦痛は拭えませんけどね。世界と天秤にかけてたからしょうがないことだけど、悪いことは悪いことです」
「そうか」
　俺はどことなく安心した。俺の身についてではない。紫苑の人間性を見れて安心したのだ。車の鍵をかける。地面に落ちた紫苑のケータイを拾う。

「良かった、壊れてないよ。お母さんに電話かけてあげて」
「はい……」
　受け取る紫苑。少し電話するのを躊躇っている。
「紫苑……実は俺に「一緒に逃げよう。死なせたくない」って強く言いくるめてほしかったんじゃないか？」
「やめて……心を抉らないでください。いまね、考えてたんです。お母さんはどんな気持ちで私をお腹の中で育てたんだろうって。お父さんはどんな気持ちで毎日会社に行ってお金を稼いできてくれたんだろうって」
「うん……？」
「私、可愛くない娘なの。でもね、小さいころはきっと可愛かったのよ、覚えてないけど。お父さんもお母さんも私が死んだら悲しむわ。そうに決まってる……と思うんです。思いたいです」
「当たり前だろ。今更確認するまでもないよ。紫苑、お父さんは紫苑のこと大切に思ってるよ。ただ放任してるわけじゃないんだ」
「だといいなぁ」寂しそうな声「今までたくさん食べさせて着て、服を買ってあげて、可愛がってきた娘ですもんね。失ったら悲しいですよね。でも……あのね、言葉や態度で示されないと不安なんです」
　俺は何も返せなかった。その言葉、そっくりそのまま蛍にも言ってやりたいし、恐らく蛍もかつて俺に言いたかったはずだ。
ᘐ∪cɔΛ，ﾉelℓc- cᑐ ᑕ-ᔑrᘓ
　レインの声に振り向くと、メルディアが光っていた。
ᘐ-ᔑcᑐ (ₔ ᔕ ᘓ
ᘐ(ee，ᔑɔl eΛ ΛɔΛrᘓ
　なんだおい、アトラスに行くのか？置いてけぼりはまずい。とっさに紫苑の手を引いて、もう片方の手でレインの手を取った。光が強くなる。

　やがて光が消えて……。
「あれ？……変わってないぞ。ウチの前だ」
　その代わり、振り向いたら男が一人立っていた。
「うぉっ！」驚いて後退し、構えを取る。
「ダメ、静！」紫苑が叫ぶ。
「え？」構えを解く俺。
「彼は……彼が、メルティアよ」
「はぁ？」
　それは金髪の男だった。女のような綺麗な顔をした男だ。これが悪魔メルティア？
∪cɔΛ ᘐᑕcc﹀-，ℓee﹀ᒧ ﾉelᑕc-,, ΛɔΛ Λ- Λ-ₔ ﾉcl ΛɔΛ -ᑐ ﾉe (ᖵₔ,, h-c，(ᖵₔ (ɔ lₔΛ- ΛɔΛδᘓ

>elc- ᘐ-ʌ (-ϟ) lɐʌ- ⊔e - (c, ⊔cɔʌᘐ
「先生、ちょっと待っててください。彼が話があるみたいだから」
「分かった。暫くかかりそうだな。レインと３人で話しててくれ。流石に喉が渇いたよ。自販機で飲み物買ってくる。メルティア……さんも飲むか？」
「え……？さぁ、メルティアはジュースとか興味ないと思うけど。あ、じゃあレインと２人で行ってきてくれませんか？単独行動は危険かもしれないから。(Ɫɐ (-ɐ ʔe ⊔eʌɔl -lくc -ʌe 0eʌ ʔɔʔʔɔ ⊔cZʔ- c (ɐᔑ ϟ-ᒧᒧɔδ」
ᘐɥ-, -lʌ-,, (-ϟ) - ʌɔʌ c> ᒧcl ɥɐl leᒧ ɮee>ᒧ >elc- (-ϟ) - (c ᔑe(,, ᒧɔʌ leeV, ⊔cZʔ-ᘐ
レインは俺がアルカを分からないのを知っているので腕を組んで合図する。
「じゃあ紫苑、すぐ戻るけど、大丈夫か？仮にも悪魔なんだろ、彼は」
「大丈夫ですよ。彼は中立な悪魔なんです。役目は世界のバランスを保つことなの。今回みたいに地球と行き来するのは世界を歪ませるから歴史的に見て嫌なはずなんです。だからどっちかというと悪の元凶のシェルテスを再封印したがってると思うんです」
「そっか、信頼していいんだな、彼は」
「はい。あと、多分メルティアは私に気があります！」
胸を張る紫苑。
「はは、悪魔に魅入られてるのか？」
「違いますよ、悪魔を虜にしてるんです」
「人間に悪魔が惚れるもんか」
「惚れますよ。メルティアは人間の女に恋をして娘をもうけてますから。アシェットの第７使徒、時魔道士メルのお父さんなんです」
「へ？そうなの？」
まぁ確かにイケメンではあるがな。
「メルってやつの母はどんなのだったの？」
「はい、アシェットの一代前の団体のメンバーはカタルっていうんですけど、彼女はその一人でした。アルヴァノという女性です」
「じゃあ紫苑はアルヴァノに似てるわけだ」
「じゃないですかね」と笑う ᘐlecʌ, ʌɔʌ e(>ɥɐl - >el (-⊔e(cS -lV-ʌɔ e ʔ-(-ᒧδᘐ
レインは目を細めてじーっと見て、ふっと笑って首を振った。俺がぷっと吹き出すと紫苑は頬を膨らませた。
「自意識過剰もほどほどにしとけよ、魔性のお嬢さん」
「ぷー、ほんとだもん！」
怒る紫苑を無視して歩き出す。はぁ、しかし大変な一日だよ。深夜だというのに大立ち回りをしすぎたわ……。
レインの手を引く。まだ日本の道路は怖いようだ。まぁ俺の運転を見たあとなら尚更だろうな。歩道橋を通ってイマのほうまでいく。積もる話があるだろうから少し長めにうろ

つくか。
「そういえばレインと２人きりって初めてだな。まさか２人になることがあるとは思わなかったよ。てゆうか異世界の人でここまで仲良くなれる友達ができるとは思わなかった」
ᘐ-，ʌɔʌ >cl∪ ʌ-ʌ ᔑeʌ∪ ∪eʌ ʌchɔʌɣɔɞ
「日本語？あぁ、日本語喋れなくてごめんみたいなこと言いたいの？まぁ、徐々に慣れていきなよ。さっき日本語話したじゃん。善戦だよ」といって頭を撫でるとレインは嫌そうな顔をせず、上目遣いで微笑んだ。
ᘐᑐЧa eᑐ ʌccᑐ - >cʌ ʌ-„ ʌɔʌ ʌɔ> ∪cɔʌ„ --，ɔʌ ᑐЧa ∪ɔ∪-ᑐ ʌɔʌ c> ∪e∪，∪eʌᑐ-ʌᑐ >e„ ʌɔʌ lɔ ∪cɔʌ ɣeʌɔ>-ᑐ ʌɔʌ„ ∪ɔʌ ᑐЧa ∪ɔ∪ -laaᑐ l- c> ∪e ᔑeᑐ„ >cʌ -l∪- ʌ- ∪eʌ ʌ-l ɔl ∪ɔ∪ Ча -lᑐc-ʌ„ ᑐЧa eᑐ ᑐɔᔑ >Чal >cʌᑐ，-h-hɞ
笑うレイン。サッパリ分からん。でもまぁ、それはお互いさま。
ᘐh-c，ʌɔʌ -∪> l-ʌ ᑐa - ᑐЧa le∪ e∪ ᑐЧa -l>-l∪-ᑐ >cʌ- e ʌ-ʌ ᑐea hɔᑐ-la la-δɞ
「ん？いま、蛍って言った？紫苑から聞いたの？あいつのこと。なぁ、紫苑、何て言ってた？あいつさ、やっぱ蛍のことウジウジ俺が考えてる風に見てるのかな。しょぼい男って思われてるかな」
自販機についてジュースを選ばせる。こういう機械の使い方は紫苑に教わったようで、手馴れていた。
ᘐʌɔʌ l-∪ ᑐaɞ
「うん、それくらいなら分かる。これな。……でもさ、何の飲み物か分かってるの？まぁいいや」
適当にジュースを買うといくつかを小脇に抱え、ひとつをレインに渡し、ひとつ開けて飲む。また歩き出す。
「レイン、トイレ大丈夫か？あっちに行けば公園のトイレあるけど。それともウチの使う？」
ᘐ∪cɔʌ ∪cʌ hɔᑐ-la la- ᑐeᔑ >cl la ᑐ∪eᑐᑐ--ᑐ ᑐЧa ᑐea -lᑐc-ʌ Vɔl∪„ ʌɔʌ eʌ ∪eᔑ 0e -l<c ᑐЧa -Z la- -ᑐ Ч-> ᑐeᑐ ɮccʌ ∪cɔʌ ∪cʌ la- ᑐeᔑ --„ >ɔʌ lclc∪ -l>-l∪-ᑐ -∪el，ᑐeᑐ ᑐa eᑐ∪ lclc∪ cɔ -ᑐ Ч-> ∪-lᑐ -∪el ʌ-„ la- ᑐ∪eᑐᑐ-ᑐ ᑐЧa ᑐeᔑ <ceʌ ᑐЧa ∪ɔ a„ ᑐa eᑐ -∪cᑐ --ʌ„ >>….∪c -l>-l∪，ʌɔʌ lɔ la- ʌɔɮ ᑐЧa eᑐ Ч->„ --，ʌɔʌ ᑐ-ʌ ∪-> ∪cɔʌ c> ᑐaᔑ ʌ-ɞ
ぶつぶつ呟くレイン。俺に話しているのか独り言なのか。そのまま会話を失って歩く。
ᘐᑐ- -ᑐɔl-∪，∪- ノ ∪elᑐ ᑐc∪，∪cɔʌ h-ᑐc- -ᔑ∪e cʌ ᑐeᑐ ᑐaᔑ l- ᑐcl ᑐЧa„ ʌɔʌ ʌ-ᑐ ʌcᑐ ᑐcʌ c> ∪eᔑ l- ᑐcl -lᑐc-ʌ >cl ʌɔʌ lɔᑐ ∪ɔ- ᑐea l- h-ᑐc- -ᔑ∪eɞ
「アルシェ？あぁ、そうだな、心配だよな。でも大丈夫だろ、シェルテスは召喚省を風のように去ってっただけだろうって紫苑が推量してるし」
ᘐ∪cZᑐ-，lclc∪ ᑐea l-ʌ e ᑐa ᑐ-ɮ -lʌ- Vcl ∪-ʌ -ᔑᑐ- ∪eᑐeδ ᑐa eᑐ Z-l ᑐcʌᑐ- ∪-lᑐ leʌ- ᑐea V-lᑐe„ ∪ɔ> ᑐa eᑐ∪ ʌɔʌ ᔑeʌ∪ ∪eʌ ʌeᑐᑐ e ʌ-ʌ -ᑐc <c ɔV-….->>….e∪∪e le ʌɔʌ ʌ- lɔl -l c> ᑐaɔ„ 0-ɔ，ʌɔʌ ᔑeʌ∪cᑐ ᑐa VeᑐЯ h-cZeʌЯ ∪-ʌ，ʌɔʌ ʌ- lɔl ᑐcʌ -l e∪∪e ᑐeᑐ ʌɔʌ ʌ- ᑐa eᑐ

eJel ʗcΛ....ʗЧa ∪cʔJ Jccⁿⁿ ∪cɔΛ JeʗeB ʗЧa Λⁿ ʗɔ c> ∪cʔJ lⁿδ ɔVⁿ <ⁿ∪ lⁿΛ >cЧa lⁿδ ɔVⁿ....Jɔ lⁿΛ >cЧa lⁿδ Чⁿa Чⁿar ΛɔΛ eʗ eJJe, ʗee, eJelr ʗeɔ, ΛɔΛ eʗ Λⁿʗcr h-cZeΛ, ⁿl h-cZeΛr Λⁿ ʗ∪a ʗcΛ ⁿⁿΛrɞ

何だか抑揚のあるレインの喋り方。徹夜でナチュラルハイになっているんだろうか。

ɞlaʗ, ΛɔΛ e> μaa< c> lclcJ ∪cʔJ ⁿ∪el„ ΛɔΛ Jeμ lⁿΛ ⁿʔ Vcʔ Jɔ >cΛ ʗeʗ ΛɔΛ Λⁿ Ve> ⁿⁿ„ c> ∪e, ΛɔΛ Jɔ Ча l- eЧɔδɞ

マンションに入り、駐車場へ行く。先ほど騒音があったというのに誰か出てきたり警察を呼ばれたりしないところが練馬区クオリティだな。紫苑が車の横でじっと立っていた。蛍を髣髴させる優等生な立ち方だな。

「お疲れ。メルティアさんの分も買ってきたんだけど、帰っちゃったみたいだね」

紫苑にジュースを渡す。

「はい。あ、ありがとうございます」

「彼、何だって？」

「うーんと、どこから説明すればいいのか」

「長くなる？」

「はい、多分」

「結論からいうと、すぐアトラスに行く？それとも寝たりする時間ある？」

「あ、それはもう後者です」

「そうか」俺は車を開ける「じゃあ白岡まで行こう。家に帰さないとな。帰るって電話して」

「はい」紫苑はレインと車に乗り込んだ。俺はナンバープレートを元に戻す。ガソリンはまだメーター半分くらいあったな。白岡なら全然余裕だ。しかし今日はガソリン入れ替えたなぁ。スタンドで攻撃されると適わんからセルフを利用したが、無人でほんと助かったよ。

作業を終えると車に乗り込んだ。紫苑はちょうど電話を切ったところだった。

「どうだった？」

「あのね」少し嬉しそうな声「起きて待っててくれてたの！」

そんなことで嬉しいのか……ちょっと可哀相な子だな。

「お母さんは寝てたけど、お父さんに寝ろって言われて寝てただけみたい。今から送ってもらうって言ったら起きて待ってるって」

「寝ててもいいんだけど」

「私達と話がしたいみたいよ」

「まぁそうだな、こんだけのことがあったんだから。しかし、とんでもないデートになっちまったな」

「ある意味記念日ですね」

車を発進させる。運転したり走ったり歩いたり、色々な一日だった。健康に産んでくれた親に感謝だな。
「それでメルティアさんはなんて？」
「どこから説明すればいいかなぁ……。あのね、シェルテスが本に吸い込まれたでしょ。案の定召喚省に出て、暴れたんですって」
「アルシェは大丈夫だったのか？」
「うん。シェルテスは爆風を出してロビーから去ってったそうよ。まだシェルテスは病み上がりみたい。神に見つかる前に力を蓄えたいから暫くアトラスに潜伏してるみたい。で、やっぱり神も悪魔もアトラスに行かれたらあまり干渉できないみたいなの」
「厄介だな」
「その後ハインさんがアルデス王とルフェル女王を召喚してね、神託を得たの。王はアトラスでの乱戦を避けることで合意したそうよ。そこにメルティアが現れ、悪魔代表として乱戦を避けることを述べたそうなの。まぁ、悪魔のほうは統制がイマイチなんで、シェルテスの今回の行動も皆傍観って感じだから、メルティアの合意が悪魔の総意ではないんですけどね」
「とりあえず神の２派と悪魔がとりあえずアトラスでの乱戦を避ける方針を明らかにしたってわけか。つまり、また人類に匙を投げたってことだよな。迷惑な話だ」
「はい、要するにそういうことです。シェルテスの討伐が命じられました。為政者のアルテナさんの耳にも入ったそうです。あと、王によれば今回はフェンゼルのときと違って人間同士の小競り合いじゃないから秘密裏に討伐を遂行せよとのことだそうです」
「というか神の失態をこれ以上公にされたくないんだろうなぁ」
「あ、そうかも」
「いずれにせよ、人間がどうやってあんな悪魔に勝つんだ？神２人をも倒した月の影なんだろ？あいつは。空飛んでやがったけど、俺らなんて浮くことさえできんからね」
「確かに難しいですね」
「ハインさんやアルシェに倒せるのかね。召喚省の衛兵だって案外邪念を持ってたしさ。敬虔なヴァルテが聞いて呆れるよ。あ、レインにはオフレコな」
「大丈夫、アルカで時点で全てオフレコ仕様でしょ。ところで、静はひとつ勘違いしてるのよ」
「何を？」
「神託を受けたのはハインさんたちじゃなくて、私達３人なの」
「はぁ？」赤信号になった。素直に止まる。もうカーチェイスは二度とごめんだ。
「俺らさっき殺され寸前だったんだぞ。しかも弱いほうのシェルテス相手に」
「神にも考えがあるみたいですよ」
「ヴァストリア落すような神々の考えはイマイチ信用できないなぁ……。まぁ、俺らがやるとするならアトラスに行かないとだな。いつ呼ばれるんだ？」

「それが……メルディアが暫く使えないんです」
「レインの魔力は紫苑を助けようとして少し減っただけなんだから、もう回復してるはずだろ」
「そうなんですけど、元々レインが簡単にメルディアを使えたのはドルテに封印されてたシェルテスの力を使ってたからみたいなんです」
「なるほどね。知らないうちに悪魔の力を使って時空を飛んでたのか。レイン本人の魔力でメルディアを使うにはあとどれくらい散歩すればいいんだ？」
「散歩というか……もはや生活ですかね。生活の中で蓄えることになると思います」
「え、だったらメルティアに連れてってもらえないのか？紫苑はそうしたんだろ？」
「シェルテスの件について中立の立場を表明したのでもう協力はしてくれません。メルディアを貸与してくれてるだけでもかなり大盤振る舞いなんです」
「神の政治も人と同じくややこしいんだねぇ。生活で蓄えるって、どのくらい？」
「あと３回は満月を迎えないといけないそうです」
「え……３ヶ月もかよ。随分時間があるな。シェルテスが暴れなければいいが」
「あいつ自身月の満ち欠けでヴィードが増減しますから、何度か満ち欠けを経ないと神とやりあうレベルにはならないと思います。あくまであいつの目的は人間じゃなくて自分を封印してきた月の神ドゥルガとヴィーネですから」
「ふぅむ……」
「あと、今回のこと、つまり今日の地球でのことと、私達の今の状況はメルティアがハインさんたちに伝えてくれるそうです」
「そうか、アルシェたちを心配させずにすむな。良かった。ところで玲音の書については何か分かったのか？」
「はい。やっぱりあれもメルティアの粋な計らいでした」
「ヴァストリアだったのか？」
「いいえ。でも限りなくそれに近いかも。あれは……地球のノートなんです」
「えぇっ！？」素っ頓狂な声を上げる「どういうこと？」
「メルティアはちょっと意地悪なんです。それしか教えてくれませんでした」
「地球のノートだって？紫苑の書なのか？」
「違います。あれはレインにあげましたし、上福の文房具屋で買っただの厚いノートです」
「上福岡か……白岡産じゃないんだな。玲音の書が紫苑のノートじゃないとしたら……誰のだ？そもそも玲音の書は相当古いよな、紙質からして。紫苑の所有物でそんなレトロなものがないかぎり、辻褄が合わん」
「謎ですよね……」
「あぁ、謎だ。なぜメルティアは俺たちをからかってるんだ？」
「からかい半分、今は知らなくていいという善意半分ってところでしょうか」

「よく分からんな、悪魔の考えることも神の考えることも。少しは人間の身にもなってくれってんだ」

　快速というか違法で飛ばしたため、白岡には１時間で着いた。その間、２人には寝ててもらおうと思ったが、気が昂ぶっていて眠れなかったそうだ。紫苑の家の前に駐車し、２人を降ろす。音を聞き付けてお母さんが出てきた。こんな夜中だというのに相変わらず若く美しい顔をしている。紫苑もやがてこうなってくれるのだろうか。挨拶をして中に入ると、お父さんもいた。
「紫苑、レインちゃん、水月さん、大丈夫だった？なんだか大変な目に合ったみたいね」
「うん、お母さん」
　ぽそっとお母さんの胸元に顔を埋める。
「……怖かったよ、私」
　紫苑は我慢しきれなくなったのか、えぐえぐ泣き出した。お母さんは意外そうな顔。俺とレインも意外そうな顔だ。俺は静かに玄関に鍵をかける。
「うぇーん。怖かったよぉ……！」
　泣きじゃくる紫苑。あぁそうか。紫苑はまだ17歳の子供だったんだ。忘れてた。これは親を心配させたい演技じゃあない。本心から怖がって泣いてるんだ。今まで気丈に振舞っていたのが、親を見て一気に崩壊したのだろう。
　お父さんは紫苑の傍に寄って頭を撫でる。
「がんばったね。よく親友を守ってあげた。偉かったね」
　その言葉を聞いて紫苑は更に号泣する。お父さんとお母さんを両腕に抱えて泣きついた。レインは複雑な顔で３人を見ていた。そうだ、レインはこうして泣きつける両親がいない。複雑だろうな。
　俺はレインの肩をぽんと叩いた ᘐlecᐱ, ᑦc eᑦ ᛌ-c,, ᑦc eᑦ Vceᐱᘐ
　するとレインは寂しそうに微笑んだ。そのときお父さんと目が合った。なんだろう……表情もそんなに変わらないのに、いま凄く好意的な目で見られた気がする。もしかしてこの人に男として認めてもらえたんだろうか。それだったら今日の決死行は千両の価値があるな。
　泣きじゃくる紫苑をお母さんはあやし、居間へ連れていく。５人でテーブルにかけると、お母さんはお茶をいれてくれた。
「飲みなさい。落ち着くわよ」
「うん……」鼻水を垂らしてぐすぐす言う紫苑。ティッシュで鼻をかむ。
「あなたね、彼氏の前なんだから少しは気を使ったらどう？ほんとの中学生みたいよ？」
「いえ、そんな……こういう可愛らしいところも魅力的ですから」
　お母さんは「へぇ」という顔をした。紫苑はちょっと強すぎる。少しくらい年相応なところがあったほうが良い。それにしても蛍にせよレインにせよ紫苑にせよ、女というのは

よく泣く生き物だなぁ。男は怒ってストレス発散するが、女は泣いてストレス発散するとは蛍の言葉だが、確かにそうかもしれない。
　暫くして紫苑は冷静さを取り戻すと、真っ赤な目のまま今日の経緯を話した。随分長いこと紫苑が一人で喋っていた。紫苑の説明は巧い。順序だっていて簡潔だ。親御さんは驚いていたようだったが、もはや疑う余地のないファンタジーにすっかりのめり込んでいるようだった。
「でね、メルディアを使えるだけの魔力が溜まったらあっちに行こうと思うの。神にノミネートされてるし」
「お母さんはね、神はどうでもいいんだけど。それより紫苑の意思のほうが重要なんじゃないの？」
「私も行きたいわ。ううん、行きたくはない。怖いから。でもね、行かなくちゃいけないとも思うのよ」
「そう。ただ、魔法の本があっても苦戦した敵が今度は完全な悪魔に戻ったんでしょ？勝ち目はあるの？あなたは魔法の本があるからいいけど、水月さんやレインちゃんは無防備じゃない？危険なだけだわ」
「そこは神が協力してくれるみたいよ」
「協力って？」
「神の協力って言ったら決まってるわ。アルディアの時代にアシェットにしたことと同じよ」
　お母さんは首を傾げる。
「悪魔テームスを倒した殲滅武具ヴァストリアの貸与……」
　静かに紫苑は呟いた。
「ねぇ、それって魔杖ヴァルデみたいな武器のこと？」
「そうよ。神が人間に討伐を任せるときは歴史上いつもこれがでてくるの。前回のフェンゼルのときもそうだった。今回もそうよ。というか人間に任せる以上、他に方法はないわ」
「それって……普通の人間が凄い運動神経を持つようになる魔法のアイテムなの？」
「そうよ、私もエルフィの髪飾りを付けてるときに格闘技術が上がって魔力も上がったわ。ヴァストリアは人間の力を神に匹敵するくらい強くしてくれるのよ」
「紫苑、つまり俺やレインがヴァストリアで強化されるってことか？俺らは戦闘のプロじゃないんだよ。アルバザードは最強の国家だろ？軍隊や召喚省に貸与したほうが良いんじゃないか？」
「地球とは強さの概念が違うんです。ヴィードの量で決まるんです。簡単にいえば、必ずしも大きなレスラーが強い世界じゃないんです。実際アシェットの第１使徒であるユティアのリディアはとても小柄な人でしたが、類稀な格闘センスと魔力を持っていたそうです。アシェットの双頭ルシーラだった第 14 使徒のセレンも第 28 使徒のクミールもこれといって大柄な戦士ではありませんでした」

「なるほどな」
「神に見初められたってことは先生やレインもヴィードが何らかの形で強いのよ、きっと。それに悪魔相手に一応ほぼ無傷で勝ってきたじゃないですか、私達。私、やる前に諦めるようなことはしたくない。迷ったら行動よ」
「そうか……分かったよ。でもとにかく生きて帰らないことには意味がない。それは覚えといてくれよ。紫苑は愛されてる。ここにいる皆に愛されてる。だから、絶対死んじゃいけないよ」
「はい、先生」
「さて……もう夜が明けそうですので私はこれで帰ります。明日……というか今日ですが、仕事がありますので」
「えぇっ、先生、今日も仕事いくの！？」
「紫苑は学校休んで寝てたほうがいいよ。疲れてるだろうからね」
「なに言ってるんですか。先生が一番疲れてるでしょ。車運転しっぱなしだったじゃないですか」
「まぁ、大人の男はイレギュラーと徹夜には慣れてるんだ。ですよね？」お父さんを見ると、苦笑いして頷いてくれた。この人とコミュニケーションを取れることが嬉しい。
「昼には起きて、夕方塾には来るんだよ。明日また授業で会おう」
「あの、水月先生？今日は泊まってらしたらどうかしら。だいぶお疲れのようですよ。お車を運転されるのは危ないわ。布団を敷きますから休んでいってください」
「いえ、今更私が言うのもなんですが、やはり生徒さんのご家庭ですし、ご迷惑をおかけするわけにはいきません。お心遣い、感謝いたします」深く頭を下げる。
　そして何度か挨拶して紫苑の家を去った。車を発進させると駅向こうのパーキングに停める。運転席から助手席に移る。今日はここで寝よう。ケータイで目覚ましをかける。仮眠を取ったら仕事だ。
　この状態にせよ、やはり紫苑の家、生徒の女の子の家に泊まるのはやはり教師として気が引けるのだ。特に父兄を目の前にすると俺は教師意識が湧いてしまう。確かにお母さんの言うとおり運転はムリだ。つーかシェルテスとの戦闘で実は体中が痛い。捻挫や傷は勿論のこと、もしかしたら内臓か肋骨がやられてるかもしれない。シェルテスに御苑のところで打撃を食らったのが一番キツかった。
　シートに鼻を当てると紫苑の香りがした。若い女というのはどうしてこんなにも良い匂いがするのだろうか。蛍も好きだった。膝枕してもらって、真夏にあいつのおなかに顔を埋めた。汗だくなのに甘い香りがした。甘いというかなんだろう……欲情を催すような匂いだ。フェロモンというやつだろうか。あぁ、若い女は出まくりだな。不思議なことに全く同じでも嫌いな女の体臭は不快に感じるのだが。紫苑の香に包まれて眠れるだけ今日はまだ幸せだな。

2006 / 09 / 25

百日のように長い一日が過ぎた。私は痛みで目が覚めた。動くと余計痛い。シェルテスにやられたところが節々痛む。時間は朝の９時だ。昨日、明け方に先生が帰ってから私たちは寝た。でもいつも早起きしてるから癖で早めに起きてしまう。

レインも私が起きたことで起きてしまった。私を見ると、にこぉっとして ᘛ⁐ɔɔʌɔᘚ と言った瞬間「えうっ！」と悲鳴を上げた。あ、痛いのね、貴方も。二人目を合わせてくすくす笑う。良かった、とりあえず五体満足で。悪魔を相手にしたにしては上出来よ。

起きて下に行くとお母さんとお父さんがまだいた。多分、私のことを気遣って会社を遅らせてくれたのだろう。なんとお母さんが料理を作ってくれた。お父さんは新聞を読みながらコーヒーを飲んでいる。おぉぉ、まともな朝だ！

「紫苑、おはよう。お母さん学校に電話しといたからね。風邪でお休みしますって」

「うん、ありがとう」

こういうのを聞かされるとやっぱり私って子供なんだなって思う。

朝ごはんを食べ、私はレインとゆっくり休んだ。一日中ごろごろしてた。話したり、お菓子食べたり、ベッドでじゃれたり。仲の良い姉妹みたいだ。

夕方になってレインを置いて塾に行った。そして先生の授業を受けてきた。スーツを着ている。昨日１日以上見続けたあのお兄さんみたいな服じゃなくて、黒のスーツに青のネクタイだ。いつもと同じように授業をしている。不思議だ。なんだかこうやって教室にいる静は私の彼氏とは別人なんじゃないかって思う。それくらい先生は何事もなかったかのように授業をしている。ただ、若干疲れた辛そうな表情をしている。シェルテスとの戦闘で体を痛めたに違いない。それなのに普通に授業をしている。凄いなぁ。

大人ってこうなのかなって思ったら急に怖くなった。私は疲れたら学校なんて休めばいいけど、大人になったら這ってでも会社にいかなければならないの？それって凄く……不安。そういえば、私は将来何になりたいんだろう。静のお嫁さん？なんか安易だな、それ。将来を決めるのが面倒で難しいから簡単な道に逃げようとしてるだけじゃないの。将来……ねぇ。

まぁ私の頭があればどこでもやってけそうな気がするわ。キャリアウーマンになるのもアトラスで戦闘するよりはずっと楽でしょ。私の将来に静はどんな位置を占めているんだろう。彼は運命の人。私は 17 年かけて彼に出会った。残りの一生をこの人と過ごす。なんだか……とても嬉しい。

ただ、問題は静がどう思うかよね。未来のことなんて約束できないわ。静は蛍さんに裏切られたけど、それって絶対静も蛍さんに何かしてる。理由もないのに出て行かないわ。かといって女を寝取られるような男には見えないし、甲斐性無しにも見えない。優しい、カッコいいしなぁ……。

昨日の一件でお互いかなり本性を見せたけど、あれが本性なら別になんてことないわ。

というかむしろプラス評価じゃない？勇敢で強いわ。ちょっとリスキー好きな性格だけど。その辺がヤだったのかな？或いは言葉遣いが荒いからとか？でも別に私自身にどうこうってことはないしなぁ。後ろのドライバーとか喧嘩中の相手とかシェルテス相手だったし。てゆうか喧嘩中に丁寧語なんてそもそもおかしいよな。

女の子にも優しいし……。謎だ。ありえそうなのは浮気かなぁ。静が浮気した。それはありえそう。私に手出しはしてこないけど、女好きっぽいしな。かなり濃厚なラインだ。女に迫られたら断れなさそうなタイプ。据え膳食わぬは男の恥って思ってるんだろうなぁ。というか一緒にいて他に原因が思いつかない……。そんな取り止めの無いことを考えてるうちに授業は終わった。ごめんね、先生、授業ちゃんと聞いてなくて。

2006 / 10 / 07

「じゃあまたな、紫苑」
「はい、先生。今日は楽しかったです」

お別れのキスがしたくて、ぎゅっと背広を握る。上目遣いにして首を持ち上げると、優しくキスしてくれた。私がぽーっとしている間に先生は去ってしまった。

見送る私。先生の影が消えてから家の中に入る。時間は８時。デートにしては早い帰りだと思うけど、先生は私がまだ高校生だから気を使ってくれてる。いや、私じゃなくて親に気を使ってるんだろうな。えらいなぁ。先生だって私と一緒にいたいと思うのよ。でも私ばかりもっと一緒にいたいって言って引き止める。でも先生は上手くあしらって私を帰してしまう。自制心あるなぁ。

私は全然ダメね。静のことになると周りが見えなくなるみたい。頬に手を当てる。まだ暖かい。恥ずかしいのかな、興奮するのかな、抱きしめられたりキスされるとこうなる。７月にキスしたけど、３ヶ月してもまだ慣れない。始めのころは１回１回特別にしたいって言ったけど、最近しないと不安になって頻度が増えてる。挨拶代わりほど気安くないけど、タガは外れてると自分でも思う。

「ただいまぁ」

ᘐ乚ᴄɔ∧ᖱᘐ

レインが飼い犬みたいにとてとて降りてくる。そう、今日のデートはレインには遠慮してもらった。２人きりになりたかったからだ。シェルテスがこちらに来る用はないし、レインも日本に慣れてきた。だから最近別行動が多い。夏休みは静と一緒にいれなくて寂しかったけど、あのときのロスを取り戻すように最近デートを重ねてる。

ᘐlec∧，ノɔɔ∧ɔᘐ

ᘐ∧ɔ∧ ノ-ᑦeノ ℓ₉∧e乚 ᐸcc∧- cl„ leeV，leeVᘐ

レインは私を見るといつも嬉しそうにはしゃぐ。本当に可愛い子だ。あまりに可愛いから何となく撫でてしまう。レインはくすくす笑って髪を摺り寄せてくる。機嫌に浮き沈み

のない子だけど、今日は若干いつもより明るいみたい。レイン流の上機嫌なのかな。
ᔕᑭᓀ eᑭ ᕗcᔑᓚ c> ᐸcᓄ cᐱ,, ᑭᔑ -ᑭ ᓄᔑᛦᕯᔓ
ᔕeᕫᕯ ᑭee, ᓇ -ᑭ ᓄᔑᛦ,, ᑭcᔑ, ᐱᔑᐱ eᑭ ᓄᔑ- ᕗ-ᓇ cᐱ ᕗcl cᑭe ᖻᓀleᐱ ᓚcZᔐ-ᔓ
「えへへ」と私は照れ笑いした。
ᔕᛦᖻᓄᓄᔑᓇ ᑭ-ᐱ ᔐᔑlᑭeᓄ ᔑ-ᔓ
ᔕᓄᔑl ᕫ-ᕫ-ᕯᔓ
　居間を見るとお父さんが座っていた。
「ただいま、お父さん」
「おかえり」
　でも、それだけ。娘がデートに行ってきたのは知ってるのに、何も聞いてこない。どうだったとか楽しかったとかの一言もない。私はちょっとムッとした。今日の朝、お父さんにデートすることを布石として伝えておいた。それは帰ってきたときに「楽しかった？」みたいな一言を引き出させるための布石。なのにお父さんはノーコメント。
「今日は私、学校じゃなかったのよ。土曜でしょ」
　椅子に座る私。お父さんが顔を上げる。
「うん、レインさんを見れば分かるよ」
　チラッとレインを見る。私の高校の制服を着ている。レインは先月以来私の制服を気に入ってしまったようだ。何が良いのか分からないが、本人の服の趣味に合うのか、或いは単に前回の異世界旅行で私が主に着ていた服だから愛着を持っているのか。いずれにせよ、私が着ない日は貸してといって着ている。別に構わないんだけど、何となく家が学校になったみたいでちょっと落ち着かない。あと、レインはルフィやラーサのイメージが強いから違和感を感じる。こうしてると外国人がこっちの学校に留学してきてウチにホームステイしてるみたいだ。
「……あのね、今日どこ行ってきたと思う？朝言ったよね、デートだって」
「うん」
「どこ行ったと思う？」
「さぁ、お父さんには分からないな」
　言葉につまる私。これがいつもの会話だ……。息が詰まりそう。
「どこでもいいからさぁ、予想してよ。デートスポットくらい知ってるでしょ？」
「若い子がどこに行くのか分からないから」
「デートスポットじゃなくてもいいよ。ほら、適当に言えば当たるかもしれないでしょ？」
　お母さんが料理を置いて席に着く。今日は早く帰ってきたのでデートで遅い私の代わりにレインと作ってくれたのだ。お父さんはスプーンでレインのミネストローネを掬う。猫みたいにじーっと手元を見つめるレイン。
「紫苑はクイズが好きだね。お父さん、降参だよ」
「……もういい」

ᘏɻЧəᔑᔑɔə, lɐ>c lɐ ʌɔʌ lˉɻˉᑐ ɐᑐ ˉᑐᓵ ɐЧɔẟᘏ

お父さんに声をかけるレイン。にこりとしながら手でスプーンを掬う真似をする。お父さんは微笑んで「おいしいよ、ありがとう」と返した。

ᘏˉᑐᑐˉᘏ

嬉しそうなレイン。なんでアルカ分からないのに通じ合ってるのよ！

「ねぇ紫苑、あなたどこ行ってきたの？」

「昭和記念公園ってところよ。知ってる？」

「聞いたことないわね。どこなの？」

「どこだっけ？車で連れてってもらったんで分かんないや」

「ねぇ、あなた」

「……東京都の外れのほうです。立川市にあります。練馬からもここからも随分遠いところです」

「へぇ。で、どんなところだった？」

「すーっごく広い公園よ。歩き回れないくらい。入園料がかかるの。400 円……だったかな。そのお金で花とかをお世話してるみたいなの」

「何の花？」

「今日はコスモスが咲いてた。これからもうちょっとすると一番いいシーズンだって先生が言ってたよ。白いのはまだ５分咲きもなかったかなぁ。色によって開花する日が違うんだって。黄色いのは遅いんだって。綺麗だったよ。

でね、公園なのにアルナのカルテみたいに中にお店があるの。おっきな原っぱがあってね、そこにあるの。ケンタッキーとかあったから笑っちゃった。クレープもあったわ。先生食べきれないっていうから２人で半分こしたの」

「あなた、甘いもの食べるのね」

「うん。最近もう解禁したの。アルバザードは医学が進んでるから安心したの。でね、すっごい大きな木があったのよ。「この一木なんの木」みたいな。幹が根元で分岐してでね、幹の間に人が入れるのよ。不思議な木よね。私、入ってみたら先生笑ってた！」

「そう」

「日本庭園もあったよ。池があってメダカが泳いでた。散歩するのには最高の場所ね」

「楽しかったみたいね。良かったじゃない」

「うん！」

「えっと、立川だっけ？東京のどの辺？」

「国分寺や八王子の近くです」

「あぁ、八王子……」

お母さんは道に弱い。というか普通の女の人だ。お父さんも強くはないが常識程度には知ってるみたい。

「国道 16 号のほうです。神奈川の相模原市に通じています」

「ふぅん」頷くお母さん。あ、これは分かってない顔ね。静だったらもっと上手く説明するんだろうな。ここから立川市までの道をどう行くのか頭に入ってそう。先生をナビにしたほうが良いよね。
「水月さんのご実家とはだいぶ離れてるのね」
「それは……」私は少し小さな声で呟いた「前の奥さんの家からそんなに離れてないからだそうよ」
「奥様……蛍さんでよかったかしらね」
「うん、その人」
　レインがもぐもぐしながらチラっと見てくる。
「東京の方なの？」
「ううん、埼玉って言ってた」
「あら、ウチと同じだったのね」
「うん……」私が気まずそうに答えると、お母さんは何も言わなくなった。
　お父さんは相変わらず黙って食べてた。レインは日本語が分からないので黙って食べているが、偶にアルカで話しかける。日本語を使う気はないらしい。この厚かましさがヴァルテね。
　とりあえず日本語の簡単な単語と統語だけは教えてある。形態論は教えていない。用言の活用は複雑だからだ。私が教えた統語は単純なものだ。「主格　対格＋を　動詞原型」これだけだ。具格や場所格は「で」などの助詞を格詞として教えた。格詞と違って順番が逆になり、「スプーン＋で」の語順になると教えた。形容詞などの修飾は前置すると教えた。だから「熱い　水」くらいは言えるはずだ。お湯は教えてない。熱い水で代用している。アルカがそうだからだ。
　これだけ譲歩したベーシックジャパニーズを人工言語として作って教えてあげたにもかかわらず、レインは滅多に喋ろうとしない。基本的に私に頼ってばかりだし、私がいなくても平気でアルカで喋る。街中で店員にもアルカで喋る。何も言わないほうがマシなのだが、黙ってると無礼だから挨拶するというのがヴァルテの礼儀らしい。日本語覚えるほうが礼儀だとは思わないのだろうか。レインの事情も分かるけど、暫く日本にいるんだから日本語を覚えたっていいじゃない。この子は天才なんだしさ。思うに最近、私達の会話を少しはリスニングできてる気がする。簡単な文なら私がアルカに訳してあげる前にもう事情を知ってるような顔をしてるときがあるから。
　でも親はレインが日本語を使わないことに違和感はないみたい。そして親もアルカを覚える気はないみたい。静は少しずつ覚えてくれてるし何度も短いアルカでレインと微妙に意思疎通してくれてる。けど、親とレインは言語面では平行線。歩み寄りナシ。というかその気すらナシ。それでも人間関係は上手くいっているから不思議。言語が通じないと仲良くなれないってのは必ずしも正しくないんだなって分かった。

「ところであなた、受験はどうしたの？志望校は決めた？」
「う……」面倒な話になったな。でもスポンサー相手じゃ仕方ないか「志望校は特にないけど……」
「10 月なのに呑気ねぇ」くすくす笑うお母さん。ウチの親は気楽なので良い。
「先生は東大に行けっていうのよ。私なら行けるって。センターは先月お金納めたから今月願書よ。国立だから学費も安いでしょ」
「お金は別にいいけど、赤門まで通えるの？一人暮らしは嫌よ。お母さん、紫苑がいないと寂しいわ」
「え、ほんとぉ？」
「それに、家事しなくちゃいけなくなるし」
　私が睨んでガチャンと茶碗を置くと、お母さんは「嘘よ。急に怒らないで」と言う。私は頬を膨らませて黙った。
「気が短くておてんばなのは誰に似たのかしらねぇ」
「少女時代の姫もこうでしたが」
　珍しくお父さんが突っ込みを入れるとお母さんは「あら、そうだったっけ？」としらばっくれる。
「でも紫苑ほど神経質ではありませんでした」
「お父さん……珍しくよく喋るよね」
　お父さんは「うん……」と言って黙ってしまった。レインがお父さんに何か話しかける。言葉が通じてないわりに意思は通じてるようで、レインは口に手を当ててくすくす笑っている。
「東大はなぁ……」
「今までの勉強貯金でどうにかなるんじゃないの？」
「先生もそう言ってた。でも、受かるかどうかじゃないの。別に行きたくないし」
「ふぅん。東大ってどうやって入るの？」
「え？だからまずはセンターよ。そこで足きりして、その後２次試験。センターは受ける大学や学部によって取る科目が変わるんだけど、東大だと一般にとても多いの。それに殆ど点を落しちゃいけないし」
「あなたなら簡単じゃない？」
「うん、多分ね。今日受けても受かると思うよ」
「じゃあ何が嫌なの？」
「ん……遠いからかな」
「水月先生もそう仰ってたの？」
「んー……うん、言ってた」
「こら、嘘つかないの」
　一瞬でバレた……。

「う、うそじゃないよぉ。多分遠い……って言う気がする。お父さん、東大ってどうやって行くの？始めは駒場で次は本郷って聞いたけど、本郷が本拠地よね」
「……さぁ、どこだろうね。本郷のほうはよく知らないな」
「先生だったらきっと知ってるわ。電話してみる」
「だめよ、そんなことで一々電話しちゃ」
「いーの。声聞きたくなったの」
　お母さんたちは顔を見合わせる。きっと凄く我侭な娘に見えてるんだろうなぁ。電話をかける。さっき別れたばかりなのにすぐ電話だからちょっと驚いてるみたい。何かあったのかって思ったみたいよ。で、用件を言ったらなんだと笑ってた。
「俺は人間ナビかい」途切れがちな電話の声。
「ふふ……だってよく知ってるんですもん。あとね、ほんとは声聞きたかったんです」
「ん……俺も聞きたかったよ。じゃあ運転中だからまたね」
「はい、気をつけて」電話を切る。
「迷惑な子ね……」
「先生が嫌がってないから良いのよ。あのね、多分ウチからだと赤羽まで出て西日暮里で千代田線とかいうのに乗り換えて根津ってところから歩くのが早いと思うって」
「水月さん、色々ご存知ね」
「凄いでしょ？　駅降りてちょっと歩けば赤門だって言ってた。ビックリしちゃった。上野公園の裏なんだって、東大って。なんとかの池を挟んだ向こうなんだって」
「不忍池だと思うわ」
「あ、それそれ。そしたらね、今度デートで上野動物園に連れてってくれるって」
「良かったわね」
「でもね、その代わり東大の見学させるって……。やっぱり先生だよねぇ」
「そうね」お母さんはちょっと嬉しそうに笑った「で、通学はどれくらいかかるの？」
「電車に乗るのは１時間くらいじゃないかって言ってた。多分先生のいうことだから合ってると思う」
「じゃあスクールバス使って行くこと考えれば高校とそんなに変わらないじゃない。一人暮らししなくていいわね」
　なんだか勝手に東大に話が決まっていく……。
「紫苑は」お父さんが口を開く「東大には行きたくないようですよ」
「え、そうなの？一番なのに。折角頭良いんだからもったいないじゃない。どこか行きたいところあるの？」
「特にないわ。あまり大学にも将来にも希望がなくって……ごめんなさい」
「そう……」
「でも強いていえば先生と同じキャンパスなら行っても良いかなって思ってる」
「どうして？水月さんはもう大学にいないじゃないの」

「ん……蛍さんは同級生だったんだって。きっと大学には一杯思い出が詰まってると思うのよ。だから私で記憶を塗り替えたいの」
　お母さんは上のほうを向いてため息を吐いた。
「あなた、ちょっと病気ね」
「ごちそうさま。いくよ、レイン」私は立ち上がった「そうよ。だって恋の病っていうじゃない？」
　階段を登ってるとお母さんが声を投げてきた。
「病気が治ったとき、まだ在学中だったらどうする気？」
　私は聞こえない振りして階段を登った。

　部屋に行くとレインは窓辺に歩み寄る。私は暫くベッドに座って将来のこととか考えてた。レインも黙ってぼーっとしている。猫みたいな子だなぁ。
　今日は満月の日。レインに魔力が満ちていく。メルディアの放つ光が心なしか強く感じられる。家の中にいちゃダメね。外に行ったほうが魔力を吸収できる。アルバザードの月散歩は伝統として残っているけど、本当に魔力を高める効果があったのね。レインの時代で実感できるのは貴重な体験だと思う。
ᘐlecʌ，-ᔑ ᒐccᑐ ᒐelᑐlaᒉ c ᑐaᔑδᘓ
ᘐㄣ-，ʌɔʌ ᔐɔ ｌ-ʌ„ ᑐ-ｌ….leʌ- ᔑcᒉ ᐸleʌ c ᔑ- c> ɬaᔑʌeδᘓ
ᘐ϶-ᔐᔐɔ，ᑐ-ｌ ᑐa eᑐ ᒐcel ｌ->c >-ʌ leʌ- eᑐ >-ʌ-ᘓ
ᘐᒐcel ｌ->c….δ　ᘐᑐa eᑐ ᒉ-ｌ ｌ->cᘐ ʌɔɬ ᑐa eᑐ ᔑ-ᑐ ᒐ-lᑐ ᑐaᔑᘓ
ᘐ-，-lʌ-„ h-c，ʌɔʌ -ᔐ> ᒉe Ⴙaｌ ϶-϶- ᒉɔᔑ ᐸ-ʌ ᒉɔᒉᒉɔ leʌ-ᘓ
ᘐᔐɔʌ ᒉɔᒉᒉɔ ɬⴗaᔐᔐɔaδᘓ レインは目を横にそらす。
　私は頷いて部屋を出た。お父さんの部屋をノックすると、入口まで出てきた。
「どうしたの？」
「あのね、メルディアに魔力を溜めたいから月散歩をしたいんだけど。怖いから付いてきてほしいの」
「分かった」といってお父さんは部屋のドアを閉めた。
　レインを連れて下に行く。玄関のところでお母さんに声をかけた。お母さんはさっきの会話なんか忘れてしまったようだった。私は大学のことでもう少し話を引っ張られるかと思ってたんだけど。ほんとにあっさりしてるなぁ。
　外に出る。
「お父さんと夜中に外に出るの、久しぶりだね」
「うん。大晦日以来だな」
「今日は天気良かったね。昨日は凄かったよね」
「秋雨前線だそうだよ」
「え、そうなの？あの雨と風だから台風かと思ってた。今年は台風少ないのかなぁ」

レインが辺りをきょろきょろする。車が１台入ってきた。ふいに不安気な顔になる。ウチの周りはガードレールさえないからなぁ。お父さんがスッとレインの右に立ってレインを端っこに寄せる。レインはちょっとにこっとして袖に掴まろうとしたけど、寸前で止めた。静には掴まるどころか抱きつくんだけどなぁ。やっぱりお父さんは取っ付きづらいんだろうな。

ミニストップの手前の遊歩道のベンチに座る。今日が雨じゃなくて良かった。レインは目を閉じて静かに座っている。瞑想？てゆうか眠いだけ？こうしているほうが魔力が溜まりやすいのかな。いつもならレインとおしゃべりするところだが、いまはムリっぽい。あとはお父さんだしな。こりゃ黙ってるしかないわ。うわ、気まず……。

10 分ほど黙って様子を伺っていた。そしたら本当に２人とも一言も喋らない。うんともすんとも言わない。なんだか私ばかりのけものな気がしてきた。私だけ場違いな存在な気がしてきた。神経質……そんなことないと思う。別にヒステリーだって起こさないし、ムッとしてもちょっとシグナルを相手に伝える程度よ。怒ってるわけじゃないわ。その話題は不快ですということを相手に知らせてるだけよ。むしろ皆がちょっと鈍感なんだと思う。

あーあ、静と話したい。先生と一緒にいたいよぉ。いまごろ家についたかな。一人でご飯食べてるのかな。私が傍にいてあげたい。

今日は楽しかったな。あの公園広くて綺麗で。良い天気だったし、私よく笑ってた。静も凄く機嫌が良さそうだった。私といると気分が良いって、心が綺麗になるって言ってくれた。それって凄い褒め言葉だよね。私という存在が彼を浄化している。それによって私もどんどん綺麗に磨かれていく。とても波長が合うんだわ。

もっと先生に近付きたい。

お母さんのいうことも分かる。先生の大学に行ったって先生はもういない。喫茶店やお店と大学は違うわ。大学は先生にとってもう行かない場所だもの。大学は塗り替える価値がないかもしれない。正直いっていま私が進学について悩んでるのはそれ。先生と同じところに行って蛍さんを消すことができるのかどうか。できるなら行きたい。でも、そうするまでもないなら……そうね、東大でもどこでもいい。

先生を私のものにしたい。他の女の匂いを消していって私で満たしたい。先生のこと、征服したい。私がいなくちゃ生きていけないって思わせたい。私の好きな人に、私という存在を必死に求めてほしい。なんでこんな風に思うんだろうな。……多分家庭環境だな。

横をチラっと見る。お父さんは黙って座っている。

うん……きっとそうだ。家庭環境だ。だって私は友達もいなかったから、ヒトといえばお父さんとお母さんくらいしか付き合いがなかった。２人が娘の人間性の形成に貢献した度合いは絶対よその親より高い。

今度、上野動物園か。お父さんに連れてってもらったなぁ。肩車してもらっておサルさん見た。あそこにまさか彼氏を連れていくことになるなんてね。私も成長したよなぁ。

それにしても場所を塗り替えてるだけでいいんだろうか。時間は戻せないから仕方ない

として。場所以外に塗り替えられるとしたら行為か。スポーツ、音楽、芸術……蛍さんと一緒にしたことって何だろう。あとは結婚とかかな。そうだよな、蛍さんは一通り静と恋愛を満喫したんだ。何年か知らないけど、その間に随分色んなことをしたんだろうな。今日みたいにお花を見に行ったり。

唯一塗り替えたくないのは離婚ね……。それ以外は全部してみたい。結婚も旅行も。蛍さんは子供も産んでるんだわ。私も産みたい……。なんだろ、別に蛍さんに対抗してるわけじゃないの。だって会ったこともないもの。じゃあ私、なんでこんな風に考えるの？

きっと静がそう願ってるからだ。先生、シェルテスが最後に消えたときに言ってた。私がシェルテスに捕まって、思わず本音が出たみたい。私で蛍さんのことを忘れたいって。だから……だから私は記憶を塗り替えたいんだと思う。始めは嫉妬めいた対抗心だったかもしれない。でもいまは違う。

ぼーっと空を見る。

「ねぇ、お父さん。あっちで話そ」

もうひとつのベンチを指す。

「ん？あぁ、わかった」

ᘐlecᐱ，ᓚ-ᑊ -ᑕᓀᘑ

ᘐeᕫ ᕲ ᑕᖻ Vcᐱᓙ ᐱɔᐱᵹ ᘑ

ᘐh-ɔ ᑕeɔ„ ᐱɔᐱ ᓚɔɔᑐ ᑊ-ᐱ ᓚe - ᕫ-ᕫ- ᑊᖻᓀᘑ

ᘐᓙɔᐱ ᓙɔ ᛇc- -ᑕᓀ ᚷcl ᐱɔᐱ -ᑊᐱ- Vcl ᐱchɔᐱᛉɔᘑ

ᘐᐱɔᐱ ᓙeᕯ ᑕᓀ ᑕeᑕ ᐱɔᐱ ᓙɔlᓙ ᕯcᐱ ᑕᖻ ᑕeᕯ ᑕᓀᘑ

ᘐ--，ᕫ-ᓙᓙɔᘑ

私は向こうのベンチにお父さんを連れて行った。

「あのね、今から私、とても気まずい話をするんだけど、怒らないで聞いてくれる？」

お父さんは少ししてから頷いた。

「大学のこと？お母さんはそんなに気にしてないと思うよ。紫苑の好きなところにいけばいい」

「ありがとう。でも大学のことじゃないの。先生のこと。ねぇ、先生のことどう思う？」

「どうって……紫苑の恋人で英語の担任の先生だろ」

「それは立場でしょ。お父さんの印象を聞いてるの」

「うん……良い男だ」

私はゆっくり頷いて見上げるように「……それだけ？」

「紫苑のことを命がけで守ったそうだね。レインさんをおぶったり身を呈して戦ったり、他人にも優しい。気遣いもよくできている。礼儀も知っている。機転も利く。身なりも清潔で、身体も丈夫なようだ。そして紫苑のことを愛しているようだ」

「結構ちゃんと見てくれてたのね」

「うん」と頷くお父さん「お母さんもそう言っていたよ」
「特に欠点ってないのね？」
「あるよ。無傷な人間はいない」
「聞かせて」
「紫苑との年の差が８つあるのは構わないが、２人の年齢が低すぎる。紫苑はまだ高校生だ」
「それは……いずれ自動的に解消されそうね。他には？」
「仕事。予備校教師で将来紫苑と子供を支えていくのは難しい」
「お金関係かぁ。大人の見方は厳しいのね。私はあまり気にしないけど、私も年を取れば気になるのかな」
「紫苑、今から言うことは黙っていなさい、いいね」
「うん……？」
「実は、彼が紫苑と結婚すれば、ウチの会社で働いてもらおうと思っている」
「え？コネ入社！？ムリよ、静は凄いプライド高いからそんなの受けないわ」
　お父さんは少し笑って首を振る。
「ヘッドハンティングだよ。彼は有能だ。予備校教師にしておくのは勿体無い。何度か食事をしていれば大卒を数十分面接するよりずっと内面が分かる。彼の年収はいくらだ」
「分からない……お金の話なんてしないもの。でも車も時計とかも高そうよ」
「予備校は 30 くらいの若いうちは稼げるが、先の無い職業だ。今後教育界は低迷する。お父さんの会社は外資系の商社だが、彼の精神力と交渉能力と語学力は非常に有力だ」
　お父さん、ハッキリよく喋るのね。そうか、こういう話題なら喋れるんだ……。だよな。でなきゃ会社で仕事できないもんね。
「へぇ、随分高く評価してくれてるのね」
「彼は自分の能力を埋もれさせている。お父さんが引き出す。近いうちに年収 1000 万に育て上げる。紫苑と子供を任せるのだから、それくらいは稼いでもらう」
「1000 万って凄いね。お父さんがくれるお年玉 100 年分くらいじゃない？」
「まずは 1000 万。そして最終的に、彼には世の中の上層部に来てもらう」
「そっかぁ……大人って見るところが子供と全然違うんだね」
「もし結婚したらの話だから、内緒にしておきなさい」
「はーい。でも逆にいえば私が振られないようにしないといけないし、先生にしても私を娶るには教職をやめなきゃいけないっていう条件なのね」
　娶るという言葉に自分で惚れ惚れした。
「うん」お父さんは短く答えた。
「あのね……」こほんと空咳をする「でもそれって結婚の条件よね、親からの」
「条件というほどではないけれど」
「じゃあ……その……貰われるのはもう少し早くてもいい？」

「どういう意味？」
「えっと……だから……そういう意味。結婚前に貰われてもいいかってこと」
　お父さんは目を瞑って首を傾げた。
「明確に説明してくれないか。言葉遣いは気にしなくていいから」
「結婚前にセックスしてもいい？」
　お父さんは黙った。そのまま難しい顔でうーんと唸った。そりゃそうだろう。私もここまで率直に言うとは思わなかった。まさかお父さんも娘の口からその言葉を聞くとは思わなかったろうな。私も思わなかった。勢いって怖いね。
「気まずい話って婚前交渉のことか」
「うん」
　なるほど、そういう言い方があったか。今更になって体中から冷や汗が流れ出てきた。緊張でお腹が痛くなってきた。何だろう、この世界をひっくり返したいくらいの居心地の悪さは。
「それはお父さんが決めることじゃないよ」
「そう……でもないかもよ？」
「ん？」
「私はお父さんから作られたんだもん。つまり私の身体の出資者じゃない」
「作ったのはお母さんだと思うけど」
「勿論お母さんも。だけど女親より男親のほうが娘の処女性を気にするものでしょ？だから相談してるのよ」
「そういうことはお父さんが何か言っても変わることじゃ――」
「変わるよ！」かぶるように言った「私、お父さんが結婚まで待ちなさいって言えば従うわ。私の倫理観なの。赤ちゃんのころから私のこと大事に育ててくれたんでしょ？それなのに未熟な娘が早まったことをしたら親としては手塩にかけて育てたのに悔しいでしょ？私はそんな娘になりたくないの」――お父さんにいい子だって思われてたいの――「だからお父さんたちの気持ちを裏切るようなことをしたくないのよ。もし早まってるって思うなら、私は従うわ」
「ふむ……」お父さんは唸った。あ、いま私のことで頭が一杯に違いない。嬉しい。
「お父さんはね……互いに気持ちがあれば倫理観では止められない行為だと思う。早いからといって破局するわけではない。お母さんがそうだった」
「え、どういうこと？お母さんとお父さんも……その……出合ってからわりとすぐ……」それ以上は気まずすぎて言えない。
　お父さんは黙って頷いた。
「でもこうして幸せな家庭を築いてる」
「そうだね」
「紫苑はお母さんと同じことをすると思う」

「え、私のほうから？……そうかも」
「婚前ではなく近い将来を想定しているんだろ」
「うーん」足をぷらぷらさせる「今日明日って言ったら怒る？」
「別に怒ることじゃない。ただ、静君が断ると思う」
「だよね……私もそう思う。まぁ、今日明日はないよ。お互いもしもそういう気分になったときのために許可を取っておきたかったの。ところで、先生が断る原因ってなんだと思う？男の人の視点でさ」
「前妻との離婚」
「だよねー。女の人が怖くなっちゃったのかな。本当に私といても何もしてこないのよ」
　お父さんはじっと私を見る。
「紫苑が子供だからだろう」
　ハッキリ言うなぁ。でもこういうところはわりと平気。自分に似てるから。
「子供じゃないよ。身体はもう成長しないでしょ。高３だよ、私。中３じゃないのよ」
「子供だよ」
「そうかなぁ……あとはどんどんオバサンになるだけだと思うんだけど」
　すると手を出して、指で私のこめかみを突いてきた。
「幼い」
「そっかぁ……。先生、年増好みなの。それがちょっと心配。年上に取られちゃうかな」
　お父さんは小さく首を傾げる。少し呆れたような表情。
「静君も大変だな。紫苑、異世界でもう少し凛々しくなってきなさい」
「……」
「レインさん、待たせたね。帰ろう」
　レインが立ち上がってとことこ近付いてくる。
「あ、お母さんには帰ったら自分で言うよ。ごめんね、変な話して。気まずかった？」
「とても」
　いつも変わらない落ち着いた声でサクっと答える。恥ずかしいの我慢してやっと打ち明けたっていうのに。

　一度黙ったら凄く気まずくて、私はお父さんの顔を見れないまま歩いた。レインは何があったのか知らないからじーっとお父さんを見ていた。私が気落ちしているように見えるのだろう。そしてその原因がお父さんにあるように見えているのだろう。
　家に入るとお父さんは部屋に行った。レインも部屋に行かせる。お母さんは居間でお茶を飲んでいた。お父さんが自分のところに来ないでスルーしたのを不思議そうに見ているお母さん。
「あの……時間ある？」
「うん。大学のこと？」

　またそれか……。
「ううん、先生のことなんだけど。いまお父さんに相談したの。凄く気まずいから別々に話したくって」
「なぁに。デートで何かあったの？」
　私の分のお茶も入れてくれる。私は一口飲んで呼吸を整えた。
「ううん。前々から聞いておきたくて機会を伺ってたの」
「そんなに気まずいことなの？」
「うん……あのね、怒らないで聞いてね。その……やっぱり婚前交渉ってまずいかなぁ」
「え、それって今日すませてきたってこと？」
　ブンブン首を振る私。
「だから今日のデートは違うってば。キスまでよ」
「キスはちゃっかりしてるのね」唇に手を当てるお母さん。なんか楽しそうだな。
「で……どう思う？結婚は無視してさ、「交渉」の部分について。早いかな」
「早いでしょ、そりゃ。水月さんが一生あなただけ見てくれる保障はないんだから」
「そうよね……」
「水月さんがほしいって言ってきたの？」
「ううん。そっちのほうはサッパリ」
「でしょうねぇ。お嫁さんに逃げられちゃったら女性不信にもなるわよ。それにアンタじゃクラスの男の子なら魅了できても水月さんはムリね」
「それ……それとなくお父さんにも言われた」
　お母さんはお茶を飲んでふぅと息を吐いた。
「紫苑さ、ハッキリ言っていい？結構傷つくと思うけど」
「う、うん……お願い」
「紫苑は私より頭良いけどね、女としてはずっと下よ」
「女としてって？」
「良い男を捕まえる力。捕まえた男を更に良い男にする力。その男の視線を独占する力。紫苑はどれも欠けてるわ」
「静は？良い男じゃないの？」
「お父さんのほうがずっと上よ。あなた、客観的に見てどっちが優秀なオスだと思う？」
「え……と」
　それはやっぱりお父さんな気がする。何となくこう……多方面において。
「私はそうは思わないけど、周りはお父さんって言いそう」
「より良い男を捕まえてる時点で私のほうがメスとして紫苑より優秀なのよ」
　私はゆっくり頷いた「そうかもしれない」
「捕まえた男を良くすることに関しては紫苑はそこそこ巧いと思うよ」
「そっか。じゃあ最後のは？」

「良い男をゲットしてもキープできなきゃ意味ないよね。育てたところで他の女に取られたら損じゃない」
「そう……そうね」
　なんだろ。お母さんのこういうとこ、初めて見た。
「時間を経ても年を取っても男を釘付けにしておかないといけないの。女は大変なのよ。性格の不一致だとか経済的な問題とかいうけど、所詮離婚なんて互いの努力が途絶えた結果よ。好きになる努力をしないからその歪みが出てくるわけ。人によってお酒だったりギャンブルだったり浮気だったり。歪みの結果は色々ね」
「なるほど……」
「ところで、そもそも紫苑は彼に抱かれたいの？」
　私は「うーん」と唸って目をくるっと回した「そういう雰囲気になったらしてもいい」
「そう。じゃあ彼は紫苑を抱きたいと思ってると思う？」
「分からないよ、そんなの。多分抱きたくないんじゃない？さっき言ってたじゃない。ほら、私が子供だから？」
「男って２面性があるのよ。心は紫苑を尊重したいけど身体は本能に正直なの。心と身体の鬩ぎあいよ。普段は心が勝つんだけどね、偶に身体が勝つのよ。女はそのとき自分が愛されてるって誤解するけど、完全に幻想よ。女の定規で測るから男に騙されるのね」
「なんだか怖くなってきたよ……」少し青ざめる私。
「紫苑は純情なおぼこだから、ころっと騙されると思うのよ。良い男を捕まえておきたかったら身体は武器として使いなさいな。いくら綺麗事いっても男って女の身体が好きだから。出し惜しみしてると錆びるし、男の言いなりになって許しているとそのときは歓迎されるけどすぐに飽きられて冷たくされるわ」
「ねぇ……お父さんってそういう人なの？」
「どうして？」
「だって……お父さんがそういう人じゃなかったらお母さんは一体誰との経験に基づいて喋ってることになるの？」
　お母さんはくすくす笑うだけで答えなかった。
「紫苑は女として未熟すぎるのよ。頭は良いし精神力も強いけど、その辺は同い年の子供と変わらないわね。制服がお似合いよ」
「……お父さんにさっき子供って言われたの。あれはそういう意味だったのね」
「かもね。おためごかしで「良い母親」に見せかけるのは簡単よ。「あなたの好きにしなさい」とか「早まって不幸になるような真似をしないでね」とか「自分を安売りしないで慎重にね」とか「してもいいけど避妊はしてね」とか言えばいいんだから。いかにも理解ある最近の母親でしょ？でも私はそこまで甘くないのよ」
　ぷるぷる小刻みに頷く私。なんかいまのお母さん、怖い。
「女の幸せは男で決まるのよ。「男なんて面倒だしキャリアも捨てたくない」なんて独り身

キャリアウーマンの負け惜しみね。ランプの精が出てきて「理想の男性と愛情ある幸せな家庭をやる」って言ったら、偉そうなこと言ってても絶対に食らいつくわ」
「それは……そうでしょうね」
「ランプの精は女の本能が求めるものをくれたのよ。抗えるわけがない。それを否定するのはね、本当はほしいけど手に入らないから貶す心理――すっぱいブドウの心理よ」
「なるほど……。どう言おうと女の幸せは男で決まるわけね」
「そう。で、身体は男を上手く操る方法のひとつよ。愛とか恋とか浮ついた非現実的な話じゃなくて、女の人生を合理的に創りあげていくための武器のひとつなの。料理の腕も同じね。身体も料理も変わらないわ。そういうの、あなたに理解できる？」
「全く関係ない科目に見えるけど、男を引き止める道具としては同一線上ってことね？」
「そうそう、さすが頭良いわね。東大って言ったのも同じよ。学歴も武器になるわ。良い男ほど上にいるから」
「でも頭いいとモテないって聞くよ？」
「下らない男にはモテなくなるわ。人口比からすれば下る男のほうが少ないんだから、一件モテない風に見えるわ」
「なるほど、確かに」
　なんだか説得されてきたぞ……。私の良心が「そんなの不純よ」と声を大にして言ってるんだけど、お母さんからすればそんな声は世の中知らない甘ちゃんの戯言なんだろうな。
「まぁ、水月さんだけをどうしても追いたかったら東大は止めとくべきね。別に医者や弁護士の彼氏がたくさんほしいわけじゃないんでしょ？」
「うん、先生を狙う方法をできれば教えてほしい……です」
「そしたら女のほうが上の学校に行くのは内心鼻持ちならないから止めとくのね。同ランクにしときなさい」
「そっか……。そういうのがお母さんの生き方なのね」
「そうよー。おかげであんな良い男を夫にしてられるんだから」
「お父さんのこと、そんなに好きなんだ？」
「え？」顔を上げるお母さん。急に赤くなる「そうね……好きよ。いまでも大好き」
「ふぅん」私はにやーっとする。なんだか可愛いな。
「なんかそれ聞いて安心したよ。いまさ、私はお父さんの子じゃないんじゃないかって思っちゃってたから」
「バカ言いなさい」
「バカだもん。いまの話聞いても多分、私は本能に従って、したいまま静と抱き合うと思う。それで結局捨てられちゃったら最悪よね。でも、身体と料理を同じに見るのは分かったよ。駆け引きに身体を使う考え方も分かった。この方法は使いそうな気がする。でも……基本的には本能に任せると思う。なんていうか……性欲……じゃなくて愛欲？みたいなものを感じるのよ、シェルテスと戦ってから特に。もっと近付きたいっていう気持ち。な

んとなくこのまま行くと、損でも静を求めそうな気がするの」
「そう。分かっててするなら後で後悔しても自分で責任取りなさいね。そこで男に責任取らせるのは筋違いよ」
「うん。ありがとね、真面目に取り合ってくれて。色んな知識も聞けたし。世の中には駆け引き恋愛をする人もいるのね」
「まぁ何にせよいまの紫苑じゃ誘惑するだけの力はないから、異世界でがんばって少し大人になってきなさい」
「それ、お父さんにも言われた」椅子を引いて立ち上がる「ごめんね、変な話しちゃって。気まずかったでしょ」
「面白かったよ？」
　私は額に手を当てた「なるほど……確かに私のありえなさはお母さん譲りだわ」

2006 / 11 / 05

　天気の良い日曜日の午後。私は先生の家に来ていた。前にお邪魔したときはシェルテスに邪魔されたしレインがいたからゆっくりできなかった。先生の家族に挨拶したかったんだけど、出かけていていないそうだ。
　先生の家族関係は蛍さん以外全然知らない。まぁ、もはや蛍さんは家族ではないのだけど。家族について聞いても何となくそらされて終わってしまう。私のことは一応話してあるみたいだけど。こっちは両親まで知られてるのに、私は先生の両親の顔さえ見たことない。なんだか不安だ。たとえばいまいきなり帰ってきたら私はどんな顔をすればいいんだろう。
「紫苑、どうした？」
「え……なんでもないです。考え事」
　首に腕を回してしなだれかかる。最近甘えるのに慣れてきた。面倒な話をはぐらかすのも少し慣れた。キスのタイミングも分かってきた。でもまだ丁寧語の混ざる口調は直らないし、私は相変わらず静を先生と呼んでいる。付き合った最初のうちは無理してタメ口聞いてたけど、やっぱり私には無理みたい。思えばもう先生と呼べる期間はちょっとしかないのだ。いまのうちたくさん呼んでおこう。
「ね、動物園楽しかったね」
「うん、一番多く見た動物は人間だったけどな」
「あは」
　今日は先月約束した上野動物園に連れてってもらった。動物園は入園料が安い。私は未だにお年玉を使ってデートをしてる。先生に出してもらうのは抵抗がある。大学に入ったらすぐバイトしてデート代を稼ごう。そうすればお台場とかラクーアとかディズニーランドとか一緒に行ける。

今日は天気が良かったから動物園日和だった。先生の言うように人間が一杯いたけど。結局動物園の後は東大に行かされた。キャンパスの中をうろつくだけだったけど。つまらなそうな顔を見せちゃいけないと思ったけど、やっぱり動物園のほうが楽しかった。

それから光が丘に行って、先生の家にお邪魔した。もう夕方。あと１時間もすれば真っ暗になる。最近日が落ちるのが早いわ。今日は暖かかったけど最近寒くなってきたしね。

「せんせぇ〜」

甘えて抱きつく。床に寝転がってころころ。とても気分が良い。目が合うとにこっとしてくれる。しばらく抱き合っていたら、お互いに言葉を失った。音の無い部屋。時計の針もゆっくり動くタイプだから無音。先生の胸板が呼吸のたびにゆっくり上下する。固いなぁ、これ。てゆうか男の人って固いよな。逞しい感じ。腕も固い。腹筋もかなり。二の腕とかも。結構鍛えてそうだな。

「先生……まだ鍛えてるの？」

「多少な」

「ふぅん」

胸板に耳を当ててみる。心臓の音がする。頬を当ててみる。暖かい。なんだろ……胸って男の人の場合、「部位」じゃなくて「場所」ね。ここを枕にして眠れそうな気がする。姿勢苦しいけど。あ、横から寝転べばいいか。いや、ちょっと高いわね。肩が凝る……。

「先生、心拍早いね。ドキドキしてる？」

「え……いや」

ドキドキしてるのは私だ。さっきからずっと収まらない。

「あの……」

声が震えた。自分でもビックリした。緊張してきたのにいまので余計緊張した。

「私も、ドキドキしてるみたい。心臓凄いの。……聞いてみる？」

先生の手を持つ。胸の前に持ってくる。

「心音……聞いてみる？」

もう一度聞く。口の中が乾いてきた。

私、薄く唇を開けて先生を見つめる。夕方の明かりが窓から入ってくる。先生は真剣な顔で私の目を見てくる。これは……タイミングだ。うん、これはタイミングだ。雰囲気も良い。部屋でいちゃいちゃして言葉が止まってそのまま……というのは何度も本で読んだ。これは王道パターンなはずだ。ここに来ることが決まってからずっとこのタイミングを作るのを狙ってた。私は先生が好き。先生も私が好き。だからこれは間違ってない行為だ。

「あは……手、当てるだけですよ？なんか意識してません？」声が震えてる。我ながら全く説得力ない。

「ん……？」先生は小さく呟いた。

「凄い……音なの。自分でも分かる。耳のところまで脈打ってるのが分かるの。ほんと凄いよ……いま聞かないと……ほら、止んじゃうから」

「うん……」先生は手を動かさない。
「あの……何も言わないと置いちゃいますよ。あ、少し止んできたかも」
　私は身を乗り出してキスする。顔を近付けて目を見つめる。だめだ……超震えてる。手とかぶるぶるしてる。自過剰になっちゃダメ。冷静なフリしないと。あくまで普通な雰囲気で。
　先生は黙ってる。目を横にそらして少し困った顔。なんで……気持ちは伝わってると思う。蛍さんとするときどんな流れでしてたの？こういう流れじゃないの？
　それとも……伝わってるけど拒んでるの？
「え……」
　私は少し顔を離した。途端に不安な顔になる私。身体が急に崩れ落ちそうになる
「……いやなの？」
　その瞬間、先生は私の手首を握りかえした。親指を手首の内側に当てる。そして私の言葉を掻き消すように言った。
「ほんとだ、凄い脈。走った後みたいだ」
「え？」
「俺のも触ってみ、ほら」といって私の指を取る「な、凄いだろ？」
「う……ん」
　先生はゆっくり起き上がった。私は寂しそうな顔で俯いた。するとその小首を持ち上げてキスしてきた。
「ん……」
　ゆっくり唇を離す。
「やっぱさ、キスするとドキドキする。抱き合うともっとドキドキする。いや、あんまり心臓バクバクいってたから急に具合悪くなっちまったんだ」
　苦笑いして心臓を押さえる先生。少し辛そうな表情。
「え、ほんとに？」少し慌てる私。耳元の髪をかき分けて起き上がる「大丈夫ですか？」
「いや、結構キツイ。急性の仰天性胸痛みたいだ」
「……そんな病気あるの？」思わず眉をひそめる。
「あるある。″an acute empathizing pectoralgia″　家帰ったら辞書引いてみ」
　一瞬呆けてから、私はぷっと吹き出した。手で口を覆う。先生も笑う。
　私は右手で先生の胸を押して無言の抗議をした。
「膝枕してください」
「いいよ、おいで」
　ねっころがる。ころん。
「……女の子の顔立てるの上手ですね」
「そうかな。かなりテンパったと思うけど」
「じゃあ私仕様です。やっぱり先生は私の王子様」

「俺はカスタマイズ製かよ」
「ふふ」上を向くと目が合う「ねぇ、先生」
「ん？」
「「仰天」と"empathizing"はどっちが本音だったの？」
　先生は私の髪に手櫛を入れる。
「家帰ってから伝わるように仕組んだつもりだったんだがな」
「甘かったですね。なにせ天才少女ですから」
　先生は私の頬を指で押した「調子乗んない」
「はーい」

　その夜、私は部屋で机に座っていた。レインがお風呂から上がって部屋に戻ってきた。
ᘏ╰ɔɔ∧δᘐ
　突然レインが後ろから覗き込んできた。私は慌てて開いていた辞書をバンと閉じる。
　びっくり顔のレイン。猫みたいな大きな眼。
ᘏ(Կə ∪ɔᔑ (ɔδᘐ
ᘏ(ee, (ə e(Ve╯∪ᘐ
ᘏ- Կ-….ᘐ
　レインはベッドにちょこんと座る。バスタオルでほぼ乾いた髪をくしゃくしゃ拭くと、レインは小さく呟いた。
ᘏe∪ ╰ɔɔ∧ -╰(-(-ᔑ “ǀ--ϑ” - ╰e Ve(ʔ-e∧ ʔlel eԿɔᘐ

2006 / 11 / 27

「お先に失礼します」
「お疲れ様です」という教務の声に見送られ、塾を出る。教師の通用口を出て外に出ると大きく息を吐く。うわ、息白いわ。室温差結構あるからな。さむ……。しかしまだ８時台か。今日は早いな。ゆっくり歩き出す。
　しかし紫苑はどこの大学に行くんだろうか。もう 12 月になるっていうのにいい加減だ。親がいうように東大を受けるようだが、俺のとこも受けるようだ。決まってるのはこの２つか。東大のほうがそりゃいいよな。彼女のほうが良い大学っていうのは心配の種だが。
　紫苑は大学に入っても俺と付き合うんだろうか。俺は紫苑を気に入っている。あわよくばこのままずっと付き合いたい。でも年の差がな。大学に入れば俺の管理下からも抜け出すわけだし、色んな誘惑が出てくる。簡単に乗る子じゃないと思うけど、サークルとかで好きな男ができるかもしれないな。俺と会う機会は塾がなくなるので減るだろ。そうこうしてるうちに会えなくなって、それが原因で他の男とっていうのが一番あるパターンだ。
　逃げられたくないなら早い話寝ればいい。女を繋ぎ止めとくには一番の方法だ。実際、

意外と金より効くもんだ。特に若い女ほどそうだし、あんな子供じゃ抱けば気持ちが舞い上がって、少なくとも駒場に行ってる間は持つだろう。

かといって面倒なんだよな。枕のホストじゃあるまいしさ。金をもらうかどうかの差があるだけで、やってることは枕の連中と変わらんよ。女を繋ぎ止めとくために身体を使う。あんな連中と同じになるのは俺のプライドが許さん。

それと、俺自身の気持ちもある。蛍を抱いたのが最後だが、あんな別れ方だったから女を抱く気になれない。逆説的だが、蛍に慣れた俺は、蛍がもはや嫌いなのに、蛍以外の女の身体に拒絶反応を示すようだ。男らしくないことこの上ないな。

そして一番大事なのはやっぱ紫苑本人の気持ちだろう。今月の頭だったかな、動物園の帰りに誘惑してきた――本人はあれで誘惑のつもりだったんだろう――が、あんなに子猫みたいに震えて無理してる女なんか抱けるかよ。あのとき抱いてたら傷ついてただろうな。初めてだから良い思い出にしてやりたい。蛍みたいにな。そういうわけで拒否ったんだが、わりと傷ついたんじゃないだろうか。あれから性的なアプローチは一切かけてこない。ショックが大きかったのか。少し心配だ。

あいつまだ女子高生だもんな。意外と子供なところあるし。抱くにはまだ早い。紫苑のために抱くことはできるけど、いまのところ本人のためにならない。まぁいずれにせよ制服はネックだ。せめて女子大生ならまだ俺も 25 だから抵抗ないんだけど。生徒っていうのが精神的にキツイ。客に手を出すってことだ。恋人として見ることは慣れてきたけど、それでも抱くのはかなり抵抗がある。

あの手の女はこっちからアプローチをかけないかぎり言ってこないと思ったんだが、思ったより積極的だったな。ちょうど興味のあるころか。俺はどうだったっけ……。思い出せねぇ。高校に入ったのなんてもう 10 年も前だ。

しかし夜は寒いな。早くウチ帰らないと。今からなら店間に合うから、紫苑の誕生日プレゼントを買いにいける。30 日だそうだ。どうもその辺にアトラスは新年を迎えるらしい。それでレインはメルセルだとかなんとか言って盛り上がってる。紫苑もすっかりお祭り気分だ。この彼女がいる限りクリスマスの思い出は作れそうにないな。その代わりにメルセルとディアセルとやらがお祝いか。異世界の歳時記に合わせる必要なんかないと思うんだがな。

パーティを家で開くらしい。俺は辞退したんだが、家に呼ばれることになった。あまり懇意にして良いものか迷うのだが、向こうの親が挨拶でなく本当に招待したがってるそうなので行かないわけにはいかない。なので 30 日は早く上がる。

とそのときケータイが揺れた。マナー解除してなかった。電話に出ると紫苑だった。

「ん、どうかした？」

「先生？」なんか声が震えてる。

「どうしたの。いまどこ？」

「いま……ウチの居間」
「何か声がいつもと違うけど……」
「うん……」
「レインに何かあったのか？」
「違うの。レインは部屋よ。いま家は２人だけ。お父さんたちは今日凄く遅いって言ってた。多分 12 時過ぎないと帰ってこないって」
「そうか、２人だと心細いな」
「そう思います？」
　ただの挨拶を神妙に受け取る。
「え？あぁ。で、何かあったの？」
「いま、メルティアと話したんです。腕輪から出てきたの」
「アトラスに何かあったのか？」
「シェルテスがアトラスに潜伏し、力を蓄えつつあるそうです。全力に戻ったら月の神に報復するようです」
「回復するまで待機か。月の神は負けそうなのか？」
「多分負けます。ドルテにはシェルテス以外のヴィードが溜まってたんです。シェルテスはそれさえ吸収したので、前より潜在的に強くなっているそうです」
「つまり休んで回復さえすれば月の神を凌駕するわけか」
「更に、もし月の神を食べて吸収したら、アルデス王でも手に負えないかもしれないそうです」
「食うのか！？神を」
　驚いた。
「じゃあアトラス以前に月の神を守らなきゃいけないだろ。アルデスに護衛してもらえよ」
「月の神を守れば手薄になったところがシェルテスに攻撃されます」
「おいおい、あいつたった１匹で神全軍を相手にしようってのか」
「アティーリでは概ね神より悪魔のほうが強いですから」
　そうだよな、ヴァステという戦いでは神々が団結して悪魔と戦ったそうだから、神より悪魔のほうがずっと強いのだろう。普段大人しくしてる悪魔が暴れると大変なことになるんだな……。
「つまり神は各々の持ち場を離れられないというわけだな」
「アルデス王も居城を離れるわけにはいかないようですし」
「ふぅむ。それじゃあ月の神が襲われる前に手の開いてる者でシェルテスを討つしかないな」
「で、その役目が私達なんですけど」
「ってことになるな。動けるのは弱い駒のみか。キツイな」
「その代わり神は助力を惜しまないそうです」

「メルティアがそれら全部を教えてくれたわけか」
「はい」
「アトラスが壊滅させられてなくて良かったよ」
「はい。それでね……メルティアが言うには……神は私達を見捨てるそうなんです」
「はぁ！？」思わず声を上げる「どういうこと？」
「私達では勝てる見込みが少ないそうなんです。かつてのアシェットのような戦士や魔道士ではありませんから。私達が勝てばそれに越したことはないんですが、負ければハインさんにアルデス王を召喚させて、その短い時間の間で弱ったシェルテスを仕留めるという計画だそうです」
「つまり神の計算では俺たちが負けるかもしれない、と。つまり体力削りが役目かよ」
「そうみたいなんです。だからハインさんは別行動にさせるそうです。彼はもしものための召喚役みたい」
「彼らは神の計画を知ってるのか？」
「知らされてません。神託によれば私達異世界人がシェルテスを倒すシナリオになっているので、負けることは念頭にありません」
「でも実際負ければ即座に作戦変更という名目でハインに召喚を行わせる……。アルデス王もせこいな」
「いえ、王の計画ではなく賢者ユルグ神の計画だそうです」
「誰でもいいさ、この際。結局神は俺らを捨て駒扱いしてるんだろ。確かにその計画が神にとっては一番好都合だよな。でもそんなことしてまで俺らが働く義務があるのかよ」
「賢者ユルグの計画は嫌いです。でも、私達が戦わなければ手の空く強力な駒がいなくなり、神引いては人間もシェルテスに滅ぼされかねません。アルシェは殺され、レインも帰る場所を失ってしまいます」
「そうか……レインは何て？」
「かなりショックだったみたいです」
「敬虔なヴァルテだから尚更だろうな。結局内通者はメルティアなのか？」
「はい。彼が教えてくれたことをいま私は先生に伝えてます」
「悪魔のメルティアがむしろ神に見えてきたよ。実在する神ってのは架空の神と違って勧善懲悪でなく政治や利害で動くから厄介なことこの上ないな」
「そうですね……」元気のない紫苑。それは俺も同じだ。
「なぁ、レインやアルシェやその近親者だけを集めて地球に呼んだらどうだ？逃げさせてハッピーエンド。これもひとつの方法だぞ。俺らが無駄死にすることはない」
「そうかもしれませんね。でもヴァルテがそれを選ぶとは思えませんし……たとえば先生は逆の立場になってアトラスで一生暮らせますか？」
「それは……キツイな。旅行だけならいいが」
「レインも同じですよ。地球にずっとはいられない」

「じゃあ……どの道戦うことになりそうか」
　車に乗る。ヒーターをつける。
「はい。……でね、行くのは私だけにしようかなって思うんです。私が多分主戦力になるから。先生とはまた帰ってからデートしようと思います」
「えぇ……？それは……」
「いくらなんでも神に見捨てられた戦いに来てとはいえません。レインは自分の世界のことだし、私は使命を感じてる。でも、先生はアトラスにはそこまで関係ありません」
「でもさぁ、俺もノミネートされたってことは隠れた才能があるんだろ。戦力にはなるはずだ。死ぬかもしれない戦いで戦力が減ったら紫苑は間違いなく死ぬぞ」
「う……」言葉につまる紫苑。
「だから彼氏としてはな、いかにアトラスを諦めさせて彼女の安全を確保するかが大事なんだよな。俺は異世界よりお前のほうが大切だから」
「あの……今から会って話しませんか。こんな大事な話、電話じゃ気持ちに整理が付かないです」
「そうだな。親御さんが帰ってこないなら俺も行きやすいし。レインとも話さないとな。まぁ……訳してもらうことになるけど」
「ふふ……じゃあ待ってます。あ、ごはん食べました？」
「ん？まだだけど」
「かと思いました。作って待ってますね。一緒に食べましょう」
「あぁ、悪いね。じゃあ早めにいくよ」
「はい、待ってます。車の運転、気をつけてくださいね」

　電話を切ると、俺は白岡へ急いだ。命がけ……ね。そこまでして紫苑はアトラスを救いたいのか？俺のことが一番なら、俺との生活を優先させるのが筋じゃないのか。いや……もしかしたら殺してしまったアーディンという女への償いのつもりなのかもしれない。
　それにアトラスやレインを守ろうという約束のほうが俺との恋愛の約束より先約だ。あの几帳面で律儀な紫苑がその点を考慮しないはずがない。恐らくそういう理由で命がけなのだろう。
　ただ、あの声からしてかなり怖がって怖気づいてることは間違いない。俺がこないだシェルテスと戦ったときに思った戦場に行く兵士の気持ちと同じなんだろうな。行きたくないけど行かなくちゃいけないというあの気持ち……なんとなく分かる。
　飛ばしたんだが、白岡についたら９時を回っていた。車の音に気付いて紫苑が出てきて「ガラガラ」を空けてくれた。駐車場が空いていたので家に停めさせてもらった。
「遅くなってごめんね」中に入る。
「そんな……来てくれてありがとう」
　レインが上から降りてくる。

ᑫᓄᓕᐱᓕᓂ，ᓚᓂᑉᑐ-ᖁᑫ
ᑫᓄᓕᐱᓕᓂ，ᓀᓂᐱᑫ
　レインも心なしか緊張した顔つきだ。そうだろうな、彼女にしてみれば自分の世界の出来事だ。……やはりこの子を見捨てるわけにはいかないと紫苑は思うのだろうな。家族同然に暮らしているこの子を見捨てて一人で帰すわけにはいかないんだろうな。勿論、誰だって死にたくない。だけど逃げられない戦いもある。悪魔に勝つ可能性に賭けるしかない。
　確かに俺は部外者だな。レインと深い仲でもないし、アトラス人でもない。かといって俺は紫苑を失いたくない。道中、いかに紫苑を諦めさせるか考えたが、レインを見て無理だなと思った。レインを見捨てることは彼女には到底できそうにない。レインのほうが俺より大事ということではないだろう。恐らく俺とレインの立場が逆でも紫苑は俺のところへ来るはずだ。
　居間で食事を取る。相変わらず紫苑は料理が巧い。褒めたら喜んでいた。
「いつか一緒に住んだら……なんて考えることあります？」
「ん？……そうだなぁ。うん、あるよ。まぁ、早まらないほうがいいと思うけど」
「そしたら私の手料理食べ放題ですよ」
「そりゃいいな。五つ星レストランが家の中にあるみたいだ」
　そうしたら紫苑は凄く嬉しそうな顔をした。どんな状況でも恋する女は強いんだな。俺も俺で口が巧いもんだ。サラッと返すからこういう言葉は意味を持つ。内容と言い方が重要だ。俺はどっちも巧い。教師だけあって舌が何枚かついてるようだ。特に紫苑は評価が味気ないお父さんにコンプレックスを持っているから、やや装飾的な表現を好む傾向にある。
　レインがじーっと俺のことを見てくる。例の話が気になっているのだろう。俺は自分の意思を紫苑に伝えた。紫苑を失いたくないということ。そして紫苑を諦めさせる方法が思いつかないこと。したがって俺もアトラスに付いていくという結論。すると紫苑は心配そうな顔で自分に命をかける価値があるのかと聞いてきた。俺は真剣に考えて頷いた。
「蛍を失って腐ってた俺を救ってくれたのはお前だからな。いまはお前を失うことがこの世で一番怖い。大学行って他に男ができるんじゃないかとか心配してるくらいだ」
　そういうと紫苑は目を丸くした。
「え……そんな心配してたの！？そんな心配いらないよ！」
「今はそう思うだろうし、信用してる。でも人の気持ちは変わる。蛍で学んだ。大学に入って俺とすれ違ってばかりいれば寂しくなるだろ。寂しくなるということは分かるでしょ？」
「うん、それは寂しいよ……」
「でだな、寂しくなったときに男に優しくされると女としてはそっちが良くなるもんなんだよ。そうとは勿論限らないよ。ただ、不安の種だ。別に決め付けてるんじゃないよ。そういう不安もあるってだけの話。深く捉えないでくれな」

紫苑は頬を膨らませて茶碗を置く。
「じゃあ私、先生のお嫁さんになる」
「え？」どうやったらその発想に至るんだ。
「結婚しましょう。そうすれば不安を抱かなくてすむわ。結婚すれば私の浮気の確率はグンと下がるはずでしょ」
「いや、不安の種なだけだって」
「嘘。不安の種なんていってるけど、チューリップの球根くらいおっきいでしょ」
「球根って……お前、レアな単語使うなぁ」
「静は自分がどれだけ私に必要とされてるか知らないんだわ。あなたは私にとって一番必要で、一番一緒にいたい人なの。恋の病ってお母さんに言われたの。だけど、この気持ちを愛に変えてみせる」
「うーん、じゃあ結婚はそれからでもいいんじゃない？」
「不安を持たれたままなんてイヤなんです。それに先生はひとつ気付いてませんよ。その不安、私のものでもあるんです」
「そうなの？」意外そうな顔の俺。
「そうですよ。だって私みたいな貧乏女子高生より魅力的な女の人が一杯いるでしょ。私はいっつも厄介ごとに巻き込んでばかりだし」
「いや、巻き込んだのはレインだろ……」
「それに突然ヘンなこといいだしたりするし友達いないし性格悪いし」
「性格は良いよ。凄く好きだよ。優しくて可愛い」
「……そう？」
「ほんとほんと。『クラテュロス』のヘルモゲネスと逆で、紫苑は「ゆうこ」とかそういう名前で生まれてきても良かったくらいだ」
「あ、ごまかそうとしてるでしょ。勉強の話するんだもん、はぐらかすとき」
「そんなことないって」
「じゃあ他の女好きになったりしません？」
「えと……」何ともいえないが紫苑なら大丈夫だろう「うん、しない」
「約束ですよ。言質とりましたから」
「なんか怖い約束をした気がする。トイチで 100 万借りた気分だ」
「トイチ？」
「とにかくさ、紫苑がそういう不安を持ってたのは分かったよ。それ聞いてむしろ安心したかも。同じような不安持ってりゃ相殺できるもんな。これからはお互い気にしなくてすむだろ」
「あの……私は結婚の話、諦めてないですよ」
「いや、それはほんと勘弁して。蛍のことがあったから電撃婚はこりごりなんだよ」
「そっか……」紫苑は唇に手を当てる「じゃあ同棲じゃダメですか？」

「あのさ……」
「本気です。ちょっと考えてみてよ。別に結婚するわけじゃないでしょ。それに大学入ったら会う時間が月数回に激減しますよね。確かに先生の仰るとおり、これは恋愛関係の危機だと思うんです」
　急に改まった言い方だな。
「この危機を脱するにしても、月数回のデートは遠距離恋愛の如く辛いです。そこで思うんですけど、同棲すれば危機を脱せますよね。結婚しなくてもお互いの内面が暮らしてみてよく分かるわけだし」
「そのせいで却って恋愛を破綻させるかもよ。嫌なところが見えてきてさ」
「それは大丈夫だと思います。私は蛍さんと違って矯正するのが巧い人ですから。勿論私自身も矯正対象に含めて」
「ふぅむ」
「ね、悪い話じゃないでしょ。東大にしたって先生のとこにしたって練馬のほうが都心に近いわ。私もバイトして稼ぐから」
　なんだか話が思わぬほうに進んでるな。
「お父さんたちが許さないだろ。一人娘なのに」
「大学入ったら一人暮らしするかもしれないことは２年のときから言ってあります。女の子の一人暮らしより未来の旦那様に守られてたほうが安心じゃないですか？」
「未来の旦那になるかどうか分からん男に預けられるか？まだ付き合って半年も経ってないんだぞ。受験が終わったころにようやく出会って１年だ。同棲までに１年って……」
　あれ……？早いのか？別にそこまで非常識ではないかもしれない。昨今の電撃結婚の風潮を見るに、１年で同棲ならまだありえる話か。いやいや……でもいくらなんでも性急だ。
「そりゃ性急だよ、いずれにせよ。この話はまたにしよう。そもそもそんなことアトラスから生きて帰ってこないことには始まらない話だ」
　紫苑は顔色を落とす。
「ねぇ……アトラスから生きて帰ってこれると思います？」
「五体満足じゃないかもな」
「あ、それは大丈夫だと思います。小説に出てくるような便利な回復魔法はないけど、小怪我なら治せるって言ったじゃないですか。傷跡とかも残りませんよ、処置が早ければ。腕を切られてもその場で魔法手術すれば間に合いますし」
「つまり生か死かってわけか」
「そうなんです。で、どう思いますか？」
「戦わないと分からないよ。今回の戦闘は入試と違って模試なんてないしな。過去問もない。教師の俺には予測不可能だ。まぁ、負けた場合を神が想定してる以上、厳しいことは厳しいだろうな。でも、ハナから鉄砲玉にする気もないみたいだから、期待もしてるってことだ。あれだな、早慶クラスの奴に東大受けさせてみるようなもんだ。期待はしてるけ

ど落ちたときのことも考えて私立の計画も立てとくというような感じだな」
「なるほど……。lecʌ，ᑕЧa lɔ leʌ- V-ᔑᑕ ᒐelᑕeᔑ -Zδ」
ᘐʌɔʌ eʌ ᔑeᐯ....ʌɔʌ lɔ leʌ- ᒐcᐯ ᐯɔᒐ <ecʌ ᑕ-l a ᒐ-ᘓ
ᘐЧ-，ᐯeᔑ e h-cʌ ℓЧaᔑᔑɔa eᑕ cVʌ ʌɔℓ ᒐelᑕeᔑ，<-ᐧ leʌ- ᑕcᔑᘓ
ᘐᒐ-> ᑕЧa....ᘓ
ᘐh-c，lecʌ，ᑕЧa ᑕɔ l-ʌ ᔑ- Vɔᐯᑕ >-ʌɔ....ᔑcl> ᑕЧa ᔑeᑕ Ча ᘓ
ᘐ>>δᘓ
レインは顎に手を当てて首を傾げる。
ᘐʌɔʌ ᔑɔ l-ʌ ᒐe ᔑ- Vɔᐯᑕ <ceʌ ᑕa eᑕ ʌeᐧᑕᘓ
ᘐʌeᐧᑕδ ᑕЧa eʌ ᐯeʌᔑ ᑕa - ʌɔʌ -ᔑδᘓ
ᘐɘeʌᑕ-ʌᑕᘓ
紫苑は半ば驚いたような呆れたような意外な顔をした。
ᘐh-c，eᔑ ᑕЧa -ᔑ> ᑕa - ʌɔʌδ ᑕЧa lɔ leʌ- V-ℓe ᐧ->cl l- eЧɔδ ᔑɔʌ ᑕЧa ᑕe ᔑɔ,, elℓ e> ᔑeʌ ᒐ-ʌ ᔑcʌᘓ
ᘐᑕЧa eᑕ ᑕc-，lecʌ,, h-c ʌɔʌ -ᔑ>-ᑕ ᑕa >-ʌ....-....>-ʌ.... ᘐチラっと俺を見てくる。紫苑はレインの耳に手を当てると俺を見ながら何かこそこそ呟いた。
「紫苑、俺はこそこそされるの正直言って嫌いなんだ」
「あ……ごめんなさい。でもちょっと聞かれたくなくて」
「ちょっと手洗い借りるよ」と言って部屋を出て行く。
何だか今日の紫苑は変だ。何か焦ってる感じ。無理もないか。恐らく負け戦になるだろう戦いに自分が主戦力として参戦しなくてはならないのだから。俺の役目はむしろ彼女が魔道士として悪魔を調伏しやすい環境を作ってやることだろうな。さしずめ魔法使いの姫を守るナイトってところか。
居間に戻ろうとしたときレインの大きな声が聞こえた。なんだ、喧嘩でもしてるのか。少し廊下で待った。俺の処遇について、つまりアトラスに連れていくかどうか今更決めなおしているんじゃないだろうな。俺は……もう行くしかないと思ってる。どう戦うにせよ、行くだけは行こうと思う。
レインの声が小さくなった。もういいかな。部屋に戻るとレインがビクッとして俺を見てきた。思わず見返す。レインは猫のような丸い目をしてじっと見てくる。紫苑が睨むように目配せするとレインは困惑したように紫苑を見た。そしてまた俺を見て、紫苑を見る。こういうとき日本語喋れれば意思疎通ができるのにな。
「紫苑さ」俺は先に断っておくことにした「行った後どうなるかなんて分からないよな。第一１日で戻れるかどうかも怪しい。メルティアが時間を戻してくれるかも怪しい。もし向こうで１週間でもいてみろよ。俺は仕事コレだぜ」首を切ってみせる。
「そうですよね……」
「だけど、それでもいいと言ってるんだ。25 で再就職は新卒より楽じゃないが、自分で決

めたんだ、それくらいのリスクは負う。それで俺に金がなくなって紫苑が愛想尽かして他の男のとこにいくならそれはそれで仕方ない」
「え、それは仕方ありすぎですよ。そんなの綺麗事です。カッコつけすぎです。どう考えたって巻き込んだ私の責任でしょ。それに仕事のことは心配しなくても大丈夫ですよ」
「なんで？」
「あ……」紫苑はぽかんと口を開けて手で押さえる「何でもないです。先生なら有能だから再就職なんてすぐ見つかると思ったんです」
「ふぅん……まぁいいや。とにかく、綺麗事かもしれないけど、俺はそういうつもりだから。だから、俺は付いてくよ、アトラスに。紫苑を守るためにな。紫苑は魔道士だ。呪文を詠唱する間、守ってやるナイトが必要だろ」
「ナイト？」嬉しそうな顔をする紫苑。
「俺は紫苑の王子様なんだろ？じゃあ紫苑は俺のお姫様なんだから、少しは俺をアテにしなよ」
　紫苑は顔を赤らめてうんうん頷いた。
「先生……惚れ直しちゃった」
「やめろよ、今の台詞は模試だって。シェルテス目の前にした本番で今の台詞が言えたら、そのとき合格にしてくれ」
「うん」
　嬉しそうな顔が引かない紫苑。それをよそにレインはじーっと俺たちのことを見ている。
「ねぇ先生、部屋いこ」
「そうだな、作戦でも立てとくか」
　しかしレインは立たない。
「ほらレイン、ʔɔᔑ ∟ccᑫ，ʔɔᔑ ∟ccᑫ」
ᔕ-，ʌɔʌ ɔlᒐ ɔ ᔑe< h-ᑫ 0eʌ c> <cᓄᔕ
「今日は洗い物レインの当番なの。先行こ」
「分かった。悪いな、レイン」
　レインはじーっと俺の顔を見ていた。困惑したような表情……。俺が出ている間に何かあったのだろうか。紫苑が何か企んでいるように思えてきた。俺に秘密の作戦？なんだ、それは……。俺は階段を登りながら首を振った。

「座って」
　部屋に入ってベッドに腰掛けた。
「さて、作戦会議でもするか」
「生きる算段ですか？」
「そうそう」
　紫苑は俯く「あのね。先生、ほんとに生きて帰れると思ってます？」

「さっきも言ったけど分からないよ。でも死ぬ前提で作戦は立てないよ。死んだら終わりだからね」
「……私、きっと無理なんじゃないかって思うんです」
「珍しく弱気だな。アルバザードの救世主とは思えないぞ」
　肩を叩くが、紫苑は乗らない。
「アルバザードの救世主……フェンゼルを倒して為政者アルテナを助けた救国の少女」
「そう、履歴書に書けるくらい長い文言だよな」
　わざと明るく努める俺。
「あのね……フェンゼルってね、もの凄い強かったの。魔杖ヴァルデとエルフィを使って倒したくらいだから。でもそのフェンゼルもアルテナさんを恐れてた。そして彼らが統治するアルバザードは神々の言いなりに動いてる。神はもっと強大なの」
「そうだな。こないだ役所でアルデス王が戦ったときは将に一刀両断だったもんな」
「あれは弱ってるシェルテスでしたから。元の力を超えたシェルテスは神をも凌駕する。元々悪魔のほうが大抵強いですしね」
「……あぁ」
「苦戦したフェンゼルより強い神。その神より強い悪魔。それが敵なのよ……」苦々しい顔。不安で一杯という感じだ。
「そんなの……勝てるわけないじゃないですか。絶対殺されるんだわ」
「紫苑……絶対殺されるならいっそ行くの止めちまえよ。無駄死にならアトラスの結果は変わらないんだから」
「ううん、変わります。弱ったシェルテスを神が倒す算段なんだから」
「……そうだったな。でも俺らが犠牲になる必要があるのか？」
　紫苑はゆっくり顔を上げる「死ぬのは……私です、先生」
「え……？」
「ごめんなさい、隠そうと思ってたんだけど、やっぱり私、嘘は苦手です。あのね、皇女ルーキーテの話しましたっけ？」
「フェンゼルの魔法だっけ？皇女ってどういうこと？あれは人名だったの？」
「それじゃ少し昔話」紫苑は無理に微笑む「カコという時代がありました」
「うん、聞いた」
「人の戦争です。上弦の月ドゥルガ・下弦の月ヴィーネを象徴とする２派に別れて人類が戦いました。ドゥルガ勢の王子にイーファ王子がいました。ヴィーネ勢にはルーキーテ姫がいました。彼らは敵国の王の子でありながら恋に落ちました」
「うん、はた迷惑だが素敵な話だな」
「後に彼らはイーファ王と皇女ルーキーテになりました。彼らは２派の和平を掲げました」
「愛の力で平和、か」
「ところが彼らの異母兄弟である過激派のハーネとウロはそれに反対。イーファ王はハー

ネの粛清に成功しました。ところが皇女ルーキーテは……」
「ウロとやらの粛清に失敗した？」
　頷く紫苑「皇女は特殊な魔法を使いました。通常魔力であるラは炎などの何らかの形に変わるんですが、皇女は純粋に魔力を攻撃力に変える特殊な魔法を操りました。持てる限りの魔力を攻撃力に変えて放つ魔法――それが同名の魔法ルーキーテ。皇女はヴィーネの姫でした。ヴィーネはサール神の一族です。サールは地界に住んでいます。したがって魔法ルーキーテは地から発動します。地の底から沸き起こり、あらゆるものを破壊します」
「それをフェンゼルが使ったのか。相当の術者ということだな。流石はもとアルタレスか。しかしそのルーキーテもウロには勝てなかったのか」
「魔力をゼロまで使い切ってしまう点が欠点です。相手を仕留められなかったらその時点で自分の負けが決定します」
「じゃあ総力戦の奥の手にしか使えないな」
「はい。更に、恐らく魔力の未熟な者が無理に使えば、その時点で命を落すと思います」
　俺は眉を顰めた。
「おい、まさか」
「私……ルーキーテの術者です。玲音の書と合わせれば私も撃てるようになりました。勿論まだ実験してませんけど、実戦で撃つことはできると思います」
「それを使ったら紫苑はどうなるんだ？」
　不安な顔。心配でたまらない。思わず紫苑の肩を握って俺のほうに向けさせた。
「……命を落すと思います。でもその代わりシェルテスも倒れるか、少なくとも急激に弱まって神が封印できる程度にはなります。そうしたらレインもアルシェも、そして先生も死なずにすみます」
「そんな……」
「魔道士は私とレインです。でもフェンゼルに匹敵する魔力の持ち主は私だけです。多分、素質はハインさんよりもあると思います。私が打つしかないんです」
「ハインに撃たせろよ。殉職に異論はないはずだ」
「だめですよ。誰がアルデス王を召喚するんですか？」
「レインだ」
「レインの召喚が時間を要するのは分かっているでしょう？そのせいでカルテンまで追い詰められて、その結果、地球に来たくらいなんですよ？こないだの夜だって遅かったでしょう。その間にシェルテスに逃げられるか反撃されます。これは私しか手が空いていない役なんです」
「だけど、そんなことさせるために俺は紫苑を異世界にやるんじゃない。親御さんも同じだ」
「私、女じゃないですか」
「え？なんだいきなり」

「子供産めるじゃないですか」
「あぁ……だからなんだよ」
「でも、私が死んでアトラスが助かれば私が女として産める以上に人間をたくさん救うことができるんですよね」
「そんなの……紫苑はいつからボランティアになったんだ？自分の命を犠牲にしてまでボランティアか？そんな天使みたいな女だったっけ？俺の知ってる紫苑はもっと人間くさくて我利と倫理の狭間で悶ぎあってるような……人間という愚かな生き物だ。俺の女は天使じゃない。人間だ」
　紫苑は俺を見て微笑む。
「……尤も、顔は天使だけどな」
「えへ……。先生のいうこと分かります。私、怖いの。一生懸命自分が死ぬ大義を考えてる。死にたくないけど死にそうだから、本当は逃げたいんだけど逃げられないから、せめて死ぬなら楽に……しかも意義を十分感じられるような――つまり、犬死はせめて避けたいんです」
「というか、死ぬなよ」
「死にたくないですよ。だから私がルーキーテを撃たないで済むよう、しっかり守ってくださいね」
「あぁ」俺は本気で頷いた「それを聞いたら尚更だ。絶対にルーキーテは撃たさん」
「そうしてほしい……」紫苑は小刻みに震えている「これ武者震いっていうのかなぁ？」
「いや、恐怖だ」

「ねぇ、ぎゅっとして。怖くて身体がバラバラになりそうよ」
　俺は紫苑を強く抱きしめた。仄かな甘い良い匂い。柔らかな身体。子猫のように震える紫苑を守りたかった。
「キスしてください……」
　目を瞑って首をあげる。俺は唇を重ねる。まだ少し震えているが、暖かい。
　数 cm もない距離で目をあける紫苑。くりっとした目が俺を見据える。
「先生……」
　意味ありげな震えた声。この震えはシェルテスによるものではないなとすぐに気付いた。思わず目をそむけそうになる。黙っていると紫苑はとろんとした目でもう一度「先生」という。
「ん？」
「……」小さく何度か頷く「ねぇ」と囁く。俺は下を向いた。
「だめ……私を見てください」
「紫苑……あのさ」
「今度ははぐらかしちゃ嫌です」

俺は何も返せなくなった。「いや……」と小さく呟くので精一杯だ。
紫苑はじっと俺の目を見つめてきた。目と目が合う。微かに開いた紫苑の唇から暖かい息が断続的に流れてきて俺の鼻をくすぐる。
「先生……お願い。……抱いて」
俺は緊張で喉を鳴らした。紫苑は意識が朦朧な感じで、今にも赤くなって倒れそうだ。
「いや……でもさ」
「すきなの、先生が。先生も私のことすき？」
「あぁ、好きだよ。だけど紫苑は俺の生徒だし」
ここまでしておいて今更そんな言い訳が通じるわけもないか。
「生徒？それが嫌なら制服着替えます。それでもダメならもう明日から塾行きません。今日で止めます」
「いや、そういう問題じゃなくてさ」俺は肩を押して優しく引き離した。
「そういう問題です。こないだとは違うの、私。言うの恥ずかしいけど、こないだはそういうことへの興味のほうが強くって、がつがつしてました。知りたい盛りのただの子供でした。でもいまは違うの。次の満月、来月の５日にアトラスに行くわ。もしかしたらすぐにシェルテスとの戦闘かもしれない。そうしたら私は５日に死んでしまうかもしれない。少なくとも私が一番この世から消えてしまいそうな役目なの」
「あぁ……」小さく呟く「だから俺が守るって。それからでも遅くないだろ」ハッキリ告げる。
「いやです……死ぬほうが確率高いって思ってます。もし死んでしまったら……心残りであの世に行けません」
「そしたら幽霊になってでも良いから戻ってきてくれ。幽霊相手でも紫苑なら結婚するよ」
「はぐらかしちゃいやです。先生、そんなに私、魅力ないですか？」
「そんなこと……」
「私、子供で、何も知らなくて……魅力はないと思います。でも先生、私のこと可愛いって言ってくれたでしょ」
「そりゃそうだけど……」
抱きついてくる。
「お願い。思い出がほしいの。私、強くなれる。もし死んでしまってもまだ諦めがつく」
「……」鼻からすーっと息を吐いた。何なんだ、俺は。紫苑にここまで言わせて何を迷う。付き合っている以上、自然とセックスするだろうことは分かっていた。「いつか」が早くなっただけだ。こんなに拒絶していいものなのか。こないだのときは紫苑が盛っていただけだったからたしなめた。だが、今回は真摯な気持ちだ。この気持ちは……何ていうか……綺麗だと思う。この気持ちは受け入れるべきものだ。
なのになぜ迷う。生徒だからか？制服を着てる子供だから？俺も詰襟を着ていれば抵抗なかっただろうか。それは確かにある。よく覚えてないが、17 の俺なら女の身体がどんな

ものか知りたくて、すっかり興奮していたかもしれない。
　なぜ俺は避けようとしているんだ。傷つけてしまうかもしれないのが怖い？それはいいことだ。紫苑を大事に思っている証拠だ。
　或いはやはり蛍か？最後に抱いた蛍の感触を忘れたくないため？喫茶店や本屋やテーマパークを塗り替えてもセックスだけは塗り替えたくないから？どうだろう。そんなにセンチメンタルな奴じゃない。じゃあただの性欲減退か。そうでもないだろう、若いからな。
　もしくは単に年下に性欲がわかない？いや、前にせっけんの匂いで抱きつきたくなったことがあった。身体は反応しているはずだ。問題は心なんだ。なぜだろう……。
　お父さんたちに合わせる顔がないということもあるな。娘が教師と、というのは避けたいはずだ。親御さんは節度ある付き合いを望んでいるはずだ。そうだ、それがある。
「でもさ、お父さん達はこんなこと望んでないよ」
「許可は取りました」
「……何が？」
「先生とセックスしてもいいかって」
「――は？」思わず目を広げる。何を言ってるんだ、この子は「え、それはどういう……」
「そこまでハッキリは聞きませんでしたけど、２ヶ月くらい前に親に相談したんです。私の身体は親からもらったものです。だから恥ずかしいけど、婚前交渉をしてもいいか聞くのが筋だと思ったんです」
「それは……何百万人に一人の娘だろうな」
　蛍が似たようなことを母親にしていたのを聞いてかなり面食らったが、父親にまでいうとは恐れ入った。
「で、お父さんたちなんて？」
「お父さんは概ね良いよって。お母さんは後先考えて自分で責任取りなさいって」
「そうか……」予想外の展開に何も返せなくなる。
「あ、というかほら、後先で思い出したけど、ゴム持ってないし」
「私、持ってます。先生といつか使うと思ってたから」
「あ……そう」用意の良いことだ。
「ねぇ。何をそんなにためらってるんですか？」
「少し考えていい？俺も良く分からないんだ」
　紫苑は頷く。俺は目を瞑る。１分ほどしただろうか。俺は頷いて目を開けた。
「多分な、蛍のことだと思う。ごめんな、こんなときにあいつの名前出して」
「ううん。やっぱり裏切られたショックのせいで女性不信なんですか？」
「それもあるけど、違うな。蛍のことは真剣に愛してた、過去に。処女だったし、初めては優しくした。とても喜んでたよ。その後も何度も抱いた。別れるまでね。でも最後は別れてしまった。俺も傷ついたが蛍も傷ついた。またそんな関係を作ってしまって……今度は紫苑を傷つけるんじゃないかって……それが怖いんだ」

「そうなんだ……私のこと考えてくれてるのね」
「凄く大事な人だから」
「嬉しい……。私、嫌なものは嫌って言います。先生の悪いところも自分の悪いところも直していくわ。傷付いて人間強くなるのよ。避けてたら強くなれない。先生、ひとつ嘘ついたね。蛍さんのこと……本当は私を抱くことで蛍さんを忘れてしまうのが嫌なんでしょう？」
「え……」図星だった。
「私、先生としかキスしたことないの。でも先生は色んな女の子とキスしたよね」
「まぁ……」
「きっと唇ってそれぞれ違うでしょ？私のは蛍さんと比べてどう？」
　女の比較を女にされたのは初めてだ。この子はつくづく変わっている。悪く言えば対抗意識が強すぎて倫理感や常識を覆している。
「形も大きさも違うよ。紫苑のほうが少し薄くて小さい」
「慣れがあるから蛍さんのほうが良くて、私のはヘンだって思いませんでした？」
「それは……違和感ということについていえば、確かに始めはそうだった」
「ですよね。それで先生は気付いたんです。私とキスを重ねることでキスのプロトタイプが……」キスをしてくる「……これだってことに」
「そうかもしれない」
「そして不安になったんです。先生の唇から蛍さんの記憶が消えた。先生にとっては半分喜ばしくて半分寂しいことです」
　心を見透かされたような感じだ。
「久々にサトラレの錯覚を覚えたよ」
「先生は思ったの。紫苑を抱いたら、蛍が消えてしまうって。その変化を先生は怖がっているの。蛍さんに消えてほしいと思いながらも忘れたくないと思う矛盾した自分がいて、その環境を変えるのが怖いの」
「そう……だな」
　もう偽っても仕方がない。
「偽らないで……」
　しなだれかかる紫苑の頭を撫でる。
「分かった」
「じゃあもう一度言いますね。……抱いてください、先生」

　俺は答える代わりにキスをして、髪を撫でながら紫苑をゆっくりベッドに倒していった。何度かキスをしてから顔を離す。
「あのさ……レインはいつまで皿洗ってるんだ」
　紫苑は気まずそうに目を横にそらす「来ませんよ……」

「え？」
「今日抱いてもらおうって思ったのはついさっきのことなんです。レインと話したの、食事のとき。死ぬ前に何したいって。私、そのとき思ったの。遣り残したことの中で一番したいのは先生と一緒になることだって。それで今日抱いてほしいって思ったの。だって今度の誕生日はみんないるし、時間ないでしょ。それに 18 歳よりは 17 歳のほうが早く先生と一緒になれたことになるから」
「17……頼むから年齢はいわないでくれ。もう教師としてやってく自信が無くなってきた」
「ふふ、じゃあ止めちゃいます？」
「え？」
「ううん。でね、誕生日が終わったら５日まで会えないでしょ。５日はアトラスでシェルテス戦になるかもしれないし。だから、もう今日しかないのよ」
「そうか」
「だから急遽先生が居ない間にレインに相談したの。レイン、驚いてたわ」
　それで大きな声がしたのか。で、俺はじっと見られてたわけか。
「レインは先生のことが好きだから、私が処女をあげる相手にふさわしいって思ってくれました。始めは驚いてたし、先生が断るんじゃないかって言われました。だけど最後かもしれないからって言ったら応援してくれました」
「じゃあいま微妙な気まずさの中で下にいるわけ？」
「そう……ですね。でもレインのことは忘れましょうよ。思い出すと私も気まずいもの。この家に２人きりしかいないって考えましょ」
「あぁ。なんだかレインに申し訳ないな」
「メルセルにプレゼント奮発してあげてください。それで機嫌取れば大丈夫ですよ」と笑う。
「そうだな」
「あ、私の 30 日のプレゼントってもう買ってくれたりしてます？」
「いや、今日仕事終わって買いに行こうとしてた矢先に電話がきてさ。何がほしい？」
「んーん」紫苑は首を振る「まだならいいんです。初めてのプレゼントは今もらいますから」
「え……つまり……これ？処女っていうのは男がもらうものだと思ってたけど」
「私には受け取ってもらうことがプレゼントです。それにほら……本当に私何も知らないし。保険の授業で習った程度しか知らないの」
「それはレアだな」……蛍級に。
「あの……痛いんですよね？」
「人によるけど。血の出ない子もいるよ。できるだけ優しくするよ。でも、多分始めは痛いと思うよ、たとえ血がでなくても」
「大丈夫です。嬉しさでカバーします」

「まったく……痛いプレゼントなんて初めてじゃないか？」
「ふふ……。あ、ちょっと待ってください。お風呂入ってきますから」
　俺は紫苑の手首を摑まえた。
「いま出てったら雰囲気戻らないよ」
「え……でも、お風呂入ってないですよ。昨日入ったきり。だって今日するなんて思ってなかったから」
「大丈夫。というか構わないよ。紫苑の匂いが好きだ」
「えぇー、恥ずかしいよぉ」手で顔を覆う「だって……おトイレも……行ったのよ？ありえないよ？」
「気にしないの。それも大事なんだって。恥ずかしいっていうのは分かる。だけど、俺を信じてくれてるのなら、今からすることは全て素直に受け入れてくれないか。俺も自分が不快だと思うようなことはしない。お風呂入ってなくて気にするのは自分が匂いを感じるんじゃないくてさ、俺に悪く思われたくないからだろ？」
「うん」
「でも俺は紫苑の正直な匂いが好きなんだよ。相手が不快に思わないんならもう問題ないんじゃないかな？」
「あぁ……なるほど」
「セックスって動物っぽい行為だし、ちょうどいいんじゃないかな。あと、恥ずかしがってる顔も可愛いよ」
　紫苑は赤くなった。
　あー、もうこうなったらやるしかないな。俺も男だ。覚悟を決めよう。好きな女相手だ。できるだけ良い思い出にしてやりたい。
　紫苑は俺の巡回経路をどう思っているのだろう。その作法に蛍の影を感じてるのだろうか。恐らくそんな余裕はないだろうな。髪を撫でた。手を動かしながら唇を頬や首や耳に這わせる。耳は敏感なようで、ぴくっとしていた。指を耳や首、腕、手に滑らせる。くすぐったくない程度に、痛くない程度に。単に滑らせるのではなく、小石が水面をはねるように断続的に。そしてゆっくり。
　手を重ねる。いつもは手の平同士だ。でも違う。甲は敏感だ。４本の指で甲を撫ぜる。紫苑の指の間に指をそれぞれ這わせていく。指の又は特に敏感だ。指に唇を這わせ、舌先で舐める。指の又にも進めていく。耳元で言葉を囁いて、鼻を当てて唇で食む。お腹を撫でて、少しずつ制服を脱がせていく。紫苑は子猫のようにぷるぷるしている。脚を撫でて足のほうへ這わせていく。内股が敏感だと分かった。足も手と同じようにする。舐めたら少し驚いたような顔をしていた。
　そんなソフトな前戯で１時間くらい経った。紫苑はかなり息が荒くなっていて、頬が赤くなっていた。とりあえず「くすぐったい」とか言って笑ったりするタイプの空気読まない女でなくて助かった。マグロ以上に苦手だ。12 月で寒い。こういうときは布団をかぶっ

ても寒いし、処女を真っ裸にするのは気が引ける。最小限で良い。

徐々に胸に進み、愛撫したりする。こないだ触らなかった胸に触ることができた。心臓が凄く鼓動していた。胸は反応が乏しい。処女だからだろう。演技とかしない子か。良い子だな。素直な反応。やはりセックスは人間性が出る。胸をそこそこにして、キスしながらスカートの上から下着を撫でる。太股が敏感と分かったので、わざとスカートの裾のほうからゆっくり手を入れてまさぐるように太股を撫でていった。数十分ぶりの感覚は新鮮なので紫苑はまた反応しだした。このとろんとした、それでいて時折つぶらな目を開く様が愛らしい。途切れ途切れな荒い息も可愛らしくてキスを誘う。

キスしながら下着を触る。まだ全然準備はできていないかと思ったが、そうでもなかった。人差し指の腹に感じる潤んだ絹の感触が物語っていた。まぁ、大方ふつうに下り物の混ざったものだとは思うが。人差し指の腹で下着の上から上下にゆっくり動かす。何度も往復する。痛くない程度に。

言葉というのは何より重要だ。耳元で愛を囁いたり、目を瞑らせて軽度に卑猥な言葉を混ぜたりする。といっても俺は後者は不潔なイメージがあって苦手で、どうしても前者が多くなってしまうのだが。紫苑は下着の上の指に随分反応していた。いきなりこちらに進むと嫌がったはずだ。太股や耳や手が随分有効だったようだ。心理的抵抗を外すのに役立ってくれた。

もう少し指を早くしてみる。すると反応が増したので、一人でも普段する子なのだなと思った。そうでなければこの速さだとそろそろこの心地よい掻痒感が炎症感に変わるはずだからだ。少し湿度が増してきたので、下着の上から人差し指の第二関節を軽くあてがってみると、関節が少し窪みに沈んでいった。先ほどより準備が整ってきたな。

紫苑の顔から離れて下着に顔を近づける。反射的に紫苑は逃げようとするが、先ほどと違って恥ずかしいという抵抗はしなかった。耳元で囁いた言葉が有効だったようだ。処女特有の――というか要するに性器の洗浄に慣れていない少女の――匂いがした。処女は誰でも同じだが、紫苑は健康優良児だけあって、風呂に入っていないことを差し引いて考えれば極めて耐えやすいほうだ。

鼻先で下着の上からくすぐる。耳元トークで初めて知ったが、そもそも繋がるだけの行為だと思っていたらしい。つまり動くということを知らなかったそうだ。そんなの蛍くらいかと思ってた。古事記で神が鶺鴒の交尾を参考にしたシーンがあるそうだが、ベッドでそのことを引用して、行為中に動くということを納得してた蛍。何となく懐かしいな。

前戯についても何も知らなかったようだ。繋がるだけでさえ風呂に入っていないのを気にしていた紫苑だが、前戯の内容を聞いたときは半ば卒倒しそうだった。だけど耳元トークと手指のおかげで「恥ずかしいからヤダ」とかいった寒い言葉を聞かずに済んだ。

こちらのサービス精神を殺ぐ女というのは苦手だ。紫苑はその点、非常に素直で良い。こういう素直な女のほうがセックスは楽しめる。自分の好きなようにカスタマイズしようと注文つける女のほうが男にサービスされずに終わる。店で店員に偉そうな態度であれこ

れ命令するよりも、愛想良く丁寧に接したほうが店員の親切心を出して、結果的にはより良いサービスを受けることになるのと同じ原理だ。

下着を脱がすと抵抗があるだろうから、細めたり、ずらしたりして徐々に羞恥心のレベルを下げていった。ここまでで更に１時間だ。もう時間は 12 時近い。親の帰宅は２時ごろに遅れるとのことだから、大丈夫だろう。それに、今日は別に最後までしなくても良いのだ。紫苑が満足できる範囲で良い。模擬練習みたいな感じで気持ちよく終われればそれで良い。俺もそのほうが楽で助かる。

羞恥心のレベルが下がってきたので、一旦スカートで覆ってから下着を下ろす。全ては下ろさず、膝上で止める。スカートを少しどけて、顔を近づけると紫苑は手を出してきて見られないようにした。その指を少しずつどかせていく。抵抗はしない。この左手は女の恥じらいとプライドを表している。

あれ……？ふと気付いたんだが、なぜかこういうとき、女って左手を使って隠さないか？気のせいかな……。胸と股を隠す場合は右手を使う気がする。寝ながら股だけ隠すときは……左手な気がする。どうなんだろう。

なんだろ、俺。頭、やけに冷静だな。こいつはきっといまそれどこじゃないんだろうな。

紫苑はうわ言のように言い訳を言う。見ないでとか汚いわとか色々。どれも陳腐な台詞で、少し意外だった。紫苑のような人でも同じような振る舞いをするものなのだな。指をどけてやはり鼻でくすぐって、指で撫でる。舌を這わせると恥ずかしさが最高潮に達したのか、「せんせっ……」と小さく叫ぶ。だが、手を俺の近くに持ってくるばかりで俺をどけようなどという抵抗はしない。抵抗しそうな態度というのが彼女の理性を保つパフォーマンスなのだ。

しかしそのパフォーマンスもしばらく舌を這わせていると意味をなさなくなる。そのうち俺の後頭部を持って、髪を撫でてくる。なぜ女は男の背中や後頭部を包んだり撫でたりするのだろう。紫苑のように何も知らない娘でさえまるで示し合わせたかのように同じことをする。

ただひとつ、舌を胎内に進めようとしたらそれは止めてといわれた。そう、本当に嫌なことは女はこのように言うのだ。「パフォーマンスの嫌」と「本音の嫌」の違いは宝石の目利きくらい難しいものだが、これをしくじると大変な被害を被るので、必修科目だ。

嫌な理由は紫苑から語ってきた。指はおろか、生理用品さえ入れたことがないそうだ。処女膜が傷つくのを恐れたという。そして何より一番初めに受け入れる相手が運命の人であってほしいと思ったからだそうだ。その相手の舌でさえ拒む紫苑は相当に純粋だ。

しかし、実際問題処女を相手取ってそういわれてしまうと困る。徐々に徐々に広げていくことが何より重要だ。でないとかなり痛い。そう紫苑に告げたのだが、頑として譲れないそうだ。痛くても良いからしてほしいという。俺は処女が痛がる姿が悲痛で苦手だ。あのときみたいな思いはごめんだ。それで入口を猫がミルクを舐めるようにして、少しずつ慣らしていった。処女は敏感なのであまりやると炎症性の痛みを感じる。紫苑の反応の声

が少し変わったところで限界だと思った。

ゴムを持っているといっていたので渡すようにいったら、紫苑は拒絶してきた。理由は先ほどと同じだそうだ。初めに受け入れるものが化学物質なのは嫌なのだそうだ。それは半分好都合ではある。ゴムは乾きやすく擦れやすい。慣れている間柄でも途中で乾くと痛くなってくる。サガミオリジナルのようなウレタンのほうが擦れにくいが、やはり人肌が一番だ。なのでより痛くないのを目指すなら付けないのが一番だ。水分は紫苑が供給してくれている。量は十分だ。問題は経路が狭いということだ。

あてがっただけでも紫苑は顔をこわばらせた。いうまでもなく、手を支えとして使わないかぎり位置がずれてしまい入ることは適わない。左手で自分を支えながら、あてがう。窪んだところに沈んでいくのが分かる。ゴムがなくて助かった。ゴムだと麻酔をかけられたようなものだからきっと自分でもよく場所が分からなくなる。くぼみにあてがうと、５分ほどかけて徐々にくぼみに吸い込まれていくのが分かった。ぬかるんだ地面に足がはまり、徐々に足が沈んでいく感覚。あれとよく似ている。このまま沈めていくしかない。ゆっくりだ。

そして実に根性のいることに、俺は１時間近くもこの徐々に沈める作業を続けたのだ。紫苑は途中で呻いたり顔を顰めたりしたものの、ゆっくり時間をかけることによって舌や指を使うことなく穏便に伸縮性の良い器官をリサイズすることができた。最適化に１時間かかったが、男として万人に賞賛していただきたいことは、１時間もの間思考と精神力だけで常に自分自身を最大化していたということだ。どの処女を相手取ったときも全く同じ流れなのだが、これほど面倒くさく大変なことはない。実際問題、これを避けたくて今まで手を出さなかったというのもあるくらいだ。しかもこれだけかけても痛がる子は痛がるわけで、「労多くして――」とは将にこのことだ。

処女の中というのは空洞のような筒だ。標本調査としては 10 人弱だから個人的な見解にすぎないが、どの処女もこの点では変わらない。一重に筋肉の動かし方に慣れていないことに起因する。手前から奥までまるで一辺倒の筒のような感触だ。たとえ道自体が狭くとも、男には挿入感があまり感じられない。洞窟の中に「あれ、入ったのかな」というような感覚だ。

今のような方法で徐々に進めていった場合は特にそうだ。否、むしろこのような場合だからこその空洞化だ。無理に進入した場合、相手は痛みで緊張し、その緊張が筋肉の収縮を生むため、感触は非処女と大差ない。

下品な言い方で嫌いだが、処女は締まるというのは男のエゴだ。無理に入れたときに痛さでヒクついた痙攣のことを締まると誤認しているだけで、思いやりのなさの表明でしかない。なのに多くの男はその恥に気付いていない。

非処女は筋肉が出来上がっている上に過去の経験でどう動くべきかを知っているため、逆に言えばどう緩やかに進入してもこの空洞化は味わえない。この空洞は処女ならではのものだ。

勿論、言うまでもなく快楽においてはこの感覚は男に一切のメリットを与えない。ただひたすらに男の快楽を逓減することで女の痛みも逓減してあげるというバランス行為に他ならない。

進入が終わると紫苑に入ったよと優しく告げた。これで処女ではなくなったという意味、処女はちゃんともらったという意味の言葉だ。紫苑は一言、嬉しいと返した。そして痛くないよといってきた。

そこで提案したのだが、ここで終えないかということ。処女でなくなったので紫苑の目的は果たされた。しかし紫苑は最後まできちんとするように言ってきた。そして人間のセックスという本来の行為を全うしてほしいと言ってきた。たとえそれによってセックス本来の目的が成立するのでも構わないと言った。

俺は拒まなかった。紫苑となら暮らしてもいい。できるならできてもいい。俺たちは数日後に悪魔との戦いに赴くのだ。命がなくなるかもしれない戦いに行くのだ。命を失う恐怖に怯えた俺と紫苑は一時でも命を増やすことに魅力を感じた。もし生きて帰ると決まっているならば絶対にこんなことはしない。だが、紫苑は寂しそうに勝利を悲観した。自分という存在が殺されてしまう前に、命の営みをしておきたいと紫苑は切に願った。俺もきっと蛍がいなくて子供もできなければ紫苑のように思ったはずだから、その気持ちはよく分かる。高確率な死を目の前にして、命が２つ崖に置かれている状態で、俺たちは命の営みに魅了された。ある意味、人間の本能だろうな。

できるだけ紫苑を傷つけないようにゆっくりと動いていき、徐々に馴らす。命の道でもあるだけに本来は非常に伸縮に富む頑丈な器官だ。徐々に馴らすことによって紫苑の身体と心は俺を優しく受け入れてくれた。

最後はお互いの名前を呼び合った。キスをして名前を呼び合った。

セックスはどう始まってどう終わるか知らない処女でも最後の瞬間は悟れるようだ。でもどの瞬間を以って終わりとするかは分からないようで、俺が動きを止めて少ししてからあぁ終わったんだな察したようだ。こういうのは蛍でも誰でもやはり同じことだったが。

結局初めての紫苑とそうでない俺には無視できない差がある。俺はどうしても頭の中で比較を行ってしまう。蛍が今までで最も優しく相手した女だったが、俺の年が上回ったこともあり、紫苑が一番になった。紫苑の身体から離れるときもゆっくりにした。俺が去ると同時に急に窪みは小さくなって、そこに窪みがあったことさえ分からなくなる。紫苑は脱力した顔で天井を見ていた。口を開け、荒く呼吸をしている。目は潤んでいる。顔は紅潮し、手の甲を額に当てている。

横に付いてキスをしたり耳元で囁いたりする。また前戯を繰り返した。紫苑は始めは反応しなかったが、少しするとまた反応しはじめた。だがこれはウォームアップではなくクールダウンだ。少しやり方を変えて、快楽ではなく愛楽を感じるような愛撫をした。紫苑はすやすやとした安らかな呼吸を始めた。目がとろんとして幸せそうな顔をしている。

気付いたら２時になっていた。まだ両親は帰ってこない。本当に遅いようだ。チラと覗

いてみたが、紫苑の胎内に残したものは出てきていなかった。本当に何も知らない処女は力を入れられないので自分で開閉して流し出すようなことができない。立ち上がって紫苑の塾及び高校の鞄から下り物シートを出して下着の股当ての部分においてやる。そうでないと立ち上がったときに下着が汚れてしまう。まぁいずれにせよトイレなどで立ち座りをしたり用を足せばそのとき急激に流れ出てくるだろうが。

紫苑の興奮が解けてからは専ら撫でながらの会話だった。優しくて痛くなくて、比べる対象は無いけど、世界で最も幸せな処女喪失の類だと思うと言ってきた。たとえ今後２人の間に何があっても今日のことは悪い思い出には思えないといってきた。紫苑は血が出たかどうかを気にしていた。本人としては処女の証として出てほしかったのもあるそうだが、やはり破れるのは怖いのでこれが最高だったといってきた。

紫苑が上体を起こして自分の股座を見ると、姿勢を変えたため、急にどろっと出てきた。紫苑は「わ、すごい」といって子供のようにはしゃいでいた。無理もない。本当に 17 歳の女子高生なのだから。初めて見る精子が自分の胎内から出てきたというのは昨今では珍しい経験だろう。自分の液と混ざってどれがどれだか分からないという様子だったが、手に取って嗅いだり舌先を付けて味見をしていた。一々蛍を思い出すわけだが、そんなことは顔にも出さないでおいた。

確かに蛍の感触はたった１回で上書きされてしまった。だけど記憶が全て消えることはないし、蛍のことを思い出さなくなることもないだろう。それが今回のことで俺の得た唯一の経験だった。

俺は初めて紫苑にきちんと愛してると言った。紫苑も愛してると言った。愛ってなんだろうとふと思った。夢を見ているいまの紫苑は思わないだろうが、元々は冷静な子だから、少しすれば思うようになるだろう。

はだけた制服を直し、少しずつ現実へ意識を戻してやる。

「もうこんな時間だね」

２時すぎだ。俺は実はさっきから駐車場の車が気になっていた。お父さんたちが帰ってきたときに車を停める場所が無かったら困るだろう。だが運が良いのか、まだ帰ってこない。大変だな、仕事。

「ほんとだ……こんな時間まで起きてたの、シェルテスのとき以来です。その前は大晦日」

「俺はわりと普段このくらいに寝るな。教師は遅いから」

「身体壊しませんか？」

抱いた後だというのに紫苑は口調を変えない。だが、表情は幾分柔らかくなった。自分により近しいものに接するような感じだ。

「リズムは整えてるからね。さ、お父さんたち帰ってくる前に風呂入っちゃいな」

「え……このままがいいです、今日は。感触を洗い落としたくない」

「そうか……」何となく不快な気がした。不潔だろうが好きなら歓迎し、清潔だろうが嫌

いなら拒むというその姿勢に。でもそんなこと言っても不安にさせるだけだ。
「運命の人……決まりかな、これで」
「ふふ、もうずっとそうでしたよ」
　何か言おうと思ったが全てが余計なことのように感じられて、黙っていた。
「レインには悪いことしたな。随分待たせてしまった」
「あ……」紫苑は口を押さえる「私、忘れてました」
「ひどいな」本当にそう思った。女のこういうところが嫌いだ。
「俺、呼んでくるよ。紫苑は顔見られるのが気まずいだろ」
「ん……一緒に行く。気まずいっていってもこのあと一緒に寝るんだし」
　いま抱いたこのベッドで寝ることにレインは抵抗ないのだろうか。知らないならともかく、事情を知っているのだからかなり不快なのではないか。しかし居候という立場では文句を言えないのだろうな。
　衣服を正して下に降りる。俺が先に居間に入るとレインはソファで寝ていた。
「あ……寝ちゃってるね。このままにしとこうか。毛布ある？」
「持ってきます」
　近寄ってみる。可愛い寝顔だ。すやすや寝ている。
「妹ができたみたいだな……」
　紫苑が戻ってくる。
「ここでレインが寝てたらお父さんたち不思議に思うかもしれませんね」
「力尽きて２階まで辿り着けなったことにしよう」と笑う。
　毛布をかける。まぁ親も深くは勘ぐらないだろう。
　廊下に出る。
「俺、もう帰らないと。本当は今日は一緒にいたいんだけど、お父さんたち帰ってくるしな」
「私も一緒にいたい……。ねぇ、このまま先生の家まで連れてってくれませんか。それで向こうで一緒に寝ませんか？お母さんには手紙残しとくから。メールだと時刻がバレちゃって色々想像されそうだし。夕飯後にすぐ出たことにすれば」
「いや、俺の部屋はまずいよ」
「ですよね……。ご両親がいらっしゃるし」
「それは大丈夫だけど」紫苑の額をつんと指で押す「もう一度抱きたくなるから、かな」
「……いいですよ？」
　俺は「うーん」と目をそらす。まずかったな、甘やかしすぎた。蛍と同じ性向に走らなければいいが。
「まぁ、とりあえずもう遅いし寝よう。また 30 日の誕生日に来るから」
「はい。あの……今日のことはね、私、忘れません」
「うん。じゃあまたね」と言って俺は家を出た。

お父さんたちがまだで助かった。駐車場を占有してたら感じ悪いもんな。しかもこんな非常識な時間に。

しかし疲れた……。車を出して信号で止まる。はぁと大きくため息をつく。

「疲れた……」

処女の相手は疲れる。向こうを苦しめてもいいなら別にこちらは疲れることはないが、そうでないと大変だ。こんな思いをしたのは蛍以来……究極まで優しくしたのは３人目。他は俺の経験とか相手への思い入れの深さが足りなかったりした。更に言えば、あまり好きでない子は処女でも大切にしないので時間もかけたくないし気も使いたくない。紫苑は蛍と同じように大切にしたいと思った。

とりあえずさっきの紫苑とのことは良い思い出になったと思う。その分、労力はもの凄く必要だったが。一番嬉しかったのは愛情を感じたことだ。女に歓迎されていないセックスなどつまらない。ガキのすることだ。そして……恐らく大人にも逆にできないことだ。多分、打算のないごく若い小僧のうちにだけ感じることができる経験だ。殆どの人間が感じることのない幸せで、この幸せというのは過去を振り返るたびやはり一番強烈に思い起こされるものだ。未来からみた思い出作りのために随分と労力を割いたもんだ。

それにしてもこちらの手ほどき通りに上手く従ってくれて助かった。紫苑の反応は素直かつそれなりに従順で良い。ただ、今回のことで甘やかしすぎたのも確かだ。これで増長して蛍のようになると困る。というか……やつれる。

2006 / 11 / 30

今日、私は 18 歳になった。普通の木曜日。朝起きて学校に行く。毎年どおり誰にも祝ってもらえない。友達いないし誰も私の誕生日なんか知らないもんね。

思えば一年前の今日だ。私がアトラスにいってレインとであったのは。地球の暦でいうとあれからちょうど一年。メルティアに時間を戻してもらったことは世界が繋がったいま、ややこしいので計算しないことにしている。今日で長めの一年が経ったという風に認識することにした。でないと計算が厄介だ。

去年の今日って何をしていたかしら。あぁ、そういえば随分鬱だった気がするな。受験について考えることはなかったけど、憂鬱だった。そうそう、誕生日が憂鬱だった。異世界に行く小説の主人公は皆若いから、毎年毎年自分は選ばれなかったんじゃないかって不安に思ってた。上福岡で紫苑の書を買って帰った。あ、お母さんは私の誕生日を忘れてたんだよね、あの夕方。私がアトラスから戻って夜になって思い出したみたい。３日前もそうだったけど、この時期はお母さんたちは忙しいみたいだ。

親に対する態度も変わったな。レインを見て成長した。前より精神的に反抗しなくなった。お父さんとも１年で少しは向き合えたと思う。

そして何より彼氏ができた。これは去年の私は念頭に無かったことだ。男の子に興味な

んて殆どなかったし、ましてクラスの子には少しも感じてなかった。それは今も同じだけど。去年は異世界のことばかり考えていた。男の子なんて見る余裕なかった。異世界から帰って目的を失って、少し鬱になった。大学受験がどうでもよく感じたのも燃え尽き症候群のせいだ。そんな私を見て勉強に身が入ってないと思ったのか、お母さんが私を塾に入れた。

塾は初めての経験だった。見たこともないところだから戸惑った。学校と違って掃除もしないしホームルームもない。勉強だけの不思議な時間と場所だった。入塾のときはお父さんと行ったんだっけ。話しを聞いて、お父さんがここで良いかって聞いて、私はうんって頷いた。だって他にいくつも周るのが面倒だったから。私は大宮とか久喜とかから適度に離れてればどこでも良かったから。でも今それを考えると冷や汗が出る。もしもあのとき私が余計なチエ付けて塾選びをしていて別のところに行ったりしていたら先生とは会わなかったのだ。お母さんが塾を薦めなかったら？私が近くの塾で済ませたら？そもそも塾を断ったら？考えただけでも恐ろしい。そうしたら私は先生に会ってなかったのだ。

先生がいなかったら７月に来たレインを助けられただろうか。シェルテスとその眷属に一人で勝てただろうか。先生はアトラスでのアルシェの代わりを務めるように前線に立ってくれた。前線がなかったら魔道士として私は戦えなかったはずだ。そう、私の王子様がナイトになってくれなかったら、私とレインはきっと狼に食べられていた。

運命。なんて運命的なの。やっぱり先生は私の運命の人なんだわ。私は幸せ。異世界があると信じて頑張った。そうしたら異世界が本当に有った。運命の人を信じて勇気を出してアプローチしつづけた。そうしたら本当に運命の人を手に入れた。信じることと努力は強い力を生むのね。

でも私はやっぱり可愛くない女で、すぐ冷静に考えてしまう。なにいってるのあなた、先生のこと始めはどうでもいい人って思ってたじゃないの、とか。そう、運命の人だったのに始めは何とも思ってなかった。一目ぼれどころかむしろ苦手なタイプと思っていた。それがいまやパブロフの犬みたいに先生のこと考えるだけで胸が熱くなるから不思議だ。きっと先生はそういう私を馬鹿な女だと思ってる。

学校が終わって塾へ行く。家に帰るとレインがいた。お父さんたちはまだ。先生もまだだ。今日は早く帰ってくれるそうだ。

レインはうきうきしていた。メル暦とグレゴリオ暦は毎年ズレがあるけど、私の誕生日はメルセルだからだ。だから昨日の夜は 12 時まで起きてメルカ！と言い合った。レインと初めてのメルカだった。そして同時にレインはハルカ！と祝ってくれた。あけましておめでとうと誕生日おめでとうが同じ日だからこそ言えることだ。

メルセルとシオンセル？を同時にやってしまおうというこの企画。地球ならではなんじゃないかな。去年は彼氏も友達もなく親も帰ってこずに終わるところだった。結局最後は親が帰ってきてくれたけど、やっぱりちょっと物足りなかった。今年は最高よ。18 回目で

初めて親以外の人が祝ってくれた。これって凄いことだと思う。

あ……私は口に手をあてた。私って処女時代はいつも親にしか祝ってもらえなかったのね。処女時代……ふふ。良い響きだ。もう私は処女じゃない。クラスで真面目に思われてるだろう私が既に済ませちゃってるんだ。これは静には言わないけど、ちょっと優越感を感じてる。先に大人になった気がするからだ。何だかんだ言って高校生の処女率は高い。テレビとかは嘘を付いている。そんなに本当は高くないそうだ。特にウチみたいな進学校は高いはずだ。もしかしてクラスで数人しかいないんじゃないかな。なんか凄い優越感。でも本当の優越感の理由は済ませたことじゃない。その思い出がありえないくらい幸せだったこと。年上の彼の最大の利点だろうな。クラスの子じゃ頼りなくてこっちまで不安だし、物凄く痛そうだ。気をつかわなそうだし、下手そうだし……。先生は最高だった。比較対象がなくても分かる。初めてゾウを見た人が他のゾウを知らなくても「大きい」と思うように、他の男の人を知らなくても絶対的に優しいと評価できる。凄く幸せなプレゼントをもらった。

実はこれはあまり良いことではないと思うのだけど、レインに対しても優越感を感じてしまっている。私よりレインのほうが可愛いと思う。先生は好みによるといっていたけど、ハーフのほうがもてはやされるでしょう？それになんていうの、見た目じゃないのよ。中身がレインのほうが女の子女の子な感じでしょ。それでずっと劣等感があった。私はレインを守るナイトみたいだって……それは光栄なんだけど、私も女の子だから不満もある。私だって……お姫様になりたいよ。

先生はそんな私の剣を取って、鎧を脱がせて、ドレスを着せてくれた。こっちのほうがお前に似合ってるよって。私、弱くなったけど、お姫様になれた。凄く幸せ。お母さんが言ってた。女の幸せは男で決まるって。そうだと思う。

なんだかんだいってダメな男ばかり捕まえたり、男に捨てられたり、男に捨てさせたりする女は不幸だ。女のほうから別れることがあるけど、結局それも不幸だと思う。別れてせいせいするくらいなら付き合わなければ良かったじゃないの。相手を変えたり自分を合わせたりできなくて別れて庇護を失ってしまう。庇護を失ったことが始めから何でもないことであるかのように、仕事や勉強や友達や子供にしがみついてせいせいしたと言う。自分から別れたのよと吹聴することで優位さをアピールする。

凄く……かなしいわ。世の中にはそんな女が多いんだと思う。私のように大事にされるだけの価値がなかった女……幸せにはなれないわ。お母さんの言うことが分かる。言い訳をするほど彼女たちは本音では不幸なのだ。不幸を隠すためにアピールを繰り返す。そして自分の心さえ嘘で塗り替えてしまう。その欠点は反省しないこと。反省しないからまた次回も同じような目に合う。馬鹿な女はいつまでも馬鹿なのね。

セックスして私は大人になったなと思う。考え方が変わったから。絵空事みたいに見えていた恋愛がずっと駆け引きや利害関係という天秤に乗っかっていることが分かったから。

「ん……」

唇に手を当てる。セックスしたなんて偉そうに言ったけど、思えば私は何もせずに寝てただけなんだよな。全て何から何まで先生がお世話してくれただけで……。

ただひとつ謎が残る。本とかはあんなに嘘をついてバレないものなのか。それとも私が異常なのか。耳年増というか目年増な私は本とかで色々知識を得ていた。初めては痛いとか書いてあるのが多かった。でも痛くなかった。ヒリヒリしたりジクっと鋭い痛みを感じたりはしたけど血も出なかったし。

逆に本によっては初めから気持ち良かったと書いてあったけど、それもなかった。先生には悪いから黙っていたけど、これといって別段気持ち良くはなかった。嬉しかったけど。気持ち良いといえば、セックスする前に色々舐めてくれたのは気持ち良かった。手とか……かな。くすぐったいところもあったけど、私の反応を見て避けてたみたい。よく分かるのね、そういうことが。なんだろ……くすぐった気持ちいいみたいな感じかなぁ。本に性感帯って書いてあるけど、本にベスト入りしてるとこは全然だった。私、おかしいのかな。

声もさ、本とかだとその……某雑誌の名前のごとく出るって読んだんだけどそんなことはなかったし。ただ、小さな叫びみたいなこう……おなかの底から湧いて出てくるようなピクッとした声は何度もあった。あれは本当に多かった。でも騒ぐほどじゃなかった。結構こういうの気になるのよね。

先生は私の身体についてノーコメントだったし。ヘンなところとか無かったかな。他の子の裸なんて見ないから自分が普通なのか分からない。ヘンだとしても言わないよな、きっと。聞けば答えるかもしれないけど、勇気いるなぁ。

ぼーっと今座っているベッドを見た。ここで３日前にしたばかりなんだ……。私が小さいころからずっと寝ていたこの場所で、あの天井を見ながら私は先生に抱かれてたんだ。この場所にベッドはずっとあった。風邪で寝てるときもここで天井を見てた。まさかこの場所で抱かれるなんてね。子供のころの私が知ったらきっと凄く驚くわ。そしていまの私を嫌悪するかもしれない。

下ではレインが料理をしてくれてる。メルセルだけど私の誕生日優先ということで料理を作ってくれているのだ。私はすっとシーツに手を当てた。なんだかここを見てるだけで顔が赤くなってくる。

先生はいつもどおりメールと電話をくれる。頻度は変わらない。敢えて頻度を変えないことで距離を取ろうとしてるんだろうな。そうでないとバブルのようにお互いの気持ちが盛り上がってしまうから。だから先生が歯止めを利かせてくれてる。安心していられるわ。

先生が帰ってから私は居間の電気を消しに行った。そしたらレインが起きていて、バッタリ鉢合わせた。ほんとは寝てなかったのだ。先生が下に降りてきて、私達に会うのが気まずくてタヌキ寝入りをしてたみたい。レインは気まずそうに目を動かしながら ᑫᔑᔑᔕᑫ と聞いてきた。私が頷くと ᑫ- ᓀ-ᑫ とだけ答えた。

遅くなってごめんと謝ると大丈夫だったかと聞いてきた。とても優しくて幸せだったよ

と答えたら少し笑顔で ๑-ᗢ-๑ と言ってくれた。レインは寝るとき、ベッドに入るのを少しためらっていた。色々余計なことを想像してしまうのだろう。私がおいでと言うと頷いて中に入ってきた。

あれからレインとは先生の話をしていない。レインが意図的に避ける。キスくらいだったらからかったり色々興味を持って聞いてきたんだけどな。別に私や先生に対する嫌悪感は抱いてないみたいだから安心した。多分、単純に恥ずかしくて気まずいのだろう。

次の日、私は普通に学校に行った。塾にもいった。処女でなくなって初めて見る先生の顔。何か印象的だった。あの後お母さんもお父さんも何も言ってこなかった。いくら勘が鋭くてもそこまでは見抜けないだろう。

８時すぎにパーティが始まった。っていってもテレビで見るようなクラッカーとかはしないし、ただ皆で集まってご飯を食べて話すだけ。騒ぎをするのは好きじゃないし、こういう地味な幸せが良い。

先生はお母さんに私の小さいころの話をせがんでた。お母さんが私の失敗話や馬鹿話をすると面白そうに聞いていた。要するに普段の素行のわりには意外とお転婆娘で大変だったという話だ。そんな話で盛り上がらないでほしい。

みんなプレゼントをくれた。先生はネックレスをくれた。おもちゃだけどと先生が言ったらお母さんは「ウチの子はこれくらいでまだ良いんです」と言っていた。確かにそれはそう思う。私にはおもちゃで十分。でもそれは綺麗なネックレスだった。四葉のクローバーなのかな？透明なガラスの中に入ってた。綺麗……値段なんか問題じゃないわ。私は嬉しくってすぐ付けてみた。珍しくお父さんまで「似合う」とすぐに言ってくれた。私ははにかんだ。先生からはもうプレゼントもらったのにね。

お母さんは風邪引くといけないからといってマフラーをくれた。学校でよく周りの子がしてる黄土色っぽいチェックの柄だ。メーカー品らしいけどすぐに名前を忘れてしまった。お父さんはコートを買ってくれた。去年のがあるからいいのに。もったいないわ。でもきっとあげるもので悩んだんだろうな。あると分かっててコートを買ってくれたんだと思う。着てみたら暖かかった。去年のより良い気がする。

レインがセーターをくれた。手編みだ。驚いた。こないだ手芸品店に連れてってというので連れてったんだけど、そのとき買ってたのはこのためだったのね。手編みのセーターとか、アルバザードでもお馴染みなのね。これは嬉しいぞ。レインの手作りだもん。レインが……そう、いつか帰ってしまっても……この思い出が残ってくれるから。

メルセルということで私はレインにプレゼントをした。レインは予めヴァルテでない３人から何か貰うことを遠慮していた。私ばかりもらって悪いと思うんだけど、ヴァルテでない人からメルセルのプレゼントのメルシャントをもらうのは非礼なのだそうだ。そういうことで３人には予め一昨日理解してもらった。

私があげたのはマフラーだった。外に出るとき寒そうだから。お母さんと発想が同じな

ので驚いた。けど私はチェックじゃなくて単色の淡い緑のカシミヤをあげた。サンシャインで買ったものだ。レインは嬉しそうにしていた。

「あの……これは紫苑さんの誕生日には不適切かもしれませんが、季節のものですし、よろしかったらと思ってお持ちしました」
　先生は瓶を取り出した。あ、ワインだ。
「あら、今年のボジョレーね。素敵だわ」
　お母さんが受け取ってお父さんに見せる。ボジョレー？何それ。ラベルを見る。フランス語ね。凄い派手なラベルねぇ。花柄で、暖色系が赤、紫、オレンジなど多様に混ざっている。首のところのラベルには 2006 と年号が打ってあった。
「ジョルジュデゥブッフ……今年のは久しぶりに上出来と聞いてます」とお父さん。
「そうなんです。2003 年以来の出来だそうです」
　私はハッとして先生を見た。先生は私の視線に気付かないのか無視してるのか、お父さんを見て愛想笑いをしている。
「すまないね、静君」
「いえ、是非お召し上がりください。あの……やはりお嬢さんは未成年ですから飲むのは芳しくないでしょうか」
「私は構わないけれど……」お母さんを見るお父さん。
「はい！」口を挟んで手を上げる「飲む！飲みたいです！不良娘、ワイン飲みたいです！」
「珍しいわね、紫苑が飲みたいなんて。ま、お正月のお神酒とか飲んでるし、大丈夫よね」
　私はたたっと走ってコルク抜きを持ってきて先生に渡す。お母さんは何で自分に渡さないのかという顔をして首を傾げる。お客さんにさせるんじゃないわよという顔。
「先生、開けて開けて」
　わざと親に怒られないように子供っぽく振舞う私。先生は皮を剥いてコルク抜きを差し込む。
「あ、ねぇねぇ、私も開けたい。きょーどーさぎょー、しよ？」
「紫苑、あなた、大人しくできないの？」呆れた声のお母さん。
　私は先生の手に重ねて一緒に栓を抜いた。ポンという良い音が聞こえて今年のワインが開封された。
　先生はお父さんたちに注いでから私とレインに注いで、自分に注いだ。乾杯して飲んだ。アルバザードで飲むワインのようにおいしかった。
　特に大騒ぎするわけでも大人数でもないけど、暖かくて人がいて、幸せだった。
　先生は大人らしく礼節ある時間に帰っていった。本当は凄く一緒にいてほしかったんだけど、私は素直に見送った。駅向こうの駐車場まで見送るといったが、危ないからダメだといわれた。玲音の書を持っていて格闘もできる私に危ないも何もないと思うんだけどな。
　玄関先で最後に少しだけ２人きりになれたとき、私は小さな声で言った。

「あのワイン、おいしかったです」
「うん、お父さんたちにも喜んでもらえて何よりだったよ」
「ワインの思い出も私で塗り替えですね」ふふっと笑った。
　先生は頭をかいた「なんだ……バレてたのか」
「数字に疎い先生がわざわざ2003年って言ったから気付きました。どんな飲み方したのか、どこで食べたのか、栓は２人で開けたのか……色々考えちゃいました。でも分からないから、結局２人で開けてみました」
「……俺が一人で開けたよ、そのときは。紫苑、ありがとうな、一緒に飲んでくれて。実を言うと困ってた。今年のボジョレーを誰と飲もうかってな。紫苑がいなきゃ職場の女の子でも誘ってたとこだったよ」
「ふふ。良かった、11月生まれで」
　先生は微笑むと帰っていった。結局こないだしてもらってから先生とは２人きりで殆ど話せてない。３日しか経ってないのに寂しくなってきた。抱いてもらえば暖まるかと思った。確かに暖まったけど、そしたら今度はそれなしじゃいられなくなった。またぎゅっとしてほしい。

　お誕生会が終わると、お父さんが食器を洗っていた。私は今日はしなくていいみたい。レインがとてとて近寄ってお父さんに何かいう。手伝うといっているみたい。お父さんはメルセルだから構わないというんだけど、レインはにこにこしてエプロンを結んで布巾を取る。お父さんは特に何もいわずにレインに洗ったお皿を手渡した。レインって居候適性高いなぁ……。私とお母さんはじーっと見ていた。
「あれ？お母さんは手伝わないの？」
「うーん、疲れちゃった……かなぁ？」
　レインの背中を見ている。別に何もしてないよね……お母さん。はいはい、足に根が生えたのね。いまレインを見ているような視線でいつもは私を見ているのだろうな。普段は私があの立ち位置か。思えば中学のとき制服で家事をやって食事してお皿洗ったこともあるな。なるほど、そりゃ便利な娘よね。
「私、中学のときからあんなだった？」
「うーん、幼稚園のときからかな」
「えっ、ひどい……。私、そんなに酷使されてきたのね」
「てゆうか紫苑がお父さんに褒められたくて私の仕事を取っちゃったんだけどね。覚えてる？」
「そういえばそんなこともありました」
「ジャージ」呟くお母さん。
「え？」
「中学のときは偶に家で学校のジャージ着てなかった？」

「あぁ……すっごく偶にね。ほら、あれって便利だし、家事は服が汚れるから。それに部活もやってたわけだし」
「あんなに色気のなかった子が恋人を作るなんてね」
　私は黙った。レインがお父さんに「やー」とか言ってくすくす笑ってる。なんで意思疎通ができるんだろう。
「お父さんてさ……アルカ分かってるのかな」
「全然分かってないと思うよ。お母さんも分からないもの。レインちゃん、日本語少しは慣れたかしら」
「ダメね。気持ちの上で無理よ」
「そう。向こうの神さまも強情ね」
「レインが強情なのよ。純粋派すぎるわ」
「ふぅん」とお茶を飲むお母さん。
「レインちゃんって良い子ね」
「ああいう娘が良かった？」
「んー、お母さんは紫苑が最高よ」
「え、そう？」わりと嬉しい「またその後にオチを付けるんじゃないでしょうね。役に立つとかなんとか」
「つけないわよ」と笑う「可愛い一人娘だしね。18 か。よくここまで大きくなってくれたよね」
「うん……」
　見るとレインがお父さんに料理の本を読んでもらっている。絵を見て説明するお父さん。レインは何か作ってみたいようだ。
「あのね、紫苑」
「うん？」
「……生きて帰ってきてね」
　ドキっとした。
「分かるのよ、アンタの空回りな元気を見てると。凄く不安なんでしょ？悪魔と戦う不安だけじゃないわね。貴方はいつも毅然としてるから。それなのに凄く不安そうだから。正直かなり勝ち目が無いんじゃないの？」
「……もしそうだとしたらお母さん、私を止める？」
「親としては止めたいわ。でもねぇ、貴方がレインちゃんを見捨てるとは思えないのよね。レインちゃんに命を助けられたことがあるんでしょ？」
　頷く私。
「だから見捨てられないのね。そしてレインちゃんのことが好きだから」
「うん。……お父さんも知ってるの？」
「特に何も言わないけどそう思ってると思うわ。娘を戦地に行かせるのは複雑な気持ちよ」

「だよね……ごめんなさい。せっかくもらった身体なのに」
　湯飲みをコトっと置く「最近その「せっかくもらった身体」を好き勝手にしたみたいだけどね」
「え？」眉を顰める「どういう意味？」
「静さんとは良い思い出になった？」
　私は目を丸くする。ハッとしてレインを見た。
「ハズレ。あの子は日本語できないでしょ」
「じゃあ……」
「ん？半信半疑だったんだけどカマかけただけよ。紫苑、正直すぎるわね」
「う……」またやられた。
「へぇ〜」私が観念する一方でお母さんは長い感嘆を漏らした。
「ほんとに早まったのねぇ」
「だって……生きて帰れないかもしれないって思ったんだもん」
「そう言って静さんを説得したの？」
　下を向いて頷く。
「誘惑じゃなくて説得ね。アンタらしいわ。でも気持ちは分かるよ」
「先生凄く拒んだんだけどね、私が半ば無理やり」
「別に言い訳しなくても静さんを悪く思うようなことはないわよ。安心なさい」
「うん。あのさ、どうして半信半疑になったの？私、何か隠し忘れた？」
「え……さぁ、母の勘かな」はぐらかすお母さん。
「そ、そう……。でも勘違いしないでね。凄い優しくしてくれたのよ。血も出なかったの」
「あら」お母さんはレインとお父さんを見る「じゃあ良かったね」
　私は静かに頷いた。
「でね、現実問題、気をつけることはちゃんと気をつけたのよね？」
「えと……」私は黙ってしまった。
「言ってる意味分かる？」
「うん。分かるんだけど……避妊のことでしょ？その……しなかったの。私がイヤだって言って」
「え」お母さんは少し意外そうな顔「静さんがたしなめなかったの？」
「たしなめたけど私、頑固だから。だってもし死んじゃったらって思ったらさ……」
「途中からでも付けなかったの？」
　怒られた子供のように俯いて頷く。
「だって……そうしてほしかったから」
「静さんて意外と流されやすいのね」
「先生は悪くないよ！」
　ふいにレインとお父さんがこちらを向く。私は声を下げる。

「ほんとに……私の我侭。だってこの後死んじゃったら絶対後悔するもの」
「それは分かる。で、生きて帰ってきてもしおなかに赤ちゃんできてたらどうするの？それは考えなかったの？」
「考えたよ」
「おろすのは可哀相でしょ」
「だからおろさないよ」
「貴方まだ高校生でしょ」
「行けっていうなら大学も行く。でも産むわ」
「それってお母さんに代わりに育てろってこと？」
「そうじゃないけど……。確かに軽率だったわ。でも、未来のことまで細かく考える余裕なんてなかったの。そのときの自分の心に従ったから」
「静さんが代わりに考えてくれると思ってたわ……」
「考えてくれてたよ。でも私一度言い出したら聞かないから」
　妙にお母さんはその言葉に納得したようだった。
「それに、お母さんだって社会的キャリアより良い男を捕まえるのが幸せって言ってたでしょ？」
「まぁ、言ったわね。そういう風に応用されるとは思わなかったけど。で、実際周期的に見て、できそうなの？」
「それが」目の前で手をパタパタ振る「よく分からないのよ。いつできるとか。生理中が妊娠するんだよね？だったら生理終わってたから大丈夫なはずよ」
　お母さんは「はぁ」と大きくため息を吐いた。
「貴方って学校の勉強ばっかりね。静さんに色々相談なさいな。あのねぇ、傷つくのは女なんだから……分かる？」
「ごめんなさい。でも私は静が傷つかなければそれでいいわ」
　頭を押さえるお母さん「静さんが悪いんじゃないってことは分かったわ。貴方の頑固さに押し通されたのね。目に浮かぶわ」
「私そんなに頑固？」
「頑固よ……お母さんの娘だからね。まぁ責任は自分で取りなさい。アンタの話を聞いてたら静さんを責めるのはお門違いだって思ったわ。静さんは最善を尽くしたと思う」
「うん」私はにこりとした「それを分かってくれれば私は満足よ」
「はぁ……。このことはお父さんには黙っとくからね」
「うん、そのほうが助かる。私、お母さんにバレるとは思ってなかったよ」
　チラと見る。レインがお父さんの手を握ってボウルに入れた何かをかき混ぜている。何を作ってるんだろう。
　それにしても相変わらず表情を崩さないお父さん。私が処女でないって知ったら驚くのかな。怒ったりするのかな。ごめんねお父さん。内緒で私の身体、男の人にあげちゃって。

2006 / 12 / 05

火曜日。私は英語の授業に出た。先生がいつものように授業をしている。２学期ももう終わりだ。これが終わればもう年が明けて、１月はセンターだ。周りはかなりピリピリしてきた。受験ストレスなのだろう。私は恋にハマっているけど、勉強は要領よくやっているから特に不安はない。東大だろうがどこだろうが特に問題なく受かると思う。こんな話をしたらきっと羨ましがられるだろうけど、私からすれば受験程度がストレスなのが羨ましい。「じゃあ貴方は今から私の代わりに異世界に悪魔と戦いに行きますか？」と聞いてみたい。

さっきから緊張でお腹が痛い。いまごろレインも緊張しているのだろうか。そう、今日は３度目の満月だ。メルディアが回復する日。今日、私達は異世界に戻る。アトラスに行き、シェルテスと恐らく戦うことになる。戦うっていうのは小説やゲームの話じゃない。人と銃で打ち合うわけでもない。圧倒的な力を持った悪魔という存在に人間の私が挑むのだ。しかも私は小さな幼い女子高生。17 歳の女の子だ。訓練を受けた屈強な戦士じゃない。去年のフェンゼルのときとは違う。あいつは私と同じ人間の魔道士だった。でも今回は違う。相手は悪魔だ。生きて……帰れないのではないかと思う。

戦闘には先生やレイン、アルシェも加わると思う。だけど魔道士である点を考慮すると恐らく私が主力になる。私がどれだけ善戦できるかに４人の命がかかってる。もっといえば召喚省の運命もかかってる。召喚省は神の命に背けない。かといってシェルテスを襲えばシェルテスは召喚省を敵視し、潰しにかかるだろう。私達が敗れれば恐らく召喚省は滅ぼされる。神はアトラスでは戦えないから見殺しだろう。召喚省が潰れればアルテナさんの統治まで支障が出る。アルバザードは間違いなく傾く。アトラスはアルバザードの大きな力で統制されている。もしアルバザードが傾けば各地で戦乱が起こる。世界大戦になれば多くの人が死ぬ。私がこれからやろうとしているのはそういう戦いだ。

この３ヶ月ほどの間、ずっと考えないようにしてきた。考えると不安になるから。でも、今日はムリ。どうしても考えてしまう。神はアルバザードの召喚省をノミネートし、特に私をノミネートした。異世界人の私のこの小さな肩に異世界の命運が乗せられてしまった。アルデス王もルフェル王も、そして悪魔メルティアも一体何を考えているのだろう。いや、彼らも苦しい立場だ。アトラスで好きにできない不自由さ。悪魔という立場によるしがらみ。神や悪魔も難しい。彼らでさえこの世はとかく生きにくいのだ。

私はすっと席を立った。先生がチラっと見てくる。周りの生徒も。私は黙ったまま下を向いた。トイレに行きたい。お腹を壊して胃が気持ち悪い。隣の子に「すみません」といって通してもらい、廊下に出る。心なしか頭までふらふらする。トイレに入る。ふぅとため息を付く。気持ち悪い……少し吐き気もする。もしかして寒いから風邪引いたとかあるのかな。それはまずい。体調は万全にしておかなくては。

個室に入ったがダメ。精神的なものなのかな。左脇腹が痛い。諦めて腰を上げる。外に出て鏡を見る。手を洗う。顔も洗ってハンカチで拭く。べーっと舌を出してみると綺麗なピンク色をしていた。舌の色が変だと病気って聞いたことがある。医者によっては口の中を見るときは喉だけじゃなくて舌も見てるそうだ。舌診というらしい。とりあえず身体自体は不調じゃない……のかな。よく分からない。こういうの先生なら知ってるかも。知識の多い人だから。

教室に戻る。先生は私に目もくれない。いつまでこんな猿芝居をしてるのかしら、私。お腹が痛いまま授業が終わった。教室に残っていた。生徒が引けていく。質問の生徒が数名残る。女の子を１人片付けると、先生は突然私のことを呼んできた。

「あのさ……君、大丈夫？」

「え？は、はい」

「具合悪そうだよね。さっきも外行ってたでしょ。顔、青いよ。風邪引いた？」

「あ、そんな……大丈夫です」

「ごめん」もう一人の女の子に謝る先生「辛そうだからあっちを先に聞いてあげていい？」

生徒は「はい」といって教壇を離れた。

「あ」といって私は立ち上がった。

「あぁ、いい、いい。俺がそっち行くよ。辛そうだから立たないで」

「……すみません」

横の席に座る先生「えと、どの問題？」

「ここです……need の文、mending じゃなくて mended でも良いですか」

「あぁ、need it mending でも need it mended でもいいよ」

「構文を変えて It needs mending という言い方はできますか」

「うん、できるよ。その場合文型が変わるね。５文型から……こっちが３文型。mending は動名詞で「直すこと」の意味。目的語になってるね。だからこの文は「直すことを必要とする」って意味だ。で、こっちの５文型のほうは mended が補語の位置に来てる。it と補語がイコールの関係だから、「それ」が「直された状態」になる」

「はい」

「ただね、受験英語としては need の５文型は動名詞でも過去分詞でもどっちでも取れるという点と、第３文型だと動名詞を取るってことを覚えておくと良いよ」

「分かりました。ありがとうございます」

頭を下げる。先生はペンを落として拾う振りして後ろをチラっと見る。生徒は離れたところで待っている。小声になる先生。

「どうした紫苑。こんなこと質問するまでもないだろ。ほんとの用事は？」

「今日８時に来れますか」

「大丈夫、前々から言ってあるから。今からすぐ向かうよ。それより紫苑、具合大丈夫？」

「ちょっと……辛いかも」

「風邪か？」
「ちがうの、緊張でおなか痛くて」
「あぁ、そっか……。よく授業がんばったね。電車辛いだろ。あ、そうだ、俺と一緒に行こう。少し待つかもしれないけど、駐車場のところで待っててくれないか」
「分かりました、見つからないように気をつけます」
「寒かったら駐車場じゃなくてコンビニにいてもいいよ。電話するから」
「うん……ありがと。そうします。でも緊張してるだけだから大丈夫……てゆうかそろそろ向こう行かないとまずいです」
「あぁ」空咳をする「他は大丈夫そう？」
「はい、ありがとうございました」立ち上がる私。私とは目も合わせずとっとと次の生徒という感じで教壇に戻っていく先生。

　塾を出た瞬間凄い寒かった。すっかり冬ねぇ。外の寒さに刺激されてわき腹の差し込むような痛みが増す。コンビニに行こうとしたが、中で立って本を読むのも却って辛い。駐車場に隠れて入り込み、車の近くでしゃがんでいた。暫くすると先生がケータイをポッケから出しながら来たので立ち上がった。
「あれ？結局ここにいたの？寒かっただろ」
「はい。でも何だか立ってるのが辛くて」
「車の鍵渡せれば良かったんだけどな」
　車を開ける。
「さ、乗って。すぐ暖めるから」
「先生に暖めてもらえればいいんだけどな……」
　どこまで冗談か分からない言い方の私に先生は「あぁ」と困った感じで返すだけ。私は車に乗ると、下を向いてうずくまった。車が発進する。
「そんなに具合悪いの？」
「ううん、違います。そっちはだいぶ収まりました。いまは塾生に見られないようにしてるんです」
「そっか、すっかり忘れてたよ」
　川越を離れるともう大丈夫だろうということで姿勢を戻す。
「こないだは２人きりになれませんでしたね」
「うん。でも楽しかったよ」
「はい」
「あのさ、メールや電話じゃ聞きにくくて黙ってたけど、レインは次の日なんて言ってた？知ってたの彼女だけだろ。気まずくなかったかなって心配でさ」
「大丈夫でしたよ」
　タヌキ寝入りのことは黙っておこう。

「ちょっとショッキングだったみたいでしたけど。でも私や先生を悪くは思ってないみたいです。単に恥ずかしいみたい」
「そうか、じゃあ良かった」
「あんまり良くないのはお母さんかも」
「えっ？」ピクッとハンドルが揺れる「お母さんって？」
　おぉ、うろたえてるな、珍しく。ちょっとからかってみたい気もするが、怒られそうなので止めておく。
「母の勘とやらでバレました」
「なんだそりゃ」
「半信半疑だったらしいけど、カマかけられて引っかかったの。先生がはやる私をたしなめると期待してたって言ってね、始めは先生のせいみたいに言ってたの」
「そうか……」
「その後詳細を話してるうちに考えが変わったみたいで、私が無理にするように押し通したってことがバレて、怒られちゃった。ハッキリ言われました。静さんは悪くないって。万一赤ちゃんができちゃったら紫苑が責任取りなさいって」
「そうか……まぁ実際そうはさせないけどな」
　先生は「そうかマシーン」になってる。「そうか」の裏で一体何を考えているんだろう。
「あのさ……お父さんはぁ……」
「ん？知りませんよ。お母さん、言わないって」
「そうか……」
　安心したような「そうか」だ。やはり彼女の父親というのは気になるのだろう。
「レインはノーコメントでお父さんは知らないんだな。お母さんだけか」
「何かね、したこと自体はそんな問題ないみたいです。早いとは言ってたけどアトラス行くことを引き合いに出したら納得してました。むしろその……避妊しなかったことで口調が厳しくなったの」
「そうだろうな、そうだよな……」
「先生、わりと後悔してません？」
　顔を覗き込む。なんか既にシェルテスなんかどうでもいいって感じ。お母さんのほうが怖いみたいだ。
「後悔はしてないけど……確かに生きて帰ってきたときのことをもう少し考えるべきだったかもしれないな」
「生きて帰ってきますよ。そのつもりで戦わなきゃ。あくまでそうじゃないときのことを考えて保険をかけてしたんです」
「そうだな。それも分かる。親御さんがそれを共感してくれるかどうかが問題だな。というか実際妊娠したらどうするかとか、話しとくべきだったよな。紫苑、あのときは危険日だった？」

「分からないの、そういうこと。別に危険日でも安全日でも私は考えを変えなかったと思います。先生を説き伏せてたわ」
「そうか……そうかもな。で、実際危険日かどうかわからない、と。生理終わったのいつ？」
　私が答えると先生はそれきり黙った。私は顔を覗き込む。
「大丈夫……ですか？」
「誰が？俺が？紫苑が？親御さんが？」
「えっと……全般的に」
「……」
　先生は何も答えなかった。そのままこの話題は終わった。暫く走ったところで先生がポツリと言った。
「でき婚の可能性も考えないとだな」
「あ、私、妊娠してます？」
「そりゃ分からないけど。紫苑はどう感じてる？分かるわけないか」
「んー、分からないです。初めてだったし。でもね、どっちでもいいかなぁって思ってます。先生は？やっぱり妊娠したら迷惑ですか」
「それは……」
　聞くまでもないよね。迷惑に決まってる。そうと分かっていて無理やり最後までさせた私ってわりとひどい女だな。思うにあのとき結構先生は嫌がってたと思うのよね。不本意にできた子供って可愛がってくれるのかな。
「でも、普通に考えればそんなすぐに妊娠ってしないもんなんじゃないですか？蛍さんとはどうだったの、恋人時代」
「避妊なしでってこと？結構……してたよ。でも、できなかった」
「じゃあ大丈夫だと思いますよ。人間って妊娠しにくい動物だって聞いたし。私も話してて段々できてない気がしてきました。それにこんなすぐに恋人期間が終わるのは嫌です。もっとラブラブしてたいもの。一杯抱いてほしいし」
　左上を肩のところから肘まで撫でる。先生はピクッとした。
「ねぇ、今度また抱いてくださいね」
「シェルテス戦を控えてのことじゃなかったの？」
「そう思ってたんですけど考えが変わって……。今まで７月から半年近く勿体無かったって思うんです。もっと早くにしておけばもっとたくさん抱き合えたのに」
「そう……」
「なんか私ね、気に入っちゃったみたい」
「それは……なんとも返しがたいな」
「女の子が積極的なのって嫌ですか？」
「嫌っていうか、蛍がそうだったから思い出す」
「別にそれは思い出していいですよ。黒電話と違って変えるつもりないですから」

「ふぅん……あのさ、７月からこないだまでの抱かない期間っていうのは大事だと思うよ。勿体無いなんてことないよ。抱くまでのお互い少しずつ歩み寄る期間って後から思い出したときに甘美なものだよ」
「先生、大人ですね。私ばっか子供」
　手を頬に当てた。
「今までただぎゅっとしあってただけっていうのが勿体無いって思えるくらい、私は嬉しかったんですよ。そのことは覚えておいてくださいね」
「うん、分かった」
　先生はこれには素直に嬉しそうな顔をした。

　家に着いた。駐車場に車を入れる。いつ帰れるか分からないので有料パーキングには停めておかないことにした。親には断ってあるし。許可ももらった。
　車を降りて中に入る。
「先生、居間で待っててもらえますか。私、着替えますから」
「うん」
「……何か先生、嬉しそうですね。制服はやっぱ苦手なの？」
「え、そうじゃないよ。女って抱くごとに羞恥心が下がっていってさ、そのうち目の前で日常会話しながら服脱いだり風呂入ったりするんだよ。俺、そういうの凄い醒めるんだよね」
「そうなのね、分かりました。言われてみれば確かにそうね。秘密性が無ければ女の身体もただの動物の身体ですもんね」
「面白いこというね。隠されてるから見てみたいっていうのは確かにあるかもね」
　先生は椅子に座った。私は部屋に行く。危なかった……目の前で着替えるところだった。私一人だったら居間で待たせたら悪いと思って目の前で着替えてたな。居間で待っててもらったのはレインも着替えるからだ。危なかった……。そうか、勘違いしてたよ。特別な関係になったことをアピールするためにわざと先生の前で服を脱いだり身体を触らせたりしようとしてた。貴方は特別な人間なのよって伝えようとしてた。でもそれって逆効果なんだ……。勉強になるわぁ。他の男の人がどう思うかは知らないけど、そんなの興味ない。私は静用にカスタムされればいいのだ。
　部屋に入ると服を着替えた。レインが私の制服を着たいと言ってたからだ。私がアトラスに行ったときのこの服が印象的なようで、レインはことあるごとにこの服を貸してといってくる。着ると袖とかをくんくん嗅いで紫苑の匂いがするといって嬉しそうにしている。なんて可愛いの。私はルフィやラーサを着ようかと思ったけど、それは向こうで簡単に手にはいるだろう。戦闘に行くのだから空手着にしようかと思った。でも私は魔道士のポジションだし、先生にあまり見せたくない。かといってデート用のひらひらな服は弱くてダメ。去年異世界にいって制服というのがいかに頑丈にできているかを思い知った私はまた

中学の制服を引っ張り出して着ることにした。
　居間に先生を呼びに行く。
「あれ、着替えって……中学の？」
「レインが私の制服着たいっていうから着るものなくなっちゃって。結局制服が女の服の中じゃ一番頑丈ですから」
「学生服着た少女が異世界から救世主として現れる。学園ファンタジーの王道だな」
「小説みたいに勝てればいいんですけどね」
「俺も頑丈なスーツにしてきたよ。ジーンズのほうが強いんだけど、男の上着はわりと脆いんだ。あ、ジージャンにすれば良かったかな。まぁ服は向こうで手配できるか。武器の類も買おうかと思ったんだが、刃物やスタンガンなんかじゃもはや現在のシェルテスには無意味だろうな」
「銃でも無意味ですからね」
「そんなに強いのかよ……そりゃそうだな。俺の部屋で包丁で刺したときもダメージらしいダメージは無かったもんな」
「銃火器で倒せるなら召喚省でハインさんは衛兵に銃火器を持たせてたはずですからね」
「あぁ、あれは却ってラッキーだった。もし銃を持った衛兵が操られたら殺されてただろうからな」
「そうですね」といって２階に上がった「本当はお風呂入りたいんですけど止めときます」
「なんで？」
「今から向こう行って、召喚省の窓が直ってなかったり外を強行することになったら湯冷めするでしょう？風邪なんか引いてられないですから」
「現実的だな」
「そうですよ。リアルファンタジーは現実的なんです。去年もインフルエンザで酷い目にあったんだから」
「あるんだ、向こうにも？」
「ありますよ。レインも私もかかって酷い目にあいました」
　部屋を開けるとレインが立っていた。私が頷くとレインも頷く。レインの左手に付けられたメルディアは激しい光を放っていた。
　部屋のドアを閉め、中央に集まる。
「行きます。準備はいいですか？」
「紫苑、親御さんに電話や書置きは？」
「書置きは親の部屋の机に置いておきました。電話は……しません。今朝、挨拶を済ませました。気が緩むからしたくないの」
「分かった」
「先生は？」
「俺は誰も連絡する相手などいないよ。蛍なんか、きっと俺が死ねばいいと思ってる。た

とえ死んでもノーコメントだろうな」
「……サイアク」
　私は見えない蛍さんに向かって吐き捨てるように言った。私の顔を見てレイインが心配そうに私を見てくる。私は ϶-ᒧᒧɔ とレイインの肩を撫でて、手を取った。
「もういいよ。最近はあいつのこと殆ど思い出してないから」
「そうなの？良かった。先生の悪魔は去ったみたいですね」
「……」固い表情の先生。
ᘐ∖cɔΛẟ ΛɔΛ -ᔑ ℓc- >elℓc- c> ᑦaᔑẟᘓ
「あ、ごめんね。じゃあ、行きます。lecΛ，-ᔑ >elℓc-」
　レインが呪文を唱えだす。レインの言葉に反応してメルディアが輝きを増す。
　時計を見る。８時。
　そして光が溢れ出し、私達は大きな光に包まれた。

　光が消えると私達は惑星アトラス・アルバザード国・アルナ県・中央アルナ市・北区に位置する召喚省のロビーに居た。省庁自体は閉まっていて、もう誰もいない。
「戻ってきたな」
「はい……」
「こないだと少し変わったな。窓が直ってるのは当然だとして、俺たちを囲むように大きな円の囲みが作られている。これは何だ」
「多分、私達がいつこっちに来ても良いように人が通れないよう配慮してくれたんだと思います」
「なるほどな。メルディアはアイテムだから意思を持たない。召喚先の場所が道路だろうとお構いなしだ。それを見越したのか。アルバザードの連中は日本人並みに気が効くな」
「ふふ」
ᘐlaˉ ∖cɔΛ ->-ΛZeᖵᘓ
　後ろから急に呼ばれて振り返る。守衛さんだ。私達の到着を確認したらしい。だから私はアルティス教の始祖シオン＝アマンゼじゃないんだってば。
ᘐ∖cɔΛ laˉ，-Λ ᒣeᒣleᒧ hˉcΛ ℓЧaᒧᒧɔa -ᑦa„ >cᔑ ᒧɔlᒧ -Λ ϶cɔ ᑦccᒧ - le eZ ᔑeᑦᘓ
ᘐ- Чˉ，ᔑeᑦ，ℓЧaᒧᒧɔaᘓ
　言われるままに待合室に通される。ソファーに座って待っていると守衛さんが紅茶を出してくれた。衛兵さんは凄く丁寧だった。
「なぁ紫苑、もしかして凄く歓迎されてるか、俺たち」
「すごーく。だって関係者の間では救世主扱いですもん」
　だけど守衛さんは私たちの日本語を聞いてやや困ったような顔をする。彼にとっては「なぜ転生した教祖シオン＝アマンゼが変な服を着て変な言葉を喋るのか」が理解できないようだ。

「アルシェは私達のことを転生した教祖さまと触れ回ったみたいです」
「PR の巧いことだな」
ᘐ-，ﾚЧaノノɔa„ ᑕЧa lɔ leΛ- eᑕ Λeδ >ca ᄊeΛノ - leΛ-ᘐ
ᘐ-ᄊᓄe -lᑕee>ノ ﾚЧaノノɔa ᑕ-ヲ)-ᑕ -l -Λノ Ч3l ᑕc ﾚel ᓄcɔΛ la- eᑕ la- ᓄcɔΛ ->-ΛZe l eノ cΛScΛ„ Ч-Λ la Vc) eᑕ ﾚЧaノノɔa ᓄcZ)- ﾚel ->cᄊ e ᓄcɔΛ la- ᑕeᄊᘐ
「先生、私の旦那様だって思われてるみたいよ。神話ではシオンは処女懐胎らしいんだけど、転生先では結婚したものと思われたみたいね」
「なんだかこの国の歴史を動かしちまったな」
ᘐЧ-Λ la >cΛ eᑕ la- lecΛ Чaᑕc- ﾚel >cV- e ﾚЧaノノɔa ﾚaaᄊ8- Чaᑕc-„ lecΛ la- eᑕ -ᄊᑕeΛ- l -ᄊ-ᑕ -ᄊᑕeノ - ᑕccノ ノ ᑕeᄊᘐ
「レイン、召喚士扱いされてるみたい」
「アルシェもパフォーマンスが巧いもんだ」
「９月の終わりから２ヶ月以上経ちましたからね。召喚省の間では期待が神話化されてるんでしょう。その期待を士気に変えてるんですよ、彼は」
「巧い仕事をするねぇ」
　暫くするとハインさんとアルシェがやってきた。守衛さんは丁寧に挨拶して部屋を出る。
ᘐ-ᄊᓄeᖇᘐ レインが立ち上がって飛びつく。
ᘐ<cc>-，lecΛᖇ ᑕc -ᑕ ヲ-ノノɔδ <c- e ᓄcɔΛ eᑕ -) ノeノδᘐ
ᘐᑕЧa -ᑕ ヲ-ノノɔ --„ ΛɔΛ Λ-lᓀ ᑕcΛ lclcノᖇ h-ɔ ΛɔΛ -ᑕ ヲ-ノノɔ >cl ᓄcɔΛ eᑕ Λccᑕ ɔ ﾚ-S ᑕcΛ)-„ h-ɔ，ᓄcZ)- ᑕ-Λ eᑕᘐ
ᓄcɔΛ ᘐ<cc>-，-ᄊᓄe„ >c<cc>- h-cΛ ﾚЧaノノɔaᘐ
-ᄊᓄe ᘐ<cc>-„ h-c，-Λ ヲeΛᑕ ᑕccノ cl >-Λ -Λ lɔ ᑕa eᑕ V-ᓄ ᄊ-) ᑕ-l -Λノ)e ᓄccᑕ)-ᘻᑕeΛ c ᑕaᄊ l-Λ- ᓄɔɔ) - ﾚ-cZ -ᄊﾚeノ ɔ ﾚ-cZ lᐸeᄊᘐ
ᓄcɔΛ ᘐeヲδ ᑕa ᑕe l->c -δᘐ
-ᄊᓄe ᘐ<cノ eᑕ ヲ-ノノɔ >-Λ ᓄ-ΛᑕeB ノ -ᄊᓄ- ﾚel ﾚaaᄊ8- ɔ Vccᴧe <-ノ Vceᴧ -l)- c> ᓄ-ΛᑕeB ノɔΛ ᓄelᑕeノ eᑕ cVᴧ c> <cノᘐ
ᘐᑕa e)ノ leΛ- eᴧ V-ノ l- c> <cノ ノeᑕeδᘐ
ᘐᑕa eᑕ ᓄcel„ ᑕ-l ᑕa ﾚe --ᓄ-„ ノɔΛ ᑕccノ cl Λ->ᑕ)-ᓄᘐ
「-lΛ-„ 先生、いまからカルテンへ行きます。アルナのカルテの真ん中」
「夏にアルデス王をレインが召喚したところか。ってことは神に会いに行くのか？」
「はい。今日はシェルテスは弱まっているようなので戦わないかもしれないです。でも奇襲はありえます。気をつけましょう」
「分かった。いまはヴァストリアがないからな。襲われたら危ない。でもさ、シェルテスがその辺り計画を練ってて襲ってきたらどうするんだろ……」
ᘐ--，ᓄelᑕeノ ノeᄊ -Λɔ leΛ-Λδ ɔl ノɔ-，ノɔΛ l- V-Λﾚ ノcl leΛ- ノeᑕeδᘐ
h-cΛ ᘐᑕa eᑕ ヲ-ノノɔ >-Λ -Λ -ᄊ eノ-lᑕ ﾚel)ɔ e V-ノᑕᄊc- le ﾚ-cZ l-<-ᑕ -l -Λᘐ

ᔕᑕᐱᑐ-„ -ᑐ ᐯ-ᐱᓄᔭ-ꟾ ᑕ eᔑᔭ-ꟾᑕ eᑕ ᖻᓄ-ᔦᔕ
ᔕᑕᓇ hcᐱᓄ ᔑeᐱ ᐯ-ᐱᕊ e ᒐelᑕeᔑ ᑐ-ꟾᑕ -ᐱ -ᔑ ᑐcᑕ -ᔑᑕeᔑ„ ᑕ-ꟾ ᑕc ᐳcᔑ ᐱ-ᐳᑕ ᖻᓇl el ᐯ-ᐱᕊ ᐯcl ᒐelᑕeᔑ c ᕽᓄᑕᔕ
ᔕ-ꟾᐸc, ꟾeᐱ- ᖻᓇl ᐯcl ᑕᓇ c> ᐯ-ᔑ ᔑeᑕeᔦᔕ
ᔕ-ᒐᔕ
ᔕꟾ-ꟾ-....h-cᐱ ᕊᖻᓇᔑᓄᓇ, ᐯ-ᐱᓄ ᐱ-ᐱ h--ᔑ -ᐱᓄᔕ
ᔕ-ᐱᓄᔦ -ᐱᓄ e ᐱeᔦ ᔕ
ᔕ-ᛉ....ᐯcᐱᔑ-....ᑐᓄᑐᓄ ᑕᓄ ᔑᓄl ꟾeᐱ- ᑐᓄᔑ ᑐ-ᔐᑕeᔦᔕ
正面ロビーから外へ出る。
-ᔑᒐe:cᔑᑕ h-cᐱ ᔕᑐᓄᐱ Z->„ -ᐱᔑ ᓇᑐ - ᑐ-ᔐᑕe„ h-cᐱ -ᔑ eᔑᔭ-ꟾᑕ ꟾeᒐ ᐱeᑐᑐᓄᐱᔕ
ᔕᐱeᑐᑐᓄᐱᔦ ᑕᓇ ᑕe ᐯ-ᐱᓄᔭ-ꟾᔦᔕ
ᔕᖻ-, ᑕᓇ eᑕ ᔑeᐱ ᐯ-ᐱᓄᔭ-ꟾ c> ᐯ-ᔑ ᑕ-ꟾ ᑕᓇ ᐱeᑐᑕ ᔑeᐱ -ᐱᔑ c ᒐelᑕeᔑᔕ
ᔕ0--, ᔑe ᕊcᕽcᑕ ᔑᓄl el ᖻᓄl ᔑeᐱ eᔑᔭ-ꟾᑕ ᐱ-ᖵᔕ
ᔕᒐ-> ᑕc„ ᑕᓇ eᑕ ᖻᓄ- ᑕcᐱ„ h-c, ᔑᓄᐱ eᔑ -ᐱᔑ eᐱ ᖻᓄl ->ᓄ 0eᐱ ᐳc-ᔦᔕ
ᔕ-- ᐳcl ᒐelᑕeᔑ ᐸcᒐ ->ᓄ ꟾe ᑕcl ᓇ, ᐯ-ᐱᕊ ᑕᓇᔦᔕ
ᔕᑕc-ᖵᔕ
「なぁ紫苑、またこないだみたいに歩くのか。車道はあるんだろ？召喚省は車くらいだしてくれないのか。俺さ、アルバザードの車運転してみたいんだよな」
「いまエスバルトっていうヴァストリアをハインさんが使ってるの。戦闘時にはバリアになるんだけど、移動時は隠れ蓑にもなるらしいわ。無人の車が動いてたらシェルテスは怪しむでしょう？」
「なるほどね。なぁ、ところでハインさんとアルシェなんだが、あの長いローブはなんだ？」
「テーベのこと？礼服よ、アルティス教徒の。普段着でもあるけど」
「俺ら神に会うのにスーツや制服でいいのかな」
「ふふ」と笑うと先生は首を傾げる。
「ううん、地球だと子供は制服がフォーマルで、大人はスーツがフォーマルでしょ。きっと誰に会うにも困らない服よね」
「あぁ、確かに不思議だな。スーツ着ながらフォーマルさを心配するってありえないもんな」と笑う。
「しかし今日戦わないかもしれないということは今日帰れないということだよな。メルディアはまだ回復するわけないし、シェルテスを倒して中立状態が解消されるまでメルティアは俺たちを地球に帰してくれそうにないし」
「ごめんなさい。お仕事……」
「紫苑が謝ることじゃないよ。仕事は半分諦めてたからね。なんせ命も若干諦めていたからな。３日……も無断欠勤すれば間違いなく離職だろうな。紫苑さ、そうなったら別れようか」

「えっ！？」
　大声を出す私。
h-cʌ ᵍ(ɔ ﾉ ⌊el(eノ ﾉ ɞ
⌊cɔʌ ᵍ(e，(eɔɾ -ʌ(eɔɾ ₔ c) ノɔℓɾɞ
h-cʌ ᵍ-((-….⌊cɔʌ lₔ-，ʌ->(Ve⌊l >-ʌ ⌊el(eノ (cl (e> h-⌊ ʔ-V (ɔ- h-⌊ɞ
「V-ʌ(-ʌ(„ ʌɔʌ ノɔ <-ʌ„ ねぇ……いまのどういう意味ですか」
「稼ぎが途絶えてるのに女の子と付き合うなんてできないよ。蛍だってそうさ。離婚の原因のひとつがな、俺の稼ぎが少ないことだったんだ。稼ぎが少ないって言われたよ」
「ひどい……それ」お父さんの彼の収入はいくらだという言葉が思い出される「あの……具体的に離婚されたときどのくらいだったんですか」
「ん？珍しいな、金の話をスルーしないのは。んと、今より安かったよ。月の手取りが年の数くらい。同じ年の連中と同じくらいじゃないかな。実際ボーナスがあるから結構良くなるとは思うけど」
「へぇ……それって普通なほうなんですか？あの……年収 1000 万ってどう思います？」
「凄いほうだろ。別にセレブではないけど、パーセンテージで言えば少ない人口だ」
「それくらいほしいとか思います？」
「？俺、いまクビになるって言ってるんだけど……？紫苑がそれくらい稼いでほしいってこと？だったら今の俺じゃ到底及ばないよ」
　私はブンブン首を振る。
「ちがうんです、そういう意味じゃなくて。……あの、お仕事のことはあまり心配しなくていいかもしれませんよ」
「なんで？」
「ほら……生きて帰らないことにはしょうがないし」声が小さくなる私。
「そりゃそうだな。でさ、クビになったらの話しなんだけど」
「付き合いますよ。付き合った記念日、覚えてます？」
「えと……6 月 27 日だったよね」
「うん、正解。あのとき私言ったよね。リストラされようが何があろうが 2 人で頑張ってくって。お金ないと困ると思うけど、働けないわけじゃないし、大丈夫ですよ。それにお金くらいじゃ私の静ラブ度は動かないもん」
「うぅむ、蛍も同じこといってたけどな、結婚して子供できてその後離婚となったら安月給と罵倒されたよ」
「それは蛍さんが特殊です。もしくは最近の女がひどいんです」
「そうかな」
「そうですよ。私はそんなこと気にしないわ。責めたりもしない」
「それも問題だけど。俺は一生懸命働きたいタイプだからね。甘やかすのだけは止めてくれよ」

-ᄊᄂe ᘐᐱee lecᐱ, ᑊ--ᔪ ᄂɔɔᑫ-ᄊ ᑕɔ - ᄂɔᑫᵹ ᘏ
ᘐeᐱ ᔪeᄊᘏ
ᘐh-ᄊᵹ ᑕc ᄂ-ᑕ <c- lɐɐᑕeᔪ ɻɐ <cl ᑫɔᑫᵹ ᑕ-ᑊ ᑕc lɔᑫc Vcl leᔪ lɐɐᔪ ᑫɐᄊᵹ ᘏ
ᘐЧ-, ᄂcɔᐱ ᐱ- Sɔ - ᐱɔᐱ ɔᐱ ᑕɐ ᑕeᑕ ᐱɔᐱ <el Vcl elɻ lɐ-ᐱᑕ ᄂel V-lᑕeᘏ
「うん、分かった。甘やかしませんね。h-c lecᐱ, ᐱɔᐱ eᐱ ᐱ-ᑕ Sɔ„ 仕事のことは後で考えましょう。まずは生きること」
ᘐᑕee, ᑕЧɐ ᐱ-ᑕ Sɔ cᐱ„ ᑕЧɐ Sɔᑫ ᔪcc- ᐱɔᐱ >cl ᐱɔᐱ eᐱ ᄊeᐱᔪ le elɻᖬᘏ
「そうだな」
「ᑊ-ᑊ- ᑕЧɐ S-ɘ ᐱɔᐱ leᄂ ɻ-c>eᐱ„ ᐱee -ᄊᄂe, ᑕЧɐ <el-ᑕ elɻ leᐱ-ᐱ ᑕe- ᑕЧɐ lɐᐱ-ᑕ <c- leᐱ-ᐱ ᔪeᑕeᵹ 私も学校のことは考えないことにします。平日ですからね。でも私は気楽です。お母さんが電話してくれるだけでいいんだから。先生は人生動かされちゃいますよね。だから私自分のことより先生のことが心配です」
ᘐ--ᵹ Ч-, ᄂcel„ lecᐱ, elɻ e ᄂcɔᐱ eᑕ ᄂeɘ ᔪeᔪᵹ ᑕc >-cᔪeᔪ ɐᵹ ᘏ
ᘐ>>....ᄂcᐱᑫ ᐱɔᐱ >-cᔪeᔪ elɻ e ᄂcɔᐱ ᔪc< -ᑕc ᄂe c> ᑕɐɔ <ceᐱ ᑕɐ elɻ eᑕ ᄂeɘ„ ᑕɐ elɻ ᑕcl Veᑕ ᔪɔ- ɻel....--, ɔV- ᑕc-ɘc-„ eᐱᑫ -ᄊᑫ-, ᑕɐ ᑕcl ᑕc-ɘc- ɻcɘcᑕ ɔV- “ɔ>-e” le ᄂcZᑫ- Чɔl c> lɐ -ᐱᄂ ᄂcɔᐱ, ɔ “-ᐱ-ᑕ-” le lɐ- ɻel ᑊ--ᑊ e ᄂcɔᐱ Чɔl c> lɐ -ᐱᄂ ᄂcɔᐱ„ ᑕɐ eᑕ ᄂeɘ ᑕcᐱᑫ-ᔪeᑕeᵹ ᐱɔᐱ lɔᑕ ᑕɐᑕɐ ᑕc-ɘc- eᑕ >Чɐl -ᑊ -ɘᑕ ᑕ -ᄊᑫ- ɔV- ɻ-cZ ɔ ɻЧɐᔪᔪɔɐ ɔ lɐ- ɔ ᔪɔɐ ᑕ-ᑊ ᑕɐɐᔪ ᑕe -ɘᑕ ᑕeᑕ ᑕc-ɘc- -ᖬ <-ᑫ el ᄊeᐱᔪ <-ᑊ "cᑫ-ᐱ-c" c> eᑫᔪ "eᐱ ᑫe" <ceᐱ el ᑫɐ "cᑫɐ" c> eᑫᔪ "ᑫe"„ ᄂɔᐱ ᄊ-ᑫ ᔪeᑕeᵹ ᐱɔᐱ -lᐱ- Vcl eᔪ ᄂcɔᐱ ᑕeɐ >-ᐱ- leᄂe Чɔl elɻ ᄂeɘ ᔪɔ-„ ᄂcel, lɐ eᑕ leᄂe >cl lɐ Чɔl ᔪeᐱ ᑕɐ elɻ ᑊ eᑕ ᄂɔᐱ ɔ ᄂeɘ ᄊ-ᑫ ᐱ-„ h-c ᑕɐ elɻ ᑕcl Ocᑕ <cl ᄊ-ᑫ ɔV-"ɻɔɔ>ɔ-lcϬ-ᑕɔɔϬɔZ-c>-ᄂcᑕ-" ᑊ eᑕ ᑕcɔ >cᔪeeᄊeᑕcᔪ, <-ᑫ "ɔh-ЧɔɔϬɔZ-c>-ᔪ" ᑊ eᑕ ᑕcɔ ᔪɔɔᐱlɔЧɐᐱᖬ eᐱ ᐱ- ᐱcᑫ h-ᐱᵹ hel, ᐱɔᐱ ᐱ-ᑕ ᐱcᑫ ᑕcᐱ c> ᐱɔᐱ ᑕeᄊ ᄂcZᑫ- ᑫɐ "ɔɔᄂcO-ᑫe-lc>-ᔪeᐱɻeᄂcᑕ-cϬɔᑫcɔᑕᔪɐᑫe>-ᔪ" ᑫɔᑫᑫɔ ᑫ-ɘ„ ᑕɐ eᑫᔪ -ᐱᑕeɔ ᑕeᐱᖬ elɻ lɐ-ᐱᑕ eᑕ <cl ᄊ-ᑫ ɔ ɻ-ɸ ɔ ɻ->ɸ„ ᑊ-ᑊ- ᐱɔᐱ -lᐱ- Vcl eᔪ ᑊ-cᐱ eᐱ Чɔl -ᄊᑫ- ᑕ-ᑊ elɻ ᔪɔ- --„ ᑕ-ᑊ ᑫɐl-ᑊ-eᑕ -ᑕᄂ ᔪeᔪ„ Ч-ᐱ ᑊ-ᐱ eᑕ ɻ-S ᑕcᐱ ᔪeᔪ„ ᄂcᑕe e ᄂcɔᐱ eᑕ -lᑫ- ᔪeᔪᖬ ɘeᑫl ᑕ-ᐱ eᑕ eᐱ Ч-> cᐱ <ceᐱ leᐱ- ᐱɔɻ lɐ-ᐱ eᑕ h-ᄂ„ ᐱɔᐱ cᐱ-ᑕ ᑕecᑫ ᑫ-c ᑫ- ᄂe ᄂc-ᑊ, ᐱ-ᑕ ᐱcᑫ <ceᐱ ᑕɐ ᑕecᑫ ᑕe -ᄊ c> ᑕɐ„ leᐱ ᐱɔᐱ hcᐱɔ Vcl ᑕɐ elɻ >-ᐱ ᑕɐ eᑕ ɸeɸel ᑕcᐱ ᐱɔɻ -ᄊᑫ-„ ᐱɔᐱ lɔ ᑕɐ eᑕ ᑊ-ɻlelɻ >cl ᄂeɘ ᄊ-ᑫ„ c> ᑕɐᄊ, leᐱ- cl Чɔl -ᄊᑫ- le ᑊ-ɻ-ᑕ Чɐ ɻЧɐᔪᔪɔɐ ᔪeᄊeᐱ ᑕ -ᄂeᑕ„ ᐱɔᐱ ᔪeᐱᑕ-ᑕ >e lɐ c> ᐱɔᐱ eᑕ ɔᐱ -ᑊ elɻ e ᄂcɔᐱ >cl ᔪ->-ᄊᑫ- eᑕ ᔪɔ< ɔ ᔪe> ᑕcᐱᑫ-„ leᐱ -ᄂeᑕ eᑕ ɻ-c„ >>....ᑕe- ᐱɔᐱ <c-ᔪ-ᑕ ᑫ- <c- e ᄂcɔᐱ, ᔪɔᐱ ᐱɔᐱ ᄊeᐱᔪ ᔪeᐱ >cЧɐ ᑕɐ elɻ ᔪe ᔪɔ< eЧɔᵹ ɻccᐱ, ᐱɔᐱ ᐱ-ᑕ ɸ-ᐱ ɔ ᐱ-ᑊ ᑫ- ᄂcɔᐱ ᑕᄂ ᑕɐ elɻ„ ᑕЧɐ -ᑕ ᑕc-, -ᄊᄂe, >cl ᐱɔᐱ ᄊeᐱᔪ ᔪeᐱ ᑕɐ elɻ -ᑕc ᄂe„ ᐱɔᐱ ᔪccᐱ- ᄂcɔᐱ ᔪc< ᑕ-ᑊ elɻ lɐ-ᐱᑕ >-ᐱ....>-ᐱ ᄂeɘ eЧɔᵹ ᑕee, >-ᐱ ᑕɐ ᑕel -ᄊᑫ- ᑊ eᑕ elɻ ᑕ -ᄊᑕeᖬ h-cZeᐱᖬ Ч-, ᐱɔᐱ ᔪeᄊ ᐱ-ᐱ eᑕ ᑕc-„ leᐱ ᐱɔᐱ ᑫ--ᄂ ᄂcᐱ ᑕɐ elɻ ᄂel V-lᑕe >cᑫ-„ --, -ᑊ -ᄊᑕeᖬ ᄊeᑕ, ᔪɔlᔪ ᑊ-cᐱ ᑫ-eᐱ <c- e ᄂcɔᐱ Чɔl ᔪeᐱ >cЧɐ -ᄊᑫ- ᄂel V-lᑕe Vecl ᑊ-cᐱ eᑕ ᐱelᔪ ᔪe ᑕeɔ>„ - Ч- Ч-,hel hel, ᑫ--ᑕ -ᄊᑕcᔪ >c <c- e ᄂcɔᐱ <ceᐱ ᄂcɔᐱ ᑕcl eᔪᑕ ᑊ eᑫᔪ ᄂcɔᐱ lɐ-ᑕ -ᄊᄂcɔᐱᖬ ᐱɔᐱ ᐱ-ᑕ ᐱcᑫ -lᑫ- ɔᐱ ᑕɐᖬ lɐ-ᐱ ᑕcl >cᑫl ɻcɘcᑕ, ɻeᄊᑕ - ᄂe >cᄊɔᑫ ᑕcᔪ ᑕcᄂ -ᄊᄂ-

-ノr h-cZeΛ,, ΛɔΛ ᔑeΛノ-ᑐ h-cZeΛ ᔑ-ノ ℓc c> clノel,, I-I- eノ I-cΛ ∪-ᔑ >cᔑɔᑫ ℓc-Λ- e५ɔ,, cl ℓeᔑᑐ - ∪e >cᔑɔᑫ ℓc-Λ-,, ᑐa eᑐ Z-I ノeᑐeδ >>....ΛɔΛ -IΛ-ᑐ Vcl ノɔɔl I-cΛᑐ,, ᑐ-I ℓccΛ ∪cɔΛ ノc< eᑐ Λccᑐ ᑐcΛᑫ- ノeノ eΛᑐɔ ΛɔΛ Λ- Λ-I, ノccΛ- >c५a I-cΛ cl,, >>.... -c, ΛɔΛ lɔ Λ-Λ eᑐ ∪cΛ- ɔΛ Λ-Λ ᑫɔᔑ <c- e ∪cɔΛ6

　アルシェは延々続くレインの報告を聞いてはうんうんと言っていた。私はツッコミどころが無数にあるその言葉を聞きつつも驚きのほうが大きくて黙っていた。静を見ると、やっぱり驚いた顔をしている。

「あのさ……レインてこんな話す子だったっけ」

「ううん……アトラスでもわりと物静かなほうよ。地球に来て口数減ったなとは思ってたけど。日本語できなくて喋るの減ってたからそうとう溜まってたみたいね」

「何をさっきから話してるの？」

「日本での生活とかかな。途中早くてよく分かんなかったところもあるけど」

「あ、それ俺も思った。いや、俺がアルカ聞き取れるという意味じゃなくてさ。紫苑ってアルカのバイリンガルだけど、やっぱレインって紫苑と話すときはゆっくり明瞭に話してるよな」

「ですね。ネイティブ同士の会話は私もリスニングで精一杯。去年のフェンゼルのときは毎日アルカだったから慣れてたんですけど、あれから結構経つんで。レインは私にはすこーしゆっくり喋るし単語も簡単にしてくれてます。やっぱり私は異星人なのね……」

「まぁ落ち込むなよ。紫苑は間違いなくバイリンガルと呼べる実力を持ってるって。でもレインがこんな喋るのは驚きだな」

「前に私もやったことがあります。あんまり毎日アルカばっかでうんざりしててね、アルシェとレイン相手に日本語で１分ぐらいスピーチかって思うほど捲くし立てたことがあるの。人間ってたった一人で母語を制約された状況にいると相手の言語に対する不快感を抱くみたいね。そういう気持ちは分かるからレインのいまの暴言や狂信的なコメントは見逃してあげます」

「ん？なんか暴言はいてたのか？」

「日本語に対してですね、主に。べらべら言ってるけどまとめると、「アルカ万歳。日本語ダメ。なんでアルカ使わないのよ。非合理的。アルティス教がないなんてありえなーい！存在しない神に祈るなんて何考えてんの？」的なことをつらつらほざいてます」

「ははは……」苦笑する静「そうとう溜まってたな」

「ですね。でも私もそこまでは言わなかったわ。ちょっとムカつくんで間違えた振りして足踏んでやります。えいっ」

　ぎゅっと踏むとレインは「あぅっ！」と小さく叫んだ。

6--, V-Λᑐ V-Λᑐ, lecΛ, ᑐ५a eᑐ ϶-ノノɔδ ΛɔΛ eΛ ∪-ᑫI-ᑐ la0- ᑐa-Λ >cl -ᑐa eᑐ Velᑐ ᔑ-ᑫ6

「おいおい、ローファー履いてるんだから苛めるなよな。また靴擦れするぞ」

「そしたら今度はアルシェにおんぶしてもらうのかなぁ？いーなー、可愛い子は男の人に

優しくされて」
　何か急に拗ねたくなった。静は苦笑して私の頭を撫でるとその場にしゃがんだ。
「はいよ、お姫様」
「え……い、いいよ、こんなところで」
　皆足を止めて見てくる。
「あー、あのですな、みなさん……-ʌ ∪ɔ∪ ∪cɔʌ ›-ʌ lₐ eᑐ cVʌ ᑐₐᑊ ɘ-∪∪ɔδ」
　区切れ句切れにやや間違えたアルカを喋る静。でも言いたいことは伝わったようだ。それにしても皆して首を傾げる。「紫苑、お前のどこが弱いんだよ」とでも言いたげな悪意を感じた。なによ……ハインさんまで。でもいいの、私は静のお姫様。ナイトが折角優しくしてくれるんだから素直に従おう。というか拗ねたい気持ちが一瞬で消えた。だって……凄く嬉しくなったから。
「乗るね。重いかもよ」
「それはないな」
　乗っかる。静はいとも簡単に立ち上がる。
「わっ。凄い……。やっぱり男の人ね」
「軽いな、紫苑も。今度お姫様抱っこしてやるよ。レインにはしたことないぞ」
「えへ、嬉しいです。蛍さんにはしたの？」
「ん……まぁな」
「そっか。じゃあ絶対してもらわなきゃ。んふふ」
　変な声を出す私。
h-cʌ ᘐ-ᑊ∪e，lₐ eᑐ ∪-ʌ l- ∪cɔʌ lₐ-δ lecʌ lccZ -ᑊᑐe∪-ᑐ ∪e -lᑐ ∪ecδᘐ
　えー、うるさいです、ハイン氏。
「嬉しそうだね」
「はい、乗り心地最高です。いま幸せが限界突破してます」
「はは、面白いこというなぁ。俺も心地良いよ。紫苑の身体やわこいな。制服越しだからちょっとごわごわするけど」
「なんか、えっちですね」
「え、そうかな？なんで？」
「胸とかお尻とか当たってるし」
　ん、待って。ってことはレインもあのとき……やめやめ、考えると嫉妬する。あれはしょうがない、事故だから。
「まぁこの姿勢じゃなあ。密着イコール性的ってのは違うだろ。総合格闘技のマウントを見てもやらしいとは思わないだろ？」
「そういえばそうですね。でもあれとおんぶは違うよぉ」
「はは」

そうこうしているうちにカルテに着いた。私は静から降りた。
「ありがとう、先生。降りたら寒くなっちゃった。アルバザードでも 12 月は寒いからね」
尤も、12 月なんてないけど。
皆、静かになる。カルテンに入るハインさん。後を続く。
「ここがカルテンです。神との意思疎通を容易にするサリュという魔力を帯びた祭壇があります」
礼拝堂を抜けてサリュの部屋へ行く。
「ここがサリュ？」
「場所じゃあなくって、この石の祭壇がそうです」
「……宗教で生贄の羊とかを捌く祭壇があるが、あれに似てるな」
「そういえば。まぁ羊捌いたりはしませんけどね」
ハインさんが呪文を唱え、祈る。すると光が溢れてアルデス王と女王ルフェルが現れた。久しぶりだなぁ。神さまに久しぶりっていうのも変な気持ちだけど。
-ᔑᛇeᔐ ᘐh-cᐱ -ᑊᑢeeᐳᔐ ᛇel -ᔑᑢ-leᔐ ᑢ -ᔑᕒ-Z-ᔑᛇ，-ᔑᔓe -ᑊᑢeeᐳᔐ ᛇel ᐱɔc e h-cᐱ -ᑊᑢeeᐳᔐ，lecᐱ ᖻᘁc- ᛇel -ᔑᑢeᐱ-，ᒐcɔᐱ ᛇel -ᔑᑢ-ᐱ ᑢ -ᑊᑢᐸc-，ᒐcZᖷ- ᛇel Ⅴ-ᐱɔ-ᐱ e ᒐcɔᐱᘐ
アルデス王が一人ずつ名前を確認する。一人ひとりハルマニアで返す。胸の前で手を組む作法で、忠節と士気の高さを示す非言語だ。私はレインの真似をする。静は私の真似をしていた。やはり神が相手ともなれば素直に従うようだ。
ᛁᐸeᔑ ᘐleᐱ- ᔑeᑢ lclcᔐ Ⅴ-ᔐᑢ ᛇeeᐳᔐ ᒐelᑢeᔐ ᖷɔᖷɔ Ⅴ-ᔐᑢᔑc- ᔐecᐱ le leᐱ- ᑊ-ᐸ - lclcᔐ,, ᖷcᑢ，lecᐱ ᖻᘁc-ᘐ
ᘐ-ᒐ，ᒪᖾ-ᘐ
ᘐc> ᑢᖾ，ᔐɔl ᑢᖻ lecᐱ elᐸc cᔐᑢ ᒐcɔᐱ ᒐel >cⅤ- e ᛇᖾᖾᔑᛉ- ᖻᘁc-,, ᖻ-ᐱ ᑊ-ᑢ ᑢᖾ ᛇɔl ᛇel -ᔑᑢ-ᔐeᐱ - ᔐ->- e lecᐱᔐ,, -ᔑᑢ-ᔐeᐱ ᑢcᐱe> Ⅴcᔑ ᑢᖾ-ᐱ eᐱᑢɔ ᑢᖻ -ᔑ ᔐeᐱ >cᖻ ᔐɔᐸ -ᔑᑢeᔐᘐ
ᘐ>cᔐeᐱᑢ-ᐱᑢ ᛇ-cZ ᛁᐸeᔑᘐ
私は静に同時通訳をした。本当は不謹慎なのだろうが、神も周りも事情を察して黙殺している。
「レインにはエルフィとアルタセンが与えられました。エルフィは前に私がつけてた髪ゴムみたいなもので、厳密にいえば、消費魔力が半分になるアイテムです」
「魔力をあげるんじゃなかったのか。あぁ、消費を減らすことで相対的に魔力をあげてるのか。なるほど」
「先に確認しておきますけど、ヴァストリアはアシェットの所有物だったものです。28 人の名前は覚えてますよね。アルタセンはリナの魔石です。息子ダルケスを失ったカルザス――ルフェルの父です――が流した涙が宝石になったものです。身に付けることにより強大な魔力を持ちます」
「こっちは魔力をあげるのか。つまり召喚用にレインの魔力をアップする作戦だな」
「はい」

ꓘeᒧ ᔕᒐcɔΛᔕ
「はい！あ、-ᒐ ᒪ-cZ」
　ルフェルは空中から見慣れた杖を取り出した。
ᔕlеΛ ᑕᓀ eᑕ ᒪ-Z - ᑕЧᓀ Λ-，ᒐcɔΛᔕ
「>cᔑeΛᑕ-Λᑕ ᒪ-cZ„ 先生、これが魔杖ヴァルデよ」
「あぁ、剣道に使われたやつな」
「そ、それは言わないでください。これがあれば玲音の書を使ったときの威力が超強力になるわ」
「凄いな……」
ᔕ<-ᐠ ᑕᓀ„ h-c ᑕЧᓀ ScΛᔑ ᔑeΛ ᑕᓀ >-ᒪc eᑕ ᑕɔ，>-Λ- cᑕeΛ -lᑕ<c-δᔕ
ᔕ->….-ᔨ>-ᒪcɔ ᔑeᑕeδᔕ
ᔕ-ᒐ，ᑕᓀ -lᐠ ᔑcl -lᓀᓀᑕ ᑕЧᓀᔕ
ᔕ>cᔑeΛᑕ-Λᑕᔕ
　指輪をはめる。
「綺麗だな、それ。俺のブルガリの定番より良いな」
「魔輪アルマディオ。リディアの持つ魔輪です。ヴァステの戦いで竜王ティクノが悪魔アルマを中に封じ込めた指輪なの。指輪がアルカで >-ᒪc っていうのもここから来てるのよ」
「アルマって最強の悪魔じゃなかったか。それ、危ないよな。ああ、ᒪ-cZ lꓘeᒧ，ᑕᓀ eᑕ -ᔨ>-ᒪcɔ„ ᑕ-l ᑕᓀ eᑕ VcΛᒪδ」
ᔕ-ᒐᔕ 女王は微笑む ᔕΛɔΛ l-<cᐠ -ᔨ>-ᒪcɔ - ᒐcɔΛ >cl ᑕЧᓀ -lꓘc lclcᔑ ᑕcc- -ᒐel Λ-„ >ɔΛ -ᔨ>-ᒪcɔ eᑕ l->c >-Λ ᑕᓀ (cl ᒪee>ᔑ -ᔨ>- ɘɔᑕ Λ-Λ ᑕ-l ᑕᓀ eᑕ -lᓀᓀᑕ VcΛᒪ ɔl el ᑕcc- ɔleᔕ
「え……申し訳ない、ゆっくり区切って簡単な語彙を使った文ならば理解できるのですが。えと、-Λᑕeɔ >-Λ -Λ….ええと」
　ルフェル王はゆっくり首を傾げてアルデス王を見る。
ᔕᒪЧᓀᔑᔑɔᓀ -ᒧᒪeᔑ，leΛ- -lΛ- VcI elᒪ lᓀ-Λᑕ ᑕeᒧ„ ᑕe- ᒪee>ᔑ ɸeᒧᑕ -lᐠ leΛ- --Λᔕ
ᔕᒐ-> ᑕc，lᓀ-ᔕ
ᔕᑕЧᓀ ᐣeᐣl ᒪc- eᔑᑕel <ccΛ- leΛ-δᔕ
ᔕ>ɔΛ eᔑᑕel >-cᔑeᔑ cl elᒪ ᑕ-l ᑕᓀᓀᔑ eᑕ elᒪ ᑕ -ᑕɔl-ᔑ„ l- -ᔑ eΛ ᔑeᒧ elᒪ le >c leᐣ-cᔕ
ᔕ-ᒐ>-….ᒐɔ> ᒐcɔΛ，ᑕЧᓀ >cᓀ e> eᔑᑕel-Λ cᔑᑕ eᔑᑕelᔕ
「ᒐcЧᓀ，ᒪ-cZ„ なんだか私が通訳に指名されました」
「ん？元々そういう手筈じゃなかったのか？」
「悪魔ベルトが言語を司ってるんですが、彼は中立なので通訳にはなってくれません。あと、サールの一族にエステルという神がいて全ての言語を知ってるんで呼ぼうとしたんですけど、このレカイという世界に存在しない言語は接したことがないそうです」
「そりゃそうだろうな。神だって接したことのないものは知るわけないだろうよ。で、さっきルフェルさんは何て言ったんだ」

「アルマディオは愛の力で悪魔アルマを封印してるんです。私にくれたのは愛を感じたからですって。えへ……」
　赤くなる私。思わず顔がにやけそうになるけど我慢。
-ᔑℓeᒍ ᘐ-ᔑᒐe -lᑕee>ᒍ, leᐱ- l-< - ᑕc Ꮆal ᑕa <ᔑecᘐ
　腰から刀を外すアルデス王。前に召喚省で見たとき気付いたんだけど、アルデス王が装備しているのは刀なのだ。要するに刃が刀身の両側についてるか否かの違いなだけで、刀なら日本というのは大間違いなんだけど、なんとなく刀と聞くと和風なイメージがあるから意外感はある。さすが異世界といったところかな。フランスだったら両刃でしょうねぇ。
-ᔑᒐe ᘐ>cᒍeᐱᑕ-ᐱᑕ ℓ-cZ -ᔑℓeᒍ,, -ᐱ V-ᐱɔ cl ᑐɔᐱ ᑕaᘐ
「あれはキルティクノという刀です。アルデス王のお父さんの竜王ティクノが斬られた剣」
「斬ったんじゃなくて斬られたの？」
「はい。悪魔最強の剣士キルセレスの愛刀の一本です。なんでも、神速の居合剣だとか。ティクノは剣を刺されたまま撤退し、それ以降家宝にしていたそうです」
「神速か……確かに。閃光が走ったのかと思ったらシェルテスが真っ二つになって驚いたよ、こないだは」
lᐸeᔑ ᘐᖻ-ᐱ ᐱɔᐱ l-< ᐱɔᕈ-, -ᔑᒐeᘐ
ᘐ>cᒍeᐱᑕ-ᐱᑕᘐ
「ノバ。ヴァストリアのひとつです。ンムトのもつ神拳。格闘能力がアップします。格闘技同様、防御も自らの身体で行います。物凄く身体が頑丈になるそうですよ。アルシェは前衛みたいね、やっぱり。中距離戦のキルティクノと近距離戦及びガード用のノバか、なるほど」
「俺のはなんだろうなぁ……」
lᐸeᔑ ᘐᒐcZᑐ-ᘐ
「は、はい。-ᒐ ℓ-cZ」
　女王はゆっくり平易に喋りかけた。
lᐸeᔑ ᘐᑕᖻ Ꮆl ᑕa <ᔑec,, ᑕa <ᔑec eᑕ V-ᐱɔℓc-,, ᒍeᔑeᐱ V-ᐱɔᑕ ᔑcℓc- ᑐɔᑐɔ V-ᐱɔℓc-,, ᑕaᔑ, ᑕᖻ >ca V-ᐱɔ ᒐcɔᐱ ᑐɔᑐɔ V-ᐱɔℓc-ᘐ
「あぁ、分かります。-ᒐ, ᐱɔᐱ V-ᐱɔ V-ᐱ ᒐcɔᐱ ᑐɔᐱ V-ᐱɔℓc-,, 紫苑、このヴァノディアって剣は？」
「守護剣ヴァノディア。セレンのもつ守護剣です。アルディアの時代に、セレンがヴァルファント神と一騎打ちの試練をして勝利した際に褒美として貰った剣です。セレンはその剣でキルセレスと戦って勝ちました。キルセレスが一度滅んだとき、セレンの剣にキルセレスの力が流れ込んできました。そうしてキルセレスの力を得たその剣は紛れもなく最強の剣となったんです。セレンはその剣に「大召喚士リディアを守る」ということと「霊界を守る」ということを掛けてヴァノディアと名付けたんです」
「幻想的な剣なんだな。後衛の召喚士を剣で守るのはいつの時代も変わらないんだな。う

ん、気に入ったよ。さすが神さまの選択だ。さしずめこの剣はヴァノシオンってところだな、俺にとっては」
「ふふ、いいですね、その名前。勝手に使っちゃいましょうよ。あ、アルテナさんが怒るかな」
　くすくす笑う私。
ᑫᛇ-cZ ᛁᐸeᔑ, ᒐcZᑋ- ᔑccᐱ-ᑋ Ⅴ-ᐱɔᛇc- ᑕeᔑ,, ᚷcᔑeᐱᑕ-ᐱᑕᔕ
-ᔑᛇeᔑ ᑫᔑɔᐱ -ᐱ ᑕ-ᐱ ᐱ-ᘐ Ⅴ-ᐱ lᘐ -,, ᒐcZᑋ-, ᑕc ᔑ-ᕫ ᑕᘐᔕ
　アルデス王は１枚のコートを出してきた。静はお礼を言って羽織る。
「あ、アルシャンテですね、それ。暖かくなったでしょ」
「あぁ。これ、トレンチみたいだな。それにしても羽みたいに軽いよ。肩凝らなくて助かる。しかも暖かい。色が黒で目立たないのもいいな。俺のアクアスキュータムはベージュっぽい色だから。黒だと生徒が萎縮しちゃうんだよ」
「アクア……？それは良く知りませんけど。アルシャンテは空調完璧ですよ。魔法の力で夏でも全く暑くなく、冬でも寒くありません。それさえ着ていればどこの国でも生きてけますよ。でも真髄は勿論そこじゃないんです。潜在するヴィードを全て引き出してくれる優れもので、元は悪魔アルマが纏っていた服なんです。ティクノの攻撃をかわす際にアルマはその服を盾にして避けました。服は衝撃でどこかへ飛んでいき、行方知れずになってしまった。けどその後、アルディアでラルドゥラが発見し、セレンにプレゼントするようにといってリディアに託したんです。リディアはそれを受けてその服にアルシャンテと名付け、セレンにプレゼントしたんです。アルシャンテを纏ったセレンは更に強力な力を得て、アシェットを指揮したんです」
「ふぅん、結局は女の子からの貰い物か。俺のトレンチとますます似てるな。これも気に入ったよ」
「……その女の子とやらの話はスルーしませんから、後で覚悟しといてくださいね」
ᛁᐸᔑ ᑫᑕᘏ eᑕ cl,, ɔl lclcᔑ l-ᒐ ᒐe -lᑕ ᔑɔᐱ ᔑeᐱᔑ c> ᑕᘏᔑᔕ
　レインたち３人と顔を見合わせる。特に他にほしいものはないわね。神の選択にケチをつけることもないし。
h-cᐱ ᑫᑕᘏ eᑕ ᑋ-ᒐ ᔑ-ᑋ, ᛇ-cZ ᛁᐸeᔑ ɔ ᛇ-cZ -ᔑᛇeᔑ,, ᚷcᔑeᐱᑕ-ᐱᑕᔕ
-ᔑᛇeᔑ ᑫᔑɔᐱ ᑕccᔑ Ⅴ-ᔑᑕ -lᘏᘏᑕ ᒐelᑕeᔑ ᑋɔᐱ ᑕᘏᘏᔑ ᔑeᑕᔕ
　そしてアルデスはシュッと鋭い光を放ったかと思うとその場から去った。瞬間移動って漫画とかじゃよく見るけど、目の前で実演されると凄く不思議だ。というのも網膜に残った映像と脳の認識の遅さのせいで残像が残るからだ。
「わ、先生、いきなり消えてビックリですよね。残像残りません？」
「そうか？思ったよりゆっくりだったけどな。残像も特に」
「なんで……そうか、先生のヴァストリア、近接戦闘用だから運動神経や脳の反射神経が鋭くなってるのね」

「あぁ、なるほどな」
ᛁᚲeᛖ ᚐᒐeIᑫeᒍ ᚣeᚗᑫeᒍ ᚣ-ᚣ c> ᑫaᛖ >cI <cᒍ eᑫ ᒐ-ᚣᑫe,, ᒍɔᚣ IcIcᒍ ᒍ-ᚗ Ia, ᒍeᑫ Ia ᛖeᑫᚐ
h-cᚣ ᚐᒐcᛋa, ᛇ-cZ,, ɔI -ᚣᒍ ᒍ-ᚗ Vcl I-, ᒍɔᚣ -ᚣᒍ ᑫɔ -ᒐ ᒍecẟᚐ
ᚐɔI ᒍɔ- ᒍɔᚣ >caᵴ V-ᑫ ᚗ-Iᑫ >ᛋaᒐeᑫᚐ
私は横から口を挟む ᚐeᚣ -Iᚗ-Iᑫ ᑫ-I ᚗ-Iᑫ ᒍeᑫeẟᚐ
ᚐ-ᒐ, ᒐcɔᚣ, ᚗ-Iᑫ >ᛋaᒐeᑫ -ᛁc ᛇaᛖᚣe ᒍ-eᚣ ᛇaᛖᚣe e >ᛋaᒐeᑫᚐ
私は頭の中で計算した。今日が満月だから……。
h-cᚣ ᚐ-ᚣᒍ ᛋac V-ᚣ I- ᒍ eᚣZ, ᛇ-cZᚐ
ᛁᚲeᛖ ᚐ-ᛖᔕ-Z-ᛖᛇ ᛖeᒍᑫ IcIcᒍ,, -ᑫᑫe....ᚐ
ルフェルもまたアルデスのように光の中へ消えた。そしてサリュに静寂が訪れた。私達は礼拝堂に戻って座った。
アルシェがハインさんとレインと話している。
「さて、これからどうするかね」
「ルフェル王の話だと、今日はシェルテスが弱っているのでチャンスだそうです」
「つまり、今夜は狼狩りってことか」
パシっと拳を手の平に打ち付ける静。教師の顔がすっかり失われてるわ。これが高校のときの不良だった静なのかしら。だとしたらかなり無茶してたんじゃないかな。
「もし見つけられなかった場合は次の新月前まで待ちます。シェルテスが最も強くなる日です。同時に今月でシェルテスが回復すると思われます」
「つまり潜伏を終了して月の神を狙うというわけだな。彼らとも共闘したいところだが、彼らはアトラスでは戦えない立場だったな」
「はい」
「じゃあ今日は次の新月に確実に戦闘か」
「あ、いえ。王は ᚗ-Iᑫ >ᛋaᒐeᑫ と言ってたんです」
「つまり？」
「ᚗ-Iᑫ は「〜まで」という意味なんですけど、対象を含まないんです。以下じゃなくて未満みたいなものですね」
「つまり新月を含まないで「新月まで」って意味なのか。アルカは面白いな。日本語だとその言い方はややこしくなる」
「珍しいですね、先生がアルカを褒めるのって。ええと、新月の前日ってことは……」
ᚐᒐcɔᚣᚐ
アルシェに呼ばれた。もう出発するらしい。
ᚐ-ᚣᒍ ᛋac ᚗe ᚗcᑫ ᒐeIᑫeᒍ ᑫcᒐ h-cᚣᚐ
ᚐeᚸẟ ᛇᛋaᒍᒍɔa ᒍɔ ᑫɔẟᚐ
ᚐh-cᚣ ᒐ-I -ᑫa, Ie ᒍ-IᛋaI-ᚣ -ᛖ -ᛖᑫeᒍ c> ᒐcᛖᚐ
ᚐᑫeᑫ -ᚗ IeᚣI- ɔᚗᑫ ᛖeᚣᒍ - Iaẟᚐ

ᘐh-ɔ ʔɔʌ -ʌᔑeᘐ
　アルシェは左腕を上げて直してもらったアンセを見せる。
ᘐh-cʌ ᔑ-ᑢeᔑ -ʌᔑe ᑢcleᔑ clᘐ
　腕輪型アンセを人数分配るアルシェ。ハインさんの手配らしい。
「わ、アンセだ。去年これがなくて私はどんなに苦労したことか！」
「へぇ、面白いな。時計は外したほうが良いかな。安いものじゃないから壊れると嫌なんだが」
「アンセは時計にもなりますからね。でも地球製のほうが使いやすかったらそのままでも良いんじゃないですか？」
「そうだな、時計なんかでウダウダ言ってる場合じゃないか」
　静にアンセの使い方を教える。私も見よう見真似で覚えたものだから、最低限の機能しか知らない。
「こりゃ凄いな……地球にもいつかこんなもんが普及するのかな」
「ふふ……」なんか驚く静を見て異世界人のくせに私まで誇らしくなった。どうよ、アルバザードは凄いでしょ、みたいな。昔の日本人が渡英して帰国して、次に仲間と再び渡英したときに感じる先んじた優越感と同じなんだろうな。
　私達はカルテンを後にした。
「ハインさんは来ないのか」
「いつでも召喚できるように待機です。見つけ次第アンセで報告します」
「なるほどな。しかし本当にこの服は暖かいな。外に出ても体感温度が変わらないよ。気温にあわせて最適温度に設定してくれるのか。どんなエアコンよりも優れてるな。この服、くれないかな」
　笑う私「それはムリですよ。神のアイテムですから」
「だよな。紫苑、寒いだろ。お父さんのコートは心がこもってるけど、一応こっちは神のアイテムだし」
「そうね、父の愛も神には勝てないみたいよ」私はちょっと寒さで震えた声になる。
「おいで」と言ってコートを開き、私を片腕で抱きしめてくれる静。思わずうっとりする。あぁ、こういうシーン何度も妄想したわ。幸せ……。
「暖かいか？」
「うん、気持ちも暖まっちゃった」
「そりゃ良かった」辺りの警戒を怠らない静。
ᘐ--，ᒐcZᔑ- ᑢ-ᔑeᔑ ᒐcɔʌ ʔɔᔑɔ -ᐯᒐ-ʌᑢe,, ʌɔʌ ʌɔ> ᛁ-ᘐ 前方のレインがアルシェに喋る
ᘐʌɔ> ʌɔ>....ʌɔʌ ᑢ-ʌ ᛁ-ᒐ ᔑɔʌ- ʌccᑢ Ɥ₰-ᘐ
　じっとアルシェを見るレイン。
ᘐ- Ɥ-δᘐ とだけ言ってアルシェは辺りを警戒する。レインは暫くアルシェに何か言いたげにしていたけど、やがて周りを警戒しだした。

アルシェって……。

レインの考えでは、シェルテスは私たちとハインさんの接触を警戒していたはずだそうだ。ハインさんと接触すればアルデスたちと接触し、討伐隊が結成される。だからアルバザードに潜伏して様子を伺っていたはずだ、と。

ハインさんはエスバルトで隠れ蓑を使ってここまで連れてきてくれた。したがっていまカルテを歩いている私達はシェルテスの目にはまだヴァストリアを貸与されていない風に映るだろうとのことだ。確かに見た目には単なる武装をしている風にしか見えない。

シェルテスは私達がのこのこカルテに来ることを待っていたのではないかということだ。だからこうして歩いていれば事情を知らないシェルテスのほうから襲ってくるのではないかというのはレインの考えだった。

恐らくレインの考えは正しい。潜伏しているのはアルバザードの中でも私達を監視できるアルナだろう。更に言えばカルテか召喚省の辺りを警戒してるはずだから、カルテの北側に潜伏している可能性が高い。そういうわけでレインの提案によって私達はカルテの北側を歩いていた。

「なぁ、カルテンに向かっていない俺たちを見てシェルテスはもうヴァストリアを持ったんじゃないかって疑わないかな」

「かもしれません。でも確信もないでしょ。こっちにとってあいつがこの辺にいる確信がないのと同じです」

「固まって探してもラチがあかんな。せめて２部隊に分かれないか」

「それ、２分くらい前にアルシェが提案してレインが却下しました。各個撃破されるって」

「各個撃破がシェルテスの狙いだったら確かに下策だな。しかしこう暗い公園を歩くだけというのも精神を消耗するな。紫苑、辛かったら言えよ。休ませるから」

「ありがとう。潜伏してもシェルテスは青い炎を隠しきれないはず。満月のせいで明るいんですけど、青い光に注意しましょうね」

「あぁ。しかし満月だからこそ歩きやすいというのもある。ポジティブに動こう。それにしてもなんでこんな暗いんだ。そんなに出歩き禁止は厳しいのか？」

「前の為政者のミロクさんが凄い厳しい改革をしたんで。おかげで治安は良くなったんですけどね。レインみたいな純潔ヴァルテはこの時代の産物なんですよ。何十年か違っただけでレインもひょっとしたらギャルっぽい格好してケータイとか弄ってたかも。可愛いから彼氏とっかえしっかえしたり、学校も行かないで友達とゲーセンに入り浸ったり、「マジうぜーんだけど」みたいな汚い言葉を使ったりね」

「そんなレインって想像つかないな。ミロクってのは随分立派だったんだなぁ」

ギョッとする私。

「それは歴史を紐解くと考え変わるかもしれませんよ。簡単にいえば成功したアドルフ＝ヒトラーですから」

先生は「ふぅん」と言って流した。大したことではないかのような口調だ。意外だった。

カルテの北側を出てしまい、北区に出る。少し北区を探すことになった。途中人影があって警戒したのだが、夜間のパトロールをしている警官だった。アルシェが顔パスすると恭しく挨拶して去っていった。顔広いなぁ。
「そういえばルフェルさんってさ、紫苑のお母さんに似てたよな」
「え？そうかな」
「あぁ、こう……全体的に。やっぱ女神だけあって、ありえないくらい美人だな」
「それ、遠まわしに私を褒めてくれてるんですよね。でも絶対お父さんの前では言わないでね」
「うん、分かってる。というか最近分かってきた。アルティス教の神って実在するだけあってわりと普通なんだな」
「どんな偉い人でも会ってみれば意外と普通の人ですよ。神さまも悩むし冗談言います。人間と同じように本能もありますよ。３大欲求とか」
「系譜があるってことは性欲もあるんだよな」
「はい。神さまの恋愛って想像しただけでも素敵じゃないですか？」
自分で言っててどきどきしてきた。静は「そうだな」と肯定した。
「でも、私達の恋愛ほど素敵な恋はないと思うんです」と言ったら優しく微笑んでくれた。嬉しい！
-ᄊᄂe ᘏᄂcɔᐱ, ᑕc eᐱ ᄂ-ᄂeᔑ -ᄊᄀ- - ᄂcZᄀ- <cᐱ ᑕc ᔑeᄊ-ᑕ ᐱɔᔑJe ᄀɔlᑕ ᔑcl -ᑕɔl-ᔑᛑ ᘏ
ᘏᄂ-ᄂ-ᑕ ɬᘐ ᄀ-l,, ᔑɔᐱ lᘐ ᄂɔɔᄀ ᔑeᐱ - lᐸeᄊ ɬ-cZ ᔑeᑕeᛑ ᐱɔᐱ lɔ lᘐ ᐱɔɬ lecᐱ h--ᔑ -lᑕ<c-ᘏ
ᘏV-ᐱᑕ, ᐱɔᐱ eᐱ ɣ-ɬ-ᑕ,, ᄂ-ᄊ -ᐱ,, ᑕcɔ -ᐱ ᐱ-ᑕ Z-l >-ᐱ -ᐱ ᑕe> elɬ Z-l, ᑕee, c>ᖻᘐᘏ
アルシェも気遣ってはくれるんだけどやっぱり日本語に抵抗があるみたい。ひたすら日本でアルカを喋り続けたレインを煙たがった静と同じね。言語の壁っていうのは厚いんだか薄いんだかよく分からない。
ᘏᄂcɔᐱᘏ レインが私に近寄ってきた。私に何か言おうとして、静をじーっと見る。静は気を利かせてアルシェのほうに寄って精一杯のアルカで何か喋りかけた。
ᘏᑕɔᛑ ᘏ
ᘏᐱɔᐱ V-ᐱᑕ ᑕᖻᘐ >cl ᐱɔᐱ ᑎlcᑕ-ᑕ ᖻ-> ᐱchɔᐱɣɔ c> ᔑeᔑ,, ᑕᖻᘐ ᔑcᐱ-ᑎ ᐱɔᐱᛑ ᘏ
ᘏᑕee,, ᄂcᐱᑎ ᐱɔᐱ ᐱ-ᑕ Sɔ -ᑕc ᑎ-l ᑕeᑕ ᐱɔᐱ ᑕ-ᐱ ᔑcᐱ ᔑcc- -ᄊᄀ- ᄊ-ᔑ <ɔᘐ ᔑ- ᔑ-lᑕ,, ᔑɔᐱ ᐱɔᐱ -lᐱ- ᔑeᐱ ᐱ- ᑕᘐ-ᐱᘏ
ᘏ- ᖻ-, ᐱ- ᐱ-ᘐ >cl ᑕeᔑcᑎ ᑕᘐ,, lee ᄂcɔᐱ....ᘏ
その瞬間、静が「後ろ！」と叫んだ。私だけが反応できた。
振り向くと青白い炎が尾を引きながらレインの背中に飛び掛っていた。日本語に慣れていればレインも反応できただろう。或いは咄嗟に静がアルカで警告すればレインも反応できただろう。

私はとっさに炎を蹴り上げるが、届かない。炎はレインに飛び掛ると彼女を押し倒した。悲鳴を上げながら地面を転がされるレイン。

「シェルテス！」

狼化したシェルテスはレインの上に乗っかると首筋に噛み付こうとした。レインは悲鳴を上げながら咄嗟に両手で首をかばう。シェルテスは容赦なくレインの手首に噛み付いた。空気を引き裂くようなレインの甲高い悲鳴。その瞬間、アルシェがノバを装備した拳でシェルテスに近寄り、下段ストレートで突き飛ばした。シェルテスはノバのことを知らなかったのだろう。人間の拳などものともしないと思っていたようで一切避ける気配がなかった。ところがノバを装備した拳は大地を割らんばかりの勢いを持つ。ストレートを食らったシェルテスは「ぎゃう」っと叫ぶと地面をのたうちまわった。

しかし鳴り止まないのはレインの悲痛な叫びだ。顔を真っ赤にして泣き叫びながら自分の手首を押さえる。鮮血が噴水のように溢れる。木陰に隠れていた鳥たちが鳴きながらバサバサと逃げていく。

「レイン！」

玲音の書を持って走り寄る。……手首が半分なくなっていた。入れ替わりで鬼の形相をした静がシェルテスに駆け寄っていった。

レインの手を看る。思わず顔を顰めた。手首の半分が食いちぎられ、間欠泉のように血が吹き出している。白い骨が血の奥に見え、右手は力を失ってぶらーんと垂れ下がり、今にも手首から千切れ落ちそうだ。

ᑲᑕᕽ-ᔑᔑᑐ ᒪecᐱ，ᑕᕽ-ᔑᔑᑐ„ ᐱᑐᐱ ᖁe- ᑕᖃᓀ ᒐ-ᐱᑕ-ᖇᔕ

玲音の書を開いてプロティスの魔法を唱える。レインは血を塗られたかのよう顔を赤くし、父親の名前を繰り返し泣き叫んでいる。あまりに悲痛な声に私は胸と胃とお腹が痛くなった。

魔法を唱えつつチラっと後ろを見る。静がヴァノディアを振りかざして起き上がったシェルテスを斬りつける。１撃目を跳んで避けたシェルテスだったが、運動能力が強化されている静は風のように追撃をした。あまりに俊敏な動きに面食らったシェルテスは袈裟切りを見事に食らって真っ二つになる。シェルテスの獰猛な咆哮が夜闇に響く。

そこにすかさずアルシェが追撃を加える。しかし居合の練習などしたことがないのだろう、抜刀が一瞬遅れてしまい、ギリギリのところでキルティクノの一閃は避けられてしまう。一度これによって真っ二つにされているシェルテスはノバがヴァストリアであると悟った瞬間に腰のものがかつて自分を真っ二つにしたキルティクノだと悟って警戒したのだろう。

ᒐelᑕeᔑ ᑲᕈeᑐᖇ ᑕccᔑ ᑕcl Ⅴ-ᔑᑕᓱc- ᔑcᐱᖇᔕ

シェルテスは怒鳴ってから低い唸り声を上げ、私達を睨むと青白い炎になって霧散した。

-ᓱᒐe ᑲᒪeᐱ elᐸᖇᔕ

アルシェがすかさず第２撃目を放つが、キルティクノの一閃は霧を裂いただけだった。

ちょうどそのときプロティスの魔法が発動した。魔法というのは凄いものだ。こんな障害の残る絶望的な傷でさえ跡を残さず直してしまうのだから。これでさえ小怪我に入るとは、アシェットはどんな戦いをしていたのだろう。

レインは嘘のように泣き叫ぶのを止めた。手を見て不思議そうにしていた。ところが助かったと分かると恐怖心が腹の底から湧いてきたのか、ぶるぶる震えだして低い声で唸りながら再び泣き出した。

「紫苑、すまん、取り逃がしてしまった。教師もクビ決定のようだ。再就職だな」

重い空気を避けようと静が冗談めかして言う。静も十分ショックだったはずだ。だが私は彼の冗談に付き合っている精神的余裕がなかった。私も本当は何もかも投げ出して泣き叫びたいくらいだったから。それにあのレインの傷とこの姿を見て何よりも怖くなってしまったから。

これが悪魔の力……しかも弱っていてこの力。新月の前になったら一体どうなるっていうの？前衛の静とアルシェは防御力が強くなってるから噛まれてもほぼ無傷でしょうけど、私たち魔道士は生命力と防御力に関しては何も強化されてないのよ。攻撃を受ければすぐに死んでしまう。

私は震えた。怖い。帰りたい。死にたくない。

勝てっこないじゃない、あんなのに。何、今の？戦闘ってこんなに短いの？空手の試合よりずっと短い。18 年も付き合ってきた手足が一瞬にしてもぎ取られてしまう。そんなのありえない。

「レインは大丈夫か」

私は何も答えられなかった。頭の中はすっかりどうやって地球に逃げるかばかり考えていた。最低な女だって言われてもいい。こんなところに来るんじゃなかった。

レインの震えを止めるために私は抱きついた。レインはあさっての方向を見ながら発狂したように泣き叫んでいる。喉が詰まったらしく、ごほごほと咳をする。私が背中をさすってあげても少しも回復しない。地面に付けた膝に生暖かい感触を感じた。暗いのでよく見えないが、足元を見るとレインが漏らしたようで、水溜りができていた。

魔法で傷は癒えても PTSD は直らない。これは全く予想してなかったことだ。計算外。こんなこと実戦を積まないと思いもつかないことだ。小説の読みすぎで回復魔法を甘く見ていた。怪我をして体力が下がっても回復すれば元通り――そんなことは小説の中の話なのだ。どんなに傷が治ろうが、手首を食いちぎられたときの痛みと恐怖は少しも癒えない。

レインの背中をさする。静とアルシェが駆け寄ってくる。風のせいで２人はレインが失禁したことに気付いたみたいだけど、２人とも気遣って何も言わなかった。レインは恥ずかしがる余裕さえなくて動物みたいに顔をくしゃくしゃにして泣いていた。きっと私以上にこの子のほうが逃げたいに違いない。

２人ともレインの状況を見て言葉を失ったようだ。男の人でもやはり戦いは怖いと思うものなのだろうか。この２人のような勇敢な男性であっても。アルシェをチラっと見ると

彼は平然として辺りを警戒していた。シェルテスの襲撃か動物を操ってくることを警戒している様子。

一方静を見ると、先ほどは勇敢に戦っていたものの、膝が小さく震えていた。ムリもない。静はヴァノディアを杖代わりにして余裕の表情を見せている。多分「彼女にビビりって思われたら終わりだ」って思ってるんだろうな、とてもプライドの高い人だから。大丈夫、先生は勇敢です。震えるなんて当然のこと。しかしアルシェは平然としてるわね。元々こうだったっけ？それともフェンゼル戦で慣れたのかしら。逆に平然としていて不気味で、気持ちを共感できない分、却って頼りがいがない。

私はこのときアルシェは自分と交わらないタイプの人間なのではないかと感じた。私が彼のことを運命の人だと最後まで思わなかったのはこういうところの集積が原因かもしれない。静のほうがきっと弱く、それゆえ私のことを分かってくれるのだ。男って強ければ女が満足すると思ってるのかな。だとしたら酷い勘違いよね。私は徐々に恐怖を失って、いつもの雑念モードになっていった。

しばらくするとレインが泣き疲れて声を小さくした。私は背中をぽんぽんと叩いて起こしてあげた。水音を立てて足元の水が私にも撥ねるけど、私は黙ってる。殆ど介護ね。レインはよろよろ立ち上がる。

「とりあえず今日はこれで終わりだな。あの様子じゃフルパワーになる新月前までもう出てこないだろうな」苦々しく言う静「ここで取り逃がしたのが何より痛かった。あとちょっとで仕留められたんだがな」

「ごめんなさい、私が魔法を撃ってれば……」

「いや、あの状態じゃ誰もがレインの治療を指揮したはずだ。俺たちは甘いんだよ、多分」

「え？」

「戦闘に慣れたアシェットだったら死なない怪我は戦闘後に直したと思う。攻撃時は一斉に攻撃したはずだ。地球だって訓練された兵士ならいまの傷は浅いと見て攻撃に集中したと思う。シェルテスはヴァストリアがないと思って油断してたから、俺たちにとっては絶好のチャンスだった。でも、生憎俺たちも精鋭兵じゃない。あの場面じゃ誰もがまずレインを助けようとしたはずだ。誰が玲音の書を持っていてもな」

「そう……ですね」

「今回のことで思ったよ。俺たちの判断は――」

いつの間にか私のミスを全員のミスにすりかえる静に優しさを感じた。

「――戦闘の点で見れば失格だ。でも人間的には合格。戦士っていうのはきっと人間性を常識人より下げないといけないんだろうな。塹壕に隠れた兵士ってさ、真横にいる友軍の兵士が撃ち抜かれても構わず戦ったらしいよ、人によっては。そういう極限状態での非常識さを俺たちは身に着けないと、次は無いかもしれないな」

「そうですね……先生の言うとおりだと思います」

「取り逃がしてしまったけどポジティブに考えよう。俺たちは戦闘経験を得た。次回は教

訓を活かせる。それに元はといえば今日死ぬかもしれないと思ってたが、その相手を追っ払うことができたんだ。勝ちには違いないよ」
　ぎゅっと肩を握ってくる。私は小さく頷いた。レインをアルシェに託す。アルシェはレインを抱きながらアンセでハインさんに報告をする。
「ごめんなさい、反応鈍くて。蛍さんみたいにイラつかせちゃってると思うんですけど」
「いや、しょうがないって、こういう状況じゃ。むしろショック時の紫苑と同じくらい常に反応が鈍かった蛍に改めて驚きだ」
　私は引きつった笑いしか見せられなかった。
「さて、凱旋するか。どこに行こうか。召喚省、カルテン、レインの家……俺にはそれくらいしか思いつかないな」
「本当は地球がいいんですけどね」
「ん？あぁ、そうだな。俺も自分のベッドでできれば寝たいよ」
「じゃなくて……！」
　私は悲痛な顔で先生を見た。先生はそんな余裕を見せてるけど、本当に怖くなかったの？でもそれを言ったら私、戦意を失ってしまいそうで……先生に呆れられそうで……だから黙ってた。
「……なんでもないです」
　身体がバラバラになりそうだった。男の人って凄い。どうしてそんなに勇敢でいられるの？私は空手の試合をして調子に乗ってた。フルコンの試合も喧嘩も怖くないって。でも違う。悪魔はこわい。
　アルシェがポンと肩を叩いてきたのに異常に敏感に反応してしまった。ダメ！私はレインを守る勇敢な使徒なの。怖がってると悟られてはダメ。アルシェにも静にも戦友と認めてもらわないと私の存在価値がなくなっちゃう！
Ꮾᒐcɔᐱ，h-cᐱ ᒐ-l ᒣ-ᔑᑕeᐱ ᑕeᔑᏮ
Ᏹ- Ꮆ-ᔕ ᔑɔᐱ leᐱ- ᐱc-ᐱ -ᒐ lecᐱ cᐱ，ᔑeᑕeᔕᏮ
Ᏹlᵶ ᐱ- ᒐ-l Ꮆ-c ᒣɔᒣᔕᏮ
Ᏹᑕeɔ >cl ᐱɔᐱ ᒣe-ᔑ ᒣɔᒣᒣɔ -ᔑᑕ,, ᑕ-l lᵶ ᐱ- ᒣcᐱ ᑕcᐱᒣ-,, ᔑɔᐱ leᐱ- ᐱc-ᐱ -ᒐ lᵶᏮ
ᏮᏮ-，ᒐ-> ᑕc,, 0-ɔ，leᐱ ᒐcɔᐱ eᑕ Vceᐱ ᐱ-ᖷ ᒐcᐱᒣ ᐱɔᐱ ᐱ-ᑕ Ve> -ᑕc ᒣ-lᏮ とアルシェは笑う。なんだ、アルシェも怖かったのね、「ちょっと」とか言ってるけど。
Ꮾɔᵶ，ᑕᏮᵶ ᔑɔᑕᔕ ᑕᵶ eᑕ lɔɔℓ >cl ᑕᏮᵶ eᑕ Vceᐱ ɔ V-ᔑᐱᏮ
Ꮾ-h-h-h，ᑕc eᑕ V-ᔑᐱ ᔑ-ᒣ，ℓᏮᵶᔑᔑɔᵶ ᒐcɔᐱᏮ
Ꮾ0ecᐱᖷᏮ 私はギリギリのところで恐怖を押さえ込みつつアルシェの軽口に付き合った。
Ꮾᔑɔᐱ leᐱ- ᒣɔᔑ ᒐccᑕ ᔑ- e lecᐱᏮ と言ってアルシェはレインに気付かれないよう私に目配せをした。目の先にはレインのお尻。濡れた私の制服のスカート。あぁ、なるほどね。
「先生、やっぱりレインの家が良いと思います。あそこが一番落ち着くし」
「分かった。一応警戒しながら歩こう。さっきみたいに数m離れて歩くのは避けたほうが

いいな」
　私たちは固まって歩いて東区のレインの家まで戻った。帰る前にカルテンを通りかかったのでハインさんに声をかけようかと思ったが、みんな気を使ってレインの姿を人に見せたくなかったようで、無言で通り過ぎた。とにかく４人で固まっていけないといけないし、早くレインを家に帰してあげたいからだ。意外とアルバザードの人間はプライベートでは日本人顔負けの腹芸をするものなんだな。

　家に戻ると私はさりげなくレインを連れて先に入った。明かりを付けて男たちが入ってくる前にレインを洗面所に連れていく。２人は何も言わずに居間に座っていた。会話は一切聞こえない。チラっと見たら２人は剣の手入れをしていた。傭兵ギルドさながらね。
　私はレインの部屋に行って冬用のルフィとラーサと下着を持っていった。洗面所で着替えさせる間、私は後ろを向いていた。着替えが終わるとレインは「ごめんなさい」と小さく日本語で呟いて、洗面器で私のスカートを洗い出した。まだ涙が出ていて、すんすんしゃくりあげている。レインは洗って乾かして返すからもう眠ってと言ってきた。自分が惨めなのだろう。私は「うん……」と答えて居間に行った。
「レイン、大丈夫か？」
「うん……もう寝てって。-ᄊᄂe，ᑕᓱᓭ ᓱɔl eZ e l--l e lecᐱ」
ᘐ-，　“ᑕᓱᓭ”ᔑ　ᔪɔᐱ ᔪɔl ᑕcᔑᘐ
ᘐᐱɔᐱ ᒐcᛚc- ᐸ-ᐱ ᑐɔᑐᑐɔ ᒐcZᑐ- ᑐ- eZ e ᛚᓭᓭᄊᛉ- ᛚᓱᓭᔪᔪᓭᓭᘐ
ᘐh-ᄊᔑ　-ᐱ lɔᑕ ᑕc ᐳɔᑐ Ⅴ-ᐱ ɔᑐ lecᐱ„ l- l--ᔦ ᑕc，ᐱ- ᄊec-ᘐ
ᘐᑕᓱᓭ eᑕ ᑕc- ᑕeᑕ….ᘐ
ᘐh-h，ᔦ-ᔪᔪɔ„ ᔪɔᐱ -ᐱ ᐳɔᑐ ᑐe„ ᒐcᛚc-ᘐ
　アルシェは２階へ上がっていった。
「彼はどうするんだ？」
「レインのお母さんの部屋で寝るように言いました」
「じゃあ俺は前に紫苑が寝泊りしてたところだな。お父さんの部屋だっけ」
「はい……でも私と一緒ですけど」
「え？」顔をあげる静「レインと一緒じゃないの？あの子、あのままほっといたらまずいだろ」
　そう言われると思っていた。でもそう言わないでほしいと思ってた。だから予想通りの言葉に私は悲しくなった。ぎゅっと唇を噛んで拳を握り締める。私の異変に気付いて静が不安そうな顔をする。
「え、何……？レインのことが心配……でいいんだよな」
「はい……」喉に嗚咽がこみ上げてくるのを隠しながら答えた。
「いや」静は頭をかく。私をどう扱って良いか分からなくて困っているみたい。私、我侭で扱いづらい女と思われたくなくて無理に引きつった笑いを見せた。

「やっぱレインを守ってあげたほうがいいですよね」
「そりゃまぁ……」声が小さい静。塾での威光は少しも感じられない。
「じゃあいいです」と言ったときの私の声は泣いていた。静は「おいおい」と言って私の手を取った。向こうからスカートを洗う音が聞こえる。大丈夫、レインにはバレてない。私は手で涙を拭った。
「紫苑、とりあえずレインもあっちで忙しそうだし、上で話をしようよ。２人きりがいい。ダメかな？」
　したでに出る静。こういう言い方だと私も素直に「ううん、大丈夫。いこ」と答えられる。
　２階に行って部屋に入る。鍵をかけてベッドに座る。
「大丈夫か、紫苑。今日は大変だったな」
　ストンと降りてくる静。私がゆっくり首を振ると、そろそろと肩に腕を回してきた。その回し方はとてもゆっくりで、ためらいがちだった。私に拒絶されるのではないかと思ってるみたい。
「ごめんね、気を使わせちゃって」
「いいよ、さっきのがショックだったんだろ」
「先生は怖くなかったんですか？」
「紫苑が怖がってたからね。お化け屋敷と同じ心理でさ、相方が怖がってると逆にこっちは冷静になれる。でもそりゃある程度は怖かったよ。なんせ悪魔相手だもんな」
「うん……」
「紫苑は公園で随分平気そうにしてたけど、本当はかなり気を使って勇気を出していたんだな。偉いよ、紫苑は。みんなに勇気をくれる」
「うん……だって私まであそこで慌てたらみんな混乱させちゃうから」
「そうだな。でもさ、いまは２人きりだから、甘えてもいいよ。俺じゃ足りないか？」
「ううん……」私はすっと抱きつく「世界で一番十分です」
　そうだ、私、ここでは甘えて良いんだ。レインやアトラスの守護者や救国のジャンヌ＝ダルクにならなくていいんだ。先生の胸の中が私の泣くところなんだ。そう分かった途端、身体がぶるぶる震えて涙が出てきた。しゃくりあげて「怖かったよぉ」と繰り返す。静は撫でてくれた。
「あのね、さっきシェルテスが消えたとき、私どうやって４人で地球に逃げようかって考えてたの。アトラスで何人死んでも自分が死ぬのは嫌ってこと。……軽蔑する？」
「しないよ。死は人間が最も恐れるものだ。人間最後の最後は何するか分からん。普段死ぬのなんて怖くないとか、土に還るだけとか、気絶したときや睡眠時と同じような感覚だろうなんて考えていても、いざ直面すると言い知れない恐怖に怯える。それが全ての動物に共通する感情だ」
「うん……でも私、自分で自分が恥ずかしくて。あんなにいきがってたのに、すぐ諦めて

逃げようだなんて……」
「じゃあ忘れろ。でも全部は忘れるなよ。苦い教訓だけ残すんだ。卑下する気持ちだけ捨てちまえ。それが失敗をバネにするための最善の策だ」
「そうなの？」
「そうだよ。紫苑は天才だ。努力の秀才でもあるけど、天才であることも確かだ。言い換えれば挫折が少ない。努力によるものだろうと才能によるものだろうと、負けや挫折をあまり知らない点では変わらん。違うか？いままで物凄く挫折したこと挙げてくれ。受験とかさ」
「受験が……私、浦女を受けたんですけど、お腹痛くて試験どころじゃなくて落ちたんです。それでこの高校に……」
「それは挫折だな。悔しかっただろ。実力あったから余計な。他にはたとえば？」
「他には……特にないかも」
「うん、まだ 18 になったばかりだし、人生の挫折ポイントとしてはそんなもののはずだよ。それでいい。当然なことだ。でな、挫折や不幸はさ、バネに使うんだよ。俺だって蛍のことを随分バネにした」
「うん……」
「でな、そのポイントとしては、悲しむときは思い切り悲しむこと。これがコツだよ。泣ける場所なら俺があげる。好きなだけ泣いていいよ」
　その言葉を聞いたらまた涙がこみあげてきて、私は静にしがみついて子供のように泣いた。そう……実際子供なんだよ、私は。
　５分ほど泣いた。悲しさとか悔しさとか恥ずかしさが混ざる。そして波を描いて周期的に襲ってくる死の恐怖。これが一番耐えられなかった。
「ねぇ、先生……セックスして」
「んー……？」
「お願い……。怖いの、私。怖くて身体がバラバラになりそうで。今までだったら抱きしめられれば直ったの。でもいまはそれだけじゃダメなの。先生と一緒になってないと不安で……。あのときね、凄い安心したの。ドキドキして緊張して恥ずかしくてちょっと痛くて怖くて……でもね、本当に凄く安心したのよ。私みたいな友達いない誰からも見てもらえない排他されつづけた人間を受け入れてくれたんだって思って、凄く嬉しかったの」
「そうか……抱いてるだけじゃダメかなぁ」
「ダメなの。やらしい気持ちじゃないの。愛し合ってるヒトとヒトとで繋がりたいの。それで私、生きてるって実感できる。身体の芯がカチっていうの」
「カチって？」
「こう……パズルのピースみたいに、しっくりくるの。それでバラバラになりそうな身体が心の繋がりを使ってしっかりするの――安定するの。伝わってますか？」
「言いたいことは分かるよ。つくづくアルカにしづらそうな文だな」

先生は少し避けるような顔。
「私を抱くのってそんなに心理的な負担なの？」
「いや、そんなことはないよ」
「告白するときもキスするときもえっちしたときも先生っていつも私を避けてましたよね。私が生徒だから？子供だから？……蛍さんじゃないから？」
「強いていうなら３番目だ。俺にも俺のトラウマがある」
「ならもう払拭されたでしょ？私を抱くのに何のトラウマが残ってるの？」
「いや、ないよ。単に汚したくないだけ」
「汚す……って？私は自分の汚い身体が綺麗になってくって思ってるのよ」
「汚い？嘘だろ」
「本当よ。私、自分の身体、好きじゃないの。色々考えたもん、百回千回じゃ済まないくらい。私に友達ができないのはなんでだろうって。顔が気に食わないのかとか声が汚いのかとか色々。自分が臭いんじゃないかって思ったときもあった。だから友達できないんだって思ったの。それで学校行く前にお風呂入って、学校では一言も喋らないで、休み時間にトイレで歯を磨いてた……そういう時期があったの」
静は沈痛な顔をする。哀れんだ表情。私、自分が惨めになっていくのが分かった。それとともに先生に全て任せて支配されてしまいたい気持ちになった。
「ヘンなこというし、雑念ばっかだし、性格悪いし、物事を曲がって考えるし、衒学的だし……ごめんね、こんな女で」
惨めだと思い切ったとき、先生が私を思い切り抱きしめてきた。びっくりするくらい強い力で、一瞬息ができなかったのに、不思議とその低酸素状態が心地良い苦しみだった。先生は私に何度もキスをすると胸や腰やお腹を触りながらベッドに押し倒してきた。先生は興奮しているのか、荒い息で私の胸やおなかに顔を埋めて蠢いていた。腰や脇や腕に顔を突っ込んでくんくん犬みたいに嗅いでいる。少し恥ずかしくなった。耳元や髪の毛の中にまで顔を突っ込んで鼻で撫でてきた。
「全然。どこを取っても良い匂いだ」
「えぇ？」私は恥ずかしそうに笑った「そんなこと考えてたの？」
「全部舐めてやりたい。いいか？」
「え……はい」赤くなった「あ、でも脚はやめてくださいね」
「くすぐったいの？太股が感じやすいみたいだったけど」
「ううん……立つときにレインのおしっこが脚に撥ねたの。そのまま脚を洗う暇なかったから」
「それは……危うく俺がトラウマになるとこだったな。膝より上なら安全か？」
「うん、スカートに撥ねてるはずだから」
私は天井を見ないで首をちょっと持ち上げて先生の顔を見ていた。自分が撫でられたり舐められてるのを見ると興奮する。でも、首が凝る。手を伸ばして枕を取る。あ、この姿

勢は便利。静の頭をもって髪をくしゃくしゃいじる。こうして見る静ってなんか可愛くて、つい髪の毛を弄りたくなる。

急に身体が安らいできた。代わりに、こないだの夜と似た緊張感がちょっと戻ってくる。でも今回は殆ど緊張していない。先生が優しいのは分かっているから。私って……女って何もしなくていいのかしら。こうやってただ寝てるだけでいいの？でもそんなこと聞けないしなぁ……。

私、ちょっと嘘を付いたみたい。やらしい気持ちはないなんて言ってたくせに、思ったより気持ち良い。こないだはよく分からなかったけど、何となく気持ち良い。くすぐられたり舐められたりするのが気持ちいいと思うようになった。まだ完全にそう思うわけじゃないんだけど、あぁもうちょっとそこを続けてくれたら気持ち良くなりそうなんだけどなという気持ちが起こる。それで「あ、そこ……です」と小声で控えめに告げる。そうすると先生は忠実に要求に答えてくれる。

えっちをしていると時間の感覚がなくなる。気付いたら最後に時計を見てから２時間経っていた。セックスってこんなに長いの？でも２時間もイチャイチャしてたのに私はせいぜい 30 分くらいにしか感じなかった。先生はおトイレするところに顔を近づけた。これは本当に恥ずかしい。こないだしたときもしてもらったとき、初めてヒトってそういうことをするんだって知って信じられない気持ちで一杯だった。最も汚い部分だから、見られるのでさえ嫌なのに、顔を近付けたり匂いを嗅いだりするどころか料理を食べる口を付けるというのだから。ありえないと何度思ったことか。ヒトとしてそんなことをして良いのかとひたすら思った。しかもあのときも今も私はお風呂に入ってない。今は周期的に一番匂いが少ないころ――トイレにいってしゃがむと分かる――なんだけど、それでもきっと鼻を近付けたら大変なことになる。自分でさえ鬱になるだろうに、それを先生が舐めていると考えるともう頭が思考を停止するように命令する。私は何も考えないことにした。前回は完全にそうしていた。でも執拗にされているうちに恥ずかしさが限界を超えて、却って吹っ切れてしまった。そうしたら色々考える余裕が出てきて、受け入れることができた。こんなところ凄く恥ずかしいんだけど、でもそれって私のことをそれだけ愛してくれてるってことだから、恥ずかしいけど嬉しいのだ。そして私の脚の間でもぞもぞしている先生の旋風がちょっと可愛いのだ。犬みたいで。もういいやぁ……恥ずかしがるだけ損じゃない？気持ちの良いことと受け入れられそうよ、そろそろ。だったら気持ち良いとか嬉しいって素直に思えば良いんじゃないの？そうよ……。

でも、基本的に私はしてるときぼーっとしてる。頭が泳いでるみたいな感じ。男の人はしてるときどう思ってるんだろう。先生は始終優しい顔。もっとガツガツするのが男の人だと思ってた。先生が特別なの？だとしたら女が離すはずないと思うんだけど……。一瞬蛍さんの名前が頭を掠めそうになったけど、封印した。むしろ終わった女のことより今後の浮気の心配のほうが頭をよぎった。

「ゴム、ないんだった」

「また……前と同じにしてください。もう変わらないと思うから」
　ごめんなさい、お母さん。馬鹿な娘です。
「入れるよ」と断ってきたので私は頷いた。今回は前回よりずっとスムーズだった。時間もかからなかった。入口のところがヒリヒリしてちょっと痛かったのと、中がジクっとした痛みを感じたのと膨張するような圧迫感を感じた。入ってきたなというのは分かるんだけど、なんかいまいち分からない。全体的に何となく入った感じはするんだけど、どこにどう入ったかよく分からない。生理痛と似てるかも。あれって全体的に痛くて細かい場所が分からないじゃない。よく似てるわ。
「入ったよ」と言われてああそうなのかと思った。入口らへんはあんなに敏感なのに、中はあまり感覚がない。で、一番奥……なんだろう学校で習った……奥は何があるんだっけ……あ、子宮口か、そこはツンと刺さるような感覚がある。間の部分が感覚少なくて……不思議な感じ。慣れの問題なのかな。流石に動くと分かるんだけど、やっぱり入ったときは「え、入ったの」っていう感じだ。前回もそう。入口が過ぎちゃうとあとはわりとスルスルと入ってきたから。
　何だか動いてる先生の顔って愛おしい。私は自分が女になった感じがして、いつものお転婆な気持ちがなくなっていく。繋がったことで、私は凄い一体感を感じていた。これなの、これがほしかったの。身体の芯が安定した。心が安らいだ。
「紫苑、入ってるの分かる？」と聞かれて「うん……」と曖昧に答えた。実はよく分かってなかったから。ちょっと待って……それってさ、いわゆる締りが悪いってことなのかも。本で読んだよ、締りを良くする体操とか。悪いと男の人がセックスしたくなくなるって書いてあった。そんなんで捨てたれたくない。
「あの……先生はどうですか？」
「何が？」
「その……入ってるの分かるんですか？」
「まぁ、生だしね」
　生って？生徒を意味する塾用語……じゃないよな。
「試しに紫苑締めてみなよ」
「え、そんなことできませんよ……」
「あぁ、お尻締めるのと同じだよ。筋肉が連動してるから」
　言われたとおりにしてみた。先生が動く。
「どう？何もしないより中に入ってる形がわかるんじゃない？」
「あ、はい。分かります。なんか……居るのが分かりました。形がちょっと分かる……」
　なんで女側の感覚を知ってるんだろう……大人って詳しいんだな。でも形が分かるのは嬉しかった。そのほうが繋がってる感覚が分かるから。
「あの……締めるのはずっと力入れてなきゃダメですか？息止めたりするから苦しくて」
「そんな」少し笑う「息止めてたの？そこまでしなくていいよ」

私は「うん」と頷いた。それから先生は同じような動きを繰り返してた。動き方が私の身体を気遣ってるのが分かる。ヘンな角度とかにされたり早くされると途端に痛くなるから。あと、奥で止まってゆっくりもぞもぞとか。これはわりといいかも……。それにしても巧いんなぁ……。蛍さん以外に何人の人としたんだろう。

そのうちにこないだみたく動きが早くなって、いくよと宣言された。こないだみたいに名前を呼び合ったら愛情を感じた。愛されてるのが凄く分かった。先生は止まって、ゆっくり離れてまたこっちに来てくれた。キスしてくれるのは良いんだけど、あそこを舐めた後はちょっと嫌なのよね。自分のが汚いから……。でも嫌がるわけにもいかないし、キスはやっぱりしたいから何も言わなかった。

本だと男の人は「気持ち良かった？」と聞いてくるからインランだと思われないように適度に褒めてあげると書いてあった。でも、先生は聞いてこなかった。「痛くなかった？」とか「気持ち、落ち着いた？」と代わりに聞いてくる。もしかして先生もちょっと変わった人なのかもしれないなぁと思った。私は前よりは気持ちよかったけど、それより嬉しいのほうが 100 倍も強かったから、そう聞かれなくて助かった。

お互いに撫で撫でする。今度は私も先生をなでて、してもらったように耳に息をかけたり舐めたり舌を入れたりしてみた。先生は「またしたくなるからやめろよ」と言ってきた。私は死ぬまで永遠にこうしていたいと思っていたから「じゃあまたしてください」といった。先生はもはや拒む気もないみたいだった。

「私も何かしたほうがいいよね」と聞いて先生にしてもらったようなことをしてあげた。自分でしてあげるのも嬉しいし、意外と気持ちよかった。こういうのは前戯っていうんだって。初めて聞いた。ふぅん……それじゃあ私は前戯をしながらセックスするのが一番好きなんだなと思った。前戯が気持ちよくって、セックスが嬉しいから、嬉し気持ち良いということで。でもそれって我侭なのかなぁ。

私は多分馬鹿になってたんだと思う。している間は恐怖心とかが無くなって気持ちが安定してたし先生が終われば私はまた次がほしくなって繰り返し要求する。先生は慣れてない私の膣だといくらなんでも傷つくといっていた。確かにちょっとヒリヒリしてきた。だから今度は動かないで入っててもらうことにした。そんなことで 12 時前に部屋に来たのに、お互い疲れて眠りこけたのは私の記憶が定かだと 5 時ごろだった。

2006 / 12 / 06

起きたとき、私たちは横になって抱き合っていた。制服はわりとはだけていた。先生のジャケットはベッドの上に放り投げてある。ワイシャツがボタン外れてて、しわくちゃになってた。私も制服がはだけてて、シャツの隙間から下着を着けない胸が見えていた。

うん……っと上体をあげると生理の血が落ちるのの痛くないバージョンみたいなドロっとした感触がした。一瞬何事かと思ってスカートを捲ったら、私はいつのまにかパンツを

履かされていた。お腹冷えないように気を使ってくれたみたい。うわぁ、私、この人のこと愛してる……最高よ、あなた。何があっても一生ついていくからね。

パンツを捲ってみると下り物シートがいつの間にか着けてあって、そこに先生の精子が私の下り物と混ざって白いどろっとした粘度の高いヨーグルトみたいになってた。スカートやパンツを汚したら替えが無いから、配慮してくれたんだろう。カッコいいなぁ……この人。この人が私の彼氏でいいのかしら。浮気させないように気をつけなきゃ。

先生は疲れて眠ってた。そりゃそうだよね、先生のほうがずっと運動してたもん。ゆっくり休んでね。時計を見た。あれ……うそ、６時半ってどういうこと。思わず窓を見る。明るい……。１時間半しか寝てないの？口の前に手を置いてはぁっと息を吐いて嗅いでみる。朝起きたときの嫌な匂いがしない。あ、ほんとだ、全然時間経ってないや。私、身体が火照って起きちゃったみたい。すっかり身体は具合が良い。

んーと伸びをする。えへへ、私、先生とついに夜を共にして朝まで一緒に寝ちゃったよ。今日は記念日だなぁ〜。最高の気分。体調の全てが具合良い。体中の何十億という細胞が喜んでる。ほんとよ、この感覚どう伝えればいいの？自分を構成してる全ての細胞が一人ひとり「わーい！わーい！」って喜んでるのよ、幸せって言ってるの。そんな感じ……きっと伝わらないよね。

お母さんのことは考えないことにした。でも妊娠のことは考えた。射精っていうのかな、回数でいうと何回くらいになったんだろう。私はよく分からないけど……。先生、何回くらい私のお腹の中に出したんだろう。流石にまずいよね……私まだ高校生だし。でもこれでできちゃってもしょうがないと思うのよ。まぁできないとは思うけどね、そう簡単には。できたらお母さん怒るだろうなぁ……。あーもうヤダヤダ、折角良い気分なんだから怒られるのはあとあと。

寝ている先生。いびきとかかかないんだなぁ。男の人っていびき酷くてうるさいって聞いたんだけど。クラスの子が言ってた、お父さんのいびきがうるさくて自分の部屋まで聞こえるって。サイアクーとか言ってたな。所詮その親の娘のくせに、偉そうに。

静は寝顔も綺麗。でも面白い。ちょっと目が薄く開いてるの。初めて見た。ビックリしたわ。レインは目を閉じて寝てるけど、先生、ちょっと薄目。こういう人っているのね。

ちゅっと目覚めのキスをした。でも白雪王子は起きてくれない。もう一度キスしてみる。そのとき何かへンな匂いがするなと思ってくんくんしてみた。唇じゃない。鼻の下辺り。なんだろう……昨日嗅いだような……。あ……。

何であるか分かった途端、私は赤くなった。だめ……次は絶対お風呂入ってからにしよう。もういつそういう雰囲気になるか分からないんだから、毎日早めに入ろう。

服を正して外へ出る。物音を聞き付けてレインとアルシェが出てきた。
ᘛ⁐̤ᕐᐷ と挨拶しあう。レインは少しやつれていた。下でハミガキとかしてたらレインが綺麗に折りたたんだスカートを返してきた。あと、上着も。どうもシェルテスにやられた

ときに返り血が飛んでいたらしい。レインは腕を前に伸ばしていたので殆ど飛んでいなかったけど。口をゆすいで、アトラスにいる間は着てて良いよと言った。
静が起きてきた。一足遅れて洗面所を使うと私とレインで朝ごはんを用意して、食べる。レインは少しやつれたみたいだったけど、明るく振舞っていた。昨日の戦いの話くらいしか話題がなかったんだけど、できるだけポジティブに話した。
次の新月前に決戦だけど、それまでは何もないからどうしようかという話になった。私はムリを承知でレインにメルディアを使えないか聞いてみた。レインはまだムリだと言った。確かに光ってない。魔力を供給できないのか聞いたけどムリらしい。この時代はそもそも魔法なんて廃れてしまっているから、そんなコンビニで手軽にケータイを充電するようなことはできないんだろうな。

食事を終えるとレインが私の制服に着替えて降りてきた。私は紅茶を入れた。カモミールだ。カモミールはシオナといい、シオンが語源になっているそうだ。レインは私に名前が似てるから好きといって飲んでいた。可愛いなぁ。カモミールティーは風邪などに効くハーブでもあるそうで、こちらではよく飲まれるそうだ。日本はストレートのほかはレモンとミルクくらいしか普及してないからなぁ。
なんで地球に帰りたいのかアルシェに聞かれ、学校と先生の仕事の話をした。仕事の話をしたらアルシェは神妙な顔つきになった。そして何を思ったか、黄金は地球でも価値があるかなどと聞いてきた。私が肯定すると、シェルテス討伐が終わったら、地球に帰る際に金を 100 メルバ用意するといった。
「先生、補償金っていうのかな……なんか仕事なくなっちゃったお詫びに帰りに金をくれるって」
「は？キン？」
「うん、100 メルバだって」
「じゃあメルバって重さの単位なのか？」
「そう、えーと 1.25 キロで計算して」
その瞬間、静はカモミールティーをぶっと吹き出した。
「金 125 キロだって！？」
「それって凄いんですか？」
「てゆうか運べねぇよ。紫苑の身体３人前だぞ」
「あぁ……そうですね。でもメルティアが運んでくれると思うよ」
「つーかそんなの受け取れんわ。いくらすると思ってる？」
「え……さぁ、いくらですか？公民で金本位制っていうのは習ったんですけど、最近の経済は金で成り立ってないから分からないです」
「まぁそこまで高校生で勉強できてれば良しとしよう。金っていうのは 1kg 単位で売買する。勿論これは高いから小額で買うこともできるんだ。たとえば現物価格で買う場合はだ

な、1g が 2000 円だとすると 1 kg で 200 万だろ」
「200 万で 1 単位なんですか！？」
「あぁ、1 口 200 万じゃふつう取引できないよな？だから 10 万くらいの取引本証拠金で取引することもできるんだよ。現物価格なんざ俺らには縁遠い話だよ」
「ってことは」口を開けてしまった「125kg だと 2 億 5 千万円……！」
「……ったく、そんなの要らんわ！」
「でも世界を救うわりには安いですよね」
「そういうところ、女らしく意地汚いんだな」
「なっ、そういう意味じゃないですよ。見損なわないで！」
　ちょっと怒った。
「ごめん、悪かったよ。でもアルシェが出すってことは召喚省の税金か親のポケットマネーってことだろ。それで 2 億はでかすぎだよ」
「じゃあいくらなら受け取ります？」
「おいおい紫苑、やっぱり俺に職がなくなったこと、気にしてるんじゃないのか？」
「そうじゃないけど……折角くれるっていうんだし」
「もらわねーよ」静は私を軽蔑したような目で見た。
「ごめんなさい……」私は俯いた「汚い女って目で見ないで。お金なんかいらないから、愛してください」
　静は「あぁ……」と頷いた。アルシェはなぜ険悪になったのか分からず、困惑していた。レインもだ。すっかり静が喜ぶと思ったからだ。アルバザードの人間はそういう行為を素直に受け取るのだ。武士は食わねど妻楊枝という発想はないらしい。文化の違いだなぁ。
「別に怒ってないよ。ただ、俺の稼ぎがなくなるのが不安だったら一緒にいないほうがいいって思っただけだ。蛍に罵倒されたのを思い出すからな。あんな思いはもうごめんだ」
「そんな、一緒にいないほうがいいなんて言わないで！」
　訳の分からない 2 人を放置して私は腕にしがみついた。きっと日本人の恋愛はおかしいものだという風に映ってるんだろうな。これがプロトタイプなんて思わないでね……。
「無職でも紫苑が嫌じゃなきゃいいんだよ。俺も紫苑が一番大切なんだから。かといって俺をわざわざ不安にさせるようなことはしないでくれよ、頼む。協力してほしいんだ」
　その言い方凄く好き。私は素直に頷いた。
-ᄊᄂe ᄋᐱee ᑫccᒍ ᒐɔɔᑋ-ᄊ ᑫɔ -δ ᔕ
　静に向かって言う。
「お前さんの気持ちはありがたくもらっとくよ。だが、俺は心を金に換金しない男なんだ、悪いな、アルシェ。俺は紫苑が俺を掛け値なしに好きでいてくれれば他には何もいらないんだ」
-ᄊᄂe ᄋᒐcel，ᑫc ᐱ- Sɔ -l -ᐱδ ᒐcɔᐱ，-ᑋ ᑫc eᒍᑫel-ᑫ ᄊeᐱᒍ -ᐱᑫδ ᔕ
ᄋᑫee，ᑫᖻ ᑫe Vcᑫ，，leᐱ- ᒐɔɔᑋ-ᄊ ᒐe -lᑫᔕ

ᘏ--ᘏ とアルシェは頷いた。

紅茶を片付けるとシェルテスが来るまでの間何をしようかという話になった。レインが静に色々連れて行ってもらったお礼に旅行に連れてってあげたいと言い出した。静は異世界で旅行するのが危険と思っているのか、あまり乗り気でなかったが、車を運転させるといったら急に乗り気になった。本当に男の人だなぁ。あれだけ都内でカーチェイスしといてまだ乗りたいのか……。

４人で外に出る。シェルテスに襲われる心配がなくて良い。南区のショッピングモールで旅行の準備をした。静は大きなモールを見て驚いていた。大きさにも驚いていたし、商品を持って会計しないまま商店街の中を歩けることにも驚いていた。バーコードがないといっていた。

「凄いな。缶詰などのものが少ない。てゆうかリサイクルできないものや無駄なものが全部省かれてる。不便ではあるし、過去の日本を思い出すが、そうじゃないんだよな。環境に何より気遣った結果、昔の姿に戻ったんだな。レインが瓶を持って家を出るから何事かと思ったが、ジュースを買うのか。瓶を自分の家から持ってくるんだな。偉いというか……凄いな」

「面白いですよね、異世界って」

「あぁ、ラベルが無駄になるからってラベルも極力ついてないのな。少し見てみたんだが、説明は当たり前だけど全部アルカなんだな。25 の幻字と 10 の数字ばっかだ。本当にこれだけでみんな生活してるんだなぁ」

「ふふ」はしゃぐ静って可愛い。

2006 / 12 / 07

レインの提案で俺をアルバザード周遊へ連れてってくれるということになった。まぁ小さな旅行だそうだ。どこに行きたいかと聞かれたが俺側に希望を言うだけの知識はない。だが、強いていうなら紫苑にとって縁のある場所が良いと思った。フェンゼルの手下に襲われたカテージュの隠れ家に行ってみたいと思った。だがそれを紫苑たちに提案するのはかなり気を使うことだった。というのも３人ともそこで襲撃され、決して良い思い出が残っていないからだ。

ところが意外なことに紫苑はその話を聞くと行きたいと乗り気になった。アルシェとレインは少し戸惑っていたが、紫苑が説得すると納得したようだった。どうも２人とも殺してしまったアーディンのことが気になっているようだ。カテージュの別荘へはフェンゼルのとき以降行っていないとのこと。そろそろどうなったのか見ておきたいし、要するに俺らでいうところの供養みたいなものもしてやりたいそうなのだ。

そういうわけで昨日レインが電車の特急券を買った。車じゃないのかと思ったが、ここ

からカテージュというのは南仏からイタリアまで行くようなものだと聞いて、なるほど電車が良いと思った。
　レインの家を出て駅まで行く。駅は大江戸線のように地下鉄なのだが、あの独特の匂いがしない。紫苑から話は聞いていたが本当に円形の都市だな。アルナは円形都市だ。このアルナという街だけでなくアルバザードのほぼ全域がカルテを中心とした円形都市なのだ。道路も整然としていて一切覚える必要が無い。幹線道路の数や細道の数までどの街でも同じで、しかも日本のようにくねくねすることもなく綺麗に整備されている。なるほど、こりゃレインが日本に来て怯えるわけだ。
　電車に乗って暫くは地下を走っていたが、郊外に出ると地上に戻る。紫苑が景色を見せてくる。景色よりもはしゃいでる紫苑のほうが可愛くて、横顔を見ていた。レインは俺たちに気を利かせてくれたのか、或いはアルシェと２人きりになりたかったのか、２人席を２つ取った。だからイチャイチャしてても気付かれない。
　地上を走っていた電車がまた地下へ戻っていく。別の街へ着いたのだ。だが特急なので止まる回数は少ない。
　また地上へ出る。どんどん南にいっている。
「ねぇ、先生、そのうち紅葉が見れるかな。北のほうが早く終わっちゃうでしょう？」
「うーん、見れるといいね。紫苑、紅葉好きなの？」
「うん！」
「じゃあ来年は京都に連れてくよ。あそこも綺麗だよ。アルバザードに負けないくらいね」
「んふ……」紫苑はヘンな笑い方をした。照れ隠しらしい。
　じーっと窓の外を眺めて何か解説している紫苑を見ていたら急に触りたくなってきて、指で背筋を上から下に滑らせてみた。紫苑はピクッとして、ゆっくり俺のほうを向いた。俺がにこりとすると、ちょっと目をそらしながらにこりとした。
　10 分くらい紫苑は黙ったまま景色を見ていたが、地下に入ると座って俺のほうを向いた。
「あのね、先生。私の手を握ったりキスしたりするのにドキドキしたりしたこと、覚えてます？」
「うん、勿論」
「凄く嬉しいの。何が嬉しいって、触れられること。先生、触れて良いかどうかタイミングを見計らってくれるでしょ？いまいきなり手を握ったら引かれるんじゃないかとか、嫌われるんじゃないかとかそういう適度な緊張感ってありますよね、付き合うとき。その緊張感って付き合ったあとは遠慮になると思うんです。親しき仲にも礼儀ありっていうじゃないですか」
「うん」
「私、そういう緊張感は悪いストレスじゃなくて良いストレスだと思うんです。恋人を続けていく上で必要な礼儀だと思うんです。先生、この考えどう思いますか？」
「つまり、俺がさっき触ったことに対して言ってるわけね」

紫苑は悲しそうな顔をした。
「そういう心の中の声って隠しておいたよね、たった何ヶ月か前は。違いますか？」消え入りそうな声。潤んだ瞳で見てくる。蛍と違って紫苑は口が巧い。
なるほどね、言いたいことは分かった。要するに俺が遠慮なく紫苑を触ると、触られること自体は嬉しいんだが、それが当たり前になっちゃうと遠慮がなくなって、他の色んなところでも遠慮がなくなって、最終的には恋愛の破綻に至るというわけか。
「そうだな、違わない。じゃあさ、俺が紫苑に触れたくなったらどうすればいい？」
「私も聞きたいです、それ。先生に触りたい衝動ってよく起きるんです。蛍さんとは気軽に触れ合ってたんですか？」
「そうだな……わりと。それがいけなかったのかな」
紫苑が意図が通じたのが確認できたのか、嬉しそうな顔になった。
「多分、遠慮がなくなった関係は一見自由に見えるけど、破綻しやすいと思います」
「紫苑は心強いな。俺の自制心が緩んだところでプライドを保ちながら上手く手綱を引いてくれる。そういうところ凄く尊敬してるし好きだよ。ありがとうね」
「えへ……。あのね、触れ合いたいときは目や口で語ればいいんだと思います。たとえば先生が何か難しいことを考えているときにいきなり私が「ねぇ静」って抱きついたりしたら「うざいな」って思うんじゃないですか？」
少し考えてからハッとした。
「ですよね？蛍さんが将にそういう空気読まない人だったんじゃないですか？いくら好きな人でも個別の人間なんだから、相手の状態も読まずにいきなり襲い掛かったら不快になって当然だと思うんです」
「紫苑もさっき不快だった？」
「ううん。でも、ビックリはしました。そして私の身体が先生にとって気安いものになったのかなと思ってそれが凄く悲しかった。でもそこで喋ると私、きっと感情的になっちゃうから……だから何て自分の気持ちを表現しようか一生懸命考えたんです。男の人は論理的な話じゃないと受け入れてくれないから。特に先生みたいな頭の良い人はそうだから」
俺は結構内心苦笑しながらもハッキリ言って紫苑の計略に敢えてはまっていた。論理が的？別にそんな様子はなかった。何と言えば俺はプライドを保てて喜ぶのか、こいつは強かに計算している。こういう女が嫌だという男は多いが、俺は心地いい。俺みたいなダメな奴を上手く転がしてくれる女は最高だ。
蛍と俺は一切互いを矯正しあえなかった。俺は頑固で動的。一方蛍は頑固で静的。どっちも頑固だからタチが悪い。その上、火のような俺と水のような蛍だから、いつも空周りだった。俺が不快になって蛍も不快になって……でも蛍はとりあえず俺をなだめようと謝るか落ち込んで泣いたり黙ったりするだけ。俺はそれを見て自分が悪人になったような気にさせられる。蛍のいつもの手口だ。何でもないことを言っただけなのに深刻に受け取って沈む。鬱になって泣きそうになる。蛍がどんなに悪かろうがその態度を取られると俺が

苛めているように見える。俺は全く責める気などないのに勝手に反省したり勝手に傷ついたりする。そうして俺に悪者の自覚を与える。
「……俺はあいつといるとどんどん自分が嫌な奴になっていく気がして、それが嫌だった。元は全然何でもないことで蛍が沈んで、俺は自分が悪者にされたような気になって、それが原因で不快に思う。それで今度は責める気で蛍に文句を言う。蛍は俺が不快になったことに気付いて謝るんだが、俺が怒ってることは不快にさせたことであって、元ネタじゃないんだ。そんなことどうでもいいのに蛍は空回りして元ネタについて謝る。そして心中で私は悪くないのにと思って俺への恨みを溜めていく」
「劣悪な環境ですね。ねぇ、たとえばどんな状況だったの？」
「そうだな……一番多い雛形というかプロトタイプ的な事例はな……。たとえば食事をしている、家族で」
「うん」
「誰かが話すときは残りは聞き手だな、当然。たとえば俺が話すときは他が聞き役だな。じゃあ俺が喋るとする。それがギャグだと聞き手は笑うわけだ。ユーモアでも笑うわけだ。勉強の話だと「へぇ」というわけだ。仕事の人間関係や面白い生徒の話などだと面白がって聞くわけだ」
「うん」
「ま、常識的な反応だよな。家族はきちんと普通に常識的にそういう返事を返すんだ。そんなときにな、蛍はどうしてると思う？ぼーっと壁のカレンダー辺りを見てるんだよ。たとえばオチがついて笑ってるときでさえもな」
「え……」意外そうな声。
「それ、話し手はどう解釈すると思う？」
「ふつうは……俺の話聞きたくないのかなって思います」
「そう。だから俺も思ったわけだ」
「先生と話したくなかったとか？」
「いや、家族の誰が話し手になったときも同じだよ」
「じゃあ、家族といることが不快だった可能性は？つまり先生と２人きりのときはどうなんですか？２人きりってことは必然的に相手と相対しなきゃいけないでしょ」
　ふっと鼻で笑った「甘いな。蛍はその「必然」さえも凌駕する」もはや自分で語ってて　あいつのありえなさはギャグだなと思ってきた。どれくらいありえないかというと玲音の書を開いて呪文を唱えれば喰われた手首が治るくらいありえない。
「２人きりでも基本的にはそうだよ。24 時間じゃないけどな、鬱だったり疲れてるときはいつもそうだ。で、困ったことにあいつの主な原材料は鬱と僻みと疲労なんだよな」
「そんな人と何で付き合ったんですか……というか結婚まで」
「大人しい良い子だと思ったんだな、これが」
「うーん……なんとも」

「あとは非言語かな。まずこの時点で言語によるコミュニケーションが日本語使ったレインくらいできないことは分かったな。もっと凄いのは俺が話してるときでさえ頷きもしないわ相槌も打たないわ顔も見ないということだ。非言語さえコミュニケーションできない」
「それ、恋人時代は……？」
「同じだよ。結婚する前から。恥ずかしくてこっちが見れないなんて初々しい古風な子だと誤解してた」
「それはとんでもない誤解をしましたね、先生」
「結局コミュニケーション障害なんだよ。同じような障害を持った人間とでもないとやってけないだろうな。でも、あいつってよりによってそういう奴を嫌う傾向にあるんだよ」
「そうなんですか？」
「早い話あいつにそっくりなのはあいつの父親なんだ。超似てる。コミュニケーション障害なところが。だがな、中学から結婚するまでずっと父親のこと嫌ってたからな、あいつは」
「あぁ、それで昔、私がお父さん好きって言ったら、先生は私を好意的に見てくれたんですね」
「そうそう。大学にも父親みたいなタイプはいたんだが、そういう大人しい奴はあいつは苦手でね。結構男子に人気あったんだよ。大和撫子ということで。だけどあいつはお嬢様と勘違いされてたから誰も手を出さなかった。２人ほど、手を出したが告ってあっさり振られてな」
「ふぅん、ガードが固かったのね」
「まぁそういうところがあいつの魅力だよ。こないだ夏にな、大学のダチに言われたよ。離婚すると思ってたってな。俺があいつと付き合ったのは学科で異常事態と認識されたらしいよ。なんで蛍かって思われたらしい。ダチは特に驚いてたよ。前の子を見る限りもっと明るい子を選ぶと思ってたみたいだから」
「前の子……？」
「処女っぽさとか清楚っぽさがあいつの取り柄なんだよ。面接でも受付や事務として好印象を 100%与えるタイプだ」
「でもその大人しさってのはコミュニケーション障害が実態なんでしょ？じゃあすぐ化けの皮が剥がれちゃうね」
「あぁ……だから会社で上司に怒られまくってたんだよな。で、その上司の怨みつらみを毎日泣きながら俺に訴えてなぁ……」
　遠い目をする。いまこの幼い紫苑という少女と電車に揺られて座ってる。１年前はちょうど蛍が出て行く少し前で、険悪な日々だった。あのときの気だるさがいま無くなって、俺は確実に幸せになった。いまごろあいつは一体……。
「毎日愚痴なんて不毛ですね。聞くのもうんざりだわ。とことん後ろ向きな人ね。何だか私ちょっと心配だわ。先生の子供産んだんでしょう？その人に育てられるかしら？仕事も

新しいものに就いたとして、先生の同級生なんだから新卒でもないし……その性格じゃ事務とかの仕事しかできないんじゃないですか？私、働いたことないから良く分からないんですけど」
「まぁ事務だろうな。人と接するのは絶対ムリだろ、続かない。経理もダメだ。超いい加減だし、２桁の引き算も暗算できないからな。そもそも簿記さえ持ってない。まぁ生粋の文学少女だったからな。ぼーっとして、いい加減なんだよ。部屋は片付けないしさ。セックスした後のゴムとか結んだだけでそこら辺に置きっぱで数日放置とか。俺が結局片付けるのな。誘われてゴムがないからと断ったら家族の部屋に行って机を勝手に漁ってゴムをパクったり、自分のバイト先の薬局でゴム買って帰ってきたり……俺、自分が何なんだろうってよく思ったよ。親に借りた金も返さんし、書類も山。下着やパジャマは散らかしっぱなしで「静、ごめん、片付けといて」だし。マンガとか非常に好きでな、デートの間に『ハンター×ハンター』買ったり、結婚後も『こどものおもちゃ』一晩で完読とか……。そのくせどっからどう見ても大人しくて優しくて気が利くように見えるんだ。これが一番恐ろしいよな……。先が思いやられるよ」
　額に手を当てる俺。
「あぁ、思い出してきたよ。つくづく出てってくれて良かった。おかげで今この自由さだもんな。紫苑と会えたし、仮に会えなくても仕事を続けて優雅に暮らせてたはずだから」
「なんだか疫病神が去ったみたいですね」
「結構良い子だと思ったんだけどな。言うほどに悪さが見えてくる。蛍はよく嘘をつくからあることないこと言うんだが――まぁ架空と現実の区別がつかないんだよ――だけど俺は冷静に分析しちまう。いま述べたことについては誇張なしの実話だよ」
「極めてだらしない人ですね」
「性的にもだらしなかったな。やたらセックス好きでね。俺の何が好きかって聞いたらセックスって言われたくらいだ。生理中だろうが俺が風邪引いて寝込んでようが妊娠中だろうがお構いなしでな。頼むからああはならないでくれよ」
「は……はい。でもこのまま行くとそこは約束できないかも……」
「え？」
「ん……そこだけは蛍さんと共感できるかも。あの、先生の良いところがそれだけって意味じゃないですよ。単純にね、結ばれるのは私も好きになりそうだなぁって」
　もじもじする紫苑。
「勘弁してくれよ」
「え、だって今日だって私わりとその気ですよ？」
「そうなの？」
「ん……」窓の外を見る「わりと……。ホテルも部屋４つじゃなくて３つにしてもらってますし」
「……俺が辛いときは勘弁してね」

「考えておきます」
　５分くらい沈黙があった。紫苑は肘をついて顎を乗せる。遠くを見ながら半ばふてくされたように呟いた。
「再婚は難しそうね」
「そうかな……？してもらわにゃ俺が困るんだが」
「自分の子供を他の男に育ててもらうってことですか。なんかカッコウみたいですね」
「わりとえげつないこと言うな……」
「でもそういうことでしょう？養育費払ってないんだし、面倒も見てないんでしょう？」
「まぁな」
「私、ガキですけど同じ女としてダメだなって思いますよ。蛍さんについてマシだったのは先生にしがみついて金を搾り取ろうとしなかったところですかね」
「お前、蛍に厳しいよな」
「私、その人、嫌いですから。話だけで嫌いになるなんて初めての体験です。男からすればもっと魅力なく映るでしょうね。子供おろさなかったのってもう結婚できる目処がないって思ったからじゃないですか？」
　ふっと馬鹿にしたように笑う紫苑に内心苛立ったが、ここで紫苑を不機嫌にさせたくないので黙っていた。紫苑がこういう小ばかにした笑いをするときは内心かなり苛立ってるときだ。ストレスを発散するために思わず出たのがこの嘲りだからだ。
「子供のことはなぜ産んだのか分からないけどな」
「その「分からない」っていう状況にさせたのが最悪ですよね。先生が子供について教えてくれって懇願したのに高見から無視し続けて自分勝手に。何様のつもりよ」
　まずいな、紫苑の口調が不機嫌になってきた。かといってここで蛍を持ち上げると殺されかねんし、蛍を不当に貶めるのも嫌だ。そういう男心が分からんのかな。
「蛍さんの良いところって清楚さとかなんでしょ？じゃあもうダメじゃないですか？文学少女っていうアドバンテージもなくなって半オバサンでしょ。育児に追われてやつれてロクに化粧もできないでしょうし。年いってて、コミュニケーションできなくて、バツ１、子持ちで、お金もないんでしょ？誰がそんな人引き受けてくれるのよ。ボランティア？」
「紫苑、お前、ちょっと言いすぎだって気付いてるよね」
「……そうだけど」
「うん……。まぁ夏に大学の連中も同じこと言ってたよ、再婚については。できたとして彼氏止まり。結婚できるとしたら見合いかなんかで、相手は年上だろうなと言っていた。結構年離れてて同じくバツ有りで子持ちで稼ぎも大したことなくて……そんな未来を連中は予想してたよ。学部生時代４年間見てる連中だから、わりと的を射てると思う。俺が思うに、次に結婚するとしたら自分の親父のようなつまらない人間と付き合うと思うんだよな。みんなと話したんだけどな、一致した見解だった。個別に話してるのにあれだけ異口同音ってのはある意味凄いよ」

「蛍さんって中学から大学にかけて価値あるタイプの女性ですよね。年とったら価値の無くなるタイプの人」
「さあな、学校では首席だったよ。真面目だし」
「事務くらいで細々やっていくんでしょうね。でもね、ひとつ思うのよ」
「何？」
「お母さんが言ってたの。女の幸せは男で決まるって。先生傷つくかもしれないけど、私、お母さんにこないだ言われたの。私のほうがお母さんより女として格下だって。良い男を捕まえられなかったからだって」
「俺、そういう風に見られてたんだ」
「相対評価よ。絶対評価では良いと思ってるって。だけどお父さんと比べて先生のほうがオスとして格下なんだって」
「あ、そりゃ納得。全く異論はございません」
「……。だから私もメスとしてお母さんより格下なんだって」
「面白いこというな、お母さん」
「でね、蛍さんはどっちだったのかな？」
「ん？」
「ダメな女だったから先生みたいな良い男に大切にされずに、結局自分から逃げていったのか。或いは、先生がせいぜい蛍さんみたいなダメ女しか捕まえられない程度の男だったのか……もし後者だったら私って……」
「前者だろ。少なくともお前はそう思っとけよ」
「そうなの？あのね、ダメとかそういう話を度外視するとね、私、蛍さんに似てるとこあるって思うのよ。友達いないところとか……だからなんか不安で」
「あぁ、そういう話の流れにしてくれると助かるな。建設的だ。紫苑は蛍とは違うよ。自分で敢えて孤独でいることを選んだんだ。ほら、ここに来てこういう景色を見るためにな」
　紅葉が見えた。
「あ……あったね、紅葉」
「蛍は嫌々苛められてたからな。紫苑とは違うよ。別に苛められなかったろ」
「そうね、疎外はされたけどこれといって苛めはなかったわ」
「結局そういう違いだよ。紫苑は蛍とは違う。あいつにはならない。がんばるからさ、俺と幸せになろうよ」
「うん……」紫苑は微笑んだ「嬉しい」
　さんざ人の嫁をこき下ろしておいて嬉しいはねぇだろと思ったが、黙っていた。黙ってこの女は恐ろしいと思った。

　レインの別荘というのはカテージュの南のほうにあるようで、そこには鉄道は通っていないそうだ。そこでレンタカーを借りた。車種は色々あったようだが俺はアルカ不足で巧

く意思疎通ができなかった。かといって紫苑はアルカの車用語を知らない。車については俺と付き合ってから調べたようだがアルカで何というかまでは知らないようだ。
「じゃあさ、これにしようぜ」
　俺が指したのはアルバザード版セルシオみたいな車だった。
「先生の車と違うっぽいけど、いいの？」
「クーペはふつう２人乗りなんだよ。エイトは特別に４人乗りなんだ。４人でゆったり乗るなら最低でも５人乗りのセダンからじゃないと」
「ふぅん、そっかぁ」
「紫苑はどんなのが好きなんだ？」
「え、別にないですよ」
「かといって彼氏がケッパコ乗ってたらデートする気なくすだろ？」
「ケッパコ？」
「軽自動車のワンボックスカーのことだよ。いかにも若年ファミリー用って感じだな。若い奴がデートに使うのに最もしょぼい車」
「ボックスっておっきいやつですよね。旅行とかに便利じゃないの？」
「便利は便利だよ。デートでカッコ悪いだけ」
「そうかなぁ。私は別に気にしないわ」
「まぁ、そういう子のほうが俺は好きだけどな。ボックスは使うには便利だよ。居住空間が広いから車内泊もできる。居住空間が縦1.8mもある車種があるからな、寝るには十分だよ。俺が無職になった祝いにさ、無事地球に帰ったら暇な時間使って紫苑に時間のあるときに北海道でも連れてってやるよ」
「ボックスで？」
「いやいや、エイトだよ。泊まりはホテルでいいだろ。実際12月の車内泊はキツイぜ。殆どサバイバルだ」
「ふふ、楽しみです。さっきから先生なんだか男の子みたいですね」
「え」少し慌てる俺「そ、そうかな」
「そういう静も好きよ」
　偽セルシオに乗って運転する。アルバザードでは免許は ﾝｰﾊﾟ とかいう年齢で、概ね15歳くらいから取れるらしい。車道が歩道と別れているので要は全線高速だから学科も教習も少なく、あっさり取れるらしい。免許というカードはないようで、アンセに登録されるんだそうだ。アルシェがアンセを見せて車を借りた。始めは流石に俺も車の仕組みが分かってないので助手席に乗ってアルシェの運転を見る。
「へぇ、アルバザードって右ハンドルなんだな」
「え？」
「日本と同じだろ」
「あぁ、そういえば。同じなんで違和感なかったわ」

「珍しいんだよ、右ハンドルは。右ハンドルだと左側通行になるんだけどさ、左側通行やってる大国はイギリスとかくらいだよ」
「アメリカとかフランスって右を走るんですか？」
「そうそう。ほら、こないだダヴィンチ＝コードのＤＶＤ出たから借りてきてウチで見ただろ。あのときフランスのシーンでは右走ってたけど、イギリスになったら車変わって左になってただろ」
「えぇぇ、そんなとこ見てなかったです……。景色とか見てました。目の付け所が違うんですね。右側通行のほうが先進国では多いんですか？」
「うん、先進国は大体ね。西洋だけじゃないよ。韓国もアメリカと同じで右側通行だ」
「え、日本と逆って違和感ありますね。あんな近い国なのに」
「あぁ、その上道路も広いよ。テグの車線なんか見てると日本とまるで違う世界に見える。広いっていってもここの幹線道路ほどじゃないけどさ。戦時の際の滑走路として使えるように幅を広く取ってあるんだ」
「へぇ。ところでなんで左右異なるのかなぁ、国によって」
「諸説あるけど、馬車が流行ってたところは右手で鞭打つわけだから、鞭打ちが邪魔にならないようにするんだよ。馬車はやがて車に取って代わるわけだから、車の車線は馬車の車線を踏襲するわけだ」
「あ、なるほど。昔の名残なんですね」
「諸説あるけどね。アルバザードは関係ないだろうが、歩行者との兼ね合いとか。歩行者についてはさ、日本人が歩行時に左側通行するのも左に刀を差すからだ。鞘同士がぶつかると喧嘩になるからな」
「うんうん」
「しかし、うぉっ、マニュアルかよ、ありがてぇ！やっぱ機械ってのは大体どこでも同じもんなんだな。人間の身体から考えれば部品ごとのアフォーダンスなんて限られてくるし、使い方も限られてくるよな」
　俺はすっかり舞い上がってた。これならすぐ運転できる。早速紫苑に訳してもらってアルシェと変わってもらった。その瞬間、レインがビクッとする。
「どうした、レイン」
「先生の運転がトラウマになってるみたいです」
「ははは、今日は遵法運転するさ。で、何キロまでオッケーなんだ？」
「ここはメートルが存在しませんからね。時速何トルメルフィという世界です」
「まぁ、あれだな、前の奴に付いてけば概ね問題ないな」
　そうして俺は別荘まで走らせた。途中幹線道路を降りて小さな舗装道に入る。そのあと更に進むと道路がなくなっていた。カントリー風情があって良いねぇ。俺はすっかり鼻歌交じりだった。しかもアルバザードのカーナビは凄い。なんせアンセ搭載で、表示が見やすく親切だ。アルカはベタイチ分からんが、日本のダメナビに少し爪の垢を煎じて飲ませ

てやりたいくらいだ。
　車道が空いていたのであっさり別荘にくることができた。もうこれだけ広ければどこに停めようが自由だ。駐禁もクソもない。素晴らしい田園風景と海辺の風景だ。さて、俺はすっかり良い気分だったが、３人は厳かな顔で別荘に入っていった。俺も流石にへらへらしてられないな。神妙な顔で別荘に入る。
　入口の前で俺は立って上の屋根を見た。あれが……紫苑の言ってた屋根か。思ったより高くないな。でもあそこから大きな石をいま俺が立ってるところに落とした……のか。そう思った瞬間身震いがした。
　おい、紫苑って頭おかしいんじゃないか。あんなとこから石を頭めがけて女に落としただって？死ぬに決まってるだろ。ガキでも分かる。なんで肩とかめがけなかったんだよ。戦闘不能にするなら肩や足で十分だろ？頭をめがけて……どういう神経してんだ？
　俺があそこにいたらたとえ銃で襲われてたとしてもできるか？……いや、そのときになってみないと分からないよな。自分が死ぬくらいなら相手を殺そうと思うかもしれない。待てよ……じゃあ紫苑はむしろ殺そうという意図が少なからずあったのではないか。なら未必の故意じゃすまないぞ。それは意図的な殺人だ。
　俺は首を戻した。ギョっとした。青白い顔をした紫苑が突っ立って俺をじっと見ていたのだ。微かに口元が笑っていないか？……幽霊かと思った。俺は入口に立っているのが急に怖くなった。紫苑が俺の頭に石を落としてくるんじゃないかと思ってしまった。馬鹿な、そんなはずがない。でも、紫苑の形相を見ているとそう思わずにはいられなかった。
　中に入ると３人は居間の片隅で座って祈っていた。そうか、そこでアーディンは最期を遂げたのか。
「紫苑、アーディンのその後は？」
「分かりません。フェンゼルの手下がここに来たはずだから、遺体は回収されたはずです」
「そうか。じゃあ最期を看取ったきりか」
「はい……」
　青白い顔の紫苑。
「触るぞ。……許可、取ったとみなすからな」
　紫苑を後ろから抱きしめる。
「考えるなというほうがムリだ。色々考えなよ。耐えられなくなった辛さは後で俺に回していい。な、先生がどうにかしてやるから」
　紫苑はぎゅっと手を握ってきた。
「アーディン……私、恋人ができたよ」
　レインとアルシェがじっと紫苑を見る。俺以外に対し日本語で話すのが意外だったようだ。独り言でさえ日本語は異様に映るようだ。
「あなたは恋人に会いたくて、あんな目にあっても最期まで生きようとしていた。そんな貴方を私たちは見殺しにしたし、私は殺してしまった。まだ女子大生くらいだったよね。

フェンゼルの手下ってことは勉強がんばってアルテナさんの統治の下で厳粛に生きてきたんでしょ？貴方の時代で彼氏がいるなんて優等生の証だわ。きっと私がいま悩んでる受験勉強とかを乗り越えてきたのよね。貴方には輝かしい未来があったのよね。それを私が全て壊してしまった。……ごめんなさい。私ばかり幸せになってごめんなさい……。殺してしまってごめんなさい……」

紫苑はその場に泣き崩れた。俺は予想していたので後ろから強く抱きしめて頭を撫でてやった。嗚咽を漏らす紫苑。見るとレインまで無言で涙を流してアルシェの胸の中で泣いていた。お互い大変だなと目配せしようとアルシェを見たら、アルシェは抱きながら無言でレインを泣いていた。俺は見てはいけないものを見てしまった気になって慌てて目をそらした。

そうか……本当に大変だったんだな。俺はさっきまで車で浮かれてた自分を思い出してバツが悪くなった。みんなここに来ることはかなり気が重かったはずなのに、俺は能天気に鼻歌なんか歌って……。そりゃ嫁にも逃げられるわな。

その後、３人は各部屋を見て周った。俺は分からない。部屋を見て何か言ってるが、アルカも分からなければ思い出も分からない。でもきっとこれは彼らの絆なのだろうと思うと、少しも除外された不快感や寂しさを感じなかった。むしろ紫苑のレインに対する強い思いの根源を知ることができたような気がして、不謹慎だけど少し嬉しかった。それにしてもアーディンというのはどんな顔をしていたんだろうか。俺だけ知らないもう死んでしまった女。どんな顔をして、どんな声をしていたのだろう。

入口を出ると紫苑はさっき俺がしたように屋根を見ていた。アルシェに入口に立たせると、紫苑は家の横側から屋根に登っていった。屋根の上にくる紫苑。なるほど、少し高くみえる。紫苑は当時の忠実な姿勢を再現しようとしていた。スカートの中の下着が丸見えだ。アルシェは上を向いて見ていたが、紫苑もアルシェも何も言わなかった。ただひたすらに当時を知っている人間たちが当時の再現をしようとしていたのだ。そこに何の意味があるか分からない。再現に何の価値があるか分からない。でもきっと彼らには重要なことなのだ。多分アルシェは上を見ていても下着など気付いてもいないんじゃないだろうか。それくらい真剣な顔つきだった。それもそうだろう。いまアルシェや俺たちが見ているのは紫苑じゃないんだ。それは……空に浮かんだ人殺しだったんだから。

紫苑が屋根から下りて、レインを屋根に登らせる。今度は自分が入口に立つ。なるほど、体型が自分に似た女を上に乗せたいのか。しかしレインは運動神経が悪く、２階に怖くて登れないと言い出した。アルシェが代わりに乗るといったときに紫苑が寂しそうな顔をしたらレインはアルシェを制止してやはり自分が乗るといった。アルシェはレインの尻を押して乗せてやった。今度はレインが登る。紫苑はいまにも卒倒しそうなほど青白い顔で屋根を見上げていた。レインの顔は真剣だった。レインもまたスカートの中の下着が見られていることを気にしていなかった。俺はレインの下着を見るのは気まずくて目をそらそうと思ったけど、ここで性的な目を持っていると認めることのほうが不謹慎なのではないか

と思い、見続けた。紫苑が後ろに倒れたらいつでも支えてやろうと思った。でも、紫苑はずっと立っていた。10 分もの間、青白い顔をして立っていた。誰も文句を言わずにその様子を見ていた。紫苑は何度か口を開きそうになっては黙った。
「帰ろう」と俺は静かに言った。３人ともその言葉を聞きたかったのかもしれない。自分からは言い出せなかったのかもしれない。俺たちは車に戻った。彼らは一様に入口で手を妙な形に組んでいた。まるで１人２役で指きりげんまんしてるような印だ。そしてl-ℓɔɔV-と言った。

車を走らせて元の街に戻る。車を返して電車に乗り、少し大きめの街で降りてホテルに泊まる。３部屋だった。かつて紫苑が泊まったことのあるホテルだそうだ。みな、口数が少なくなっていた。だが、いつまでも凹んでいるわけにはいかない。荷物を置いてモールへ繰り出したころから俺は徐々に慣れないアルカでテンションを上げていった。みな俺の気遣いを好意的に受け取ってくれたようで、徐々に雰囲気が良くなっていった。食堂でスープを飲んで海鮮品を食べて少し酒を入れた。そのころには皆明るさを取り戻し、笑いあっていたので安心した。いや、非常に気を使う一日だった。
すっかり上機嫌というわけではないけど、食事のときは紫苑は本当に楽しそうだった。彼女が幸せそうにしていれば俺も満足だ。ホテルに戻って風呂に入った。紫苑が一緒に入りたいというので入ることにした。紫苑の全裸を見るのは初めてだ。紫苑は凄く恥ずかしがった。あまり恥ずかしがると結婚して困るよといったら、「お風呂は前戯？」と聞いてきた。
「ふつうは違うけどね」
「でも私の中ではこんなやらしいことは前戯です。これだけで十分興奮してるの。お酒のせいかなぁ」
「風呂が前戯って面白いね」
「だってすっぽんぽん見られるんだもん」
すっぽんぽんという単語、何年ぶりに聞いたことか。ふつうに裸といえばいいものを。俺は少し笑ってしまった。
「先生は恥ずかしくないんですか？」
「まぁ恥ずかしいけど。でも前戯って考え方はいいね。俺たちの間ではそうしよう。お互いの裸を貴重なものにしておくためにさ」
「はい。えっちの前だけにしましょうね、前戯のお風呂は」
「うん……。ん？」
「ん？だから、もう……してるんですよ、私たち」
「そうなのか……あのさ、俺結構今日疲れてるんだけど」
「……本当に嫌なら止めます」
少し小さくなって胸を隠す紫苑。凄く不安そうだ。

「いや、嫌じゃないって。でもさ、そんな簡単に身体を許していいの？」
「シェルテスのことがあるから抱かれないと不安なの……地球に戻れたら事情が変わるわ」
「そうだな……俺も紫苑が好きだし、この状態なら自然な行為だろうな」
　洗って湯船に漬かる。紫苑も入る。ぶくぶく口で泡を立てる。なんか子供だなぁ。
「いつも風呂でそんなことして遊んでるの？」と言うと「えっ！？」といって急に赤くなった。可愛いもんだ。
　風呂の中で愛撫しあって、風呂を出てそのままベッドへ直行した。紫苑は全裸は恥ずかしいようで、制服を着ていた。中学の制服なので複雑な気分だが、仕方ない。
　時間はまだ９時だったのに、お互い熱中していて、気付いたら２時になっていた。２人の体液や匂いが体中に染み付いている。終わったあと、風呂に入ろうといったが、紫苑はこの体液の匂いが好きだといって聞かなかった。
「腕枕してほしいのぉ」というささやかな夢を叶えてやると、紫苑はすやすや寝た。この固い制服のままで。俺は天井を見ながら余った右手で紫苑の腹を撫でた。
　生理が終わったのがこないだだから……まずいな。今月始めたばかりなのにもう既に 10 回以上この子の中で膣内射精している。というか外に出したことがない。紫苑は全て子宮で精子を受け入れている。当たり前のことだが、非常に芳しくない。避妊もしたことがないし。病気はないんだが、妊娠の心配が付きまとう。俺は無職になってしまったしこの子はまだ高校生だし、できたらどうするかを考えておかなくてはな。お母さんは紫苑の責任などといったそうだが、そんなの関係ない。男の責任に決まってる。それが常識だ。苦しむのは女の腹なんだから、せめてケアくらいは男がしてやらないといけないだろう。俺としてはそれを蛍にやってやれなかったのが無念だ。しかしまぁ、それも生きて帰れればの話だ。
　それにしても紫苑はシェルテスのせいだと思うが、あっさりセックス依存になったな。蛍でさえ１月以上はかかったのに。徐々にベースを落としていかないと俺がもたないな。あのときみたいに俺も若くないし。まぁこの子はあいつみたいにヘンな性向はなさそうで助かる。付き合って１月くらいで「私、Mなの」という処女だったからな、あのレア女は。しまいにゃ手錠買ってきて「これを私に嵌めて縛ってレイプして」とか……凄い女だったな。甘やかしたのがいけなかったな。最後のほう、俺がセックス冷めてたから、それも原因とかあるのかな……。
　紫苑がヘンなプレイを要求してきたら毅然とした態度で断ろう。それがお互いのためだ。性癖の不一致で破局なんてのは雑誌なんかじゃ結構ランクインしてる言い訳だからな。まぁあんな大衆紙を一々信じはしないが。
　しかし……子供ねぇ。俺のガキが６月生まれで、いま出来たら……最終生理の開始日が確か……11 月の……13 日だったかな。あの日だよな、始まったとか電話で言ってたからデートは遠出を控えないとって思った。そうすると……あぁ、俺は計算が遅いな。ええと…

…８月の……終わりか？20 日くらい？じゃあ蛍のガキとは随分違うな。蛍のときが９月の 20 日くらいだったかな……とにかく最終月経が９月の終わりだった。それで予定日が６月 27 日だった。紫苑には悪いが俺が紫苑と付き合った日を覚えてたのはガキの予定日だったからだ。そして何より奇跡的なことに……そもそも俺が蛍と付き合った日でもあるんだよな。紫苑と付き合って、蛍の出産予定日で、蛍が役所にガキの籍を入れた日で、俺が蛍と付き合った日……なんて運命だ。しかし 27 日に籍を入れるとは蛍も縁担ぎな女だ。俺との恋愛の記念日なんてことはもう覚えてないだろうよ。むしろガキの予定日で俺との記念日を塗り替えやがったな。どこまでも人をイラつかせる女だ。

俺は紫苑の胸を揉んだ。ぴくっと動くが起きない。何となく触りたくなった。下に手を伸ばしてスカートに手を滑らせ、下着の中に手を入れ、先ほど散々弄んだところを弄る。紫苑は起きてしまい、「なぁに？」とくすくす笑う。「柔らかくて気持ち良い。落ち着くんだ」といったら「えっちぃ」といってまた眠ってしまった。寝息が聞こえる。可愛いな……。意識が朦朧としてきて、俺もいつの間にか眠ってしまった。

2006 / 12 / 19

朝起きたら先生がじっと私を見ていた。

「あ……おはようございます」

私はパジャマを直そうとする。制服で毎日寝るわけにはいかないので、パジャマやら服やらをこないだ買ってもらった。手を動かそうとして動かないことに気付いた。

「ん……」

先生の手の感触がする。握ってるみたい。でも私は手に感覚がなかった。少し動かそうとするとジーンと鈍く痛みが走った。物凄く手が痺れていた。左手で右手を触ったらとても冷たくなっていた。もしかして……一晩中握っていたの？寝返りも打てずに同じ姿勢をしていた私の右手はすっかり血が回らなくなっていた。動かしたことで右手首に痺れ特有の鈍痛が走る。心地の良い目覚めとはいえない。

先生はベッドの上で胡坐をかいたまま私を見下ろしていた。ちょっと待って……動いてないってことは、まさか先生も？え……寝てないの？一晩中座ってたの？

ぼやけた頭で昨日のことを思い出す。アルバザードに来てからというもの、私は何だかんだ言い訳を付けて先生に抱いてもらっていた。自分でも良くないと思うんだけど、抱かれない日があると不安なのだ。避妊はしていない。大変なことをしてるっていうのは分かってるんだけど、止められない。先生はもう半分諦めている感じで、毎晩私に付き合ってくれている。最近少し慣れてきた。私は緊張が取れてきて、少し感じていた痛みも段々少なくなって、嬉しいの他に心地良いも加わるようになってきた。先生は少し反応が良くなってきたといっていた。私、成長してるみたい。

昨日も抱いてもらって、いつものように夜中になって２人でどちらともなく寝てしまっ

た。私から……だったのかな。ううん、違う。先生の寝息聞いた。寝顔見てからキスして寝たんだ、私。でも、先生は私を無言で見下ろしている。途中で起きたの？……頭がぼーっとする。今日は……。

――そうだ。今日は決戦の日だった。

ハッとして時計を見る。朝６時。例によってあまり寝ていない。最近睡眠不足だ。でも身体は一向に健康なのだ。精神も健康。恋の力って凄いね。これ、受験勉強で夜遅くまで起きてたら絶対身体壊してる。私、えっちしてもらってるだけなのよね、受験生のくせに。それで身体が健康ってどうかと思うんだけど、毎日幸せだから良いじゃない。

先生の身体が心配だったんだけど、全然平気みたい。私と同じで恋の力なんだって。もう折角だから私を抱くことにポジティブになって悲観しないんだって言ってた。そうしたら最近ずっと寝不足でも一切体調を崩さないそうだ。私と同じ。先生、年だからなんて言ってるけど 25 って若いんじゃないの？おじさんって年でもないと思うしなぁ。私くらいの体力が出ても不思議はないわ。

そうそう、言ってくれたの、こないだ。俺はもう蛍に感じたような激しい純粋な気持ちを女に感じることがないと思ってたけど、紫苑に感じるようになった。そのことが凄く嬉しいんだ――って。それ聞いて涙が出るほど嬉しかった。

じっと私は先生を見つめあう。だめだ、どうしても笑顔になってしまう。はにかむ私。だってパジャマがちょっとはだけてるのよ。あんまり見ないで、恥ずかしいから。

先生は何でか寂しい顔をして苦笑した。そして私の手を離すと、立ち上がった。

「あの……眠れました？」

「あぁ、大丈夫」

「ずっと座ってたんですか？」

「あぁ。睡眠ならそのまま一刻ほど取ったから」

座ったまま寝てたの？それって体力回復するのかしら。

「今日のこと……気にしてたんですよね」

「今日って？」

「？シェルテスとの決戦です」

「あぁ、それもあるんだけど……」

部屋を出る先生。私もついていく。それもあるってどういう意味？

居間に下りるとレインが降りてきた。レインはカテージュから帰ってきて大学に通っている。日本にいる間は学校に行けなかったので取り戻さないと首席の座を失うということで真面目に通っていた。アルバザードの学生は非常に勤勉なので、いくらレインでもあまり長々とサボっていると首席をキープできないかもしれないそうだ。

アルシェはというと、カテージュから帰ってからは召喚省のお役人として働きづくめだそうだ。アルバザードの人はワーカホリックな日本人と比べると非常に人間らしく、１日

８時間労働を規則正しくこなす。だがアルシェのような将来の椅子が約束されている人間は時期によってはその倍も働かなければならない日があるそうだ。

アルシェはここのところ朝早く起きて外出禁止時間になってから召喚省を出るような生活をしている。どうも時間内労働については役人としての仕事をし、時間外でハインさんとシェルテスの一件で秘密裏の仕事をしているようなのだ。お役所仕事だからシェルテス討伐をするに当たって色々しなきゃいけない手続きや用意があるんだろうな。

しかも９時過ぎになるとこの家に寄ってはレインの勉強を見てあげている。私は自分の脛が痛いので２人は付き合って、その……私と先生みたいな関係になってるんじゃないかって思ってたけど、レインは居間でアルシェに大学の勉強を見てもらっているだけだった。

レインは女子大生といっても年齢は私と同じだ。アルバザードの学年システムは日本とは異なる。もしレインが日本人だったら私と同じく高３のはずだ。女子大生というと語弊があって、実際には女子高生だ。同い年の子が一生懸命勉強している横で、受験生の私は気の抜けた生活をしてばかり。でも……ここじゃ参考書もないし、しょうがない――と思うことにしている。

レインは毎晩来るアルシェを楽しみにしているようだ。別に化粧をするわけでも料理を作って待つわけでもお風呂に毎日入るようになったわけでもない。レインはあくまでレインだ。でも、アルシェを楽しみに待っていて、勉強を教えてもらっている。勉強しているのに２人は楽しそうだ。私と先生も横から見ればあんな感じなのかな。ジュンクで会ってたころとかが懐かしい。

でもそれも昨日までだ。少なくとも今日はイレギュラーな日だから。朝ごはんを食べるとレインは部屋に行ってサメルを着てきた。サメルは地面につくくらい長いワンピースで、ラーサやルフィと比べると少し日常的頻度は下がる。今日は厳粛な気分ということでこの服を選んだのだろう。私が綺麗ねというと赤くなっていた。

驚いたことにレインは今日も学校に行くという。私なんて５日に最後に塾行ったとき、緊張でお腹を壊したのに。今日の夜決戦だというのにどういう神経で大学に行けるんだろう。私はレインを見送ると、後片付けをした。家にはここんとこずっと先生と私だけだ。ネブラの強襲を警戒しながら言葉もよく分からない状態でレインの帰りを待っていた去年と比べると、天国そのものよね。いまは言葉も分かるし街の勝手も分かるし、アンセがあるから買い物にも困らない。そして何より先生がいてくれる。

私はレインがいない間、レインが昔そうしてくれたように、先生にアルカを教えていた。ここはアルバザード。決戦の地でもある。みながアルカを喋る。戦闘中に言葉が分からないと支障をきたすことがある。こないだだって、先生とレインが言語を共有してればレインは手首を怪我せずに済んだ。先生のことは勿論責めなかったけど、先生は自分で自覚してくれたみたいで、アルカを初めて積極的に覚えようとしてくれた。でも「俺は紫苑みたいな超人じゃないから」といって謙遜していた。私がたった数日でこれだけの量を暗記したのよといったら「やっぱり紫苑は天才だ」といって驚いていた。

先生は「年だよ、年」といって苦笑いしてたけど、数日の間にかなり暗記した。文法は元々分かっていたので、単語を補強した。戦闘に使いそうな言葉ばかり教えた。１週間で3000 語くらい暗記してくれた。私がすごーいといって褒めちぎったら、紫苑には勝てないといって苦笑していた。なんか私、先生に凄いコンプレックスを与えてないかと不安になった。かといって馬鹿な彼女の振りはしたくないし、そんなことをすればすぐ見抜かれて嫌われてしまう。先生はプライドが高いから私の演技は許さない。

でも実際先生のことは本当に凄いと思う。私は異世界に来たいというのと、そこで生きなければならないサバイバル精神があったからアルカを勉強できた。でも先生は正直言えば私という強力な翻訳ソフトがあるので、本当なら甘えてしまって勉強に身が入らないはずだ。でも、するすると吸収してしまった。これは本当に尊敬できた。そういったら素直に喜んでいた。

ただ、スピーキングとリスニングはあまり上達しなかった。私はレインとアルカオンリーで生活していたから必然的にリーディングとライティングを習いつつスピーキングとリスニングも鍛えていた。でも先生の場合、日本語をメタ言語として勉強しているから、英語教育と同じで読み書きばかりが得意になってしまった。それでも少しは私とレインの会話を理解できるようにはなったみたいだけど……。

読み書きができても仕方ない。シェルテス戦は聞いて喋れなきゃいけないから。でも、レインは学校だ。そこで私は試しにアルカだけ使って先生にアルカを教えるという計画を立てた。ところが私自身、難しいことになるとアルカのスピーキングができなくて、うーんと呟いてるうちに先生が腹芸で私の言いたいことを理解してしまい、「こういうこと？」と確認してきてしまう。私はそこで頷いてしまうので結局限界を感じて日本語に戻ってしまうのだ。もし先生がフランス人だったら却って良かった。共通の母語がないからお互い悩みながらもアルカを共通言語として使っただろう。だが日本語という強力なハードがある以上、どうしても２人きりのときはそれを使ってしまうのだ。そう、たとえアルバザードの空気を吸っていようと２人の日本人が固まっていれば自然と日本語に移行してしまうのだ。

先生は筋トレで身体を鍛えている。腕立て伏せもルーティンメニューに入っている。腕立て伏せはうつぶせに寝転んで、両手を真横に伸ばし、肘の位置を見定める。そして肘のあったところを覚え、身体を浮かべて手の平を置き、更にそこから手の平ひとつ分お腹方向にずらす。お尻があがらないように気をつけ、正面を向いてゆっくり胸を下ろしていく。これが腕立て伏せだ。きちんとしたゆっくりな方法で行うと 50 回でも厳しいと先生は言っていた。

先生は腕立て伏せをして、アルカを喋る私たちが日本語になっていく様子はこれに似ているといった。何でも始めのうちは腕に余裕があるからしっかりした姿勢を保てるんだけど、後半になるとキツイから、自分で悪いと分かっていても顔を上げられなくなったりしてしまうとのこと。確かに……。ムリが祟るにつれて自然と楽なほうへ身体が動く。自分

の心はそうならないように矯正しようとするんだけど、身体は楽なほうへ動く。そうだ、私たちのアルカが日本語になるのと同じ仕組みだ。アルカで練習しなきゃと思っていても自然と日本語になっていってしまいのだ。なるほどなぁ……。

で、私は庭で空手の練習をしていたけど、筋トレもやることにした。だけど先生のやり方での腕立て伏せは連続で30回しかできなかった。先生は女の子にしては素晴らしいと言ってくれたけど、力がないことが悔しかった。

筋トレをした後、２人で疲れ果てながら腕相撲をやってみた。そしたら私の力ではビクともしなかった。両手で良いというのでやってみたけど全然ダメ。先生はしまいには指一本でやるといったので私はムキになって思い切り体重をかけたんだけど、先生の指さえ痛めつけることができなかった。

私がかなり悔しがってると、先生は苦笑して「何にでも真剣だな」といってきた。「でも、力は男の特性だから、特性部分くらいはせめて顔を立てさせてくれよ」といってきた。そう聞いて不思議と宥められるのが分かった。

思うに私はがんばりすぎ。それを指摘されて改めて自覚できる。自分を縛ってた努力の呪縛を先生は気持ち良く解いてくれる。そういうところが凄く好き。肩肘はって生きていた私がどんどん素直な女になっていくのが分かる。先生といることで、私は最近自分が前より悪い性格が減っていってる。それが凄く嬉しかった。

レインが学校に行ってしまうと、私は居ても立ってもいられなくなった。

「どうした、紫苑。落ち着かないね」

「だって今日が決戦なんだもん。緊張するわ」

「まぁ最後のアルカの勉強でもしようよ。あと、戦闘の作戦も予め考えとこう。それと運動でもしよう。不安なんてのは筋トレとか運動すれば吹っ飛ぶもんだよ」

「そう……ですね。あ、もう１回腕相撲してください」

私は居間のテーブルに肘を乗せる。

「またかよ。何度やっても同じだって」

「ぶー。私、少しコツを掴んだのよ。ここが支点でここが力点でしょ。物理的にどういうポジションが最も効果的か考えたの。それと、筋肉の仕組みと働きを考えて一番引き手になるような作戦を立てたわ」

「はは、さすが紫苑だ。そういうとこ本当に凄いよな」

「えへ。私のこういうとこ好き？」

「大好きだよ。でもきっと好きになるのは俺くらいなものだと思う」

「先生は心が広いからね。蛍さんは全然違うキャラだったんでしょう？同じく好きなれるなんて凄いわ」

「そうかな」と腕を捲くる「はい。俺はまた指でいいよ。とりあえず全体重使ってこいつを倒せないことにはな」

私は指を掴んで作戦通り全力で力を入れた。
「お、こないだよりは良いな。でもその力がいつまでもつかな～」
余裕の声。むかーっ。
「はい、力尽きたね。よっ」
パタンとあっさり倒されてしまう。
「そ……そんなぁ」
「まぁそんなもんだよ、女の子は」
「むーっ」私は先生を睨んだ「……表出てください」
「おいおい、お前は野盗かよ」
「空手で勝負しましょうよ。先生はキックでいいから」
「今日決戦なのにそんなことしてる暇ないだろ」
「あら、私相手じゃ怖くてできないの？」
「はいはい、怖い怖い」
「むーっ、女の子だから殴れないって思ってるでしょ。差別よ！」
「てゆうか怪我したらまずいだろ」
「大丈夫。魔法で直します。今日の模擬戦だと思ってやりましょうよ、ね？」
「模擬戦……かぁ」
すると先生は興味を持った顔になった。
「まぁ確かに仲間内で試合をしておくのはいいかもしれないな」
「でしょでしょ！？やりましょう。一度手合わせしたいって言ったじゃないですか！」
「そうだな。シェルテスは格闘は弱い。力任せだ。こっちが対抗するには格闘技術しかアドバンテージがない。よし、魔法で治るならやるか。フルコンなのか、紫苑のところは」
「そうよ」

静は立ち上がって外に出た。私もついていく。裸足だ。裏庭にいく。ここなら人からまず見えない。
「玲音の書は持ってきたね」
「勿論です」地面に置く。
「制服でいいのか？汚れるよ」
「どうせ今夜汚れるでしょう？先生もスーツでいいの？」
「どうせ再就職の面接に着てくのはリクルート用でしょう？」
２人同時に笑った。いいなぁ、この人だいすき。
でも今は本気で潰しにかかるわ。私は笑顔を崩す。静は口元は微笑んだままだけど、目は笑ってない。
「折角だからノールールでやりましょう？ルールなんて戦闘にはないわ。強いて言うなら武器はなしで、身体だけというルール。どうせ治るから目潰しでも金的でもありで」

「それは紫苑が危ないよ」
「私の心配してくれるのは嬉しいですけど、私、強いですよ？ノールールって一度やってみたかったんです。遠慮なく本気で行ったら果たして自分は人間相手にどこまで戦えるのか知りたくて」
「そうか……。わかった。どうせやるならそうしようか。ただ、あくまで模擬だから相手が戦闘不能になるか参ったと言ったら止めよう」
「はい、分かりました」
「あとさ……少し心配なんだけど。もし子供妊娠しててお腹に衝撃きたら流れちゃわないか？」
「魔法で切れた腕まで治るんですから勿論それも治りますよ。そうじゃなきゃどうせ今日のシェルテス戦でやられるでしょうし」
「わかった。じゃあ全身狙うってことだな」
「はい。こっちも金的でもお構いなく入れるんで、そっちも胸を思い切り打ってもいいですからね」
「うん……。紫苑は裸足でいいのか？」
「大丈夫です。ローファーは脱げてダメなんです」
「そうか、俺のは紐の革靴だから思い切りやらせてもらうぞ」
「投げとかも全部アリですからね。幸いここは土ですし。さて……」
　私はすっと構える。先生も構える。多分躊躇してるのだろう、中々こない。私はステップするけど、後ろにステップして避けてしまう。何回か蹴りを出すけど捌かれてしまう。だけど追い討ちはかけてこない。あんまり追い討ちがないからミドルレンジの打ち合いに入ろうと間合いを詰めたら左足の前蹴りで軽く制される。あまりに威力もやる気もない静。私は、一歩離れる。
「ねぇ先生、やっぱり私相手だからって遠慮してるでしょ」
「いや……まぁ」
「ルールなしって言ってるでしょ。喧嘩の敵だと思ってよ。近寄ってこれないのはちゃんと空手やってる私が怖いからっぽいね」
　私の嫌味な言い方に、煽りと知りつつピクっとする静。
「塾で襲われたとき、相手素人なのに怖がってませんでした？喧嘩が怖いのに女の子を守れるの？」
　ふっと小馬鹿にしたように笑ったら、先生は気まずそうに口元だけ苦笑した。
「紫苑、お前さ、ノールールの怖さ、知らないだろ。口で言うほどノールールの攻撃には反応できないよ。お前は道場で型を練習してるだけだから」
「えー、そうかなぁ。先生、口だけじゃないですかぁ？」
「……そうか。魔法で治るなら丁度良いよな。その代わり、今から本気で抵抗してみろよ？」
　なんだかとても冷たい声に聞こえた。私は怯むが、気合を入れる。

好きな人なんて考えちゃダメ。いまのこの人は敵、別の人。そう……シェルテス、フェンゼル、お母さんにばっか優しくするお父さん、シェルテス、フェンゼル、受験受験ってごちゃごちゃうるさいお母さん、シェルテス、フェンゼル、電車の中でやらしい目で見てくるオジサン、私の苗字も覚えてないクラスの子、シェルテス……。

距離は３ｍ。少し遠い。間合いを詰める距離だ。いや、キックは確か間合いが長く左右に動く。直線的で接近戦な空手とは少し違う。私が向こうのアドバンテージを崩すなら脚中心で射程を伸ばすしかないか。

私は上下に少し動く。先生はとんとんと私より大きな揺れをする。基本がキックなのは間違いないようだ。しかし静はシェルテス戦で見たところ、空手の打ち方もできるし、少林寺系の技術もあるようだ。そして我流が含まれている。アルシェの使うユベール以上にやりにくい、予測の効かない相手だ。

静が間合いに入ってくる。左ジャブ。とっさに顔をガードすると、静は同時に左前にステップインして上体を少しかがめつつ右のローを入れた。その勢いの強いことと言ったら。私は一瞬沈みそうになった。私の甘かったところは、先生が喧嘩あがりな横で私が空手の試合あがりだというのを甘く認識していたところだった。初撃を受けると同時に私はカウンターで右脚を蹴り上げた。上体を低めた静の顎を上足底で捉えたが、バネが不十分なので威力が逓減された。静は引かずにそのまま私にタックルした。これは……レスリングの技。静は思い切り私を突き倒す。体重が 20kg 近く上の相手では防げない。しかもえげつないことに熊手にして右手の指を思い切り私の顔中に突き刺し、その勢いのまま顔から地面に叩きつけた。その上、右膝を私のお腹の上に当てて、倒すと同時に膝で胃の辺りを潰してきた。後頭部を地面に叩きつけられ、意識が一瞬飛んだ。目が焼けた。指が目に食い込んだらしい。即座にマウントに姿勢を変えると、静は顔を右手で何度も殴ってきた。私はとっさに腕を腕を交差させたけど、グローブを付けない素手はガードをすり抜ける。唇が切れて歯が折れるのが分かった。でも私は一向に怯まない。血を溜めて静の顔にぶっと吹き付けると一瞬怯んだ。そこで右手を振って静の顔を殴る。その隙に突き飛ばしてマウントを出て、右ローを入れる。静はとっさにしゃがんだまま左頭をガードするが、これはフェイント。私は右ローを中断して左ローに変え、右耳を全体重かけて蹴り飛ばした。よしっと思ったところで静は即座に後転して素早く立ち上がり、元のポジションに戻った。

静が再度入ってきて、前蹴りを出す。あっさり捌く。私は脚を取ろうとしたけど、引き脚が早くて取れない。え、キックの前蹴りってこんなに引きが早いの！？脚を取ろうとして左手を出してしまったため、瞬時にストレートが飛んでくる。左目とこめかみの間を打たれ、視界がぼやける。一歩後ろにステップすると静が近寄るので、思い切り反動を付けて前蹴りを出した。思い切り胸に当たった。左の肋骨はこれでもらった。でもこんなのが入るなんておかしい。私は引き脚を即座に戻そうとしたが左手に捕まれた。分かった……前蹴りは予想済みだったんだ。倒される。マウント時に歯を折られた恐怖がよぎって倒されまいと抵抗する私。ところが静の狙いは違った。私は股に激痛を感じた。脚を取られた

と思ったら静は上げ蹴りを開いた股に打ち込んできたのだ。ぐらっとよろめく。逃げようとするんだけど脚を取られてるときは壊れたヤジロベーみたいにふらつくしかない。静の攻撃は早く、脛で股を打った次の瞬間、連続で今度は上から下に突きおろすように下腹部を蹴り下ろした。そのまま右手を私の胸に突き当てて、左手で私の右脚を抱えたまま、また地面に突き倒してきた。背中から思い切り落ちて、呼吸が一瞬とまった。血の咳を吐く。私の左目を狙って石臼拳を入れてくる。とっさに顔をそむけると頬に拳がめりこんだ。ここは痛みを感じやすい部分で、戦意を失いやすいところでもある。そして静は面積の広さを活かした掌で私の人中を思い切り突いた。鼻血が出て前歯が折れるのが分かった。頭が朦朧として戦意を失う。口の中が血だらけ。鼻中に血が回って気持ちが悪い。首を蹴られないだけマシだった。舌を巻き込んでしまうところだった。

静は目を潰そうと貫き手にする。私はもう怖くなってしまって血を吐きながら喚いた。手をパーにして顔をそむけ、呻いて首を振った。すると冷たい声で「降参か」と聞いてきた。私が小刻みに頷くと、少し警戒して、ゆっくり警戒を解かずにマウントを解いた。この相手の降参を信じないところ、攻撃のえげつなさ、どれを取っても喧嘩上がりだ。

私はごほごほと咳き込んで、地面に落ちてた歯を拾う。

静はすっかり元の表情に戻って「ごめんな、紫苑。大丈夫か？」といって玲音の書を手渡してくる。私は膨れた唇で何とかプロティスの魔法を唱えた。あれだけ意識が朦朧としていたのに、魔法を使うと嘘みたいに痛みが引き、傷が治り、折れた歯もくっ付いた。ふぅと大きくため息をつく。

「本気でっていう約束だったから本気でやってしまった」

「いいんです……先生も治しますね」

プロティスで静も治してあげる。

「ごめんな、ほんと」

「模擬戦よ。謝らないで。失礼です。先生は喧嘩した相手に謝りますか？」

「……そうだな、すまなかった」

「私の敗因を教えてください」地面に座り込む。

「それはいいけど、その前にさ、俺のこと怖がってないだろうね」

「大丈夫です。理由があるのにDVとか言われたら溜まったもんじゃないでしょう？」と言うと「そうだな」といって苦笑する。

「紫苑の敗因は技が……というか戦い方が綺麗すぎるところだ。ルールに身体が縛られてる。始めのフェイントからのローは定石で、これはキックに慣れてないから動きが読めなかったんだろ。でも空手にも同じ技はあるだろ」

「はい。キックの動きの未知さに囚われてあんなみえみえのフェイントを食らいました」

「そこまではいいんだけどさ、問題は次だよ。試合なら近接戦か、紫苑が間合いとって仕切りなおしになるだろ。紫苑はとっさにそうしようとした。そうだよな。そのままタックルされるなんてありえないし、顔面も守らなくていい世界だ。ルールの中で練習してると

咄嗟の反射神経がルールに固定されてしまう」
「よく分かります、それ。反射神経がルールに従っちゃうんです。頭ではノールールって思ってても。だからタックルはビックリで……もうあれでダメでした。あそこでマウント取られて……思えばウチの道場じゃマウントからの練習なんてしないんです」
「そうだろうな。ってことは自分の知らないポジションや動きで来られたら紫苑はただの運動神経の良い女の子と変わらないんだ。そしたら男の力には適わないよな」
「そっか……そうですね」
「特に紫苑は小柄だからな。軽くて力が弱いしリーチが短い。技が綺麗で正確なのは賞賛に値するが、試合向きだよ。ルール無しじゃやっぱ身体がでかい動物には勝てない。俺が勝てたのは紫苑の技が綺麗過ぎたことと、紫苑が小さかったことが原因だな。恐らく紫苑は合気道や柔道の関節をもっとやったほうがいい」
「それ、できるんですけど、根詰めて練習してないから素人相手にしか効かないんです。今度練習に付き合ってください」
「そうだな。でも生きて帰ったら戦闘は必要ないよ」静は立ち上がる「俺だってもう喧嘩なんてしないと思ってたのにさ。塾のガキだろ、ブクロの野盗だろ……タチ悪いわ」
「でも勉強になりました」
「俺が勝てたのはガタイだろうな、最終的には。到底紫苑のお父さんには勝てないな。速攻殺されるよ。リーチが違うし威力が半端なさそうだ。こっちが打っても怯まないだろうしな。ローで崩していくしかないけど、膝を合わせられてこっちの脛を潰されるだろうな」
「そんなにお父さんって強いの？」
「前に紫苑の家で少しだけ動きを見て技量は分かったよ。そしてあのガタイだからな。技に身体があれば俺に勝ち目はない。俺は素人だし、弱いからな。喧嘩してたっていっても高校のとき街で暴れてたくらいで、決してそんな強くはなかったよ。ほら、身体が小さいだろ？」
「その代わり、技が厳選されてて少数精鋭で、軍隊みたいな打ち方ですけどね。それと、攻撃がえげつないです」
「そうかな」と笑う。
「はい。いくら魔法で治るからっていっても躊躇いなく彼女の目を潰そうとしたり歯を折ったりするのは……なんていうか……」
　言葉が出てこない。喧嘩とはいえ、高校のとき、障害事件になると思って怖くなかったのだろうか。
「冷酷ってことだろ。蛍は俺を優しいって言ってくれたけどな」
「え？そうは思わないけど。ただ……怒ってるときの先生は怖いかも……」
「ふぅ、なんだか悪い印象を与えてしまったかな」
「いえ、今のはナシで！やっぱり良い模擬戦になりました。あのままだったらシェルテスの攻撃に私までやられてたと思う。先生みたいに合理的に敵を戦闘不能にさせる方法を取

ると思うんです、シェルテスは。いま戦わなかったらきっと私、型どおりの動きをしてシェルテスにやられてたかも。思い返すと型どおりの動きをしてしくじってシェルテスにやられた覚えが何度かあるんです」
「まぁ、良い経験になったんなら……」
「うん」
「じゃあ次は知能を使おう。アルカでも教えてくれよ」
　ジャケットを拾って肩に掛ける静。私は近寄って袖を握る。
「ん？」
「あの……勉強前に、抱いてくれませんか？」
「えぇ？こんな時間から？」
「さっき乗っかられたときの先生の顔が怖くて……あれが目に焼きつく前に優しい顔で上書きしたいんです……」消え入りそうな声。
「うーん。でもレインが学校で勉強してるのに何か悪いな」
「だってぇ……怖かったんだもん」嘘泣き顔を作ると、静は急にうろたえる。
「わかった、わかったから。ごめんね、ほんと」私の顔を覗き込んでくる「部屋行こうか。外寒いよ。暖めてあげる。先シャワー行っててよ、俺ココア作ってくから」
　慌てる静はすごく可愛い。そして操りやすい。私はへらっと笑って甘えた声を出した。
「今度は優しくちて」
　私に騙されてたと知って、静は大きくため息を吐いた。私と付き合う男の人は大変だなぁ。静はこんな我侭な女に捕まっちゃって果たして幸せなのかなぁ？あんまり調子に乗って捨てられないようにしなくちゃ、蛍さんみたいに。
　結局私を殴ったことが引っかかってたみたいで、優しく受け入れてくれた。いつもよりずっと優しく抱いてくれた。優しくすることで私を傷つけたことの埋め合わせをしたいのかしら。あれは私が悪いのに……優しいのね。レインが学校で勉強しているだろう横で、私はまた部屋で暖かい腕に包まれていた。ひとんちで何やってんだか、私。

　レインが学校から帰ってきたとき、私たちは居間でアルカの勉強をしていた。レインは「私が紫苑にそうやってアルカを教えてたけど、今はその紫苑が静に同じ席でアルカを教えてるのね、不思議だわ」というようなことを言って着替えに行った。
　降りてきたレインは私の制服を着ていた。
ᘐᒐᴐᐱ，ᐱᴐᐱ ᐯ-ᒍ ᐸIeᐱ ᒐelᑕeᒍ ᑐᴐᑐᴐ ᑕᵃẟᘐ
ᘐᖻ-„ ᑕᖻᵃ ᒍccᐱ- ᑕcᐱ ᑕᵃ ᒍeᑕe„ ᴐl ᑕᵃ ᒍcl Scᒍ c> ᐯ-ᒍ ᒍᴐᐱ ᐱᴐᐱ ᑕ-ᵃ ᒍ-ᚠ ᒍ->„ ᒍᴐᐱ ᚹ-ᒍᒍᴐᘐ
ᘐᐱᴐᐱ ᒍccᐱ- ᑕᵃ >cl ᐱᴐᐱ ᐱ- ᐱ-ᐱ e> ᐯceᐱ ᑐᴐᑐᴐ ᒐec ᑕᵃᘐ
ᘐᒍᴐ-ẟ ᘐ
ᘐᖻ-，>cl ᒍᴐl ᑕᖻᵃ lecᐱ-ᑕ ᑕᵃ ᐸIᴐ ᒍ-Iᑕ ᑕᴐᒐᘐ
　私はにこっとした。６時になってアルシェが来た。ヴァストリアを全て持っている。玄

関に迎えにいったら外はもう真っ暗だった。新月の２日前だけあって月は出ていない。全くの闇夜だ。空気が心なしかピリピリしていた。

私たちは４人で料理を食べた。これから外に行かなきゃいけないから、身体を温めるものを食べた。具沢山のシチューは身体を芯から暖めてくれた。４人で作戦会議をした。静はやっぱりリスニングとスピーキングが苦手で、私が訳していた。作戦といっても戦術など練れない。ヴァストリアを持って４人で固まり、奇襲に気をつけ、シェルテスが現われたら総力戦で潰す。これだけだ。というかこれ以外にないのだ。

役回りを確認しておいた。前衛はアルシェと静。打撃や剣撃でシェルテスを足止めしつつ、体力を奪う。後衛は私とレイン。私は玲音の書で魔法を撃つ砲台。レインはできる限りたくさんの神を呼び出す召喚士。前衛がシェルテスを逃がさず囲み、私が魔法で援護する。シェルテスは私たちでは殺せない。だから最後はレインの召喚にかかっている。シェルテスが弱り、これを包囲したところで、レインがアルデス・ルフェルを始めとした神々を召喚する。神々がシェルテスを殺すか封印すれば勝利だ。主砲は魔道士の私になるが、鍵となるのは言うまでもなく召喚士レイン。だから前衛にはシェルテスの足止めと同時にレインの援護が必須。私は守られない。静にきつく言った。もしレインと私が狙われたらレインを助けるようにと。

アンセは完全に通信状態にしておく。全機だ。もし私たちが負ければハインさんが代わりに神を召喚する。つまりレインは言ってみれば身代わりのスケープゴートだ。シェルテスが召喚士はレインと思っている間に私たちはもう一人の召喚士を影でリザーブしている。たとえ私たちが死のうと、カルテンの中に潜むハインさんは無事だ。それまでに私たちがダメージを与えておけば、ハインさんの召喚した神がシェルテスを殺すか封印する。

つまり私たちがある程度のダメージをシェルテスに与えられれば、私たちが死のうが、シェルテスも道連れにできるということだ。最悪なのは私たちが圧倒的な力で瞬時に殺されてしまうケース。そうなれば召喚は間に合わない。召喚が間に合ったとしても神はシェルテスを取り逃がす。更に、万一死体からヴァストリアを奪われたら神は更に対抗できない。シェルテスはその勢いで月の神を殺し、彼らを食うことによって更に強大となるだろう。そうなれば神とシェルテスの戦争が起こる。その上シェルテスはアルバザードの召喚省を報復として破壊するだろう。オピニオンリーダーを失ったアトラスは混乱し、神と平行して戦乱の世の幕開けだ。

私はお腹が痛くなるのを感じた。私は責任感が強すぎるのだろうか。色々不安に思ってしまう。ぎゅっとお腹に力を入れると子宮から先生のがどろっと下に降りていくのが分かって、「あっ……」と思った。そうよ、大丈夫。私は先生に勇気も力も希望も貰ってる。大丈夫……大丈夫。

７時半に私たちは家を出た。レインが家に鍵をかける。そしてカルテに歩いていく。既にハインさんはカルテンの中にいる。アンセで確認を取るアルシェ。ラストミッション開始だ。このミッションは恐らく一瞬で片がつく……。大きな力がぶつかって惑星衝突みた

いに爆発してすぐ終わるからだ。静がまるで花火だなと言った。そして今度の夏になったら浴衣着て隅田川に花火を見に連れてってくれると約束してくれた。未来の約束をしてくれたのが凄く嬉しかった。

８時前にカルテに着く。恐らくシェルテスが出てくるのはここだ。

「紫苑、どうしてシェルテスはここに来るんだ」

「月の神ドゥルガとヴィーネを倒しにいくからです。私たちがここで待ち伏せするのは十分予想しているはずです」

「月に行くのになんでここなんだ？」

「あそこ」私は空を指差した。暗闇の中、渦のようなものが蠢いている「空が少しぼやけていませんか？少し渦のような」

「渦？あれか……。そういやそうだな。逆さまになって夜の海を見てるみたいだ」

静はいつも綺麗な表現をする。言葉遣いが荒いときもあれば、詩的なときもある。比喩の上手い人は頭が良い人だと思う。私は静のそういうところがすき。

「あれが無限空アルテージュです。無限を意味する悪魔テームスの元へ繋がっていた空です。悪魔の母なんです、テームスは。アルディアでアシェットが倒して一度滅んでいます。シェルテスはここを通って宇宙に即座に出て、月へ赴きます」

「なるほどな。ママのところに帰るのにあのトンネルを潜るわけか」

「で、私たちが通せんぼ隊です」

ᘐGotcha ᘐパシっと乾いた音で拳を手の平に打ち付ける静。

新月の１日前は明日、20 日だ。シェルテスが月の神を襲うのはあと４時間後。少なくともその前にシェルテスはここを通過するわけだ。いま、もう限りなく新月の１日前に近付いている。シェルテスの力が恐らく最も強くなっているころだ。

８時になった。私たちは奇襲に気をつける。ナイト２人が背中合わせになって私とレインを挟む。

lecʌ ᘐʌee ∪cɔʌᘐ とレインが言いかけたとき、私の目の前に青白い炎が起こった。空中で燃える大きな人魂のような炎。

「シェルテス！」

私の叫びに皆が一斉に振り返る。

炎はやがて人型になった。そいつは前に練馬で見たシェルテスの姿だった。ドルテの魔力を得て復活したシェルテス。だが今度は少し違う。禍々しい青白い炎が前以上に煌々と揺らめいているのだ。

「どうやら奇襲の必要すらないって感じですね……。∪elᑕe⊿ᖵ」私は大声で怒鳴った ᘐ-ʌ⊿ ℓ-⊿ - ᑕc Ɥəl ᑕc Ɥəə⊿ -ᔑ- ℓəəᔑᛤ- ɔ Vccʌe -ᔑ ℓe⊿ɘ- - ᑕc Vecl -ʌ⊿ ⊿eᑕ ᑕcᖵᘐ

シェルテスは私を睨みつけると咆哮かと思うような声で笑いだした。

ᘐ∪cɔʌ ℓel I-Z ᑕ -Iᑕᐸc- ʔɔʔ,, ᑕc lɔ ∪-ʌ -ʌ eʌ V-ᔑ-e ᑕcc⊿ clẟᘐ

ᔕh-ɔ -ʌ ᔑeᔭ ᑕc Ⅴ-ᔭ-e -ʌᔑ,, ᑕ-l -ʌᔑ ᑕ-ʌ Ⅴ-ᔭ-e ᑕcʌ ᑕc, ɻeeᚣᔑ,, ᔑɔʌ -ʌᔑ ᒣɔᒣ- ᒐccᑕ Ⅴ-ᔭ-e e ᒐɔᒣ ᔑeᑕeẟ ᔑᚣ, ᔑclᚣ ᑕc eᑕ leᒐe eʌᑕɔ ᒐ-ᒣl ᔑeʌ ʌɔᔑ eᑕ cⅤʌᔕ

強がってからかう口調で言う私。獰猛なシェルテスは咆哮すると怒りだした。

ᔕɻeᔭ Scᔑ ɸe, ᚣcɸ- ɸeɔ, ɻcɔᚣ-ᑕ ᔑ- ɸe Ⅴɔᔭᑕᖇᔕ

「何かやけに紫苑にキレてるみただが、何て言ったんだ、あいつ？」

「……聞かないほうが良いこともあると思いますよ。ᒐelᑕeᔑᖇ ᔑɔʌ -ʌᔑ ᔑeᑕ Ⅴ-ʌ ᑕc h--ᔑ ᔐᔭ-ʌᖇ」

私は魔杖ヴァルデを掲げた。

ᔕᒣeᑕᑕ-ᖇᔕ

私の号令とともにアルシェと静が駆け出した。私は玲音の書を開く。レインは印を組んで呪文を唱え、召喚の準備をする。レインの身体が淡く光る。レインは恍惚した顔で目を少し細める。唇だけが小さく動いている。

怒号と共に静が守護剣ヴァノディアを振るう。シェルテスは高くジャンプしてそれを避ける。狙いはあくまで私だ。よし、上手くいった。私のほうがレインより運動神経が高い。後衛が狙われるなら私のほうがいい。とにかくレインがやられたら計画はダメになる。現状じゃヴァストリアを持たないハインさんが召喚したところでシェルテスを倒せるほどではない。あくまで彼の出番は私たちがダメージを与えられたらの話だ。

ᔕᑕaaʌɔᖇ ᚷcɣc e ᑕ-ɻ ᔭe ᑕɔe ᒐelᑕeᔑᔕ

土の魔法を使うと地面から円錐状の大岩が飛び出し、宙を跳んでいるシェルテスを下から突き上げた。シェルテスの周りを取り囲む青白い炎がごうっと燃えて反応する。

「なんだ、いまの光は！」

「シェルテスはユノというヴィードで身体的ダメージを防いでいます。ユノが事実上の体力だと思ってください。ユノは攻撃を受けるごとに飛散して減ります。いまのは大ダメージを受けた証です！」

「オッケー、イルパッソ！」静が跳躍する。驚くことに４mは跳び上がった。怒声を上げてシェルテスに切りかかる。ガンっとヴァノディアがシェルテスに当たると接触面が青く光る。ヴァノディアの表面も青白く光る。これもユノだ。普通の剣ならこの時点で衝撃に耐えられず、折れてしまう。ヴァストリアは材質は珍しくないものを使っているが、込めてあるヴィードの質と量が異なる。だからこそ殲滅武具なのだ。

斬り付けた静はそのままシェルテスの身体を蹴って下方向にジャンプし、着地する。

アルシェが近寄って私の前に来る。そしてノバを身に付けた身体でシェルテスに回し蹴りを加える。シェルテスは派手に吹き飛んでいった。

-ᔭᒐe ᔕᒐcɔʌ, -ᑕa eᑕ Ⅴelᑕ ᔭ-ᒣᖇ -ʌᔑ ɻel l-ʌ ᒣ-lᑕ ᒐelᑕeᔑ ɻel -Ⅴɔᚣ ᑕcl cʌᔑ h-ᒐᖇᔕ

ᔕlɔᒣcᖇ ɘ-lᑕcᔑ ᔭe ᚲ-ᔭ -ᑕa ᖹaʌ h-ᔭɘᖇᔕ

光の呪文を唱えると強烈な光が巻き起こり、辺りを昼のように照らした。だが周りがあまりに暗いのでウチの近くの遊歩道の街灯くらいの照度に相殺されてしまう。けど、シェ

ルテスの姿は細かく見えるようになったし、自分たちもお互いがよく見えるようになった。
ᔓᔑe ᓀaᖇᔕ
　シェルテスは口から青い光線を吐き出した。
「させるかよっ！」静が私目掛けて飛んできた光線の前に立ち、ヴァノディアで受け止める。あっさり光線は弾かれ、霧散した。こんなときに「ありがとう」などと言うのは時間の著しい損失だ。私は即座に次の魔法を唱えた。
　シェルテスは私の主砲を恐れたようで、私を執拗に狙う。だけどナイトが守ってくれる。静は目にも止まらない速さでシェルテスに駆け寄ると、背中に深々とヴァノディアを刺し込んだ。
ᔓlーᐱVe〉 ᔑe 〉eᒍ ᒐelᑕeᒍᖇᔕ
　邪の魔法を放った。黒紫の邪念と邪気がシェルテスを取り囲み、動けなくする。
　アルシェがキルティクノを抜刀する。一閃が光線になってシェルテスの背中を打ちつける。バシっと雷のような音と動きを立ててユノが弾ける。これはかなり効いているようだ。ユノのバリアを貫いて背中に斬撃を浴びせた。
ᔓlーᐱVe〉，ᔑe ᒍɔᔑᛦ ᒐelᑕeᒍᖇᔕ
　邪気が雲になってシェルテスを取り囲むと宙へ上げた。シェルテスはもがいて抜けようとするのだがこの雲はもがくほど蜘蛛の糸のように絡まって身動きが取れなくなる。
「くっ、武器がねぇ！シェルテスに刺さったままだ！」
　すると静は８ｍほど跳躍する。シェルテスの背中から剣を引き抜くと、空中で１回転して腹部を切りつけた。バシュっとユノが弾け、シェルテスが咆哮を上げる。
　そのとき、レインの身体が光った。
ᔓlくeᔑ laᐱーᔑᖇᔕ
　ルフェル王の召喚がまもなく完了するようだ。
ᔓᒐcZᘁー，ᔑe ᓀɔl ーlくɔᔑᑕᖇᔕ
　光の中からルフェル王の声が聞こえた。すると空から使徒ピネナの魔槍アルフォートが降ってきた。エルト神の贈り物だけあって空から降ってくるのね。雨が降ろうが槍が降ろうがをこの目で見るとは思わなかったわ。
　静はシェルテスを踏み台にして学校の屋上よりずっと高く跳び上がった。そしてアルフォートを受け取る。ランヴェムの雲が消え、上空からシェルテスが落下する。シェルテスは立ち上がろうとしたが霧散した雲が弾雨になって物凄い勢いでシェルテスに降り注ぐ。邪気の雨だ。シェルテスは身動きが取れなくなる。その襟筋に天空から静が魔槍アルフォートを携えて降臨した。物凄いユノの衝撃が起こり、静本人でさえ３ｍは反動で吹き飛ばされた。シェルテスは大きな声をあげ、四方八方にユノで出来た閃光弾を放つ。
ーᔑᒐe ᔓᐱ->ᑕᖇ laᓘ Vɔlᘁ ᑕcᐱᘁー くcᖇᔕ
　閃光弾は道やカルテンにぶつかると、爆発して大穴を作った。幸い私たちには苦し紛れの一撃が当たらなかった。怒りにまかせたシェルテスは静に突進する。ところが静はアル

シャンテで自分の身体を覆い、強烈な噛み付きを物ともせずガードする。そこを狙ったアルシェが地面に落ちていたアルフォートで後方からシェルテスを突き刺す。
-ᔑᓚe ᕲᔑ-ᑐ ᔑ-ᑎᚱ lᓀ -ᔑ cVΛᚱᓄ
ᓚelᑎeᔑ ᕲlɔ ᔑɔ- Ꮆ- ᘐ ᓄ 怒号と共にシェルテスが左腕を大きく後ろに振る。
アルシェは顔面に拳を食らい、吹き飛ぶ。ちょうど召喚魔法を唱えていたレインに激突するアルシェ。レインが倒れ、その上にアルシェが仰向けで倒れこんだ。そこにシェルテスは追い討ちをかける。
ᕲl- VɔΛᑐ -ᔑᓚeᚱ ɤɔᑎᚱᓄ 叫ぶ私。
シェルテスが光線を口から吐く。アルシェ目掛ける光線。しかし時間がなさすぎる。アルシェはキルティクノで弾く間もなく、ユノの光線を胸に食らう。雄たけびをあげるアルシェ。立ち上がろうとするが、動けなくなってしまう。
「レイン！」叫ぶ私。アルシェは強化されている。ダメージは少ない。だがレインはただの女の子なのだ。あの勢いで大の大人が吹っ飛んできてぶつかった。防御力が強化されていない状態では、それはとてつもないダメージなのだ。ましてアルシェの下敷きになった上、いま間接的にシェルテスの閃光を食らった。
ᕲᑎeeZeΛ ᔑe ᖷeᔑΛᖵ-ᒐ ᓚelᑎeᔑ - S-Λᚱᓄ
緑の風が矢尻状になってシェルテスに飛んでいく。見事に悪魔を捕らえると、物凄い攻撃力で空まで吹き飛ばす。
「レイン！ϑ-ᔑᔑɔ ᘐ」
アルシェがレインからどく。彼も動くのがやっとだ。レインは口と鼻、そして耳から血を流して目を虚ろに開けていた。それでもその唇は神を祈っていた。敬虔なレインは召喚士にうってつけの人材だと改めて確信した。思ったより軽傷だったが、耳から血はまずい……。
私がプロティスの魔法を使おうとしたらシェルテスが上空から閃光弾を放った。玲音の書が吹き飛んで地面に転がる。私は慌てて無様な格好でよろけながら走った。地面に倒れこむように突っ込んでいって玲音の書を拾うと、顎を強かに地面にぶつけ、すりむいてしまった。手の皮もずるずるに剥けて無残だ。まるで子供のころ遊んでいて転んで怪我をしたよう。でも、こんなものダメージのうちに入らない。
私はとっさに火の魔法を唱え、シェルテス目掛けて撃った。ところがシェルテスの目的は玲音の書ではなかった。私の炎は虚しく宙に消えていった。
しまった、狙いは……！ハッとレインを見る。ちがう、レインのところじゃない。じゃあどこへ。静を見る。居た！シェルテス！
アルシャンテを着ている静はシェルテスの蹴りと突きをパリーした。そしてシェルテスの脚を取って胸を押して倒す。悪魔相手にマウント！？
「死ね！」と叫んで静が強化された拳でシェルテスの顔を打つ。ユノが１発１発弾けて飛ぶ。キラキラ光る金平糖が弾け飛んだみたいな光だ。

シェルテスは口をカパっと開けると閃光を吐き出した。反撃だ。
「危ない！」
その瞬間、静は身を仰け反って光を避けた。
「分かってるよ。さんざ見せた手が通じるか、このクソ犬」
ところがシェルテスは油断を見せた静の首に尻尾を絡めた。
まずい、いくらノールールに慣れてるからって、人狼と喧嘩したことなんかないはずだ。尻尾が首を絞める。凄い力で静を宙にあげるシェルテス。静が死刑囚のように宙でもがく。私は魔法を撃とうとして躊躇した。いま撃てば静を盾にされる。かといってアルシェは倒れている。どうする……どうすれば……。せめて何か魔法を。
何もできないでいるとシェルテスは立ち上がり、空中にぶらさがる静に向かって閃光を放った。静はアルシャンテで身を防いだものの、物凄い勢いで吹き飛んでいった。
「先生！」
私は唱えておいた氷の魔法を出す。つららがシェルテスに向かって正面から飛んでいく。ところがシェルテスは「がぁっ！」と叫んで青白い右手を出すと、その手でつららを破壊してしまった。
「なっ！」
狼化するシェルテス。今の無理なガードで一時的に人狼化が解けたのだろう。狼になると青い彗星のように私をめがけて飛んできた。冗談じゃない。こんなのに当たったら私の体は爆弾で吹き飛ばされたみたいに破片だらけになって飛び散ってしまう。
ᑫᕽᓄᑦᑕᓗᒋ ᕽe ᒻ-ᒪ ᐯ-ᐱᓄᑉ-ᒻᒋᑫ
危機一髪のところで目の前にバリアを張る。シェルテスがバリアに追突し、反動で後方に吹き飛び、地面に落ちてもがく。危なかった。今のはコンマ１秒も違わなかったのではないか。もし神の言語アルカでなく、語形の一々長い日本語や英語やドイツ語で魔法を唱えたら間に合わなかったのではないか。アルカの短さは生活で便利に感じることは少ない。だって迂言法を多用するから。でもこういう急場ではこの早さが便利だ。
「紫苑！」日本語の発音でレインが叫ぶ。いや、血を吐くレインの言葉がアルカに聞こえなかっただけかもしれない。私の頭の中では妙に時間がゆっくり流れていた。
周りを見る。静がふらふらしながらシェルテスに向かっていっている。アルシェがやっとのことで起き上がってレインの前に立ちふさがって彼女を守っている。レインは穴という穴から血を流しながら必死に召喚魔法を唱えている。
シェルテスは私に再度突っ込んでくる。まずい、私も動けない。まずい……まずい。
そのとき、レインの放つ光の中から光線が飛び出し、シェルテスを吹き飛ばす。犬のような叫びをあげてシェルテスが地面をのた打ち回る。
-ᕽᕊeᓄ ᑫ-ᐱᓄ ᐳᓗᓄ ᐸeᐱ ᑦᑕᐱᒋ ᒐᑕᓄᐱ, -ᕽ lecᒋᑫ
どうやらいまの援護射撃はアルデス王のようだ。無理してほぼ異次元の場所から時空を飛び越えて一撃援護してくれたようだ。王の一撃にしてはあまりに威力がなかったからだ。

だけど……もう無理なんです、アルデスさん。レインが召喚を完成させるまであと１分はかかりそう。メルディアの光やハインさんの召喚を見てきた私だから分かる。何よりこの期に及んでシェルテスがレインでなく唯一戦闘可能な私を狙うことからもそれは分かる。シェルテスは玲音の書を持つ脅威の魔道士を殺してからレインを殺す計算ができているのだ。もう神が召喚されるならとっくに弱ったレインに止めを刺しているはずだ。

最後に残った使徒は、私、紫苑だ。だけど私はシオン＝アマンゼじゃない。リディア＝ルティアでもない。ただの日本の女子高生なのよ……。無理よ。やっぱり悪魔になんて勝てっこないんだわ……。

シェルテスが回復し、人狼に戻る。咆哮のような高らかな笑いを立てる。

クソ野郎！こんな奴に……こんな奴に……！こいつの体力はどれくらいあるの？まだ余裕に見える。私たちはこいつの体力を削れたの？いま私が殺される。そしてレインが殺される。アルシェと静が殺されたころ、これを見ているハインさんの召喚が発動するだろう。カルテンから神速で神々が出て行って……果たしてこのシェルテスを止められるだろうか。アルデス王の戦闘力は召喚省で見た。あの弱ったシェルテスをゴミのように切り捨てたサールの王。だけど、この悪魔に勝てるの？いや、勝てなくても、最低限捕まえることができるの？シェルテスは分が悪いと霧散して消える。それをさせない程度に弱らせておかないと神速の神々でも逃げられてしまうのではないか。

まだだ……。私は立ち上がった。

「まだよ！」

口から血が零れるのが分かる。私も衝撃で口を切ったみたいだ。

「私はダメージを受けていない。お前の指先ひとつで塵にできるかよわい身体だけど、この心は絶対に乗り越えさせない。先生が何度も愛してくれたこの身体。先生は私の指の先や髪の毛や爪まで丹念に愛してくれた。その身体を与えてくれたのはお父さんとお母さん。たったひとつの細胞を大きくして、産まれてからもご飯を与えてここまで大きくした。18年もかかったわ。ここまで育つのに18年も！何匹の動物の命と何キロの穀物を犠牲にしてここまで大きくなったと思ってるの。それを……それをたった一指でバラバラになんてさせない。そんなのふざけてる！お前の好きにはさせない！シェルテス！」

恐怖が消えていた。憎悪と怒りが恐怖を凌駕していた。

「お前も少し日本語を覚えなさい。窮鼠猫を噛むってね……」

私は玲音の書を開いた。

玲音の書に真紅の月が浮かび上がる。

「……あなたも愛する人のために戦ったのね。皇女ルーキーテ」

「紫苑！」静の怒号が聞こえる

ᘐʌee>e ʌelᔐ le V-ɮeᑕ ɐlɔ <cʌ ᑕcl Vcᔑ ᑕcʌᑐ-, le ᑕcl ->cᔑ ᑕcc- ɮel ɮ-cZ cc<- ɔ ʌɔc ɮ-c ɮel ɮ-cZ >eᑕe,, ᑕc ᔑe <cᑕ Ve Vcᔑ e ʌɔᔐ -l -ʌ….ᘐ

「紫苑、ふざけんなよ！ぜってぇ撃たせねぇっていっただろ！」

決死の力でヴァノディアを振りかぶり、シェルテスに突っ込んでいく静。あの走り方……骨が折れてるのね。シェルテスに斬りかかる。

だけどシェルテスはヴァノディアを受け止め、静に閃光を放った。吹き飛んでいく静。リディア＝ルティアが第14使徒にプレゼントしたアルシャンテが静の命を守ってくれた。

「ありがとう、ルティア国のお姫様」

シェルテスが静に気を取られている間に魔法を完成させた。そして魔杖ヴァルデを掲げた。アシェットの姫君よ、私に力を貸して。

「ごめんなさい、お父さん、お母さん、先生……おなかにいたかもしれない赤ちゃん」

ᘐleeVᖵ ∧ee>e e ᔪaaᔭ ᛚel ᔪaaᔭccᑢeᖵᘓ

アルカを言い終えると同時に地面が割れ、真紅の光が漏れ出る。

まさかあのとき仇敵が使った魔法を私が唱えることになるとはね……。

真紅の光は地面から溢れ出るとシェルテスを飲み込んで天まで昇っていった。

それが私の最後に見た光景だった。

「シオンーー！！」

俺がシェルテスに吹っ飛ばされたとき、紫苑は魔法を唱えた。

ふざけやがって、あのクソガキ！お前がいなくなったら俺は……そうじゃない。俺がとかじゃない。お前という存在が無くなることがこの世の損失だ！死ぬなら俺みたいなクズでいい。なぜ俺にルーキーテが撃てない！なぜだ！ふざけるな神どもが！

地面から天に湧き起こる光が消えたあと、紫苑が向こうに見えた。良かったと思った瞬間、紫苑は手を離した人形のように崩れて倒れていった。

「し……しおん？」

遠くの紫苑に向けて手を伸ばす。

いてぇ、全身がいてぇ。アルシャンテを着ててもいてぇ。

だが、一番心がいてぇ。

けど、紫苑はもっと痛かったはずだ。

足を引きずって俺の女に歩み寄る。そうだ、俺の女なんだ、こいつは……こいつが。

失った……またこの忌まわしい日に失った。

……愛していたのに。

涙が出た。紫苑を揺さぶる。

起きてくれ……ルーキーテを撃ったら死ぬかもなんて嘘だろ？所詮は「かも」だろ。お前にフェンゼル並みの魔力があれば生きてるはずだ。ほら、こんな綺麗な指輪のアルマディオも嵌めてるじゃねぇか。悪魔アルマがいるんだろう？こいつから魔力を貸してもらえよ。メルティアはお前に惚れてるんだろう？

友達いないお前は自分を卑下して生きてきて、蛍みたいに神じゃなくて悪魔に迎えに来てもらうのを鬱々と待ってたんだろ？悪魔に人気があるんだってな。じゃあアルマも口説

いちまえ。お前のどうしょうもないくらいすげぇ魅力で悪魔を落しちまえよ。俺みたいな悪魔を落としたように、もう一度やってみろよ！

声にならない。思考ばかりが頭を走る。声が出ない。

レインが地面を這いつくばってここまで辿り着いて、紫苑に抱きつく。やはり声がでない。無言で涙を流しながら紫苑をゆさぶる。紫苑は蒼白な顔をして電池の切れた人形みたいにくたくたしている。手も動かない。息もしない。胸も動かない。

ᑫᒐcɔᐱᖇᑫ 発狂したようにレインが叫ぶ。

そのとき、アルシェが ᑫᒐelᑕeᔑᖇᑫ と叫んだ。何語であろうがこの名前は忘れねぇ。俺は後ろを向いた。

空から青白い炎が降ってきた。ゆっくりと、人魂のように。そして人狼化した。

ᒐelᑕeᔑ ᑫ-----h-hh-h-ᖇ ᛚeᔑ ᔑeᑕᑐ ᑕᓰ ᚸcᚠ-ᖇ ᔑɔᐱ ᒣeᔑ eᑕ ᚠe, lecᐱ Ꮆᓰᑕc-, -ᔑᑕeᐱ- ᚠeɔᖇᑫ

レインは蒼白な顔でよろよろと立ち上がった。

lecᐱ ᑫᐱe eᑕ ᚠeɔ ᔕ ᑕᓰ eᑕ -ᐱ le Ⅴ-ᐱɔᑕ Ⅴcl ᒐcɔᐱ ᑕcc- ᒣɔᒣᛒ - ᔕ ᑕᓰ eᑕ -ᐱ ᔕ ᑫ

腹の底から怒鳴りつけるレイン。カルテ中に怒号が響く。レインの髪が総毛立ち、全身から白い光を放ちだした。

-ᔑᒐe ᑫ-ᔑ>-….ᑫ

アルマ……ユノ・ラ・ノアのトリニティから成る最上のヴィードか。それをレインが発しているのか。

レインが光を放つ。すると光の中から５人の神々が現われた。一人はアルデス、一人はルフェル。あとは……。

lecᐱ ᑫᛚ-cZ lᐸeᔑ, ɔ, ᑕ- Ⅴ-ᐱɔ-ᐱ ᛚel elᐸᔑecᐱ ᛚel <ᔑecᖻ- ɔ >cleᑕ,, ᖻ-ᐱ ᛚ-cZ -ᔑᛚeᔑ ɔ >cᐱ-ᛚel ᑕᖻᓰ-ᑫ

女王ルフェル、そして腹心の少女フレイヤとミレット――エルフレインの姉妹か。

そしてアルデス王とその妻テュア……。

-ᔑᛚeᔑ ᑫᐸ-ᑕɔɔ, Ⅴ-ᐱɔ-ᐱ ᑕ -ᑕɔl-ᔑ,, ᑕᓰᔑ, ᑕccᔑ ->cᔑ -ᐱᔑᑫ

アルデス王は炎の剣を鞘から抜いた。そしてシェルテスを斬り付ける。斬られたと同時に発火してシェルテスは苦痛の咆哮を上げる。人狼化を保てなくなり、狼の姿に戻る。

あの燃え盛る紅蓮の剣は確か、第４使徒ギルの炎剣、ベーゼラット……。そうだ、こういうことは全てこいつが……紫苑が教えてくれたんだ。

紫苑を見る。唇が乾いて血が抜けたように全身が青白い。手を胸に当てるが、心臓の鼓動は……聞こえなかった。こんなことなら俺のベッドで聞いておけばよかった。蛍に気など使わず耳を当てて日が暮れるまで心臓の鼓動を聞いておけば良かった！

神々がシェルテスを囲む。ルーキーテで疲弊したシェルテスは逃げ場を失い、動揺する。これでシェルテスは終わりだ。あとは神が片付けてくれる。だが……紫苑は……。

するとそのときレインが静かに息を吐いた。

ᑫOec, ᑕccᔑ cl ᒣ-Ⅴ -ᔑᒐ-ᑫ

レインが目を見開いたまま、冷たい怒りの声で神達を呼びかける。俺もアルシェもビクッとしてレインを見る。その身体からは白い光のアルマが出て、オーラのように燃えていた。彼女の眼は禍々しく且つ神々しく緑色に光っていた。

レインは神を呼び付けた。だがそれは冷たい炎のような怒りの声だった。余りの圧力に驚いたシェルテスと５人の神々は思わずレインを振り返る。神と悪魔の動きが止まった。

レインはゆっくりしゃがむと、紫苑の体を抱きかかえた。馬鹿な……この細腕でどうやって同じ体型の紫苑を抱きかかえるのだ。アルマのせいか？

紫苑の死体は力を失ってレインに持たれかかる。レインは紫苑を抱きかかえたまま神々に歩みよる。シェルテスが低い唸り声をあげる。レインは目を見開いたまま手をかざすと、杖も本も使わずにアルマの光を放ち、シェルテスの身を焼いた。動きを封じられるシェルテス。神は何も言えずにレインとシェルテスを交互に見る。

レインはエルトの女王ルフェルに歩み寄った。

lecʌ ᑫ-ʌᔑ ɮel V-lᑕe ɮeᔑᑕ ɮcᕫcᑕ - ᑕccᔑ, ᐸcᑕ -leᐸ ᑐɔʌ Vcᔑ, ᐸ-ᔑ ʌɔᔑ ᐸccʌ- ᑕccᔑᑫ

私たちヴァルテは貴方たちへ祈り、魔力で栄養源アレフを与え、貴方たちのために働いている……か。

ᑫᒐcɔʌ, lᓀ >-ʌ- ɮel -lᑕᐸc-ʌ ᐸ-ᔑ-ᑕ ʌɔᔑ ᐸccʌ- -ʌ ɔ -ᔑᑊ-Z-ᔑɮ ɔ -ᑕɔl-ᔑ, ᐸ-ᑐ ᑕccᔑ, -ᔑᒐ-ᑫ

この異世界の少女紫苑は私とアルバザードとアトラス及び貴方たち神のために働いた。

ᑫᑕ-l ᑕccᔑ Vcʌᔑ ᒐcɔʌ, l-ʌ- ᒐelᑕeᔑ hɔᑕ,, h-cZeʌr -ᔑ- -ᑐ -ʌ -ʌᒐ ᔑeʌ ᑕccᔑ ᑕeɔlɔ leᒐ -ᔑᒐ-ᒐel V-lᑕe >cᑐ- -rᑫ

だけどアンタたちは紫苑を見捨てて、シェルテスを狙ってばかり。ふざけないで！敬虔な信者のアタシは一体全体どうやってアンタら馬鹿どもを神サマって呼べばいいっていうのよ！

思わず涙が出た。恋人の教えてくれた言葉が今更耳に入るようになってきた。もう……おせぇんだよ。

たじろぐルフェル。言葉を失う。

ᑫᔑe ᔑ-ᔑ lᓀr ᔑe ᔑ-ᔑ ᒐcɔʌr -ᔑᑕer -ᔑᒐ-r ᔑe ᔑ-ᔑ ᒐcɔʌ -l -ʌᔑrᑫ

紫苑を返せ！彼女を返せ！神め……この神どもが！紫苑を私たちに返せ！

ルフェルに直面したまま目を見据えて怒鳴りつけるレイン。白いアルマは更に輝きを増す。ルフェルは瞬きさえせずにその場で硬直した。シェルテスはもがくものの、一向にレインのアルマから抜け出せない。

lᐸeᔑ ᑫle....lecʌ ᖻᓀᑕc-,, ʌɔʌ ᐸcᑕ ᔑeʌ ᐸɔᔑᑕcᔑ - ᑕᖻ,, ᑕ-l ɔl ᔑɔ-, ᔑɔʌ leʌ- ᑕc<l >elᑫ

レイン＝ユティア……。フォルティスなら貸せるわ。でもそうしたら時間切れになってしまう。

フォルティスとは確か使徒ミルフの杖だ。一定の条件下にある死者を生き返らせることができる聖杖で、迷宮ファティスの中に隠されていた。そう習った。

lecʌ ᑫᑕᓀ eᑕ clᕫ-ᔑᔑɔ,, ᔑɔl eᔑʌ e ᖻᓀᓀ>- ɔ -lᑐ-ᑕcᔑ cᑕeʌ -lᑕᐸc- V-ʌɔ -ᑕɔl-ᔑrᑫ

構いません。アトラスはユーマの一族及び異世界の救世主が守ります！

ユーマの一族……レインたちのこと、つまり人類か。

するとルフェルは天から一本の長い杖を降らせ、レインに託した。金属の棒で、頭のところに蓮の花のような装飾が付いている。レインの背の高さよりも少し高い。これが聖杖フォルティス……。

ꓘeᔑ ᘜᒍɔΛ….ᑕeel ᑕ -ᑕɔl-ᒍ，ᑕeɔ，leᒣ-c ᔑeᒍᑕᒣ ᑕЧa，lecΛ ЧaᑕC-，ɔ，ᒐcɔΛᘜ

な……なんて言ったんだ？早くて聞き取れない。紫苑がどうとか言っていなかったか！？

レインはフォルティスを地面に立てたまま、杖にしなだれかかるように地面に座り込んだ。そして紫苑の遺体を抱きしめる。優しく紫苑の頬にキスをすると、髪を撫でた。そして呪文を唱えた。

暖かい光がレインから発せられる。暖色系の光が次々にグラデーションを描いては色とりどりに変化していく。

光が収まった。その瞬間、フォルティスはすうっと霞んで消えていった。

俺はレインに駆け寄る。全身が痛いが気にならない。アルシェも血を吐きながら近寄ってくる。

lecΛ ᘜᒐcɔΛδᘜ

-ᔑᒐe ᘜᒐcɔΛᖷᘜ

「紫苑！」

レインの膝枕の上で呼びかけられた紫苑はゆっくりと目を開けた。頬が桃色になり、顔が生気を取り戻す。レインの涙が零れ、紫苑の唇に滴って、紫苑の乾いた唇が潤んだ。俺は名前を叫びながら抱きしめてその唇にキスをした。

「レイン……先生……アルシェ？私……ルーキーテを撃って……あれ？生きてたのね。前のフェンゼル戦みたいに病院に搬送されたの？」

「違うよ、紫苑。ここはカルテだ。お前は一度……」

言葉を詰まらせた。死んだんだと言ったら……そう、まるで……イザナミのように生き返ったことが無くなってしまうのではないかと思ったから。

さっきまで心臓が止まっていた。生気を失って確実に死んでいた。その紫苑が……。信じられなかった。でも嘘でも現実でも紫苑が生きていることが俺の真実だ。紫苑が存在していることが嘘でも真でも俺の真実だ。

紫苑を抱くレインと俺。アルシェの立ち上がる音が聞こえて振り返る。

――そうだ。まだシェルテスは！

４人の目がシェルテスに注がれる。

「あれ……神さま勢ぞろいみたいね。これで勝ったのかしら」

「いや……レインは神と……ある取引をした。その見返りとして召喚の効果と時間を失った。彼らはもう帰る。手出しはできない。そしてシェルテスはまだ生きている」

「そう」紫苑はまるで紫苑のお母さんのように悟った表情でスッと立ち上がった。その所作は 18 歳になったばかりの少女のものとは思えなかった。
「レインは何て啖呵を切ったの？」悟った顔の紫苑。
「アトラスはユーマの一族と異世界の救世主で守る――ってな」
　紫苑はにこりとしてレインの頭を撫でる。レインは子猫みたいにその手に頬ずりした。

「ぐおぉ」と咆哮を上げ、レインのアルマの呪縛が破られる。シェルテスは獰猛な眼で俺たちを睨みつける。
「もはや言葉さえ失ったか、シェルテス。憐れね」
　紫苑は玲音の書を持ち、ヴァルデを拾った。魔輪アルマディオが白くアルマの光を放ち、カタカタ震えて紫苑の力に呼応している。
　シェルテスは咆哮すると口から閃光を放った。
ᘛ∌ᔑᑦᑕᔑᖉᘚ
　紫苑の前に青緑の透明な壁が現れ、閃光を一瞬で掻き消した。
「いまのお前に力はないわ。神はお前を封じ込められない。私がお前を倒す」
　深手を負いすぎたシェルテスは勝てないと知り、霧散して逃げようとする。その瞬間、アルシェがキルティクノを放つ。霧散しようとするシェルテスを一閃が切り裂き、狼が地に転がる。
　シェルテスは脱兎のごとく走り出した。俺は渾身の力で走った。アルシャンテのおかげで激痛はするものの、弾丸の速度で走ることができる。ヴァノディアを振りかぶると、シェルテスの胸を突き刺した。鮮血が迸る。逃れようとするが、ヴァノディアの魔法の力で霧散できない。地面に突き刺さった剣が抜けずに、物理的にも抜け出すことができない。
　シェルテスは渾身の遠吠えをすると、紫苑を向いて全てのヴィードを口に集めた。シェルテスの青白い炎が白い牙の元に集まっていく。
「ダメだ、紫苑！これを弾き返すのはまずい！地面にぶつかったら反動でこの辺り一体が吹き飛んじまう！」
　だが待て。弾き返す以外にどうすればいい！？避けたらもっと最悪な事態が待っている。何人の人間が塵と化すのだ。しかし弾き返せばこの場にいる人間が危ない。俺たちがやられたら神は帰るしかない。シェルテスも倒せん。
　ハインは何をやってるんだ。レインの召喚がフォルティスの契約で終わったと知って慌てて召喚をしなおしているころだろう。だがもう遅い。こんなすぐに召喚はできない。この場が跳弾で壊されて全員が被爆したら終わりだ。クソ、シェルテスの野郎、こんなのほぼ自爆じゃねぇか！神やお前は死ななくとも俺らの生命力じゃ被爆したら生きてられねぇ。
「や、やむをえん。紫苑、避けろ！俺らが死んだら終わりだ！避けてその後トドメを刺すんだ！」
　賢い紫苑は全く同じことを考えていたようだ。だがその表情は苦悶に満ちていた。フェ

ンゼルのルーキーテで死んでいった人の惨状やアーディンのことを思い出しているのだろう。かといってここで弾き返すわけにもいかない。紫苑が眉を顰める。

ᑫ-ᔑᑕeᔐᚴ ∨-ʌɔ-ʌ e ᛚ-cZ ꓘeᔑ ᛚel elꓘᔑecʌᚴᑫ

叫んだのはハインだった。居ても立ってもいられずカルテンから出てきたのだ。そしてハインはその叫びで召喚魔法を唱えた。アルデス王やルフェル王より下位のエルフレインの姉妹――ルフェルの側近であるフレイヤとミレット――を召喚したのだ。これなら間に合う。

だが彼女達に何ができる！サリュから出てしまったハインの弱い魔力で彼女らを呼んだところで大きな攻撃力も長い時間も望めない。その瞬間、ルフェルを守っていたエルフレインの姉妹がシュッと消え、紫苑の後ろに瞬間移動した。召喚成功だ。だが……いったい何ができる……？

ꓘᔑecЧ- ᑫ>cleᑕ，ꓘcᑕ ᒐccᑕ le - ᒐcɔʌᚴᑫ

>cleᑕ ᑫᒐ-> ᑕЧə，eeᑕ-ᚴᑫ

エルフレインの姉妹は空から１枚の羽衣を降らせると、紫苑の肩に羽織らせた。

「エルフレインの神さま……これはかつてアルディアの時代、使徒リディアに貴方たちが羽織らせてあげたヴァストリア――テルテの羽衣ね。>cᔐeʌᑕ-ʌᑕ，lə- elꓘᔑecʌ」

elꓘᔑecʌ ᑫ-ᔑᒐ- ->cᔐ ᑕЧə，ᒐcɔʌᑫ

エルフレインの姉妹はテルテを羽織らせるとすぅっと消えていった。時を同じくして神々も消えていく。レインの召喚魔法が完全に尽きたのだ。

シェルテスが再び吼える。牙が青白く光った。紫苑はとっさに飛び上がる。そう、文字通り飛び上がったのだ……音も無く空へ。

それは俺たちの文化でいうならば、天の羽衣を纏った天女のようだった。

「シェルテス！私はこっちよ！」

紫苑は玲音の書を開き、ヴァルデを掲げる。

lecʌ ᑫ∨-ᔑᛚe cᑐ ᔐɔᔑᛚ….ᑫ

玲音の書がプリズムのような輝きを見せる。違う……あれは月のハロだ。夜、稀に月の周りにできる丸い虹のリング。いうなれば月天輪。玲音の書は紫苑の手を離れ、目の前に浮いて虹のまばゆい月天輪を描いた。

紫苑はヴァルデにアルマを集める。シェルテスは紫苑に狙いを定めた。この閃光で紫苑のアルマを相殺しなければ死ぬのは自分だ。

ᒐcɔʌ ᑫleeV，ᒐelᑕeᔐᚴ ᔑe leeV - ᒐ-ʌᑕeᚴᑫ

紫苑がヴァルデを振り下ろす。シェルテスが閃光を放つ。青白い光とアルマの蛍光が空中で激突する。ヴィード同士が鬩ぎ合う放電のような激しい音が鳴り響く。

しかし悪魔の力は強い。紫苑は徐々に押されていく。

「ふざけるな……」俺はよろよろ動いた「助かったと思ったんだ……紫苑を失いそうになった地獄から助かったと思ったんだ。誰が失わせるものか」

歩き出す俺。しかしそれをレインが抱きついて止める。
「ダメ、静！」
叫ぶレイン。……え？
「ヴァノディアを取りにいったら、静までシェルテスの攻撃に巻き込まれてしまう！紫苑を信じて！」
「レイン、お前……なんで……」
俺は目を丸くした。
「私の紫苑は強いわ。絶対にシェルテスを倒してくれる。だから紫苑を信じて！」
俺はレインの手を解いた。
「レイン……確かにお前の紫苑は強いかもな。でもそれは無理をしているだけで、本当のあいつじゃないんだ。紫苑は弱いよ。女の子なんだ。泣き虫で怖がりで、誰かに優しくしてほしくて、存在を認めてほしくて……蛍と何にも変わんないんだよ、そういうところは。お前とも変わらない。ただの弱い女の子なんだ。レインにとって紫苑は英雄でもな、俺にとってはかよわいお姫様なんだ」
レインは深刻な顔で俯いた。
「私が……紫苑を苦しめていたの？」
俺はくしゃっとレインの髪を撫でた。
「ばか。レインは紫苑の最高の親友だよ」
するとレインは無言で微笑んだ。
俺は漆黒のアルシャンテを纏って闇夜に紛れてシェルテスの元へ走った。俺の身体は微かに青く光を放っていた。
ᑫᒐelᑕeᔑᖇ -lᛦeᔐᑕ eᔑᑕ -ᐱᑕ ᑐ- ᒐ-ᐱᑕe„ -ᐱ eᑕ ᒐcZᑐ- ᛦel ->cᔐ e ᒐcᔑᐱᖇᔓ
シェルテスに突き刺さったヴァノディアを握りしめると、渾身の力で斬り上げた。ヴァノディアが青い炎をあげて、シェルテスの胴から喉元までを切り裂いた。悪魔の鮮血がアルシャンテとスーツに飛び散る。
ᑫᒐcᔑᐱᖇᔓ
天女に叫ぶ。
ᑫᒐ-ᐱᒐ-ᖇ ᑕᵄ eᑕ ᚣ-lᑌᔐeᑕ -lᑐ-ᖇᔓ
紫苑は渾身の力を込め、下界の悪魔にアルマを降らせた。
シェルテスは咆哮とアルマの光に包まれていった。

紫苑が空中で力を失う。ふらっとする。思わず俺は落下するものかと駆け寄る。しかしテルテの羽衣のおかげでゆっくりと、本当に天女のように舞い降りてきた。
「紫苑！」
駆け寄る俺。レインとアルシェも足を引きずってやってくる。
-ᔐᒐe ᑫlecᐱ，cᐱᖇ ᒐelᑕeᑌ eᐱ ∀ᑐᔐᑕeᑌᖇᔓ

lecʌ ᘐ-ᒣ ℓeeᗒᒍ eᑐ Vceʌ eЧɔrᘐ
-ᔑᓚe ᘐ-ᔑ ᗒe -ᔑᑐeᒍ, lecʌᘐ
　シェルテスはまだ生きていた。もう動けないが、まだ身体を持って……生きていた。低い呻き声をあげている。どこまでしぶとい奴なんだ、悪魔ってのは。いや、それだけ人間の力が弱いのか。
　レインはアルシェに言われて召喚を再び唱えだす。髪をちょこんと結わいたエルフィ――父の形見が光を放つ。
「先生……」
「紫苑、大丈夫か？いまレインが召喚してくれるからな。神にシェルテスを封印させるんだ。俺たちは勝ったんだよ」
「うん……そうだね。嬉しい」
「あぁ、生きて帰れるんだ！」
「そうじゃないよぉ……」
「え？」
　紫苑は、はにかんだ。
「……アルカでのプロポーズ」
「あ……」
　そうだった……。俺は勢いで……勢いで――本音を叫んだんだ。
「紫苑……」
　アルマディオを嵌めた薬指に触れる。
「はい……」
「……結婚しよう」
　くりっとした眼を大きくさせる。すっと眼を細めて微笑んだ。
「……はい、先生」
　俺は紫苑の唇にそっとキスをした。

　召喚士レインは月の神ドゥルガとヴィーネを召喚した。彼らは俺たちに一言ずつ礼を言うと、地面で動かなくなったシェルテスを捕らえた。そうして真上にある無限空アルテージュへと昇っていった。
「月の影が月へ帰るのね」
「最悪なかぐや姫だな」
「ふふ……流石のシェルテスも観念したかな」
「あぁ、今度こそ徹底的に封印だ。二度と出てこれないだろうよ」
「終わったのね」
　紫苑が腕を絡めてくる。俺はアルテージュを見上げた。
「あぁ……終わった」

辺りを見回す。俺と紫苑のほかに、レイン、アルシェ、ハインがいる。無傷なのはハインくらいだ。

紫苑は玲音の書を開くと、プロティスの魔法で回復しようとした。しかし魔力を使い切っていたため、魔法は発動しなかった。レインがすっと横にくると、桃色の唇から呪文を紡ぎだし、皆を治療した。本当に魔法とは不思議なもので、あれだけ全身焼けるように痛くてけだるかったのが嘘みたいに引いていった。

ハインがカルテンに戻るといい、俺たちは付いていった。サリュまで戻るとハインはアルデスとルフェルを召喚した。レインは２人の顔、特にルフェルを気まずそうに見上げていた。神に対して何という冒涜をしたのだろうとでも考えているのだろうな。しかしルフェルはさすが女王だ。レインを責めるような気配は全くなく、物腰穏やかだった。

神の祝福を受け、返礼としてヴァストリアを返した。俺が一番返して酷い目にあったと思う。というのも、アルシャンテを脱いだ瞬間、寒くなったからだ。風邪を引いたらどうしてくれると心中で苦笑した。

アルデスとルフェルは真摯な顔でまっすぐに紫苑の目を見ながら ᦵ-ᐱᑕeↄᦵ と謝罪した。事情を知らない紫苑は戦わせたことを謝られているのかと思ったようで、ᦵle eᑕ clϑ-ᒍᒍↄᦵ と答えた。

-ᔑℓeᒍ ᦵᑕc Ⅴ-ᐱↄᑕ -ᔑ६-Z-ᔑℓ c> ᒍ-lᑕ ᑕↄᒐ„ Ч-ᐱ ᑕc Ⅴ-ᐱↄᑐ -ᑕↄl-ᒍ，ᑕeↄ leᑐ-c c> ᑕa ᒍ-lᑕ，ᒐcↄᐱ„ -ᐱᒍ ℓel ℓ-cZ ᑕ -ᔑᒐ- ᒍeᐱᑕ ᑕccᒍ ᑕcᐱᑐ- c ᔑaIᐱ-ᦵ

ᒐcↄᐱ ᦵ>ↄᐱ le Ⅴ-ᒍ -ᑕ ᑐcᐱ ᑕcᐱᑐ-„ ᒍↄl eᐱ ᐱↄᐱ ᑕeᑕ leᐱ- cl Ⅴↄᐱᒍ-ᑕ <ᔑe< -ᒐel ↄᐱ Ⅴ-ᒍ ᒐelᑕeᒍ eᐱᑕↄ leᐱ- ᒍↄlᒍ ᒍcl -ᔑᒐ- ℓaaᔑ४- ↄ Ⅴccᐱe -ᔑ ℓeᒍϑ- - l-ᦵ

lᐸeᔑ ᦵlecᐱ Чaᑕc-，ᐱↄᐱ Ⅴ-ᐱᑕ ᑕcᐱ ᑕЧa ᒐel ℓ-cZ ᑕ -ᔑᒐ-„ leᐱ- -ᑕ >ↄᐱ ᑕelᒍ„ leᐱ- ᑕea -ᔑᒐ- ᒐ-l l-ᐱ >e>cᔑ - lclcᒍ ᑕea eᔑᐱ e Чaa>- c ᑕaᔑ ᑕ-ᐱᦵ

lecᐱ:>-l-ℓc ᦵh-，h-ↄ ℓ-cZ„ ᔑeᑕ ᔑeᑕ，>ca ᒐclhc lecᐱ Чaᑕc- l eᑕ lecᑕ ↄ cᑐl ᑕcᐱᑐ- - lclcᒍᦵ

レインは蒼白になると、地面にひざまずき、手を組んでルフェルに請願した。紫苑は何事かと思ってレインを見たが、皆苦笑しただけだった。レインは確かに物凄い純粋主義なんだな。なるほど。請願されてる神のほうが「そこまでしなくても」という顔じゃないか。

しかし実在する神サマってのは随分と普通の人なんだなぁ。紫苑のときは流石に俺も怒ったが、彼らにしてみれば世界が掛かってるんだから、あれが適切な判断だよな。紫苑一人の命と神を含めた世界中の人口を天秤にかけるわけにはいかないしな。

まぁ、お上は怨まれ役というわけだ。大変そうだな。しかし彼らにも優しさや迷いや人間性があるって分かって、俺としては何となく嬉しかった。地球にも神がいたら良かったのにな。

ルフェルは少し困った顔でレインを見ると ᦵelᐸᔑecᐱ，laᐱ-ᦵ といった。すると光の中から即座にエルフレインの姉妹が現われた。紫苑が微笑みかけると、姉妹は嬉しそうに微笑み返してきた。

ꓘeᒧ ᔕlclc⌣ ᒣe?l V-ɻ eᒧᑐ elc⌣ᔕ
elꓘᒧecᐱ ᔕ⌞cЧə，ɻ-cZᔕ
ルフェルの命を受けるとエルフレインの姉妹は光の中に消えていった。そして 10 秒も立たぬうちに戻ってきた。そのとき青白いうす布をまとった成人女性を連れてきた。
ꓘeᒧ ᔕeᒧᑐ elc⌣，ᐱɔᐱ ⌣eᒧ l-ᐱ ᒧəlᐱ- e lə >-ᐱ- ᑐeə lecᐱ Чə(c-ᔕ
elc⌣ ᔕ-⌞，ɻ-cZᔕ
レインの本心を知りたい？ルフェルは何を考えてるんだ？レインは表情を強張らせる。
ꓘeᒧ ᔕh-ɔ (Чə ⌣eᒧ lə eᑐ ᐱe ⌞el l-(c⌣ ⌣e(e，lecᐱδ ᔕ
ᔕ-⌞ᔕ とレインは即応する。
エリスという女性は長い水色の髪をしていた。半透明の透き通るような水色の髪だ。その髪を伸ばすと、レインの周りを髪の毛が取り囲んだ。ふわふわと浮いている水色の髪の毛。その髪の毛の輪はルフェルのほうにも作られ、ルフェルとレインがエリスを介して繋がる。水色の髪が赤く光ったと思うと、青い放電を起こす。いや、あれはユノの光だ。
少しするとエリスは髪を元に戻した。ルフェルが礼を言うと、エリスは光の中へ去っていった。彼女は……レインの心をルフェルに覗かせたのか？この純粋主義な信者の心を。一体何のために……？
ᔕlecᐱ，ᐱɔᐱ ⌞el ɻ-cZ ᑐ -ᒧ⌞- <leᐱ (Чə ɔ?ᑐ ᒧəlᐱ- e ᐱ-ᐱ - lə c> <c ?ɔ?ʔɔ elɻᔕ
ᔕ-….-⌞，ɻ-cZ„ >c⌣eᐱ(-ᐱ(ᔕ
レインは赤くなって手で唇を覆った。ルフェルは優しく微笑むと、敬虔な信者のレインの頭を撫でた。レインは信じられないという顔で神を見上げると、言葉に詰まって感涙した。ルフェルは手を離すとその場を去った。
エルフレインの姉妹は紫苑を見ると ᔕleᐱ (Чə eᑐ >Чəl - Чə(c- ᐱ-ᔕ と微笑んで光の中へ消えていった。「え……」という紫苑の呟きが残響する。
アルデスは俺とアルシェを見ると、男らしい笑顔を見せ、右手を前方に出した。肘を曲げて拳を顔の高さまで上げる。これは……セルジュか？神が俺とアルシェを同じ男として認めたというのか。さしものアルシェも震えながら腕を出す。緊張で顔が強張っている。
ᔕ-ᒧ⌞e，⌣eeᒧeᔕ というと、アルデス王はパシっとアルシェの震える拳を叩き、拳と拳でセルジュをした。
そしてその手を俺にも出してくる。俺はやや微笑みながら手を出した。アルデス王の動きに合わせてパシっと景気の良い音を鳴らす。
ᔕ⌞cZ?-，(c ᒧe ᐱcl ⌞cɔᐱ <cᐱ lə eᑐ (c-ᐱ e(((e，ɘ-⌣⌣ɔδ ᔕ
はにかむアルデス王。紫苑は目を丸くしてアルデスを見る。俺は紫苑を見る。ちょっと単語が分からなかったのだ。
「えと……静、紫苑を幸せにしてやれよ、お転婆な彼女だけどな、いいな？――ですって」
ぷっと俺は吹き出してしまった。アルデスも笑う。
「分かってますよ、大王。clɘ-⌣⌣ɔ，-ᐱ ɘcᐱ- (ə -(c」といって約束を宣言するジェスチ

ャーをした。グッドラックみたいに親指を立て、その指を心臓のところに突き刺すジェスチャーで、破ったら心臓破って死んでも良いという過激な意味が由来だ。
　アルデスは、にっとすると、光の中へ消えていった。
「終わったな……」
「はい……」
「結構良い人たちだったな、ここの神サマは。というか人間味があって好きだね、俺は」
　そう言ったところで今度は別の光が起こった。全く眼に優しくない世界だ。
「メルティア！」
　出てきたのはメルティアだった。俺にとってはウチの駐車場以来だな。相変わらず女みたいな綺麗な顔をしている。
ᘐ乚cɔΛ，ᑦc V-ノᑦ-ᑦcᑋ 乚elᑦeノ cΛᘓ
ᘐᑦee ᑦee，ノɔl eΛ ΛɔΛ ᑦeᑦ leΛ- clᘓ
ᘐЧ-，乚-> ᑦcᘓ ふふっと笑うメルティア。そして表情を戻すᘐh-c，ᑦc 乚-ᑋleノ eノ -Λ laΛ-ᑋ -ᑦa ᑋɔᑋδᘓ
　紫苑は顔色を落とす。
「先生……お迎えです。メルティアが……もう地球に」
「……そうか」
　皆、事情を察して顔色を落す。
ᘐ乚cɔΛ，-Λ ᑦ-Λ ノeΛᑦ ᑦcΛ ᑦccノ >-Λ ᑦc -lᑋ-ᑦ -Λ ɻel V-Λɔ-Λ e leᑋ-c„ ノɔΛ -Λ l-϶Λ V-Λ ᑦccノ cl„ ᑋcᑦ，h-cΛ -lᑦee>ノ，ᑦc l-乚 ᑦɔδᘓ
「メルティアがご褒美に願いを叶えてくれるそうです」
「マジで？」
「悪魔としてシェルテスを表立って叩けないし、かといって世界のバランスを保持するものとしてはシェルテスの暴走や管理外の異世界渡航も困りものです。そこで私たちに恩義を感じてるみたいです」
「義理堅い悪魔か……。全く、この世界の悪魔を悪魔という名前でまとめるのは良くないんじゃないか？感覚が違いすぎるよ」
「ふふ。あ、メルティアの能力なんで、願いといっても時間移動ですけどね」
「どういう意味？」
「好きな時間に戻れるんですよ。そこでやり直したいことがあれば直せばいい。直した過去が気に入ればそこに居座ればいい」
「居座らないことってあるのか？」
「今の人生には満足してても、あのときもしああしてたらどうなってたのかなって気になることってあるでしょう？そういうバッドエンディングを確認することでいまの人生が幸せだって再確認したり」
「わりと後ろ向きだな」

「そうよ、if の願いはいつだって後ろ向き。だって過去を見てるんだから」
「さすが紫苑、良い言語センスだ」
h-cΛ ⑥ᔑɔΛ -Λ -ʔ(l-ᓀ ›cΛ- e Λɔᔑ ɔʔ -ᔑe ›-Λ lə eΛ ›-leᔑ eel e l--l⑥
-ᔑe ⑥ʔ--Λ….⑥
　紫苑が感涙したような顔でハインを見る。
「ハインさんね、アルシェをお母さんに会わせたいんですって。アルシェ……物心付いたときにはお母さんがもう……」
「そうか……」
「顔も覚えてないんですって」
「うん。じゃあそれがいい」
　俺は何となくこの男なら立派に召喚省を引っ張っていけるんじゃないかと思った。この期に及んで自分の政治に話を及ぼすようならいずれ人望のなさから失墜するだろう。この男ならアルバザードは安泰だろう。
　アルシェが紫苑を振り向く。
⑥ᔑɔΛ，ɭɔɔV-….(-l (ə ɭe l-ɭɔɔV-ɾ -Λ….-Λᔑ -ʔ(-ləəʔ(ᓀɔʔ c› ɭc-ᔑel ʔeᔑɾ⑥
⑥Ч-，ɭɔɔV- - (ə，-ᔑe⑥
　アルシェはガバッと紫苑に抱きついた。紫苑は微笑みながら肩をぽんぽんと叩いた。そしてピクっとして眼を開き、チラっとアルシェを見ると、困惑した顔で少しぎこちない笑みを浮かべた。そして流し目でレインを見た。……なんて言われたんだろう。
　アルシェは俺のところに来ると、何も言わずに右手を差し出した。俺は勢い良くセルジュをすると、アルシェはニッとしてメルティアの光の中へハインと共に消えていった。
›el(c- ⑥h-c，lecΛ，-Λ ᔑeɭ ›elɭc- c (c⑥
　メルディアを返すときが来た。レインが左手を差し出すと、メルティアは手をかざし、金色の光を手から照射する。するとメルディアがレインの手首をすり抜けて彼の手に収まる。
›el(c- ⑥ᓀcɔΛ….⑥
ᓀcɔΛ ⑥ΛɔΛ ᔑeᔓ leᔑ (Чə ᔓeΛᔑ l-Λ„ lec e lecΛ ᔑe(eδ⑥
⑥Ч-⑥
「ə ᔓeΛᔑ-(⑥ɘe< (ə - ΛɔΛ⑥ ᔑɔΛ ΛɔΛ lɔ leΛ (Чə l-<-((ə - ΛɔΛ，›el(c-„ ねぇ、やっぱり貴方、私のこと好きなんじゃないの？」
　分からないのを良いことに、にやける紫苑。
　紫苑は玲音の書を持つと、メルティアに手渡した。やはりこれはメルティアが貸し与えたものだったのか。
⑥leΛ- -Λᓀ (ə leᓀ lec e lecΛ„ (-l ᓀcΛʔ，(ə e(lec e Λe ΛɔΛΛɔδ⑥
⑥ᔑ›ᔑ›，ᔑɔΛ (c lɔΛʔ ɻ-ᔑ (ə ᔑ- cᓀΛ⑥
⑥››….ΛɔΛ lɔ lə e(ᓔcɭc- lə(c-….(c-δ⑥

ᘐ>-ʌẟᘐ
ᘐ>-ʌ ᑕə ᑕcl Vcᔑ ᑕcʌᑋ- <ceʌ ᑕə ᑕe V-ᔑᑕᔑc-„ ᔑɔʌ ʌɔʌ lɔʌᑋ-ᑕ ᑕcl-ʌ ᑕəəl -ᑕ -ᔑᑕ-ʌ ɮ-c„ <-ᑋ ᑕə eᑕ -ᒐᑕ ᑋɔᑋᑋɔ eʌ ᔑcɮ-ᔑᑋ- ᑕ-l ᔑ->-ᔑᑋ- ᔑɔʌ ᑕə -ᒐᑕ-ᑕ Կə -lᑋ-lᑕ Vcɣ-lᑕɔԿəᔑᑕɔ ᔑ-lᑕ c ᑕə <e>e„ ᑕeᑕ -lʌɔɮ -ᔑɮc-，ʌɔʌ eʌ ᔑeᔑ -ᔑᑕ-ʌ Vceʌ ᒐ-ᑕ -ᑕɔl-ᔑ ᑕcᒐ -ᒐeᑕ„ h-c，ᔑɔʌ ʌe eᑕ -ᔑᑕ-ʌ Vceʌ -lᑋ- lɔᑕ -ᒐeᑕẟ h-ɔ….ẟᘐ
ᘐԿ-，-ᒐ>- ɔ ᑕc-„ ᔑɔʌ -ᔑ> ⁄ Կəᑕ -ʌ -l<c ᑕə lec l-ɮ-ᑕ Կə ᑋɔʌ l-ɮɔ> le >c -lᔑc- ɔ ləᑕc- c>eʌ -ᔑɮc-„ >ɔʌ l- Կɔl-ᑕ ᑕə lec leᒐ cᒐ> ᑕ-l -ᑋ l- ᒐc> ᑕə lec eᑕᑕ-ẟᘐ
ᒐcɔʌ:-ᔑeᒐ ᘐV-ᔑ l-ʌᑕcᔑ le ləʌ-ᑕ cᑕ -lᑕ<c- ᑋɔᑋ ʌɔʌᘐ
>elᑕc- ᘐ….ɮel….ẟᘐ
ᒐcɔʌ:-ᔑeᒐ ᘐɮel ᔑeᔑeʌ，ᔑeᔑeʌ -ᔑ६-Z-ᔑɮᘐ
メルティアは微笑むと、玲音の書を受け取った。そして光が俺たちを包んだ。

気付いたら俺は紫苑の部屋にいた。時計を見ると時間は 10 時ごろだった。
ふと気付いたら左手で紫苑の右手を握っていた。振り向くとレインもいた。
「戻ってきたんだな、俺たち」
「はい……。戻ってきました」
机の上で充電されてる紫苑のケータイを見る。12 月 19 日……やはりあれから 2 週間が経っている。会社はどうなったんだろうなという考えが頭を掠めるが、即座に消した。
ふと気付いた。電気が点いている。なぜだ？……そうか、お母さんがいつ俺たちが帰ってきても良いように、仕事に行く前に点けてくださってるんだろう。
「それにしても、レインも来たんだな。良かった、危うくお別れを言えないところだったよ。でも何でレインはここに連れてこられたんだ？」
「うーん……それがレインの望みだったんじゃないかしら。エリス神が彼女の心を覗いたときのルフェル王との会話でレインの思考を推測したんじゃないかしら」
「あれはなんだったんだ？」
「私も良く分かりません。なんだか敬虔な信者のレインに何か刺激を与えたのは分かったんですけど」
「純粋主義を止めさせるためにか？」
「そういう強硬な感じじゃなかったけど……」
「まぁいいや。それよりメルティアといま何を話してたんだ。玲音の書を渡したとき」
「あのね……あ、とりあえず座りましょう。はい、レイン、椅子。先生はベッドで良いですか？」
「はいはい、定位置ね」
紫苑は廊下に出て階段から下を見て、戻ってきた。
「お母さんたちまだみたいです。時間的にもう帰ってくると思うけど」
紫苑もベッドに座る。

「あのね、あの玲音の書はやっぱりメルティアの贈り物だったんです。神が誰も返せって言わなかったから、確信持てました。それでね、じゃあ玲音の書は一体「誰の書」なのって聞いたの。そしたら予想してみろって。私、思ったの。結構前々からこの人じゃないかなって思ってたから……」
「誰？」
　紫苑は一拍置いてから答えた。
「リディア＝サプリ＝ルシーラ＝テオ＝ルティア」
「それ……アシェットの第１使徒、アルディアの立役者、大召喚士ユティアの？」
「先生も私の授業で随分アンティスについて詳しくなりましたね。そうです。彼女のものです。私がそう言ったらメルティアは何でかって。あのね、制アルカで書かれてる以上、ここ３百年くらいのものでしょう？アルシアの 11 魔将のほうがアルディアより更に前だから、リディアの時代にはアルシアの魔法が既に存在していたの」
「アルディア以降ってことは、リディアじゃなくてもさ、たとえばシオン＝アマンゼやアルファウスみたいなアルティスやイグレスタ共産圏の連中も候補なんじゃないか？」
「アルシアの魔法をあの威力で……しかも本に書いたくらいで実現できるほど呪術的に記すことができるなんて並みの魔道士じゃないです。シオンの時代では考えられません。遡ったカコの時代の魔道士ですら無理でしょう。恐らくこんな芸当ができたのは歴史上にも数名。中でも時代考証をした結果、一番考えられたのがリディアなんです。思うに、あれは人工言語アルカで呪文を唱えるときのためにリディアが使った練習帳なんじゃないかしら。彼女の溢れる魔力が文字に伝わり、残った。でもそれは当時の戦争からすれば大した威力を持っていなかったため、ヴァストリアにはならなかった。だけど、リディアの書はそのまま魔力を保持し、世界を転々として、召喚省の役人だったレインのお父さんの手に渡った」
「なるほどなぁ……しかし、あの本は当時の製本技術じゃなかったんだろ？リディアが記したとして、リディアはどこでそれを手に入れたんだ」
「そこなんです、メルティアが聞いてきたのは」
「紫苑は分かったのか？」
　俺だけまだ答えを知らない。やきもきする。
「私、答えました。じゃあその本は異世界から持ち込まれた本なんじゃないのって」
「それはメルティア自身も前に言ってたそうだな。地球のものだとかなんとか」
「紫苑の書。覚えてますか？」
「紫苑が異世界に連れてかれたとき偶々手に持ってた雑記帳だろ。本みたいに分厚い装丁だっていってたな。そこにレインに習ったアルカを書いたりしてたとか……。確か最後はレインにプレゼントしたんだよな」
「はい。で、玲音の書も紫苑の書と同じだったんです」
　俺は息を呑んだ。

「玲音の書というかリディアの書も異世界からきたから材質や装丁がアトラスの当時のものじゃなかったのか」
「ここでアルティス教徒の中で一般に見解が分かれるこの神話を引用します。一説によると、アシェットの 28 使徒の中に、異世界から来た、かつて 10 歳だった少年がいました」
　俺は頷いた。
「少年の名はセレン＝アルバザード。異世界からやってきて、後に救世主となった人です。アシェットのリーダーであるルシーラだった人よ」
「つまり……300 年以上前に来てアトラスを救ったってのはその……。しかも待てよ。メルティアはいつでも時間を行き来できるわけだろ。俺らがメル 368 年に行ったのだってメルティアの決めたことだ。メルティアが俺らをアルディアに連れてったらメル 10 何年くらいに召喚されてたかもしれない。ってことはもしかしたらセレンってのは俺たちと同じ――」
「さぁ？この世は広いですから。この世界やレインの世界以外にも、まだ異世界があるかもしれませんよ？時間だってどの時代の人間を召喚したかなんて分からないわ」
　俺は「はぁ」と大きくため息を吐いた。
「それが本当ならアトラスを度々救ってきた救世主すなわちアルカティスっていうのは、アトラス人でも神でもなく、異世界人と悪魔メルティアばかりじゃないか」
　そう言ったところで車が車庫に入る音がした。お父さんたちの車だ。俺たちはすっと立ち上がって階下へ凱旋した。

「お父さん、お母さん！」
　２人が玄関に入ってくると同時に紫苑は飛びついた。２人とも１階の電気が点いたのに気づいたのか、紫苑の帰りを知っていたようだ。
「あらあら、お帰りなさい、紫苑」
　抱きつかれたことが意外だったのか、お母さんは少し驚いたようだったが、紫苑の頭を撫でている。両手で父母を抱きしめる紫苑。一杯に伸ばした手は親の背中まで到底届かない。レインは階段の上で無表情で紫苑を見ていた。俺はチラッとレインを見た。レインの親はいない。母親はなくなっていて、父親は去年殺された。
　ふと思った。アルシェは覚えてない母親に会いにいった。メルティアの褒美だ。レインも褒美をもらうはず。エリス神の一件を見ていただろうメルティアはレインの願いを察したと考えられているが、レインは自分の親に会いたくないのだろうか。なぜアルシェみたいに過去に戻らなかったのだろう。
ᘐlecᐱ，eᔐ ᑕc eᐱ lₔᐱ-....ᔐeᔐ ᑐɔᑐ -ᔑᓚeẟ ᑕc eᐱ -ᑐᑕ I-ᓚ I--I ɔ ᑐ--ᐱẟᘓ
ᘐh-ɔ，ᐱɔᐱ -ᑐᑕ I-ᐱ I-cᐱ,, ᑕeᑕ ɔl ᔐɔ-，ᓚɔ> ᐱɔᐱ ᑐɔlᑕ ᔑcᐱ >cЧₔ <c- e ᐱ-ᐱᘓ
　なるほどね、会いに行ったら帰りたくなくなる、か。そうだな、過去に戻って歴史を変えて父親を生かしたらきっと帰りたくなくなる。しかしそうするとレインは紫苑には合わなかったことになり、その世界では紫苑は現われない。父親は助けられるが紫苑とは出会

わない。フェンゼルが暴走しただろうし、多くの人が死んだかもしれない。そんな世界にレインは居たくないのか。

過去に戻れば父親を取り戻せる。一方、元の世界にいれば紫苑と毎年会える。レインは紫苑のほうが大切なのか……？いや、この顔は違うな。この無表情さ……苦しみを抑えてる。親に甘える紫苑に複雑な思いを感じ、恐らく嫉妬している。きっとレインは「自分の父親と紫苑のどちらかを選ばなければならない状況」を避けたいんだ。その葛藤に耐えられそうにないから戻らなかったんだ、現状維持として。

どことなく安心した。人間の弱さを見ると、未知の存在が未知でなくなったような気がして安心を覚える。レインは死んだ父を取り戻したくない冷たい娘ではないのだな。そうと知ることができて良かった。やはり、みんなと同じく、弱い子なんだ。現状維持して時の流れに身を任せる。そういう意志薄弱な……葛藤を避けようとする弱い存在なんだ。

階下の紫苑を見る。お父さんの第一声は「全員無事だったか？」だった。

「うん、ほら」といって俺たちを指差す紫苑。俺はお父さんたちにお辞儀して「遅くなりました」と挨拶する。

「無事で良かった」

端的なのにお父さんの言葉は温かい。本当に良い親父さんを持ったな。羨ましい。

「アルバザードも救われたのか？」

「うん。シェルテスも倒して、みんなも無事よ」

「そうか」といってお父さんは紫苑の背中をぽんぽんと叩いた。

「とりあえずここで話すのも何ですし、静さん、皆で居間で話しませんか」

「あ、はい」と言って降りていった。

居間でおお茶を入れるのを手伝おうとしたが紫苑とレインがやってしまった。俺は手持ち無沙汰で座っていた。やがてお茶が運ばれ、２人も席に着いた。

アルバザード体験記は紫苑が殆ど一人で話していた。俺は補足や自分の視点で見たことを話した程度だった。お父さんはいつもどおり聞いているだけだし、殆どお母さんと紫苑のやり取りになっていた。

お母さんはここ２週間の地球の状況を教えてくれた。紫苑の学校や塾や習い事は風邪引いてその後インフルエンザにかかって長期欠席するとの連絡を入れたそうだ。お父さんが仕事の心配をしてきた。どんな理由があれ、特にこんなファンタジーな理由では離職は免れない。むしろ紫苑を含めた生徒たちの面倒をきちんと見ることができなくて残念だ。そう答えたら、お父さんは何か言おうとして止めた。そして少しして「娘の件に巻き込んでしまって申し訳ない」と言ってきた。

お父さんたちに報告を終え、紫苑の部屋に戻った。俺はもう帰ろうと思ったが、この様子じゃレインはすぐにでもアトラスに帰ってしまうだろう。そうなると来年の７月までは会えないことになるから、別れの言葉を言っておきたかった。

ベッドに座ったとき、中空に起こった光の中からメルティアが現われた。ビックリした……いきなり現われるのは止めてくれ。

レインがすっと立ち上がるが、メルティアは手で制止する。

ᘐᒐcɔᐱ，ᑕc ᒪ-ᒐ ᑕɔδᘓ

ᘐᐱɔᐱ….ᒣ--ᑉ ᑕᖻ ᚠeᐱᒍ-ᑉ - ᐱɔᐱ c> ᒍ-ᒪᑉ ᑕɔᒐ ᖻaᒪ ᑕᖻ ϶cɔ <-ᐱ ᐱɔᐱ -ᒪ -ᑕɔᒪ-ᒍ c> clᒍ-ᒪᑉ ᒍeᑕe„ ᑕ₳ eᒣᒍ ᑕᖻ ϶cɔ <-ᐱ ᐱɔᐱ hɔᑉ -ᒪ -ᑕɔᒪ-ᒍδ -ᒪ<c，ᑕ-ᑕᑕ- ᒐcZᒣ-ᘓ

ᘐ-ᒐ，-ᐱ ϶cᐱ-ᑉ ᑕ₳ - ᑕc„ ᖵ-ᐱ ϶cᐱ- ᛦe >cᖻ₳ᘓ

ᘐᒐɔ>….ᒐɔ> ᐱɔᐱ ᚠeᑉ ᑕᖻ ϶cɔ ᒍcl leᐱ- -ᒪ -ᑕɔᒪ-ᒍ c> clᒍ-ᒪᑉᘓ

ᘐᑕ₳ eᑉ ᒪ-ᒐ ᑕccl ᒣɔᒣᘓ

ᘐᖻ，ᚠeᑉ，ᛦee>ᒍ >elᑉc-ᘓ

ᘐ϶cᐱ-„ clϿ-ᒍᒍɔᘓ

ᘐᒍeeᚠeᑉcᒍ >elᑉc-，ᐱɔᐱ ᒍccᐱ- ᑕᖻᚴᘓ

メルティアは少し意外そうな顔をして眉を上げた。

「紫苑、何を頼んだんだ？」

「私の願い事はね。えっと、元々メルティアは私を毎年アトラスに連れてってくれる約束をしてくれたの。フェンゼル戦のご褒美として。悪魔の約束は厳格なものだから、そこに先生は含まれていないんです」

「あ、そうなのか。俺はてっきりまた連れてってもらえるものかと思ってた。俺にも切符がいるみたいだな」

「で、私は先生用の切符をメルティアに頼んだんです」

「それでいいのか？自分の願いは？」

「私の願いですよ、先生と一緒にアトラスに新婚旅行しにいくのが」

紫苑は照れながら笑った。

「異世界への新婚旅行か。どんな会社でも請け負ってないな」

「ふふ、メルティア便だけですね」

「俺はてっきり地球で行くものかと思ってたんだがな」

「あ、そっちも行きましょうよ。地球版の新婚旅行も！どこに連れてってくれます？」

はしゃぐ紫苑。親に許可も取ってないのにもう先のことを相談している。滑稽だな。

「そうだな、さっきのテルテを纏った紫苑は天女みたいだったから、静岡なんてどうだ？近すぎかな」

「天の羽衣の天女ですか？あれって静岡なんですね」

「あぁ、三保の松原ってところだ。海もあるから景色も良いよ。天気が良ければ富士山も見えると思う。折角だから帰りは伊豆まで戻って熱海にでも泊まろうか。なんだか昔のカップルっぽいけど。帰りは鎌倉でも寄ってさ、駿河湾と相模湾の違いでも楽しもうよ。江ノ島の展望台に行けば相模湾だけじゃなくて東京湾も拝めるかもね」

「うわぁ、先生ツアーコンダクターみたい！全国のマップが頭に入ってるんじゃないです

か？」
「ははは」と笑った。
ﾉelᑕc- ᘏh-c，ᒐcZᒣ-„ ᓄɔᐱ ᑕc eᑕ Vee𐦂ᘏ
ᒐcZᒣ- ᘏ- Ч-ᘏ
　最後は俺の番か。メルティアは過去を変えさせてくれるんだろ。しかし、過去……ねぇ。それって一番後悔してることをやり直せるってことだよな。俺は……。
　頬をさすった。時計を見る。ケータイを取って、画面を見る。
「紫苑、俺には難しいから、訳を頼む。なぁ、メルティア……だったら俺を一年前の今日に戻してくれないか。こっちの暦で。場所は俺の部屋。時刻は深夜３時ごろで頼む」
「ﾉelᑕc-，ᓄɔᐱ ﾉcᓀ ᕽcɔ lᓀ….ねぇ、なんで今日なんですか？」
「……」
「ねぇ」紫苑が微かに首を傾げ、不安そうな顔をする「去年の今日、何があったんですか」
「……訳してくれ」
　俺は紫苑の質問に答えなかった。
　紫苑は急に不安気な顔になって、俺に向き直る。
「……蛍さんが、出て行った日？」
　俺は黙っていた。
「ダメ！」紫苑がガバッと抱きついてくる「訳しません。そんなの訳しませんから！」
「どうして？」
「先生……」紫苑は俺の顔を見上げる「だってそしたら先生帰ってこないから」
「そんなことないよ。俺と蛍はいつ切れてもおかしくない状態だった。あまりに性格が合わなさすぎるんだ。実は俺は何度か離婚してくれと言っていたんだよ。役所に離婚届を取りにいこうとしたこともあった。だけどあいつが急にいなくなったのは誤算でね。それだけならいいんだが、その後一切連絡をよこさないとは思わなかった。今日でちょうど１年だ。仕事をして紫苑と会ってアトラスへ行って……激動の１年だったよ。でもな、未だに気持ちに整理がつかないんだ。弁護士を通して間接的に互いの真意も知らぬまま別れてしまい、子供とも会えずじまいだ。俺はね、過去に戻ったら蛍に別れ話をこちらから持ち掛けたいんだ、正式にね」
「……うそ」消え入るような声。
「え、なに？」
「嘘です……それ、嘘です。先生、帰ってこない。帰ってこないわ」
「来るさ、いま新婚旅行の話をしたばっかだろ」
　首を振る紫苑。
「今のこの瞬間の先生の気持ちなら信じられる。でも、帰ってくるっていうのは嘘。向こうに行けば気持ちが変わるわ。いまは先生、蛍さんの裏切りに怒ってる。でも、発作的に出て行った蛍さんは先生のことが嫌いじゃなかった」

「嫌いじゃないのに出てくのかよ？ありえないだろ」
「蛍さんは通帳や印鑑なんかを持って出て行ったんですよね。女として思うんですけど、妊婦で荷物が持てなかったにしても鞄ひとつ程度の荷物は少なすぎです。一緒に結婚してたなら、最低限のものでももっと量が多くなる。計画的なら気付かれないように少しずつ実家に送るなり持っていくなりしていたはずだわ。蛍さんは他に何を持っていったんですか。先生との思い出の品は一切持っていかなかったんですか？」
　最後の質問が刺さるようだった。紫苑の透き通るような眼を見ていると嘘を付けない。はぐらかしても追いかけられる。うるさいなと怒って冷静さを失ったら、却って最終的には巧く言いくるめられて何もかも吐き出される。
「持ってったよ。貧乏院生だったころに買ってやった安物の結婚指輪と、大学のとき……結婚しようって言って池のほとりで挿してやった鼈甲の髪飾りを。一銭の価値もない……愛情だけの品物だった」
　胸痛がした。
「それを持ってった蛍さんは出て行ったときは貴方を心底嫌っていたとは思えません。お互いに憎悪が湧いてきたのは別居して呪縛が解けてからで、周りの人間にあれやこれやと言われて増幅していったんでしょう？先生も彼女も同じだわ。いまの先生は蛍さんが嫌い。いまの蛍さんも先生が嫌い。でもね……何度も夢で見たんじゃないですか。蛍さんとやり直す夢」
「そんなことないよ」
「ありますよ……寝言で呼んでたわ。横に寝ていた私がそれを聞いてどんな気持ちだったと思いますか？私を抱いたすぐ後で先生は奥さんの名前を……」
　遂に紫苑は泣いてしまった。俺は言われて一瞬絶句した。
「まぁ……確かにそんな身勝手な見たくもない悪夢は何度となく見た。寄りを戻したいという意思ではない。ただあまりにもあいつが当たり前の存在だったから、夢の中では相変わらず情報が更新されずにあいつと生活してただけなんだ。気持ちに整理がついてないからこういうことが起きるんだ。だから気持ちを整理しにいくんだよ」
「じゃあ先生が蛍さんのところに行くとします。先生は寝ています。タヌキ寝入りか明け方に起きたのか知らないけど、蛍さんも寝ています。先生は自分に気付かれないように蛍さんだけ呼んで、外に連れて行きます。車の中とか公園とかで２人きりになって話します。きっとそうするでしょうね」
　紫苑の言葉が映像になって浮かぶ。恐らくそうだろう。
「先生は言い出します。多分何より先に謝るんじゃないですか。自分が悪いとかじゃなくても。男の人ってそうって聞きます。女の子に謝って……機嫌を取って。そうしたら女って馬鹿だからもう一度この人を信じてみようって思うんです。出て行く前に先生が平謝りして心を入れ替えるからって懇願すれば、蛍さんの性格を考えるとむしろ自分も謝って２人でがんばって子供を育てていきたいなんて言うと思うんです。だから先生、きっとそう

するわ。謝って、愛してるって言うの。いま嫌いな蛍さんだけど、１年前に戻ればやっぱりただ冷えかけてただけのお嫁さんなんだから、一瞬にして色んな思い出が甦る。良いことばっかりが思い出されて、簡単にその恨みを捨てて「やっぱり俺はまだこいつのことが好きだ」なんて平気で思うの。そして蛍さんに愛を囁いて機嫌を取ってしまう。もうこの時点で別れ話をしようなんて思いは消えてる。代わりにこう思うの。この１年俺は幸せだったろうかって。紫苑と会って大変だったけど確かに幸せだった。でもあいつはまだ子供だし、付き合いも短い。言うなれば蛍は飲み慣れた朝の味噌汁みたいなもんで、特別美味いわけじゃないけど落ち着くのはやっぱりこいつだって……。そして次は計算する。そもそも紫苑といて幸せだったけど、蛍のことで不幸せでもあった。俺は不幸せを消したい。それに蛍は俺の子を妊娠している。子供と離れ離れの辛い思いなんかしたくない。俺の世界では蛍は俺を忘れて子供を産み、俺は出産にも立ち会わなかった子供に愛情を感じることはない。でも、やり直した世界なら我が子の出産から立ち会うことができる。そうすれば愛してやれる。そうだ、子供のことも考えれば、蛍と折り合いをつけるほうが３人にとって幸せなんだ。紫苑は可愛くて好きだが、でも俺はやっぱりこの蛍とやり直したい。……そして、あなたは私の元へは帰ってこない……。私は貴方に捨てられてどうすればいいの？」

眼を瞑った。紫苑の言葉を逐一映像化する。それがどの程度ありえることなのか。その話が荒唐無稽であるのか否か。確かにいまの蛍は怨嗟の対象だ。出産も知らないガキなど赤の他人だ。だが、もし去年の……たった１年戻った今日のことなら？あれから色んなことがあったのにまだ１年か。たった１年だ。たった１年だけ戻したら、俺は蛍をどう思う？今の怨み合っているこの状況を俺は望んだか？望むはずがない。もしそれを阻止できたとしたら、次に俺がその場で願うのはこの世界への帰還ではなく……関係の修復と子供のことか。いまの蛍が聞いたら関係の修復などありえないという。それはお互い様だ。だが、確かに紫苑の言うように、会いもしない１年の間にお互いの印象は最悪になった。そうなる前の状態ですでにある程度俺らは冷めていたが、俺が普段は見せないような態度ですがったら蛍のことだ、あのときの状態なら一回分のチャンスを俺にくれただろう。その後巧くいくかどうかといえば、俺はこの１年で辛酸を舐めているので巧く行きそうだ。なぜなら未来を知っている俺は何をすればどの結末になるか知っているから、不幸を繰り返すまいとして、徹底的に蛍を大切にするからだ。そうすれば確かに関係が続く……そう考えた俺は果たして過去から帰ってこれるだろうか。

そもそも過去に戻れるなんておかしいぞ。そんなことを叶えれば人は一番変えたかった過去を変えにいくはずだ。未来の結果を知っている人間が過去を思い通りに変えるのは容易い。そうしたら一体誰が元の世界に戻るというのだ？後悔を修復した過去に留まらない人間がむしろいるのだろうか。

メルティアは……悪魔だ。元の世界に残された家族や恋人や友人はどうなる。メルティアは甘い果実を差し出している。とても甘く……喰えば死ぬリンゴを。

悪魔……確かにこいつは悪魔だ。紫苑は……悪魔に誘われそうな俺を諭したのか。これが蛍にできたか？俺が過去に行って戻ってくるといえば不安な顔をしながらも「待ってるわ」と言って送り出しただろう。蛍だったら俺は悪魔の誘惑に乗っていた。紫苑は俺を引き止めた。ただ嫌々というだけでなく、仔細な分析で俺を説き伏せた。そこが蛍との違いなんだ。

「紫苑、分かったよ」

そもそも俺は蛍を変えられただろうか。確かにあの日出て行くのは止められたかもしれない。でも、その後は？俺が優しくすれば蛍は出て行かないかもしれない。でも、その行為はあいつの欠点を野放しにすることに繋がる。結局蛍は治らない。俺と性格が合わない点では変わらない。そうしたらそれに我慢しつづける俺が苦しむだけではないか？またあのときみたいに蛍に対するストレスで心も身体も病気になったりして、俺のほうが耐えられなくなるのではないか？それでも蛍は治らない。あれだけ何度言っても、極々簡単な「人が話してるんだから、せめてこっちの方角でもいいから見ようよ」とか「ねぇ、聞いてる？俺の話。てゆうか俺だけじゃなくて他の人のも。相槌とか一切ないんだけど、そんなに皆つまらない？」とかそういうことでさえ治らなかった人間として壊れている蛍。仮に去年あいつを引き止めていたとして、あいつとやっていけただろうか。

俺は首を振った。

「だがな、俺はあいつが勝手に出て行って、俺や他人の人生掻き回した上に、ガキのことも何もかも勝手にしやがったことが許せない」

「はい……。じゃあ去年の 12 月には戻らないでくれるんですね」

紫苑はほっとした顔になった。

「あぁ。その代わり、新しいあいつに会ってみたくなった」

「新しい……？」

「母としてのあいつだよ。俺の知らない蛍だ」

メルティアを見る。

「メルティア、蛍の退院した日だ。その日がいつかは分からんが、時間ならメルティアはプロだろ？調べてくれないか。時刻はその日の朝ならいつでも良い。俺の家の駐車場に連れてってくれ。向こうの地図は俺のほうが分かるから後は自分で向かう」

「ﾝcə ɘcɔ lə - ∽el le ﾝcʌ- S-ᑐ ləəᑐ ᑐeə hɔᑐ-lə leeV V-I- ∟c lcVI„ -ᔑﾝcV- ʌeᑐ-I eᑐ ɘ-∽ɔɔ ɘcʌ ᑐə eᑐ ᐸ-I ᐸ--ᔑ„ Ч-ʌ ﾝcə ɘcɔ lə -I ->ɔᑫ- ləəᑐ„ ᑐЧə I-ɘʌ ∽eʌ lə𝛿 あの……私も行っちゃダメですか？」

「え？いや、俺は良いけどメルティアが何て言うか……」

ᘐﾝelᑐc-, lə ᐸleʌcᑫ ʌɔʌ ᑫɔᔑ ᑫɔᑫᑫɔ lə„ ﾝcə ɘcɔ ʌɔʌ ᑐ-ʌ„ ʌɔʌ lɔ ᑐə eᑐ I-∟ ləəᑐᘐ ᘐclɘ-∽ɔɔ„ ∽ɔʌ -ʌ I-ɘʌ ∟cZᑫ-ᘐ

メルティアが手をかざすと、俺たちは暖かい光に包まれた。

2006 / 06 / 19

　紫苑の部屋から一瞬にして俺の家の駐車場へ出た。しかも夜だったのが朝になっている。
「……凄いな、メルティアは」
　辺りを見回す。
「暑い……よな。冬の朝じゃないぞ、これは」
「暑い……ですね。ということは……」
　俺は車へ走る。２個存在することになっている鍵を使って車に乗る。ナビで日付を確認する。
「６月 19 日の午前８時……。こ、これがタイムスリップか」
「私、二回目だけどやっぱり驚くわ……」
「この日蛍が退院したってことか。そうか、そうだったのか。ちょうど半年前だったんだな。どこまでも因果というかなんというか……」
　胸痛がする。紫苑が痛々しそうな顔で見てくる。何も言わないのに右胸に手を当ててくる。
「ドキドキするのは左だけど、先生の心は右にあるんですね」
　優しい苦笑いを俺は浮かべた。
「この日、俺たち何してたっけ。まだ付き合ってないころだよな」
「付き合う８日前です。えっと……あ、そうだ。昨日デートだったんです」
「え、日付まで覚えてるのか？何度もデートしたのに」
「私にとっては１回１回のデートがとても大切ですから」
「……そういう大切な思い出を全てゴミ箱に捨てた女にこれから会いに行くわけだがな」
　吐き捨てるように言った。
「あ！」小さく紫苑が叫びをあげた「その日のデート、キャンセルになったんでした。どうりでどこに行ったか思い出せないはずだわ」
「キャンセル？」
　すると紫苑はケータイを取り出して、いそいそと操作した。
「なぁ紫苑、お前の左手、メルディア付いてないか？」
「え？あ、ほんとだ……」
「帰るときに使えってことかな。で、ケータイがどうかしたの？」
　何十秒か待つと、紫苑は「これです」と言って見せてきた。それは俺が「昨日」贈ったことになってるメールだった。

「今日デートの約束が入ってたと思うけど、仕事が急に入ってしまって会えなくなった。すまん。で、ちょっと忙しいので今日明日はメールや電話を避けてくれないか。あと、塾であっても話しかけないでほしい。20 日になったらまた連絡をしてほしい」

「なんだこれ……こんなメール出した覚え無いぞ。あの日は確か……そうだ、デートを紫苑からドタキャンされたんだよ」
「えぇ？」
　眼を丸くする紫苑。俺もケータイを弄る。あった。やっぱり 18 日の日曜日のメールだ。
「ほら、これ」

「先生、ごめんなさい m(_ _)m。今日のデートなんですけど、お父さんとの用事が入っちゃったんで、行けなくなってしまいました(T_T)。凄く楽しみにしてたのに残念(>_<)
　最近ちょっと忙しいのでメールとか電話とか返せそうにないんです。20 日になったらこっちから連絡しますね。本当にごめんなさい。しおん」

「何これ……私、こんなの出してない」
「でも紫苑から来てるよ？」
「うーん……思えば先生からこのメールもらったとき、なんか違和感を感じたの。「デート」ってハッキリ書いてあったから。まだ付き合ってなかったし、先生は私の気持ちに気付きながらうやむやにしようとしてたから、デートって言葉を使ったのが意外だったのよ」
「あぁ、そういや俺もそう思った。やけに絵文字が多かったから。あ、そうそうこれ見てよ。その２日後、20 日の朝のメール」

「そうですね(>_<)←絵文字使ってみました。使い方あってます？」

「紫苑さ、絵文字使ってみましたって書いてるけど、18 日のこのメールで使ってるんだよな。あのときは特に考えずにスルーしたけど、これってヘンだよ」
「これ……どういうことでしょう？」
「共通してるのは 18 日のデートをキャンセルしてる点と、20 日までの連絡を断つという点か……」
「そして、その２つの間の日が今日、19 日……」
　紫苑はハッとした。
「私たちを鉢合わせないためによ！」
「……それしかないな。つまり、このメールは俺たちが出したんだ。18 から 20 まで、とりわけ 19 日にブランクを作るために」
　スーツの内ポケットから手帳を出してスケジュールを確認する。
「俺は 19 日の月曜は出勤だな。だがいまは８時だから、寝てるころだな。確かこの日は授業だけ出たから、夕方までは外に出ていない。中で仕事をしていたはずだ」
「え、お昼ご飯は？」

「んなもんカップ麺食ってるからな」
「可哀相……」腕に絡まってくる「これからは私がおいしいもの食べさせてあげます」
「うん……。因みに蛍がいても大差なかったけどな」
「……。あの、それで私たちは 19 日に居るのにどうやって 18 日にメールを出すんでしょうか」
「そのためのそれだろ」とメルディアを指差す「メルティアは粋な悪魔だよ。俺の願いは今日に連れてきてもらうことだったのに、裏工作する準備までしてくれたみたいだ」
　俺は紫苑のケータイを取ると、俺が書いたとされる文を俺のケータイに送った。すぐにメールが来る。それをコピペして、紫苑宛にする。賢い紫苑はすっかり事態を理解して、左手を差し出してくる。
「だから言ったでしょ。彼、絶対私に惚れてるのよ」
　俺はメルディアにケータイを当てながらメールを送信した。紫苑のケータイは鳴らない。よし、これできちんと今の文が昨日の紫苑に贈られたはずだ。
「浮気しないようにな、あのイケメンと」
「しないわよー！女の浮気とか、ありえないから！」
　今度は俺のケータイで紫苑のメールをコピペして一度紫苑に送る。そのメールをコピペして宛先を俺にし、メルディアで転送する。
「そりゃフェミが聞いたら怒り狂うわな。いや、男の浮気は OK とか言わないかぎりは黙ってるのかな？」
「浮気したら怒り狂うのは私ですからね」くすっと笑う。
「お前が怒り狂ったら俺は殺されるんじゃないか……？」
　車を発進させる。
「死んでまで他の女を抱きたくはないよね、せんせ？」

　254 をまっすぐ進んで川越に行く。
「あれ、塾に行くんですか？」
「ちょっと、な。先に寄っていこうと思って」
　紫苑は車を降りる。
「教師じゃなくなっちまったから、もうここには来れない。教師だった時代を今のうちに眼に焼き付けておこうと思ってな」
　俺は紫苑の頭をぽんぽんと叩くと、車の中へ入れた。
　歩いている途中でタバコの自販機を見かけた。そういや夏ごろはまだ吸ってたなぁ。今年の夏は涼しかった。ヨーロッパが暑くてな。2003 年のようだった。おかげで今年のボジョレーは好調だった。味まであのときと同じ。でも、ちょっと苦かった。飲み口が甘くてすっきり。その代わり後味が苦い。赤みが強く、ルビーのように透き通る赤だった。口を付けた女が変わっただけだ。

塾を見て、周りをぶらつくと紫苑の元へ戻った。16 号に出て、南西に進んでいく。狭山市で 262 と交差する。このルートは会社から蛍を実家に連れて行くときに一度通ったことがあって、記憶している。上広瀬で左折して、根岸で 299 にぶつかる。
「ねぇ、そういえば蛍さんの居場所って知ってるの？」
「実家だよ。貝のように閉ざしているので会いに行ってもいない。でもそこに俺のガキがいるんだから不思議なもんだ」
「実家なんだ……。確か埼玉って言ってましたよね。この辺なんですか？」
「いや、あともう少し。飯能市って知ってる？」
「んん？？」
首を傾げる紫苑。
「昭和記念公園の横ですか？」
「いやいや、全然横ではないよ。こないだ行ったとき蛍の家から近いとは言ったけど、あくまで車で考えた場合の話だから」
笹井を通り抜ける。
「はい、いまのところを通り抜けた向こうが飯能市」
「へぇ、今の上のおっきなの、ウチの近くにあるのに似てます。篠中のほうの踏み切りの近くにある大きい橋」
「ははは、あれは橋じゃなくて東北自動車道だよ。確かに似てる印象を受けるだろうね、今通ったのは圏央道の下だから」
そのまま 299 を使って飯能市街に行く。駅前通りにぶつかると右折する。右手にシダックスが見える。
「そうだ、カラオケ行くって言っておいて、まだ連れてってないね」
「蛍さんに聴かせた曲は全部聴かせてくださいね」
「ほんっと執念深いな」
その交差点で左折する。
「違います、愛が深いんです」
広小路という見づらい交差点で斜めに左折する。ここの左折は面倒だ。このすぐ左にあるレンガっぽい道の商店街が一通でなけりゃ楽なのによ。駅を越えて消防署入口で左折する。
「サヴィアに寄ってくか」
「え……いまからアトラスのサヴィア大陸ですか！？」
「違う違う、スーパーだよ。結構でかいよ。本屋やゲーム屋まで入ってるしな。蛍のとこはここを使う。ガキが多いとこだから遊具とか多いんだよ」
駐車場に車を入れる。時計を見る。もう 12 時前か。
いなげやのほうへ向かう。
「どうする、ちょっと食べてくか？クレープとかもあるけど」

壁際を指差す。
「向こうのほうにあるんだよ。昔はもっとこっちの……そこの服を売ってるところにあったってあいつが言ってたけど」チクっと胸が痛む。
「お腹はまだ大丈夫です。飲み物買っていいですか？」
「あぁ、いっといで」
俺は食事コーナーの椅子に座って紫苑が会計を終えるのを待っていた。紫苑は食料を含めて俺の分まで色々買ってきてくれた。割り勘にこだわる子なので、千円札を渡した。
「端数はいいから」
「はい。じゃあ残りを 200 円に見積もって返しますね」
いや、そうじゃなくてさ。その 200 なんぼが端数なんだよ……。俺は苦笑して邪魔なだけの小銭を受け取る。でも紫苑がレジ娘のように可愛く小銭を渡してくるので、その様子が可愛くて、何となく得した気分になった。
サヴィアを出ると飯能大橋を通って直進する。
「あ、川よ。川、川！」
白岡には川などございませんとでも言うかのようだな、まるで。
「入間川だよ」
「おっきいねぇ〜。水がキラキラして綺麗」
「うん、日当たり良いからね」
ローソンのところで右折して公園を素通りして適当なところで小道に入って茂みの中に停車する。車を降りる。
「ここが……そうなんですか？」
「うん。美杉台」
「みすぎだい……」
紫苑は少し緊張した顔になった。そういえば紫苑は蛍の顔を知らない。
「ここに車停めていいんですか？」
「いや。ほんとはそこに美杉台公園ってのがあって駐車場があるんだが、あいにく月曜は閉まってたと思うんだ」
公園のほうに歩いていく。
「俺さ、アルバザードの街並みを聞いたときね、蛍のとこに似てるって思ったんだ」
道路沿いに立てられた地図を見せる。
「わ……ほんとだ。完全ではないですけど、かなり円形ですね。面白い……」
「美杉台ニュータウンっていってね」
「ウチみたいな名前」笑う紫苑。
「アルナとは違って住宅街ばっかだな。アルナの西区と東区を合わせただけだよ。大きな店は何一つない。気軽に食料を買えるのはそこのローソンとあっちの自販機くらいだ」
「ある意味白岡ですね。やだなぁ、私、そういうところも蛍さんに似てるのか」

「住宅環境ってのは人間性に影響すると思うよ。どこにどんな家を構えているかで家族の収入もある程度分かるし、兄弟が多ければある程度大きな家が必要になるし。あと、周りに娯楽があるかどうかも性格形成に影響を与えると思う。まぁ家ってのは毎日居る場所だからね、その家が置かれてる環境によって様々な影響を受けるだろうよ」
「じゃあ私と蛍さんがある程度似てるのも多少はこの住宅環境が影響してるのね……」
「多少な、多少。別にどこに住んでても三つ子の魂は百までだと思う」
「んー？結局、結論はどっちなんですか？」
「さぁな」俺は歩き出した。
「少し公園を見ていくか」
　公園に入って見晴らしのいいところへ連れて行った。
「うわぁ、結構高いですね」
「うん。夜景が結構綺麗なんだよ。いま見てるのは飯能市街ね」
「蛍さんはずっとここに？」
「ええと……まぁ長いはずだよ。高校がそっちの――」遠くを指差す「あの辺……分かるかな。ここからだと見えないか……」
「うーん……」
「聖望学園っていうそこそこ偏差値あるとこなんだけどね。飯能だと良いほうだと思うよ」
「聞いたことないです」
「塾にも何人か生徒いるよ。で、蛍はそこに通ってた。キリスト教系なんだけど、別に蛍は感化されなかったみたいだね」
「北城とどっちが上なんですか？」
「そりゃ受験的には全然北城だね」
「そっか……」紫苑は少し嬉しそうな顔をした。
「あと、あっち」振り向いて展望台のほうを眺める「向こうに展望台があって、一応ここのランドマークなんだよね」
「公園からでも見晴らしがいいんだから、さぞかし見晴らしがいいでしょうね」
「まぁ、残念なことに展望台はいま使えなくなってるんだけどね。入れないんだよ」
「ふぅん」
「まぁいいや。そろそろ行こう」
　公園を出て歩き、コンフォール 21 という集合住宅の長い階段を登っていく。
「このマンション……なの？」
「それじゃあないよ。集合マンションなんだ。ここら辺一帯の号棟は全て十把一絡げ」
　紫苑は声を出さずに頷く。気遣っているのだろう。万一蛍が居て声を出して俺たちの存在に気付かれたらと思っているのかもしれない。そりゃ会ったことない嫌いな奴相手だったら警戒するわな。
　俺はというと、会ったら第一声は何て言おうかと考えていた。でもそんなの会ってみな

いと分からないと思って止めた。
駐車場を見たら車が無人だった。あいつは運転できない。今日が退院日だから、向こうの父親が車を出したんだろうな。
俺と紫苑は駐車場の見えるちょっと遠いところで座った。紫苑は待つかもしれないことを想定していたようだ。それでさっきいなげやで食事を買っておいたらしい。何て気の利く女だ。
というか蛍はこんな何歳も年下の女子高生に負けてるんだよな。あいつ……新しい男できたかな。いやいや、とりあえず今は6月に戻ってるわけだから、少なくともこの時点ではその可能性はなかろう。何せ今日が退院だ。彼氏ができたとしたら今後就職してからになるだろうな。
……いや、でも子供が産まれたばかりで彼氏作る女はまずいないし、何よりギャルならともかくあの蛍だ。5、6年……経てば。いや、ちょっと待て逆に30になっちまうぞ。女でバツ1、子持ち、賞味期限切れの 30 歳……。「負け犬」よりキツイ言葉を造語してもらわにゃならんな。
あいつ……幸せになれんのかな。

1時49分。
「先生」と紫苑が小声で袖を引っ張った。蛍の駐車スペースに車が停まっていく。
来た……。
急に心臓がドキドキしてきた。紫苑に感じるものとは全く異質。警察にしょっぴかれたり、野盗と喧嘩したり、職場でキレそうになる前や、試験・面接の類と同じ――純粋に不快な緊張だ。
緊張で気持ち悪くなってくる。紫苑は目配せだけで俺と車を交互に見ている。ドキドキしてきた……本当に……こんなに緊張するとは思わなかった。しかも緊張の理由が分からない。蛍に会うことなど今まで何度してきたことか。何が俺を緊張させる？なんだ、この不快感は。
男が降りてくる。手ぶらだ。
「あれが蛍の親父だ」
男はスタスタ歩いてマンションの中へ入っていった。
そして女が降りてきた。両手に荷物を持っていた。
――蛍
「静！」俺の腕を持ち上げる紫苑。俺は立ち上がる。
そして何も言えないまま、近付いていく。相変わらず気付かない蛍。なぁ、だから前に店で言っただろう？ちゃんと周り見て歩けって。何ひとつ変わってないのな、お前。俺、こんな開けた場所で10mくらいの距離で真横にいるんだぞ。なぜ気付かない？
蛍、お前、ほんとうに、バカだな。

てゆうか何でお前が荷物持ってんの？何で親父が手ぶらで、出産したてのお前がそんな大荷物を持って歩いてんの？何も変わってないのな。自分が苦労すればいいという根性。そして自分で背負った苦労を後から人のせいにして呪う根性。お前……まだこの時点では半年しか経ってないけど、母親になったくせに何一つ変わってないのな。バカ女……。

お前は変われなくて俺から逃げたんだな、自分が変われなかったんだな。そうか、分かったよ。じゃあ不幸になれよ。好きにしろ。そうしてずっと不幸なままでいろ。それがお前らしいわ。

俺はアトラスへ行ったぞ。決断した。自分を変えた。自分でこの女を守ったんだ。お前といたころの俺じゃきっと守れなかった。お前は俺も変えられなかった。俺としてもお前じゃ変われなかった。

俺は蛍の横で止まった。３，４ｍかというところでようやく蛍は俺に気付いた。はっとする蛍。驚愕の顔を浮かべる。それと同時に「ヒッ！」と悲鳴を上げる。そして止まる。そりゃ半年音沙汰無しでいきなり来れば驚くだろうが、その態度は何だよ。

蛍はやつれていた。太るどころか痩せていた。結婚して７kg 太ったので、むしろ出会ったころの細い子に戻っていた。長い髪も半年間切らなかったようだ。

ベビーベッドか何か知らんが、右手にはでかいダンボールを持っている。左手には病院で使っていたと思われる袋。服は、白い上着を羽織っていた。

「……」

俺は無言で立っていた。多分、色んな想いが交錯して、睨みつけているように見えたかもしれない。逃げた負い目のある蛍は勝手に俺の復讐を想像したのか、固まったまま驚愕の表情を浮かべたままだった。

メルティアのことなど知らない蛍には、なぜ病院に行ったことすら教えていないのに退院日が分かったのか、なぜ平日のこんな時間にいるのか、なぜこのタイミングで現われたのか……その全てが謎だろう。

きっとこのままだと蛍は「来ないで！」と叫ぶだろうなと思った。あれほど俺に懐いてきたくせに、今度は勝手ほざいて「来ないで」か。どこまで我侭な生き物だ、女というのは。ふっと苦笑して一歩後ろに下がった。首を左に振って「行けよ」と目配せする。

結局何も言えなかった。なんだか実際に会ったら、「あぁ、産んだんだな」とか「あ、変わってねーな」とか「やつれたな」とか、そんな印象だけ受けて、言葉なんか出なかった。なんかね……ヘンな言い方なんだが、見たらなんか安心しちまったんだよな。

「来ないで」と思われているのは分かりきっている。だけど実際に言葉で「来ないで」と聞くのが辛くて、下がった。そう言われたら自分を保てるか分からないからだ。

蛍は一瞬動かなかった。動けなかったのだろう。俺が眼をそらし、下を向いて頭をかくと、俺の視線の呪縛から解かれたようだ。首だけをこちらに向けたまま徐々にスピードを上げてマンションへ去っていく。気まずい猫が逃げるように。

　すると紫苑が蛍の前に立ちはだかった。両手を広げて立ちふさがる。蛍は動きを止める。突然知らない中学の制服を着た少女が立ちはだかれば驚くだろうな。
「おと……」蛍が先に入っていった父親を呼ぼうとする。
「行かせない！」
　その瞬間、紫苑が厳しく言い放った。
「貴方をこれ以上逃げさせない！」
　俺は蛍に横から近寄った。
「……」
　蛍は紫苑を見ながらも、何も言えないでいる。驚愕や戸惑いが混じった表情だが、傍から見るとただ暗くて沈んでいるだけに見える。将に蛍だ……。
　あまりに反応がないので紫苑は微かに首を傾げて眉を顰める。蛍は紫苑のほうを見ているようだが、紫苑の目を見るわけでもなく、じーっと、或いは、ぼーっと、どっちだか分からない表情で見ていた。
「紫苑……いいよ、もう。行こう」
「えっ？」
　心外そうな顔。俺は蛍から２ｍくらい離れて少しだけ身体を傾け、下から蛍の顔を覗き込むように見た。
「悪かったな、いきなり。何でもないからさ。もう帰るよ」
「先生！」紫苑が小さく叫ぶ「ほんとうに……それで良いんですか？」
「いいよ。もう色々考えてた言葉が消えてしまった。何でここに来たのかもわかんないや」
　蛍は俺が話しているのに顔色ひとつ変えない。顔さえ微動だにしない。まるで周りには誰もいないかのような無反応だ。
　それはたとえばエレベータを待っている間のぼーっとした時間のようだった。「エレベータ、早く来いよ」と思ってるけだるい時間。蛍にとって俺の言葉も紫苑の行動もただの「エレベータ待ち」なのだ。何でもない、早く終わってほしい時間。
　相手が誰であろうと、人間に対してこのように振舞うことができる人間は、人間として終わっている。「何で蛍さんと結婚したんですか」という紫苑の言葉も、大学時代のダチの言葉も、友人、幼馴染、家族、同僚、全員の言葉をこの態度が裏付けていた。

　蛍……お前、ダメだわ。

　俺は自分の存在を否定されたような気になった。話しかけようが何をしようが蛍はエレベータを待っているだけ。他者という存在を否定する態度。
　蛍という女は誰にでも多かれ少なかれこの態度だ。都合６年ほど見てきたが、基本はこれだ。ムリに社交性を出して喋るシーンでもこの態度は微かに現われている。結婚して就職して離婚して出産してまで変わらないこの女はダメだ。

「この子、塾の子でな……紫苑っていうんだけど、俺たち付き合っててな……。それで今度、結婚することにしたんだ。俺にもあの後色々あってさ。まぁ、そういうことだから、俺がお前を追っかけたりすることもないし、好きに暮らせよ」

蛍はやはり反応しない。胃が痛くなってきた。まるで壁だ。猫のほうがまだ反応する。

「どうして何も言わないんですか、蛍さん」

紫苑が言葉を挟む。蛍はこれにはピクっと反応した。だが、ほんの少し表情を変えたかなという程度だった。少し顔を上げて、何か言いそうになった。何か言うのかなと思って待ってみた。ここまでの所要時間 10 秒。この緊張感の中、首をあげるだけで 10 秒。紫苑も言葉が来るものだと思ってか、前のめりになる。だが、更に 10 秒待っても何も言う気配がなかった。

紫苑は「は？」という顔をして首を傾ける。もう完全に表情からして蛍のことを馬鹿にしている。こうしてこいつは誰からも似たような評価を受けるんだな。始めは大人しい感じの人と見られる。そのうちぼーっとして反応が乏しい人と思われる。

「帰ろう、紫苑」

俺は紫苑の手を引っ張って前からどけた。すると蛍はあたかも「はい、エレベータが着いたので当然の如く乗りました」的な無表情でのろのろと歩いていく。それを見たとき、気持ち悪いというのが俺の印象だった。

「蛍」

背中に呼びかける。別に小説やドラマのように止まることはない。背後霊のくせして背後霊が何か言ってるわとでも言いたげな態度。俺は苦笑した。そう、苦笑。だって他に何のしようがある？

このダメ女には色々説教したいことがある。だが、そんなこと言っても相変わらず聞きもしないし、本当に言いたいことはそんなことではなかった。消えていく蛍に声をかける。

「出産、つらかったろ。……悪かったな、何もしてやれなくて」

蛍は一瞬ピクっとしたような気がしたが、聞こえなかったかのように去ろうとした。

「待って！」

紫苑がピシャリというと、ビクっとして立ち止まった。

「２度も貴方が去らないで。今度は静が貴方の元を去る番です」

蛍は何も返さない。紫苑は俺の手を握る。

俺は最後に何か言おうと思ったが、何も思いつかず、そのまま複雑な顔で歩き出した。背を向けて歩き出す。

ここから出るときはいつもデートの帰りだったから、蛍がいつも俺の背中を見送ってくれた。あのころは素直に、でも多少ムリして、笑顔を作って手を振ってくれてた。

蛍はやっぱり、ひと夏でとっくに居なくなってしまってたんだな。

視線を背中に一切感じず、後ろに空気しかないような感覚を受けながら、俺は紫苑の手

を引いて歩いた。
　俺は、蛍を置いて去った。

　冬に蛍が見れるとは思わなかった。
　――なんて思ってよく見たら、それはただの灯りだった。

　階段を下りる前に車の中を見た。チャイルドシートが早速備え付けてあった。
　はぁとため息をついて、階段を下りていく。歩いて美杉台公園の横を通り、車を停めた草むらに向かう。車に入ると、「あぁ～」といってドカっと腰掛けた。腕を伸ばし、ストレッチする。シートに埋もれて、顔を上にあげる。やがて伸ばした手を顔の上で交差させる。

　なみだが出てきた。

　紫苑は俺を見ず、触れもせず、靴を脱いで体育座りしていた。紫苑も、泣いてた。
「……おつかれさまでした」
　色々考えたんだろうな、きっと。言葉を選んで選んで……それが紫苑の出した答えだった。
「あぁ……つかれたわ」
「これが世界を救った見返りで良かったんでしょうか……」
「見返り、か。褒美ならもう貰ってるよ」
　紫苑の頬をちょんと押した。紫苑は無言で苦笑いを浮かべた。

　車を走らせ、家に帰る。
「そういえば、蛍を見たのは初めてだったね」
「話にはずっと聞いてましたけど、あんなに酷いとは思いませんでした」
「酷いってどういう意味で？」
「……色々。ほんと、胃が痛くなるくらい多岐に渡って」
　俺は紫苑の腹を左手で撫でた。
「その気持ち、ここが痛かったほど良く分かる」
「ずっとああだったんですか？」
「いや、流石にあそこまで無言なことはないよ。生活してたんだ、そりゃ普通に喋ってたよ。たださ、ああいうのが正体だってのは知ってたし、常に片鱗は見せてた。特に、嫌いな奴にはいつもああだった。横で見てていつも怖かったよ。いつこれが俺に来るのかってね。そう言うといつも「そんなことないよぉ」というんだ。でもな、そんなことあるってひしひしと感じてたよ」
「私と同じ家族構成ですよね。どうしてあんなに違うんだろう。一人っ子で友達がいない

とか、同じなのに」
「親じゃね？」
「親、ですか？」意外そうな顔。
「最近の日本人、家族をなめすぎ。家族は自分という人間を作る上で最も重要なファクターだ。特に親はそのファクターの殆どを占める。自分の子供から影響を受けることも大きいが、大人になってから受ける影響はその人間の根本的な性格まではそうそう変えない。三つ子の魂百までだ。むしろ自分は変えずに子供の性格を変えてしまうのが大人だよ。ライフスタイルなど、表面上は子供に色々合わせられるが、根本的な自己は変わらない。根本的な自己は子供のころに形成される。それに最も関与するのは親だ」
「それじゃあ、私たちは親の違いでこうなったっていうんですね？」
「少し話を先回りするけど、俺さ、父親コンプレックスなんだよ。ファザコンって意味じゃなくて」
「父親コンプレックス……」
「嫌いなんだよ、オヤジのことが。子供のころから今までずっと一貫して」
「どうしてですか？」
「しょぼいから」
「しょぼい？」
「そう。俺がオヤジにそっくりだから。そしてそのオヤジはとても尊敬できない人間だから。自分が似てるから、余計、嫌になる。息子にとって父親が尊敬できないというのは、恐らく娘にとって母親が醜くて太っているのと同じくらい厳しいことだ」
「どういうところがイヤなんですか……？」
　俺は袖を捲くる。
「この細い腕。小さな身体は少年にとって大きなディスアドバンテージになる。喧嘩が弱い男は幅を利かせられない」
「それで格闘技を始めて強くなったんですね」
「そう。でも限界が極めて近くに置いてあった。どんなに喰っても太れない身体。オヤジと同じ遺伝子でプログラムされた身体。筋肉はつきやすいが、重量がでない。背だって高くはない。172 しかないからな。リーチと重量のせいでデカイ奴に勝てない」
「それで高校のころ荒れてたんですね」
「まぁ、他にも色々理由はあったけどな。弱いのが嫌で強くなったのは確かにある。でも、結局やってない連中に勝てるだけでさ。ちゃんとやってる連中が相手じゃダメだ」
「でも私……先生のこと強いと思いますよ。シェルテス戦はアルバザードの影の歴史に残ると思います。先生は前衛で戦ったナイトなんですよ」
「ヴァストリアがあったからな。ヴィードの才能もあったんだろ。地球じゃ動物戦だよ。デカイほうが強い。つまらん世界だ」
「私にはカッコいいですよ。あの、他にはあるんですか。お父さんについて」

「後は性格と習慣だな。短気で我慢知らずで自己中で見栄っぱりで衒学的。弱い男が自分を守るために身に付けるものを、あいつは全て身に付けている。似合わないブランドで着飾った馬鹿なギャルと同じだな。弱さを塗り固めてるんだよ。俺そっくりだ……」
「そんな……」
「でもさ、最近そうでもないんだよ。蛍が消えて変わった。紫苑に会って変わった。思春期を抜けて自我を自分である程度修正できるようになってたから、この起爆剤の効果は大きかった」
「よかった……」
「でさ、俺は父親コンプレックスなわけ。だからいつも他人の父親が気になっちゃうわけよ。もし俺に小説なんか書かせたら、きっとヒロインのモデルには父親が凄い子を選ぶと思うよ」
「面白い採用方法ですね」
「でまぁ現実的な話、俺は紫苑のお父さんも蛍のも当然気になって見ていたわけだ。そして、その２人の違いがお前達の違いだと思ってるよ」
「そうなんですか。私は女だから女親の影響が大きいと思ってました」
「そりゃあるね。きっと俺は父親コンプレックスあるから余計にそう思ってるだけかもな」
「そういえば、先生のお父さんにまだお会いしてないんですよね。私、ご両親に挨拶もしてないわ」
「会わせるよ」
　俺は首を伸ばして横断歩道を確認しながらハンドルを切った。
「オヤジが死んだらな」
　紫苑は俯いて、小さく言った。
「つよがり、かっこ悪いです」

　家に着いた。車を降りる。
「ねぇ先生、今更思いついたんですけど、ガソリン入れとかなくて大丈夫ですか？減ってたら部屋にいる先生が気になるんじゃないですか？」
「ガソリンはメーター半分切らないと気にしないからなぁ。俺が隠し事しようもんなら紫苑には一瞬でバレるな。ま、大丈夫だろ」
「ほんとに？」
　紫苑はメルディアを光らせた。
「あぁ」
　俺はその手に触れた。
「歴史が証明してる」

2006 / 12 / 19

光に包まれ、その光が消えると、私は自分の部屋にいた。急に空気が変わった気がする。暖房で暖められた人為的な暖かさ。やはり太陽の自然の暖かさとは違う。こういうのを実感するのは、そうね……オーストラリアから一気に日本に帰ってきたときくらいだろうな。手首を見る。メルディアはなくなっていた。

「あれ？」きょろきょろする「レインがいないわ」

ケータイの時計を見る。６月に行ったときにケータイの時刻を朝に直した。蛍さんに会って練馬に帰ったのがお昼過ぎ。ケータイはきちんとその時間を指している。だけど、部屋の時計を見ると夜だ。６月に行った時間と同じ。この世界から見れば私たちは６月に行ったあと、ほぼ間髪入れずに戻ってきたはず。元の時間に帰っているのだからそんな大げさなタイムラグはないはずよね。

「大丈夫……だと思う。俺たちが向こうにいった時間と同じだ。光が出て時間を移動している間の短い時間しか経ってないはずだ」

先生も同じことを考えてたみたい。まさか私たちに黙って帰るなんてことないよね。

「ウチの中かも。何か飲みに行ったとか。下、探してきますね」

「あぁ」といって先生はベッドに座った。

部屋を出て、階段を下りようとしたところで、お母さんたちの部屋のドアが開いてるのに気付いた。前を横切ろうとしたところで中に人がいるのが見えた。

あれ？レインだ。珍しい。ここは掃除しないのに。

「レ――」

呼びかけようとしたとき、レインが喋るのが聞こえた。あれ、お母さんたちと一緒？私は部屋を覗いた。

お父さんだ。お母さんは下か。レインもお父さんも立って話をしている。別れの挨拶か……。私は胸が痛くなった。そっとしとこう。部屋に戻ろうとした。

ᘐᛚᛋᓄᓄᓂᓀ，ᐱᓂᐱ ᒐᓂᓂᒣ ᛁ-ᐱ ᒐe - ᑕᛋᓀ，， ᐱᓂᐱ ᓄeᔑ ᑕᛋᓀ ᔑeᐱᓄ Vcl elᛚ ᐱᓂ-ᐱ，， ᑕeᑕ ᐱᓂᐱ ᐱ- el ᓂᒣᑕ ᓄeᐱ ᔑᓀlᐱ- ᒣᓂᒣᒣᓂ ᒐec elᛚ e ᐱ-ᐱ，， ᓂl ᐱᓂᐱ，ᑕᓀ eᑕ -ᔑᒣ-，， ᓄᓂᐱ ᐱᓂᐱ ᔑeᐱᓄ ᑕᓀ ᒣᓂᒣᒣᓂ -ᔑᒣ- c> ᒣcᑕ，， clᓀ-ᓄᓄᓂ eᛋᓂᛑᘐ

ん……？もう一度部屋を見る。

お父さんは少しもアルカが分からないだろうに、いつもどおり穏やかに頷いていた。

ᘐᐱᓂᐱ….ᘐ

レインは地球に帰ってきたときの格好、つまり私の高校の制服を着ていた。レインは下を向くと、スカートの裾を小さい女の子みたいにぎゅっと握った。

ᘐᐱᓂᐱ h-ᑕc- ᑕᛋᓀ，ᛚᛋᓀᓄᓄᓂᓀᘐ

それは消え入るような声だった。レインは微かに肩を上下させ、薄く開いた唇から荒い息を吐いている。

え……？

ᘐ╰ɔɔΛ eΛ ╰-╰eノ (ə -ᔑ7- (cノ - (Կə, ɭԿəノノɔəδᘑ
レインは上目遣いでお父さんを見る。お父さんは微かに首を傾げる。
ᘐɭ-cZ IKeᔑ ᔑeΛノ-(- Λɔ∧ Կəl Λɔ∧ ɔ7(<leΛ ᔑəlΛ- e Λ-Λ 7ɔ77ɔ eΛ -ᔑ7- le (e elɭ e >cᔑɔ7,,
╰ɔ> Λɔ∧ e> V-l(e Λ-(c c> (əᔑ hɔ(ᘑ
ぎゅっと――スカートが悲鳴を上げるんじゃないかってくらい、レインは裾を抓む。
「ɭԿəノノɔə....レインは……あなたがすきです」
もう一度私は目を見開いた。
お父さんは表情を崩さない。さっきと同じように頷く。まるで何語であろうがレインの言いたいことを知っていたかのように。
伝わったはずだということが分かると、レインはお父さんに近寄り、胸元に頬を当てた。両手は抱きしめず、胸のところに当てている。レインは頬を離すと、お父さんを見上げる。
「お父さんはレインのことがすきですか？」
頷くお父さん。
心臓がぎゅっと締め付けられたようだった。
レインの肩に手を置くお父さん。
「……だけど、娘の親友としてだよ」
レインはそのままお父さんの目を見ていた。お父さんはそらさない。
「親友のお父さんを好きになってはいけないの？」
レインの目から一条の涙が流れて頬を伝う。
「ねぇ……。抱いて、キスして」
小首を持ち上げるレイン。私は叫びたい気持ちを堪えて心臓を押さえて、きっと泣き崩れそうな顔をしながら立っていた。蛍さんに感じたストレスとは全く異質のストレス。世界が崩れていくような感じ。足元が震えるの。膝が震えて、倒れて気付かれやしないか不安だった。
子供のころお父さんが連れてってくれた海がある。私はそこで砂浜に立っていた。波が押し寄せ、砂を持って逃げる。私は波に砂を奪われ、足場を崩した。足元がふらついて、まるで世界がぐらっとしたのかって思った。私、いまその感覚を思い出している。
やめて。え……何やってるの、レイン？
やめて……私の家庭を壊さないで。私のお父さんを取らないで。どうしてそんなことするの。レイン、あなたは私の親友でしょう……？
お父さんは優しく微笑むと、レインの肩を少し引き寄せた。レインは暖かい毛布に包まれた子猫のように安心した微笑みを見せると、瞳を閉じた。
私は息を飲んだ。でも、声が出なかった。ヤメテと叫ぼうとした唇が、舌が、顎が、動かない。
お父さんはレインの腰に、そして背中に腕を回し、そっと優しく抱きしめた。
それから一旦右手を解くと、レインの前髪をすっと上にあげて、額にキスをした。

レインがゆっくり眼を開ける。そうじゃないのよという困ったような、恥ずかしいような、でも嬉しいような顔。
「デュッソウ……？」
「……抱いて、キスした」
お父さんはレインからゆっくり離れた。
額を押さえるレイン。顔は微笑みながら、涙がぼろぼろ零れてくる。
「レインが紫苑の親友じゃなかったら……好きになってくれた？親友を止めたら好きになってくれる？」
嗚咽を漏らしながらやっとのことで喋るレイン。お父さんはやっぱり優しい表情を崩さない。
「レインさんは紫苑を捨てることができるの？」
目を瞑ってレインは考えた。
そして少しして、よく自分の心に問いただしてから、首を横に振った。
「できません。レインは紫苑を愛してるの」
お父さんは「うん」と相槌を打ってレインの背中を優しくぽんぽんと叩いた。
「君に好きになってもらえて良かった。また遊びにおいで。待ってるから」
レインは大きく首を縦に振った。そのたびに涙が雫みたいに飛んでいった。
お父さんがレインを返そうと、ドアを開けにくる。まずいと思った私は音を立てずにできるだけ素早く階段へ行った。ドアが開いた音がして、私は階段に隠れた。そのまま音を立てずに居間へ向かう。

居間に行くとこの時期なので暖房の空気が逃げないようにドアが閉めてあった。室外の冷たい空気のほうが暖かい空気より重いので、気圧の差がドアを開けにくくする。音を立てずに開けるのは至難の業だ。さっきみたいに６月だったらこのドアは暑さでだらけて少しも仕事をしないっていうのに。
やっとのことでドアを開けると、やはりゆっくり閉める。
「あら、どうしたの？」
お母さんがお茶を飲んでいた。私は顔面蒼白でよろよろテーブルについた。
「お母さん……お茶」
珍しく親を顎で使う私。机に肘を突いて頭を抱える。お母さんは「はーい」と言って席を立ってお茶を入れてくれる。
「どうかしたの？」
「う……ううん。お茶、ありがとう」
「そう。ところで、シェルテスを倒したってことは、もうこれでレインちゃんとも暫くお別れね。寂しいわ」
「え……そ、そうね」

私はお茶をふーふーする。
「で、レインちゃん、泣いてた？」
「私、まだお別れの挨拶してないよ」
「じゃなくて。あの人に振られて泣いてたかって聞いてるんだけど？」
「アツっ！」
湯のみを揺らしてしまい、お茶で軽く火傷した。湯飲みを置く。
「ど、どういう意味？」
「そのままの意味」
「な……」絶句した「なんで知ってるの……？」
「なんでって……見てれば分かるじゃない」
頭の中がクエスチョンマークならぬクーノステイラで一杯になった。
「お母さん、知ってたの？レインの気持ち」
「そりゃ、ね。だから今だってこうしてレインちゃんに時間をあげてるんじゃない」
ハッとした。そういえばレインはよくお父さんに話しかけていた。お母さんはレインがお父さんと話したり一緒にいたりするのを黙って見ていた。私の誕生日のときもそう。レインはお父さんとお皿を洗ってた。それをお母さんは静観していた。手伝わないのは単に面倒なのかと思ってた……。
「でも、じゃあどうして止めなかったの？」
「止める？恋心ってどうやって止めるの？そんな魔法が玲音の書に載ってるのかしら？」
くすくす笑うお母さん。
「でも……なんで……。分かってるならせめてお父さんとくっ付いててさ、レインに告白させないとかそれくらいのことしたらいいじゃない」
「うーん、そうかもね。でも、私はそうしなかったわ。だって私が選ばれるって知ってたもの。結果が決まってるなら、レインちゃんは気持ちを引きずらないで思いを散らせたほうが、新しい恋に進めるでしょ？」
「結果って……。そうなったから良いものの、お父さんのこと少しも疑わなかったの？」
「うん」
あっさり答えるお母さん。
「……どうして？」
「そうねぇ。色々あるけど、私のほうがレインちゃんより魅力的だからかな」
私は何も言い返せずに、大きく開いた目でお母さんを見ていた。
「じゃ、じゃあさ、レインがもっと魅力的になったらどうするの？」
「私がもっと良い女になって彼を引き止めるわ。良い女に囲まれた男はもっと磨かれていくの。するとそれを捕まえようとする女もまた磨かれていく。良い刺激よね」
私は口を開けて無言のまま頷いてしまった。ライバルが仮に現われたとしてもそれを利用してしまうお母さん。逆境でさえ武器にしてしまう。レイン……残念でしょうけど、こ

の女にはきっと勝てないよ。

居間を出て階段を登る。お父さんの部屋は閉まってた。何事もなしに通り過ぎたが、ふと邪念が沸いた。つまり……万一だけど、私が下に行った後２人で「やっぱり……」なんてことになってないよな……？

ドアに耳を当てようかと思ったが自分の部屋に行ったほうが早い。それより私はどんな顔してレインに会えばいいんだろう。と思ったところで目の前のドアが開いて、レインが出てきた。手には袋を持っている。

ᘐᒐᴐᐱ，ᑭᖻ ɔ ᒐᴄᗐ- -ᐣᑭ- ᑭ >ᴄᐱ- Ꮥ-ᑭ e ᒐᴄᗐ- ᑭeᔑᘐ

ᘐ- ᖻ-….ᔑɔᐱ ᔑɔl ᑭᖻ ᔑɔ ᐣe ᑭɔᵹ ᘐ

ᘐ>>ᵹ ᐱɔᐱ ᐣɔᔑ lᖻ- l-ᐱ- ɮɔɔV-ᒐɔɔᐣ„ lᴄlᴄᔑ ᒐɔɔᐣ-ᑭ ᐣ- leᔑᑭeZ ᔑeᑭeᵹ ᘐ

ᘐᖻ-，leᐱ- ᔑɔᑭ„ ᐣ--ᑭ ᐱɔᐱ ᖻᴃᴄᑭ ᐣe ᑭᖻ ᐣ- leᔑᑭeZ ᑭeᑭ l--l hɔᑭ ᒐ-„ ᔑɔᐱ ᐱɔᐱ ᒐɔɔᐣ-ᑭ - l-„ h-c ᑭᖻ ᒐ-ᑭ ᐣ->ᴄl ᐣ--ᐱ ᖻ-ᵹ ᘐ

ᘐᖻ-„ ᐱɔᐱ ᔑeᐱᔑ-ᑭ….-ᔑ-ᑭ ɮɔɔV-ᒐɔɔᐣ - l-ᘐ

ᘐ-lᐱ-„ l--l ᒐ-l lᖻ„ ᐣɔᔑ l-，ᒐɔɔᐣ ɮᴄ-ᘐ

ᘐᖻ-ᘐ

レインは階段を下りていった。私は部屋に戻る。先生がベッドに座っていた。

「あれ、遅かったね。レインいま入れ違いで出てったよ」

「うん、会いました」

ベッドに座る。暖かい。レインがいたのね。

「レイン、先生と話してたの？」

「あぁ。ゆっくり、ぽつぽつと、な。俺と２人きりのときは完全に俺のリスニング力に合わせてくれるから助かるよ。文法は簡単だから単語の音さえ覚えちまえばアルカは使いやすい。文字にされると鏡文字のテスとケットがよく逆になって間違えるけど、音だと関係ないからね」

先生……レインが実は日本語喋れること知らないのね。私も今知ったばかりだけど。しかしルフェル王は凄い。純粋主義のレインには「アルカ以外の言葉を使って思いを伝える」ことが悪徳なのだ。それを知って自由になさいと告げるなんて……度量が広いわ。信者のほうが狭量だなんてね。

「先生も随分アルカに慣れましたね」

「まぁね。ほんとにすこーしだけどな」

「私より滞在期間がずっと短かったからですよ。もっと居ればすぐ慣れたわ」

「しかし、これで暫く使う機会もなくなるなぁ。レイン、もう帰るんだろ？結局あいつはメルティアに何を頼んだんだろうな」

私は苦笑いして首を傾げた。エリス神が伝えたレインの望みは「好きな人にもう一度会って、神さまに許された異教徒への愛の告白をすること」

　でも、よりによってその相手が私のお父さんだったなんて。てっきりレインはアルシェのことを好きだと思ってたのに。でもお父さんが断ってくれて良かった。レインには可哀相なことだけど、いくら親友でもお父さんを取っていいわけがない。
　レインはもし上手くいったら自分の行為がどんな結果をもたらすか考えなかったのだろうか。お母さんが浮気を許すはずがない。バレたらこの家はおしまいだ。お父さんとお母さんが離婚したら私はどうすればいいの？レインはそれを分かっててあんなこと言ったの？
　それとも隠れて浮気して、自分は日陰の女になるつもりだったの？それだっていつバレるか分かったものじゃないわ。レインは……何を考えてあんなことをしたんだろう……。
　でも、最後にお父さんに語った私への思いが、多分、この疑問を間接的に解決してくれる気がする。レインはやっぱり私の親友だ。
　ガチャっとドアが開いてレインが帰ってきた。いつの間にかルフィとラーサに着替えていた。さっきの袋は着替えだったみたい。綺麗に折りたたんだ制服を私に返すと、お礼を言ってきた。
「レイン、早かったな。挨拶は済んだか？」
ᘐ∪c⊃Λ，∪cZ⁊-….ᘑ
　寂しそうなレイン。そのとき、光の中からメルティアが現われた。私たちは黙っていた。メルティアもいつもの綺麗な顔を動かさず、黙っている。レインは寂しそうな笑みを浮かべて私たちに近寄ってきた。
ᘐ∪c⊃Λ，∪cZ⁊-，leΛ- -⁊(>e -∪el c> ℓc-⌣el ⁊e⌣ᘑ
　私はレインを抱きしめた。
ᘐЧ-，lecΛ„ Λ⊃Λ I-Λℓ (ə„ ⌣⊃Λ ℓ⊃⊃V- - (əᘑ
　レインを離す。レインは静の前に立つ。少し腕を開く動作をする。静のほうから抱きしめてという合図。私への気遣いなのだろうか。静は求めている女の子以外に触るのが心理的に苦手らしいから、少し躊躇っていた。するとレインは微笑んで自分からぎゅっと抱きついた。静は背中に手を回すと、妹か娘をあやすように、ぽんぽんと背中を叩いた。
「また遊びに来いよな。日本の良いとこもっと見せたいからさ、観光に連れてってやるよ――今度は安全運転で」
　レインはにこっとして首を傾げた。静は苦笑する。あれ……？
「紫苑が卒業してるころだから、制服もらえるんじゃないか、今度来たときは。そしたら俺がレインに合うローファー買ってやるよ。それでも足が痛くなったら言いな。またおぶってやるから」
　頷くレイン。
「じゃあ……またな、レイン。アルシェやハインさんにもよろしくな。>>，Λ->(⁊⊃<- >-Λ (əᑊ e(∪ceᑊ„ ℓ⊃⊃V- - ⌣-I(⁊e⌣，lecΛ」
　すっと背伸びをして、レインは静の両耳のところに両手を当て、軽く頬にキスをした。

静は戸惑いを隠しながら、小さく頷いて、レインをゆっくり離した。
ᒐcZᒣ- ᕀ>elᑕc-，ᔑeᐱᑕ-ᐱᑕ„ ᑕc eᑕ <-ᕢ>ᖵᕀ
メルティアはふっと笑うと、レインの手を取った。
ᕀlᵉᐱ- cl ᕢeᔑᑕ ᑕc，>elᑕc-„ ᕽcɔ >e lᵉᐱ- -l -ᑕɔl-ᔑ ɔ -ᑕᕽ ᕢeᑕ，ᛗɔɔV-ᖵᕀ
ᕀᕽcᐱ-ᕀ と答えると、メルティアはレインとともに光の中へ消えていった。

「帰った……な」
「うん……」
私はベッドに手を触れた。レインがいて少し暖かかったところ。もう私のお尻で暖まっちゃったけど。折りたたまれた制服、まだ暖かい。私は顔を埋めて、目一杯匂いを嗅いだ。レインの匂いがする。甘いミルクみたいな匂い。
「田山花袋だな、まるで」
「……ふとんじゃないもん、これは」
「お、それくらいは知ってたか。それ、俺にも貸してくれよ」
「私の匂い、レインの匂い？」
「今は流石にレインだよ。忘れないようにな」
私が手渡すと、顔を近付けてから、先生は胸にレインの着ていた制服を抱いた。
「ねぇ先生、レインのことどう思ってた？」
「妹みたいな子だな」
先生から制服を受け取ると、「そうね」と言った。
「それは少し分かる気がします」

レインが帰ったあと、先生はお母さんのところへ行った。居間の暖房がおかしくてとお母さんが相談しにきたら、先生は点数稼ぎに気前良く飛んでった。私はお父さんの部屋に行った。ノックするとお父さんが出てきた。
「入ってい？」
「うん」とドアを開けてくれる。私はベッドに座った。お父さんは机の椅子に座る。
私がしばらくもじもじしていると、お父さんは「どうしたの？」と聞いてきた「用があったんだよね」
「うん……」
「すこし……言いにくいことか」
「うん……。あのね、レイン……帰っちゃった。お父さんたちにちゃんと挨拶しにきた？」
「来たよ」
「そう。それで……なんだっていってた？」
私は少し引きつりながら笑った。お父さんは立ち上がって私の横に座った。
「お父さんのほうが訳してほしいくらいだ。アルカの台詞はお父さん、分からないからね」

ドキっとした。ふいにお父さんの顔を見る。ちらっと私を見てくる。
「あの……み、見てたの？」
「というか、お前がな」
「で、ですよね……」
引きつる私。
「ごめんね、盗み見するつもりじゃなかったの。たまたまそこが開いてたから。レインの言ってたことは日本語と同じ内容よ」
「そうか」
「あの……それじゃあさ、お父さんは私の目があることを知ってたんだよね……？」
際どい質問をした。これで意図が通じるだろうか。つまり、もし私が見てなかったら結果は変わっていたかどうかという……。
「知ってたよ」
それしか答えない。端的に質問にしか答えない。やっぱお父さんだ……。
「あの……もし、もしもね、私がいなかったら……お父さんの……その……お父さん……レインに」
もじもじする私。こういう言い方お父さんが苦手だって知ってるくせに。
ふぅとため息をつくお父さん。
「紫苑がいてもいなくても変わらないよ」
「そう……良かった」
気まずい沈黙が流れる。でも、きっと気まずいと思ってるのは私だけ。
「てゆうか、お父さんってモテるのねぇ。ビックリしちゃった」
話をはぐらかそうとした。
「そう……」
「娘と同い年の子に憧れられたら困るよね」
「そうだね。でも好きになってくれれば嬉しいよ」
「そう……なんだ？じゃあお母さんのことがなければレインでも良かったの？」
「どういう意味？」
「つまり……誰にも知られなければ……みたいな」
お父さんは首を振る。
「そうなんだ。やっぱお父さん、真面目だね〜」
わざとからかうような口調。何でもないことのように捉える娘を演じたかった。
「母さんが悲しむことをしたくないだけだ」
「……お母さんが知らなくても？」
「知らなくても。裏切ったことに変わりはないから」
「ふーん」脚を伸ばした。さも興味なさげな反応を演出する。
お父さんは立ち上がった。背中、大きいなぁ。

「ねぇ」私も立ち上がった「久しぶりにおんぶしてよ」
「え？」驚いて振り向く。
「スキンシップだよー。ほら、いま篠中の制服だし、昔に戻ったと思って」
「昔か……」お父さんは呟くと、私の前に立って、右手で私の前髪をどけつつ、額に手の平を当てた。
「熱はないみたいだな」
「お、おとーさん！ もう、お母さんみたいなことしないでよ！」
「いや。最後に紫苑をおんぶしたのは小学生のときだよ。中学生になったらスキンシップはこれしかしてない」
「……そうだっけ？」
「あぁ。静君のところに行ってあげなさい。あまり待たせちゃいけない」
お父さんはドアを開けに行った。
「隙あり！」
私はぴょんっと後ろから飛び掛ると、大きな背中に抱きついて飛び乗った。首にぎゅっと腕を回して抱きつく。
「おっ……と」驚くお父さん。でもビクともしない「こら、紫苑……」
私は「えへへ」と笑って背中から降りると、怒られる前に部屋を出て行った。
「お父さん、私、もう良い子止めるから！」
「え？」ドアを閉めつつあるお父さん。
「不良になるんじゃないのよ。お父さんに構ってもらいたくて色々困らせる問題娘を卒業するの」
私は外側からノブを持ってバタンとドアを閉めた。

2007 / 01 / 20

土曜日の朝５時。ちょっと早い時間。私は目覚めた。先生のモーニングコールで起こしてもらった。寝ぼけた声を出すのが恥ずかしくて、できるだけ可愛い声を出すようにした。
「紫苑、おはよう。いま着いたよ」
「はい。開けにいきますね。でもちょっと待っててもらえますか。その……髪の毛とかハミガキとか」
「アルナで寝顔はたくさん見たよ」
「恥ずかしいのぉ。寒いのにごめんね。４分で行くわ。おねがい」
「わかった、わかった。大丈夫だからゆっくりしといで」
私は急いで着替えて髪の毛を直して歯を磨いた。一緒に夜を過ごして起きた朝なら男の人も女の整っていない姿を許してくれるって聞いた。でも、自分がシャキっと起きているのに家から出てきた彼女がだらしない格好をしてると引くんだって。そういうの、何とな

く分かる気がする。
　４分を頭の中で数えながら、でもドアを開けるときは大慌てしないで自然に開けた。
「おはよう」
　先生は私を見てもそれしか言わない。
「おはようございます……んー、白鳥っているじゃないですか」手招きしながら中に入れる「水面下では頑張ってるんだって」
「いきなり何のこと？」
「私も寒い中先生を待たせて悪いなぁと思いながらも、下心ではどうやって短い時間で先生に少しでも可愛いって思わせるか頑張ってました」
　上目遣いになって両手の指で髪の毛をちょんちょんと抓む。
　先生は笑って「そうか。可愛いよ、朝から。俺たちの関係のために頑張ってくれてるんだな」と言ってきた。
　思ったことを直接言うのも重要だ。そしてそのときは言い方が何より重要だ。私は先生の気を良くする言い方が巧いらしい。
　居間へ通す。お母さんとお父さんが降りてくる。２人とも今日は休みだ。
「おはよう、紫苑。センター頑張ってね」
「うん」
　東大にはあまり興味がなかったけれど、一応受けることにした。まずはセンターで足切りだ。ここを乗り越えなければいけない。センターは今日明日と続く連戦だ。検定料は９月に払い込んだし、願書も 10 月中に出しておいた。もう後には引けない。
　昨日は早く寝た。朝ごはんの下ごしらえもしていない。お母さんが焼いておいたパンを出してくれた。あとはジャムとカットフルーツ。ご飯を食べてきたという先生には飲み物を出してくれた。
「紫苑、食べたら最後に確認事項を整理しとこう」
「はい、先生」
「……ま、もう先生じゃないんだけどな」
　そう、静はアトラスを帰ってきてから塾を止めた。半月も無断欠勤していたので塾では随分大変な騒ぎだったらしい。私はインフルエンザで長期欠席していたから別に関係は疑われなかったと思うし、疑われても、もはやどうでもいい。私たちの間に障害はもう無いんだから。それでも私にとって静は「先生」だ。そう呼ぶのがしっくりきてしまったのもあるけど――
「ジュンクでお話したときから、先生は「先生」だったんです」
　先生は苦笑して首を傾げた。
　静は今日は応援に来てくれている。塾を止めたあと、事後処理や身辺整理ということで１ヶ月間色々忙しくしていてあまり会えなかった。再就職するために元の会社からもらう書類がどうのとか……私には分からない言葉を使っていたけど、要約すれば再就職中で頑

張ってますということみたい。なんだか教師はもうやる気がないんだって。どうしてって聞いたら、生徒に手を出したからだって！

緊張のせいか、朝から具合が良くない。浦女を受けたときのことがフラッシュバックする。あのときはお腹を壊して試験途中でトイレに行きたくなって、試験どころじゃなくなって落ちたんだ。もうあんなのは嫌と思ったんだけど、嫌がるほど却って意識してしまって忘れられない。

昨日電話で先生に相談したら久しぶりに蛍さんの名前を出してきた。「蛍も俺のことが嫌いだが、嫌う以上は忘れられない。それと同じだ。好きの反対は嫌いでもなく、避けようとする無視でもなく、無関心なんだ」

なるほどと思った。

それにしても何だか気持ちが悪い。横でお母さんが食器を洗ってる。お父さんは静が私に教える姿を見ている。当の本人の私はというと、気持ち悪くて結構辛かった。でも大丈夫、今日明日のことだから。

そう思った瞬間、急に吐き気がこみあげてきた。これは……まずい。私は口を押さえて洗面所に走っていった。

朝ごはんなんか食べなきゃ良かった……。こんなに試験って緊張するものなの……？

「紫苑、大丈夫か？」

先生が飛んでくる。私は水を流して、コップでうがいをする。

「はい……緊張しすぎみたいです。ここんとこなんか気持ち悪くて。受験ストレス、私にもあるみたいですね。でも今日は特に酷いです」

「あのさぁ……」

先生は後ろから近寄ると、肩をそっと抱いてきた。そして右手をゆっくりお腹に当てる。

「お前……妊娠してないか？」

「……え？」

私は洗面所のドアを閉めた。

「え……どうして？」

「生理、来てるか？」

私は首を振る。先生は「だよな」と頷く。

「でも、１ヶ月来ないこととか稀にありました。私は規則正しいほうだけど、こない月もあったし」

「最後に来たのは 11 月の 13 日くらいだったよな。俺、アルバザードで計算してみたんだ。だから珍しく数字を覚えてるんだけど」

「でも、その話はもうしたじゃないですか。つわりが来るんだったら５週目で来てるだろうから、私たちがアトラスから帰ってきた 12 月 19 日くらいにはもうそろそろ来てたはずだって。でもあれから１ヶ月つわりとか何の音沙汰もないし」

「生理のほうも音沙汰ないだろ。最初にしたときにできたんじゃないかもしれない。アトラスでしたのが最後だけど、排卵が遅れててその時期だったら、いまがそろそろつわりなんじゃないか？」
「でも……こんなテレビで見るようなつわりってそんなにあるものなんですか？」
「人によって全然違うみたいだよ。二日酔いから頭痛を抜いたような感じが一般的だそうだが。蛍は酷くなったのが……そうだな……８、９週目くらいだったと思う。５週から「うっ」と来る人はそんなに多くないと思う。もしかしたら紫苑は今まで軽かったのかもしれないから、もしそうだったらこれから気をつけないとな」
「え、てゆうか、私妊娠してるんですか？」
「そりゃわかんないよ。検査薬を使ってみないと」
「病院行くんですよね。お医者さんにあの……あそこ……見せるの嫌なんですけど」
「じゃあ女医がやってるところ紹介するよ。それと、妊娠の有無を調べるなら市販の検査薬で事足りる。クリアブルーとかね。医者が使ってるのと精度は変わらないから、いまじゃ検査薬で陽性が出れば医者はそれで妊娠だと判断するよ。２重に調べて無駄な点数取らない良心的な医者は特にね」
「く、くわしいのね、さすが」
「結婚経験アリだからな」
「検査薬ってどう使うんですか？」
「トイレで尿をかけるだけだよ」
「おしっこを？コップとかに入れるんじゃなくてかけるの？」
「どっちでもいいよ、体温計みたいな形だから。学校の検尿じゃないんだよ。今日辺り調べよう」
「はい」と言ったところでまた気持ち悪さがこみ上げてきた。まずい……これは、確かに、普段の気持ち悪さじゃない。ヘンなものは食べていない。お母さんたちと同じものを食べた。風邪も引いてないし、早寝もした。いくらなんでもストレスでここまでなるとは思えない。
　私はよろよろ倒れて洗面器にしがみつく。先生が慌てて起こそうとするが、私は石のように動かない。様子がおかしいと思ってお母さんが入ってくる。お父さんも来た。
「どうしたの、紫苑？」
「気持ちが……悪くて」
「あら……大変だわ。薬飲む？」
「何の薬がいいの？」
「症状は？」
「吐き気がする。お腹が気持ち悪い。胃も気持ち悪い」
「ストレスかしら……。風邪引いてるの？」
「ううん……健康よ。お腹もこわしてない。気持ち悪いだけ。どんな薬がいいかな」

「胃薬……かしら。ちょっと待っててね」
　お母さんが小走りする。お父さんが腕を組んで心配そうに見ている。薬を持ってくるお母さん。私は水で飲んだ。でも、果たしてこんなものが効くのかしら。
　そのあと、ソファーに寝かせてもらって暖房を当ててもらった。でも気持ち悪さが強くてダメ。少し動こうとするだけで吐き気がでる。不思議と熱はそんなになかった。インフルエンザとかじゃないみたい。
「紫苑、あなた……試験どうする？」心配顔のお母さん。
「分からない……行かなきゃいけないって思ってるけど、動くと吐き気がするの。口を動かすだけでも今辛くて」
「残念だけれど、センターは諦めるしかないな」
　お父さんが言うと、お母さんはしおらしく頷いた。
「紫苑、残念だけど……センターは止めましょう。静さん、ごめんなさいね、折角こんな時間に来ていただいたのに」
「いえ……」という静は暖房のせいか緊張のせいかうっすら汗をかいている。
「ごめんね、お母さん……東大」
「そんなのどうでもいいわよ。好きなところに行きなさい。浪人する気なんてないんでしょ？」
「それは……さすがに無いなぁ。他の私立がんばるよ」

　私はそのまま寝込んでしまった。静は看病するということで私をおぶって２階まで連れていってくれた。ベッドに寝かせてもらう。
「紫苑、いま薬局行ってくるから」
「うん……お願い」
「薬効いてきたか？」
「少しね……。でも時間が解決してるだけかも」
　先生は私の額を撫でると、部屋を出て行った。
　しばらくぼーっと天井を見ていた。色んなことを考えていたら、先生が戻ってきた。時計を見るとあれからもう１時間も経っていた。もうセンター、ムリだろうなぁ。お昼ごろまで寝てれば動けそうなんだけど……そんな時間じゃもうとっくに始まってるし。
「紫苑、立てるか？」
「うん……ちょっと良くなってきたよ。薬のおかげかな。てゆうか試験がなくなったって思ったら随分具合が良くなったみたい。もしかしたらほんとにただのストレスだったのかも」
「使い方わかるか？付いてこうか？」
「大丈夫です。おしっこするとこ見られるの恥ずかしいから」
「四の五の言ってる場合じゃないと思うけど。じゃあ待ってるよ」

先生は不安気な顔を隠そうとしている。私は部屋を出て、トイレに行った。

中に入って下着を下ろす。説明書を読む。

hCG ホルモンの量で検査……そんなもの私、知らない間に出してるのか。えー、にごりのひどい尿や異物の混じった尿は、使用しないでください。……は？どの程度でおしっこって濁ってることになるの？てゆうか、何を以って濁ってると？

……まぁいいや、出そう。サンプラーにおしっこをかけてキャップをする。四角い判定窓が染みてきた。ええと、平らなところ平らなところ……。トイレットペーパーホルダーの上でいいか。

私は結果がどっちであることを望んでいるのだろう。先生が行ってる間に色々考えたけど、どれも一長一短だと思って、結局分からなかった。

丸い窓に青い縦線が出てきた。検査は成功だ。あとは陽性か陰性か。10 分くらいかかるのね。と思っているうちにすぐに四角い窓に青い縦線が現われた。ん？これってどう見るの？説明書をごそごそする。

「青い線が出ている――陽性――妊娠反応が認められました」

じーっと見る。事の意味を考えてみる……。

「……あーー……」ぼーっと見る。

そして再び「あーー、あぁ、あぁ」と頷いてみる。

やっぱりね、という気持ちがどこかにあった。そりゃ心当たりありすぎだしなぁ。

なんだろう。え？これで私、お母さん？私が誰かのママになるの？母親になるの？え、嘘……。今更思った。私、まだ高校生なんだけどなぁ……。でも別にこういう結果を考えてなかったわけじゃないし、この結果を拒絶しているわけではない。単に私が母親になるというイメージが湧かないだけ。こういうとき、女って喜ぶの？怖がるの？男は？固まるの？飛び上がって「でかした」とかいうの？えー、何が何だか分からない。

ていうかこれって記念品？記念品なのかな。こんな汚い記念品、他にないと思うんだけど。これ、先生に見せるの？お父さんとお母さんにも？私がおしっこかけたものを？キャップがあっても抵抗あるよね……。ん？よく見たら長く放置すると判定が変わるかもって書いてある。大変！早く見せなきゃ。

流して出る。とんとんと２階に行けるくらい体力は回復してたけど、ゆっくり歩く。だってお腹に赤ちゃんがいるんだもんね。さて……静にはどうやって見せたものか。喜んでくれるか嫌がるか。蛍さんのことがあるからなぁ。それに、子供ができたら恋人時代が終わってしまう。子育てで忙しいから。もっと恋人でいたかった。う……私、物凄く損してない？先生しか男の人はいらないのに、恋人期間が１年も無かっただなんて、蛍さんに負けてるわ。

部屋に入る。私は困ったような表情。結局何をどういえばいいのか分からない。

「どうだった？」

「ん……と。青い線が出てました」小さい声で子供のように幼稚に答える。

「え！？」立ち上がってクリアブルーを取る。あ、汚いとは思わないのね。しかし今の「え」はどういう意味の声だろう。
　ぼーっと見ている静。少ししてベッドに座る。私は立ちながらじーっと見ている。若干、前を見てぼーっとしている先生。何を考えているんだろう。ちょっと不安だ。
「紫苑……どう感じた？」
「ん……」
「つまり、嬉しいのか、嫌なのか」
「嫌じゃないよ。でも……おおごとだとは思います。先生は？」
「俺は男だから、ここは100%女に譲ることにしてる。100%女の意思を尊重する。だから、紫苑が嬉しいなら甘受する。嫌だというならそれも甘受する。だけどね、それは出てって良いとか別れて良いとかおろして良いとかそういう権利を与えてるわけじゃないよ。それは蛍のこと知ってるから分かるよね？」
「うん……分かる」
「座りなよ、とりあえず」
　ちょこん……。
「まだ、自分の気持ちが分かりません。そうかもって予想はしてたけど、実感がなくて」
「そんなもんだよ」
「前の人のときはどうでした？」
「あのときは計画的に作ろうとしてたからさ、目標達成ってことだろ。だから素直にお互い喜んだよ。ただ、今回はイレギュラー性があるからな」
「そう……ですか。あ、これ、お父さんとお母さんに言わないと」
「そう……だな」
　表情が固くなる。あぁ、怖がってるんだろうなぁ。
「私、呼んできます」
「あぁ、いい、いい、俺が行くから」
　といって私を寝かせて素早く出て行った。

　そして少しして２人を連れてきた。
「紫苑、話ってなあに？」
「正確には娘さんと私からの話でして」
「あのね、お母さん……」
　私はどう言おうと考えたんだけど、言葉にすると余計怒られそうだったから、クリアブルーを差し出した。
「なにこれ？」受け取るお母さん。すぐに顔色が変わる「……妊娠検査薬？」
　お父さんが眉をぴくっとあげる。
「あなた、妊娠したの？」

１秒ほど置いてからゆっくり頷く私。静は多分死にたいくらいの気まずさと恐怖の中で立っていた。多分、シェルテスよりお父さんのほうが怖いんじゃないか。多分……冗談ではなくて。静は色々何か考えて言いたげだったみたいだけど、どれもこれも墓穴を掘りそうで、沈黙を保っていた。

お母さんは「はい」と言ってお父さんに見せる。お父さんは触りもせずに首だけ動かす。

「見方が分からない」とお父さん。

「四角い窓があるでしょ。そこの青い縦線が陽性なの」

「これは確実なのか」

「99%以上って書いてあったよ」

「そうか」と腕を組むお父さん。珍しいポーズだ「じゃあ早く医者に看てもらわないといけないな」

「え、産んでいいの？」

「え？」お父さんは意外な顔をしてからお母さんの様子を見る。

「良いも何も紫苑と静さんで決めることでしょ。人の命なんだから、お母さんたちがおろせといえばおろすわけじゃないわ。でも、あなたまだ高校生よね」

「申し訳ありません！」

先生が思い切り深々と頭を下げた。もう何か色々考えたけどそれしかなかったみたい。

「いえ、謝られても……」

お母さんも困惑してるみたいで、愛想のない返し方しかできなかった。でも静は頭を上げない。お母さんは困ったように私と先生を交互に見る。

「違うよ、先生が謝ることじゃないの。私がシェルテスのことがあって不安だったから、もしかして死んじゃうかもしれないって思ったからなの。だから先生のせいじゃないの。私が我侭いったからなの」

「いえ、たとえそうだとしても止められなかったのは私の責任です」静はあくまで親に喋りかける。

「とりあえず頭をあげてもらえますか」とお父さん。静はゆっくりあげる。沈痛な面持ちで。

お母さんは私が処女じゃないことを知ってたし、避妊しなかったことも知ってる。だけどお父さんは何も知らないはずだ。妊娠どころか処女でないことも知らなかったはずだ。驚きはお父さんのほうが大きいはず。先生はシャツが冷や汗で湿って、肌が透けていた。

「紫苑は、どう思ってるの？このことについて」とお母さん。

「もしかしてとは思ってたから……。でもなんだろ、実感なくてぼーっとしてる」

「受験どころじゃなくなっちゃったわね。あなたどうするの、大学」

「それは……」

「赤ちゃんを諦めるか大学を諦めるかしかないわよ」

「じゃあ大学はやめるよ」

ハッと振り返る静。
「あなたねぇ、止めるってそんなすぐに……。じゃあ止めてどうするの？静さんと結婚して子育てするの？」
「うん……だってお母さん、赤ちゃんできたら自分で責任取りなさいっていってたでしょ。それに、結婚はどっちにしてもするよ」
「それ、静さんは了承してるの？」
「してるよ。赤ちゃんできたって知る前から結婚しようって言ってくれてたもん」
「じゃあ大学は諦めるのね？」
「うー……」私は頭が混乱してきた「大学にそんなに重きは置いてないんだけど、それは別にどこでもいいっていう意味であって、大学自体は行ってみたいのよ。将来働くことも考えると」
「あなた」鼻で笑うお母さん。もう呆れ笑いだ「このまま行くと大学１年で出産よ？それまで大学どうするの？そして産んだ後はどうするの？産んで中退だったら始めから行かないのと同じじゃない？」
「う……ん」私は混乱してるところに色々言われてだんだん耐えられなくなってきた。でもヒステリーになるタイプじゃないから、だんだんお腹が痛くなってきた。
「紫苑自身、混乱していてまだ考えがまとまらないようですね」お父さんがフォローを入れるとお母さんは少し冷静になった。
「紫苑は混乱しているので後回しにして、静君は大人の男としてこの件にどう対処する？」
「はっ……」息を呑んで畏まる静「私はお嬢さんの気持ちを優先したいと思います。お嬢さんの気持ちが落ち着き次第、たとえば産むなら産む、そうでないならそうでないなど、意思が決まり次第、それを尊重します。ただ、その一方で、仮に産む場合を考えると、私はお嬢さんのような才能を持った人には大学で高度な教育を受けてもらいたいと考えています。矛盾ではありますが、それを今後お嬢さんが望むなら、両立させる方法を案出します。何分いま知ったばかりのことですので具体案を案出するまでには多少お時間をいただくことになりますが、建設的な案を捻出いたします」
「うん、気持ちは分かったので、たとえば子供を産んで娘を大学にやるにはどんな方法がある？時間がないと言っていましたが、いま時間を作るので考えてもらえますか」
「はい……」静は黙って手を口に当て、考えた。
「いま現在無職の私が言うと説得力に欠けます。ですが、紫苑が大学に行っている間は託児所のようなところに預け、その間私が外で働いて２人を養います」
「０歳から見てくれる託児所なんてないと思うけど……」とお母さん。
「え？」という顔の先生。少し考えて、それもそうかという顔をする。お母さんは少し期待はずれのように息をつく。
「静君、ここにいる人間の気持ちを捨象して、紫苑の合理性を追求する。この２つの条件下で最も良い方法はなんだろう」

「……それは……言いにくいことを言えるということであれば、子供を託児所に預けられる程度まで親御さんに見ていただくか、逆にお嬢さんが１年浪人するか、或いは私が主夫になるかだと思います」
「なるほど。それで、君はそのうちのどれを選ぶ？」
「それは……親御さんはどちらともフルタイムで働かれていて、しかもキャリアをお持ちです。紫苑の合理性を追求すれば家計のことも考慮した上で、１番の選択肢は選べません。２と３は等価だと思いますが、３の場合は収入が途絶えます。お嬢さんは学校で私は家ということになりますので。したがって、経済的な面も合わせてお嬢さんの視点で最も合理的な選択は２番かと考えます」
「……だ、そうだが」と私を見てくる。私は俯いた。
「浪人は……考えてなかったなぁ……。でもそれを聞いたらそうするか、いっそ大学やめて主婦になるかのほうがいいのかな。でも、先生は私に大学にいってほしいのよね。お母さんもそうでしょ？」
「まぁ……ねぇ。浪人……。そうなったら１浪じゃすまないかもしれないわよ。だって産まれるのが……えっと、いつかしら？」
「８月 20 日が予定日です」即答する静。皆の眼が集まる。皆ちょっと驚いている。
「可能性を考慮して予定日を計算しておりました。ただ、つわりは通常５週目で起こります。お嬢さんは最終月経開始を０週とすると、現在９週にいます。つわりの強い時期です。一方、排卵が遅れてこのつわりが事実上５週目の場合、予定日より出産は遅れます」
　静のこうした調査は親に受けたようで、親は少し静を当てにしたような信用したような顔を見せた。多分、私に子供を作らせたことは怒ってるけど、私の身体に起こりうることを事細かに考えた誠意を買ってるのだろう。
「８月……。じゃああなた１浪しても子供は１歳にもならないわよ。２浪も３浪もするつもり？」
「それなのですが」静が口を挟む「もうひとつ、ここにいない人間を考慮すると、たとえば私の親はパートタイムですので、お嬢さんを嫁として迎えいれ、私が働き、お嬢さんが大学へウチから通い、私の親、つまり子供の祖母に育ててもらうという選択肢もあります。勿論、選択肢としてお話しているだけですが」
「それは……お母様も困るでしょうね。私ずっと気にしてるのよ。こちらから挨拶もできずじまいで。ごめんなさいね」
「いえ、そんな。こちらこそお伺いもさせずに申し訳ありません」平身低頭の静。可哀相な先生。私に無理やり抱くように仕向けられて、別に抱きたくもなかっただろうに抱かされて、子供ほしくもなかっただろうに私が妊娠して、全部自分が悪いかのように平身低頭でウチの親に謝ってる。これが男女差別じゃなっかたら男女差別なんて女に都合良いだけの言い訳でしかないね。
「とにかく、一度向こうのご両親にもご挨拶しないと。だって……あなたたち、このまま

行けば結婚ってことになるんでしょう？」
「は、はい！お嬢さんと親御さんさえ受け入れてくだされば」本当に平身低頭な静。可哀相だなぁ……私のせいで。
　私なんて寝てただけで赤ちゃんできちゃったよ。「した」じゃなくて「された」もとい「させた」なわけだから、作ったっていうかできたって感じなのよね。
「あのさ……なんか勝手に話が進んでるけど、とりあえずこの子を産むかどうか決めないとじゃないの？」
「それはあなたの判断よ、本当に。あとは静さんの意思」
「うーん、色々大変そうだけど、私、シェルテス戦のときに思ったのよね。赤ちゃんに「ごめんね」って」
「え？」
「私、ルーキーテっていう魔法使ったでしょ。あそこで一度死んじゃったんだって。ほんとは私の魔力じゃ使ったら死ぬはずなのに生きてたからおかしいなって思ってた。それでこないだ先生に聞いたの。そうしたら私、一度死んでたんだって。レインがルフェル神に頼んでフォルティスっていう杖を借りて、私を生き帰したの。フォルティスを使えば誰でも生き返るわけじゃないのよ。ヴィードの極端な消耗で仮死状態になった、つまりヴィード死状態の死体だけよ。仮死が長いと脳に酸素がいかなくて結局生体上の死に至るの。そうなるとフォルティスも無意味よ。つまり純粋なヴィード死状態だけを回復できるアイテムなの。簡単にいえば病死や傷を受けて死んだ場合はダメね。ヴィードを使い果たしたせいで仮死になった場合じゃないとダメ。あと、昔の人は呼吸をしているヴィード死状態でも死亡と考えてたみたい。だからアシェットの使徒は何ヶ月かした後にフォルティスを使っても生き返ることができたみたいよ。生体死じゃないから」
「紫苑、今は向こうの神話の説明はいいのよ」
「うん、それでね、私、ルーキーテを撃ったときに、お父さんやお母さんや色んな人に謝ったの。死ぬって知ってたから。そしてその中にお腹にいたかもしれない赤ちゃんにも謝ったのよ。なんかね、あのときのこと思い出すと、この子は――」
　お腹を触る。
「――シェルテス戦を生き抜いた子なんだって思うの。そう思うとますますおろすなんてできないよ」
　３人とも何とも返しがたい顔で黙る。アトラスでの経験はかなり説得力があるみたい。これで産む方向で話は決まったようだ。
　良かったね、先生の赤ちゃん。
　私のっていう言葉を敢えて避けた。私、蛍さんと対極の存在になりたかったから。
「あのね、私を中心とした合理性で考えるとね、私、お嫁さんに行ったほうが良いと思うのよ。向こうのお母さんに会ったこともないし、子供を代わりに育ててくれるかは分からないけど。でも、お母さんは仕事辞められないでしょ？」

「そりゃ……そうだけど。でも会ったこともないのに受け入れてくれるなんてないわ」
「そうねぇ、確かに不安だけど、相談してみるよ。多分その辺は先生が交渉してくれると思う。私の仕事はできるだけ向こうのお母さんに気に入られることなんだけど。向こうのお母さんが「子供ができたんなら主婦になりなさい」って仰れば私も諦めるよ。しょうがないよ、先生のこの子供はおろせないもの」
「紫苑……」静が私を見た。
「先生、できるだけ早くご両親に会わせてもらえますか？まずは私一人がいいと思うの。その後ウチの親と会ってもらうって形で」
「あ、あぁ、それが一番だろうね」
　お父さんは組んでいた腕を外し、息を吐いた。
「静君、２人で話したいので私の部屋に来てくれないか」
「あ……は、はい！」死にそうな顔の静。きっと漫画でいうところの番長に校舎裏へ呼び出される以上の恐怖を感じてるんだろうな。私、見てられなかった。
「お父さん……！」ちょっと強気の私。振り返るお父さん。
「先生に酷いことしないよね……！？」
「ん？」
「たとえばよ、お父さんが余計なことして先生が私のこと捨てちゃったら、私は一人で子供を抱えて生きてかなきゃいけないのよ、蛍さんみたいに！娘に子供を作られて怒ってるかもしれないけど、本当に私のこと考えてくれるんなら先生に酷いことしないでよ。さっきから先生、死にそうなくらい青ざめてるわ。そりゃしょうがないかなって思って黙ってたけど、呼び出してまで怒るなんて酷いわ」
「お父さん、怒るなんて言ってないだろう？」
「でも！私たちの前では見せられないことや言えないことをするつもりなんでしょう？静はお父さんのこと凄く尊敬してるのよ。凄く上に見てるの。そんな人がいかにも怒ってそうな雰囲気の中で呼び出してきたら、恐れをなすに決まってるでしょ」
　はぁはぁ息切れしながら訴える私。お父さんは少し困った顔。先生は何か言おうとしたけど、お父さんが喋りそうなので黙っていた。
「……なら大丈夫だ。安心しなさい」
　それしか言わずにお父さんは出て行った。私は何も言い返せなかった。あの淡々とした言い方は不思議と人の抵抗を奪う。

　紫苑の部屋を出ると、俺はお父さんについて部屋へ行った。お父さんはベッドに座る。
「どうぞ」と言って椅子へ俺を促す。ここは言うことを素直に聞くべきだろう。
「失礼します！」と言って座る。姿勢を正して座す。さっき紫苑がフォローしてくれたのは実にありがたかった。実をいうと緊張で死にそうだった。シェルテスより怖い。
「まぁそんなに緊張しないで」

「は……はい。それで、お話といいますのは」
「用件は２つ。手短に言うと、ひとつ目は、娘をもらってくれますかということ」
「はい、それは本人は受け入れてるようですから、あとは親御さんさえお許しいただければ、早くにも籍を入れさせていただきたいと思っております」
　なんだか面接みたいだ。10 人面接官がいるより圧迫を受ける。圧迫面接だ、ある意味。
「わかりました。ではもう１点。離職されて、これから再就職をどうするつもりですか」
「目下求職中でして、英語を活かした翻訳コーディネーターなど出版関係の仕事を考えております。といいますのも、塾業界は今後先細りとなる業界ですので、将来性を考えるとまだ 25 という第二新卒の限界のうちに他業種に就くべきだと考えたからです」
「そうですか。英語力を活かすという点だけでなく具体的な職種も考えていると」
「はい！」
「具体的な求職活動はもうしてますか」
「はい！先日職安に行きまして、数社紹介していただき、履歴書・職務経歴書・紹介状などを送付いたしました。色好いお返事をいただきまして、明後日にも１社面接に伺うことになっております」
「うん……」お父さんは腕を組んでから解く「静君は……商社などは視野に入れなかったのかな」
「英語力ということを兼ね合わせると、いわゆる外資系ということでしょうか」
「ええ」
「それも視野には入れましたが、何分経験がありませんもので」
「経験がないのは出版も同じでしょう」
「は、はい。仰るとおりで」
「じゃあ何か隠していた別の理由があるね。それは何ですか」
　率直な聞き方をする人だ。
「えぇ……実は、外資の大きい商社では私のような経験もなく新卒でもない人間は門前払いだと思い、早い話現実的な活動範囲に入れておりませんでした。悪く言えば、戦わずして負けたということです」
「うん……」
「……はい」
「もし……経験の無さや 25 まで何していたのかとかいった社会的に不利とみなされる要素が自分になかったら、挑戦する気になっていたかな」
「仮定の話であれば、はい、勿論視野に入れていたと思います」
「社会の斜視にね、自分の才能が阻害されていると思うかな」
「いえ、そんなことは」
「謙遜しない言葉を聞かせてほしい。もし社会の斜視を通過できるパスポートがあるなら、実際そういう企業に入ってやっていける能力や気力が自分にあると思うかどうか。謙遜は

しないで答えてください」
「私は……」言葉に詰まった。どうなんだろう。やったこともないのに無責任にYESといえるのか？
「未経験なのにYESと無責任に言うことはできません。しかしながら同じ理由でNOともいえません。したがって経験を度外視しますが、気力ならお嬢さんを守るという最大級の理由があります。そして能力でしたら外交手腕、交渉能力、語学能力などを活かす職種であれば、外資の商社でも十分力を発揮することができると思います」
「うん」お父さんは頷いた「自己PRはその３点か。他には何ができる？コンピュータは？」
「ワードやエクセルでしたら授業計画で常に使っていました。資料作成に塾の経験が確実に役立ちます。HTML など汎用性の高いプログラム言語も書けます。OS やパソコンそのものについての設定方法などの基礎知識もあります」
「じゃあ最低限の編集とかもできるね」
「はい」
「ふむ……」
　お父さんはベッドから立ち上がった。
「静君、明後日は面接だったね」
「はい。頑張ります」
「いや、それなんだが。悪いがキャンセルしてくれませんか」
「は……お嬢さんの病院へ付き添うということでしょうか」
「ではなく、出社してほしいんだ」
「はぁ……といいますと」
「静君、私の会社に来ないか？」
「……はい？」
　俺は固まった。
「私の下で働いてみないか、ということです」
「そ……それは」
「社会の斜視を取り除くのは難しい。ウチは書類選考を合わせて面接を３次まで行うんだが、３度行おうと所詮合計１時間にも満たないやり取りです。それに志願者は最高のコンディションで面接に臨むものだ。その短いやり取りの中で面接官が読み取ることは限られている。失礼だが、このままでは君の能力に見合わない仕事に就くことになるだろう。面接官の斜視が君を不利に見るからだ」
「……はい」
「私は君と何度も会食し、会話をしてきた。娘から君がどんな人間であるかも聞き、レインさんの国での活躍も聞いている。新卒というだけで評価される有象無象の学生上がりより君のほうが鍛えがいがあるんだ」
「それでは、その……お父さんの会社で面接をしていただけるということでしょうか」

「いや、その必要はない。面接はいま終えました。私が面接官だよ」
　俺は無言で戸惑いながらゆっくり首を縦に振った。ど、どういう展開なんだ……？というかなんでお父さんの一存で決められるんだ？この人、まだ若いだろう。そんなこと決められる立場なのか？
「あの……つかぬ事伺いますが、お父さんの一存で決められるものなのですね」
「えぇ、役員ですから」
　俺は目を丸くした。さっき外資系の商社って言ってたよな……どのくらいの規模で何の商売をしてるか紫苑から聞いてないけど、それってデカいところなんじゃないか？そういえば昔、紫苑が一言だけ言ってたな。どっかのおっきい会社のけっこう偉い人、みたいに。でも何でこの若さで役員なんだ……？
「問題は君がこの話を受けるかどうかだ。労働条件についてはいま資料を渡します」
　お父さんは棚から茶封筒やファイルを取り出すと、ファイルの中から原紙のコピーを取り出した。そこには労働条件が書いてあったが、ざっと見た感じ、職安で見るものよりも遥かに高待遇だった。
「この条件と、娘を嫁にもらってくれるかという条件を飲んでくれるかどうか、それは静君次第だ」
「こ、後者は条件以前にむしろ私のほうから土下座してでもお許しを願いたいことです。また前者につきましては……これも一切異を挟む余地がありません。むしろ青天の霹靂で何と言葉を返せばいいのか迷っている次第です」
「なるほど。そうすると中途として雇うことになって、仕事は 22 日の月曜からになるけれど、すぐに来れますか」
「は、はい。可能です。あの、具体的な部署と言いますか、どのような仕事をするのでしょうか。それさえ伺っていないのに決めてしまってよろしいものかどうか。いえ、御社の業務内容は手元の資料で理解していますけれども、具体的な部署やなにやらはどこに配置されるのでしょうか」
「部署は総務です。だが君には渉外も企画もやってもらう。ウチは細かく部署が分かれているんですが、君には色々体験してもらいます。先ほど言ったとおり、文字通り私の下で働くことになります。つまり私直属の部下だね。紫苑が大学を出るまでには側近まで育て上げるつもりだが、不服かな」
「い、いえ！」俺は明るい顔で否定した「先ほどお嬢さんが告げたように、私はお父さん個人に心酔しております。お父さんの下で働けるならこんな嬉しいことはありません！」
「そうですか」少し嬉しそうな顔をした「ただ、私の下で働くのは厳しいよ」
「はい。覚悟します」
「ところで娘のことなんだが、静君は彼女にどれくらいの値をつける？」
「……といいますと」
「いくら年収があればあの子の夫としてふさわしいと思うかということです」

「そうですね……そういう見方をしたことはないのですが、私の前の年収よりも上だとは思います。たとえば500万とか」
「なるほど。では、私はその倍を要求したい」
　眼を丸くする俺。
「君には数年以内に1000万を稼いでもらう。私が育て上げるよ。稼いでほしいではなく、稼がせます。そういう意味だよ、大変だということは。それでも構わないかい？」
「私にその力があるのか……いえ、奮闘します！あと、お嬢さんのことなんですが、彼女が社会に出れば1000万は稼ぐと思うのです。それを嫁に迎えるというのであれば確かに年収1000万は必須なのかもしれません」
「うん。あとこれは紫苑にとっての福利厚生になると思うのだけど、あの子はアトラスの祝日を重視しているようだから、クリスマスや年末年始の代わりにメルセルやディアセルの日は必ず休ませるようにします」
「それは事情を知っている間柄ならではの福利厚生ですね。ところで、もし私を将来側近にとお考えでしたら、私がこちらに婿として住むほうが便利なのでしょうか」
「いや」お父さんは苦笑した「家の中まで部下ヅラさせてしまうのは性に合わなくてね」
　カッコいい……。惚れ直した。っていうか本当にカッコいいな、この人。この人に付いていこう。
　そしていつか時機を見て伝えよう。「本当に俺の父親だったら良かったのに」って。
「紫苑は何かと問題のある子だけれど、どうにか上手くやっていってほしい」
「はい。私のほうこそ彼女に呆れられないように善処します。ところで……お嬢さんは何か問題があるのですか。私はあまり悪い印象がないものですから。父親という立場でご覧になってはじめて気付かれるものなのでしょうか」
「あの子は少し自分なりの正義感が強すぎるところがあります。意固地なところもあるし、人を振り回すところもある。努力が過ぎてムリをしてしまうこともある。変なところで我慢を溜め込んで爆発してしまうこともある」
「さすが父親だけあってよくご理解されてるのですね。ときに、その……お嬢さんのことなのですが、どうもその……お父さんから正当にというか満足いくコミュニケーションが取れていないということでずっと悩んできたようです。それについてはどのようにお考えでしょうか」
「うーん」ベッドに座る。少し遠い目だ「紫苑は私のことを何て？」
「ええと……そうですね。とても尊敬していて良いお父さんだと思っているそうです。ただ、反応が乏しいことがあって、それで自分がどうでもいい娘なのではないかと気にしているようでした。ただ、私はこうしていま話している限り、お父さんの反応が乏しいとは思えません」
「うん……あの子は変わった娘でね、ふつうの娘なら父親にしないことをするんです。突拍子もない質問や行為で私の気を引こうとしているようです。幼稚園のころから同じでね、

この性格には手を焼いていました。あの子は兄弟がないでしょう。友達もいないようです。それで男というと私しかいなかったようです。あの子は私を父として見ながら男として見ていてね……。幼稚園や小学校のころはよくあることです。でも、あの子は私と妻がしているあらゆることを自分もしないと気の済まない性格だったんです」
「そ、それは……！」驚いた「まるきり私の体験と同じです。前妻とのことを聞いてきてはどこに行っただの何をしただのと探りを入れ、自分で思い出を塗り替えるといっては聞かないのです。あの性格は子供のころからのものだったのですか」
「えぇ。自我の凄く強い子でね。普段は大人しいのですが。私と妻の行為を全て真似ようとするのです。それが小学校の高学年になっても変わらなかったし、そのころには私と妻の行為が何であるかを理解してくる年頃でもありました。そのまま紫苑の意思を尊重していると父と娘の関係を崩してしまう。社会的に後ろ指をさされるような意味においてです。あの子はその片鱗を際どいところまで見せていました。それを危険だと思い、私は紫苑が高学年になったころには距離を取るようになりました。娘との無難な接し方が分からなくなってしまってね。私に懐いてくるのを受け入れると彼女は満足せずに次の段階へ進もうとする。だから私は距離を取ることで父と娘の関係を保ったわけです」
「そう……だったんですか。それはお嬢さんが聞いたら驚くでしょうね」
「このように、執着心や対抗意識の強さが仇になることがあります。紫苑には諸々の短所がありますが、直すなり受け入れるなり、どうか幸せにしてやってください」
　頭を下げるお父さん。俺は慌てて返事すると、これ以上ないくらい頭を下げた。最敬礼などとうに超えていた。

　そして俺は、紫苑とお腹の子供が待つ部屋へと帰っていった。

2009/ 6/27

「――リディアは？」
「えと……小学生以下は無料みたいです」
　財布から千円札を出すと、機械に通す。大人２枚の入場券を買って、園内に入る。
　東京都立川市、昭和記念公園。土曜日。俺は紫苑の片手で引いて久々の入口をくぐった。もう片方の手には乳母車。
　園内をまっすぐ歩く。左手はこもれびの池。この公園には入口が多いが、俺は一番初めに来たときにぐるっと道路を周った結果、たまたま砂川口から入ったことがあり、それ以降必ずここから入ることが習慣になっている。紫苑と行ったときも同じだったし、今回もそうだ。
　秋になると赤いコスモスが咲く一画で右に折れる。少し小高い丘になっている。立川市が一望できる丘だ。芝生が敷かれ、大きな石が置かれている。あのときのままだ。

丘に登ったらなぜかここだけ突然雲ひとつない天気になった。
「あれ……？」
手をかざしながら空を見る。誰か魔法でも使ったかのようだ。
紫苑はビニールシートを広げると、鞄を重りに使った。鞄から弁当を出す。
「先生、お昼にしましょ」
「あのさ、空が……」
「そら？」
……まぁ、いいか。
乳母車に近寄った。中には笑顔の赤ん坊がいた。最近ようやっと人間らしい顔になってきて、可愛くなってきた。
「ほーら、リディア、おいで」
乳母車に手を伸ばし、娘を抱っこする。きゃっきゃと笑う娘。涎の付いた指を動かして俺の頬にぶつけたり口の中に突っ込んできたりする。
「はいはい、良い子良い子な。ほら、リディア。見て、この景色。俺な、子供にこの景色を見せたいって思ってたんだ、ずっと……」
「えぉー？」市街に話しかけているらしい娘。
「ようやく見せることができたよ」
じーっと丘の下を見る娘。俺は娘を抱っこしなおす。
「……生まれてきてくれてありがとう」
「あぁ、その言葉、嬉しいなぁ」と後ろから紫苑が言う。
「そう？」
「うん。言い換えれば、産んでくれてありがとうってことですよね？」
「勿論」と座る。
「私もよ。産ませてくれてありがとう」
人目があるのにも関わらず俺は紫苑の唇にキスをした。
紫苑は「えへ……」と言って顔を赤くした「こんなとこぉ、恥ずかしいよぉ」
「今日は記念日だし、少し大胆に攻めても大目にみてね」
「ふふ、お昼からそんなはりきって、夜になって疲れたなんて言わないでくださいね。今日はリディアを早く寝かせちゃうから」
紫苑は色っぽく微笑む。俺は「うん……」と詰まった。少しドキドキした。
「……もうあれから３年ですね」
「あぁ、付き合ってから３年だ。出会ってから４年は経ってないけど、３年付き合ってる。３年といえば脳のホルモンが消えるころだってな。お互い変わったけど、好きなのは変わらない。気持ちが別の形に落ち着いてきたんだろうなぁ」
「私もです。だって私たちはお互いを好きになる努力をしてるから」
紫苑が手拭とサンドイッチを手渡してくる。

「そうだな」とパクつく「殆ど紫苑の努力だと思うけど」
「そんなことないですよ。２人の努力です。ねぇ、この子ができたときのこと覚えてる？」
「あぁ。印象的だったからな。センターの日だったよな。ほんとは東大受ける手筈だったのにつわりになっちまって、俺が妊娠検査薬買ってきて即陽性で。お父さんたちに話してさ」
「あのとき静、凄い青ざめてたよね」
「お父さんに殺されるかと思ったからな。でもまさかウチの会社にヘッドハントされるとは思わなかったよ」
「あのあとすぐ面接行ったんだっけ？」
「そうそう。確か、週明けに朝イチで行ったんだよ、お父さんに付いてって。それで社長に面通しされて……一応履歴書や職務経歴書なんかは持ってったっけな。面接というよりはもう話が通ってたみたいだったな。即仕事の説明やらを受けて翌日からは総務に配属されて……てんやわんやだったよ。でも社長もお父さんも紫苑のこと理解してくれてたから良かったよ。おかげで妊娠中も病院に付き添えたからね」
「そうそう。私も陽性って知ったあと、週明けくらいに病院行ったんでした。それで確か……９週くらいだったのよね。女医さんしかいないところをお父さんに紹介してもらって。先生、ちゃんと付いてきてくれたよね」
「あぁ。診断して画像を見たんだが、あそこの病院は白黒画像じゃないのな。ほら、あそこに棒を入れる検査で見た画像がさ」
「そうそう。あと、なんか画像のビデオもくれましたよね。静ったら宝物みたいに大事にして、ウチ帰って早速 DVD に焼いたんだっけ？」
「そうだった。この子との――」娘を膝に乗っける。大人しくちょこんと座る「――初めての対面だったからな。貴重な映像だよ」
「で、私は病院に行きながら大学受験して、ウチに受かったんですよね」
「結局俺と同じ大学なんだもんなぁ」
「試験のとき、高校受験と同じでまたおトイレ行きたくなって。妊娠で膀胱が圧迫されてたのかなぁ。でもあのときは我慢して我慢して……あの我慢ができなかったら落ちてました」
「はは、そんなことあったねぇ。でもさ、ほんとにウチの大学入って良かった？」
「はい。やっぱり好きな人の後を追いたいんですよ。それと……あの人の幻影も」
「あいつ、か」
「先生とあの人がしたこと、全部私で上書きしましたね」
「あぁ」俺は赤くなって頬をかく「紫苑の入学早々結構派手なことしたよな、俺ら」
「ふふ……。でも激動でしたよね、ここに至るまで」
「ん？」
「妊娠が分かったのが１月 20 日でしょ。１月末に静のお母さんたちにご挨拶にいったでし

ょ。大学の合格が決まったのが２月。３月６日の火曜日に籍を入れて、私は水月紫苑になって、17 日の土曜日に椿山荘で結婚式を挙げて……」
「あぁ、あのドレスは綺麗だったな」
「えへ……。そのあと光が丘で同居しだして……４月に入学して、７月にレインとアルシェが来て」
「驚いてたよな、２人とも。紫苑のお腹が大きくてさ」
「２人とも私が妊娠してたこと知りませんでしたもんね。レインのあの祝福ぷりったらなかったわ」
「あれは凄かったな……。もう義理のおばさんみたいな態度だったもんな、すっかり」
「ふふ。で、７月にもう動けないかなぁなんて思ってたら夏休みになって。で、８月にこの子が生まれて。夏休みは産前産後の回復に使えたから単位にも響かなかったし。ほーんとリディア、あなたって母親思いよね」
　紫苑が頬をぷにぷにする。
「産まれてわりとすぐ届けを出したよな」
　頷く紫苑。どちらでも良かったので妊娠中に子供の性別は調べなかった。分娩には立ち会った。生まれてきたのは娘だった。現代医学でも男女の区別は性器の有無で行う原始的な方法だ。俺は一生懸命ついてるかどうか探して凝視したんだけど、どうもこの子は母親と同じで貞操観念が強いようで、薄紫のへその緒でうまく女の子の部分を隠していた。俺はお尻のほうから見上げて娘だということを確認した。正直、意外だった。でもきっと息子が産まれても意外とか言ってたんだろうな。
　紫苑の出産は非常に楽だった。陣痛も短く、ころっと産んでしまった。親思いの娘だ。かなりグロテスクな状態で産まれてきた。俺には２人目の子供だが、産まれたのを見るのは初めてだった。こんなグロテスクな人間ぽくない生き物なのかと驚いたもんだ。でも、そんなことより嬉しくて嬉しくて仕方なかった。
　俺はオヤジが嫌いだが、昔からひとつ印象的な言葉があった。俺が生まれたとき、母さんの手を取って泣きながらありがとうと言ったそうだ。その言葉がずっと頭に残ってた。それを自分もしてあげたいと思っていた。蛍にはしてやれなかった。あいつから逃げたからだ。
　紫苑はあまり苦しげもなく産んでしまったが、流石に憔悴していた。俺は紫苑の手を取って、自然と泣いていた。自然と「ありがとう」という言葉が出てきた。オヤジがやったことと同じことをやろうという気持ちはもう既に忘れていた。心の底から自然と出てきた言葉だった。紫苑は「あなたの子よ」と言ってにこりと微笑んだ。その言葉が凄く嬉しかった。
　出産に立会い、誕生を見ることで、父親は言い表せないほどの愛情を子供に感じるのだなと思った。そして、同時に蛍の子への愛情は無いのだなという事実にも気付かされた。哀れなのは子供だ。２人は単なる異母兄弟だ。父親は同じなのに、母親が欠陥品か至高品

かで運命が分かれてしまった。おかげで父親の援助も受けられず、愛情も得られなくなってしまった。本人は始めから俺のことを知らないのでなんとも思わないだろうが、父親の俺からすれば憐れな話だ。こういうとき、勝手に出て行って勝手に産んだ蛍を怨む。

紫苑に名前を決めてといわれ、考えた。そういうのは紫苑がしたいものだと思っていた。そう聞いたら、蛍が勝手に名前を付けたので、自分の子は俺に付けさせたいのだそうだ。俺は色々考えた。日本語名も勿論考えたけど、どうもしっくりこなかった。

そもそも受精卵の成長からして紫苑の排卵は正常に起こっていたようで、センターでつわりが起きたのは実際に９週ごろだった。後から細かく計算したのだが、どうも一番初めのとき、つまり紫苑の処女を奪ったあのときの子供らしい。あの後排卵して受精したらしい。それがこの子だ。紫苑の処女をもらったあと、暫くは抱かなかったので、どうも初めてのときの子供だという計算になる。

紫苑の処女をもらった経緯は「シェルテス戦で死んでしまうかもしれないからしておきたい」というものだった。つまり、アトラスの存在がこの子を作ったことになる。そこで俺はこの子にアルカ名を与えることにした。

だが「レイン」など付き合いのある知人の名前だとややこしい。これも候補にはあったが、現実問題使いにくいので止めた。そこで色々考えた結果、俺はリディアという名前を選んだ。というのも、俺がシェルテスとの最終決戦で紫苑にプロポーズしたとき、紫苑の様子はリディア＝ルティアそっくりだったからだ。魔輪アルマディオを嵌め、魔杖ヴァルデを掲げ、テルテの羽衣を纏い、リディア=ルティアの手記である玲音の書を持っていた紫苑。彼女はリディア=ルティアに助けられたようなものだ。それでその名前をあやかって付けたわけだ。

俺の独断で、役所に届けるまで名前を秘密にしていた。名前を明らかにしたとき、ウチの親は不思議な名前だと言って訝っていたが、紫苑の家は事情を理解していたので良い名前だと言ってくれた。そして紫苑自身も気に入ってくれた。何より面白かったのが、紫苑は俺が名前を報告したときに、既に何か書いて折りたたんであった紙を目の前に出した。その紙を開くと、中にはリディアという名が書いてあったのだ。どうやら同じことを考えていたらしい。名前はカタカナにした。アルファベットでアルカを転写する方法もありえるが、「水月 ridia」ではおかしな気がする。そこで「水月リディア」となったわけだ。

「リディアが産まれてからは子育てに追われたよな。っていってもリディアは大人しいもんで、全然楽だったけど。夜中起こされることも少ないわ声も控えめだわで」

「私、あのころよく寝てなかった気がする。でも静、仕事忙しいのに助けてくれたよね」

腕に擦り寄ってくる紫苑。

「あれ、ポイント高いですよ、せんせ。将来ずっと言われるのよ、そういうことって」

「あー、眠いの我慢した甲斐あったわ」

「後期は夜鳴きやらで色々大変だったわ。２年になってからは私も少し慣れたから楽になったけどね」

「慣れたって、大学と子育てに？」
「そう」
「そういや大学は上手くやってるか？」
「うん。先生が色々案内してくれたから始めからすんなり入っていけたしね。１年のころは必修が多いしリディアの面倒とで忙しかったけど、この子は大人しいからほんと助かりました」
「そっか。……それにしても、もう３年生の前期も終わりだなぁ」
「うん。夏休みはリディアと一杯遊ぶわ」
「はは、いいな。学生は」
「うーん」紫苑は腕を伸ばす「私、働かなくていいのかなぁ」
「今はお母さん業のほうが仕事なんかよりずっと偉大だし大変だよ。仕事なら来年考えればいい。そのころにはリディアも３歳くらいだろ。そろそろ保育園に預けられるのかな。このままウチで母さんに見てもらってもいいけど」
「そうね。じゃあ心配しないで、いまは勉強を頑張るわ。分からないところがあったら教えてくださいね、先生」
「紫苑に教えられることなんて何も無い気がするけどな」
「ありますよー」
「そっか」
「そだ、レインが今度リディアにプレゼント持ってきてくれるって言ってましたよね」
「一昨年はまだお腹の中だったよな。去年会ったのが初めてで。もう約１歳だったから随分人間ぽくなっててさ、レイン、凄く可愛がってたな。で、プレゼントとかいってベビー服をくれたんだっけ」
「そうそう。それ着せたら凄い可愛いって。私より親ばかよ、あの子」
「かもしんないな。今年も何かくれるって言ってたけど、俺らは何をお返ししようか。行き来する日は要するにレインの誕生日なわけだから、誕生日プレゼントになるんだよな」
「ほわぁ」とリディアが鳴く。何だか面白い鳴き方をする子だ。これで一応俺たちのことを呼んでるらしい。
「こいつ、言葉覚えないな」
「言語学の言語習得で見ると遅いほうなんですか？」
「そんなことないよ。１歳 10 ヶ月だからね。喃語は半年ごろって言われるけど、時期的にはかなり長く続くし」
「まだ私たちの名前は言いませんね。「しおん」と「しずか」って発音しにくいのかな」
「摩擦音は少し難しいし、後ろ寄りになってシャ行になりやすい。まぁ、「シ」はシャ行で良いんだけど。あと、摩擦音は破擦音になりやすいんだよな。「ちゃー」とか「たぁ」とかよく言ってるよな、この子。閉鎖音で特に舌音系が多いな」
「母音も比較的「ア」ですよね」

「一番発音しやすいからな。あと、唇音も多いな。これが一番早かったと思う。「ぶー」とか言ってるもんな。「ま」っていうか……「むぁ～」とか「もぁ～」みたいな鳴き声も出すし」
「かわいいよね」
「うん。ところでさ、本当に俺らのこと名前で呼ばせるの？アルカに合わせる必要はないんじゃないか。日本語なんだし」
「先生がどうしても嫌なら止めます」
「別に嫌じゃないよ、大丈夫。ただ、将来参観日とかで名前を呼ばれても紫苑は平気？」
「そういうときは「おかあさん」って呼ばせます」
「なるほどね。あとさ、このまま行くと俺は「しずか」じゃなくて実の娘に「せんせぇ」って呼ばれそうな悪寒がする……」
　苦笑する俺をよそに紫苑は「あはは」と笑う。
「いいかも、ですよ。娘に先生って面白いですね」
「人間関係が分かりにくくて偉い混同するよ」
　紫苑は風を胸いっぱい吸い込んだ。
「静さ、少しお父さんに似てきたよね」
「そう？光栄だな。まぁあれだけ一緒にいれば似てくるかもな。紫苑、嫌か？」
「ううん。お父さんの良いとこを取ってるだけで基本は静だから好きよ」
「そうか」安心した。

　そう、俺はかつてお父さんが言ったように、お父さんの側近になった。入社後はこれでもかというほど鍛え上げられた。経理と事務以外は何でもこなした。
　そもそも、初めてお父さんから会社の名前を聞いて驚いたんだよな。そして実際行ってみてその規模に改めて驚いた。しかもお父さん自身は会社の近くに駐車場を持っていて、そこにプレジデントを停めていた。仕事中で移動するときにはこれを使うそうだ。自宅のクラウンは玩具だそうだ。
　俺はその後数ヶ月してなんかの出張のときに運転を任されたんだが、あのときは卒倒するかと思った。しかもプレジデントに乗っているのはむしろ他の同僚や上司にやっかまれないようにとの謙遜だというから驚いた。駐車場にはセンチュリーやメルセデスが見られ、さながら展示場のようだった。ハッキリ言って俺の認識レベルを超えていた。でも最近じゃ何となく俺もお父さんのレベルに考え方が染まってきて、一々驚かなくなってきた。
　表向きは総務配属だが、幹部候補ということで広範囲に仕事を与えられた。俺もかなり努力して慣れていったが、根気良く俺の力を引き伸ばしてくれたお父さんはやはり超人だ。
　正直言って年収など気にしている余裕がなかった。紫苑は大学に受かって入り、結婚だなんだをして夏にはリディアが生まれて。その間にも俺はてんやわんやで働いていたから、年収を気にする暇はなかった。だが、努力と援助のおかげで入社２年で年収は 800 万まで

昇った。かなり異例の働きだそうだ。お父さんの援助があるからだと同僚に言わせないために尋常でない努力をしたことが原因だろう。お父さんも「良い男に娘をやった」と認めてくれているし、同僚で俺を七光りとあざ笑う奴も消えた。

お父さんは色々気を利かせてくれて、俺と紫苑が疎遠にならないように配慮してくれた。激務ではあったが、比較的規則正しいスケジュールを入れてくれたし、海外出張などもできるだけ避けてくれた。夜もさすがに定時ではないものの、夕飯までには帰れるようにしてくれて、できるだけ紫苑と一緒にいる時間をくれた。但し俺は仕事を家に持ち帰ることになったが。

だが大学の勉強など既に頭にインプットされていた紫苑は妊娠中は特に暇を持て余していたので、俺が帰るとじゃれ付いてばかりだった。蛍は空気を読まなかったが、紫苑は空気を読む。

そして俺の持ち帰った仕事を見るや、これは何あれは何と色々聞いてきた。始めは相手を面倒がっていたが、紫苑が鋭い指摘をするのでそのうち仕事の話を打ち明けるようになった。実際紫苑は非常に有能で、俺が持ち帰る断片的な資料で妙案を出したり、面倒な作業を合理化する方法などをその度ごとに案出してくれた。実は俺の出世は紫苑の内助の功によるものが大きい。

どうもこれはお父さんの策のようだ。紫苑の頭では大学は暇なだけだと分かっていたようで、娘に今のうちに仕事を間接的に教えていきたいという狙いだそうだ。確かにウチの仕事を手伝っていると近い業種は勿論、大抵の上層企業で通用する経験を得るだろう。

紫苑はお父さんの狙い通り、影で能力を発揮していた。俺はますます紫苑を尊敬したし、彼女に見限られないようにもっと努力した。おかげでどうにか紫苑に負けない程度の能力を身に付けることができた。それでもやはり天才には勝てないのだが、紫苑と俺の得意分野は異なっているから俺が一方的に負けることはない。そのバランスが夫婦生活を維持していく上で役立っているようだ。

女としても紫苑は賢いようで、妊娠中も出産後も俺の気持ちを逸らせないようにしていた。アトラスから帰ってセンターまでセックスはしてなかったが、妊娠が発覚してからはしていた。安定期になるまではしないほうが良いと知っていたので避けていたのだが、うまいこと俺の空気を呼んで押して引いてを繰り返しては誘惑してきた。

この押して引いてが紫苑は巧かった。夫が浮気しないように精力を全て奪う方法ではなく、夫が妻を抱きたくなるようにする方法だ。これは大変だったはずだ。妊娠中や出産後であるにもかかわらず紫苑は清潔で小奇麗にしていたし、具合が悪かろうがだらしない格好や言動はしなかった。一緒に暮らしているのに乱れた感じがなく、俺は妻というより彼女と暮らしているかのようだった。そして紫苑はいまでもそれを続けている。

風呂に入る蛍の裸を見ても生活の１シーンとして何とも思うことがなかった。下着が見えようが胸が見えようが何とも思うことはなかったし、変な表情をして化粧を塗ったり、

寝苦しそうな寝顔を見せたり、そういうことの累積で妻に対して夫は女であるとみなさなくなっていく。

だけど紫苑はいつでも「秘密のベール」みたいのを構えていて、俺の生徒だったころに持っていた程好い距離感を保っている。いまでも紫苑のスカートが舞い上がると眼が下着を見ようと追ってしまう。蛍には「隠せよ、みっともない」と思っていたのに、紫苑には「あ、見えた、ラッキー」と思う。道行く女に思う邪念と同じ邪念を横で寝ている妻に思うというのは凄いことだ。

３年経ったいまでも紫苑を抱くのはどきどきするし、紫苑もそうだ。３年間、一度も雰囲気のない性欲のはけ口としてのセックスをしたことがない。欲を吐きたいときでも紫苑は適度な我慢をさせる。そのおあずけが紫苑を尊重することに繋がっているようだ。

おあずけが過ぎて俺が他の女と浮気しようとすると敏感に察知して、あの手この手で解消しようとする。なにせお父さんの会社だから社内で浮気はできないし、街でナンパするか風俗行くか企てても、そういうときに限って電話してきたりリディアが熱を出したなどといって呼び戻してくる。俺の気持ちを読むのが極めて巧いようだ。

そうして必然的におあずけを食らった後にセックスを許してくれるというシステムだ。俺は実はこれが半分心地良かった。というのも俺は今までは女をセックスで操るほうだったからだ。今は逆に操られている。好きなときに抱ける女というのは便利ではあるが、結局相手を最後は安く見てしまう。その見方はそのカップルの恋愛関係を最終的に崩壊させる。

それは知ってるけど、俺は男として朝起きとかやりたいときがあるわけだ。そんな発作を受け入れる女は世の中にたくさんいるが、紫苑はそれを上手く操って、浮気されないようなおあずけを作る。だからその後のセックスは却って盛り上がる。紫苑の身体を尊重すると同時に、良いセックスライフを送れている。

とはいえ、３年間で数え切れないほど抱いた。結局俺の精力が強いことが原因だ。おあずけを食らったとしても精力の最大値が大きいわけだから、かなりの時間を費やしたと思う。不思議なことに紫苑とセックスをした後は頭や身体の具合が良くなるのだ。紫苑も綺麗になると自分で言っていた。俺は仕事が快調になり、身体も健康になる。不思議だ。ジャンクセックスをしないおかげだろうな。

時間的にはかなり抱いたことになるが、それでも心地よいどきどきを今でも感じる。いつかはなくなってしまう気持ちかもしれないけど、紫苑の親を見ていると何となく大丈夫な気がする。

結局賢い女は男を賢くして、その見返りを一身に受けるわけだ。男女平等とか女性の参画などといっているが、ああいうのが負け惜しみだということがよく分かる。結局男と女は違う生き物だ。

女は男を持ち上げて、その利益をキックバックしてもらうのが最も合理的なのだ。角を立てて肩肘張って生意気な口を聞いて社会でツンとしている奴は結局負け犬なのだ。とい

うかお母さんの言葉を借りるなら、ヒトとしては仕事できて良いのかもしれないが、女としては失敗作だ。
　恐ろしいことに紫苑は女として成功品で、ヒトとしては更に成功品なのだ。このまま大学を卒業して社会に出たら俺は今以上に研鑽を積まないといけないようだ。全く、天才少女を嫁にもらうと自分を伸ばすのには良いが、とにかく努力の生活を強いられるものだ。だが俺は努力型人間なのでこの環境が心地よい。

「先生……？考え事？」
「ん？うん。結婚して良かったなって思って」
　リディアを抱っこする。きゃっきゃと笑う。
「えへ……」
「なぁ、別に怒らせたいわけじゃないけどさ、俺が万が一浮気とかしたらどうする？」
「え？」少し不快な顔。俺はかなり内心ビクビクした。こういうふざけた話題をおいそれと出させないという点でも紫苑は優れている。
「いや、ごめん。なんでもない。そんな夢を見そうになっただけ」
「「夢を見そうになった」とか、意味わかんないですけど？」
「いや、ほんと勘弁して。ただの雑念だから」
「むー……そうですね、いま先生幸せですか？」
「あぁ、勿論。仕事も満足だし、可愛い嫁さんと子供がいて、最高だ」
「じゃあ浮気するなら、よーっぽど良い女と浮気することですね」
「なんで？」
「私を失ってまで抱きたい女なんでしょ」
「……いま自己完結したんだが、多分、そんな女は存在しえないと思う」
　紫苑はにこりとして頷いた。
「まぁ、男の人の気持ちも分からないでもないしぃ」
　俺からリディアを取って、撫でながら横目で見てくる。
「私にバレなきゃねー。バレなきゃ分からないと思うのよねー？」
「いや、バレないということが考えられませんので……」
「私を失っても惜しくなければいつでも良いですよ、せんせ」
　俺はブンブン首を振った。
「やめとく」
「ふふ……。はい、「他の女」」
　ぽんとリディアを渡してくる。
「いらんわ、こんな猫猿」と笑う。
「あーっ、猫猿って何よ。ひどいパパですねー、リディア。ねぇ、愛情足りないよね？」
「足りてるよ……足りてるだろ」

「そうかなぁ。じゃあ、ちゅーしてあげてよ。ちゅー」
　ぐーっと頭を近付けてくる紫苑。俺は「やめろって」と言いながら顔をそむけるが、無理やり猫猿を押し付けてくる。
「あのなぁ……口が涎だらけになっただろ」
「別に愛娘のなら汚くないでしょ？ねー、リディアたん」
　紫苑は娘にキスをした。よく汚ないと思わないなと思ったが、言うと怒るので止めた。
　そのときケータイが鳴った。お父さんだ。紫苑が立川の景色を見やる。無表情だ。
「はい」
　リディアが「あぅー」と不安そうな顔をする。電話が鳴ると俺がいなくなっていまうということがインプットされてるようだ。リディアにとって俺のケータイは敵らしい。
「はい……え、確か月末でご納得いただいているはずですが。……えぇ……あぁ、先方の」
　俺は横を向いて紫苑に「ごめん」と手を上げる。
「えぇ、はい、分かりました。今からですと２時間を見ていただくことになると思うのですが。はい、あ、いま立川なんです。えぇ、車で……。そう、紫苑は免許ないから電車に乗るわけにはいきませんし」
　横で会話を聞いていた紫苑は「ちょっと貸してください」と言って手を出す。俺は「え？」と言いながらもケータイを半分もぎ取られた。
「あ、お父さん？紫苑よ。……うん、元気よ。……うん、幸せ。とっても優しくしてくれるの。でね、仕事の件なんだけど。そうなることは予想済みだったから、対応の仕方をメールにして今朝お父さんのパソコンに送っておいたよ」
　は？　思わず固まる。
「そう……あ、あった？うん、それ。静いなくても大丈夫でしょ？先生は今日忙しいのよ、紫苑サービスで。会社なんか行ってる暇ないから。じゃあ気をつけてね。今度リディア連れてまた遊びにいくよ」
　ピッとケータイを切ってしまう。パタンと閉じて俺にケータイを渡す。俺が無言で受け取ると、すっと手を伸ばして「足が疲れちゃって立てないの」と言ってきた。俺は立ち上がると紫苑の手を引いた。
「お前……大学３年のガキじゃないわ」
「まぁ、先生の奥さんですから」と微笑む。

　乳母車を紫苑が押す。俺はリディアを抱いて歩く。右手に持ったガラガラを振るリディア。非常に経済的な子で、玩具が壊れるまで飽きずに遊んでくれる。
　トイザらスで色々買おうとするとむしろ俺が紫苑にたしなめられてしまう。こないだも言われたな、「もぅ、ダメですよ。玩具はいっこまでです、先生」って。どっちが子供だか。
　俺は丘を振り向いて止まる。久々の胸痛が起こる。最近めっきり思い出すこともなくなった人間を思い出す。あのときの俺はあいつと愛し合っていて、死以外に別れをもたらす

ものなんて無いって信じてた。

あの丘から遠くの景色を見て、いつか子供をここに連れてきたいなんて思ってた。トイザらスなんかで玩具買ってやりたいって思ってた。あのころの俺が今の俺を見たら何て言うだろう。そしたらあいつはどう思っただろう。

いま、蛍と俺の子供は何をしてるんだろう。お嬢様の紫苑は頭角を現す俺の庇護を受け、親と夫から２重の庇護を受けている。娘のリディアはその恩恵を直接受けている。多大なコネのおかげで、風邪を引けば近所の町医者などでなく大病院で待つことなく見てもらえる。栄養も偏りなく受け、すくすく育っている。金の心配もない。紫苑が適度に厳しいので躾もしっかりしている。そして何より父親が間近にいて常に守ってやっている。これによって子供が受ける安心感というのは大きいだろう。俺が部屋からいなくなるだけで泣き出すリディアを見ているとその考えは確信に変わる。

蛍は何をしているんだろう。子供はどんな目に合っているんだろう。

リディアお姫さまの顔を見る。俺がいうのもなんだが、かわいすぎる。俺自身美形だし、そこに紫苑を加えたわけだから、この可愛い猫猿は将来お嬢様アイドルやスチュワーデスやアナウンサーにでもなってくれることだろう。

はぁとため息を吐く。本当にもう一人の子との差が辛い。子供に罪はないのに、母親が愚かだったために不遇を背負わさせてしまった。

ふつう女が出て行くというのは男を見限ったからなんだよな。「ダメだ、この男は芽がないわ」って。女は鼻が良いから大抵その勘は当たるわけだ。ただ、女としての狡猾さが足りなかった蛍――単に人間的に駄目だった蛍は、鼻が良くなかった。俺は蛍が去って自暴自棄になるどころか、むしろ前より遥かに良い人生を送っている。

あれから蛍は連絡をしてこないし、俺からもしていない。もう引っ越してしまっていて消息が取れない可能性もあるし、引っ越してなくともコンタクトなど取るはずもない。子供たちの将来はどうなるのだろう。

いっそ蛍から子供を引き剥がすことも考えたのだが、やはり出産に立ち会わなかった子供に愛情も責任も義務も一切感じられない。紫苑に告げたら「あの女が代わりに責任取るっていう条件で逃げてったんだから仕方ないです」とハッキリ言われた。紫苑は蛍を毛嫌いしていて、子供に対しても決して暖かくない。冷酷な態度を取るとしたらそれは専ら蛍に向けたもので、他の人間に対しては紫苑は基本的に優しい。よほど蛍のことが嫌いなのだろう。そういえば蛍と違って「あの人嫌い」みたいな台詞を殆ど聞いたことがないな。弱音も殆ど吐かないし、愚痴もない。

蛍はこれからも呪いとして俺と紫苑の心の中に勝手に巣くうだろう。蛍の中で俺の幻影が呪いとして付き纏うように、俺の中でも呪縛霊となって生き続ける。全く迷惑な話だ。それにしても巻き込まれただけの紫苑は不憫だ。蛍を嫌う気持ちはもっともだ。

あいつ……幸せになれたのかな。俺は……少なくともあいつと会って……幸せだったな。そして不思議なことに別れたら別れたで逆に幸せになったな。いてほしい間だけいてくれ

て、いらなくなったら消えてってくれた――そういう風にも考えられる。俺の幸福計を見る限りはその推論は正しい。結局あいつが一人で不幸を背負ったってことか。あいつさえあんな態度を取らなければいくらでも考慮してやったのに。経済的にも社会的にも。だがもう遅い。どこまでもバカな女だった。
　でも……一番好きだったな。打算なしに一番愛してくれたから。

「先生、あのね……」
　紫苑がぽつぽつと喋りだす。
「ん？」
「今日ね、一回帰ってリディアを置いてっていいかなぁ？」
「母さんに見てもらうの？頼んでみるけど」
「行きたいところがあるんです」
「いいよ。どこ？」
　紫苑はガラガラと乳母車を押す。
「……買ってほしいものがあるんです」
「うん……？」
　丘を降りたところで止まる紫苑。
「べっこうの髪飾り」
「……え」
「夜、池のほとりで私の髪に挿してください」
　俺は不意に左手を口元に当てた。もうとっくに忘れたようなことを一瞬で思い出すと、息が止まりそうになった。
「終わったら、久々に夜歩きましょうよ。ちょうど見ごろな時期ですもんね。髪飾りの池にはいないけど、あっちの池ならきっといるわ。そのまま夜はスイートで過ごしませんか。外から来たお客さんたちが帰ったら探しにいきましょ。そしたらね、私、朱塗りの橋の上でこう訊くの……」
　紫苑はリディアを挟むようにして、抱き付いてきた。
ᒐcɔᐱ ᔆ>cl ᑕa eᑐ cᑐe Veeᔑ le ᐱɔᐱ ᔑ-> ᐠ-ᐱ ᑐɔᑐᑐɔ ᐱ-ᐱ….ᔆ
「え……いまなんて？」
　紫苑は小さく首を振ると、耳元でそっと囁いた。
「ほたる、みれた？」

2027 / 12 / 19

　東京都港区白金台の一軒屋。
　日曜日、深夜２時。

39 歳の水月紫苑は自室に居た。部屋の照明を消し、窓から入る遠くの街灯の灯りを頬に受け、ベッドに半身を起こして横たわっていた。その眼はまっすぐ闇を見ている。

部屋は広い。10 畳はある。豪華なベッド。絢爛なカーペット。装飾品も多く置いてある。

大きくため息をついた。それはそれは長いため息だった。

「私……」

思い出していた。今までのことを。

私は、産まれた。裕福な親の一人娘としてこの世に送り出された。

最古の記憶は埼玉県の市ですらない小さな町。親は金持ちのくせに小さな家で満足して幸せに暮らしていた。私は私立にもいかず、公立の学校に通った。

私は幼いころから知能が高く、兄弟もいなかったこともあり、同い年の子供と接することがなかった。友人というものの作り方を知らぬまま、私は小中学へあがった。この性格はその後も変わることがなかった。

高校は公立受験に失敗し、埼玉の私立へ入った。そのころの私は物語に憧れていて、今では考えられないような強い信念を持って、自分が異世界で活躍する夢を見ていた。

普通と異なるのはその夢が叶ったことだ。高３で異世界の悪魔に見初められ、異世界に行って汚職高官を魔法で倒した。あのころは魔法があったのだ、この私に。

悪魔は私を元の時間に返し、私はもう一度高３を過ごした。２回目の 17 歳だった。母の薦めで予備校に通い、受験勉強をした。そこで夫の水月静に出会った。夫は予備校の教師をしていた。男を知らない私は夫に魅了され、電撃的速度で付き合うことになった。夫はバツ１の子持ちだったが、当時子供だった私は深く気に留めなかった。

夏に異世界でできた友達が地球にやってきた。月の悪魔に襲われ、避難してきたのだ。私と夫と彼女は地球と異世界を行き来し、異世界の神から託された道具を使って悪魔を倒した。悪魔は強かったが、夫や彼女の助力でどうにか倒せた。悪魔を倒したとき、私は夫から異世界の言葉でプロポーズを受けた。彼のことが盲目的に好きだった私は心の底から喜んでその場で承諾した。

悪魔を倒して地球に帰ったあと、受験になった。東大を受けるためにセンターを受けようとした日に私は自分が妊娠していることを知った。それで夫と「でき婚」をした。18 で結婚。その夏には出産。18 歳のときの娘だった。

私も夫も異世界に傾倒していたから、娘には異世界の言葉を基にしてリディアという名前を付けた。夫は異世界に行ったせいで教師を追われたが、父に拾ってもらい、逆玉な再就職を果たした。

一方、私は夫の家に嫁ぎ、夫の大学に進学し、夏休みに娘のリディアを産んだ。義母に娘を育ててもらいながら大学へ行った。夫は入社５年で年収 1000 万になった。夫自身の努力も大きいが、実際には父と私の支えが効を奏した。

私は大学を卒業すると貿易会社に勤めた。父の会社へ行くのを避けたのは、そこが潰れ

れば一族郎党、路頭に迷うことになるからだ。娘は相変わらず義母に見てもらっていた。
私の仕事はハードだったが、それは夫もそうだった。徐々に会う時間は減っていった。収入は十分にあったので、娘が５歳のときにこの家に越してきた。私は大きな家など欲しくなかったが、プライドの高い夫がこの家をほしがった。脚を伸ばせる広い風呂だの、会社に近い都内だの、人に威張れる白金など、そんなどうでもいいことにこだわっていた。娘にはベビーシッターをつけ、小学校から私立に通わせた。自分が東大出でないことを気にしていたのか、娘を東大に入れようと小学校のころから英才教育に励んだ。だがそれは娘のためではなく、東大出の娘を持つ父になりたかったからだ。

異世界の友人レインは引っ越してからも毎年１回会っていた。レインは私の父のことを好きだったが、18 のときに振られた。しかしその後も思いを引きずり続けていた。23 のとき、レインは再度父に言い寄ったが、やはり拒絶された。傷心のレインを慰めたのは夫だった。夫は優しい言葉をかけると、こともあろうに彼女の唇を奪った。
そのころのレインは私に嫉妬をしていた。自分は親友の父親しか愛せず、他の男を好きになれない。そのくせ同い年の親友は夫を持ち、子まで持ち、幸せに暮らしている。親友の父は何年思い続けても振り向いてくれない。やがて彼女の中で父は憎悪の対象へ変わっていった。私への嫉妬のせいで、その憎悪は私へも向いた。
レインは私から幸せを奪うことで不幸な自分を慰めようとした。夫はレインの気持ちを全て知った上で彼女に言い寄った。唇を奪われたレインは戸惑いながら少し拒絶を示した。彼女は 23 歳にして男知らずだったけど、親友を裏切るには十分狡猾で、しなを作ると夫を誘った。利害の一致した２人は、よりによって玩具の置いてある幼い私の娘のベッドで愛し合った。どうして私がそんなことを知っているのか。
――見ていたからよ。全てを。
私はレインが来ていることを知って５歳になるリディアを連れて娘の部屋に行った。ドアが少し開いていて、そこで泣いているレインと慰める夫を見つけた。ただならぬ雰囲気を感じた私は娘の口を押さえ、息を呑んでいた。すると２人がキスをして抱き合い、服を脱いでいった。
髪を２つに結わいた幼い娘は自分の父のしている動きがおかしいと思ったのか、塞がれた口の下でくすくす笑っていた。その笑顔を私に向けたとき、私は一瞬娘に殺意を覚えた。首を絞めて、二度と笑えない肉の塊に戻してやろうかと思った。そのときはの私はまだ夫の愛をこの世で一番大切なものと信じていたかったのだ。
私は娘のベッドの上でレインの身体を求める夫をただひたすら見ていた。何も言えずに涙を零しながら見ていた。夫が私の親友の中で果てるまで、私は片手で自分の口を押さえ、もう片方の手で娘の口を押さえていた。
夫が果てるとレインは処女のくせに、かいがいしく後の処理までしてやっていた。夫のものには彼女の血が付いていた。レインは痛くないのか、そんな感覚も失ってしまったの

か、恍惚とした表情だった。

娘は私が泣いているのを見て、心配そうに私の手を握った。娘は父がいけないことをしているということ、母である私を悲しませていることを理解したようだ。そして私のために涙を流した。この瞬間、私はこの子だけはなんとしても守らなければならないと初めて思うようになった。

私は気付かれないようにその場を去った。レインが後から会いに来たが、具合が悪いことにして帰ってもらった。その次の年、レインは来なかった。それ以降、私は彼女と会うことがなかった。こちらから行くこともなかった。

原因は知っていた。夫との行為で彼女は妊娠したのだ。私に会わす顔もなく、彼女は私の前から姿を消した。そして私も二度と異世界に行くことがなかった。レインは異世界で夫の子供を産み、シングルマザーになったようだ。子供は男の子で、悪魔に言わせれば、レインはその息子に愛情を注ぐことを生きがいとしたそうだ。だが私への罪の意識が祟って、元々弱かった身体を更に弱らせてしまった。お産で身体を悪くしたことも重なって、結局は 28 歳で肺を悪くして死んでしまったそうだ。

夫との関係は私が仕事を始めてから徐々に冷えていった。夫はプライドが高く繊細だ。扱いは特殊だが、コツを掴めば簡単だ。まずはプライドを傷つけないこと、そして被害妄想を起こさせる誤解を招かないこと。無言でいたり馬鹿な対処をすると夫はすぐ不機嫌になる。私は頭が良かったから夫を怒らせることはまずなかった。これを守っていれば夫は機嫌が良くなるからだ。

ところが私は徐々にどうして自分が夫に合わせなければならないのだろうと考えるようになっていった。強くそう思うようになったのは 35 を越えてからだが、片鱗はレインの一件があったころに既に見られた。

夫は気をもませる人間だ。会社でも部下は夫を怒らせないように機嫌を損ねないようにビクビクしているらしい。私は彼の手綱を上手く引くことで比較的良好な関係を保っていたが、徐々になぜそのような労力を割かなければならないのかと考えるように変化していった。

私の努力のおかげで、夫は私に対して基本的に優しかった。私が上手く操るので、怒鳴ったり暴れたりすることはなかったし、私が演技の過程でわざと引っ叩かせたのを除いて、向こうから暴力を振るうようなことは一切なかった。私が風邪を引けば心配してくれたし、たまにセックスも求めてきた。私も子供が小さい頃は自分から夫を求めていた。

だけど徐々に夫と接する時間は減り、夫婦の関係は悪化していった。夫はそれを心配し、私に何度か仕事を辞めるように打診した。だが、私に能力があることを認めていた夫は強くは推薦しなかった。自分より優れている妻が働くことを止めるのは気が引けたようだ。

私は入社して数年目は夫が本気で望めば辞めてもいいと思っていた。だがレインの一件があってから、素直に従えなくなった。レインによるショックを忘れるために仕事に打ち

込んだからだ。

そしてもうひとつ大きな衝撃があった。リディアが７歳のころだった。ある日、私は娘とお風呂に入っていた。娘がやたら指で性器を掻くので注意した。すると「いたいの」と言うので近付いて見た。性器が少し赤くなっていた。かぶれたのだろうかと始めは思った。だが外側よりも中が痛いというので私は不信に思って娘の性器を開いた。

埋もれた陰唇を開いてみると、膣口の周りが赤く腫れていた。トイレが終わったら前から後ろに拭くように教育してあったので不思議だった。それでも私は感染症かと思って医者に連れていった。ただの炎症だった。

その後、そんなことを忘れたころに、それは起こった。ある日、私は買い物をしに外を歩いていた。９歳になったばかりの娘は歩きながらスカートのポケットに手を入れてもぞもぞと手を動かしていた。自慰行為だった。私が見てないと思うと、スカートを直すふりをしてスカートの上から手で性器を押したりしていた。それはチック症の子供がヘンな声を出すのを我慢できないのと同じような印象を与えた。

私は家に帰って悩んだ。夫とはますます会話が少なくなっていたので相談できなかった。医者に相談するのも恥ずかしかった。悩んだ末、娘に率直に止めるように言ってみた。すると娘は「でも静がしてくれて気持ちいいのよ」と答えた。意味を理解できない私に向かってリディアは「静が良いって言ってるのに紫苑は嫌なの？」と付け足した。

私はできるだけ平静を装って、夫が娘に何を許可しているのかを聞き出した。そしてそれが許可ではないということを知った。娘は悪びれもせず、これはお父さんとの秘密の遊びで、お友達やお母さんには言っちゃいけないことだと教わったと言った。震えを隠しつつ、お父さんは何をしてくれるのと聞いてみたら、ここを触ったり舐めたりしてくれるのと答えた。

驚きもさることながら、９歳の娘になぜ善悪の判断が付かないのか、私は不思議に思った。すると娘は４歳か５歳くらいのときからこうしてもらっていると答えた。当たり前に行われていた２人だけの秘密の行為のせいで、娘はそれが何を意味するのか少しも理解していなかった。

私は何でもないことのように娘に更なる詳細を聞いた。そして少なくとも４歳か５歳のころから性器をあてがわれ、数年前からは入れられていたということを知った。精子という言葉を勿論知ることのない娘は無邪気に白いねばねばという言葉を使っていた。

そんなことをしてはいけない、させてはいけない。私は娘に言いたかった。だが、それがいけないことだと知ったら……それの意味するところを知ったら、既に９歳になっていた娘の自我は今後どうなってしまうのだろう。５歳くらいならまだうやむやにできた。だが９歳では遅かった。

かといって私は夫を問い詰めることもできなかった。レインのときと同じだ。会話は減っていてセックスもしていなかった。愛情はもう殆ど感じていなかった。それでも夫と別

れなかったのはリディアを片親にしたくなかったからだ。どんな男でも父親だ。父親の資格がなかろうと、娘の社会的な肩書きに傷をつけないため、父親であるという名義さえ貸してくれればそれで良かった。

私は誰にも相談できず、時が過ぎていくのを許した。考えるとノイローゼになってしまうので、仕事に打ち込んだ。おかげで収入は増えていったが、使う機会は減っていった。

善悪を騙されてきた娘だが、12 歳で中学に入ったころには父親の行為が何かおかしいということにようやく気付いたようだ。ちょうどそのころ娘は初潮を迎え、私は戦慄を覚えた。もし夫がまだ娘に手を出し続けていたとしたらと考えると恐ろしくなった。

父親の行為がおかしいと気付いた娘は徐々にノイローゼになっていったようだが、私に相談することはなく、私も何も言わなかった。時が解決してくれると目を瞑って逃げていた。私は何もしてあげることができず、ひたすら毎日テーブルの上に２万円を置いて家を出た。どこへなりと遊びにいって泊まっていられるだけのお金を提供した。毎日どこかに避難していられるだけのお金を置いてきた。

でも娘は私と同じく友人のできない子で、非常に人見知りが激しかった。家出をする勇気もなく、夜の街へ出ることなど考えることもできないほど内気な子だった。夫の凶行でさえ、娘にとっては数少ない他者との交流だった。思うに、娘は夫の行為が悪と知る前は、むしろそれを望んでいた節がある。閉鎖空間とはこんなにも人間の理性を歪めてしまうものなのかと悲観に呉れた。

親の私から見ても美少女だったリディアは街に出るたび人に見られた。スカウトも何度も受けた。芸能プロダクションからの話も多かった。だが引っ込み思案な娘はそれを全て断ったし、人に見られることを恐れて視線恐怖症になった。

そんな娘にとってテーブルの上に毎日置かれる２万円はまるで意味のないものだった。私は毎日お金がテーブルから消えているのを見て、娘が避難しているものだと思っていた。ところが、娘はそのお金で捨て猫なんかに餌をやっていたらしい。

ホームレスにもお金を寄付していたようだ。視線恐怖症のため、彼らがビニールの住処から出て行った隙を狙って汚い缶の中にお札を入れて、逃げていったそうだ。無責任な人の捨てたゴミを拾ってゴミ箱に捨てたり、怪我をした動物を助けて病院に連れていったり……。そんなことのために私が稼いで与えた避難金を使っていたらしい。

そして家に帰っては父親からの虐待を受けていたようだ。といっても中学に入るまでは何も知らずに、恐らく半ば望む形で無邪気に甘受していたようだ。場所は娘の部屋が最も多かったが、私の目があるときは入浴中が多かったし、トイレも使っていたようだ。

娘は夫の意向で私立の名門中学に通わされ、名門女子大生の家庭教師を付けられた。流石の夫も家庭教師がいる間は手を出せなかったようだ。夫は外面がいいので不用意なことはしないからだ。

中学２年、３年と進んでも娘は父親から性的虐待を受け続けていたようだ。そのころにはとうに娘もその行為がいけないことだということを知っていた。だから相当苦しんだと

思う。娘は幼稚な慈愛行動を続けていたが、それは汚れた自分を浄化するためのおためごかしだったのだろう。自殺をしないかが不安で仕方なかったが、お互い言い出せないまま、或いは言い出す暇もないまま時間が流れていった。

娘がある程度大きくなると、夫は私を求めなくなった。私がもはや望まなかったこともあるが、それ以前に、夫は私より若くて可愛い実の娘で性欲を満たしていたからだ。ただ、私から娘に突然移行したわけではない。夫は娘を抱いた身体のまま私を抱いたことがある。私はそうと気づきながらも、やはり何も言い出せないでいた。夫の口から事実を聞きたくなかった。

夫は娘の初潮後は用意周到に避妊具まで使用して、娘を妊娠させないように配慮していたようだ。私は何度かゴミの中に使い終わったコンドームを見つけたことがある。この家の中で、妻の私以外の女に使用されたコンドームがあること自体不可思議なのに、その相手が私の娘だというのだから皮肉だ。夫と娘の使い終わったコンドームを捨てに行くときの惨めさは何にも表現しがたかった。

娘は中３の初夏に妊娠した。14 歳だった。夫は娘の生理周期を測り、日によって避妊具を使っていなかったらしい。妊娠していることを知った夫は反省するどころか避妊具を一切使わなくなったようだ。

私が娘の妊娠に気付いたとき、彼女は既に 15 歳になっていた。お互い隠せないことを知った私とリディア。ついに私はリディアが妊娠していることを指摘した。だが、おなかの子供の父親が誰であるかは訊かなかった。私は同年代の恋人がいるのだろうという嘘の推測をした。娘は私の嘘に乗った。娘は私に気遣いをしていた。自分さえ我慢すれば親は離婚せず、この家は表向き幸せだと考えていたようだ。

私は子供をおろすことを薦めた。娘は大人しく従った。しかしおろすには時期が遅かった。13 週をとうに越えていたので母体に負荷がかかってしまった。どうにか中絶はできたものの、娘は一生子供を作れない身体になってしまった。

高校に進学した娘は思春期の真っ只中だったこともあり、ついにタガが外れてしまった。ノイローゼになって病に臥せってしまい、学校にも行けなくなった。それでも夫は凶行を止めなかったし、娘も拒まなかった。むしろ夫は娘が妊娠しなくなったことを知って好都合と考えたようだ。

だが高校２年を最後に、夫は自分の身を案じたのか、ついに娘に手を出さなくなった。どうも夫の中では高校２年というのがある意味里程標だったようだ。私が夫に抱かれたのは高校３年のときだった。夫は娘を抱くことで、出会う前の私を抱く錯覚を覚えていたようだ。若いころの全ての年齢の私を抱いてみたかったらしい。高校２年まで私の写し子を抱けば、夫の中で自己満足の補完行為は満了する。娘は補完作業にずっと付き合わされてきたわけだ。

恐らく娘に記憶が残っている４歳より前から夫の行為は始まっていたのだろう。娘は実

の父の凶行からようやく逃れられたが、彼女が払った代償はあまりに大きいものだった。

娘は家に引き篭もって絵と小説を書き続けた。その話は全て家族がテーマであり、必ず主人公は女で、最後は子供を持つか否かで人生の選択を迫られるというものだった。外で遊ぶことも家で暴れることも知らない娘は架空の話を作って架空の幸せな人間に自分を重ねたり、或いは架空の人間を不幸のどん底に叩き落すことで苦痛を紛らわせていた。

幸いだったのは娘が死を極端に恐れる子だったことだ。自殺をしなかったのはそのおかげだ。特に中絶を経験してそれは強まった。医者は娘の膣に棒を入れて、生きようとしている赤ん坊のなりそこないの頭を潰し、その死体をゴミのように掻き出した。それを半分見ていた娘は重いトラウマを抱えて更に死を恐れるようになった。だから自殺だけはしないでいてくれた。

だが、自傷行動は度々見られた。手首に始まり、見えない腿や忌々しい性器を切ったり焼いたりした。そして最後は父親を無自覚にも魅了してしまった美しい顔を傷つけてしまった。それはとても小さな傷だったが、それを見た私は気が狂いそうになった。

娘は高校を中退すると、大検で大学受験をした。親に似て知能が高い娘は難なく大学に進学した。ところが人付き合いのできない娘は大学でも居場所がなかった。文学部の日本語文学科に所属し、一日中図書館に引き篭もり、家には寄り付かなくなった。大学に入って初めて彼女は逃げ場所を得たが、それは図書館でしかなかった。

そして３ヶ月前、娘は 20 歳になった。年明けには成人式で着物を着せる。

私はとても健康な少女時代を過ごしたが、過労と心労のせいであちこち身体を悪くした。自分の母と同じく、年を取っても若くて綺麗だったが、ストレスは酷いもので、毎日のように腹痛に襲われていた。

娘が大学に入った 18 歳のころ、私は職場で一人の同僚を男性として見るようになった。娘が妊娠して気弱になっていたころから親身にしていた男性で、まるで私のお父さんのような人だった。収入もよく、中身もしっかりしている。性格も見た目も似ている。年も私より３つ上なだけだった。彼とはなぜか気が合い、よく話すようになった。

リディアが 18 歳になったころ、私は彼に抱かれた。最後に夫に抱かれたのは随分前だった。セックスの快楽を久々に取り戻した私は身体が芯から溶けるくらい彼を激しく求めた。

かつて夫がくれた高価な結婚指輪を外し、ベッドサイドに置いて彼を受け入れる瞬間が最高の快楽だった。彼が私の奥まで入ってきたとき、私は心中で笑いながら永遠の輝きを放つ金の指輪を皮肉気に見て、心の中で呟いた。――ざまあみろ、と。

彼とのセックスは激しく、連夜に及んだ。夫は私の浮気に気付いているのか知らないが、何も言ってこなかった。たとえ私の帰りが遅かろうと何も。もう夫には私など目にも入っていないようだった。

娘が性欲の処理に使えないと分かるや否や、夫はノイローゼになった娘に見向きもしなくなった。どうやら街へ出ては札を見せ付けて娘と同じくらいの年の少女をとっかえひっ

かえ抱いていたらしい。
その上関連会社の受付嬢を何人か愛人にしているようだ。その見た目と言葉遣いを活かし、女を金で釣るどころか、むしろある女には逆に貢がせてさえいるらしい。
娘が 20 歳になったころ、私はつわりに襲われた。不倫相手の子を妊娠したのだ。子供を産めない憐れな娘の姿を見てきた私は子供のありがたみを知っていた。そして彼を愛していた。だからこの子を産みたいと思った。
――それには夫が邪魔だった。

どんなに夫が娘に酷いことをしていようが、夫が娘を虐待した証拠はない。残念なことに私が世間への露呈を恐れて、あらゆる証拠を隠滅してきたからだ。手記すら残っていないし、中絶のときの同意書も「父親」の欄には架空の名前を書いて私が署名した。娘は夫ではなく、架空の男性の子を妊娠して中絶したことになっている。夫と娘が関係を持っていた証拠は一切ない。私も娘も相談すらしなかったのだ。
夫が何か証拠を残していないかと部屋を漁ったが、出てきた証拠は全て私がかつて訪れた異世界の言語アルカで書かれていた。アルカに関する資料はない。この地球で私と夫と娘のみが知る言語であり、訳本や辞書がないため、法的効力がないのは明らかだった。
結局いま離婚すれば私が不貞を働いたということで不利に離婚されてしまう。娘に乱暴を働き、街で少女を買う夫に対し、私は法廷で負けてしまうのか。夫の愛人を暴いたところで私も不貞を働いているのだから結局痛み分けだ。そんなことが許されていいのか。
長年に渡って私や娘を喰らい続け、外では理想の主人のような顔をしてきた夫、静。貞淑な妻と美しい素直な娘のいる豪邸に高級車で帰る日々。人に羨まれる人生を送ってきた静は他人を食い物にし、妻や娘まで犠牲にして好き勝手してきたくせに、一切の報いを受けなかった。
一方、私はこのまま行けば、やり手の静に上手く立ち回られ、痛み分けの離婚に応じさせられるだろう。私は不貞を働いた女として社会的信用を失う。仕事も家庭も愛する彼も失ってしまう。それは嫌だ。

だから私は静を殺すことにした。

私は夫に話しかけた。表向きは仲の良い夫婦だ。休みが重なれば買い物も一緒に行く。リディアが少し大きくなってから旅行なんて行ったことがない。リディアも 20 歳になったことだし、２人で旅行に行かないかと持ちかけた。
静は訝ってたけど、断る理由を思いつかず、了承した。そして中途半端なこの時期に休暇を取って新潟の別荘へ行った。11 月 27 日のことだった。
別荘には地下室があって、そこはシェルターの役目も果たす。鍵は外から掛けることはできるが、中からは開けられない。部屋の中には窓も何もない。外に出ることはできない。

密閉されてしまうと酸素も殆ど供給されない。雪の下なので当然外にも出れない。

私は静と食事をし、過去のことを語った。21 年前の今日、高校生だった私は静に処女を捧げた。そしてちょうどそのときの交わりで娘を授かった。全てはこの日に遡る。私は静の優しさを褒め、結婚と出産の思い出を語り、幸せを語った。

最初は訝っていたものの、私が関係を修復したいと思っていると誤解して、気を良くしたようだ。私はワインを開け、静を酔わせた。そしてベッドに誘って最後のセックスをした。既に他の男の子供を妊娠していることも知らずに、静は激しく私の身体を突き立てた。気持ち悪いのを我慢しながら、私は嘘の喘ぎを漏らした。嘘の笑顔を作り、何度も何度も「愛しているわ」と耳元で嘘を囁いた。久しぶりのセックスは激しく、静は私の中に何度も無意味な遺伝子を流し込んだ。貴方の資産と同じくらい、たとえ何億の遺伝子を放とうとも、貴方の遺伝子が着床することはもうないのにね。私の中では愛する彼の受精卵が育まれているんだから。

私は静を褒めちぎった。そして再度ワインに口をつけた。ワインはすっかり温まっていて、私は可愛く我侭を言った。冷蔵庫など必要ないこの別荘で、適度に冷やすには地下室が一番だ。

セックスの最中、私は最後から２番目のお願いをした。「私の中で出して」とか「私の中でいって」などと叫んで。

最後の交わりが終わると、私は静に最後のお願いをした。

「ワインを地下室で冷やしてきて」……と。

静は気を良くしていた。もしかしたらこのくらいのセックスですっかり私との溝が埋まったなどと思っていたのではないか。だとしたら笑えるくらい愚かな生き物ね。静は言われるままに地下室へ行った。私はそっと後を付けて彼が入るのを確認すると、地獄の門を閉じた。別れの言葉も言わずに閉じた。このことが彼のトラウマを引き出すと知っていたから。

静の慌てる声が聞こえる。始めは何をされたか分からないようだった。私は何も言わなかった。彼は始めはからかうなと笑っていたが、やがて怒り、怒鳴った。そして今度は頼み、懇願し、謝り、泣き叫んだ。私が外にいないものと思って発狂したように叫んだ。どんなに叫ぼうと私は応えず、扉の向こうでくすくす笑いながらそれを聞いていた。

かつて静が結婚していた蛍という女は静の元を逃れた際に、呼びかけ続ける静の悲痛な叫びを一切無視したという。静にはその無視が最も堪えたそうだ。この人は無視をされるのが一番嫌いなのだ。好きの反対は無関心。嫌いではない。

蛍は静の子供を産んで育てていたらしい。私は気になっていたのでちょくちょく探偵を遣っては調べさせていた。予想通り、蛍は不幸で惨めな生活をしていた。そして必死になって不幸を幸せだと思い込もうとしていた。

だが、身体を壊して病気がちになり、やがてひょんなことから死んでしまった。惨めな

最期だった。蛍の死、前妻の死を静に伝えたら「そうか」とだけ言っていた。

地獄の入口で静が叫ぶ。私は無視した。彼の色とりどりに変わっていく声が面白かった。

階段を登る。別荘の中や車の中を全て片付け整理する。私が来た痕跡のないように。そしてくすねておいた彼の愛人の所有物を散らばせておいた。

もう一度、音を立てずに地下室へ戻る。まだ彼は面白い声を立てている。リディアが、私の娘がノイローゼになって発狂したように、この男が発狂するのを聞いてみたかった。だが、それは案外簡単だった。静はあっさりと発狂した。閉じ込められたことに対して身に覚えがあったからだろう。

私を罵倒し、何もできない状態なのに無意味に私を脅迫し、しまいには過去の過ちをくどくどと謝って泣き喚いた。ついさっきあんなに愛し合ったじゃないかと言ったり、私が高校生だったころの出来事を語ったりして気を引こうとした。その悲痛な叫びが面白くて、私はずっとくすくす声を立てずに笑っていた。

気持ちがせいせいしたころ、私はすっと立ちあがって、おなかを撫でた。

「お父さんのところへ帰ろうね……」

そして左手にはめた透明な光る腕輪に向けて言葉を発すると、私の身体は一瞬にして東京の自宅へと飛んだ。すぐに家から出て確固たるアリバイを作ると、私は家に戻った。

私は窓の外を見る。あれから３週間ほどが経った。地下室には食料も水もない。酸素の供給はわずかだ。

もう静はこの世にいない。死んだころを見計らって警察に行方不明の届けを出し、探させた。すぐに静の身体は新潟の別荘で見つかった。

果たして私の誕生日まで持ったかどうか。なにせ酸素が少ないからね。少ししか供給されない酸素。じわじわと襲い来る酸素欠乏。

最期の最期まで私が許して扉を開けてくれるのではないかという期待を抱いていたはずだ。蛍に抱いたであろう「もしかして俺を許して帰ってきてくれるのではないか」という期待と同じね。

静の最期は実に哀れだった。プライドもかなぐり捨ててわずかな酸素が漏れ出る扉の隙間に顔をくっつけて、おかしな格好で寝っころがって冷たくなっていた。現場で私は無表情な顔でそれを見ていた。

リディアは静の身体を見ると、その場に泣き崩れてしまった。私はどうして娘が悲しんでいるのか理解に苦しんだ。あれだけのことをされてどうしてこんな男のために涙が出るのだろう。

娘は父の遺影を抱いて眠る毎日を送っている。静の身体を見てから娘は声を失ってしまった。食事も食べれず、たった数日で動くこともできないくらいに弱ってしまった。私がいくら慰めても静の名前を呼ぶばかりで、私はほとほと困らされた。だが娘もいつかこれ

で良かったのだと気付くはずだ。
私は不倫相手の子を静の子と偽るつもりだ。リディアも弟か妹ができれば喜ぶだろう。時期を見て私は新しい彼と籍を入れよう。そう、せめて娘が独立するまでは我慢して。私の第２の人生の幕開けは近い。これでようやく私も幸せになれるのだ。私は悪魔を追い払ったのだ。もう自分の幸せを誰にも邪魔させない。今月の頭に私はそう決意した。

ベッドサイドに置いた紙を取ると、私はぼうっと眺めた。数日前に医者がくれた紙だ。
……どうも私は末期がんらしい。胃がんだ。この年で末期の胃がんだそうだ。
第２の人生の幕開けだと思った矢先のことだった。
私の赤ちゃん……産めるかな。今度の子供は幸せになってほしい。
赤ちゃん、間に合うかな。末期がんの人間でも子供ってできるのね。不思議だわ。
リディアは私まで失ったらどうなってしまうのだろう……。不安で仕方がない。

今朝、夢を見た。私はどこかの牢屋に閉じ込められていた。６人の人間が入ってきた。私は激しく抵抗したが、担がれて運ばれてしまう。そして彼らは私を暗くて深い井戸の底へ投げ込んだ。私は衝撃で脚が折れて、思わず叫んだ。
上を見上げるとそこには冷たい顔をした元夫が立っていた。私が驚愕の瞳で黙っていると、夫は大きな石を持ち上げて、私の頭をめがけて落とした。鈍い音がして、私の頭が割れた。暖かい血がどろーっと出てきたと思ったら、今度は勢いよく溢れ出した。
私は泣き叫びながら手で頭を押さえるんだけど血が止まらなくて、手がどんどん真っ赤に染まっていった。止血しようとするんだけど血は全然止まらなかった。急に怖くなって私は「死にたくない、助けて」と叫んだ。
それを見た夫はいつもの表面だけ優しい顔で私を見下ろしていた。そして井戸の蓋をゆっくり閉めていった。私は気が触れて何度も命乞いをした。すると元夫は寂しそうな顔をしながら、それでもゆっくり地獄の蓋を閉じた。

夢から醒めた後は最悪の気分だった。もう夜だ。……寝るのが怖い。
元夫、静はかつて自分を捨てた蛍を決して許さなかったように、きっと私のことも許さない……。たとえ亡霊になってでも、彼は私に報復するだろう。そういう人間なのだ。きっとこの病気も彼の呪いなのだ。

怖い……死ぬのはいや……。
娘や彼やこの子の命と引き換えにしてでも私は生きたい。死にたくない。
震える手で、紙を台に置いた。

私の人生……どうしてこんな風になってしまったの？

結婚したころは幸せだった。何がいけなかったの？
アーディン……やっぱり人殺しは報いを受けるの？
ねぇ、教えてよ……せんせぇ……。

もうこの世にはいない静がよぎりそうになる。いやだ。悪魔のことなんか考えたくない。
必死に娘と今の彼のことを考えようとした。でも、なぜだか頭は静のことで一杯だった。
なんでだろう……静に出会ったときも、娘が生まれたときも、レインに裏切られたときも、娘を陵辱されたときも、蛍さんが死んだときも、今の彼と結ばれたときも、そして静をこの手で地獄に突き落としたときも……それでも私は……なぜか……私の頭の中には……いつも……静が……。

なんでだか知らないけど涙が出てきた。
引くついた笑いがこみ上げてくる。
笑いながら、泣いた。

もったいなさそうに瞳を閉じた。もう、この瞼が開かなくなる日は近い。
掠れた声で、私は微かに呟いた。

「先生……地下室の灯かりはどう見えました？」

私、次の誕生日を迎えられそうにないみたいですよ？

「一瞬、勘違いしたんじゃないですか？」

右胸に胸痛が走った。私、幸せになれなかったみたい……。

「蛍が冬に見れるとは思わなかった――って」

――終

後書

『玲音の書』は『紫苑の書』の続編だ。続編といっても続き物ではなく、話の内容自体は別個のものだ。『紫苑の書』はリアル異世界ファンタジーというジャンルの確立のために作られた。非常に目的意識の強い作品だ。

異世界アトラスに紫苑が赴き、そこで異言語・異文化・異風土に出会う。言葉も一切通じず、紫苑は異世界の言語アルカを習得しつつ、ファンタジーパートにシナリオを進めていく。物語は徐々にアルカで進行していく。異世界が舞台だからだ。

魔法の翻訳機などは存在しないし、紫苑がアルカで理解した内容は全て日本語に翻訳したものとするというようなご都合主義もない。読者はアルカが読めない限り大筋以外を追うことはできない。

私は『紫苑の書』でリアル異世界ファンタジーを打ち立てた。小説における異世界の言語の重要性や頻度、そして細かい異文化・異風土を持つという点を考慮すると、『紫苑の書』は他に類を見ない作品であるといえる。売れない作品——良く言えば売らない作品——だからこそできる作品で、活字を使った芸術と考えるのが妥当だろう。

『紫苑の書』でリアル異世界ファンタジーを作ったため、『玲音の書』はその焼き増しに留まる必要がない。そこで目をつけたのが人工文化アンティスだ。紫苑の行った惑星アトラスの文化のことだ。前回は人工言語にばかり焦点を当て、文化はあまり焦点を当てなかった。そこで今回は文化、とりわけ神話に焦点を当てようと思った。

前回の悪役であるフェンゼル＝アルサールは人間で、杖を巡って紫苑と攻防を繰り広げた。最終的には紫苑と戦うことになったが、人間同士なのですぐに勝負が付いてしまった。戦闘シーンは重要視されていなかったし、敵が人間なので弱すぎたのだ。

今回は神話を活かすというコンセプトがあったので、初めから敵を悪魔に設定していた。問題は誰を敵にするかだ。ソームのように７匹もまとまって出てくると１匹あたりのインパクトが減少してしまう。かといってアルマやキルセレスのような強い悪魔を持ってくると、いくらヴァストリアを装備しても紫苑に勝ち目はない。

そこでアルディアの時代のアシェットたちであれば大した苦労もなく倒せてしまう程度の悪魔の中で、なおかつ印象的な悪魔を探した。そこで選ばれたのが月の悪魔シェルテスだ。月は非常に重要視されるので、シェルテスには逸話が多い。したがって題材として取り上げやすい。

シェルテスを敵にしようと思ったとき、前回の話とどう繋げようかと考えた。また、登場人物をどうしようかと考えた。結局、慣れた登場人物を使うということに決め、話の繋がりも紫苑が地球に帰ったすぐ後という設定にした。

何せ悪魔を倒すのだから、戦うのが紫苑たちでは頼りない。フェンゼルをやっと倒した

程度の紫苑にシェルテスが倒せるはずがない。そこで必要だったのは新たなヴァストリアや仲間だ。それらを駆使することによってどうにかシェルテスを戦闘不能にすることならできるのではないかと考えた。結局本編において紫苑は激戦の末、シェルテスを戦闘不能にするだけで、殺すことも封印することもできなかった。

アンティスに焦点を置くことは決まったものの、これだけでは目新しい要素がないと考え、何か『紫苑の書』でやり残したことはないかと考えた。前回は紫苑がアトラスに行ってレインに出会った。では逆にレインが地球に来たらどうなのだろう？これは面白い疑問だった。だが、ただ逆にするだけでは味気ないし、地球でシェルテスを倒すわけにもいかない。あくまで異世界の悪魔なのだから異世界の歴史に残るよう、異世界で戦ってもらわなければならない。そこで今回は地球とアトラスを行き来することにした。

最初に決まったのは紫苑の帰還後、レインが悪魔に襲われるということだ。レインは地球に逃げ込み、紫苑にこう叫ぶ。 ᘐ乚elᑐ V-ᐱᛦ ᐱɔᐱᚴᘐ そして紫苑はそのとき横にいた男にこう告げる。「月が襲ってくるって」――と。

実はこの「男」に随分悩んだ。日本人から男を一人取ろうかと思っていたのだが、紫苑は友達がいないと既に書いてあった。そこで彼氏ならありえるだろうと考えた。

では彼氏はどんな男にすべきかと考えた。この時点では『玲音の書』の主役はまだ紫苑だった。そして彼氏の設定はいい加減だった。紫苑は作中でこの男に処女を捧げることになっていたが、シェルテス戦でこの男は紫苑をかばって死ぬことになっていた。この案は初めて静がアトラスに行くときのシェルテス戦に名残がある。

彼氏が死んだ後、紫苑は悲観にくれる。紫苑は彼氏と睦まじくしており、「もし貴方が死んでしまったら私も死んでしまう」と述べることになっていた。だが紫苑は自殺せずに、シェルテスを倒す。それどころかエピローグでアルシェと結婚し、子供を作って幸せに暮らすという設定だった。

女は何とも調子の良いことを言っておきながら虫のように性根逞しく生き続け、平気で男を裏切って新しい男の子供を産む生き物だ。その皮肉をたっぷり表現するために「死ぬ男」の役割を静に押し付けた。

ところがシナリオを練るうちに、紫苑のモデルとなった人物を通して紫苑がそのような裏切りはしないだろうと考えるようになった。紫苑は純粋に彼氏を愛し、他の男に気を取られるような女にはならなかった。

紫苑から悪女の要素が漂白されたため、皮肉の受け皿が新たに必要になった。それが蛍だ。元々紫苑は蛍の役割も担っていた。つまり、静を愛すと同時に裏切るという役割だ。ところが紫苑の純化に伴い、悪の部分が追い出されて新たに生まれたのが蛍だ。こうして日本陣営が増えた。

静は一手に紫苑の愛を受けることになったため、シェルテス戦での死を免れた。言い換えれば、女に気に入られたから死なずに済んだようなものだ。このあたり、「所詮男は弱い

存在で、女を味方に付けないと生きていけない」という皮肉を盛り込んである。
静は紫苑の死なない彼氏に昇格した後、キャラ設定を細かく作りこまれた。当初は死んでもいいロクでもない人間だったが、昇格に伴ってモデリングを細かく作りこんだ。最初のほうは下らない人間だが、最後に行くほど紫苑と紫苑の父親の影響を受けて「自分で自分を誇れる人間」になることができた。
昇格に伴い、静は視点人物にもなった。これによって主人公は紫苑の手を離れた。更に、前回の主人公を副主人公に下げるのは面白いのではないかと思った結果、主人公は静になった。小説の最初も静の視点であり、シェルテス戦も静の視点だ。
静はキャラを作りこまれた結果、紫苑以上に背景を持つキャラになった。紫苑は高校生なので背負う過去が少なすぎだが、静は 25 歳にして離婚をして子供までいるという濃い設定だったため、人間模様を描くには適した素材だった。

日本陣営といえば紫苑の父母は前作ではキャラ設定を殆ど行っておらず、適当に娘に不干渉な親というイメージだった。ところが今回はレインが居候を紫苑の家ですることになったので、親のキャラ設定もすることになった。
私はキャラを作る際、実在の人間をモデルというよりほぼそのまま模写する。実際の人間を起用しないと私のその日の筆の具合でキャラの性格や行動が変わってしまい、整合性がなくなるからだ。
今回キャラ設定がいい加減、つまりモデル不存在だったのは、ハインとシェルテスだ。だからハインには殆ど台詞を与えなかった。シェルテスについては獣っぽい獰猛な悪魔なので知能は高くない設定だから、特にモデルを必要とするほどの精神構造を持っていない。

『玲音の書』の人間模様は静・蛍を取り巻く日本でのものと、レイン・アルシェを取り巻くアトラスのものに大別される。両言語を操る紫苑はこのどちらの人間模様にも関与する。
今回は前回になかった人間関係の様子を詳細に述べた。前回は「アルカの勉強＋おまけのファンタジー」という感じだった。今回はファンタジー要素満載でありながら、その最中に様々な人間関係を混ぜていくという設定だ。
男女が織り交ざるので主に恋愛関係の話が中心だった。紫苑は自分はアルシェが好きではないと気付き、静と出会い、恋に落ちる。この様子は細かく書かれている。一方、視点人物にならないレインの心情は実に語られず、不明を保つ。紫苑らが「レインはアルシェが好き」と前提視している横で、レインが好きなのは紫苑の父ということが判明する。父親は紫苑のコンプレックスを表現するための受け皿として名前さえ決められていないので、これは伏兵だ。

視点人物ではないものの大きな役割を持つレインについての裏設定をここで述べる。実は作者側の設定資料では、レインは元々前作のころからアルシェのことを戦友としか思っ

ていなかった。シェルテスに襲われて日本に来たとき、言葉も分からない世界で優しく歓迎してくれた紫苑の父親に出会う。実はこの時点でレインは一目惚れをしていた。自分の父が死んでいるので、年上に靡きやすかったというのもある。

ところが貞操観念が強く純粋で恥ずかしがりなレインは気持ちを表現できない。まして親友の父で妻子があるともなれば尚更だ。視点人物にはならなかったものの、レインは作中でかなりの葛藤を抱えていた。

静のことは親友の彼氏だと思っていて、何とも思っていなかった。その後、アルシェと同じように戦友と見なすようになるが、新宿でおんぶをしてもらってからは兄と見なすようになる。

父親に対しては気恥ずかしい思いがあったので、手を触ったりといったスキンシップをできるだけ避けていた。何とも思っていないアルシェや静には抱きつくことができるが、父親相手には身を引いていた。だが、できるだけ喋りかけたり、家事を一緒にやったりして常にさりげなく近くにいようとした。

アルカが読めるとレインがアルシェを好きなのではないのではないかというのが分かるシーンがある。紫苑がメルティアと練馬で話していて、静がレインと自販機に飲み物を買いに行くシーンがある。そこでレインが独白している台詞をよく読んでみると、もしかして”I-”はアルシェではないのではないかということが分かる。

また、恥ずかしがり屋のレインが静相手だとアルカが分からないからという理由で下心を炸裂させている部分も見られる。これらはアルカが読める読者へのおまけ要素で、アルカが読めなくても読み進めていけばいずれ分かる。その点で前作とは異なる。

レインは更に葛藤を秘めていた。純粋主義のアルティス教徒である彼女は神の言語であるアルカ以外を使うことを禁忌としていた。それで日本語を避けていた。ところが紫苑の父とコミュニケーションを取りたい一心で、紫苑や静に知られないように日本語の練習をする。そしてその自分に激しい嫌悪感を感じる。

ところがルフェルに「異言語を使って思いを告白して良い」と後押しされると、最後は日本語を使って愛を告げる。ルフェル自身は純粋主義なアルティス教徒に困っていたので、むしろこれは神として自然な行為だった。

本来ヴァルテは異教徒との争いを拒み、折衷するものだ。レインはアルテナ以前の為政者ミロクの影響を色濃く受けたドゥルガの娘であるため、純粋主義に陥ったのだ。レインの思想は始祖シオン＝アマンゼの思想とは異なる。そこで神側としてもレインの敬虔さは多少ありがた迷惑なところがあった。

尚、今回は前回と違ってアルカが読めなくても問題ないようになっている。大抵は紫苑が訳すし、訳さない部分は枝葉な小ネタが多いからだ。そうなるとアルカを読める利点がなくなってしまう。

そこで、小ネタ以外に日本語で語られない真相がいくつかアルカだと分かるようになっている。別にシェルテスを倒すという大筋には影響しないものの、こういった会話はアル

カ識者のためのささやかな贈り物だ。
　アルカを読めないものはレインが何を言っているのか基本的に分からない。そこで、紫苑の訳を通して彼女の意思を知ることになる。だが訳されない部分もあるので、レインのことが良く分からないという読者もいるだろう。

　今回はアルカが題材ではないので、アルカを読まなくても済むようにした。そのせいでレインは日本にいても口数少なく、アルシェも「何か喋っている」と静に表現されるだけで終わっていることがある。アルカを減らすために全般的にアトラス陣営の出番が割愛されている。
　その代わりアンティスは濃い。特に神話をふんだんに盛り込んだファンタジーパートは前作をしのぐ。前作はファンタジーパートが短かったが、今回は悪魔シェルテスが中盤から登場し、ほぼ最後までいつづける。

　ところでキャラだが、ほぼ全てにモデルがいる。モデルが複数いて混ざっていることもある。キャラ同士が行う会話やイベントについては基本的に全て現実のことだ。日付や状況は勿論異なるが、原則として現実に行われたイベントをそのまま使っている。
　ただ、小説用に作った設定もある。紫苑のモデルは３人で、その３人を合わせている。ところがそのうち２人は父親が嫌いか何とも思っていない少女時代を過ごし、残りの１人は父親がいない。紫苑の父親コンプレックスはオリジナルの設定で、モデル本人からは酷く不評だった。
　また、キャラ同士の人間関係もモデル同士の人間関係そのままではない。年齢などが前後していることもあるし、社会的関係が異なることもある。また、事情が異なることもある。具体的には静と蛍の関係だが、あれはモデルが取りえた最も酷いと考えられるシナリオを想定して作られたものだ。
　尚、場所だが、私はリアル異世界ファンタジーを書いただけあって、地球に関しては全てリアルだ。現実にその場所が存在するし、小道具や開催イベントや天気まで正確だ。たとえば本編で昨日は凄い雨でなどとあれば、現実に紫苑が住んでいるところで雨が降ったことを意味する。それは作者自身が確かめたことで、間違いない。
　前半に出てくる薬局も実在だし、そのとき棚に何が置かれていたかも調べてある。ある商品の在庫がその時点でいくつ棚に置かれていたかなども調べてある。紫苑はコンドームを探したとき周りに隠れ蓑となる商品がないことで冷や汗を掻いたが、これは実際の商品配置を基にしている。
　たったひとつ架空だとすれば、それは紫苑の高校だ。実際の紫苑はこの高校の出身ではない。中学については本編のとおりだ。
　私は場所に異様に細かい人間で、「どこで」というのがかなり念頭にある。また、色についても比較的気にするようだ。だが作者の性質をキャラに映してはリアルさが薄れる。現

実のモデルを起用した甲斐がなくなってしまう。
　そこでキャラごとにどこに目を向けるかを設定している。たとえば紫苑は場所にわりといい加減だ。ただ、色を見るのは静と共通している。
　また、キャラはリアルなので人付き合いを経て性格が変わる。静は紫苑に会ってから心が安定し、自分で自分を尊敬できるようになるために研鑽を重ね、良い男になる。紫苑は紫苑で静の幅広い知識を得て、興味のなかったことに興味を持つようになったりする。

　地球を舞台に書くというのは実はとても楽しみなことだった。私は新白岡駅近くの遊歩道のベンチに座って、夜ぼーっと街灯を見ながら色々なことを考えてきた。そして灯りを見ながら「この中空にこの光のような炎がボッと現われたらなぁ」とか「この電柱より高く跳べたらなぁ」などと夢想していた。だからまずは玲音の書を使ってあのベンチで炎を出させたかった。あの初めての魔法のシーンにはそういう思い出が関与していた。
　地球が舞台なので道や場所について細かく書けることも楽しかった。どこで何をしたかということよりもどこにどう行ったかということを楽しむ人間なので、頭の中に記憶した映像を頼りに車と筆を走らせて行った。場所記憶は鮮明なので、作中車で走るたびにその場所に行っているかのような感覚を覚えたし、それは紫苑との徒歩のデートを書いていても同じだった。
　アルバザードの道路は私には単純すぎてつまらない。日本くらいバリエーションが豊かだと初めて書いていて楽しくなる。アルバシェルトを私が作っていれば、きっと日本のような複雑怪奇な道路を作っていたことだろう。どこにどんなビル・店・公園・住宅・自販機・標識・道路標示・車線・中央分離帯などがあるか、そんなことを細かく決めていただろう。
　地図は殆ど使わなかった。県道・都道の細かい数字までは流石に覚えてないところがあったので参照したものの、どの道を行けばどこに繋がりといった男特有の能力は最大限に発揮させてもらった。
　地図はリアル小説を作るにはあまり使えない。事故・工事情報がないのは当然として、既に潰れた店が平気で乗っているからだ。行かなければ知らないことがあるので、記憶が一番の頼りだった。

　全体的に見て今回は静と紫苑の恋愛に力を入れた。紫苑というキャラを私が気に入っていたこともあり、幸せだと思える恋愛をさせてあげたかったからだ。処女喪失のシーンは非常に短く書く予定だった。だが女の子にとっての重要な出来事を面倒事のように男の視点から書いてしまってはたして紫苑は幸せかと思い直した。
　静がしたように紫苑を抱けば、女である紫苑がその後取る性的アプローチは積極的なものになって然る。そこで本来の予定では存在しなかった複数回の性描写が追加された。
　性描写に関しては増やすことを決めたとき、男女の違いを出そうと考えた。また、経験

豊富な既婚者と処女との温度差を書こうと思った。だからセックスシーンを静と紫苑の２視点でそれぞれ１回ずつ書いた。あの物の見方の違いもリアルだ。

だが、このリアルさは薄氷の上を歩いている。というのもモデルとなった女性の性癖があまりに普通の女性と異なるからだ。かといって性癖だけモデル以外の女性を参考にするというのも整合性がない。そこで紫苑は非常に稀な人種となり、読者によってはリアルさを感じないかもしれない。

場所は行ってみればそこに存在するからリアルさが客観的に測れる。だが秘められた心理については語られる機会が少ないので、皆各々の経験でリアルさを判断する。そこでリアルを共感してもらえない可能性がある。だから薄氷の上を行くといっているのだ。

性描写など男側が静のような女の扱いをするかどうかで女側の反応はまるで異なる。静のような美形の枕男は世の中に少ないから、「俺の女はこんな反応しなかったな」などと思われる可能性が高い。

紫苑のモデルが変わっていることと、静のような男が少ないことにより、性描写に関してはリアルはリアルでも汎用性のないリアルになってしまっている。

一方、紫苑の発言する父親へのトンデモ発言についてはオリジナルであり、これはそもそもリアルではない。モデル自身未経験のことだし、私自身高校生の娘などいない。したがって完全オリジナルだ。

そしてこういうオリジナル部分を見てみると何だか白けるときがある。やはり実話でないから何となく浮いてしまうのだ。どれが実話でどれがオリジナルか知らせなかったとしても、きっと父親コンプレックスについては「ありえないな度」が高かったと思われる。

今回の見所。

まずは 6/27 の紫苑と静が付き合うシーンだろう。そこに至るまでのジュンクでの邂逅やサンシャインでのデートがほほえましいというのもある。

7/20、ファーストキスを済ませ、レインと再開するシーン。

9 /24、シェルテスに追われる魔の長い一日。地球とアトラスを往来し、スピード感ある展開ならびに戦闘とカーチェイス。レインのおんぶで、ほんのりとお兄ちゃんな日でもある。

11 /27、紫苑の処女喪失。恋愛が別の段階に移行した日。こういうのはとても微笑ましい。幸せな処女喪失ができた紫苑は幸せだと思う。そうでない女があまりに多いそうなので。

12/19、シェルテスとの決戦。レインの告白。大変な一日だった。シェルテスのしぶとさには本当に閉口だ。

6 /19、過去に戻って蛍との再開。

1/20、そして紫苑の妊娠が発覚。この辺もあまりにリアルだ。

『玲音の書』の日付は実は一々意味がある。雨だろうが風だろうがわざわざその日を指定

しているのは、日付そのものに私小説的な意味があるからだ。一見何でもない日付だが、関係者から見れば一々赤裸々な出来事だ。言ってみれば 2006 年のランドマークがそれぞれ選ばれているわけだ。

勿論、その日にモデルがキャラと同じ行為をしたとは限らない。実際同じ行為をした日もあるが、単に作者にとってランドマークな日付のため取ったということもある。たとえばシェルテスの長い一日である 9/24 は私は TOEIC を受験し、池袋のジュンク堂で児童虐待を目撃した。紫苑ら一行はちょうど同じ時間、お好み焼きを食べてサンシャインから出てきたところなので何ら関係ない。

だが、実はあのとき静がジュンクへ行こうと述べている。もしエスカレータの上で男に襲われずにジュンクに行っていたら、紫苑は児童虐待に憤怒している私に出くわしたことになる。そういう事情はネットの記事をよく見てる人や私の関係者が見てほくそ笑めばいい瑣末な遊びだ。だが、そういう遊び心は失わないほうがいいと思っている。別にほくそ笑めなくとも本編に影響はないし。

この物語には奇跡が多い。12/19 に蛍が出て行ったことになっているが、これはモデルに起こったリアルなので動かしようがない。ちょうど半年経った 6/19 の退院など、まるで作ったシナリオにしか見えない偶然だ。しかしリアルだ。6 /27 に起こりすぎたイベントの重複を見ていると、まるでこの日が魔力を持っているかのように思える。しかしこれも不思議なことにリアルだ。

2006 年の 12/19。そこで月が生まれ変わる前の夜に、シェルテスとの決戦になる。これがちょうど蛍のイベントと重なるわけだが、天体の運行も蛍の家出も動かしえない事実だ。しかしこれらのイベントの日付は重複している。『玲音の書』に見られるイベントの重複というのは非常に奇跡的なことで、作者にとっても極めて興味深かった。

『紫苑の書』とコンセプトがいかに異なるかが読み取れたと思う。今回はモデルとなった人物の私小説にファンタジーを付け加えたものだ。そしてファンタジー要素が今回は言語でなく文化、特に神話に焦点化されていたわけだ。

構想していた量はワードで 2〜300 ページほどだったが、500 ページを越えてしまった。初稿では 40 文字 36 行の初期設定だが、原稿用紙換算しやすい 30 行計算にするとだいぶ増えてしまう。

書いて良かったなと思うのは、練りに練ったおかげで架空の存在であるのにすっかりお気に入りになってしまった私の造作物「水月紫苑」がとても幸せそうにしていたことだ。

エピローグに関しては、賛否両論あるだろう。500 ページにも渡って長々培ってきた信頼や愛情といった人間関係を、総量のたった数%でいとも簡単に破壊している。大河ドラマ

で１年に渡って長々と培われた信頼関係を最終話で全てひっくり返してしまうような内容だ。一生懸命に創りあげた砂の城を足蹴にする行為は心の反感を招いて然る。だが、この最大の皮肉は起こるだろう未来だ。そしてそのコンセプトは「報い」だ。

共通の敵や目標を失った静・紫苑・レインの３人は求心力を失う。同時に、幸せが紫苑と静に偏る。それがやがてレインの心を壊し、３人の関係を破綻させた。求心力のない想いは散り散りになり、各個人が我利を追求しだす。心を失ったレインは静と紫苑に皹を入れ、自身はその結果咎を背負って、最期は罪悪感が祟って孤独に死んでしまう。嫉妬と裏切りの報いをレインは受けた。

静は自分より優れた年若い妻にコンプレックスを抱いていた。妻が父親の七光りもなしに高給取りになると、愛する女性を守ることで満たされていた静のプライドが粉微塵になる。昔の被害妄想の癖が甦り、紫苑に捨てられるのでは、自分は情けない夫などと悩むようになる。蛍に捨てられたことがフラッシュバックし、紫苑を守ろうという意志が薄れる。紫苑自体、守る必要がないほど成功していた。ますます静は自分の存在意義を疑った。妻への萎縮が会話やセックスを減らし、フラストレーションを募らせた。

社内恋愛は身を滅ぼすため、渉外をして知り合った女性と関係を持つが、すぐに紫苑に知られそうになる。異常に嗅覚の鋭い賢い妻。そしてその妻の父の伝で雇われている自分の不安定な身分。ストレスから部下に辛くあたってしまい、徐々に孤立していく静。

家に帰ると才気溢れる妻は仕事に旺盛で自分の心を慰めてもくれない。しかし妻の父の後押しで身分を保っているので妻に文句は言えない。そこに傷ついたレインが来た。静はレインの弱みに付け込んで慰め、手中に落す。妻の親友と肉体関係を持ったとき、静の中で紫苑への忠誠心が失われた。その後、自分がレインを孕ませたことを知るが、レインは二度と目の前に現われなくなった。また静は一人になった。

唯一擦り寄ってくるのは幼い娘のリディア。紫苑に似た顔で、まだ自分を到底追い越さない娘。自信を喪失した静にとって、リディアは付き合いたてのかよわい紫苑を思い出させた。仕事で忙しい妻の目が届かず、当の娘は従順。妻には萎縮してしまってセックスしたいが声をかけられない。娘は未熟で制御でき、自分を尊敬して近寄ってくる。その仕草も見た目も妻に似ている。

娘に手を出したとき、静はプライドも理性も全て捨てた。妻への愛情も捨て、こうなったのは紫苑と蛍のせいだと考えるようになり、娘に屈折した救いを求める。娘が自分の許を去らないよう、閉鎖的な精神に娘を閉じ込めた。

母紫苑以上に人が苦手なリディアは大人しく従順でもあり、父の言うことなすことを絶対視していた。父への敬意は母紫苑が静の体裁を立てるために行っていた偽りの尊敬によって更に強化されていった。静はその気持ちを利用し、娘を世間知らずにすることで制御しやすいように変えていった。

当然それは長くは続かず、娘が思春期になるにつれて統制は崩壊していった。娘が高校

生になってからは罪悪感の受容体さえ失ってしまい、感覚が麻痺していた。娘を傷つけたことは非常に静自身悔いていた。だが、心が麻痺していた。中絶によって娘が壊れてしまったことを知ると、静はまた一人になった。

そして自暴自棄に陥った。その時点で既に静は妻より娘を愛していた。娘の代わりを求めて少女を漁った。それだけでは飽き足りず、失った妻紫苑の代わりを求めて成人女性にも手を付けた。色んな女に手を付けて子供を作っていく静だが、できるだけやりくりして紫苑に知られないようにしていた。

紫苑はすっかり自分を怨んでいると思っていたころ、旅行の話を持ちかけられる。本心では妻紫苑を忘れられない静は一晩のセックスを通じて紫苑を取り戻した気になる。だがそんな身勝手が許されるはずもなく、静はかつて自分を無償で愛してくれた妻紫苑の罠に落ち、無残に殺された。

娘リディアは人間を殆ど知らない少女だった。父親に外界との連絡を殆ど遮断されていたが、それ以前に本人が極めて内向的だった。静の行為が悪と知るまでは抵抗はなかったし、それがおかしいと知ってからも完全に拒む気持ちにはなれないほど心が歪んでいた。

母紫苑は自分の慈愛行動を自己浄化と見たが、これはリディア本来の性質だった。娘ほど慈愛の心を持たない紫苑は娘の本心を読み違えた。リディアは静が自分に救いを求めていることを知っていた。慈愛の精神と父への敬愛が強いリディアは、静を拒まなかった。

ノイローゼになった原因は自分が汚されたことではない。リディアは紫苑に対し、「どうしてお母さんは好きだった男の人を私の経歴だけに使えれば良い道具のように考えられるのだろう」と嫌悪感を持っていた。父のしていることが悪と知っていたが、それが静を救えるのなら、本当にそれは悪なのだろうかと考えた。この葛藤のせいでリディアはノイローゼになった。

自傷行動に走ったのは自分の認識の甘さのせいで赤ん坊を殺してしまったことが原因だ。慈愛の強いリディアには子供を見殺しにした自分と、そしてそれを薦めた紫苑が許せなかった。

静が自分を求めなくなると、リディアは自分が父から価値の無いものとして捨てられたと思うようになった。それで大学生になると、ずっと図書館に篭るようになった。図書館を避難場所と見た紫苑の予想は完全に的外れだった。

リディアは静のことは怨んでいなかった。むしろ助けられなかったことをすまなく思い、子を見殺しにした自分を呪った。だから父が死んだと聞いてリディアの心は壊れた。

水月紫苑は 12/19 以降、毎晩悪夢に襲われ、急速に疲弊していった。年明けてしばらくすると容態が急激に悪化し、病院で意識不明に陥った。そしてそのまま子供を産むことなく、2028 年 4 月 23 日に息を引き取った。

死の直前に一度意識を戻した紫苑は地獄から戻ってきたかのような形相になると、途端

に発狂して苦しみだした。喉元に爪を立てながら痙攣し、恐怖の表情を浮かべた。看病に来ていたリディアを見つけると、小さく首を振り、助けを求めた。最期に「しにたくない」と言い残すと、紫苑は地獄に引きずりこまれていった。

リディアは莫大な遺産を引き継いだが、母紫苑の壮絶な死を直視して精神を病み、社会生活を完全に営めなくなった。働かないまま大きな家の中で、家政婦から世話を受けながら生き続けた。

だが、最後は発狂してしまい、顔と性器に刃物を突き立てて自害した。28 歳だった。奇しくもそれはかつてレインがアーディンに薦めたルルットさながらの様相だった。

水月リディアは最も報いを受けるべきでない、天使のような少女だった。しかし子供を父の許可なく安易に殺したことで咎を負い、最後はルルットの報いを受けて死んだ。

静は蛍を傷付け、紫苑を裏切り、娘を犠牲にした。顔も知らぬ子を設け、子の人生まで狂わせた。最も報いを受けるべき人間として、長く苦しんで死んでいった。食料も水もなく空気もない闇に閉じ込められ、最後は酸欠ではなく凍死した。よりによって閉じ込めたのは自分がかつて愛した妻紫苑だった。水月静は異世界にまで行って命をかけて守った女に裏切られ、最期の瞬間まで許しを請い、夢を見ながら死んでいった。

蛍は静を裏切り、恥辱を与え、子供の人生まで勝手に決めた。この咎の報いを受け、蛍は不幸に暮らした。生活は惨めで、必死になって自分が幸せだと思い込もうと嘘を吐いて生き続けた。だが多くの怨嗟を受け、その邪念が間接的に蛍の身体を蝕んでいった。

蛍は静や紫苑の呪いを生涯受け続け、そうと知らぬ間に体調を崩し、ひょんなことから死んでしまった。逃げた人間は幸せになれない。幸せを掴もうとするたび水を掴むように指の間から零れていく。蛍は裏切りの報いを受けて死ぬ。

紫苑は父に犯される娘を見捨てた咎、苦しむ夫を支えてやれなかった咎、少女時代にアーディンを殺した咎を負って死んだ。レインとのことを許し、夫を支え、娘の肩書きなどと見なさずに夫と向かい合えば、静は萎縮を解いて紫苑とやり直した。だが紫苑にはそれができなかった。よりによって親友を抱いて裏切った夫を許せなかった。自分のプライドを切り裂かれてまで夫を愛せなかった。その結果、娘を不幸にしてしまった。

更に紫苑は不貞を働き、自分で掲げた「生涯に一人」「運命の人」に背く。約束した愛を反故にした咎を負い、宿した子供を産めずに道連れにしてしまうという報いを受ける。また、かつて自分の身よりも愛した夫を無残に殺した咎の報いを受け、病で死ぬ。

紫苑は入院中の昏睡状態から死ぬまでの数ヶ月間、自分が殺される夢を見続けた。いくら殺されても終わらない夢。さながら地獄のような昏睡状態を経て、本当の地獄に運ばれていった。辞世の句は「しにたくない」

咎は咎を生む。

咎人は報いを受ける。

咎と報い。憎悪と愛情。
これが彼らの結末。

愛は真実。そして有限。
囁いたときが真実。だけど、いつだって更新を必要とする。
「すきだよ」が言えないなら「ありがとう」
囁く言葉に飾りはいらない。気恥ずかしさなんていう飾りもいらない。

失くした僕が言います。いま囁く相手がいるのなら、大事にしてあげてください。